
その先には。

ゆか空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その先には。

【Nコード】

N8040R

【作者名】

ゆか空

【あらすじ】

新たな敵、ディスペラーレ Disperareを倒し、スペランツァ speranzaを目覚めさせるべく、ツナたちはtesoronascosto（テゾーロ ナスコスト）を一刻も早く探しだし、封印を解かなければならないと改めて意識する。∴多くのものを得て、失った。過去はもう戻れない。やり直すことはできない。ただ、ただ人は前に進むしかないのだ。…………第一章、閉幕。そして、新たな出会いが待つ、第二章へ。無限の可能性を持つ大空と守護者、仲間たちの行く末を、とくにご覧あれ。

（この小説は未来編の後

のもので、継承式編からは関係ありません。
(

標的0 序章（前書き）

はじめて書かせていただきました。

読みにくいかもしれませんが、どうぞ。

序章なのでキャラ名は不明。

いつかプロフィールを紹介しようと思います。

標的0 序章

ボンゴレリング。

それはボンゴレI世とその守護者が、ファミリーの証として作成した7つの指輪であり、精製度はA以上。

とてつもない強大な力を秘めており、トゥリニセツテの1つとなっている。

その力を我が物にしようと、多くの抗争が起こり、多くの犠牲を出した。

そして、再び

ボンゴレリングを巡る争いが
はじまるうとしていた。

イタリアのある一角。

「おい、まだなのかよ。」

身長の高い男がイライラした口調で聞いた。

「もう少しだよ、待てないの？」

それを宥めるようにもう一人の男が苦笑いをして答える。

「まったく、いつもあなたは短気ですね。」

長髪の男が馬鹿にするようにふんっ、と鼻で笑った。

「なんだと!!!??」

怒った男が長髪の男に殴りかかろうと拳を振り上げた。

それを見ていた唯一の女が呆れたように仲裁にはいる。

「やめてよ、身内の喧嘩なんて。めんどくさいじゃんっ。」

長身ではあるがやや幼さの残る女だ。

「ボスはすぐ来るよ。」

「あと少しだからさ。」

「少しくらい」

「我慢しろよ。」

双子である二人の男が交互に喋りながら言っつ。

「…ちっ」

男は仕方なく椅子に腰を下ろす。

それと同時にドアが開き、全員の視線がある男に注目される。

「おっそいよ、ボス！」

女が頬を膨らませてボスと呼ぶ男に言っつた。

部屋にはいつてきた男は全員を見渡すと、クールな顔に似合わない口調で謝っつた。

「じっめんごめん。少し寝坊しちゃっつた」

「まったく、あなたという人は…」

長髪の男は口元を緩めながら言っつた。

ボスと呼ばれる男はえへへ、と笑ってごまかした。

「で、話って」

「なんですか？」

「とっつとっ」

「わかったのですか？」

「ボンゴレリングの」

「所持者情報。」

双子がボスと呼ばれる男を見て聞いた。

「さっすが双子。わかってるじゃないですか」

そう言うとボスと呼ばれる男は部屋にあるスクリーンに情報を載せた。

パチツ、とスクリーンが起動する男が聞こえ、映像が映し出される。

その映像を見た全員は目を丸くした。

「じゃーん、これがボンゴレリングを持つ子供たちだよ」

スクリーンを見ていた全員はしばしの無言のあと、馬鹿にするように長身の男が笑いはじめた。

「あつはははははは！なんだこいつら、ガキじゃねえか！！」

「あたしより小さくない？これまじ？」

「ほんとだよ、僕が集めた情報なんだから」

ボスはある一人の少年について話をはじめた。

「これが、大空のボンゴレリングを持つ、ボンゴレの次期後継者の沢田綱吉くんだよ」

「えー、身長ちっさ！中学生ってほんとだったんだあ！かわいい顔してんじゃん」

「たしかにかわいい顔だね。お前よりかわいいかもねー」

「なにそれ喧嘩売ってんの!?!」

隣に座っていた男に言われ、女は目を吊り上げながらものすごい剣幕で男に怒鳴る。

「目おつきいね」

女のことなんか気にしないように、双子がスクリーンを見つめてつぶやいた。

「よく調べたんですけど、どうも彼が、僕らの計画に最も必要となるらしいんだよね」

「と、言いますと?」

長髪の男が話を促す。

「えっと、彼の持つ力がないとボンゴレリングの本来の力を出せないって言うか、他にも理由があるみたいなんだけど、とにかく彼がないとリングを集めても無駄なことなんだよね」

ボスは苦笑いをして肩をすくめた。

「では、わたしたちのターゲットはボンゴレリングだけではなく、彼も、ということですか？」

「あつたり〜、流石天才ですね」

「それほどでも」

長髪の男は深々とお辞儀をして答えた。

ボスは立ち上がって全員を見た。

「さあ、みんな、そろそろはじめようか」

そついうと全員が立ち、ボスを見据えた。

「ぼくら、アッジョルナーレファミリーの未来のための計画を、ね」

ボスは不敵に笑った。

標的0 序章（後書き）

よ、読めましたか？

読みにくかったですよね、すみません

これからも気まぐれ更新するので
お願いします！

標的 1 日常の一変

天気は良く、穏やかな日だった。

三人はいつものようにたわいない話をしながら歩いていた。

「平和でいいよなあ、最近」

山本は笑いながら言った。

「あつたりめえだ、野球馬鹿！もうあんなことがあってられっかよ！ね、十代目！」

「う、うん」

獄寺は山本とはまったく違う態度でツナに話しかけた。

これが三人の日常である。

「でも平和なのはいいことだね。争いもない普通の生活を送ることができるとこんなになんか幸せだったんだね」

ツナは今までにあったことを思い出しながら言った。

骸と戦ったこと、ボンゴレリングを巡ってヴァリアーと戦ったこと、そして未来で白蘭と戦ったこと…。

さまざまな戦いを経て今自分が生きていることが不思議に感じられた。

そんな非日常的な生活がはじまったのも、目の前にスーツを来た赤ん坊が現れてから。

それからツナの日常は一変したのだ。

「こんな平和な生活ができるのは十代目が10年後の世界でがんば

「たからですよ！」

「えっ、オレなにもしてないよ！」

「いいえ！間違いないく十代目が世界を救ったんですよ」

「そうだぜ、ツナ。」

獄寺と山本は肯定した。

「そんな…、オレだけの力じゃないよ。獄寺くんや山本、みんなが頑張ってくれたからだよ！」

ツナは二人に笑いかけた。

「じ、十代目…っ、ありがとうございます！」

「あははっ、サンキューな、ツナ」

獄寺は感激して泣き、山本はツナに笑いかけた。

（ほんとだよ。オレが頑張れたのはみんながいてくれたからだし…）
ツナは空を見上げながら思った。

（ずっと、こんな生活が続けばいいのにな…）

心からツナはそう願った。

しかし、ツナの願いははかなく散ることとなる。

「へえ、ほんとに子供だ」

屋根の上で三人を見ていた男…ニコールは少し驚いて言った。

「ほんとにあんな子供がボンゴレリングを持つてるの…?」「長身の女…マリネは疑った。

「ほんとみたいだよ。ほれ見てみなよ、三人の指。ちゃんとボンゴレリングがあるだろ？」

「あ、ほんとだ〜！でも全然強そうに見えないよ？かわいい子、がらの悪い子、天然そうな子にしか見えないし」

「能ある鷹は爪を隠す、って言うだろ？実力があるかどうか、試してみたほうがいい」

ニコールはにやりと笑った。

「そうだね〜、試しちゃおっか！」

マリネも楽しそうに笑った。

…ゾクッ

(な、なんだ今の感じ…)

ツナは嫌な気を感じてあたりを見渡した。

妙に人の気配がない、あまりにも静かな並盛に疑問を持った。

なにかがおかしい、そう気付いた時には遅かった。

バシユッ

ツナの目の前をなにかがかすった。

恐る恐る見てみると、塀には銃で撃った跡が残っていた。

「う、うわあああああああ！！」

「だ、大丈夫ですか十代目！！」

「なんなんだ？一体」

叫ぶツナに駆け寄った二人も、町の異変に気付いた。

「…やけに静かッスね。」

「なにか違うな」

獄寺はダイナマイトをかまえ、山本は時雨金時をかまえた。

「ふうん、一般人よりは優れてる、ってことかな」

三人は屋根の上を見た。

するとそこには、長身の女と男がいた。

「誰だてめえら！」

獄寺は二人に聞いた。

「はじめまして、ボンゴレのみなさん。僕はニコール、彼女はマリネと言います。」

ニコールは丁寧に挨拶をした。

「な、何か用ですか？」

ツナは恐る恐るニコールに聞いた。

「はい、あなたに用があるんですよ、沢田綱吉くん」

ニコールは笑いかけた。

「え、オレ！？なんでオレなんかに…」

「あなたが僕らにとつて鍵となる人物だから」

ニコールとマリネは屋根から飛び降りて三人の前に立った。

「僕たちと一緒に来てくれないか？」

ニコールはツナに手を差し延べた。

「お、お断りします！」

ツナはすぐに断った。

とても嫌な感じがして仕方がなかった。

一刻もやくこの場から離れたかった。

「嫌ですか…。では」

ニコールは銃をかまえて言った。

「無理矢理にでも、一緒に来ていただかなくては」

標的 2 光の元

「無理矢理にでも、来ていただかなくては」

ニコールは銃をかまえて三人に言った。

「うわわわわ！」

「十代目！さがっててください！」

獄寺はツナを庇うように前に出た。

「君はたしか…嵐の守護者」

「なんでてめえが知ってるんだよ」「綱吉くんを僕らに引き渡してくれるなら教えてあげるよ」

ニコールは不敵に笑った。

「なら知る必要はねえ。十代目はオレらが守る！」

「そうだが、ニコールさん。ツナは渡さねえよ」

山本もツナを守ろうと前に出た。

「じゃあ力づくで渡してもらおうか」

そう言うとニコールは獄寺と山本に向けて発砲した。

「そうはさせないぜ」

山本は時雨金時で弾を二つに切ってしまった。

「ふうん、なかなかやるんだ」

「それほどでもなっ」

山本は笑いニコールに向かって走る。

「でも僕を簡単に倒せると思ってるの？」

ニコールは地面を蹴って宙に浮かび山本の真上から銃を撃った。

「思ってたねーよ。そんな弱いわけないってわかってるぜ」
山本は余裕で刀をかまえた。

守式四の型 五風十雨

ニコールは驚いた。

自分の銃をこんなにも避けることができる人間がいるとは思ってなかったから。

「なめすぎてたつてことかな」
ニコールはにやりと笑った。

「十代目、大丈夫です。オレがちゃんと守りますから」
獄寺はダイナマイトをかまえマリネに向かって行った。

「あたしとはりあう気？無謀すぎるよっ」
マリネは手裏剣を獄寺にはなつた。

「へっ、手裏剣か。趣味悪いぜ」
「ダイナマイトのほうに興味悪いよ」
獄寺は手裏剣を避けてダイナマイトをマリネに投げた。

「当たってないよっ馬鹿！」
マリネはダイナマイトを避けて手裏剣をかまえた。
しかし目の前にはダイナマイトが近づいてきていた。
「えっ、まじ？」

慌ててマリネは後ろにとび爆発から逃れた。
しかし所々傷ができてしまった。

「なかなか手ごわいね」

マリネは手裏剣をかまえ獄寺に向け走った。

ツナはひとり佇んでいた。

目の前では仲間が戦っている。

今だに状況がわからなかった。

この人たちは誰なのか、

なぜ自分を欲したのか、

なにが目的なのか。

なにもわからずに一生懸命思考回路を働かせていた。

（ど、どうすればいいんだろう。この人たちは敵なんだよね？はや
く二人を助けなきゃ…！）

ツナがその場を動こうとしたとき、頭上から聞き慣れた声が聞こえ
た。

「なにやってんだ？お前ら」

そこにはスーツを着た赤ん坊がいた。

「リ、リボン！」

「なんで山本と獄寺が戦ってたよ」

ツナは今までにあったことを話した。

「ツナを欲した？なんでだ」

「それはこっちが聞きたいよ！」

ツナはリボーンに言った。

「ど、どうすればいいんだろう」

「決まってるんだろ。止める。お前はボンゴレのボスになるんだ。部下のピンチに黙って見てるつもりか？」

リボーンの言うとおりだ。

目の前で仲間が困っているのに自分はただ立っただけなんておかしい。

(…よし！)

ツナが覚悟して死ぬ気丸を口に含むとすると突然目の前が明るくなった。

「な、なんだ!？」

ツナは驚いて二人が戦っているところを見た。

山本も獄寺も驚いていた。

ニコールとマリネも同様に驚いていた。

「な、なんだこの光！」

「前が見えねーぞ！」

山本と獄寺は攻撃を止め光の方向を見ていた。

「ニコールっ何も見えないよ！」

「あわてるなマリネ！」

ニコールは慌てるマリネをなだめていた。

全員が光の方向を見た。

光がおさまると、そこには一人の少女がいた。

「手をひきなさい、アッジョルナーレファミリー」

全員が目の前の少女に視線を集めた。

驚き、言葉を発することができなかった。

リボンだけが口元をにやりと動かした。

標的3 新たな仲間

ツナは頭が爆発しそうだった。

突然現れた敵。

目の前で繰り広げられる争い。

突然現れた一人の少女。

すべてが謎だ。

なにが起きているのか、状況を把握できなかった。

「…君、誰なの？」

ニコールが少女に話しかけた。

「わたし？わたしは結加^{ゆい}。綱吉くんたちを助けに来たの」

「え、オレたちを！？」

ツナは驚いていた少女…結加を見た。

結加はツナに微笑んだ。

「で、君は僕らのこと知ってるの？」

「多少は知ってるよ」

「なにあの子！なんかむかつくっ」

マリネはそう言うと手裏剣を結加に投げた。

「あぶな…っ」

ツナは叫んだが、結加はじっとしていた。

そして掌から光の玉を出し、手裏剣に向けて投げつけた。

パアンッ

光が弾けると手裏剣は粉々に砕かれ地面に落ちた。

「あ、あたしの手裏剣が！」

「ただ者じゃないみたいだね、あの子」

ニコールは少し驚いた表情で言った。

「マリネ、ここはいったん退こう。あんな子が出てくるなんて予想外だ」

「え〜なんで!? まだ守護者倒してないし、綱吉くんも捕まえてないし!」

マリネはニコールに文句を言ったが、ニコールはマリネを説得した。

「次来たらやればいいだろう? 今は作戦を立て直さなきゃ」

ニコールはツナたちに言った。

「ごめんね、この続きはまた今度」

そついうとニコールとマリネは屋根にとびうつり逃げた。

「待ちやがれこの…」

「まて獄寺。追っても無駄だ」

獄寺はリボーンに止められた。

リボーンに逆らえない獄寺はしぶしぶ従った。

「久しぶりだな、結加」

「お久しぶりですリボーンさん」

リボーンと結加は親しそうに話した。

「え、二人は知り合いなの!？」

「知り合いもなにも、結加はボンゴレの人間だぞ」

「えええ!？」

ツナは大声を上げた。それもそうだ。

突然目の前に現れ、自分たちを助けてくれた少女がリボーンと知り合いなのだから。

「まあここで話すのもあれだ。家に帰るぞ。」

「ああ、うん」

ツナたちはいったん帰宅することにした。

「ただいま」

「おかえり。あら、お友達も？いらっしやい」

ツナの母、奈々は山本、獄寺、結加を快く家に招いた。

「で、お前なんで日本にいるんだ？」

リポーンは結加に聞いた。

「わたしは…みなさんを守るといっか、援護するために来たんです」
「援護？」

「はい。最近、ボンゴレリングを狙ってあるファミリーが動き出したんです。なのでそれを知らせるため、みなさんを援護するために…」

ツナは不思議だった。自分と同じくらいの少女がボンゴレの組織に関わっているとは思ってもいなかった。

「さっき襲ってきた奴らはそのファミリーなのか？」

「はい、アツジオルナーレファミリアと言って、今まで無名同然だったんですが…。突然ボンゴレリングを狙いイタリアのボンゴレ本部に襲撃してきたんです」

「しゅ、襲撃!?!」

自分たちが平和に生活している間にそんなことが起きているだなんて知らなかった。

リボーンを除く三人は驚いた。

「なんで奴らはリングを狙うんだ？」

「理由まではわかりませんが…同時に綱吉くんを狙っているんです。まったく理由がわからなくて、調べてるんですが…」

リボーンは考えた。なぜリングとツナを狙うのか。

おそらくは強大な力を手に入れたということにはわかったが、その理由まではわからなかった。

「大丈夫です十代目！心配しなくてもオレたちが十代目を守りますから！」

「そうだぜツナ！親友が困ってんのになにもしないなんておかしいらな！」

山本と獄寺はツナに言った。

「二人とも…ありがとう！」

ツナは嬉しかった。心から二人に感謝した。

「綱吉くんはいいお友達をもってるのね」

結加はツナに笑いかけた。

「でも二人は守護者なのよね。たしか嵐と雨…」

「二人は強えが、もつと強い守護者がいんだ」

リボーンはにやりと笑った。

「ま、まさか…雲雀のことじゃ…」

「そのまさかだ。雲雀もツナの守護者だろ」

控えめに聞いた獄寺にリボーンはさらりと返事をした。

雲雀は一応雲の守護者だが、ツナたちには好意的ではないと見える。

群れているだけで攻撃をしてくるのだ。
それが仲間だとは思いがたい。

しかし今までの戦いの中では味方として一緒に戦った。
雲雀の行動は常に謎だった。

「たしかボンゴレ十代目の守護者たちは個性的なんですよね」

「え、知ってるんですか？」

ツナは結加に聞いた。

「もちろん、ボンゴレの次期後継者と守護者たちですし、基本的なことはわかってます」

結加はおかしそうに笑った。

「あなたたちの日常のことも、九代目から聞いてます。」

「え、うわっ恥ずかしい！」

ツナは恥ずかしくなってしまうた。

自分の日常が初対面の少女にはれているのだ。どこまでばれているかわからないからさらに恥ずかしい。

「大丈夫ですよ。わたしが聞いているのはただあなたたちが楽しく生活している、くらいのことですから」

結加は笑いながら言った。

「で、ひとつ聞きたいんですけど」

「え、何？」

「その指輪、何ですか？」

結加が指差したのはツナの指にはめられているリング、アニマルリングだった。

「ああ、これは…」

「ガウッ」

アニマルリングが吠えた。

それに結加はとても驚いた。

「えっリングが吠えた!？」

「ナッツ…」

ツナは苦笑いした。

「どうせだから結加にナッツを見せてやれ」

リボーンがツナに言うと、ツナは頷きリングからナッツを出した。

天空ライオンVer・V(レオネ・デイ・チエーリ バージョンボ
ンゴレ)

「わわわっすごい!動物!?ライオン!？」

結加は興奮してツナに聞いた。

「う、うん。山本や獄寺くんも持ってて…」

「すごい!どういう仕組みなの!？」

興奮している結加にツナたちは今までにあつたことを話した。
話し終えるころには結加の興奮も冷めていた。

「す、すごいことがあつたんだね…」

結加はまじまじとナッツを見ながら言った。

「ま、こいつらは見た目によらず強えから安心しろ結加」

(見た目によらずって失礼じゃ…)

ツナは心の中でリボーンにつっこんだ。

「クウ…」

ナッツは結加に怯えてツナのうしろに隠れていた。

「ナッツ、結加さんは味方だから怖がらなくても大丈夫だって」

「仕方ないよ、初対面だもん」

結加は優しく笑った。

ナッツは恐る恐る結加に近づき、じつと結加の顔を見た。

結加は少し緊張した。

ナッツの目が、あまりにも、澄んでいたから。

(悪を知らない…すべてを見透かすような目…)

結加はしばらくナッツの目を見ていた。

するとナッツは安心したように結加の元に行き、頬を擦り寄せた。

「えへへ、よろしくね、ナッツ」

「おい、結加、お前日本にいるあいだ何処にいるつもりだ？」

リポーンが結加に聞いた。

「あ、えつと、山で過ごそうかと…」

「や、山ああ!？」

女の子が山で暮らすなんて考えられず、ツナは驚いた。

なんだか驚いてばかりだ。

「う、うん。大丈夫だよ!今までもこんなこと何回か経験してるし
!」

結加は笑って答えた。

「泊まるところがないならここにいろ、結加」

リポーンが結加を引き止めた。

「えつ、そんな、悪いですよ」

結加は慌てて断った。

「気を遣うな、結加。ここには居候が何人もいる。一人増えただって
かまわねえよ」

(あたかもここが自分の家みたいに言って…)

当の住人のツナにかまわずここに住むことを進めるリポーンにツナ

は呆れた。

「大丈夫だ。ママンにはオレの友人だって言うておくから」
「で、ではお言葉に甘えて…」

結加は丁寧にお辞儀をした。

「もう夕飯の時間だし、そろそろ帰るな、ツナ」

「十代目、そろそろオレも失礼させていただきます」
山本と獄寺は立ってツナに言った。

「あ、うん！二人とも気をつけて！」

ツナは二人に挨拶した。

「じゃあオレはママンに言うてくるからな」
リポーンは階段を下りて行った。

部屋にはツナと結加とナッツだけになった。

ツナは結加をまじまじと見た。

(きれいな顔立ちだなあ…)

ツナは思った。素直にそう思った。

髪の毛はサラサラで毛先は綺麗にウェーブがかかっている。

目は大きく、つり目で睫毛が長い。

小顔で背は少し小さいが細く、しぐさのひとつひとつに目を奪われた。

「…ん？」

結加はツナに気付き見つめた。

「あつ、なっなんでもない！」

ツナは慌てて目をそらした。

「ガウツ」

ナッツは吠えたとリングに戻った。
部屋に沈黙が訪れた。

(どうしよう…気まずい！)

ツナは焦ったが、沈黙をやぶったのは結加だった。

「綱吉くんってさ、大空…大空のボンゴレリングをもってるんだよね」

「う、うん」

そう言っていると今度は結加がツナを見つめた。

どうしていいかわからずツナも結加を見つめた。

「…やっぱり」

結加は笑って言った。

「さすが大空、綺麗な目をしてる」

ツナは意味がわからずに黙っていた。

「オイ二人とも、夕飯だ」

部屋にリボンがはいってきた。

「わ、わかった！」

ツナは慌てて部屋をでていった。

「どうだ、結加。ボンゴレの次期後継者は」

リボンは結加に聞いた。

「最初知ったときは何故後継者に選ばれたかわかりませんでした」

…

結加は笑いながら言った。

「なんとなく、理由がわかった気がします」

そう言っていると結加は階段を下りていった。

「選ばれた理由はそれだけじゃねえかな」
リポーンはにやりと笑って言った。

標的 4 転入生として

朝、珍しくツナは誰にも起こされず自分で起きた。
なにかを感じたのだ。

(…なんだろう、少しだけ嫌な感じがした)
眠たい目を擦り空を見る。
なにかが起こる前触れかのように空は曇って暗かった。

着替えて下に行くのと、昨日出会ったばかりの少女、結加が台所で朝食の準備を手伝っていた。

「あ、おはよう綱吉くん！」
ツナに気付いた結加は笑顔で挨拶した。

「うん、おはよ」

ツナもそれに笑顔で答えた。

「珍しいな、ツナが一人で起きるなんて」

椅子の上に座っていたリボンがツナに話しかけた。

「うん、ちょっと…」

ツナはためらいがちに言った。

リボンがそれに気が付かないはずがない。

少し様子のおかしいツナを見てリボンは考えた。

(まさか、なにかを感じとったのか…)
ツナは超直感をもっているからそういうところは侮れない。

「や、ごはんよ」

奈々が机の上にご飯を並べた。

「いただきます」
ツナたちは朝食を食べはじめた。

「お、そうだツナ。結加も今日から並盛中に通うことになったからな」

リボーンは唐突にツナに告げた。

「え！？なんでっ」

「結加はおめえらを援護するために来たんだ。離れてちゃ意味ねえだろ」

リボーンにごもつともなことを言われ言い返すことができなかった。

「よろしくね、綱吉くん」結加は呆れているツナに言った。

「あつ、うん！よろしく…」

ツナは笑顔で言われた結加に苦笑いで答えた。

(なんでこんな簡単に入学手続きができるんだ…)
ツナは疑問に思った。マフィアの中ではこれくらいどうってことないのだろうか。

「はやく食わねえと遅刻すっぞ」

リボーンに言われ時計を見るとそろそろ家を出る時間だった。

「あつ、ほんとだ！ごちそうさま！」

急いで準備をして二人は家を出た。

「いってきます」

「いってきます、みなさん」

「はいはい、気をつけてね」

ドアを閉めると外には獄寺がいた。

「おはようございませす十代目！」

「おはよう獄寺くん」

ツナに挨拶をした獄寺は隣に結加がいるのに気付いた。
しかも並盛中の制服を着ている。

「まさか、おめえ」

「並盛中に転入することになりました」

獄寺の問いに結加は笑顔で答えた。

「な…っ!!!」

「おはよーツナ、獄寺!」

うしろから山本がやって来た。

「あれっ、結加じゃん。並盛中の制服なんか着てどうしたんだ?」

「今日から並盛中に通うことになったの」

「ははっ、そっか!よろしくな」

山本はすんなりと受け止めた。

「なんで何も疑問に思わねえんだよ野球馬鹿!」

獄寺は山本に向かって叫んだ。

「あの、そろそろ行かないと遅れるから…」

「は、はいっ!行きましよう十代目!」

ツナが話しかけると獄寺はすぐに従った。

(なんて変な人たちなんだろう)

結加は三人を見て思った。

学校に着いて先生が結加を紹介した。

一応帰国子女となっているらしい。

席もツナの知り合いと言うことでツナの隣だった。

ツナたち三人以外の男子は結加を見て頬を赤らめていた。

「ねえねえ、結加ちゃんはこの国に住んでたの?」

休み時間になると結加のまわりには女子がいっぱいだった。

「ははっ、人気だな結加のやつ」

「なんで女子って転入生が来るとそいつに群がるんだろな」
山本と獄寺は女子に囲まれて笑っている結加を見て思った。

それから一日中、結加は女子に囲まれてばかりだった。

休み時間もずっと話しかけてくる女子たちを対応していた。

「っ、疲れた……」

結加は机の上に突っ伏していた。

「お疲れさま、大変だったね」

ツナは苦笑いして言った。

「うん、でも……こういうの久しぶりだから楽しかったかな」

結加はツナに笑顔を見せた。

結加はボンゴレに携わっていたため、学校など行けなかった。
だからこうして同年代の女子たちと話すのがとても嬉しかった。

「十代目帰りましょう！」

「帰ろーぜ、ツナ、結加」

獄寺と山本がかばんを持って言った。

「そうだっはやく帰らなきゃ！」

ツナは急いでしたくをした。

「なんでそんなに急ぐの？」

慌てているツナを見て結加は聞いた。

「あっ、そっか！結加は知らないんだ」

ツナたちは急いで校庭に出た。

「学校に遅くまで残ってたら怒られるんだ」

「誰に？」

説明するツナに結加は聞いた。

「誰って、群れることを嫌う暴力的な風紀委員の…」

「それって僕のこと？」

その声を聞いた途端ツナと獄寺は固まった。

「ひっ、雲雀さん!!」

ツナは後ろを見て叫んだ。

「雲雀っ、てめ…」

「よっ、雲雀」

山本は相変わらずな調子で雲雀に話しかけた。

「君たち、なに群れてるの？咬み殺すよ」

雲雀はトンファーをかまえて言った。

「ごっごっごめんさい!!すぐ帰りますから!!」

ツナは慌てて謝り帰ろうとした。

しかしそんなツナにかまわず結加は雲雀に話しかけた。

「へえ、あなたが雲の守護者の雲雀さんかあ」

「なに、君転入生だよな？」

「結加です。これからよろしく雲雀さん」

結加は雲雀に笑顔で言った。

雲雀はしばらくなにも言わなかったが、突然結加に聞いた。

「…君、強いのか？」

「え?…ええ、一応」

少し結加は驚いて答えた。

「ふうん、なら僕と戦おうよ」

突然の誘いに結加はさらに驚いた。

(女の子相手に勝負申し込んだー!!!)
ツナは心の中でつつこんだ。
女の子に勝負を申し込む人をはじめて見たからだ。しかも相手は雲雀。

「……」結加はまだ驚いていた。
するとそこに堂々とあの男が割り込んできた。

「おおーっ、沢田たちではないかあ！極限にどうしたのだあ!？」
鼻にテープをはった三年生の笹川了平だ。

「おっ、お兄さん！」

「先輩！」

「げっ、芝生頭!！」

獄寺だけが嫌そうな顔をした。

「あっ、あなたは…晴の守護者の…」

「お前は誰だあ、沢田たちの知り合いかあ？」

了平はツナたちに聞いた。

「えっと…」

「ちようどいいじゃねえか、ツナ。こいつらにも話しとけ」
いつのまにか足元にはリボーンがいた。

「リボーン!！」

「よっ、雲雀、了平。こいつはな…」

リボーンは結加のこと、昨日あったことなどを二人に話した。

「極限にわからんが、そいつは仲間ということだな！」

話のほとんども理解できなかった了平は考えた末、その答えにたどり着いた。

「ふうん、強いんだ。」

雲雀は話を理解してはいたがそこにしか興味がなかった。

「よ、よろしくおねがいます」

結加は二人にお辞儀をした。

「極限によろしくたのむぞ！」

「僕は群れるのが嫌いだから」

結加は少し固まったが再び笑顔を見せた。

（おもしろいな、この人たち）

個性的な守護者を見て思った。

それを見ていたツナは安心した。（よかった、お兄さんも雲雀さん
もわかってくれたみたい…）

笑って三人のやりとりを見ていた時、嫌な視線をツナは感じた。嫌
な気配を感じた。

どんどんこちらに近づいてくる。

自分たちに向かってくる。

その気配が来る方向をツナは見た。

リボンもそれに気付きツナが見ている方向を見た。

全員がその異変に気付くと、視線の先には気配の根源がいた。

「へえ、気配に気付くなんてすごいですごい」

「ほんとにお前気配消してたのかよ」

見るとそこには同じ服装、同じ髪型、同じ声、同じ顔の人物が二人
立っていた。

全員がその二人、双子を見つめた。

双子はにやりと笑った。

標的5 大空の目(前書き)

どうすれば文を書くのがうまくなるんですかね…

気まぐれ更新してたら

標的5まで来ちゃいました(笑)

標的 5 大空の目

突然双子が現れた。

全員が双子を見た。

双子は笑っていた。

その顔を見てツナは少し怖くなった。

「誰だてめえら」

リボーンは二人に話しかけた。

「僕ら？僕らは」

「アツジョルナーレファミリーの」

「双子のアロッチと」

「スコッチだよ」

双子は交互に話した。

まったく見分けがつかない。

「あの二人は…」

結加が二人を見て口を開いた。

「知ってんのか、お前」

リボーンは結加に聞いた。

「はい、あの二人はアツジョルナーレの双子で、瓜二つの顔で相手を惑わします。そして武器は…」

「呑気に説明なんかしてると」

「君たち死んじゃうよ」

双子はツナたちに向かってなにかを投げつけた。

「わっ！」

慌てて避けると地面になにかが刺さっていた。

「あの二人の武器は…槍です」

結加は二人を見て言った。

「そっだよ、しかも」

「毒針付きの、ね」

そう言うと再び双子は槍を投げた。

槍と言っても20cmほどの大きな針だった。

「みなさん、下がって！」

結加は前に出ると掌からあの光の玉を出し双子に投げた。

「あれがニコールの言ってた」

「光の玉、かあ」

双子は冷静に言うると二手にわかれて避けた。

「その玉、何？」

双子は一緒に結加に聞いた。

「これはわたしの力…炎を固めた玉よ」

掌に光の玉を出して言った。

「まさか…死ぬ気の炎!？」

ツナが聞くと結加は頷いた。

「へえ、ボンゴレの…」

「でも、僕たちには」

「君は」

「勝てないよ」

そう言うと双子は一斉に槍を投げた。

結加は地面を蹴ってそれを避けたが、避けても避けても槍はおちてくる。

「あははっ遅い遅い」

「そんなのだと当たっちゃうよ」

さらに数の増えた槍を避けようと結加は逃げつづける。

しかし疲れてスピードダウンした結加は足元に刺さっていた槍に気付かず、つまずいてしまった。

「いた…っ」

受け身を失敗して手首を捻ってしまった。

「残念だね、これが」

「最後だよ」

双子は槍を結加に投げつけた。

広範囲に投げられた槍を避けるのには時間が足りない。

結加は死を覚悟して目を閉じた。

しかし、いつまでたっても変化がない。

どこも痛くならないし感覚もある。

恐る恐る目を開けると、目の前には自分を庇うように人が立っていた。

「…え…」

結加は驚いてその人を見た。

並盛中の制服を着た、茶色の髪の毛で身長小さい男の子。

頭に炎をともしていた。

「大丈夫か、結加」

ツナに話しかけられ結加は黙って見ていた。

「…結加？」

「…あつ、はい！だ、大丈夫です！！」

結加は慌てて答えた。

(この人…ほんとに綱吉くん!?)

結加は驚いてツナを見た。

まったく違ったからだ。

普段のドジで頼りなさそうなツナではなかったからだ。

「え、あれ綱吉くん?」

「写真とまったく違うじゃん」

双子も驚いていた。

ボスからの情報にはこんなツナのことには書いてなかったから。

「お前ら、どこのどいつだかは知らないが、オレの仲間に出しはさせない」

ツナが双子を見据えて言った。

その目に双子はたじろいだ。

あまりにも澄んでいたのだ。

「あれが大空か、どうりで」

「ボスが欲するわけだ」

双子はにやりと笑った。

そんな双子に気にも止めず、ツナは手に炎をともして双子に向かって飛んだ。

「うわっ、飛べちゃうんだ」

「想像してたよりもやばいね」

双子は同じ方向に避け槍をかまえた。

「ねえ、綱吉くんって無傷で連れて行かなきゃいけないんじゃないの?」

「まあ多少の怪我は仕方ないでしょ。毒だつて解毒剤があれば大丈夫だろ」

そう言うと双子はツナに向かって槍を投げた。

ツナは飛びながら槍を避け、炎を使い高速移動した。
ツナが突然消えたので双子は驚いた。

「…っ消えた!?!」

「どこに行つた!?!」

双子はまわりを見渡した。

すると目の前にツナが現れた。

双子は驚いて動くことができなかった。

ツナは双子めがけて思いきり蹴りを入れた。

あまりにも速かった。

全員が呆気にとられていた。

「…すごい」

結加は自然と言葉を発していた。

「あれがボンゴレ次期後継者、ツナの力だ」

リボーンはツナを見て言った。

ツナの強力な蹴りを喰らった双子は地面に倒れた。

「いつて…」

「久しぶりに怪我したよ…」

双子は自分の身体を見て苦笑いをした。

「もう終わりか」

ツナがそう言うと双子はしばしの沈黙の後、にやりと笑った。

「まいったまいった、綱吉くん」

「今日は僕らの負け」

双子は両手を上げて言った。

しかしツナは黙って二人を見ていた。

まったく二人が降参しているように見えなかったからだ。

「君、強いね」

「ますます君の必要性がわかったよ」
双子は立つとツナに言った。

「どうしても僕らと」

「手を組むつもりはない？」

「ない。」

ツナはすぐにきっぱりと言った。

その目に嘘はなかった。

「…ふうん、なら」

「無理矢理に奪うまでだ」

双子はにやりと笑って、一歩うしろに下がった。

「じゃあね綱吉くんと」

「守護者さんたち」

そう言うと双子はツナたちに向けて煙幕を投げると、すばやく逃げるように去って行った。

そこにはツナたちしかいなかった。

「十代目！」

「ツナ！」

「沢田！」

獄寺、山本、了平がツナのもとに駆け寄った。

「大丈夫ですか十代目！」

「ああ、心配ない」

心配する三人にツナは笑顔を見せた。

「…綱吉くん」

控えめに結加がツナに話しかけた。

「…さつきは助けてくれてありがとう」

結加はツナに笑顔で言った。

「…ああ」

ツナはそう言うのと元のツナに戻った。

「…沢田綱吉」

「ひ、雲雀さん!？」

雲雀が突然雲雀に話しかけた。

「君、僕の獲物を横取りしたね」

雲雀はトンファーをかまえて言った。

「…咬み殺す」

「うわわわわわっ、待ってください雲雀さん!」

ツナは慌てて雲雀を止めた。

(…さつきと、全然違う。)

結加はア然とツナを見ていた。

「まったくの別人だろ」

「リボーンさん」

リボーンは結加に言った。

「あいつはいつもはドジでダメダメだが、やるときはやるんだ」

リボーンはにやりと笑った。

「…そうですね」

結加は笑って答えた。

「いってー、まさかあそこまでとは…」

「思ってたなかったよなあ」

双子は傷の手当をしながら言った。

はじめツナの写真を見たとき、弱そうな印象を持った。

これならすぐに連れ出せるだろうと思った。

しかし、違った。ツナはあまりにも強かった。

甘く見ていたのだ。中学生だから、背が小さいから。

双子は後悔していた。

「どうしたの〜双子っ」

うしろを見るとマリネが笑いながら歩いてきた。

「げっ、マリネだ」

「最悪だー」

「なによ失礼ねっ！あたしじゃ嫌なの!？」

マリネは双子に言った。

「だって」

「マリネの」

「相手するの」

「疲れるんだもん」

双子は嘲笑った。

「むかつくーっちょっと！そこに座りなさい！」

マリネは叫び暴れた。

「まあまあ、やめなさい三人とも」

三人をなだめるように男が割ってはいった。

「だってこいつらがっ」

「このくそ女が」

「このあほ女が」

三人は子供のように文句を言っていた。

「まったく、大人気ないですね」

男はため息をもらしながら言った。

「では、わたしも綱吉くんを見てきましようか」

男は、長髪をなびかせて言った。

標的6 警告（前書き）

なんだかんだ標的6まで書きちゃってますが…

実はわたし、

家庭教師ヒットマンREBORN!は

アニメでしか見たことはありません（笑）

原作は見たことはありません、

アニメオンリーです。

なのでいろいろ目茶苦茶だと思えますが、
暖かい目で見守ってくださいませ。

アニメだけの記憶を頼りに書いてるので
絶対読みにくいですよ…

でも懲りずに書いていきます（笑）

ではどござー！

標的6 警告

広がる緑

吹き抜ける風

そんな場所でクローム髑髏：凧はある人物を探していた。

（今日は、いないのかな…）

凧がため息をつくとうしろから恩人である人物の声が聞こえた。

「僕はここにいますよ、凧」

「む、骸様！」

凧の表情が和らいだ。

今日は会えないかと思っていたので安心したのだ。

「すみません、少し気になることがありました…」

骸は苦笑いをして謝った。

「なにか…あつたんですか？」

凧は骸に心配そうに聞いた。

「…実は、最近ある組織が動きだしたらしいんですが…、その組織の目的は…」

骸は凧をみつめた。

「…凧」

「は、はい」

「…気をつけるんですよ。まあ、なにかあつたときは沢田綱吉が助けてくれるでしょうけど」

「…？」

凧は黙って骸の話聞いていた。

「凧、くれぐれもそのリングを手放してはいけませんよ」

「はっはい！」

凧は慌てて返事をした。そんな凧を骸は穏やかな笑顔で見つめた。

なにが起こっているのか、骸にもわからなかった。

「おじゃまします、十代目！」

「邪魔するぜ、ツナ」

「二人とも、いらっしやい！」

今日は土曜日。学校が休みなので獄寺と山本はツナの家に来てきた。今日、ツナは土曜日。学校が休みなので獄寺と山本はツナの家に来てきた。

「おう、獄寺と山本か、ゆっくりしてけ」

リボーンも二人に気付き挨拶をした。

ツナ、獄寺、山本、リボーンの四人は、昨日襲ってきた双子のこと、ニコールやマリネのことについて話しはじめた。

「敵が何故ボンゴレリングを欲するかはわかる。ボンゴレリングには強大な力が秘められているからな。しかし、わかんねえのは…」

「何故十代目までもを狙うか…ってことですよね」

獄寺の問いにリボーンは頷いた。

確かに、ボンゴレリングならともかく、ツナまでを欲する理由は誰にもわからなかった。

「しかも、なんか計画…とか、言ってた…よね。どんな計画なんだろうっ」

「そりゃあ、世界征服だろ」ツナの疑問に山本はすんなりと答えた。

「ばっか！世界征服だなんて餓鬼の考えることを誰が…」
そこで獄寺は止まった。

ああ…いた。世界征服を企んだ奴が。

かつてツナたちが戦った白髪の男、白蘭だ。

ツナや獄寺、山本までもが黙り込んでしまった。

「少なくとも、世界征服っていうのは間違っちゃいねえだろうな」
リボーンは三人にきっぱりと言った。

部屋の空気がさらに重たくなった。
居づらくなった。喋りにくくなった。

しかし、そんな空気を壊してくれたのは、まさかの子供だった。

「ギャハハハハ、ツナー遊ベーっ」

部屋のドアを思いきり開けて乱入してきたのはボンゴレの雷の守護者、ランボだった。

「ランボ、ダメ！」

その後を追うようにイーピングが部屋に入ってきた。

「アホ牛っ、勝手に部屋に入ってくんな！オレらは大事な話してんだよ！」

「そんなのランボさんには関係ないもんねーっ」

ランボはさっきまでの雰囲気をもったく無視して部屋で暴れていた。

「仕方ないなあ…。ランボを連れて散歩に行ってくるよ」
ツナはしぶしぶ立ち上がりランボを抱きかかえた。

「じつ十代目が行くならオレも行きます！」

「じゃあオレも行くぜ」

獄寺と山本も立ち上がって言った。

「じゃあ気分転換に散歩するか」

リボーンは山本の肩に乗って言った。

階段をおりるとちょうど結加と鉢合わせた。

「あれ、みなさんお出かけですか？」「ああ、ちょっとな。ついでに結加に並盛を案内してやる。ついて来い」

リボーンに誘われ結加も一緒に出かけることにした。

「ここに、ボンゴレ次期後継者が…」

並盛を見渡しながら長髪の男はつぶやいた。

「おい、さつさとボンゴレ十代目を連れて帰ろうぜ。たるくてたるくて仕方ねえよ」

左目に縦に切り裂かれたような傷が残る男は眠たそうにあくびをしながら言った。

「そんなに余裕ですか。ニコールたちが言ってたでしょう。彼らは強いと」

「そんなのオレの前では関係ねえ。ただ邪魔なもんは消すまでだ」
男は余裕な笑みを浮かべて言った。

ツナたちは人通りの少ない道を歩いていた。
すると道の向こうからよく知る人物が歩いてきた。

「あ、クローム！」

「…ボス」

クロームは少しだけ微笑むと見知らぬ人物、結加の方へ視線をやった。

「ボス…この人…誰…？」

「あっ、そっか、クロームにはまだ紹介してなかったね！」

ツナはクロームに結加のこと、最近あった出来事を話した。

「よろしくね、クロームさん」

「よろしく…」

クロームは頬を赤らめて言った。

「そっぴゃあクローム、おめえ何してたんだ？」

リボーンはクロームに問うた。

「…ボスに…用があつて…」

「えっ、オレ!？」

クロームはこくと頷いた。

「実は…骸様が言つてたの…」

「骸がオレになんて…？」

クロームはつづけた。

「最近…その、リングを狙って組織が動き出したって…」

ツナたちは先日襲ってきたアッジョルナーレファミリーのことだと思つた。

「それで…その人たちはリングとボスを狙つてるんだけど…その理由は…」

クロームが何かに気付いたように会話をやめた。

「…クローム？」

ツナは突然黙ったクロームに話しかけた。

「…骸様がなにか言ってる……」

「なんて言ってるんだ」

リボーンが先を促した。

「…逃げろって」

クロームの言葉と同時に、その場にいた全員がなにかを感じた。

次の瞬間、ツナたちの頭上から何かが落ちてきた。

「あぶな…っ」

結加は慌てて頭上めがけて光の玉を投げつけた。

光の玉によつて砕かれたものを見てみると…

「へ、蛇…？」

大小様々な大量の蛇だった。

しかもただの蛇ではなく、猛毒を持つものばかりだった。

「へえ、確かに…勘は鋭いですね」

声のする方を見ると、長身の男二人が立っていた。

「こんにちは、ボンゴレのみなさん」

長髪の男は丁寧挨拶をした。

「おい沢田綱吉！ボンゴレリング全部集めてこっちに来やがれ！」

「ぐぴゃっ！！怖いもんねっ！！」

ランボは半泣きで男たちを見た。

「あなたたちは…アッジョルナレファミリーの…」

結加は警戒しながら前に出た。

「わたしはミノイ。彼はビンツです。以後お見知りおきを」
長髪の男…ミノイは丁寧に挨拶をしてお辞儀をした。

「そんなめんどくせえことしてねえで、さっさとおわらせようぜ」
左目に傷を持つ男…ビンツはあくびをした。

「なんだあのヤロー、いけ好かねえな」

獄寺はビンツを見て言った。

「なんか言っただか餓鬼」

ビンツは獄寺を睨んだ。

「落ち着いてビンツ。まずは交渉を」

ミノイはビンツをなだめて話しかけた。

「沢田綱吉くん」

「!?!?!はいつ」

ツナは驚いて返事をした。

「何故あなたはこちらに…アツシヨルナーレファミリーに来ることを拒むのですか?」「…まずあなたたちの目的が、わからないです」
ツナはミノイを見て言った。それを見てミノイは少し笑った。

「理由ならこちらに来ていただければわかります。あなたがこちらに来てくださるのなら、わたしたちはあなたに最高のおもてなしをしますよ」

ミノイは微笑んでツナに言った。

「…すいません。オレはあなたたちの方には行きません」

ミノイは予想していた通りだと思いい理由を聞いた。

「ほう、何故ですか?」

「あなたたちが何を企んでるかわからないけど…オレは、あなたたちといることを望まない」

ツナはミノイたちにきつぱりと言った。

「オレの居場所はここだ！オレはみんなを守るためにここにいるんだ！」

リボーンはにやりと笑った。

「十代目……」

「ツナ……」

獄寺と山本は感動してツナを見た。

「……どうしても、ダメですか？」

「はい」

ミノイはため息をついた。

その瞬間、空気がかわった。

ミノイの柔らかな表情は消え、

獲物を見つめる猛獣のような目でツナたちを見た。

「わたしは、自分の思い通りにいかないことが大嫌いでしたね」
先程のミノイとは違う、危険な雰囲気につなたちはたじろいだ。

「力づくでも、自分の思い通りにしたくなるんです」

ミノイは危険な雰囲気をもとって言った。

ピンツだけが余裕そうにあくびをしていた。

標的7 二重人格と幻覚（前書き）

後半…結加、山本、ランボが放置されてます（笑）

ごめんね、三人共…

そろそろ大きい出来事を

起こさせないとつまらないですね。

標的7 二重人格と幻覚

世の中には二重人格というものが存在する。

一人の人間に二つの同一性または人格状態が入れ替って現われる現象だ。

二重人格は出来れば関わりたくないものだ。対応が大変だし、頭を混乱し兼ねない。

しかし、ツナたちは関わってしまった。

関わざるを得なかった。

ボンゴレリングを持っているかぎり、こういうハプニングはつづくのだ。

先程の紳士的な雰囲気とは打って変わって、いかにも危険性を纏う人物へと変化したミノイ。

ツナたちは黙って見ていた。

そのかわりようを。

「自分に逆らうものは、すべて従わせなければ」

不気味な笑みを浮かべたミノイにピンツ以外の全員が息をのむ。

危険だ。

はやくなんとかしなければ。

しかし、怖いのだ。

目の前の男が。

呆気にとられているツナたちにミノイは容赦なく攻撃をした。

「黙っていてはなにも始まりませんよ!!!」

言葉は丁寧なのに顔が、行動が、あきらかなギャップをつくっていた。

ミノイは再び大量の毒蛇を出現させ、ツナたちを襲った。

あまりの速さにツナは目を閉じた。
しかし。

「させない」

クロームは三叉槍を持ち、意識を集中させた。

次の瞬間、地面から激しい火柱がのぼった。

毒蛇は火柱によって消えた。

「!?!?! あなたは幻覚を使えるのですか」

少し驚いたミノイはクロームの幻覚を見てにやりと笑った。

クロームはその顔を見て怯んだが、再び意識を集中させ、さらに幻覚を作り出した。

後ろのツナたちを守るように、さらに火柱は増え、威力を増した。

あまりの力にミノイはしばし驚いた表情でクロームを見た。

(…甘く見ていたら、負ける)

そう感じとったミノイは先程の毒蛇の数倍もの大きさの毒蛇をクロームに向けて放った。

ミノイを囲む火柱、ツナたちを守る火柱に集中していたクロームは、自分の身を守ることを忘れていた。

気付いたときには、身体に巨大な毒蛇が絡み付いていた。

「……………っ!!!」
首をも絞められクロームは苦しそうにもがいた。
しかし声が出ない。

「クローム!!」
ツナたちがクロームを助けようとすると、目の前に二人の戦いを傍観していたビンツが現れた。

「行かせねえよ。こっちはこっちで楽しく遊ぶんだからな」
ビンツはそう言うのと巨大なハンマーで攻撃してきた。
その威力は強く、ハンマーで打ち付けられた地面には大きなクレーターができた。

「ひいつ!!!?」
あまりの力にツナは悲鳴を上げ一歩下がったが、突然後ろから大きな声で叫ばれた。

「極限オレにまかせろ!!」
常に死ぬ気モードの了平だった。

「お、お兄さん!?!なんでここに!?!」
「ロードワークの途中で大きな音が聞こえてな、来てみれば沢田たちが襲われているから助けに来た!!」

「誰だてめえは…と、よく見れば晴の守護者じゃねえか」
ビンツはめんどくさそうに顔をしかめた。

「お前の相手はオレだ!極限に勝負だ!!」
「はっ!オレと勝負?馬鹿なことやってんじゃねえよ!!」
ビンツはハンマーを振り上げて了平に襲いかかった。

「マキシムキャンソ
極限太陽！！」

ハンマーめがけて了平は極限太陽を放った。
それをもろに喰らったハンマーにはひびがはえた。

「げっ！なにしてくれんだてめえ！！」

了平のパンチのあまりの威力に驚き、自分の武器を壊されたことに怒った。

了平は弱いと甘く見ていた。だから力をあまりいれなかった。

そしてハンマーは壊された。

ピンツは驚きを隠せなかった。

「さあさあ、早くあなたの幻覚とやらでこれをといてみなさい」
ミノイの毒蛇はさらにクロームを縛り付ける力を強めた。

「クローム…っ！」

ツナはクロームのもとに駆け寄ろうとした。

しかし、なにかを感じて足を止めた。

その場の空気が変わった。

ミノイの危険な雰囲気をもるともせず、それは近づいてくる。

…来る。あいつが。

「あまりクロームをいじめないでくれますか」

クロームの姿が変わっていく。

あの男の姿へ。

「……!!?」

ミノイはその男の気配を感じたじろいだ。その瞬間、クローームを……その男を縛り付けていた毒蛇が悲鳴を上げて消えていった。

「……っ、わたしの毒蛇が!」

ミノイは驚いて男を見た。

男は……六道骸は、真っ直ぐミノイを見てあやしい笑みを浮かべた。

「む、骸!」

「お久しぶりです、沢田綱吉。」

驚いて名前を呼ぶツナに骸は挨拶をした。

「だからあれほど逃げると言ったのに……君という人は」

骸は呆れた顔をして言った。

「あなた……先程の女の子はどうしたんですか?」

ミノイは冷や汗を浮かべながら聞いた。

「ああ、あなたがあまりにも彼女をいじめるので、隠したんです」

骸はミノイに微笑みながら言った。

しかし、目は笑っていないかった。

「彼女を苦しめた君には罰が必要ですね」

そう言うとき骸はクローームのものよりも強力な火柱を出した。

その火柱は熱く、苦しく、辛かった。

(……彼の憎しみが……、火柱となっているのか……!)

火柱に耐えながらもそう察したミノイは骸を見た。

その目はあまりにも冷酷だった。

ミノイは恐怖を覚えた。

「そろそろおわりにしましょう。僕も疲れました」
そう言うと骸は右目の数字を六から三に変えた。
その瞬間、すさまじい威力の火柱がミノイの身体を包み込んだ。

「つく、…あああああ！」

ミノイの身体中には傷や火傷の跡が多く残された。
ふらふらになりながらもミノイはなんとか立ち、骸を見た。

(…なんとという男だ)

ミノイは身体中の傷をおさえながら思った。
先程までの危険な雰囲気はどこかへ消えた。
骸の圧倒的な力に押されたのだ。

「ミノイ！てめえ大丈夫かよ」

ビンツが駆け寄りミノイを支えた。

「…ビンツ。帰りましょう。わたしもあなたも、今は戦える状況ではない」

ミノイはビンツにそう言うとツナたちの方を見た。

「…綱吉くん」

名前を呼ばれツナは跳ね上がった。

「…また会いましょう。それまでには正しいご決断を。わたしたちはあなたを歓迎しますよ、いつでも」

そう言うと二人は屋根をつたって逃げていった。

それを見ていたツナに骸は話しかけた。

「…沢田綱吉」

「っ！？」

ツナは驚いて骸を見た。

「最近、あなたとボンゴリングを狙ってある組織が動き出しているのはもう気付いてますよね？」

「あ、うん……」

「くれぐれも気をつけるように。奴らに好き勝手にはさせないように」

ツナは骸の言葉に素直に頷いた。

なにが起きているか今だにわからないが、奴らにボンゴリングの力を渡してはいけない、自分は奴らと手をとってはいけない、ということはわかっていた。

「僕は奴らの目的とやらを調べてみます。∴クロームを、頼みますよ」

「わ、わかってる！……骸、助けてくれてありがとう！」

ツナは骸に感謝した。そんなツナを見て骸は少しだけ黙っていたが、次の瞬間には笑顔を見せた。

「クフフ、君はまだ甘いようですね。∴そんな君を少しでも信じている僕も甘いですが」

そう言うと骸はクロームへと戻った。

最後に優しい笑顔を見せて。

「∴ボス」

「クローム！大丈夫だった!？」

クロームが頷くとツナは安心してため息をもらした。

「∴骸様が、助けてくれたから」

クロームは嬉しそうに笑った。
クロームの骸への感謝の気持ちがつなにもわかった。

「しっかし、わかんないっすね、奴ら。こんな続けて十代目を襲うなんて」

「まあ、力試しだろ。ツナとお前ら守護者の実力を見に来たってとこか？」

リポーンはにやりと笑って言った。

「次は容赦ねえかも知んねえぞ」「そんなこと言っつなよりポーン！」
ツナはそんなことあってたまるかと心の中で叫んだ。

「全員無事だったんだからよかったではないか！」
了平は笑顔でツナに言った。

「そ、そうですね。お兄さん、ありがとうございました。クロームもありがとうございます」

ツナは了平とクロームに感謝した。

(…骸、ありがとう)

骸にもう一度、感謝の言葉を送った。

「えっ、ミノイー!?どうしたのその傷！」

「うつわ、派手に」

「やられちゃったね」

マリネと双子のアロッチ、スコッチはミノイの傷を見て言った。

ビんツに支えられてミノイはソファに座った。

「もしかして、綱吉くん？」

「いいえ。残念ながら、綱吉くんの力は見れませんでした」

ミノイは傷をさすりながら言った。

(あの…男…)

ミノイは拳を握りしめた。

許さない。次に会ったときは…

「…わたしが、あなたを苦しめてさしあげましょう」

ミノイは独り言のようにつぶやいた。

「見てくれよ、これ。オレのハンマーも壊されちゃった」

「全然だめじゃん！」

ビんツの壊されたハンマーを見てマリネは呆れていた。

「こんなんでもンゴレリングと綱吉くんを手に入れられるのかな」

ニコールは半ば諦めたように言った。

「どうだった？みんな」

「…ボス！」

全員がボスと呼ばれる男…ウライラを見た。

ミノイや双子たちの傷を見てウライラは言った。

「…やっぱり、今のままじゃダメかあ」

「すみませんでしたボス。次こそは…」

ミノイは申し訳なさそうにウライラに謝罪した。

「うん、大丈夫だよ！まだチャンスは沢山あるし」
ウライラは笑ってミノイに言った。

しかし、その刹那、ウライラの笑顔が変わった。

「…ねえ、みんな。」

全員がウライラを見た。

全員がウライラのその笑顔に凍りついた。

「もっと、強くなりたくない？」

とてつもない欲望を持った、恐ろしい笑顔だった。

標的 8 夢の中の恐怖（前書き）

ツナとある男しか出てきません。

ちよろつと、リボーンが出てきます。
ほんとにちよろつと。

標的 8 夢の中の恐怖

なぜ、幸せとは、平和とは、長く続かないのだろうか。

ツナはベッドに寝転がり、天井を見つめながら思った。

思い返せば、未来から帰ってきた直後、ツナはやつと平和が訪れると喜んだ。

もう争いはしなくてすむと心から安心していた。

それから数週間は平和な日々が続いた。

相変わらず勉強も運動も出来ないダメツナだったが、一緒に笑いあえる友達が側にいたから、信じる仲間がいたから平気だった。

しかし数日前、突然襲われた。

やたらと身長の高い怪しい奴らに。

活発女や双子、更には二重人格など、おかしい人物ばかりだった。

しかし、自分の危機を救ってくれたのは同年代の女の子。

背は小さいが頼りになり、パニックに陥っていたツナにはヒーローに見えた。

そして敵が襲ってくるたび、助けてくれたのは仲間だった。

今まで共に戦ってきた心強い仲間。

彼らがいるから、ツナは強くなる。

守りたいものがあるから、ツナは強くなる。

しかしいくら強くなっても、ツナは勝てなかった。

風邪には。

(…身体が重い)

一昨日、目を覚ますと身体がだるく頭痛もひどかったので熱をはかった。

すると39度も熱があった。

リポーン曰く、風邪がストレスによって悪化したらしい。

ボンゴレ次期後継者なのにみつともないと言われてしまった。

好きで風邪をひいたわけじゃない。

好きでストレスを溜めていたわけじゃない。

最近のおかしな出来事のせいだとツナは思った。

しかし喉をやられてしまって声が出ないのでなにも言えなかった。

(このまま死ぬのかなあ)

ツナは高熱で思考がはたらかない中、そう考えた。

今まで何度も死にかけているのに風邪ごときで死を考えると、相当風邪がひどいようだ。

咳は止まらない。

身体の節々は痛い。

だるい。

頭は痛い。

暑いのか寒いのかわからない。

視界はかすんでよく見えない。

最悪だった。

一向によくならない風邪をツナは怨んだ。

(学校休めてラッキーとか思ってたけど、みんなに会えないのは寂しいなあ)

ツナはそう思いながら目を閉じた。

しばらくすると風の音が聞こえた。
ツナの栗色の髪の毛が風に揺れる。

(…心地いい)

身体は軽く、あたたかい。

まるでなにかに包まれているかのような。
ツナはしばらくそれに身体を預けていた。

ゆっくりと目を開けると、そこは空だった。

真っ青な大空。

上では太陽が輝き、周りにはゆったりと流れる雲。
下では嵐が起こり、それに連動するように雨が降り、雷が鳴っている。

嵐の去ったところには霧があつた。

「…ここはどこだろう」

確か自分は部屋のベッドで寝ていた。
空に来た、だなんて記憶にない。

「…オレ、とうとう死んじゃったのかな？」
ツナは苦笑いしながらつぶやいた。

「あはは、死んでなんかいないよ」
いきなり声をかけられた。空の上で。

驚いて声が聞こえたほうを見ると、一人の男が笑いながらこちらを見ている。

茶色の服に真っ黒な髪の毛。

彼はなかなかの長身だった。

160cmにも達していないツナと見比べるとかなりの差だった。

見覚えのない人に声をかけられてツナは戸惑った。

そんなツナを見て男はまた笑い言った。

「ここは夢の中だよ。現実ではないんだ」

そうか、自分の夢なのかとツナは納得した。

そんなツナの指にはめられているリングに気づき男は聞いた。

「そのリング、綺麗だね。どこで売ってたの？」

ツナは男にボンゴリングのことを指摘されて困惑した。

ボンゴリングはただのリングではないのだ。

「えっと、貰い物っていうか、譲り受けた物っていうか……」

ツナは一生懸命遠回しな言葉を選び話した。

「へえ、近くで見えていい？」

ツナが頷くと男はツナに近づきリングを眺めた。

「ほんとに綺麗だ。うらやましい」

男はボンゴリングに触れようと手を伸ばした。

・バチンツッ！！

男は驚いて手を引いた。

ツナはなにが起きたのかわからなかった。

リングからなにかが発せられた。

オレンジ色の炎が男の手をはじいた。

つまり、拒んだのだ。

男を。

男はしばらく黙っていたが、口元を緩ませて手をさすりながら言った。

「あはは、痛かった！静電気かあ」

ツナは疑問に思った。

今のはほんとに静電気なのか、と。

なぜならリングがかすかに震えているからだ。

威嚇するように、ツナを守るように。

ツナは嫌な気を感じた。

この男の笑顔にはなにかがひっかかる。

この男にはなにかがある。

ツナの超直感がはたらいた。

・この男に近づいてはならないと。

一刻も早くこの男から離れなければならない。

「…あ、あのっ、オレはそろそろこれで」

ツナはそう言って立ち去ろうとした。

しかし、男がツナの手首を掴んだ。

ツナは驚いて男を見た。

先程と同じ笑顔。

しかし、嫌な気は消えなかった。

むしろ増えた。危険を感じた。

早く離れなければ。

「あいつ、離してください！」

ツナは男の手を振り切り切ろうとしたが、さらに強く手首を握られた。

「なんで逃げようとするの？」

男は笑いながらツナに問うた。

しかしツナは男から離れようと必死に手を振りほどこうとしていた。

「ねえ、なんで逃げようとするの？綱吉くん」

名前を呼ばれツナの動きがとまった。

いや、動けなかった。

まるで金縛りにでもなったかのように、身体が動かなかった。

「綱吉くん、なぜ僕から逃げようとするの？」

男は微笑みながらツナに言った。

ツナは必死に金縛りをとこうとしたが、身体がまったく動かない。

ツナの手首を握る男の手がさらに力を入れた。

「ーっつ…！！！」

手首に焼けるような痛みが走った。
ほんとに焼かれているかのように熱く、痛い。
その痛みは手首をぐるりと一周した。

すると男はもう片方の手首も掴み、力を入れた。
同じように、焼かれるような激痛がツナの手首を覆った。

「っいてえ!!」

ツナが叫ぶと、ボンゴレリングが光り男を突き飛ばした。

両手首に激痛が走る。

ズキズキと、骨までもを襲う激痛。

男がふらりと、またツナの手首を掴もうとした。

ツナはそれをかわして逃げた。

どこに行けばいいのかわからなかったが、とにかくあの男から離れたかった。

「綱吉くん、君は僕から離れられないよ。呪いをかけたからね」
逃げてでも逃げてでも男の声は響く。

「右手首の呪いが左手首にたどり着いたとき、君は死ぬんだよ。死んで、僕のための力となるのさ」

男は笑いながらツナに言った。

「またね、綱吉くん」

「…っわあああああ！」

ツナは叫びながら目を覚まし、起き上がった。

しかしすぐにめまいがツナを襲い、ベッドに倒れ込んだ。

とても、嫌な夢だった。

思い出すだけでも悪寒が走る。

ツナは冷や汗を拭った。

ズキッ

右手首に痛みが走る。

この痛みは…。

恐る恐る右手首を見ると、

手首を一周するように、鎖のような、

黒い痣が出来ていた。

呪い。

呪いをかけられた。

ツナは言葉をなくし、ただ震える右手首を見ていた。

標的9 呪いと焦燥（前書き）

登場人物：

ツナ リボン 男

…ごめんなさい。

次回から、頑張ろう。

標的9 呪いと焦燥

呪い。

呪いとは、人あるいは霊が、精神的・霊的な手段で、人などに、悪意をもって災厄・不幸をもたらす行為をいう。

種類は様々だが、不吉なことにはかわりない。

ツナは右手首と左手首を見つめて、ただ呆然としていた。

たった今、自分は呪いにかけられた。

見知らぬ男に。

しかも、よくわからないが死ぬらしい。

突然の出来事にツナは思考が停止していた。ただ、自分の両手首を見ていた。

「よう、ツナ。具合は良くなったか？」

リボーンが部屋にはいつてきた。

しかしツナは反応しない。ただ黙っていた。リボーンの声が聞こえ

ていないようだ。

そのツナの異変にリボーンが気付かないわけがない。

リボーンはベッドに飛び乗り、思い切りツナの耳元で名前を呼んだ。

「おい、ツナー!!」

ツナは、はっとしてリボーンを見た。

やはりリボーンが存在に気付いていなかったらしい。

ツナは震えていた。怯えていた。

なにかを恐れていた。

リボーンはツナの両手首のあざに気付いた。

黒い、鎖のような痣。

「おい、ツナ。これはなんだ？」

リボーンは痣を指差しツナに聞いたが、ツナは何も答ええない。ツナは声が出なかった。出せなかった。

ツナは口をぱくぱくさせてなにかを訴えた。

その顔には焦燥の色が伺えた。

「落ち着け、ツナ」

リボーンがツナをなだめたが、ツナは焦っていた。

リボーンに夢のことを言いたいのに出ない。

「落ち着けつつってんだろ」

リボーンはレオンを銃に変化させてツナに向けた。

「ひいつ!! やめるよ!」
ツナは慌てて自分を庇った。

「声、出たじゃねえか」
リボーンはにやりと笑った。

「…ほんとだ」
ツナは声が出たことに安心した。
しかし風邪のため喋るたびに喉は痛むし、声は出しにくい。

「なにがあつたんだ」
リボーンはツナに聞いた。
ツナは一瞬黙り、静かに夢のことを話した。
不思議と落ち着いて話すことができた。

話し終わるとリボーンは黙り込んでしまった。
ツナも黙ってもう一度自分の両手首を見た。

「…ねえ、リボーン」
ツナに話しかけられリボーンはツナの顔を見た。

「…オレ、死んじゃうのかな」
ツナは暗い面持ちでリボーンに聞いた。
リボーンはツナが死を怖がっていることに気付いた。

そんなツナにリボーンはいつものように言った。
「馬鹿、なに言ってるんだ」

リボーンの言葉に驚いてツナはリボーンの方を見た。

「おめえ、今まで何度も死にかかったが、結局死ななかつたじゃねえか」

リボーンは続けて言った。

「こんな呪いでおめえ、自分が死ぬと思ってんなら、大間違いだぞ」
ツナは静かにリボーンの話聞いていた。

「おめえは死なねえ。絶対な。家庭教師のオレが言うんだ。おめえは、死なねえんだ、ツナ」

リボーンは笑ってツナを見た。

ツナはひどく安心した。

リボーンの言葉を聞いて、何故か、信じてしまった。

言ってることは目茶苦茶だが、自分は死なないと思えた。

「…そうだよな」

ツナも笑ってリボーンを見た。

…ズキッ

「…っ！」

右手首が痛んだ。先程の激痛まではいかないが、痛かった。

右手首を見ると、痣が、増えていた。
いや、のびていた。

鎖が右腕を這うように、のびていた。

「の、の、のびたあああ！」

ツナは叫んで、再びパニックに陥った。

「うっせえぞ」

しかし、リボーンにまた銃を向けられ、強制的に黙らされた。

「厄介な呪いだな。」

リボーンはツナの右手首を見て言った。

「進行は遅いが、このままだといずれは左手首にたどり着くだろうな。」

「ど、どうすればいいんだろう」

ツナは困惑しながらリボーンに聞いた。

「そりゃあ、おめえ、呪いをかけた奴を捕まえて呪いを解くんだからさりとリボーンは言った。

「そ、そんな簡単に言うなよりボーン！相手がどこの誰だかもわからないのに！」

「わっかんねえぞ。こういうのは意外と近くにいることが多いんだ」リボーンはまたにやりと笑った。

(…ほんとかなあ。わけわかんないや。あああ、また頭が痛い……) ツナは頭をおさえてため息をついた。

確かに、具合は先程よりも悪くなっていた。

ただでさえ風邪がひどいのに呪いの痛みは地味に辛い。

ツナは泣きたくなった。

泣いてしまいそうだった。

「ま、今は寝とけ。とにかくさっさと風邪を治して、呪いを解く方法を考えるぞ」

リボーンに言われ、ツナは素直に従った。
風邪を治さなきゃ何もできない、そう思ったからだ。

時計を見ると、まだ昼前だ。

ツナはまたため息をついて布団にもぐった。

リボーンは部屋を出て、考えた。

(夢に出てきた男…もしかしたらな)
今までの出来事を考えれば、その可能性は高い。

(…結加に聞いてみるか)

結加が帰ってきたら聞こうと考え、階段を下りた。

(おめえは死なねえ。死ぬわけにはいかねえんだ、ツナ)
ツナの部屋のドアを見つめ、リボーンは心の中でツナに言った。

「確かに、小さくてかわいいかもね」

目の前のワインの入ったグラスを見つめ男は言った。

「あまりにも腕が細かったから、折っちゃうかと思ったよ」
自分の手を見ながら楽しそうに笑った。

「…綱吉くん」

空は淀み、差し込む光は弱々しかった。

「僕からは、決して逃げられないんだよ」

男は、…ウライラは不気味な笑みを浮かべて言った。

弱々しかった光が、途絶えた。

標的10 鎖の呪縛(前書き)

動き出しそう動き出しませんね…

ゆっくりと話は進みそうです。

でもそろそろみんなを

暴れさせてあげたいです。

標的10 鎖の呪縛

風邪で寝込んでから五日目。

徐々に体調は良くなりはじめたが、まだ熱はあり、だるい。

することもなくツナは、右手首を眺めていた。

鎖のような痣。

ツナは呪いをかけられた。

呪いをかけられたのは二日前。

どうやら放っておくと死ぬらしい。

しかし呪いの解き方がわからない。

「…はあー」

ツナはため息をして寝返りをうった。

痣は…鎖は右腕をくるりと巻き付くようにのびている。

時々、地味に痛む。

激痛を伴うこともあり、寝ているときでも痛みで起きることがあった。

「はやくあの男の人を探さない」と

しかし、見たことのない人を探すのは無理だ。

見つかる可能性は低い。

どうしようかと考えていると、階段をのぼる音がした。
しかも複数。

「大丈夫ですか、十代目！」
心配そうな顔で獄寺は部屋に入ってきた。

「よっ、ツナ！少しは良くなったか？」
獄寺に続いて山本がいつもの調子で言った。
肩にはリボンが乗っていた。

「二人とも、来てくれたんだ…」
一人で部屋で寝ているのは寂しかったのでツナは嬉しかった。

「すみません、十代目。一昨日と昨日来られなくて…」
獄寺は申し訳なさそうに謝った。

「い、いいよ獄寺くん！そんなこと！」
（風邪で毎日お見舞いっていうのもなんかおかしいし…）
ひそかにツナは心の中でつつこんだ。

「ツナ！プリン買って来たから食おうぜ！」
山本がコンビニの袋を持ち上げ言った。

「わ、ありがとう！」
微熱で少しだるかったが食欲はあったので食べることにした。

すると、獄寺がツナに話しかけた。
「あれ、十代目。その手首の鎖…なんですか？」
「…あ！…！」

ツナは二人が来てくれたことが嬉しかったので、すっかり呪いのことを忘れていた。

「もしかして、入れ墨か？やるな、ツナ！」

「馬鹿！十代目が入れ墨なんてするわけねえだろ！」

山本が笑いながら言うつと獄寺はツナのかわりに否定した。

「えっと…これは…」

「呪いだぞ。」

二人に話していいのかわからず戸惑っていると、リボーンがコーヒを飲みながら言った。

「っリボーン！！」

「の、呪いって…本当ですか十代目！」

「入れ墨じゃないのな」

焦るツナ、驚く獄寺、何故か納得する山本。

(いいのかよりボーン！二人にこのこと話して…！)

「黙ってたっついていずればバレるだろうからな。今話しとけ」

ツナの心を読んだかのようにリボーンは言った。

「話してください、十代目！」

「それ、ほんとに呪いなのか？」

二人に聞かれツナはこくりと頷いた。

「その…夢の中で、知らない男の人に会ったんだ。その人に手首を

つかまれて、一応逃げただけど…目が覚めたら、こんなものになつてて…」

ツナの話二人は黙って聞いていた。

「右手首からのびる首の痣が左手首にたどり着くと、死んじゃうみたい」

「死ぬって…本当ですか!？」

獄寺は驚いてツナに確認した。

「ほんとに痣つてのびてんのか？」

山本がそう言うとなツナは服の袖をまくり見せた。

「少しずつだけど…確かに、のびてるんだ」

今はまだ右腕だけだが、いずれは全身に痣がのびる。

「どうすれば…呪いは解けるんですか」

「呪いをかけた本人を見つけて解かせるしかないみたい」

ツナの言葉に獄寺は絶望的な表情をした。

それとは反対に山本は楽観的な表情で言った。

「よっしゃ!じゃあそいつを探せばいいんだな？」

「どうやって見知らぬ奴をさがすんだよ馬鹿!」

余裕な山本に獄寺は怒って言った。

「焦ったって仕方ないだろ。まだ時間はあるんだし、大丈夫だろ!」

「山本の言うとおりだぞ」

リボーンは山本の肩に飛び乗り言った。

「…なんか」
ツナがぼつりとつぶやいた。

「…相手は、そう遠くにいないと思う」
なぜだかそう思った。遠くではなく、近くにいると思った。

(ツナの超直感だな)
リボーンはツナの超直感がはたらいたとわかった。

「ツナがそう言うのなら、相手は近くにいろだろうな」
リボーンはそう言うと、先日結加に聞いたことを思い出した。

(たしかあいつ、こんなたちの悪い呪いをかけるのは特殊な奴だと
言っていたな…。)

二日前、結加にツナの呪いのことを話すと、そんな呪いは聞いたこと
がないと言った。

結加は呪術に関しても詳しくかった。

すると、部屋のドアが開いて、結加がはいつてきた。

「綱吉くん、大丈夫？」

「結加ちゃん…昨日よりは大丈夫だよ」

「そう、ならよかった」

結加はツナに微笑んだ。

「おい結加、なにかわかったか？」
リボーンは結加に呪いのことについて聞いた。

「はい、色々調べたんですが…。その呪いは“鎖の呪縛”と言って、かなり危険性の高い呪いです」
結加は呪いについて話しはじめた。

鎖の呪縛とは、その名のとおり、鎖のような痣があらわれ、相手をどんどん弱らせるらしい。
鎖の呪縛には始発点と終着点があり、日が経つごとに鎖はのび、全身を這うように繋がっていく。

最初はあまり痛みはないが、鎖の長さがのびるほど痛みは増し、相手を苦しめる。
鎖が繋がったとき、まるで締め付けられるかのような感覚に襲われ、死んでしまう。

呪いを解く方法は、呪いをかけた本人にしかわからず、他者が解くことはできない。

「本人にしかわからない呪いの解き方が…」
「本人が忘れたらやばいってことだよな」
山本はさらりと重要なことを言った。

「や、やめてよそんな不吉なこと言つの！」
ツナはもしあの男が解き方を忘れていたらどうしようかと焦ってしまっただけだ。

「あはは、わりいつ！」

山本は笑ってツナに謝った。

(笑い事じゃないんですけど…)

ツナは一気に絶望的な気持ちになってしまった。

あの男が呪いの解き方を忘れていないようにと願っただけだった。

「大丈夫だよ、綱吉くん」

結加がツナを励ますように言った。

「そうですねよ十代目！オレらが呪いをかけた奴をつかまえますよ！」

「だな！そんなすげえ呪いをかけた奴が解き方を忘れるわけねえよ

！」

獄寺と山本はツナに言った。

「みんな…ありがとう」

ツナは嬉しかった。

みんなが自分のために協力してくれる。

心から感謝した。

「さ、プリン食べましょう十代目！」

獄寺が袋からプリンとスプーンを取り出してツナに渡した。

「あ、結加も食べるか？」

「いいんですか？ありがとうございます！」

山本が結加にもプリンを渡した。

どっちら沢山買ってきたらしい。

ツナは、コンビニのプリンが一段とおいしく感じた。

「意外と時間かかるなあ、みんなのレベルアップ」
ウライラはつまらなさそうにソファーに寝転び言った。

「はやく僕も本物の綱吉くんたちに会いたいのに」
するとウライラは、ひらめいたように立ち上がった。

「みんながないなら、僕ひとりで会いに行けばいいのか」
ウライラは満面の笑みでひとりしゃべっていた。

「待っててね、綱吉くん」

夕方の空に不吉な声が響いた。

標的11 呪いの弱点(前書き)

短いです。

次回くらいから、

みんなは暴れてくれるでしょう。

それにしても短い…

標的11 呪いの弱点

暗い暗い闇の中、ひとつの建物が寂しく建っている。

しかしそれはどこか不気味で、近寄りがたい雰囲気醸し出していた。

「ウライラ様」

ウライラが部下に気付くと笑顔で対応した。

「ん、どうしたの？」

「ミノイ様達の強化オペレーションはまだ多くの時間を要するかと……」

部下は申し訳なさそうに報告した。

「ふうん、そっかあ」

ウライラはしばらく考えるようなしぐさをして、部下に言った。

「僕、暇なのは嫌いだから、また綱吉くんに会いに行こうと思うんだあ」

部下は黙ってウライラの指示を待つ。

「うん、戦闘能力のある部下たちを連れていこうかな！」

「では、ただちに厳選して参ります」

「よろしくね」

部下はお辞儀をして部屋をでていった。

「結構時間かかるもんだなあ」

ウライラはため息をついて窓の外を見た。
しかしその目はどこか楽しげだった。

「まあその分強くなるだろうし、気長に待とうかな」
紅茶を飲み、ウライラは手元の資料を見はじめた。

目覚めもよく、身体も軽い。

ツナは大きく伸びをして、ひとつあくびをした。

風邪もすっかりよくなり、体調も回復した。

「と言っても、学校は休みなんだけどな…」

今日は土曜日なので、学校は休みだった。

「なにしようかなあ」

ツナは着替えてごろりとベッドに寝転がった。

ズキッ

「いたたっ」

ツナは痛んだ手首の痣を見た。

手首の痣：呪いはだんだん長さをのばしている。

(せめてこの地味な痛みには耐えればなあ…)
激痛はごく稀なので仕方ないが、地味な痛みはしょっちゅうだ。
そんなものにいちいち構ってられない。

「どうすれば痛みには耐えられるんだろう」

「オレが指導してやる」

部屋のドアが開き、リボーンが立っていた。

「指導してやるって…痛みには耐えられるようになるのかよりボーン！」
ツナはリボーンが痛みを抑える方法を知っているのかと疑った。

「ああ、おめえが痛みには耐えられるような身体をつくれればいいんだ」
「…は？」

意味がわからない。まったく意味がわからない。
ツナはどうしてそうなるのかとリボーンを疑った。

リボーンの話によるとこういうことだった。

鎖の呪縛は、呪いをかけられた人の体力・精神を食べて進行を早める。
当然体力・精神を食べられた人は衰弱するので、すぐに死んでしま
う。

鎖の呪縛は莫大な力を要する。

しかし、初期段階ではこの呪いは呪いをかけた人の力で維持される。つまり、初期段階で呪いに耐えられるようになれば、呪いをかけた人のダメージが大きくなる。

そうすれば、進行を遅くすることができるし、痛みもそれなりに抑えることができる。

「そのためには、丈夫な身体にするために鍛えなきゃなんねえんだ」
ツナは納得した。

それと同時に、自分はなんて恐ろしい呪いにかけられたんだろうと思った。

「んじゃ、早速修行すつぞ」
「え、今から!？」

(病み上がりの人になに言っちゃってんの!?)
ツナは構わず修行をしようとするリボーンに呆れてしまった。

「お前、病み上がりだからって修行しねえとか言っくんじゃねえぞ」
心を見透かしたようにリボーンはにやりと笑った。

(心を読まれたー!!!!!!)
ツナは苦笑いをするしかなかった。

「お前がさつさと死んでいって言うなら、修行はしねえがな」
「しっ、死にたくない!!!死にたくないよ!!!」

部屋を出ていこうとするリボーンをツナは必死で引き止めた。

「んじゃ、やるぞ。一応結加や獄寺たちにも修行するように声をかけといたからな」

「え、みんなも!？」

「最近平和続きでなまってるだろうからな。いい機会だろ
そう言うとりボーンは部屋をでていった。

(みんなも修行するんだ…頑張ろうとしてくれてるんだ…)

ツナは心強くなった。

「…がんばろう」

独り言のようにツナは言った。

ツナと守護者たちの修行がはじまった。

標的12 修行開始(前書き)

短いですねー

まだ暴れてませんねー

あとがきでは、ツナ、獄寺、山本がわたしののかわりになにかを説明してくれるようです。

…押し付けただk(ry

標的12 修行開始

すべてのものに弱点があるように、呪いにも弱点があったらしい。

よくわからないが、自分が強くなればいいとのこと。

ただしそれは呪いの進行を遅らせるものであって、呪いが解けるわけじゃないらしい。

でも呪いを妨げられるのであれば、ツナはそれでもいいと思った。

呪いの進行を遅らせる方法、それは

己の身体を、鍛え上げることだった。

「こ、こじこじー！！!?」

ツナの叫び声が響く。

「修行つつつたら過酷な場所のがテンション上がるだろ」

「テンションの問題じゃないだろ!?!」

リボーンが目茶苦茶な理由にツナは思い切りつつこんだ。修行はテンションの問題なのか。

果してテンションは関係があるのか。

ツナたちがいるのは周りを森に囲まれた、大自然のど真ん中、崖の目の前に立っていた。

さかのぼること一時間半前…

ツナたちが家を出ると、外では獄寺と山本が待っていた。

すると突然、全員一台の車に押し込められ、拉致られた。そして連れてこられたのがこの森だった。

(なんか前にもこういうときたような…!!)

ここは以前ボンゴレリングをめぐってヴァリアと戦うために修行した森に似ていた。

「なっ、テンション上がるだろ？」

「上がるわけないだろ！」

ツナはリボーンの言葉を否定した。

「オレはこういうの楽しいから好きだぜ？」

「お前は黙ってる野球馬鹿！」山本が楽しそうに言った。
獄寺は山本はどこまで馬鹿なんだと思っていた。

「で、なにすんだ小僧？」

山本がリボーンに問いかけた。

「ああ、お前らには鬼ごっこをしてもらおう」

「…へ？」

「…は？」

「…え？」

上がツナ、真ん中が獄寺、下が山本の声。

「鬼ごっこってなんだよそれ！ただの遊びじゃないか！」

「そうですよりボーンさん！なんで修行なのに鬼ごっこなんですか
！」

ツナと獄寺はリボーンに詰め寄ったが、山本は

「鬼ごっこか、楽しそうだな！」

と普段通りだった。

「ただの鬼ごっこじゃねえぞ」

リボーンはなにかを取り出した。

「…それ、死ぬ気弾？」

「ちげえぞツナ。これは逃走弾と言って、敵を欺くために使われて

んだ」

そう言うとりボーンはレオンを銃に変化させ、弾を発砲した。

・パアンッ

光が弾けると、なにかが現れた。

それはリボーンの元へとんできた。

「これは…鳥ですか？」

獄寺は目の前にいる、カラスほどの大きさの鳥を指差した。

「ただの鳥じゃねえ。特殊な能力を持った動物だ」

鳥は翼をばさばさと羽ばたかせた。

「お前らにはこいつを捕まえてもらう。制限時間は一時間。範囲は半径3km以内だ。目印をつけておいたから、そこから少しでも出れば失格だ」

(だからリボーンは時計を持って行けって言ったんだ)

ツナは左腕の腕時計を見て思った。

「あいつの速さはハンパねえ。修行だからもちろん武器は使っても構わねえぞ」

「じゃあ、瓜たちも使っていていいってことですか！」
獄寺の言葉にリボーンは頷いた。

「言つとくが、そいつはなにをされても死なねえ。だから安心して煮るなり焼くなりなんでもしろ」

リボーンはにやりと笑って鳥の頭をなでた。

(ひどい、ひどすぎる…！)

ツナは鳥のことを哀れに思った。

「んじゃ、はじめぞ」

リボーンが鳥を空に放った。

ツナはイクスグローブを手にはめ、炎を額にともした。

獄寺はアニマルリングから瓜を出した。

山本は時雨金時をかまえた。

13:30PM

鬼ごっこスタート

標的12 修行開始（後書き）

ツナ「えっと、なんか知らない人に頼まれたので、この話について少し説明します」

獄寺「なんでオレらが話さなきゃなんねえんだ」

山本「まあまあ、いいじゃねえか」

ツナ「この話は、白蘭との戦いを終え、未来から帰ってきたあとの話です。漫画の方で続いているシモンリングとか、そういうものはまったく出てきません」

獄寺「で、匣兵器は未来には置いてこないで、こっちに持って来たってわけだ」

山本「でもなんで匣兵器は持ってきたのにアニマルリングがあるんだろっな、あはは」

ツナ「や、山本！それは言っちゃだめだつて！」

山本「あ、わりっ！あはは」

獄寺「てめえ、十代目の手をわずらわせんじゃねえよ！」

ツナ「えーっと…ではまた次回！」

標的13 第一関門“感謝”(前書き)

なんだかややこしくなりました！

多分これからは
修行は基本

ツナ 獄寺 山本

の三人にちよくちよく
ほかの守護者が混ざります。

一回くらいはツナと修行させないと！

標的13 第一関門“感謝”

飛び去る鳥の帯びる光

その煌煌としたさまは

悪を浄化しあまねく希望

それを決して潰してはならない

それは人の及ばぬ世界の使い

ただ 優しく美しく光る者には

同じ景色が見えるであろう

ツナ達は一斉に鳥の飛び去った方向へ走り出した。

しかし鳥の飛ぶスピードは速く、人の足では追いつくことができない。

「速えのなー、あの鳥」

野球部の山本も鳥のスピードには敵わなかった。

「どうしますか、十代目」

獄寺に聞かれ、ツナはしばし考えたあと、二人に告げた。

「オレが上から探すから、山本たちは下から頼む」

「了解です」

「わかったぜ、ツナ！」

そしてツナはグローブに炎をともして空へ飛んでいった。

「そういえば獄寺、お前も飛べるんじゃないのか？ 匣あるだろ？」

「十代目がわざわざ任務を与えてくださったんだ！ オレは下から行く！！」

獄寺は勝手にツナからの任務だと勘違いしていた。

「お前こそ少しは飛べるだろ！」

「いや、オレもツナに頼まれたからなっ」

山本は笑いながら答えた。

「…いないか」

上から森を見渡していたが、鳥の姿はどこにもない。
あれからスピードを上げて追いかけたが、あまりにも木が多いので
見失ってしまった。

再び飛び出そうとすると、数メートル先になにかを感じた。

(これは…仕切り?)

地上に下りてみると、木から木へとピアノ線のようなものが張り巡
らされてあった。

「よく見破れましたね。さすがボンゴレ次期後継者」

振り向くと黒服の男が立っていた。

敵かと思いかまえたが、男からは悪い気は感じられない。

「安心してください。私はボンゴレの者。リボーンさんに頼まれて
こちらへやって来ました」

「リボーンが?」

「はい、どうやらとても大切なことだそうで。九代目へ相談なさっ
たんです」

男の言葉にツナは納得した。

(だから家を出た瞬間、車に乗せられたのか…)

「綱吉様。あなた方はこの修行を単なる鬼ごっこだと解釈してませ

んか？」

「…どういうことだ」男の意味深な言葉にツナは疑問を持った。

「忍耐とは、苦しさ、辛さ、悲しさなどを耐え忍ぶこと。自分を上手くコントロールしなければ忍耐とはならないのです。」

「何が言いたい」

「つまり、うやむやに行動しては忍耐など不可能。周りのこと考えなければ意味がないのです」

すると男はツナに一枚の紙を渡した。

「それを読み、よく考えてください。あなたなら…超直感を持つあなたなら分かるだろうと、九代目トリポーンさんがおっしゃってました」

「…！九代目トリポーンが…」

「はい。私も、あなたを信じています。ボンゴレ次期後継者、沢田綱吉様」

男はツナに向けて丁寧にお辞儀をした。

「…名前は」ツナは男の名を聞いた。

「はい、ロンジと言います」

「…そうか、…ロンジ、ありがとう」
そう言うとツナは飛び出して行った。

「ふふ、あの炎、あの目、確かに似ていますな、ボンゴレ一世に」
男は嬉しそうに笑って言った。

「中学生と聞いてどんな子かと思えば…なるほど、やっとわかった」
男はツナの飛んでいった方向を見てつぶやいた。

「あの覚悟の炎こそ、ボンゴレボスにふさわしい。あなたこそ、ボンゴレを継ぐべき者ですよ、沢田綱吉様」

ツナは男に渡された紙を見た。

飛び去る鳥の帯びる光

その煌煌としたさまは

悪を浄化しあまねく希望

それを決して潰してはならない

それは人の及ばぬ世界の使い

ただ 優しく美しく光る者には

同じ景色が見えるであろう

何かの詩のようなものが書かれていた。
先程の男の言葉といい、この詩といい、まったく意味がわからない。

(ここに書かれている鳥は、あの逃走弾の鳥か…?)

-ドオオオンッ

とてつもなく大きい爆発音がした。
すると、木々の間から煙が立ち込めていた。

(まさかあそこに…!?)

ツナは煙の方向へ飛んでいった。

「くそっ、うるちよろしやがって」

獄寺はダイナマイトをかまえて鳥を睨んだ。
鳥は黙って飛んでいた。

「スピードすげえな、あいつ。まったく捕まらねえじゃねえか」
山本が時雨金時を持ちながら感心したように言った。

「感心してる場合かよ！さつさとあいつを捕まえるぞ！」

獄寺はリングに炎をともし、匣兵器、S I S T E M A C ・ A ・ I ・
(スイステーマ シー・エー・アイ)を出した。

「さつさと捕まりやがれ！フレイムアロー！！」
しかし鳥は素早くフレイムアローを避けた。
山本は違和感を感じた。

「なあ、あいつおかしくないか？」

「なにがだよっ」
獄寺はイライラした口調で聞いた。

「だってさ、オレらがいくら攻撃したって、あいつ反撃しねえんだ
ぜ？」

獄寺もそれに気付き、疑問を感じた。
確かに、鳥は獄寺たちの攻撃は避けても、反撃はまったくしてこ
ない。

「なにを考えてんだ、あいつ」
獄寺は攻撃が無駄だと感じ始めた。

「ここにいたのか」

突然声がしたので後ろを見ると、ツナが上から飛び降りてきた。

「十代目!!」

「なあ、ツナ。あいつおかしいんだよ」

山本はため息をしてツナに事情を話した。

「反撃してこない?なぜだ?」

「それが全くわからないんだよな。攻撃を避けてずっとこっちを見てんだよ」

ツナの問いに山本もわからないといった表情で答えた。

(攻撃されても反撃しない?まさかロンジの言っていたこととこの詩が関係あるのか?)

ツナが考えている間に痺れを切らした獄寺はさらに攻撃をしかけた。

「くそっ、らちがあかねえ!十代目、今すぐあいつを仕留めます!

「！」

獄寺は再び鳥に向けてフレイムアローを放った。

「ギヤキヤツ」

フレイムアローが身体を掠めて鳥は痛そうな声をあげた。
ツナはそれを見て心が痛くなった。

(なぜだ…あいつを攻撃しては…傷つけてはいけない気がする…)

ツナは鳥を攻撃することに躊躇した。

しかし、それに気付かない獄寺と山本はツナに声をかけた。

「十代目！今のうちにトドメを！」

「そうだぜツナ！早くしねえとあいつが逃げちまうぜ！」

ツナは不安を抱えつつも鳥にトドメをさそうとした。

「ズキンッ！！！！」

しかし、突然ツナを呪いの激痛が襲った。

「！！！！？」

あまりの激痛にツナは地面へ倒れた。
今までにないほどの痛みだった。

「十代目っ！」

「ツナ！大丈夫か！？」

獄寺と山本がツナに駆け寄った。

ひどい激痛なのだろう、ツナは汗を大量にかいていた。

「…っ、い…てえ…っ」

ツナが激痛に苦しんでいると、鳥がツナの近くへとやって来た。

「…!？」

獄寺と山本は驚いて鳥を見た。

鳥はツナの目の前へ行き、ツナの顔を覗き込んだ。

「…お前、…っ心配して…くれているのか…?」

鳥は心配そうにツナの顔と呪いの痣を見ている。

「キュルルル」と鳴いてツナの汗をくちばしで拭った。

「っお前も…怪我してるのに…ありがとな…」

ツナは鳥の頭をそっとなでた。

鳥は気持ち良さそうに目をつむる。

「そこまでだ」

「「「!?!?!?」「」「」

驚いた三人の前に、リボーンと、先程ツナが出会ったロンジが立っていた。

「リボーンさん!そこまでってまさか…」

「そうだ。たった今、ツナがそいつを捕まえた。だからお前らの勝ちだ」

リボーンとロンジはツナに近寄った。

「ツナ、お前が気付いたことを言ってみろ」

ツナは一瞬黙って、静かに、痛みを耐えながら話しはじめた。

「こいつが…反撃してこなかったのは…オレ達に対して全く敵意がなくて…、オレ達を…傷つけたくなかった…から」

「なっ!まさか!」

獄寺は驚いて声を上げた。

「さっきロンジが言ってたんだ。“うやむやに行動しては忍耐など

不可能。周りのことも考えなければ意味がない”って…。」

ツナは、鳥に攻撃しても無駄ということ、反撃してこない鳥の気持ちに気付いた。

鳥は、待っていた。

自分にはまったく攻撃する気はないと気付いてくれるのを。

「そして…」

ツナは一枚の紙をだした。

「？なんだそれ」

山本は紙を覗き込んで聞いた。

「さっき…ロンジからもらったんだ。この詩のことも…、関係してんだろ…リボン」

リボンは黙ってうなずいた。

飛び去る鳥の帯びる光

その煌煌としたさまは

悪を浄化しあまねく希望

それを決して潰してはならない

それは人の及ばぬ世界の使い

ただ 優しく美しく光る者には

同じ景色が見えるであろう

「この鳥っていつのは…いつのことだ。」

“悪を浄化しあまねく希望”というのは、鳥には悪意はないという
こと。

悪意のない者を潰してはならない。

悪意のない者こそが犠牲となつてはいけない。

だからそれに気付いた者には…ツナには、鳥は近づいて行ったとい
うことだった。

「正解だぞ」

リボーンはにやりと笑った。

「痛みに耐えるには忍耐が必要だ。忍耐とは苦しさ、辛さ、悲しさ
などを耐え忍ぶこと。それに必要なのは体力と精神だが、特に必要
となるのが精神、つまり感情なんだ」

「感情：ですか？」
獄寺はわけがわからず聞き返した。

「この呪いに耐えるのに必要な感情は感謝、冷静、幸福、リラックス、勇気、安心、愛しさの七つ。そのうちの感謝を今回は試したんだ」

「綱吉様は、その鳥に感謝したでしょう。なので今回は合格、という事なのです」

ロンジは優しく微笑んで言った。

「じゃあ、まったく鬼ごっこなんて関係なかったのな！あはは」
山本はすっきりしたように笑った。

「ちなみに、呪いを耐えるにあたって、邪魔な感情もあるんだ」

「邪魔な…感…情？」
ツナは苦しそうにリボーンに聞いた。

「そうだぞ。欲望、執念、無念、空虚、軽蔑、シャードンフロイデ、嫉妬の七つだ。」

「シャードンフロイデ？なんだそれ？」
山本がリボーンに聞いた。

「簡単に言えば人の不幸を喜ぶ事だな。しかし、この七つはツナはあまり感じねえ。人間だから多少はあるだろうがな。ツナの場合、

今までダメダメが当たり前だったからそんな感情もわかんねえんだ
ろ」

リボーンは笑いながらツナを見て言った。

「…じゃあ、その七つの邪魔な感情は放っておいても…っつ！…！」

再び激痛が襲い、ツナが痛みに顔を歪める。

それをまた心配そうに鳥が見つめる。

「大丈夫だ…お前…が、そんなに…心配することじゃ…ない」

汗をうかべながらツナは鳥に優しく言った。

鳥の目にツナのオレンジ色の目がつつる。その目は優しく、あたたかい目だった。

「大丈夫か、ツナ」

「…これが、大丈夫に…見え…るか…っ…っつ……！」

先程よりも痛みは増し、ツナはあまりの激痛に意識を手放した。
そして額の炎も消えた。

「っ十代目…！」

「しっかりしろ、ツナ！」

二人が呼びかけるが、ツナはびくりとも動かない。

「痣がまたのびてやがるな……。かなり強力な呪いってわけか」

リポーンは気を失ったツナを見た。

冷や汗を大量にかき、時々苦しそうに顔がひきつる。
気を失っても、ツナは痛みと戦っていた。

「ロンジ、すぐに車に連れてけ。ツナを家で休ませるぞ」

「かしこまりました」

ロンジはツナを抱えて車へ向かった。
それを追って獄寺たちも歩いた。

ロンジの肩には、鳥が心配そうにツナの顔を覗き込んでいる。

（なんとという方だ。逃走弾の鳥を実態化させてしまおうとは）

ロンジは驚いていた。

逃走弾に使われる動物などは、役目を終えると姿を消す。
しかしこの鳥は役目が終わったにも関わらず消えない。

それは、さつきツナが鳥の頭をなでたとき、かすかにツナの死ぬ気
の炎が鳥へと流れ込んだからだ。

ツナの炎の属性は調和。

今までは相手を石化していたが、今回は鳥を実態化させた。

(この方は…今までにない力を持っている)

ロンジはツナの顔を見ながら思った。

はじめてツナに出会った時。

ロンジはツナの目に釘付けになった。

まるで大空のようだった。

- 全てに染まりつつ全てを飲み込み包容する大空。

(確かに、この方は大空にふさわしい)

ロンジは優しく微笑んだ。

第一関門 “感謝” クリア

標的13 第一関門“感謝”（後書き）

ツナ「そういえばロンジさん。ボンゴレの本部で働いてたんですか？」

ロンジ「ええ。書類関係にも携わってましたが、主に九代目の身の回りのお世話を」

ツナ「えっ！す、すごい人だったんですか！！」

ロンジ「いえいえ。それほどすごくは…。いずれ綱吉様がボスになられたときは、私が綱吉様のお世話をさせていただくかも知れませんがね」

ツナ「えっ、オレボスになるなんて…」

リボーン「まだ言ってるのかダメツナが」

ツナ「ひっ！リボーン！！」

リボーン「ロンジはいい奴だぞ。しかもツナのことを相当気に入ったらしい」

ツナ「え…？」

ロンジ「私は現在結婚しておらず…妻もいなければ子供もない。なので、どうしても綱吉様が自分の子供のように思えて…」

ツナ「あ…ははは」

(オレってそんな幼く見えるかな…)

リボン「よかったな、ツナ。パパが出来て」

ツナ「パパとか言うな！第一父さん二人もいないよ！！」

ロンジ「では、第二のパパということだ…」

ツナ「うわあああああ！！いやだあああああ！！」

ロンジはかわいい人です(笑)

標的14 ライオンと鳥(前書き)

うわわわわ、

結加ちゃんができません。

次回から…無理矢理出します(笑)

標的14 ライオンと鳥

まったく、なんていう痛みだ

修行の途中で気を失っちゃったじゃないか

今までで一番痛いし、死ぬかと思ったよ

ああ、早く起きなきゃ

いろいろ聞きたいこともあるんだ

早く…早く起きなきゃ…

「十代目、どうですか？」

獄寺が控えめにツナの部屋のドアを開けた。

「ああ、まだ目を覚ましちゃいねえぞ」

「そ、そうですね…」

しょんぼりとうなだれた獄寺にリボーンは座することを促した。獄寺は言われるままに腰をおろした。

「ったく、最近たるんでんだコイツは。簡単にパタパタと倒れやがって」

リボーンは呆れたようにツナの顔を見て言った。

「十代目：すげえ痛そうでしたよね」

「まあな。寝てる間にも激痛があるらしく、起きちまうこともあるらしいがな」

獄寺はそれを聞いてますますうなだれた。

「たまに、痛くて泣いてるぜ」

リボーンはにやりと笑った。

少なくともツナが泣くことをおもしろがっているらしい。

「十代目がそんなお辛いのに…オレはなにもできねえなんて！」
獄寺は悔しそくに拳を握りながら言った。

「痛い痛いだろうが…ツナは、これでも安心してんだ」

リボーンの意味をとりえることができず、獄寺は黙っていた。

「前、こいつ言ってたんだ」

“ねえ、リボン。この呪いはオレがかかってよかったって思わない？…だってさ、こんな辛い思い、みんなにさせたくないじゃないか。痛いけど…オレは、安心してゐるんだ…”

記憶の中のツナが笑う。

すべてを包み込む大空のように。

「まったく、あまちゃんにもほどがある」

「十代目がそんなことを…っ」

獄寺はうつむいて黙ってしまった。

・ガチャッ

部屋のドアが開き、山本がはいつてきた。

「あ、来てたのか！」

「あたりめえだ、野球馬鹿…」

そう言うと獄寺は再びうつむいた。

「チャオッス、山本」

「よっ、小僧！ツナ目え覚ましたか？」

「いや。相変わらずダメダメだからな」

山本はツナに目を配ると、獄寺の隣に座った。

「…隣に座んじゃねえよ」

「あはは、いいじゃねえか！」

「よくねえ！オレは今落ち込んでんだよ！！」

獄寺はイライラした口調で山本に叫んだ。

山本はいつものように笑って流した。

「…んん……」

もそりとツナが動き、目を開けた。

「お、ツナ起きたか」

「じゅ、十代目ええ！！」

「おはよっ、ツナ！」

三人はツナに声をかけたが、ツナはただぼーっとして三人を見ていた。

そして突然何かに気付いたようにがばっと起き上がった。

「ああっ！オレまた…！！」

「暴れんな。安静にしてろ」

リボーンに鎮められ、ツナはおとなしく上半身を起こした。

「大丈夫ですか、十代目！！」

「うん、今は痛くないから大丈夫だよ」

笑顔のツナを見て安心した獄寺は心底嬉しそうだった。

「ツナ。このまま激痛で気を失ってたらきりがねえ。明日から修行再開させるぞ」

「え！学校は…！？」

明日から、と言えば学校とかぶる。

まさか放課後じゃなかるうかとツナはリボーンに聞いた。

「学校自体を休みにしちまえばいいだろう」
リボーンは怪しく笑った。

(何かする気だ…！！！！)

脅しか、脅しだろうか。こいつなら校長をも脅し兼ねないとツナは思った。

「って、そうだりボーン！聞きたいことがある…」
ツナがりボーンに話しかけようとした時、突然目の前をなにかが通り過ぎた。

敵か、と警戒したが目の前に降り立った生き物を見てすぐに警戒はとけた。

「キュルルルッ」

「え、昨日の鳥……！？」

ツナは自分に擦り寄ってくる鳥を見て言った。

そう、この鳥は昨日の修行で使われた逃走弾の鳥だ。

「こらっ、待ちなさい！」

階段を静かに駆け上がり、ツナの部屋に入って来たのは、やはり修行の時の男、ロンジだった。

「わっ、ロンジさん！？」

「あ、綱吉様、お目覚めになりましたか！」

ロンジは満面の笑みでツナを見た。

そして身なりを整えて鳥に向けて言った。

「君と言う鳥は！ちゃんと肩にとまっていなさいと言ったでしょう

「リードをつけますよ!」

すると鳥はツナの後ろに隠れるように逃げた。
ツナはまったく状況がつかめていない。

「ちょ、この鳥って…昨日の…鳥だよな?」

「ええ、そうなんです…」

ロンジが申し訳なさそうにうなずいた。

「普通は逃走弾は役目を終えると自然と消えるんだが、こいつはお前の死ぬ気の炎で実態化しちまったんだ」

「…じ、実態…化…?」

何がどうなっているのかわからず、ツナは呆気にとられた顔で聞き返した。

「本来こいつらは、空気のようなものを一時的に実態化させたもんなんだ。でもこいつは、お前の炎の力で常に実態化、本物になっちまったってことだ」

「うっそおおおおお!!」

ツナは耳を疑った。聞き間違いだろうと。

(死ぬ気の炎で実態化? そんな力オレにはない!!)

事実は受け入れ難かったが、現に、この鳥は消えずに生きている。本物の命が、宿ってしまったのだ。

「おめえ、自分の力見くびんなよ」
リボーンはため息をついて言った。

今までの経験でツナは最初と比べて格段に力は強くなった。死ぬ気の炎も純度が上がったのでさらに強さは倍増した。

「ツナ。おめえが責任とってこいつの面倒を見る」

「えっ、この鳥を！！？」

ツナは自分の隣にいる鳥を指差して言った。

「そいつ、ツナに懐いてんだから問題ねえだろ。ママンだって許してくれるだろうし、あとはおめえ次第だ」

ツナは隣でおとなしく座っている鳥を見た。

オレンジ色の真っ直ぐで純粋な目。

金色がかった羽をひそかに震わせて、鳥はツナを見つめた。

「…わかったよ。オレの炎が原因なんだろう？オレが責任持って飼う」
「よ」

「ふっ、やっぱりな」

リボーンはわかっていたかのように言った。

「ありがとうございます、綱吉様」
ロンジは一礼して礼を述べた。

「ていうか！オレ鳥の飼い方なんて知らないよ！どうしよう！」

今までペットを飼ったことのないツナは世話の仕方もわからなかった。

「雲雀に聞けばいいじゃねえか。あいつ鳥飼ってるだろ」

「雲雀さん！？そそそれは無理無理！！絶対無理だよ！！」

雲雀にむやみに話しかけたら咬み殺されかねない。
リボーンの提案をツナはかたく拒んだ。

「その鳥は、基本何も食べないんですが…力を供給する必要はありますね」

ロンジはツナをじっと見ていた。

「…あのー？」

「綱吉様。その鳥に死ぬ気の炎を与えてみてください」

死ぬ気の炎を与える？なぜ？とツナはぽかんとしていた。

「え、死ぬ気の炎を…？」

「そうだな。ものは試した。ツナ、やれ」

「こ、根拠もないのにいー!!?」

得体の知れない生き物に死ぬ気の炎を与えても大丈夫だろうかとツナは思っていた。

暴走でもしたら、死んでしまったらどうしようかと心配になった。

リボーンはレオンを変化させてツナに向けた。

「つべこべ言わずにさっさとしろ!」

「うわあああ!ちょ、ま!」

・ズガアアン

抵抗もむなしく、ツナは無理矢理超死ぬ気モードにさせられた。額の炎がゆらゆらと揺れている。

「……………」

「さっさとしろ」

「無言でなにかを訴えるツナを無視してリボーンは促した。」

ため息をつくるとツナはグローブに炎をともして鳥に近づけた。
鳥はゆっくりと炎に近づき、炎を食べはじめた。

「やはり、そうですか…」

ロンジは納得したように言った。

鳥は気持ち良さそうに炎を浴びていた。

「…お前、この炎が好きか？」

「キユルルル」

鳥の安心したような鳴き声にツナは優しい笑みを浮かべた。

「そいつ、金色で綺麗だなっ」

山本が鳥を見て言った。

「十代目と同じ目の色か…」

獄寺はツナと鳥を見比べて観察していた。

・クンクンツ

突然ツナのアニマルリング、ナッツが騒ぎはじめた。
ツナの炎に反応したらしい。

「…ナッツ」

ツナが呼びかけるとナッツが姿を現した。
あくびをしながらのびをして尻尾をゆらゆらと動かした。

「ガウツ」

ナッツは鳥を見て少し驚き、じっと鳥を見ていた。

鳥はゆっくりとナッツに近づき、ナッツのたてがみを毛づくろいし始めた。

「ガウツ」

「キュルルル」

どうやらナッツと鳥は仲良くなったらしい。

ベッドの上で遊びはじめた。

「これが…噂の匣兵器…」

ロンジが驚いた様子でナッツを見ていた。

見た目は小さなライオンだが、秘めた力を持っている。

ロンジはそう感じた。

「おいツナ。こいつの名前どうすんだ」

リポーンが鳥を指差し言った。

名前をつけるのも飼い主だ。

さすがに名前がないのはかわいそうだ。

「名前か…なににしよう」

ツナは鳥を見て考えた。

しばらく考えたあと、ツナがぼつりと言った。

「…トンノ」

山本以外の全員が耳を疑った。

トンノとは、イタリア語でマグロを意味する。
つまり、こういうことだ。

綱吉

ツナ

日本語でマグロ

イタリア語でトンノ

「「「……………」」」

山本を除く三人はこう思っただろう。

(安直すぎやしないか!!!!!)

しかしイタリア語もわからない山本は

「トンノ? ははっ、いい名前だな!」

と名前を褒めていた。

ツナは山本に微笑んだが、三人の反応がなかったので不思議だった。

「…いけないのか。」

超死ぬ気モードのツナは冷静沈着。

表情は崩さないが、不安になったらしい。

「いつ、いいえ十代目！とてもいい名前ですね！！」

「そそそそうですよ綱吉様！愛情が伝わってきます！！」

獄寺とロンジはツナが落ち込むといけないと、精一杯褒めた。

しかし、空気を読まないリボーンは聞こえないように本音を言った。

「…相変わらずネーミングセンスがないな」

しかしツナには聞こえていたらしく、あまり表情は変わらないが、落ち込んでしまった。

額の炎が活気をなくしたかのようにゆらりゆらりと寂し気に揺れていた。

それを感じ取ったナッツも鳥も、急に元気をなくしてツナの膝の上でしょんぼりとしていた。

「じゅっ、十代目！！オレはいい名前だと思ってますよ！」

「私もそう思っております綱吉様！だからお気になさらず…」

「オレは気に入ったけどなあ、その名前！似合ってるぜ！」

三人のフォロー（山本は意味をわかっていないので、素直にいい名前だと思っている）もツナには効かず、気まずい空気が漂っていた。

「…寝る」

ツナは超死ぬ気モードのまま布団にもぐりこんだ。

ナッツと鳥も一緒に布団にはいり、閉じこもってしまった。

「「「………」」」

「どうしたんだツナ？大丈夫か？」

まだ状況もなにもわかっていない山本がうらやましくなる三人だった。

想像以上にツナは傷ついたらしい。

リポーンはため息をついてツナに話しかけた。

「ツナ、そんなことで落ち込むな。おめえがその名前がいいと思っただんならそれでいいじゃねえか」

「…お前が言ったくせに何言っただよりポーン」

布団の中からツナが言う。

リボーンは呆れたとばかりにまた大きなため息をついた。

この状況を、どうすればいいのか。

誰もなにも出来ず、ただ座っているだけだった。

しかし、この空気を壊してくれたのは、今だにすべてを把握できてない山本だった。

「おいツナ、なんでそんなに落ち込んでんだよ！オレはその名前好きだぜ？」

布団がぴくりと動いた。

山本は続けて言う。

「ネーミングセンスなんてどうだっていいじゃねえか。大切なのは愛情だぜ！精一杯かわいがってやることだぜ！周りが何と言おうと、そいつの名前はトンノだ！！」

「山本……」

ツナは布団から顔を出し、山本を見た。

山本は嘘のない笑顔だった。

額の炎が消え、ナッツたちも布団から出てきた。

「…ありがとう！山本！」

ツナは山本に感謝すると、鳥の目を見て言った。

「お前は今からトンノだ！」

鳥は…トンノは「キュルルル」と喜ぶように部屋を飛び回った。

ロンジは安心したように笑っていた。

獄寺も今日ばかりは山本に感謝した。

リポーンはにやりと笑った。

「ウライラ様！新しい情報です！」

ウライラの部屋に一礼して入って来た部下は、ソファアームでくつろいでいるウライラに告げた。

「うん、なに？」

「沢田綱吉の情報です。ボンゴレが独自開発した一時的な命の匣兵器を、本物の生き物にするほどの炎を持つそうで……」

その言葉を聞いた瞬間、ウライラは不気味な笑みを浮かべた。

「そうかそうか！やっぱりすごいな、綱吉くん！」

ウライラは情報の書かれた書類を見てつぶやいた。

「その力は、僕のために使うんだよ。綱吉くん。」

側にいた部下も怯むほど、その時のウライラは不気味だった。

標的14 ライオンと鳥（後書き）

ツナ「思ったんだけどさ」

リボーン「どうしたツナ」

ツナ「アニマルリングがあるのに、ボンゴレ匣なんて必要なのかなあ」

リボーン「知らねえぞ」

ツナ「そついえば獄寺くんのリングは瓜だけど、一緒にS I S T E M A C ・ A ・ I ・ も出てくるのかな？」

リボーン「さあな。管理人がアニメの記憶を頼りにつくってるダメ小説だからな。そこらへんはわかんねえんだろ」

ツナ「ふうん、へんなの」

リボーン「噂だが、管理人がアニマルリングとボンゴレ匣を一緒にしちまうとか言ってたぞ」

ツナ「えーリングの意味ないじゃん!!」

リボーン「う・わ・さ、だがな」

本気で迷っています。

標的15 第二関門“勇氣”（前書き）

いい修行が思い付きません…

アイデアが浮かび上がらないですねえ

標的15 第二関門“勇氣”

すべての生き物に与えられた試練

己よりも勝る力を持つ者に

恐れず逃げず立ち向かうとき

心に芽生える小さな芽は

やがて大きな己を生む

「ほんとに休校させたんだな、リボーンの奴…」

ツナは配られたプリントを見ながらつぶやいた。

今朝、学校に行ったら突然、緊急集会が行われた。

「今後、しばらく休校します」

校長からの突然の言葉。

生徒たちは驚きを隠せなかった。

素直に喜ぶ奴、勉強ができないと嘆く奴など、様々だった。

プリントが配られ、詳細を見ると、

“常に勉学に励む生徒たちへの配慮”
と書かれていた。

絶対嘘だろ、金に目が眩んだんだろ、もしくは脅されたんだろ。
ツナはプリントの文を見てツツコミをいれた。

これはリボーンの仕業だ。

彼ならこんなことをするのは朝飯前だろう。

「学校が休みでよかったのな！ま、部活がないのはしっくりこねえけどな！」

隣で山本がバットを振るかまえをしていた。

「ほんとにてめえは野球馬鹿だな！自主練でもしてればいいじゃねえか！！」

獄寺がいつものように山本に言い放った。

二人の言い争い（主に獄寺が噛み付いているだけ）は日常茶飯事だ。
しかしその間に挟まれるツナには迷惑で仕方ない。

「綱吉くん！！」

後ろから声をかけられ、その方向を見ると、結加が走ってきた。

「あれ、結加ちゃん！雑用済んだの？」

「適当に終わらせてきちゃった！」

結加はなかなか要領が良かったため、よく先生に仕事という名の雑用を頼まれる。

「そういえば綱吉くん、さっきからあなたのことずっと見つめてるんだけど…」

「何が？」

「アレ。」

結加の指差す方を見ると、木の枝に主を待つ鳥がこちらを見ていた。

「えっ、トンノー!!」

ツナに気付いてもらったのが嬉しかったのか、真っ先にツナの元へと飛んできた。

「キュルルルッ」

「なにしてんだよ。家で待ってなきゃだめだろ！」

ツナは困った様子でトンノの頭を撫でた。

「しかし、やけに外見目立ちますね」

獄寺はトンノを見て言った。

トンノはオレンジ色の目に金色がかかった羽で、太陽の光できらきらと輝いている。

こんな風になったのはツナの炎のせいなのだが。

「ん、なんだこれ？」

ツナはトンノの足になにかが縛られていることに気付いた。
小さなメモのようなものだった。

すべての生き物に与えられた試練

己よりも勝る力を持つ者に

恐れず逃げず立ち向かうとき

心に芽生える小さな芽は

やがて大きな己を生む

「…は？」

ツナは紙に書かれた文章を読み、間抜けな声をあげた。

謎の文章。

まったく意味がわからない。

トンノの足に縛り付けてあったということは、誰かのいたずらだろうか。

ポケットにその紙を入れて、ツナは肩にトンノを乗せて帰宅した。

「よっ、帰ったか」

部屋には優雅にコーヒーを飲むリボンとロンジがいた。

「さっそくだが、修行するぞ」

「え。いきなり!!!?!」

突然の修行宣言にツナは驚いた。

「なに言ってるんだ。さっさと忍耐力つけねえと、おめえ死ぬんだぞ」

「そっなんだけどさ...」

あまりにも突然でツナは受け止め難かった。

今回はなにをするのだろうか。少しドキドキしながらリボーンの言葉を待った。

「今回は“宝探し”だぞ」

「.....は?」

本日二回目のツナの間抜けな声だった。

前は“鬼ごっこ”。

今回は“宝探し”。

何故子供のする遊びばかりなんだ、とツナは思った。

「今度は宝探しか?ははっ、楽しそうだな!」

「鬼ごっこん時も同じこと言ってたぞてめえ！」

「宝探して…なにを探すんですか？」

結加がリボーンに聞いた。

「オレだぞ。オレを探せ」

「リボーンを探すの！？かくれんぼじゃん、それ！！」

「なに言ってるんだ。オレは宝だぞ」

偉そうにリボーンが言った。

まるで自分を敬えとでも言っているかのように。

「場所は並盛中学だ。一時間後に行くから来いよ」

そう言うとりボーンは窓から飛び降りて行ってしまった。

「そんないきなり…！！」

ツナは頭を抱えて慌てていた。

「今のうちに、私がルールを説明しましょう」

ロンジが“宝探し”の説明をし始めた。

「まず、搜索範囲は並盛中学の中。校舎の中や校庭などです。制限時間は夕方の5時。それまでにリボンさんを見つけたら合格…とのことです」

「並盛中学か…教室の中も、ってことだよな」

「ははっ、大変だなあ」

山本が脳天気には笑った。

「宝探してことは、相手は動かないんですよ。かくれんぼじゃないってというのはそういう事なんでしょうが」

結加がぽつりとつぶやいた。

「一時間後って…夕方まであんま時間ないじゃん!」

時計を見てツナが叫んだ。

「まあまあ、みんなで探せばすぐ見つかるって!」

「そうですよ十代目!オレも一生懸命がんばります!」

「わたしも手伝うよ綱吉くん!」

三人はツナの力になろうと意気込んだ。
そんな三人にツナは感動した。

「いいお仲間ですね、綱吉様」

ロンジが隣で微笑みながらツナに言った。

「…はい」

ツナもつられて笑った。

みんながついている。

一緒に頑張ってくれる。

それだけで嬉しかった。

一時間後。

リボーンの言うとおり、ツナたちは並盛中学へとやってきた。

学校には生徒も教員もいない。

なぜなら突然休校になったから。
このためでもあったのかとツナは納得した。

「では、今から一時間半。がんばってください」

3:30PM 宝探しスタート

「闇雲に探しても時間の無駄です。手分けして探しましょう」

結加が学校の地図を取り出して言った。

「さすが結加ちゃん頭いい!!」

計画性のないツナは結加の考えに感心した。

「まず、山本くんは体育館と体育館周辺。獄寺くんは校庭とプール。
綱吉くんはこっちの校舎で、わたしは反対の校舎を」

「なんでお前が仕切ってたんだよ！それは十代目のお役目だろうが！
」

話を進める結加に獄寺は刃向かった。

「ま、まあいいんじゃないかな獄寺くん！オレこつこついうの苦手だし…」

ツナは苦笑いしながら獄寺をなだめた。

「じゃ、行ってくるぜ！」

「こつちがおわったらすぐ向かいますんで！！」

「またあとでねっ」

山本、獄寺、結加はそれぞれの場所へと移動した。

その場に残されたツナは、学校の地図を見て思った。

（オレの探す所ってまさか…！！）
綱の頬を冷や汗がたらりとたれた。

「おい、小僧！出てこいよー」

出てくるはずない相手呼びながら山本は体育館を探していた。

体育倉庫の中を探していたが、まったく見つからないので側にあつたマットに寝転んだ。

「ここにはいねえんじゃねえのか？」

山本は笑いながら独り言を言った。

しかし、この男の勘はずれてはいなかった。

「くっそー、全然見つかんねえ！」

獄寺は草むらの中をただひたすら探していた。

「瓜！お前も手伝えよ！」

こんな広範囲を探すのは不可能だと判断した獄寺は、瓜にも手伝わせようと瓜を出していた。

しかし瓜は木の枝の上で寝ているだけだった。校庭には獄寺の怒る声だけが響いていた。

「やっぱりないなあ」

教室をひとつひとつ丁寧に、結加は搜索していた。

「でもこれって、綱吉くんが見つけないとあんまり意味がないよう
な……」

そう言いつつも結加はリポーンを探しつづけた。
なにもしないよりはましだと判断したからだ。

「リポーンどこに隠れたんだよ……。絶対トイレや掃除道具を入れる
ロッカーになんかいるわけないし……」

あんな俺様なりポーンが汚いところにいるはずがないとツナはわか
っていた。

しかしまったく見つからない。

廊下の角を曲がるうとするど誰かとぶつかった。

「わっ」

「おっと」

ぶつかった反動で倒れそうになったが、相手に腕をつかまれて平気だった。

「すっ、すみません!!」

「あはは、大丈夫だよ。君こそ大丈夫？」

長身の制服を着た男子生徒はツナに笑いかけた。
ツナはその顔に見覚えがあった。

(あれ…この人どっかで…)

ツナがうつむいて思い出そうとしていると、男子生徒はまた笑いながら言った。

「気をつけてね、沢田綱吉くん」

「…!!?!?なんで名前…」

ツナが顔を上げて問うと、そこにはもう男子生徒の姿はなかった。

「いない…。先輩とか…なのかな」

ツナは疑問を残しつつも搜索を再開した。

「…あとはここだけかあ」

ツナはドアの前に立ちながらため息をついた。

“応接室”と書かれたそこは、ツナが苦手とする人物のいる場所だった。

(学校が休みでも雲雀さんって絶対ここにいる気がするんだよね…)

ツナは校舎を探するとき、応接室を後回しにしていた。行くのが怖かったから。

しかし他の場所にはリボーンはいない。

自分の探すべき場所はここしか残されていないかった。

(どうか雲雀さんがいませんように…!!)

そう願いつつツナは一応ドアをノックした。

しかし、ツナの願いが叶うことはなかった。

「誰？」

(い、いたあああああ！！)

一気に緊張感が上がリ、喋ることも動くこともできない。

するとドアが開き、中からツナの苦手とする雲雀が出てきた。

「…なに君。なんで校舎にいるの」

「ひっ、雲雀さん！オレはただ…」

「咬み殺す。」

「ひiiiiiiiiiiii！！！！！！」

ツナは動けなかった。逃げたかった。

しかしリボーンを探さなければならぬ。

トンファーをかまえる雲雀は怖かったが、後でリボーンに怒られるのも怖い。

ツナは殴られるのを覚悟して雲雀に言った。

「…あのっ、オレ今リボーンを探してて…！！ひ、雲雀さん知りませんか！？」

足が震える。怖いものは怖い。

しかしこのままでは駄目だとツナは自分を奮い立たせた。

「赤ん坊？赤ん坊ならここにいるけど」

雲雀がソファアを指差して言った。

そこにはくつろぐリボーンがいた。

「チャオっす！どうやら時間内に見つけたみたいだな」

「リ、リボーン！！」

リボーンを見た瞬間、ツナは気が抜けてその場に座り込んだ。
ひどく疲れた。精神的に。

「十代目っ！見つかりましたか！？」

「ツナ、大丈夫か？」

「綱吉くんっ、何で廊下に座ってんの！？」

自分の場所を探し終えた三人が、ツナの元へ駆け付けた。

「全員揃ったみたいだな。合格だぞ」

リボーンがソファアに座ったまま言った。

その言葉を聞いて全員が喜んだ。

「君達なんなの。もしかして群れてるの？」

雲雀がさらに険しい顔で言った。

リボーンを除く全員が身の危険を感じた。

「ていうか学校は休みだよ。不法侵入だよね」

「ええええ！？さささつき校舎に人がいましたけどっ！！」

ツナは慌てて言い返した。

すると雲雀は少し驚いた様子で言った。

「なに言ってるの。校舎にいるのは僕と草壁だけだけど。まあ、今草壁は買い出しに行ってるけど」

「…え？だつてさつき、生徒が一人いました…けど…」

ツナは先程ぶつかった男子生徒を思い出しながら言った。

「まあ、いいじゃねえか。とにかく合格だ。よかったな、ツナ」

「こゝ、今回は何を試したんですか？」

獄寺がリボーンに聞いた。

「今回は“勇気”を試させてもらったぞ。オレがここにいたのは、ツナが雲雀を苦手としているからだ。それを勇気を出して克服してオレを見つけさせたってわけだ。一応ツナに今回の修行のヒントを出しといたはずなんだがな」

「ヒント！？そんなの知らないよ！！」

「そんなはずねえぞ。トンノに渡しといたからな」

「…トンノに？」

トンノからは何ももらってないと言おうとしたが、ツナは何かを思い出してポケットから紙を取り出した。

「それって、トンノの足に縛り付けてあったやつですよね？」

獄寺が聞くとツナは頷いて紙に書いてある文章を読んだ。

すべての生き物に与えられた試練

己よりも勝る力を持つ者に

恐れず逃げず立ち向かうとき

心に芽生える小さな芽は

やがて大きな己を生む

「この“芽”ってまさか…」

「そうだ。それが勇気だ」

「ははっ、これってツナと雲雀のことだったのか」

早く気付けばよかったとツナは後悔した。

そうすれば学校全体を探さないでよかったのだ。

「ねえ、そろそろ散らないと咬み殺すよ」

話を聞いていた雲雀が痺れを切らしてトンファーをかまえて言った。

「うわっ、待ってください雲雀さ…」

・チクッ

「いてっ…」

腕に痛みが走る。痛みはだんだん増し、ツナを襲う。

「どうした、ツナ」

リボーンがツナの元へ跳んだ。

「っまた…痛み…がつ…」

ツナは腕をおさえて痛みに耐えていた。

「大丈夫ですか、十代目っ」

獄寺たちもツナへと駆け寄る。

それを見ていた雲雀が、何かに気付いた。

「…なにか来たよ」

雲雀はトンファーをかまえて校庭へと走って行った。

「…っ待つてください雲雀さん！」

ツナは痛みを耐えながら雲雀を追いかけた。

そしてツナの後をリボーンたちも追う。

校庭に出てみると、全員が言葉を失った。

そこには無数の人。

手には剣や銃をかまえていた。

間違いなく、自分たちを狙っている。

ツナの腕の痛みが危険信号のように痛みを増す。

第二関門“ 勇気 ” クリア

標的16 ボス、出現（前書き）

戦っている文章が下手くそです…

説明できません…！！！！

それでもよろしければ…

ぶしぞー！

標的16 ボス、出現

ズキズキと痛む腕。

まるでなにかに絞められているかのようだ。

その痛みは鎖を拠点として全身を駆け巡りツナを苦しめる。

しかし、いつまでもその痛みに苦しんではいられない。

目の前には敵。

圧倒的な数だ。

ツナたちは黙ってそれを見ていた。

「お前たち、ボンゴレだな？」

敵の隊長であるう男がツナたちに問うた。
ツナたちは何も言わずに男を見る。

「ボスの命令により、沢田綱吉とボンゴリングを回収しに来た。大人しく渡せ」

男は偉そうに手を差し出した。

「誰がてめえなんかに渡すかよ!!」

「そうだぜ。ツナもリングもオレ達の大切なもんだからな！」

「僕には関係ないけど、並盛中で暴れるなら咬み殺すよ」

獄寺、山本、雲雀、結加がツナの前に立ちはだかる。それを見ていた隊長が口を開いた。

「それならば、邪魔なものは消させてもらおう」

その言葉を合図に敵は容赦なく襲ってくる。獄寺たちもそれに挑む。

それぞれの匣に炎を注入し、匣兵器を出した。

「フレイムアロー!!」

獄寺が放つ後、山本が攻撃を仕掛ける。

「攻式八の型 篠突く雨！！」

二人の攻撃により敵はばたばたと倒れていく。しかしその後ろからまた敵が攻めてくる。これではキリがない。

「ちっ、どんだけいんだよ！！」

「数が多すぎてわかんねえのな」

二人は敵の多さに驚いたが、怯むことなく攻撃を仕掛けた。

「数が多すぎるのよ馬鹿！！」

結加は敵の攻撃を避けながら叫んだ。敵の多さにだんだんいらいらが増していた。

「一応女の子なんですけどっ！！」

結加は掌に力を集中させ、思い切り光の玉を投げつける。

結加の怒りは強力な力となっていた。

トンファーに炎を纏い、雲雀は次々と敵を倒す。
しかしあまりの数の多さに雲雀のトンファーでは限界があった。

「行くよ、ロール。形態変化だ」

雲雀の声でロールは手錠へと形を変えた。

そして雲雀は炎の力により手錠を増殖させ、敵を拘束していった。

「君達、いい加減にしなよ。この僕に逆らったことを…後悔するんだね」

雲雀はそう言いながら敵に不敵の笑みを向けた。

三人が敵と戦っている間、ツナは痛みと戦っていた。

(早く行かなきゃ…みんなが…)

しかし痛みはおさまらず、立ち上がることができない。そんなツナに、敵の攻撃がふりかかる。

「っわ!!」

ツナは敵の剣を避けたが、その衝撃によりさらに腕は痛みを増した。すると再び敵の剣がツナを襲う。避けきれないとツナは目を閉じた。

- パアンツ

敵の剣は弾によって弾かれた。そして敵の断末魔が聞こえた。目を開けると、そこには小さな赤ん坊が一人。

「油断すんじゃねえぞ。ダメツナが」

リポーンは背を向けて言う。

「あいつらが頑張ってるのに、おめえ何ねっころがってるんだ。苦しいのはおめえだけじゃねえんだぞ」

その言葉にツナは、はっとした。

自分は痛みを苦しんでいる。しかし、獄寺も山本も雲雀も結加も戦いで苦しんでいる。みんな、戦っているのだ。

自分だけではない。
みんな、同じなのだ。

ツナは痛みには耐えながら立ち上がった。
今でも激痛が襲い、冷や汗がたれる。
しかしそんなものに負けてられない。

「オレだけじゃない。みんな、一緒なんだ」

ツナは手にグローブをはめて、死ぬ気丸を飲み目をつぶる。
次の瞬間、額とグローブに炎がともった。

その強い炎に皆が圧倒された。
強く、美しい炎。

敵はそれを見て怯んだが、一斉に襲い掛かった。

ツナは炎の噴射でそれをかわし、敵に向けて炎を放つ。

次々と倒れる敵、次々と襲い掛かる敵。

ツナは匣へ炎を注入する。

そして現れたのはツナの目と同じオレンジ色のライオン。

「ガオツ！」

ナッツは威勢よく吠える。

「行くぞナッツ。形態変化 攻撃モード（モードアタック）！！」
ナッツはみるみる変化し、？世のガントレット（ミネーナ・ディ・ボンゴレ・プリーモ）へと変化した。

ツナは自分に襲い掛かる敵目掛けて攻撃する。

「ビツクバンアクセル！！」

その圧倒的な力に敵は大きなダメージを受け、倒れ込んだ。

獄寺たちも、襲い掛かる敵を見事に倒した。

敵がいなくなったのを確認すると、ツナはその場へ倒れた。

敵と同時に痛みと戦っていたツナは、力を大量に消費していた。

「十代目！！」

「大丈夫か、ツナ！」

獄寺と山本、結加がツナに駆け寄る。
雲雀はマイペースに歩み寄る。

「…体力を消費しまくってんな」

リボーンはツナの苦しむ姿を見て言った。
息は荒く、大量の汗をかいていた。
歯を食いしばって痛みを耐えていた。

「うわ、すごい！こんなに僕の部下たちを倒したのかあ！！」
突然、知らない男の声がした。
全員がその男を見る。

ツナはその男を見て言葉を失った。

男は並盛中の制服を着ている。

ツナが先程廊下でぶつかった男子生徒だった。

「…お前は…さっきの…！！」

男はツナを見て微笑んだ。

「こんにちは、綱吉くん。久しぶりだね」

ツナは男の顔を見て違和感を感じた。
なにかが引つかかる。

腕の痛みが鋭く身体を貫いたとき、ツナは思い出した。

「っお前…夢に出てきた…」

「そつだよ。やっと思い出ししてくれた？さっきぶつかったとき、ばれたと思ったんだけどなあ」

男はへらへらと笑って言う。

「ツナ…あいつが呪いをかけた奴か？」

リボーンの問題にツナは頷いた。

ツナの夢に現れ、ツナに呪いをかけた男。そいつが今、目の前にいる。

ツナは悪寒を感じた。

危険だと、ツナの超直感が告げる。近づいてはならないと。

「えっと、はじめましてボンゴレのみんな。僕はアッジョルナーレファミリーのボス、ウライラです。よろしくね」

ウライラは笑みを浮かべながら言った。

ツナたちに衝撃が走る。

目の前の男が、ツナに呪いをかけた男が、

自分たちを襲ったマフィアのボス。

全員何も言えず、ただ黙ってウライラを見ていた。

「おい、てめえ」

その沈黙を破るように、リボーンがウライラに話しかけた。

「なに？アルコバレーノのリボーンさん」

「なにが目的でツナを狙う」

リボーンは淡々とウライラに問う。

しかしその姿からは殺気が漂っていた。

「そんなに殺気を出さないでくださいよ。僕はただ、君達に会いに来ただけなんだよ」

「会いに来ただけの奴が攻撃をしかけてくるわけねえだろ！！」

獄寺がウライラにそう叫んだ。

「まあ、君達の力を見てみたかったですよ。ごめんね」

まったく悪気がないかのようにウライラは謝った。

「まあ、僕の目的は言えないんだけど、ちょっとだけなら教えてあげますよ。僕はね、ただ力が欲しいだけなんだ。ボンゴレリングの、真の力をね」

「真の力？」

リボーンがウライラに聞き返す。
ウライラは続けて言った。

「君達の持つボンゴレリングは、まだ真の力を出してないんですよ。その力を引き出せば、すべてを手に入れたも同然。…でもね」

ウライラはツナを見つめる。

ツナはウライラの目を見て身体が強張った。

「その力を引き出すには、綱吉くんの力が必要なんです。綱吉くんは、僕の目的の鍵となっているんですよ」

「十代目が…鍵…？」

「まったく意味がわかんねえのな」

獄寺と山本はウライラの言うことが理解できなかった。
リボーンは黙って聞いていた。

「これ以上は言えないかな。ごめんね。」

「ツナに呪いをかけた理由はなんだ」

リポーンは未だ殺気を放って問いかけた。

「人って、追いつめるとなんでも言うことを聞くようになるでしょう？だから脅してみたんだよ。痛いでしょう？それ」

ウライラの目は冷酷だった。

なにも感じない、人間ではないような目。

「そんな理由で十代目を…っ！！」

「落ち着け獄寺。あんな奴になに言っても無駄だって」

山本は獄寺をなだめた。

獄寺は悔しそうにうつむいた。

「今日はもう帰りますよ。君達のカモ見れたし。ねえ、綱吉くん」

ウライラはツナに話しかけた。

冷酷な視線とオレンジ色の視線がぶつかる。

「死ぬ前にちゃんとした判断をするんだよ。君が死んでしまっただけは意味がなくなっちゃうからね。…まあ」

ウライラが笑う。心のない笑み。

「無理矢理にでも、君とボンゴリングを手に入れるけどね」

ウライラが指をパチンと鳴らすと、辺りが白い煙に覆われる。

煙が晴れると、今までいたウライラと大量の倒れた敵は一人残らず消えていた。

「…奴の力はかなり強力ね」

結加は悔しそうにつぶやく。

「自分のためなら手段を選ばねえ奴ってことだな」

リボーンの言葉に結加は頷いた。

「オレの…力ってなんだよ…そんな力…オレにはねえ…っ」

ツナは苦しみながらも言う。

ようやく痛みが引きはじめる。

呼吸もようやく正常になり、深呼吸をする。

「奴の言っていたことも否定出来ねえ。ボンゴリングにはまだ謎が多い。おめえの力もな」

リボーンが静かに言う。

その姿からは嘘が見られなかった。

「とにかく、家に帰るぞ。もうここには用がねえ」

ツナは額の炎を消し領いた。

早く、修行を完了させなければならぬ。

自分が痛みに耐えることが出来れば、リングとみんなを守ることができる。

ツナは修行に励むことを決意し、拳を握りしめた。

リングがキラリと輝いた。

標的16 ボス、出現（後書き）

ツナ「結局アニマルリングもボンゴレ匣も両方出すんだって」

獄寺「意味わかんないスよね！どっちかにできないんでしょうか」

山本「まあまあ、知識が少ない中で書いてんだから仕方ないだろうっ」

わたしの中で山本は救世主。

ツナも救世主。

獄寺は……時には救世主。

標的17 消えた大空（前書き）

…あ、

タイトルこんななんですけど、

大丈夫ですよ！（笑）

消えた消えたけど

単純な消えたであって…

…どうぞぞ！（笑）

標的17 消えた大空

うつらうつらと眠る鳥。

全身は金色がかった美しいもので、
得も言われぬ魅力がある。

ふと、トンノの目が開く。

オレンジ色の、暖かい目だ。

再びトンノの目が閉じる。

かすかな炎を残して。

ズガアアアアンツ

派手な音を立てたのはいつもの時間、いつもの場所。

その音の根源、リボーンは銃をくるりと指でまわして立っていた。

そしてその弾の的となったのは、毎日毎日リボーンの銃の被害を受

けるツナであった。

「ちよっ、もう少し寝てたっていいだろ!？」

ツナは弾を避けた拍子にぶつけた頭をさすりながら言った。

「毎日同じこと言ってんじゃねえぞダメツナが。さっさと修行するぞ」

リボーンは再び銃の標的をツナに定める。

ツナは慌てて謝罪する。

これがいつものこととすると、なんとも嘆かわしい。

「今日はなにするんだよ。まさかまたお遊び?」

朝ごはんを食べ終えたツナはベッドでくつろぐリボーンに聞いた。

「さあな。今日は山に行くんだ」

「や、山?」

リボーンはツナに小さなバックを渡した。

「山登りだぞ、ツナ」

「……………山登り？」

これも遊びなのだろうか。

しかし今までの修行に比べれば幾分マシだろう。

「そのバックを持っていけ。さっさと出かけるぞ」

リポーンはベッドから飛び下りてスタスタと歩いていった。

（今回はなんだろう）

ツナは嫌な予感がしてたまらなかった。

その嫌な予感は思わぬ方向へと進むものだった。

「おはよびいじりてます十代目…」

「よっ、ツナ！」

玄関では獄寺と山本が笑顔で迎える。
二人は手ぶらだった。

「あれ、二人とも手ぶら？」

「だって今日は山に散歩しに行くんだろ？オレは時雨金時と匣があれば十分だな！」

山本は肩にかけてある時雨金時と匣を取り出して言った。

「獄寺くんは？」

「オレは一応腹ごしらえの食い物と匣を」

ポケットから出したのは小分けのチョコレートが幾つか入っていた。

「ツナはそのバツク持ってくのな！」

山本はツナの持つ小さなバツクを指差し言った。

「リポーンが持って行って言うからさ」

ふと、何が入っているのだろうとツナは気になった。

ツナがバックを開けようとすると、リボーンが三人に声をかけた。

「さっさと行くぞ」

隣にはいつの間にかロンジが立っていた。

リボーンにうながされるまま、三人は歩いてあとを追った。

目の前にそびえ立つ山。

三人はそれを見て呆気にとられていた。

「さっ、これに登るぞ」

「そんな簡単に言うなよ！なんか危険な感じがするんですけど！」

ツナは山の至るところを見て叫んだ。

まわりには崖。

ところどころ土砂崩れが起きている。

木は薙ぎ倒され痛々しい跡を残していた。

「二人には山に散歩って言ってたんだろ！？これじゃ二人を騙したことに…」

「なんねえぞ」

ツナの話のリボーンは遮った。

「見てみる」

リボーンに言われ二人を見てみると、自分なら有り得ないだろう発言をしていた。

「すげえ山だな！楽しい散歩になりそうだなっ」

「不思議な生き物の匂いがするぜ！」

山本と獄寺の言葉にツナは固まった。
あまりにもマイペースだからだ。

(…まあ、これも二人のいいところだよな)

ツナは笑いながら二人を見ていた。

「ちょっとどこまで行くだよりポーン！もうへとへとだよーっ」

山を登りはじめて数時間。

頂上にたどり着く気配はない。

体力の戻りつつあるツナには過酷だった。

「うるせえぞ。さっさとしやがれ」

リポーンは容赦なくツナに言い放った。

そんなリポーンをツナは怨んだ。

(お前ロンジさんの肩に乗ってるから疲れないんだよ！)

しかしロンジは疲れた気配を見せない。

獄寺も山本もまったく息が上がっておらず、平気そうな顔をしている。

「大丈夫ですか十代目？」

「ほとんど病み上がりだもんな。休憩でもするか？」

リポーンとは反対に二人はツナに優しく声をかけた。

あまりの感動に二人が神に見えたほどだ。

「う、うん。大丈夫…」

しかしツナはあまり大丈夫じゃなかった。息が上がるのも疲労のせいだけじゃない。

(時々めまいがするくらいだけど…)

頭がくらくらする。

視界も少しぼやけていた。

だんだんみんなとの間に距離が開く。

すると、頭上から羽の羽ばたく音が聞こえた。

「キュルルル」

「え、トンノ!?!」

トンノは降下してツナの肩にとまる。

どうやらついて来たらしい。

「家にいろって言ったのに…」

ツナは苦笑いしながらトンノを撫でる。

しかしトンノが来てくれたことは素直に嬉しかった。

「お前はいいなあ。羽があるから飛べるじゃないか」

そう言つとツナはみんなに追いつこつと歩を早めようとした。

すると、視界が歪んだ。
ぐにゃりと全てが淀む。

思考が停止する。

天と地がひっくり返る。

誰かの叫ぶ声。

何かが羽ばたく音。

無重力の世界。

のばされた手には

空気がふれるだけ。

意識は闇に吸い込まれた。

木々のざわめく音

川のせせらぐ音

意識を集中させると、
次第と五感が戻ってくる。

身体を動かそうとすると、

痛みがそこらじゅうに散る。

ツナは重たい目を開けた。

広がる大空。

しかしそれはオレンジ色で、
どこかでカラスの鳴く声がする。

身体を起こすと、そこは河原だった。

何が起こったのかわからずただ辺りを見渡す。

「……ここは？」

先程いた場所とはまったく違う景色だ。
よく見ると、全身が水で濡れている。

「キュルルル！！」

突然隣から鳴き声が聞こえた。

トンノが羽を飛ばたかせながら全身を震わせる。
すると、ツナと同様にトンノも水で濡れていた。

「……まさか、お前がオレを助けてくれたのか？」

ツナがトンノに話しかけると、トンノは肯定するようにツナを見つめた。

「…そっか。ありがとな」

トンノは嬉しそうにツナの頭上をぐるぐると飛び回る。

しかし、ツナは驚いた。

トンノの身体に、ツナを運べるような力があるのか、と。

(…もしかしたら)

トンノには、あるのかもしれない。

不思議な力が。

ツナはそう思わずにはいらなかった。

立ち上がるうとすると、めまいと痛みが邪魔をする。

身体中には切り傷や、かすり傷がある。

頭を強く打つたのだろうか。
鈍い痛みが止むことなく続いていた。

「…どうしよう」

どうやら崖か急な斜面から川に落ち、流されてきたようだ。

まわりには人の気配はない。

身体がぶるりと寒さで震える。
全身びしょ濡れなのだ。

とにかく暖をとろうとツナは燃えるようなものを探しに行った。

「じゅ、十代目ええええ!!!」

ツナが落ちた。

自分がいながら。

守れなかった。

「獄寺落ち着け!」

山本がなだめるが獄寺は落ち着かない。
自分の尊敬する人が、ついていくと決めた人が消えたのだ。
落ち着けるわけがない。

「十代目を探しに行く！はなせ！」

「んなこと言ったって、お前も落ちる気かよ！」

「うっせえ！お前は十代目のことが心配じゃねえのかよ！」

獄寺はひどく取り乱していた。
はたから見ればこれは修羅場同然だろう。
しかし、その空気を一変させたのはリボンだった。

「しっかりしやがれ、獄寺」

その一言であたりが静寂に包まれる。

「おめえ、ツナの右腕なんだろ。右腕が取り乱してどうすんだ」

獄寺は黙ってそれを聞いていた。

「右腕なら、右腕らしく主人を信じる。ツナは死なねえ。それくらいわかってんだろ」

リボーンはにやりと笑った。
獄寺はやっと正気に戻った。

「…そう…ですよね！十代目はお強い方ですもんね！」

「そうだぜ獄寺！慌てたって意味ねえぜ！」

山本が獄寺の肩を叩く。

不意に叩かれた獄寺は転びそうになり、山本に食ってかかった。

「これくらいで取り乱しちまって、まだまだだな」

「しかし、あの方達は綱吉様をとて慕っていらっしやるのですね」

リボーンとロンジが笑いながら獄寺と山本を見る。

「しかし、この状況で…修行を行うのですか？」

「ああ。ツナが強くなるためだ。しかも、これは結構いい修行になるはずだ」

リボーンはツナの落下した場所を見つめた。

「強くなるんだぞ、ツナ」

仲間を守るために。

3：32PM 修行スタート

その内容は、ツナは知らない。

標的18 第三関門“カピターレ” (前書き)

タイトルは…まあ、

読めばわかりますよ！

なんか長くなりました…

標的18 第三関門“カピターレ”

荒む天気 荒む空気

それは光を見失った心の暴走

しかしそれを包みなだめるのは

広く大きな晴れ渡る空

その優しい空に触れたとき

癒され浄化されるとき

完全な大空があらわれる

「キュルルル」

トンノがツナの元へと寄る。
足で薪をつかみ降り立つ。

「ありがとう」

ツナはトンノから薪を受け取り頭を撫でる。

ツナは今一人だ。

どうやら崖から落ちたらしい。

トンノが助けてくれたらしく、無事だったのだが。

びしょ濡れの身体を暖めるため火をつけようと、ツナは薪を探していた。

すると、偶然にも小さな洞窟を見つけた。

熊や何か獣がいるかと思えば、そこはからっぽだった。

いつ、救助が来るかもわからない。

ツナは野宿を覚悟して洞窟へ入った。

薪を集めた方がいいが。

「火…どうしようか」

死ぬ気の炎で大丈夫だろうか。

死ぬ気の炎は超圧縮エネルギーだ。

だが薪に燈せば火として働くかもしれない。

ツナは死ぬ気丸を飲んで、超死ぬ気モードへと変化する。
グローブに炎をともして薪に触れる。

すると、炎は薪へとうつり、パチパチと音をたてて燃えはじめた。
その炎を重ねた薪につきつきとうつし、ひとつの大きな炎になった。
それはとても暖かった。

「ほら、トンノおいで。」

ツナはトンノをひざの上に乗せてトンノの羽を乾かした。

（一応超死ぬ気モードにはなれるけど…いつもより体力を消費して
る。飛ぶことは不可能か…）

超死ぬ気モードを無駄に維持するのはよくないと思い、炎を消そう
とした。

「…あ。トンノに炎あげとくか」

ツナはグローブの炎をトンノに差し出す。

トンノはお腹が空いていたのか、沢山炎を吸い取った。

「キュルルル」

「お腹いっぱいになったか」

トンノがお腹いっぱいになったのを確認すると、ツナは炎を消した。
意外と体力を消費したらしい。
ぐったりと疲れてしまった。

「これからどうしようかなあ」

ふと、ツナはリボンに渡されたバツクを思い出した。
川に流されたとき、運よくバツクは流されなかったらしい。

チャツクを開けて中身を見ると、
一枚の紙、錠と鍵が入っていた。

錠にはなにかが書いてあるが、錆びていてあまり見ることができない。
い。

紙には、また詩のような文が書かれていた。

荒む天気 荒む空気

それは光を見失った心の暴走

しかしそれを包みなだめるのは

広く大きな晴れ渡る空

その優しい空に触れたとき

癒され浄化されるとき

完全な大空があらわれる

今までとおなじように、なにか意味があるのだろう。
しかし考えようにも頭が働かない。
鈍い痛みがツナの頭を働かせようとしない。

しばらくツナは紙を眺めていたが、まったくなにも思いつかないの
で見るのをやめた。

「第一、勉強が苦手なオレにこんな読解力の必要そんな文の意味が
わかるわけないだろ……」

地面に紙と錠、鍵を並べてみた。
しかし繋がるものはなにもない。

普段考え事をしないツナはそれを考えるだけでお腹が空いてきた。

「…お腹、空いちゃったなあ」

バックの中を探ったが、食べ物らしきものは見つからない。
ツナも食べ物を持っていなかった。

どうしようかとツナが考えていると、ひぎの上で大人しくしていた
トンノがいきなり羽をばたつかせ、洞窟の外へと飛んでいってしまった。

「…トンノ!？」

ツナが呼びかけると、トンノは洞窟の外で一度ツナを見つめ、再び
飛んでいった。

「…散歩でもしたかったのかな」
すぐに帰ってくるだろうと、ツナは炎に近寄り身体を暖めた。

しばらくすると、鳥の羽ばたく音がした。
トンノが帰ってきたのだらうとツナは外を見た。

「…えっ!?!? トンノ…っ!?!?」

ツナはトンノを見て驚いた。

トンノの口には魚がくわえてあった。
おそらく鮎だろう。

トンノは魚をくわえながらツナの前に降り立った。

「…トンノがとってきたの?」

トンノは「キュルル」とくもった声で鳴いた。
魚をくわえているのでうまく鳴けないらしい。

「…オレにくれるの?」

するとトンノは差し出すように魚をくわえ直した。

その姿を見て、ツナは心があたたまった。
混乱していた頭も冷え、自然と笑みがこぼれる。

「あはは、…ありがとうトンノ」

トンノは嬉しそうに跳びはねた。

「たしか、こういうのって棒に刺すんだよね」

ツナは一本の枝に魚を刺し、炎で焼きはじめた。

トンノのくれた魚はおいしかった。

味こそはあまりしなかったが、いつもよりもおいしく感じた。

夜になると山は闇に包まれる。

いろんな動物が動き出し、危険性も一気に上がる。

(怖いなあ…早く助けに来ないかなあ)

歩いてみんなを探すことは不可能だ。

夜の山に迷い込めば、おそらく死んでしまう。

それに身体中の傷も痛む。

こんなので動いたら獣の餌食になるかも知れない。

トンノはひざの上で毛づくろいをしている。

「…あ、そうだ」

ツナはベルトにかけてある匣を見た。
そしてリングに炎をともし、匣へ注入した。

オレンジの炎に包まれて現れたのは天空ライオン（レオネ・ディ・
チエーリ）Ver・Vのナッツ。

ナッツはツナの顔を見ると、嬉しそうにしっぽを振った。

「ガオツ」

「キュルルル」

トンノとナッツは挨拶のように鳴き、二匹で遊びはじめた。
その光景を見ていると気分も穏やかになる。

腕時計を見ると夜の10時
ずいぶん遅い時間になってしまった。

動くこともできないし、怪我の治療もできない。
することがないツナは、体力をつけるために眠ることにした。

「ナッツ、トンノ。寝るからおいで」

ツナが手招きをすると、二匹はツナの腕の中にすっぽりとはまる。

乾かしておいた上着を布団代わりにして、ツナたちは眠りについた。

三日月と星がきらきらと輝いていた。

どれくらいの時間がたったのか。

炎は衰えることなく燃えているらしい。

あたりは静寂に包まれ、どこかでフクロウが鳴いている。

再び眠りにつこうとすると、ツナは嫌な気を感じた。

ザワザワと何かを感じる。

なにかが近づいてくる。

「グルルルルッ」

ナッツの威嚇するような声。

目を開けると、洞窟の外に無数の影。

寝起きの目ではその姿をしっかりととらえることができない。

目をこらすと、それは、

化け物と言っているような姿をした獣。

頭は熊、両足は鷹のようなずいぶんな爪をはやし、胴体は蛇というな
んとも異常な姿をした化け物が数多く洞窟を囲っていた。

ツナは声も出さずそれを見ていた。

化け物たちは唸りながらツナを見ている。

このままでは殺されてしまう。

ナッツもトンノも傷つけない。

ツナはグローブをはめ、死ぬ気丸を飲み、超死ぬ気モードへと変わる。

少しふらつくが、今はそんなものは気にしてられない。

ツナは化け物たちを追い払うべく、洞窟を出た。

洞窟を出た途端、化け物たちはツナに襲い掛かる。

ツナはそれを避け、化け物の出方を伺う。

どうやら頭は悪いらしい。

化け物同士ぶつかり合って混乱している。

しかし攻撃力は高く、油断すると噛み付かれそうな速さで襲ってきた。

ツナは片っ端から襲ってくる化け物を炎をまとった拳で追い払った。

ナッツと一緒に戦う方が有利だが、自分の力が不安定な状態で戦わ

せたらナッツが怪我をするかもしれない。

「ガオツ…」

ナッツが空中で戦うツナを心配そうに見つめる。

ツナが万全の状態じゃないことも、ナッツは感じ取っていた。

身体の傷の痛みで素早く移動することが難しい。

化け物の数が多いこともある。

次々と化け物はツナに攻撃してきた。

めまいがする。

鈍い頭痛がつづく。

「…っ！！」

痛みに気をとられていると、化け物がツナに殴り掛かった。

避けきれず、まともにくらったツナは地面へと叩き落とされた。

痛みに顔をしかめると、またもや化け物の攻撃を受けた。

しっぽの遠心力により思いきり胴体を殴られる。

「かつ…は…！！」

あまりの衝撃に意識が飛びそうになる。

ここで死んではいけないとねばるが、身体がまったく動かない。

ゆらゆらと化け物の影が動く。

(…このまま…死んでしまうのか)

朦朧とする意識の中でツナはそう思った。

全ての化け物が襲い掛かる。

しかし、それをなにかが弾いた。

目の前には大きな炎。

暖かく、優しい炎。

ツナは重いまぶたを上げ、それを見た。

願う祈りは光となり

主を守る力となる

帯びる炎の力は

主を包む力となる

(…なにかの…詩?)

自然と頭に流れ込む詩。

それが何だかわからなかった。

ツナの前に立ちただかるのは
全身をオレンジの炎に包まれ、
金色に輝く、鳥。

「キュルルル」

「!?!」

その鳴き声でツナは理解した。

「まさか…トンノか!?!」

しかし普段のトンノとは大きさも姿も違う。

ツナの数倍の大きさで、頭の毛はたてがみのようになびき、炎をまとっている。

しかし、確実に。

(これは絶対に…トンノだ)

目が、確かにトンノの目だ。

オレンジの優しい目。

トンノの姿を見て、化け物は怯んでいたが、数匹のまとまりでトンノを襲った。

「っトンノ!!」

ツナが危ないと叫んだが、次の瞬間、言葉を失った。

トンノは翼を広げ、炎の出力を上げた途端、炎で化け物を縛り上げ、浄化させた。

化け物は一斉に襲い掛かる。

どうやらこの一撃で決めるらしい。

トンノは「キュルルル」と鳴き、全身の炎を化け物に浴びせた。

その力はあまりにも強力で、まわりの岩が砕け散った。

砕け散った岩は辺りにもおよび、ツナめがけて大きな岩が勢いよくとんでくる。

ツナは避けようと身体を動かしたが、あまりの岩の多さに動くことができない。

突然、目の前が暗くなった。

岩の弾く音がする。

しかし、痛みは感じられない。

バサッと布の音がした。

黒い布はみるみる形を変え、小さなライオンの姿になった。

「…ナッツ」

「ガオツガオツ」

ナッツはツナに擦り寄った。

小さなライオンにツナは助けられたのだ。

「マントでオレをかばってくれたのか…ありがとう」

ナッツは嬉しそうに、誇らしげにしっぽを振った。

そして、ツナはトンノを見た。

大きく美しい鳥はツナを見返す。

「…トンノも、ありがとうな」

「キュルルルッ」

トンノはツナの怪我を労るように頭を擦り寄せる。

辺りがだんだん明るくなる。

朝日がのぼる。

ツナの炎が、

ナッツのたてがみが、

トンノの羽が、

きらきらと輝いていた。

「キュルルル」

トンノがツナに背を向けて鳴いている。

「…乗れっっていうことか？」

「キュルルルッ」

トンノはそつだと言つのように鳴く。

ツナはバックを持ち、トンノの背に乗る。

ナッツもトンノに飛び乗る。

トンノは翼を大きく羽ばたかせ、大空へ溶け込んだ。

美しい、三つの炎をまといながら。

獄寺は夜も眠れず、ただ空を見ていた。

あまりにツナのことを心配で、寝る気にもなれない。

獄寺たちは山の一角にテントをはり、一夜を過ごした。

獄寺が朝日を見た。

すると、何か輝くものがこちらへとんでくる。

敵か、とかまえたが、その姿には見覚えがある。

「っおい！全員起きろー！！」

獄寺の声でテントの中で寝ていた山本、リボーン、ロンジは何事かと出てきた。

全員が驚いた。

こちらへとんでくるのは
大きく金色に輝く鳥。

その背中には美しい炎がふたつ。

「十代目！……！！」

「ツナ！……！！」

「やはり……ですね。リボーンさん」

「だな。」

トンノが優しく地上へ降り立つ。

背中には傷だらけのツナとその腕の中で眠るナッツがいた。

「大丈夫ですか十代目！」

獄寺に支えられてツナはトンノから下りる。

するとトンノは元の大きさに戻り、リボーンの目の前に立った。

「…ふっ、そうか」

トンノの目を見てリボーンは状況を理解したらしい。

ロンジもリボーンの反応でわかったようだ。

「…心配かけて、ごめん」

ツナも超死ぬ気モードをといて謝る。

「いえっ、こちらこそ…お守りできなくてすみません…！」

「無事でよかったですぜ、ツナ！」

二人の暖かい言葉にツナは心が暖かくなった。

「ツナ」

リボーンがツナの名を呼ぶ。

叱られるだろうとツナは覚悟した。

しかし。

「合格だ」

「え？」

リポーンの口から出たのは、お咎めの言葉ではなかった。

「合…格って…」

「修行のことだ。よかったな」

ツナはなんのこともまったくわからなかった。

「お前は一人になって、焦った。しかし、冷静さを取り戻し、落ち着いて行動した。それにより、自分が安心してリラックスするだけじゃなく、まわりにも影響させたんだ」

トンノも、ナッツも。

「ま、現に今、獄寺たちにも影響してるがな」

リポーンは笑いながら言う。

「そして今回、トンノの力を引き出すことに成功した」

「トンノの…力？」

化け物を見事に倒した、あの力だとツナはわかった。

「トンノはお前の力で実態化した。だから力もそれなりに強い。だがそれを引き出すのが難しいんだ」

トンノは一時的にししか実態を持たないものだった。

しかし、ツナの力により実態化した。

それにより、カモツナと同様炎を使うものとなったらしい。

その力を引き出す方法は不明。

しかし、思い当たることは、ひとつ。

「誰かを守りたいと思うんだ」

「心…？」

ツナは仲間を思うことで、守りたいと思うことで強くなる。

ツナの力で実態化して大空属性の力を得たということなら、その力を引き出す引き金はツナと同じだろうと、リボーンは推理した。

「今回の修行は“冷静”“リラックス”“安心”だ。この三つはマフィアには特に重要であって、一部では“カピターレ”と呼ばれるんだ」

マフィアは常に何があっても冷静でなければならない。

さらにボスは周りをリラックスさせ、安心させることも重要となる。

今回の修行は、ボスにふさわしい要項を試す修行でもあった。

「…あつ、じゃあこの詩…」

ツナはバックから紙を取り出した。

荒む天気 荒む空気

それは光を見失った心の暴走

しかしそれを包みなだめるのは

広く大きな晴れ渡る空

その優しい空に触れたとき

癒され浄化されるとき

完全な大空があらわれる

荒んだ天気・空気はツナが遭難したときの全員の心情

しかしツナは冷静さを取り戻し、見事帰ってきた。
優しい空とはもちろんツナのことだ。

「読解力のねえやつだな」

「う、うるさいなっ！」

ごもつともなことを言われ、ツナは恥ずかしくなった。

「とにかく、お前の傷の治療もあるし、さっさと帰るぞ」

「…うん…！」

ツナはリボーンに笑いかけた。
リボーンもツナに笑いかけた。
ただし、ニヒルな笑みで。

そして、全員が家路についた。

ア 第三関門 “カピターレ” (“冷静” “リラックス” “安心”) クリ

標的18 第三関門“カピターレ” (後書き)

謎が多く残りましたが、
次回解き明かそうと思います。

標的19 “セツラツジヨ”の目覚め(前書き)

新たな設定来ました！

でもまだまだ解き明かす予定はないです。

「いたついたたたた！ガーゼに消毒液つけすぎじゃないの！？
すぐくいた…いったあああ！！」

さつきからこの調子。

傷の消毒で痛み、動くため打撲の痛みを繰り返す。

もはやツナは泣いていた。

「泣くほど痛くねえだろ。目に消毒液ぶっかけるぞ」

なんて恐ろしい赤ん坊だろうか。

ツナはぶるぶると恐怖で震えた。

普通の赤ん坊はそんなことはしない。

いや、そもそも話さない。

「じ、十代目…大丈夫スか？」

「すっげえ痛そうだな…」

獄寺と山本が心配してツナに話しかける。

なんて優しい二人なのだろう。

それに比べてこの赤ん坊。

「だ…大丈夫…いたたっ！」

こめかみがズキズキする。

ここも切ったらしく、切り傷よりも少し傷が深かった。

「おわったぞ。最後までさわぎやがって」

「つぎやあー!!」

リボーンがとどめに背中を蹴った。

しかも絶賛打撲中区域に。

ツナは事切れたように静かになった。

「綱吉様：大丈夫なんですか、リボーンさん」

ロンジが苦笑いしながらリボーンに聞いた。

「こいつは柔じゃねえからな。大丈夫だろ」

他人事のように、リボーンはさらりと言う。
そしてなぜだか楽しんでいるように見える。

「綱吉様、お水です。飲めますか？」

ロンジがコップとタオルを持って来た。

「す、すみません…。ありがとうございます」

ツナは痛みを耐えながら起き上がる。

そしてコップを受け取り水を飲み干した。

からからに渴いた喉が潤される。

するとロンジがタオルでツナの汗を拭いてくれた。
濡れタオルはひんやりとして気持ち良かった。

「新しい着替えを用意しました」

「…なんだかすみません」

「いえ、お気になさらないでください。私の仕事ですから」

ロンジはにっこりと優しい笑みをツナに向ける。

自分の仕事に生きがいを持っているのだろう。

その顔は生き生きとしていた。

ツナが着替えるとトンノとナッツが飛び込んできた。

ツナの治療が終わるのをおとなしく待っていたらしい。

「ガオツ」

「キュルルル」

「っわ!!」

二匹は嬉しそうにツナに擦り寄る。

ツナは優しく二匹の頭を撫でた。

「あ、そうだ。リボーン、聞きたいことがあるんだけど…」

「なんだ」

リボーンは床からベッドへと跳びうつった。

「なんで、オレが一人でいたときのことかわかったんだ？修行のことだって…」

「ああ、それはトンノが教えてくれたんだ」

リボーンはトンノを撫でながら言った。

「トンノの瞳には出来事を記憶する力があるんだ。おめえが一人でいたときは、全部こいつが伝えてくれたんだ。ま、テレパシってやつだな」

「…トンノが」

ツナは少し驚いたようにトンノを見る。

まさかそんな力があつたとは思ってなかった。それはトンノがもともと持っていた力なのだろう。

「んで、他に聞きたいことがあんだろ」

「…あ、うん。これなんだけど」

ツナは先日リボーンから渡されたバックの中から錠と鍵を取り出した。

「あ、あれ？昨日となんか違う…」

先日は錆び付いててなにが書いてあるのかもわからなかった。しかし、錆はなく、きらきらと輝いている。

「…それは!!」

ロンジが驚いたようにそれを見る。

「どうやら、本当らしいな」

「な、なにが？」

リボーンが真剣な顔をする。

それを見てツナは自然と緊張した。

「それは、マフィアに伝わる“tesoro nascosto”
というもののひとつだ。本当は他にもいくつかあるんだが、まだ見
つかっていない。だが、これだけは“seraggio”
は見つかったんだ」

「て、てぞ…？せつら…？」

「ははっ、なんだそれ」

「

イタリア語のわからないツナと山本はちんぷんかんぷんだった。

テソーロ
tesoro ナスコスト
セツラツジヨ
serreggioは鍵をかけること。

「なんで…そんなものをボンゴレが？」

「ボンゴレ見くびんなよ。ボンゴレの…ボスや守護者たちにしかわからない、はいれないところにあっただ」

とても綺麗な錠と鍵だった。

ふちは金色でどこされ、中には広がる大空と、燃える…炎。

ツナがそれを指先で撫でる。

ドクンッ

動悸が激しくなる。

キンキンと頭の中でなにかが鳴り響く。

そして、流れてくるのは

淡い、かすかな声。

願う祈りは光となり

主を守る力となる

帯びる炎の力は

主を包む力となる

多くの欲望が渦巻く世界

混沌とする人々の心

しかし、それをなだめ

清め、澄ませるものは

ひとつの強い、強い炎

空と海の狭間で揺れる心

それを唯一動かすものは

覚悟と意思と希望と仲間

自然と流れる心地のいい声。
ツナはそれに心をあずける。

ピクリと、錠が動き出す。
カタカタと、鍵が動き出す。

熱を持ったそれは、ツナの心と連動していた。

「…やっぱり大空か」

錠と鍵の動きがおさまると、リボーンはそれに触れる。
あたたかなそれは、明らかにほじまっていた。

「ロンジ、九代目にすぐ連絡しろ」

リボーンが錠と鍵を見つめながら言う。

「セツラツジヨが…発動しはじめた」

「っ！…はい！！」

ロンジは急いで電話をとり、隣の部屋へ移動した。

「……………」

ツナはただ今起きたことを見ていた。

頭に流れてきたものは、今のはなんだったのだろうか。

「ツナ、なにか変わったことはあったか？」

リボーンの問題に一瞬驚いたが、静かに言葉を発する。

「願う祈りは光となり

主を守る力となる

帯びる炎の力は

主を包む力となる

多くの欲望が渦巻く世界

混沌とする人々の心

しかし、それをなだめ

清め、澄ませるものは

ひとつの強い、強い炎

空と海の狭間で揺れる心

それを唯一動かすものは

覚悟と意思と希望と仲間…」

「…！！！！」

珍しくリボーンが動揺した。

一瞬、身体が強張る。

「…おめえの力ってことか」

「え？」

ぼつりと呟いたりボーンという言葉がわからなくて、ツナはリボーンを見た。

（誰も…今まで、九代目さえも出来なかったこれを、ツナは…出来たのか）

リボーンは口許を上げる。

(こいつの力は未知…ってことか。ならば…)

ウライラがツナを欲するのもわかる。
しかし、なんのために？

「リボーン、意味がわからないよ！今のって…」

ツナの声でリボーンは我にかえる。
そしてツナを見つめた。

ツナは訳がわからず、リボーンを見つめかえず。

「…こんな凡人がな」

「んなっ！！なにがだよ失礼な！」

ツナはリボーンの言葉に怒りを覚えた。
突然失礼なことを言う赤ん坊だ。

「お前が言った今の詩は、錠と鍵に伝わるものだ。そいつらは持つべき者を選ぶ。主と決めたやつには、そいつらは力となるはずだぞ。目を閉じて、問いかけてみる」

ツナは言われたとおりに目を閉じた。
そして、優しく問いかける。

「……主よ。我らの主よ。」

「!？」

突然聞こえた声は二重。

二人が同時に話している。

「主よ。あなたは選ばれた。我ら“tesoro nascos
スト セラッジョ”の“seraggio”によつて。」

「……あなたたちは一体……」

「我らは世に伝わる秘宝のひとつ。それは昔、宇宙が始まった頃からはじまる。」

錠と鍵は静かに語る。

ツナたちは黙ってそれを聞いていた。

「我らは、いずれ訪れるであろう世界の波乱をなるべく抑えるため、このような姿となり世界に散らばった。」

……ばらばらとなった彼らは、人の近くで、静かに人を見守った。最初は誰もが優しく、美しい心をもっていた。

しかし、この世に完璧などなく、どんどん世界は傾いていった。

「悪は人を汚し、世界をも汚した。その力に耐えるため我らは己を封印し、目覚めのときを待った」

突然見えた、ほのかな光。

彼らを包むのは、あたたかく優しい炎。

その炎に導かれるように、彼らは目を覚ました。

「我らを目覚めさせたのは、あなたがはじめて。あなたの力であれば、近づく悪を止められる」

「悪って何？てか、オレの力はそんな…」

彼らの言うことをツナは理解できなかった。

先程リボンに言われたとおり、ツナは凡人だ。

そんな自分に力なんてあるのかとツナは疑う。

「現に、あなたは我らを目覚めさせた。我らがあなたの力となりましょう」

錠と鍵は、輝きながら形をかえる。

それはだんだん人の形へと変化した。

両手には、小さな人がふたり。
緑の髪にオレンジの目をした、かわいらしい姿だった。

「「我らは錠と鍵の神。」」

「んなっ！！同じ顔！！！」

ふたりの顔を見てツナは叫んだ。
同じ顔がふたつ。
しかし、髪型だけは異なっている。

「我はシクロ」

「我はシスイ」

ふたりはぺこりとお辞儀をして挨拶をした。
シクロは長髪でシスイはおかっぱ頭をしている。

「本来は大人型なのだが、“tesoronascosto”が
揃わないためこんな姿なのです」

「それゆえ使える力も限られ、仲間を探すことができないのです」
ふたりはツナの掌で語る。
そんな二人にリボーンは問う。

「おめえらが言う悪とは、ウライラのことが」

「いえ、あれからも悪を感じますが、違う悪のことです」

ふたりの言うことはよくわからなかった。
長い眠りで鈍っているのだろうか。

「綱吉様」

「わっ！そんな呼び方しないで！オレそんな偉いわけじゃないし！」

自分に“様”などつけることはないだろう。
ツナは必死にその呼び方を否定する。

「では、何と呼べば……」

「普通にツナでいいよ。その方が落ち着くし……。」

「主の命令であるならば、ツナ。」

ふたりの目がツナをとらえる。
ツナもふたりを見つめる。

「……よろしく、おねがいたします」

「うん、よろしくね」

ツナはふたりに笑顔を向ける。
ふたりもツナに笑顔を向けた。

「やはり、綱吉様は不思議なお方だ」

「そついう奴だからな、ツナは。時々すげえ成長を見せる」

ロンジとリボーンはツナを眺めながら言う。

「ま、オレの生徒だからな」

リボーンは当たり前前とでも言うつように笑いながらコーヒーを飲んだ。

(おめえの力、オレがぜんぶ引き出してやるぞ、ツナ。)

太陽が生き生きと輝いた。

標的19 “セツラツジヨ”の目覚め(後書き)

獄寺「なんか…途中からオレら空気じゃねえか？」

山本「ははっ！確かにそうだな！」

獄寺「なんでだ！なんで十代目の右腕であるオレが空気なんだああああ！！！！！！」

山本「まあまあ、落ち着けて」

…申し訳ない(´・`・´・`・`)
ごめんね二人とも(笑)

標的20 誕生の理由(前書き)

ごちゃごちゃして読みにくいですね！
はい、ごめんなさい！

あとがきにちよっと説明つき！

標的20 誕生の理由

あと少し、あと少し

ああ、まだ力が足りない

力があれば、簡単なのに

早く、早く、早く、早く

僕の手の中に落ちるんだ。

「うわあ、おいしい！」

「ロンジは料理が上手いからな、九代目もロンジの料理を気に入ってたんだぞ」

「ありがとうございます」

ツナはロンジが作ってくれたリゾットとオニオンスープを頬張った。

せめて打撲の痛みががおさまるまでと、ツナ達はロンジの泊まるホテルで休養していた。

湿布のおかげで痛みは最初よりもだいぶマシになった。

「「ツナ」」

「わっ！びっくりした！」

ツナに話しかけたのは、テソーロtesoro ナスコストnascostoのセser
ラッraggio、シクロとシスイ。
二人は申し訳なさそうな顔をしていた。

「「申し訳ございません。まだ、仲間と会話ができないみたいです。おそらく、まだ封印されたままだと……」」

「いいよ、気にしないで！そんな簡単に見つかるわけでも封印がとけるわけでもないみたいだし……」

二人がとてもかわいそうに見え、ツナは慌ててフォローした。

「どこにいるのかもわかんねえのか」

「「はい。わたしたちはその力は弱く……」」

リボーンの問いに二人はうなだれた。

「わたしたちは」？」

二人の言葉に疑問を持った。

「はい、わたしたちは錠と鍵を守る者なので……」
「ま、まさか他にもいるの？」

「なに言ってるんだ、ツナ。こいつらもボンゴレリングの守護者やアルコバレーノと同じように七人いるんだぞ」

リボーンが当たり前とでも言うかのようにツナに説明した。
そんな話しなかつただろうとツナは心の中で思った。

「シクロ、シスイ、ツナに説明してやれ」

「では、ツナ。今から テソーロ tesororo ナスコスト nascosto について
お話をします。」

シクロとシスイは優しく話しかけるように、懐かしむように話しはじめた。

はるか昔。

地球も、宇宙も、なにかもが存在しなかったとき、
nascosto^{ナスコスト}は生まれた。 tessoro^{テソロ}

七人はただ真つ暗闇を漂っていた。
七人で楽しく会話をしながら。

すると突然、大きな音をたててなにかがはじけた。
それは後にビツクバンと呼ばれるようになるのだが、七人はまだなにも知らない。

どんどん広がる宇宙。

石と石とがぶつかりあい、
ひとつの大きな星となる。

目の前に誰かが現れた。
その人は名前がないという。

ひとりぼっちで寂しいと。

七人はその人に気に入られ、共に過ごすようになった。

名前をもらい、力をもらう。

そして七人も、その人に名前を与えた。

しばらくは楽しい日々がつづいた。

広がりゆく宇宙を見つめながら彼らは話をした。

しかし、みるみるその人の力は弱まっていくな。

“何故？”と七人が聞くと、その人は静かに答えた。

“わたしは、ある星に希望を託したんだ”

その人はひとつの星に指をさす。

その先には、まだまだ小さな星。

“わたしはあれに、わたしの全ての力を使って、生命が住めるようにしようと思う。水をつくって、大地をつくって、空をつくるんだ”

その人はうれしそうに話す。

しかし、突然悲しい顔をしてつぶやいた。

“でも、この星の後に生まれる生命、人間は、どうやら争いを起こしてしまうらしい。しかし、わたしは彼らを愛している”

その人は愛しそうにその星に手をかざす。

長い年月をかけて、その星は青い星へと生まれ変わる。

“この星はわたしの命。彼ら次第でわたしは死ぬだろう。でも、わたしが勝手にこの星をつくったのだから、仕方のないこと。”

その人は苦しみながら言った。

“わたしは力を使いすぎた。しばらく眠りにつく。その間、この星になにが起こるかわからない。だから…”

七人はその人の苦しむ姿を、涙を流しながら聞く。

“君たちが、この星を守ってくれないだろうか”

苦しみながらも見せる笑顔。

七人は胸が苦しくなる。

“いずれ、君たちは人間たちの悪によって汚れた世界にすることが辛くなる。その時は、自分たちを封印してくれ。でも、心配はしなくていいよ。…これを”

するとその人は、掌に映像をうつす。

そこには、美しく燃えるオレンジの炎。

“この炎なら、君たちは目覚めることができる。そして、この炎を出すことができる少年を、どうかわたしの元へ導いてほしい”

炎を見つめながらその人は言う。

“彼なら…わたしを目覚めさせることができるはずだ”

そういうとその人は七人に最後の力を授ける。

七人に備わったそれぞれのアイテムはきらきらと輝いている。

“それは、わたしの居場所へ導くアイテムとなる。それを使うことができるのも、炎の少年……”

その人は眠たそうに話しながら、七人を抱きしめる。

“……しばらくは会えなくなるけど、大丈夫。また会えるからね”

暖かなぬくもりは静かに離れていく。

その人は幸せそうな笑顔を見せて消えていった。

その人は生きてる。

この星のどこかで。

七人はその人の願いを叶えるべく、青い星……地球へと向かった。

「わたしたちは、その人からもらったアイテムを大事にしながら、しばらくは幸せに過ごしていたんですが……」

たえない争い。流れる血。

罪なき人々が死んでいく。

世界は悪で汚れ、七人はとうとう自分たちを封印することにした。

大丈夫。

また会える。

いつかまた出会えることを信じて。

「そしてわたしたちは自ら封印をし、あなたがくるのを待っていました」

「そんな大変なことが…」

二人の話を聞いて、今までどんなに大変だったかを思い知った。

この星を、地球をつくったその人は眠りから覚めるのを待っているのだ。

「tesoro テゾーロ nascosto ナスコストとか セツラッジョseraggio セツラッジョって言うのは、その人がつけてくれた名前なの？」

「はい。英語とか日本語とか、人間が作る言葉を知ってたらしく、

気に入っていたイタリア語で名前をつけてくれました」「

二人はにこにこ笑いながら言った。

その名前に誇りをもっているのだろう。

とてもうれしそうにしている。

「ということは、あとの^{テソーロ}tesoro ^{ナスコスト}nascostoは五人？」
シクロとシスイを入れればあと五人、と思っていたのだが、どうやら違うらしい。

二人は首を振って説明しはじめた。

「わたしたちは二人で一つ。二人で^{セツラジヨ}serraggioという役目なのです」「

^{テソーロ}tesoro ^{ナスコスト}nascostoには七つの役割がある。

NO・7 ^{アッレマンツァ}alleanza
名はセブラーノ

^{アッレマンツァ}alleanzaは同盟という意味を持ち、印判を守る。

NO・6 ^{セツラジヨ}serraggio

双子で名はシクロ（兄）、シスイ（弟）

セツリツツシヨ
serraggioは鍵をかけることで、錠と鍵を守る。

NO.5 アトウランテ
atlante

名はファイアス

アトウランテ
atlanteは地図帳という意味で地図を守る。

NO.4 ビノーコロ
binocolo

名はフォア

ビノーコロ
binocoloは双眼鏡という意味で双眼鏡を守る。

NO.3 ウエイコロ
veicolo

名はスリノキ

ウエイコロ
veicoloは乗り物という意味でほうきを守る。

NO.2 アルマ
arma

名はツイ

アルマ
armaは武器という意味で盾と矛を守る。

NO.1 ジェヌイーノ
genuino

名はワンゴラ

ジェヌイーノ
genuinoは真実のことで水晶を守る。

「ほ、ほんとに七人なんだ…」

二人の説明にツナは戸惑っていた。

「なんでNO.3のやつは乗り物にほうきなんだ」

「「現代の“車”とか“バイク”とかは環境に悪いから、らしいです。でも実際の移動手段はほうきの力による瞬間移動みたいですね」

謎が多い。

まったくわからないことばかりだ。

今まで封印されていたので謎が多いのも無理はないのだが。

「リボーンは知らなかったの？」

「オレはアルコバレーノになるときに少し聞いたぐらいだ。まさか本当にいるとはな…」

リボーンでも知らないのだ。

前まで一般人だったツナが知るはずないだろう。

「ねえ、シクロ、シスイ。」

「「なんでしょう、ツナ。」

返事までも息ピッタリの二人がツナを見る。

顔も身長も声も同じ。

唯一違うのは長髪とおかつぱ頭という髪型だけだ。

「地球をつくったっていう…神様？みたいな人の名前はわかる？」

「彼は…そうですね。神様みたいなものでしょうね。彼の名は、スペランツァ。彼の好きなイタリア語で“希望”という意味です」「

スペランツァ
s p e r a n z a 。

希望。

彼は地球に希望を抱いていた。

人間に希望をかけたのだろうか。

「…そっか。いい名前だね！」

ツナは笑顔で二人に言う。

二人もつられて笑ってしまった。

「…あの、ツナ」

「ん、なに？」

「ツナの腕から、とても嫌な気を感じるのですが…」

二人は心配そうな表情をしてツナの腕を見る。

ツナは服の袖をまくり、鎖の痣…呪いを見せた。

「わあ!!!」

二人は飛び上がって驚き、震えながら腕の痣を見る。

「ご、ごめんね！驚かせちゃった…かな。これは…あの、ボンゴレリングとオレの力を狙う奴にかけられた呪いなんだ」

「のっ、呪いいい!!!?」

二人はさらに驚いて、怖がってしまった。

「あ、怖かった!?!ごめんごめん!」

「すみません…驚いてしまって…」

ツナが慌てて呪いを隠すと、二人は安心したようにため息をもらす。

「…ツナは、狙われているんですね」「」

「うん…。だから君たちにも被害が及ぶかも知れないけど…」

「いえ、大丈夫です！！我らはツナを守るために戦います！」「」

二人は握りこぶしをふるふると震わせ、闘志をあらわした。

「え、いいよいよ！危ないし…」

「大丈夫です！主であるツナの力になるためにここにいると言っても過言ではありません！」「」

二人の気迫におされ、ツナはなにも言えなくなってしまった。あまりにも二人の闘志が熱い。

「よかったじゃねえか、ツナ。仲間が増えたぞ」

「よ、喜んでいいのかな…」

ツナは、はは、とかわいた笑い声をあげた。

二人の闘志はしばらくの間燃えつづけた。

「ねえ、まだなの？」

部屋に険悪な雰囲気漂う。

部下は怯えながらウライラに深々と頭を下げた。

「もっ、申し訳ございません！力の反動が強く、まだ全員…」

部下が話している途中で、ウライラは机を思いきり叩いてさえぎつた。

「あまりにも遅すぎですよ！使えないな…」

ウライラはイライラしながら部下を睨む。

部下は一礼をしてそそくさと部屋をでていった。

「はやく…はやくほし…」

ウライラの目は欲望に燃え、声は地を這うように低い。
凄まじい黒いオーラをまといながらウライラはつぶやいた。

「わたしをさらに強くする力…ボンゴレリング…沢田綱吉……………」

悪を増殖させるのは欲望。
欲望を増殖させるのは人。

「はやく…器を変えなければ……………」

欲望の犠牲となれば、人など、操り人形同然なのだ。

標的20 誕生の理由（後書き）

なんか文章では、tesoro テソーロ nascosto ナスコストとあらわさ
れているみたいですが、
実際は、

tesoro nascosto

です。

つながってます。

tesoro nascostoで（テソーロ ナスコスト）と読
みます！

標的 21 姿を変える鳥（前書き）

短め？でしょうか。

いつ戦わせようか、迷います。

標的 21 姿を変える鳥

きしきしと痛む右腕

呪いをかけられ数日経ったが、

鎖は右腕を徐々に覆い、

右ひじを通り越し、二の腕にまで進行していた。

同時に地味な痛みも増すばかり。

本当に修行は意味があるのだろうか。

そんな疑問さえも浮かんできた。

ロンジの泊まるホテルで休養をとり、なんとか打撲が和らいだツナは三日ぶりに帰宅した。

ツナの母、奈々にはリボンがどうやら上手く言っていたらしく、何も聞かれなかった。

夕ごはんはと風呂を終え、部屋でくつろいでいたツナは、ふと自分の右腕を見る。

袖を捲れば入れ墨のような呪いが腕いっぱいに広がっている。

「うっわあ、入れ墨みたい。このまま学校に行ったら絶対停学とか

退学とかだよな…」

本当に学校が休みでよかった。

自分は普通の生徒でいたいのにな、こんな呪いのせいで不良と見なされてしまうかも知れない。

獄寺ほどの不良であれば、堂々と入れ墨を容れられるだろうが…。

ツナは普通に生きたい。

不良になどなる気はないし、そもそもなれない。

「…オレがなににしたって言うんだよ……」

布団に顔を埋め、ぽつりと呟く。

すると、傍でずっと見ていたトンノが、小さな足音をたててツナに寄り添う。

ツナがトンノに視線をやると、トンノがじっとツナを見つめていた。

「…なに？心配してくれてるの？」

「キュルルル」

差し出された掌にトンノは顔を寄せる。

ふわふわとした羽が気持ちいい。

トンノが顔をあげ、再びツナを見つめる。

ザワツ

暖かい風が吹きわたる。

オレンジ色の、炎が全身を包み込む。

その心地良さにツナは身体を預け、目を閉じた。

「……………」

どこかから声がする。
柔らかく、落ち着いた声。

それはどんどんツナに近づき、それと共にツナの意識も覚醒する。

「…ツナ。」

傍でツナをよぶ声がある。

その声に答えようと口を開くが、まだ声はでない。

「…焦らないで。ゆっくりでいい。僕はここにいる」

声の主はツナの手をそっと握り、大丈夫とツナに言う。

ツナはゆっくりと身体感覚を取り戻す。

そして、声の主を確かめるべく、重たいまぶたをあげた。

金色の髪

オレンジ色の目

白色の服

優しく微笑む声の主に、ツナは見覚えがない。

しかし、握られた手の温もりは、確かに知っている。

「…誰？」

「わかるわけないよね。こんな姿じゃ」

声の主は笑いながら姿を変える。

オレンジの炎に包まれた、それは。

「…っ、トンノ!？」

「その通り」

金色と白色の混ざる美しい羽。

オレンジ色の目。

その姿は本物のトンノだった。

また炎に包まれ、再び人の姿へと変えたトンノは嬉しそうに笑った。

「嬉しいな、ツナと普通に会話ができる!」

ツナはまだ信じきれていなかったが、確かに目の前にいるのはトンノだ。

「どうして…トンノが人の姿なの？」

「これもツナの力だよ。人の姿になれるのも、普通に話せるのも」

そう言うとトンノは、掌にオレンジの炎を出す。

「ツナの炎で、僕も大空属性になったみたいだよ。まあ、例えるならナッツと似たようなもんかな」

「ナッツと…って、匣兵器みたいなの？」

トンノは頷いて話をつづける。

「ツナの力があまりにも強いから、短期間で僕は敵と戦ったり、人に変化出来るようになったってわけ」

「ま、まさか！そんな力、オレには…」

「あるんだよ。ツナ。」

ツナの否定をトンノが遮る。
トンノの瞳に嘘はなかった。

「ほんとには、ツナの意識の中に流れ込まなくても会話してきたんだけど、こういうことも出来るのか試してみたくなっちゃって」

トンノは無邪気に言った。

外見は大人だが、中身は少年のようだ。

トンノはツナの右腕を見つめ、明るい声で言う。

「大丈夫だよ、ツナ。少しずつ、呪いの力を抑えられるようになってる」

暖かい手がツナの腕に触れる。
ピリツとかすかな痛みを感じた。

「確かに、この進行じゃあすぐに左腕にたどり着くけど…修行を終えれば、進行にも、…ウライラにも、影響を与えられるはず。」

心配しないでと、笑顔を見せるトンノ。
その笑顔にツナはひどく安心感を持った。

「…あ。」

「何？」

トンノが何かに気付いたように反応する。

「リボーンがツナのこと呼んでる。そろそろ戻ろっか」

すると、再びツナは炎に包まれる。
そして同じように意識が遠退いた。

「……おい！ダメツナが！！」

リボーンの声で目が覚め、次の瞬間、頬を銃弾がかすめた。

「っんなー！びっくりするじゃないか！」

「起きねえお前が悪いんだ」

自分が正しいとでも言うかのようにリボーンは堂々と言い張った。

「キュルルル」

ツナの隣で鳥の泣く声があった。

トンノがばさばさと羽を動かす。

「ん、なんだトンノ。いつもと何か違うじゃねえか」

トンノを見てリボーンが気付く。

さすが最強のヒットマン。

「…トンノ。大丈夫だよ」

ツナがそう言うと、トンノが炎に包まれ、人の姿に変化した。

「!?!」

「…この姿では、はじめましてだね。リボーン」

人の姿のトンノが、驚いているリボーンに話しかける。

「…それも、ツナの方が」

「うん。さっきまでは、ツナの意識の中で会話してたんだよ」

ね、とトンノがツナに同意を求め、慌ててツナは頷いた。

「…まだまだいろんな力があるってことか」

リボーンがにやりと笑い、ツナを見た。

本当におもしろい奴だ、とリボーンは思った。

「そつだ、ツナ。明日は修行だぞ」

「えっ、いきなりすぎじゃないか!?!」

「怪我しててもするもんはする。明日だぞ、わかったな。」

リボーンは一枚の紙をツナに投げる。
慌ててツナはそれを受け取り、それが何かはすぐにわかった。

「…ヒント!？」

「そうだぞ。まあ、読解力のねえお前には意味がないかも知れねえがな。」

リボーンはツナを馬鹿にして部屋を去った。
ツナは何も言い返せずにリボーンを見送った。

「確かに読解力はないけどさ……」
ぶつぶつ言いながら紙を見る。
隣からトンノも覗き込む。

ふと感じる暖かさ

それは当たり前のように

手に入れ難いぬくもり

忘れてはならないぬくもり

気付いたときにはじめて

そのありがたさに包まれる

「…やっぱり」

やはりわからない。

ツナはため息をついた。

しかし、トンノは納得したように頷いていた。

「なに、わかったのトンノ!？」

「なんとなくだけど、わかったかも」

トンノが理解したことにツナはショックを受けた。

そして自分の読解力のなさを実感した。

「そんなに落ち込まないで、ツナ。ツナは、…もうこのことはわか

ってるはずだよ」

「え！？嘘だろ！？」

トシノの言葉にツナは驚く。

今もさっぱりわからないのに、わかっているだなんておかしい。

「ツナが気付いてないだけだよ。ほんとかわかってるんだ。」

トシノは炎に包まれ鳥の姿へ戻る。

そして自分の寢床へ移動して目を閉じた。

ツナはしばらく紙を見つめていた。

標的22 第四関門“幸福”（前書き）

いつもより文が悲惨…！！

見苦しくてごめんなわい！

標的22 第四関門“幸福”

ふと感じる暖かさ

それは当たり前のように

手に入れ難いぬくもり

忘れてはならないぬくもり

気付いたときにはじめて

そのありがたさに包まれる

「極限に修行だあー!!」

「うっせえ、芝生頭!!」

「なんだと、タクヘッド!!」

晴れ渡る空の下で、二人の守護者が言い争う。

ぎゃいぎゃい騒がしい中、ツナ、山本、リボン、ロンジはシートに座りながら獄寺と了平のやりとりを無視して会話をして楽しんでいた。

今日も修行のため、広い森へとやってきたが、まずは腹ごしらえだとロンジが昼食を用意してくれた。

おにぎりや卵焼きなど、さまざまなお惣菜が弁当箱いっぱい敷き詰められていた。

さらにはデザートまでも用意しており、完食する頃にはツナたちはお腹いっぱいになっていた。

この状態ではお腹の中で食べたものがぐるぐるとまわり、気持ち悪くなってしまうだろうと、しばしの間休憩をとることにした。

そしてあの二人の言い争いがはじまったのだった。

「極限に空気が美味いぞー!!!」

「さつきからうるせえって言ってんだろ芝生!!!少しは黙りやがれ!!!」

「これはオレの心の叫びだ!それを素直に口に出して何が悪いんだ?」

「お前の心の叫びはただうるせえってだけなんだよ!!!」

こんな会話を繰り返しはや10分。
止まることのない言葉のキャッチボールは、いびつな形で成り立っていた。

「ははっ、相変わらずだな、あの二人」

「まったくだ。騒がしいっいたらありやしねえ」

山本が時雨金時を素振りしながら笑って言うと、リポーンは鬱陶しそうな顔をして持参のコーヒーを飲む。

「さすが晴の守護者。輝いていらっしやる」

ロンジが可笑しそうに笑いながら後片付けをする。
ツナもそれを手伝いながら二人を見た。

「獄寺くんとお兄さん、いつもあんな感じなんです。でも二人って、どこか似てるんですよね」

「確かに、似ていそうなお二人だ」

止まない言い争いをBGMにして、それぞれの時間が過ぎる。

(久しぶりだなあ、こういう平和な感じ)

深呼吸をすると、澄んだ空気が肺を満たす。
ぽかぽかとした日差しは眠気を誘った。

「キュルルル」

「わっ」

突然頭の上にトンノが降り立ったので、ツナは驚いて声を上げた。
ツナが腕にトンノをうつすと、トンノは耳元でツナに話しかけた。
トンノが話せるということはまだ獄寺たちに話していないからだ。

「ツナ、森の向こうに嫌な気を感じる」

「嫌な気？」

ツナはトンノの言う森の方向を見る。
しかし、嫌な気は感じられない。

「オレにはわからないけど…ほんとに感じる？」

「感じるよ。ツナの腕の呪いと同じだ」

「…！？ほんとか、トンノ…！」

まさか、とツナは思った。

“鎖の呪縛”と同じ嫌な気ならば、呪いをかけた男、ウライラが近くにいるということになる。

(でもあいつが近くに来るとこの呪いが反応して痛むはず…。)

腕に痛みはない。

しかしトンノは嫌な気を感じている。

トンノの言うことに間違いはないとツナは思った。

ツナが考え込んでいると、トンノが何かに気付いたようにバサバサと羽を動かして慌てだした。

「ど、どうしたんだよトンノー!!」

「ツナ、気配が変わった!こっちに向かって来る!!」
トンノがさらに慌ててツナに告げる。

するとツナにもその気配が感じられた。

リボーンもそれに気付き、ツナの側に寄る。

「ツナ、何か来るぞ」

「…うん」

ツナとトンノ、リボーンは身構える。

きらりとなにかが光った。

「！！ツナ避ける」

「っっわ！！」

リボーンに蹴り飛ばされ、ツナは地面に倒れた。身を起こすと、ツナのいたところになにかが刺さっている。

「あ、ありがとリボーン……。これって……」

「毒針だな。しかしこれは人間の作ったもんじゃねえ」

「大丈夫か、二人とも！！」

今の異変に気付いた山本たちが駆け寄る。そして毒針の飛んできた方向を見た。ぴりぴりと殺気が伝わる。

するとまた毒針が飛んできた。

しかし、今回は一本ではなく複数。

全員は慌ててその場から離れた。

止まない毒針の雨。

避けても避けても毒針はとんでくる。

「…つくそ！！キリがねえ！！」

獄寺はリングに炎をともし、ボンゴレ匣を開口させた。
そしてフレイムアローを放ち、毒針を砕く。

「すげえな獄寺！」

「そんなこと言ってる暇があつたらためえもかわしやがれ！！」

山本はのんきに感心した。

しかし、山本にも大量の毒針が襲い掛かる。

山本も匣を開口させ、技をしかけた。

「時雨蒼燕流総集奥義、時雨之化！」

毒針を減速させ、山本たちはそこを離れた。

「誰がこんなもの飛ばしてきてるのだ!!」

了平が当たりを見回すが、人影は見当たらない。

すると、木々の間からなにかが飛んできた。

それは巨大な蛇の姿をした化け物で、まるで以前ツナを襲った化け物のようだった。

蛇は口から毒針を大量に放ち、ツナたちを襲う。

至近距離かつ先程とは全く違う高速な攻撃に、防御が間に合わない
と、誰もが一緒あきらめた。

ひらりと、なにかが舞う。

軽やかに、美しく。

炎をまとい、毒針に立ち向かう人影。

「ガオオオオオオ!!!」

ナッツの雄叫びにより、毒針が石化される。

ただの石となった毒針は、ぱらぱらと地面に落ち、砕けた。

その異様なスピードに全員が驚いた。

「じゅ、十代目！」

「ツナ！」

「沢田！」

獄寺たちを守るように蛇の前に立ちはだかるツナは、肩にナッツを乗せてハイパー化していた。

ツナは獄寺たちを一瞥し、笑顔を見せると再び目の前の化け物に向き直る。

「前の化け物と似たようなやつだな、トンノ」

ツナがもう一方の肩にとまったトンノに話しかける。

「多分ね。僕も戦うよ、ツナ。獄寺くんたちの攻撃じゃあ、あいつは倒せない」

「…わかった」

トンノは羽ばたき、光を放ち姿を変える。

ツナの力によって大空属性となったトンノは、身体から炎を放ち蛇

に立ち向かう。

蛇が毒針を放つが、トンノの炎により石化され、巨大化したトンノの体当たりをくらい大きな音をたてて地面に倒れ込む。

トンノがツナの元へ戻ると、ツナがトンノとナッツに何かを告げる。

それに承諾するように頷いたトンノとナッツは、蛇に向かって走り出す。

激怒した蛇は、なりふりかまわず毒針を放ち散らした。

毒針が獄寺たちに当たらないように、二匹はどんどん毒針を石化させた。

「…あいつらが頑張ってたんだ、オレたちもやるぜっ」

「当たり前だ野球馬鹿！」

「極限にやるぞおお!!」

三人もそれぞれの攻撃で毒針をかわす。

「綱吉様はなにを思いついたのでしょうか」

「ああ、ロンジは見たことがねえのか」

「なにをですか？」

「ツナの技だ」

リポーンは口許を上げて頭上のツナを見る。

ロンジはわけもわからず、ただツナたちを見ていた。

ツナは二匹に時間を稼いでもらい、X BURNERを放つ準備をしていたのだ。

「ゲージシンメトリー！発射スタンバイ！！」

コンタクトディスプレイにX字が浮かび上がり、ピーッと合図の音が鳴る。

「X BURNER！！！！」

剛の炎が勢いよく放たれ、蛇を包み込む。

「ギヤアアアアアア！！！！」

蛇は悲鳴をあげ、邪悪なオーラを放ちながら消えていった。

そこに残ったのは、小さな普通の蛇。

「あれ、こいつがさっきの蛇なのか？」

山本が蛇のしっぽを掴み、ぷらぷらと振ってみせた。

「誰かに化け物に変えられてたんだな」

リボーンが山本の肩に飛び乗って答えた。

ツナはナッツとトンノの元へ降り立ち、二匹の頭をなでる。

「ありがとな、ナッツ、トンノ」

「がるっ」

「どういたしまして、ツナ」

トンノは元の姿に戻り、ツナの肩にとまる。

ツナもハイパー化をといて、ナッツを抱えてリボーンたちの元へ駆け寄った。

「考えたじゃねえか、ツナ」

「そうですねよ十代目、さすがです！」

「そ、そうかなあ」

ツナは照れ臭くなって頬を赤くする。

「あ、そつだリボン！修行のこと……！！！」

「ああ、すっかり忘れてたな。だがお前はすでに合格だぞ」

リボンはけろりとツナに言った。

ツナは一瞬リボンが何を言っているのかわからなかった。

「え！！？合格って……いつ合格してたの！？」

「最初からだな」

「んなっ！！？意味わかんないよ！」

ツナは思い出したようにポケットから一枚の紙を取り出す。

ふと感じる暖かさ

それは当たり前のように

手に入れ難いぬくもり

忘れてはならないぬくもり

気付いたときにはじめて

そのありがたさに包まれる

「どつという意味だよ、これは！」

「お前、ほんとに気付いてないのか」

リボーンがため息をついて話しはじめた。

「今回は“幸福”。だがお前にはすでにこの感情が十分にあった。修行もやる必要なかったんだが、一応な」

「じゃあ、この詩の意味って……」

ツナは詩を見てやっと意味がわかった。

「そつだぞ。その“ぬくもり”つつつのが“幸福”だ。幸福なんてそんなもんだからな」

「なんだよーっ、なんで気付かなかったんだらうっ！」

ツナは地面に座り込んだ。

幸福なんて、そうやすやすと気付くものじゃない。
簡単そうで難しい幸福。

でも、人はふとしたことで幸福を感じているのだ。
それがどんなにちっぽけでも。

「よかったですね、十代目！」

「おめでとう、ツナ！」

「極限にわからんがよくやったぞ沢田！」

「あ、ありがとうみんな」

ツナは自然と笑みがこぼれ、心があたたかくなった。

(…あ。そっか。これが幸福って言うんだ)

一瞬感じたぬくもり。

これが幸福なのだと、ツナは意識した。
それはとてもあたたかいものだった。

「んじゃ、帰るか」

時は夕暮れ。

そろそろ帰らなければ家につくころには真っ暗だろう。

ツナたちはたわいのない会話をしながら歩いて帰った。

小さな幸福を感じて。

第四関門 “幸福” クリア

標的22 第四関門“幸福”（後書き）

学校がはじまります…。

更新が遅れるかも知れません。

でも途中でやめたりとかはしませんよ！

受験が関わってくるので不安ですけどね…（涙）

標的23 疑問(前書き)

小説を更新すると、

多くの方が見てくれるのが

とてもうれしいです！

癒されています(^o^) /

標的23 疑問

夜も更けた夜中の3時。

部屋には苦しそうな声が響く。

痛みが治まらない。

最初のころと比べ、痛みの継続時間が長くなっている。

そして間隔をあけずに襲ってくる。

額には大量の冷や汗。

息遣いは荒く、時々呼吸が止まる。

なんとか耐えようと、身体に力をいれてみるが、そんな努力はすぐに崩される。

腕を抑える手は震え、まったく役に立たない。

みしみしと音をたてる痣。

それは右腕を制覇し、ついに右足へとうつる。

いや、あらたに痣が出来上がったのだ。

足首には腕と同じように痣のはじまりがある。

痛みはどんどんツナを苦しめる。

「…うあつ!」

苦痛な悲鳴を上げたツナは、力尽きたように気を失った。身体はかたかたと痙攣しており、呼吸も不安定だ。

それを、上の寢床からリボーンは黙って見ていた。

（忍耐力を鍛えてもこの力：厄介だな）

リボーンは寢床から飛び降り、ツナのベッドへ乗り移る。

まるで生きているのかわからなくなるほどの顔色。

不規則な呼吸を繰り返し、それに連動するように汗が滴り落ちる。

「死ぬな、ツナ」

リボーンはそっとツナの手に触れた。

未だ痙攣は続いており、リボーンにもその振動が伝わる。

しばらくの間、リボーンはツナを見つめていた。

「……んー……？」

深い眠りから覚醒する。

正確に言つと、覚醒させられた。

なにかが身体を揺すっている。

しかしそれは小さく、ほんの小さな動きでしかないが。

ツナは無理矢理重たいまぶたをあげる。

すると、目の前に小さなシルエットがふたつ見えた。

「「ツナー!!」」

二人してツナに声をかける。

一瞬何がなんだかわからなかったが、少しずつ脳が働きはじめ、しばしの沈黙のあと、ツナは思い出したように声をあげた。

「…シクロ、シスイ？」

ツナに名を呼ばれ、二人は嬉しそうに笑った。

「よかったです。ツナ、苦しそうだったから」

「ん…苦しそう？オレが？」

ツナは二人が何を言っているのかわからなかった。

しかし、二人が指し示す方向を見て、一気に眠気が吹っ飛んだ。

「っんな！！痣が増えたあああああ！！」

ツナは自分の右足を見て叫ぶ。

右足首には、手首と同じように鎖の痣が巻き付いている。

慌ててツナは右腕を確認する。

痣は肩にまで及び、やっと二人の言葉が理解できた。

（また痣が進行してたんだ…。そういえば、夜中苦しかったな…）

すっかりツナは夜中の痛みを忘れていた。

気を失ってしまったから頭が混乱していたのだろうか。

「ツナ、痛いですか？」

二人が心配そうに顔を覗き込む。

ツナはそれに微笑んで大丈夫と伝えた。

「二人こそ大丈夫なの？あのあと、疲れちゃってずっと眠ってたけ

ど…」

あのあと、とは二人がツナたちに自分たち、“tesorona scosto (テゾーロ ナスコスト)” の話をしたあと、久しぶりに姿を戻し、喋ったためか疲れてしまい、何日か眠っていたのだ。

「はい。沢山寝たので回復しました」

「そっか、ならよかった」

ツナは指で二人の頭を撫でた。

二人は頬を赤らめて笑っていた。

「お、起きたのか」

ドアが開き、リボンが入って来た。

「まったく、トンノが心配してたぞ。おめえに呼びかけても返事はないし、意識の中にも潜り込めないってな」

「…よく覚えてないんだけど、そんなにオレ苦しんでた？」

「かなりな。冷や汗大量で苦しそうな声で、オレの睡眠を妨げるくらいにな」

「…すみません」

ツナは素直にリボーンに謝った。
しかし、不可解なことに気付いた。

(汗をかいたっていうのに…ベタベタしないし…)

額にも頬にも、何処にも汗の跡はない。
ペタペタと自分の顔を確かめるように触るツナを見ながら、リボーンは心の中で文句を言った。

(睡眠を妨げられた上に、おめえの汗を拭いてやったんだ。ほんとに世話のやける生徒だ)

ツナは知らない。

ツナが気を失ったあと、ため息をつきながらもわざわざ台所まで行き、タオルを湿らせてリボーンがツナの汗を拭いてやったことを。

「さっさと降りてきやがれ。ママンが朝飯が出来たって言ってたぞ」

「あ、うん…。…リボーン」

ツナがりボーンを引き止めた。

リボーンは立ち止まって何も言わずにツナの言葉を待つ。

「…ありがとう」

にっこりと笑ってリボーンに礼を言った。

わかっているのかわかっていないのか。

リボーンは「ああ」と短く返事をして部屋から出ていく。

小さなため息がひとつ。

しかし、それは機嫌のいいため息だった。

朝食を終えたツナは、特にすることもなく部屋でくつろいでいた。

奈々とランボ、イーピンやビアンキは一緒に出かけていった。

リボーンもついていくかと思ったら、行かないと意外にも断っていた。

学校もない、宿題も出されてない、ゲームもする気でない。久しぶりの暇を満喫しながらツナはベッドへとダイブした。

ちくり、と痣が痛む。

しかしそれは一瞬だったため、地味な痛みでしかなかった。

修行は着々と進んでいる。

あとひとつで修行完了となる。
それなのに。

(まったくよくならないなあ)

天井を見つめ、ツナは心の中でそう思った。

修行の仕方を間違っているのだろうか。

しかし、そんなへまをリボーンはするはずがないとその考えはすぐに消えた。

(…なにかが足りない?)

ふと、ツナは思った。

足りない。足りない。

なにかが足りない。

(それだけじゃない?)

なにかが心に引っかかる。
なにかが足りない。

しかし、その“なにか”がわからない。

ツナは思考をやめ、目を閉じた。
こついつとき、必ず頭に浮かび上がるのは…。

自分と同じ年くらいの女の子。
そして女の子を守るように傍に立つ男の人。

はかなくも散ってしまった命。

そして、その原因となった男の姿までもが現れる。

(ユニ… …)

10年後の世界で失った命。

気分が落ち込むと、必ずこのことを考えてしまう。

(…白蘭)

ツナは白髪に目の下に不思議な痣を持った男を思い出す。

彼は消えた。

だから世界は平和になった。

だが。

(あいつは…死んでない)

ツナの超直感がそう告げる。

あの時、白蘭はツナのX BURNERに包まれた。

しかし、決して人を殺すことをよしとしないツナは、白蘭を殺さないためにあのX BURNERを放った。

彼は消えた。

しかしツナはわかっていた。

白蘭は生きていると。

「…っ、こんな気分になるといつもこれだ」

呆れたようにツナは独り言を言った。

「…ツナ」

枕で声がする。

目をやると、シクロとシスイ、トンノがツナを見つめていた。

「大丈夫だよ」

ツナはふわりと優しい笑顔を向けた。

三人も同じように答えてくれた。

しかし、謎は残ったまま。

“ なにか ” とはなんだろう。

同じ疑問を、台所でコーヒーを飲んでいる赤ん坊も抱いていた。

(ツナは修行を完璧にこなしている。だが進行はあまり変化を見せ

ない。)

リボーンは目の前にいるレオンを見る。
レオンは眠たそうに寝転がっていた。

「お前はわかるか？」

レオンはリボーンが何を問うたのかわからず、首を傾げた。

(なにかが足りない、それは絶対だ)

リボーンはレオンを撫でながらその言葉を繰り返していた。

なにかが足りない。

なにかが引つかかる。

そして、ツナ超直感は別のなにかを捕らえていた。

小さくも黒い、欲のかたまりを。

標的23 疑問（後書き）

ツナの放ったX BURNERの正体。

これは私オリジナルなのですが、
まだ言えません！

近々発表しようかなと。
あ、物語上で。

いつ出そうか迷います。
でも楽しみ！

ツナが人を殺すわけない、と思っている私の勝手な考えですけどね！

ツナがボスになったあとのお話も企画してます（^^）

もちろん、平和で。

“ツナに人を殺させない”
これがわたしの覚悟だ！

読んでくださってありがとうございます！

標的24 誘拐（前書き）

余裕があったので更新しました！

みるみるアクセス数が増えていきます…
ありがとうございます！

標的24 誘拐

誰も寄り付かない路地裏。

異様な空気が漂い、足がすくむほどの寒気を感じる。

そこにいるのは複数の人間。

「…わかったな、てめえら。殺さないで連れて来いよ」

奴らの中心核であろう男が、部下に確認するように言う。

部下は黙って頷く。

男たちの腕には、ネズミのようなシルエットの入れ墨が施されている。

「よし、行け。沢田綱吉を捕らえに。」

男の合図で部下がばらばらに駆け出す。

複数のネズミが、深い夜に放たれた。

部屋を小さなライオンと鳥が走り回っている。

それぞれの背中には小さな人間が乗っている。

楽しそうな声を聞きながら、ツナはそれらを見守っていた。

今日も家には誰もいない。リポーンも今日は調べ物があると言って出かけて行った。

そして、リポーンが最後の修行だと言ってまた謎の詩が書かれた紙をツナに渡した。

ツナはその紙を広げ、詩を読んだ。

守りたい者。

傍にいたい者。

笑いあいたい者。

なくてはならない者。

その者のためならば、

人は何にでもなれるもの。

己を動かす感情。

自然の節理、自然な行動。

人はそれ無くしては生きられず。

理屈ではあらわせれない感情。

それに気付いたとき、

人は強さを手に入れる。

しばらくツナはそれを見つめていた。

今までの修行からして、今回試される感情は消去法でわかるはず。だが、ツナは七つの感情のことは覚えていなかった。

ふとツナは遊んでいる二人と二匹を見る。

(tesoro nascosto (テゾーロ ナスコスト))
て神様みたいなもんだと思ってたけど…)

ツナはシクロとシスイの笑顔を見て思う。

(子供みたいなのところもあるんだなあ)

二人と二匹が遊んでいる図は、とてもかわいらしく、自然と笑みがこぼれてしまうほどだ。

しばらくそれを見ていると、ピンポンと家のチャイムが鳴った。
ツナは一声返事をする、急いで階段を降りた。

「わっ、獄寺くん、山本!!」

「こんにちは、十代目!」

「よっ、ツナ!」

玄関のドアを開けると、そこには二人の友人がいた。
ツナは二人を招き入れ、リビングにあがるように行った。

そして部屋で遊ばせていた二人と二匹を思い出し、一階に来るように声をかける。

するとパタパタというナツツの足音と、バサバサというトンノの羽の音が聞こえた。

シクロとシスイはまだ二匹の背中に乗っている。

「ち、ちっちえ…」

「おつ、確かtesoro nascosto（テゾーロ ナスコスト）っていう奴らの仲間だったよな！前にも一度会ったんだけど、覚えてるか？」

二人の小ささに改めて驚く獄寺とフレンドリーに話しかける山本。二人は少しびくびくしながら頷いた。

「大丈夫だよシクロ、シスイ。二人はオレの友達だから」

ツナが獄寺と山本にジューズを渡すと、怯えている二人に言った。すると安心したように、それぞれ獄寺と山本の膝の上にちょこんと座った。

しかし身体が小さいので、片方の膝に座っているかたちだ。

「うおおおお…っ、小さい…っ」

獄寺は膝の上の生物のシクロという存在に感動していた。知ってのとおり、獄寺は不思議な生物に興味を持っているからだ。

「ははっ、ほんとにツナに懐いてんのな。ツナが言ったただけですぐなれちまった」

山本はシスイの頭を撫でながら言う。

しかし力が強いため、指先で撫でも髪の毛がボサボサになるくらいぐりぐりと強く撫でてしまっていた。

しかしシスイはにこにこ笑っていた。

「これでも セツラツン *ser raggio* っていう大切な役割を持つてるんだけどね」

ツナは笑いながらシクロとシスイ、ナツツとトンノにもおやつを用意してやった。

二人と二匹は嬉しそうにおやつを食べはじめた。

「やっぱり学校がないと暇だよな」

「そうツスよね。十代目にも会えないし」

「ツナたちには会えないけど、会いに行けるからまだましだぜ。部活がないなんて身体がなまっちまうな」

山本は肩をまわしながら苦笑いして言った。

聞くところによると、部活がない今は、山本はトレーニングやラン

ニングをしているらしい。

「このまま春休みとか夏休みとか冬休みとかと休みが繋がっちゃったらどうなるんだろうね」

「や、それはまじ勘弁だな」

たわいのない会話をしてツナたちは笑う。

何故かこういうのは久しぶりのような感じがした。

「そういえば、リボンさんは？」

「あ、なんか調べ物があるみたいで、今は出かけてる」

「だからこいつらと遊んでたのな」

山本は仲良くおやつを食べる二人と二匹を見て言う。

「なんかツナ、お母さん状態だな」

「お、お母さん!？」

何故お父さんではなくお母さんなんだろうとツナは思った。しかし、それほどツナは小さい子供の面倒を見るのがうまい。

「二人の匣兵器たちも遊ばせたら？」

「だな！おーい、次郎、小次郎！」

山本はアニマルリングに炎をともして呼びかける。

すると目の前に雨燕Ver・V（ローンディネ・ディ・ピオツジャ
バージョンボンゴレ）と雨犬Ver・V（カーネ・ディ・ピオツ
ジャバージョンボンゴレ）の二匹が現れた。

二匹はナッツたちの元へ行き、一緒に遊びはじめた。

「瓜はいいの？」

「えっ、いや…あの、あいつは…」

獄寺は気まずそうに頭をかく。

「瓜があいつらに何かするんじゃないかねえかって心配なんだろう獄寺」

「わ、悪いかよ！！」

山本は獄寺の考えを見透かしていた。

瓜は獄寺に慣れているのか慣れていないのかわからない。

ただ、しつけがなっていないのは事実。

ナッツたちに何かするかもしれない、と獄寺は思っていた。

「あいつらになんかやったら、飼い主である獄寺が責任とればいいんじゃない？」

「な…！」

獄寺は山本に反抗しようとしたがやめた。
山本が言うことにも一理あったからだ。

獄寺は何も問題を起こさないでくれ、と思いながらアニマルリングに炎をともす。

「によおん」

リングから現れた瓜は、ひとつ欠伸をして、ナッツたちの方向へ歩いていく。

それを獄寺は飼い主、というよりも親の気持ちで見守っていた。

そんな心配をよそに、瓜はナッツたちに危害を加えることなく、一
緒にじゃれはじめた。

それを見て獄寺は安心したようにため息をした。

「しっかし、あれが匣兵器なんて思えねえよな！普通にペットみたいな感覚だし」

山本の考えにツナは頷く。

一般人はライオンなんて飼ってないが、ナッツは子供だ。
ライオンと言うよりも、ポメラニアンのように見える。

「親父なんて、次郎と一緒に散歩に行っちまうんだぜ！肩に小次郎乗せて」

「あははっ、母さんもナッツのことすごい気に入って可愛がってくれるんだ。トンノも普通の鳥って思ってるからさ」

ツナと山本は自分の匣兵器の話が続ける。

獄寺は瓜の見張りと、不思議な生物の観察をしていた。

「でも、匣があつてよかつたかもね。アニマルリングじゃあ力を出しきれないみたいだし」

「だなっ！ジャンニーニと小僧に感謝だな！！」

未来から帰ってきたあと、リングに興味を持ったジャンニーニが、匣兵器たちの力を試したいと出向いてきた。

そしてツナたちはそれぞれ匣兵器たちの力を試したが、何故か完全な力が出せなかった。

ジャンニーニが調べた結果、アニマルリングではナッツたちの力でリングが壊れてしまう可能性があったため、リングから姿を現す場合、力を抑える必要があった。

ナッツたちの力を出し切るには、ボンゴレ匣でないといけないというところで、リボーンがランボの10年バズーカを使って未来へ行き、

事情を話してボンゴレ匣をもらってきたのだ。

未来のボンゴレの最新技術により、ボンゴレ匣のコピーをつくることに成功した。

しかし、最新技術でも限界があり、10年後のツナたちの匣兵器は、何故か大人の姿になってしまったらしい。

ナッツは完全なライオンに、瓜はバンテラ・テンベスタ嵐豹へと成長した。

次郎や小次郎などは、姿は変わっていないものの、精神年齢が大人へと変わったという。

しかし、姿は自由自在に変えることができ、10年前の姿に戻ることもできるし、10年後の姿になることもできるらしく、逆にボンゴレの技術者たちは喜んでいた。

「驚いたよな！しばらく小僧がいなくなったと思ったら、ボンゴレ匣持って出てくるんだもんなー！」

「リボーンはいつも何やってるのかわかんなくなるよ」

突然現れて消える。

消えたと思ったらまた現れる。

まさに虹、アルコバレーノだ。

「十代目、ナッツが寝てしまいました」

獄寺がナッツを抱えてツナに話しかける。
ナッツは獄寺の腕の中で気持ち良さそうに眠っていた。

「わ、ごめんね！瓜たちは？」

「まだ遊んでますよ」

どうやらナッツだけが疲れて眠ってしまったようだ。
ツナはナッツをリングに戻し、おやすみ、と声をかけた。

「あいつが沢田綱吉か」

「子供だからと言ってあなどるなよ」

外の物陰からツナを見ていたのは、怪しい黒服の男たち。

「行け」

一人の男が玄関に近づき、チャイムを鳴らした。

「あ、はい」

ツナは急ぎ足で玄関のドアを開けた。すると、目の前には長身の黒服。

「あ…どちらさま…ですか？」

「沢田綱吉、」

名前を呼ばれた瞬間、ツナはゾクリとなにかを感じる。超直感が告げた。こいつは危険だと。

しかし、気付いたときには遅く、ツナは首を強く叩かれ、玄関に倒れ込んだ。

「ツナ？どうした…、！！？」

異変に気付いた山本が部屋から顔を出すと、玄関には黒服の男がツナを抱えて出ていくところだった。

「おい、お前！！ツナになにをした！！」

山本の声に驚き、獄寺も玄関に出た。

気を失っているツナを見て、獄寺は状況を判断し、男をダイナマイトで仕留めようとした。

「オレに手を出したら、こいつの命もねえぜ」

男はツナの顔にナイフをそえ、脅すように言う、ナイフが当たった頬からは、血がたらりとたれた。

山本と獄寺は、なにもできずに男を見る。

「まあ、こいつは人質だから一応殺さないでおく。オレたちの目的は、お前らボンゴレをつぶすことだからな」

「ボンゴレをつぶすだと!?!」

「ボンゴレボスに伝える。次期後継者を助けたければ、我らアルヴィーコラファミリーの言うことを聞け、とな」

そう言うと男はすばやく逃げ出し、近くに止めていた車へ乗り込んで逃走した。

「ツナ!!」

「十代目!!!!」

二人はなす術もなくその場に立ち尽くしていた。

「…どうする、山本」

しばらくしてから獄寺が山本に聞く。

山本は悔しそうに拳を震わせていたが、深呼吸をして答えた。

「これは九代目の出る幕じゃねえしな。ツナの守護者はオレたちだ、オレたちがなんとかするしかねえだろ！！」

「…だな。」

獄寺は車が去っていった方向を一瞥し、山本に向き合って告げた。

「オレはリボンさんを探す！山本は守護者全員に声をかける！！」

「了解っ」

二人はそれぞれ違う方向へ走り出す。

目的はひとつ。

ツナを助けるために。

標的24 誘拐（後書き）

やっと私流のアニマルリングとボンゴレ匣の謎がとけましたー…

大人のナッツ…見たいです！

標的25 集い(前書き)

勢いで書きました(笑)

今から学校です。うっ…

標的25 集い

「ほんとにこいつがボンゴレ次期後継者なんですか？ただの子供にしか見えませんが…」

「ばーか。指をよく見る。ちゃんとボンゴレリングがあるだろ」

深い森へと入っていく車。

その中には気絶したツナをはさみ、リーダーである男と部下が座っていた。

車は砂利道に差し掛かり、ガタガタと揺れる。

「このリングがあると厄介だ。回収しとけ。」

部下は命令に従いボンゴレリングを指から抜こうとした。しかし。

バチンッ

「うわっ、いつてええ!!」

リングに触れた部下が手を抑えて呻く。身体中が痙攣していた。

ボンゴリングはツナから離れることを拒むように、光を放っている。

「…はっ。リングにこんなに気に入られてんなら、相当な奴だぜこいつは」

リーダーである男が深刻そうに、だが楽しそうにツナを見ていた。

「見物になりそうだなあ、これは」

「なに？ツナが連れ去られた？」

「はいつ、黒服の男たちに…確か…アルヴィーコラファミリーと言っていました…」

獄寺が息を切らしてリボンに伝える。

その名前にリボンは一瞬表情を強張らせた。

(まさかあいつらがまた襲つとはな…オレのいねえ間を狙ったわけか)

リポーンはしばらく考え込み、獄寺の肩に乗って言った。

「一回家に帰るぞ。」

「な、なぜですか!？」

そう言いながらも獄寺は家に向かって走る。

リポーンは思考回路を巡らせてひとつのことに気がついた。

(あいつなら…できるかも知れねえ)

リポーンは腕組みをして黙っていた。

一方山本は、ツナを助けるべく、守護者巡りをしていた。

商店街でランボを発見し、ツナの母親の奈々に適当な理由を言っ
てランボを連れてきた。

続いて、ちょうどロードワークをしていた了平を見つけ、事情を話

すと快くついて来てくれた。

了平にランボを預け、山本はクロームを探した。偶然にも街を歩いていたクロームを見つける。

クロームも事情を聞いて、ボスのためなら、と了解してくれた。

残るはあと一人。

一番厄介な守護者、雲雀恭弥。

山本は学校へ行き、応接室へと入る。

雲雀は特に驚きもせず、山本をチラ見して手元の資料へと視線をうつす。

「雲雀、一緒に来てくれないか？大変なんだよ」

「事情がわからないんじゃないよ、何も言えないよ」

雲雀は山本を見ようとせずに聞き返す。

「ツナが変な奴らに連れていかれたんだ。だからお前にもツナを助けるために協力してほしいんだ」

「なんで僕がああ草食動物を助けなきゃいけないの」

雲雀は淡々の山本に聞く。

「やっぱりな、と山本は諦めずに説得をした。」

「なんでって、お前もボンゴレリングを持った守護者だろ？ツナの仲間だろ？」

「僕は群れるのが嫌いなんだよ。ひとまとめにしないでくれる？」

その言葉にさすがの山本も怒りを覚えた。

雲雀がその気なら、と山本は雲雀に言った。

「そういえばあいつら、並盛を散々荒らしていったな。建物とか、公園とか、そりゃあもうボロボロに」

ピクリと雲雀の肩が動く。

そして山本に聞いた。

「それ、ほんと？」

「ああ。並盛の風紀を荒らす奴らだぜ？」

山本の言葉をあつさり信じ、雲雀は席から立ち上がった。

「並盛の風紀を荒らす奴は僕が許さないからね。あと沢田綱吉は並盛中の生徒だ。誘拐事件として扱わせてもらうよ」

そう言うと雲雀は窓から飛び降りてスタスタと歩いて行った。

(ツナのこと心配なんだろうな)

山本は笑いながら雲雀のあとを追った。

「……っ……っ」

少し錆くさい真っ暗な空間。

ツナは頭を抑えながら起き上がった。

朦朧とする意識を無理矢理働かせ、何故このようになったかを思い出す。

(そっか、オレ…黒服の男に殴られて…)

辺りを見渡すが、なにもない。窓も、家具も。

唯一あるのは、ひとつの頑丈なドアだった。

ツナは立ち上がるうとするが、つまずいて倒れてしまった。

気付けば、両足と胴体、両手をロープでぐるぐる巻きにされていた。

ロープを解こうとするが、かたく結ばれたロープはまったく緩む気配がない。

(ポケットにグローブと死ぬ気丸が入ってるけど…これじゃ取れないな)

どうしようかと考えていると、頑丈なドアが開き、黒服の男たちが入ってきた。

「よー坊主。目は覚めたのか？」

「…ここはどこですか」

陽気な男の問いに答えず、ツナは男に質問をする。
男は苦笑いしながらツナに話しかけた。

「お前には抵抗しなけりや何もしねーって。オレらの目的は、ボンゴレをつぶすことだからな」

「ボンゴレをつぶす!?!」

「ボンゴレはオレらにとつては邪魔ものでしかない。詳しいことは言えないが、お前な大切な人質さんだ。殺しはしないさ。ちなみにここは廃墟ってやつだな」

男はぺらぺらと話す。

そしてなにかを思い出したようにツナに問うた。

「そのボンゴレリング。不思議だよなあ。部下がそいつに触れただけで奴の神経がいつちまったよ。お前そいつになにをした？」

ツナは訳がわからずただ男を見ていた。

しかし、ひとつだけわかっていることがある。

「ボンゴレリングは人を選ぶ。」

「ふうん、お前はそんなリング様選ばれたってわけか。」

男は歩いてツナに近づく。

そしてツナを見つめてにやりと笑う。

「お前にはすげえ力があるってんだな。まだ坊主のお前がボンゴレリングを嵌めれるってことは……」

そしてくるっと足を引き返してツナに告げた。

「その力、いつか見せてくれよ？」

オレがボンゴレをつぶしたあとにな。

そう言うと男たちは部屋からでていった。

また再び部屋に闇が訪れた。

「リボンさん、十代目の家に全員集めてどうするんスか!？」

ツナの家のリビングにはリボン、獄寺、山本、ランボ、了平、ク
ロームと、少し離れたところに雲雀が集まっていた。

「いいか。今からツナの居場所を探す。それまでは誰も動くな」

「探すって、小僧にはツナの居場所がわかんのかよ!」

山本がリボーンに問うが、リボーンはそれを否定する。

「オレはわからねえが、こいつならわかる」

リボーンは隣にいたトンノを指差した。

「…トンノが？」

「トンノ、もういいぞ」

リボーンが合図すると、トンノは頷き、喋りはじめた。

「僕の花なら、ツナの居場所がわかるかも知れないんです」

「…トンノがしゃべった…!?!」

「…すごい」

獄寺が驚く隣で、クロームが感動したようにつぶやく。

「僕はツナの力によって、大空属性となり、様々な力を使えるようになったのです」

「わかんねえかも知れねえが、そういうことだ。詳しいことは後か

ら聞け。今はツナの居場所を探すのが優先だ」

全員が頷くと、トンノは目を閉じ、集中する。

大空であるオレンジの炎を、トンノの炎で探す。

ピンッ

トンノは意識の中にある強い炎を見つける。
あたたかく、優しい。
確かにこの炎は…。

「…見つけた」

トンノは目を開け、炎を感じた方向を見つめる。

「…あっちだな」

リポーンはトンノに確認をして、全員に話しかける。

「行くぞ、お前ら」

そして全員がトンノを目印に目的地を目指す。

「トンノ、距離はどれくらいかわかるか」

リポーンは山本の肩に乗り、飛んでいるトンノに問いかけた。

「多分：50kmくらい」

「そんな距離走れるわけねえだろ！」

獄寺はあまりの距離にめまいを覚えた。

「安心しろ。そろそろだ」

リポーンがにやりと笑って言う。

その言葉の意味がわからなかった。

リボーンたちの前に、何台かの車が止まる。
そして中から出てきた人に、彼を知る獄寺たちは驚いた。

「ロンジ、遅かったな」

「すみませんリボーンさん。さあ、みなさん乗ってください。」

全員が呆気にとられていたが、そんなことをしている場合じゃないと、急いで車に乗り込んだ。

「ロンジ、トンノの後について行け」

「わかりました」

ロンジはトンノを追いかけて車を走らせる。

（今さらアルヴィーコラファミリーが…なぜだ？）

リボーンは一人、俯いて考えていた。

標的26 アルヴィーコラの罪(前書き)

文を書く力が欲しいです。

後書きには今回の話の裏話を書きました。
くだらないもんだと思いますけど(笑)

標的26 アルヴィーコラの罪

白と金の色をした羽を飛ばたかせ、あたたかな炎を目指す。

トシノは自分を追いかける車を気にしつつも、ツナのことを考えていた。

(僕が気配に気付いていれば…何故気付かなかったんだ！)

心の中で後悔が渦巻く。

ツナを守ると決めたのに。

トシノは自分を責めながら、ツナの無事を祈る。

(せめて、ツナの意識の中に入り込めれば…無事でいて、ツナ！！)

美しい翼と混ざり合って何かがきらりと輝いた。

「…っあー、ほんとに解けないや」

暗い部屋でひとり、ツナは縛られた縄を解こうと奮闘していた。

しかし頑丈な縄はびくともせず、縄の当たる肌は赤く変色していた。

部屋は暗いが、なんとか暗順応が働き、うつすらとまわりが見えるようになった。

だが、縄を切ることができるようなのはなにもなかった。

「どうしよう…すごい肌が痛い…」

特に呪いのある右腕が痛む。

たいした痛みではないが、地味な痛みが長い間続いていた。

「がるっ」

「?!?!?、ナッツ!?!」

突然、ナッツの声が聞こえると、アニマルリングが光り、目の前にナッツが現れた。

「こらっ、勝手にできちゃだめだろっ」

「がるっ」

ナッツはぱたぱたとしっぽを振ってツナに寄り添う。

ツナは少々呆れつつも、暗闇の中でひとりだったので心強くなった。

ツナに寄り添うナッツは、しばらく離れようとはしなかった。

「つくそ！まだなんスカリボーンさん！！」

獄寺が耐え切れずに怒鳴る。

リボーンは獄寺に淡々と言う。

「落ち着け獄寺。トンノが言っていた距離は直径だ。だがオレたちは車で移動してんだ。わかるだろ、そんなくらいは。オレたちも直径で行ったらどうなるかってこと」

「そりゃあ、いろんなもんにぶつかっちまいますが…スピードくらいあげれませんか！？」

「我慢しろ。車よりトンノのほうが断然スピードは出せるが、トンノはオレたちのためにスピードを落としてんだぞ。」

リボーンという言葉で獄寺は何も言えずに黙り込んでしまった。

頭上ではトンノが車を気遣うように羽ばたいていた。

（きつとみんなぴりぴりしてるだろうな…早く人気のないところにいかなきゃ…）

トンノはあたりを見回して道を探す。

すると、ある一点から炎の反応を感じた。

（…あの炎は！）

トンノは炎の方向へ向かった。

「…！、リボーンさん、トンノが方向を変えました！」

「よし、ついてけ」

ロンジがりボーンに話しかけると、そのままトンノに従うように指示をした。

「いいのか？小僧」

「ああ、あいつがいるんだ」

山本はわからないといった表情でリボーンを見ていた。

すると、車は一気に人気のない田舎道に出た。
そして鋭い音を立てて車が止まった。

「リボーンさん！！」

車のドアが開き、よく知る顔の人物が入って来た。

「結加、遅かったな」

「すみません！なかなか資料がなくて…」

結加は息を切らせながらリボーンに謝った。
驚きで黙っていた山本たちは、しばらく状況がつかめなかった。

「…つな！なんで結加がここに！！」

「結加にはあるものを調べてもらってたんだ」

「だから最近結加を見かけなかったのかあ」

休校になってからは、山本たちはまったく結加に会っていなかった。

「リポーンさん、アルヴィーコラは確かに九代目が抑えましたが…ボスが散らばった部下を集めて再びボンゴレを潰そうと目論んでいたそうです」

「小僧、アルヴィーコラってのはなんなんだ？」

結加の話聞いていた山本がリポーンに聞いた。

「アルヴィーコラっていうのは、数年前にボンゴレを潰そうとボンゴレのまわりの一般人や同盟ファミリーを襲っていた奴らだ。それを九代目とその守護者たちがおさえつけ、鎮めたんだが…」

九代目はアルヴィーコラのボスがこのようなことは二度としない、と約束をしたため、ボスや部下を念のためにはらばらにして逃がした。

「だが復讐をしようと集まったってわけだな」

「それでツナを襲ったのか」

「許せねえ!!」

獄寺は拳を握りしめて怒りをあらわにする。

「奴らは多分、この先の森にある廃屋にいます」

「そうか、ご苦労だったな」

リボーンはしばらく考え込み、守護者たちに全員外に出るように言った。

「ツナの居場所が完全にわかった。だが車じゃスピードにも限度がある。だから匣兵器で移動できる奴は匣兵器を使って行け。無理な奴はトンノが乗せてくれる」

「わかったぜ！小僧！」

「わかりましたリボーンさん！」

「極限にわかったぞお！」

「ランボさんトンノに乗るもんね！」

「…わかった」

「咬み殺せばいいんですよ」

獄寺、山本、雲雀は匣を開匣させる。

ランボ、クローム、了平、結加は巨大化したトンノの背中に乗る。

「ロンジ、ボンゴレ部下を集めてきてくれ」

「わかりました。お気をつけて！」

リポーンはトンノの頭に乗る、ロンジに見送られて獄寺たちと共に
廃屋へと向かった。

「もうちょっと右…いたたっ！ナッツ、それは手だって！！」

暗闇にツナの声が響く。

ツナはナッツに縄をちぎらせようとしていた。

しかし縄はかたく、ナッツはさっきから誤ってツナの手やら足やら

をかじってしまった。

「くうん…」

「ナッツが悪いわけじゃないって！そんな顔すんなよ！」

落ち込んでしまったナッツをツナは慌ててなぐさめる。

縄がちぎれないとすれば、ポケットのグローブと死ぬ気丸を取り出すしかない。

しかしポケットにまでも縄が巻かれており、取り出すことができなかった。

「ナッツ、縄はいいからさ、ポケットの中のグローブと死ぬ気丸を取ってくれる？」

「がるっ」

ナッツは今度こそ、とばかりにポケットのまわりの縄を鼻で押し上げながらポケットの入り口を目指す。

ツナもナッツがグローブと死ぬ気丸を取り出しやすいようにと出来るだけ体制を変えた。

「がんばれナッツ」

ひとりと一匹の大空は闇の中でもがいていた。

「お、あれじゃねえか」

リボーンが空から廃屋を見つけた。
かなり広範囲に及んでおり、まわりは森だけしかなかった。

シュンッ

トンノの脇をなにかが通り過ぎた。

「ちっ、来たか」

リボーンは舌打ちをしてトンノに下に降りるように言った。

異変に気付いた獄寺たちは、トンノが降り立った場所で止まった。

「まわりに敵がいる。気をつけろよ」

リボーンの手で全員が身構える。

すると茂みから黒服の男がリボーンたちを囲うようにぞろぞろと現れた。

「ここから先は行かせねえぞボンゴレ」

「大切な人質さんはボンゴレがオレたちに屈するなら解放してやるよ」

男たちは殺気を含んだ笑顔を見せた。

「そんなことはしねえ。ボンゴレに刃向かうとはいい度胸してんじやねえか」

リボーンはレオンを銃に変化させ、男たちに銃口を向けた。

「そんなこと言っただけのも今のうちだぞ。ヒットマン」

男たちもリボーンたちに銃口を向ける。

一瞬の沈黙。

ズガアアアアアンッ

森に銃音が響きわたった。

銃をうつたのはアルヴィーコラファミリ。

まわりが煙に包まれる。

男たちは顔を歪ませてにやりと笑った。

しかし、その余裕も次の瞬間に砕かれた。

キュインッ

突然男たちの銃が手から弾かれ地面に落ちる。

銃は真つ二つに割れていた。

「な、なぜだ!？」

「なぜかって？」

煙の中から青い炎が浮かび上がる。

風が吹き、煙が吹き飛ばされた。

「!!!!!!?」

「おまえらとは違うんだよ、覚悟がな!!!!」

男たちは目を見開いて固まっていた。

青い炎を帯びた剣を持った山本が立ちはだかる。

その裏では、リボンたちを守るように赤い炎がゆらゆらと揺れる。炎がおさまると、リング状のフィールドが浮いていた。

「発砲寸前にS I S T E M A C ・ A ・ I ・の防御匣を発動させる
とは、獄寺もなかなかだな」

「いえっ！滅相もございません！」

「山本も煙で何も見えない中でよく銃だけを狙えたな」

「ははっ、まあな！」

リボンたちのあまりの強さに、男たちは臆してしまった。

「んじゃ、」

リボーンが銃を再び男たちに向ける。

「反撃させてもらっぞ」

リボーンがにやりと笑う。

余裕の笑みには殺気が滲み出ていた。

標的26 アルヴィーコラの罪（後書き）

さて、

今回は雲雀さんに私の理想をちょっと叶えてもらいました。

雲雀の匣兵器のロールは、トゲトゲした物体みたいなやつになりますよね。

あれに雲雀を乗せてみたかったです

あれで移動してもらいたかったです！

トゲが掴む場所になっていいかな、とか思ったり。

あと、了平をトンノに乗せたのは、
了平がひそかにトンノに乗ってみたいと思っていたという裏があったんです。

ちよっとお茶目な了平が見てみたかった。

ごめんなさい！

そういえば、トンノとムクロウって仲良くなれそうですよね…

以上、くだらない裏話でした！

標的27 それぞれの奮闘（前書き）

ぶ、文がひどいです…！

こめんなさい…

標的27 それぞれの奮闘

鬱蒼とした森の中、さまざまな音が入り混じる。

剣で銃を弾く音。

なにかが爆発する音。

次々と黒服の男たちが襲い掛かる。

それを華麗に避け、攻撃をしかける山本と獄寺。

二人を先頭にして守護者とリボン、結加たちは廃屋を目指す。

「二人とも大丈夫か？」

「大丈夫ツス！まだいけますよりボンさん！」

「まだまだ余裕だぜ！」

リボンが二人に問いかけると、二人は笑顔で答えた。
汗をかいているが、疲れた様子ではないらしい。

絶えない襲撃を、もろともせずつちかえし、ついに廃屋の目の前ま

でやってきた。

「でけえな」

「ここに十代目が…」

「よっしや、いこつぜー！」

山本が重いドアを開ける。

中は闇に包まれ、光の差し込むところはドアと所々にあいた穴だけだった。

「何も見えねえな。結加」

「はい」

結加は掌に光の玉をともし、天井に向かって放つ。

目の前が一瞬光で真っ白になったかと思うと、光の玉は太陽のように輝き、部屋を照らした。

「結加って晴の守護者なのな？」

「はい、一応は…」

「極限にオレと同じってことだなああ!？」

結加の光の玉の温もりは、疲れを癒すようなあたたかさだった。それは晴の活性の力であるものだった。

「それにしても広いな。 搜索範囲が広すぎる。 ひとまず手分けしてツナを探すぞ」

リボーンは廃屋の中を見渡して告げた。

廊下はいくつもあるし、階はそれほどないもののおびただしいほどの部屋の数だ。

それを全員が共に行動して探すのはあまりにも効率が悪い。

そして割り振りはこのようになった。

- ・ 獄寺、山本
- ・ 了平、クローム、ランボ
- ・ 結加、トンノ
- ・ 雲雀、リボーン

雲雀は単独行動を望んだが、リボーンと行動をするということ承諾してくれた。

「そんじゃ、気をつけるんだぞ」

全員が頷いてそれぞれがパートナーと共にツナを搜索しはじめた。

「がるっがるっがるっ」

「もうちょっと、がんばれナッツ！」

ナッツは鼻を赤くしつつもあきらめずにポケットからグローブと死ぬ気丸を取り出そうと奮闘していた。

十分以上も時間が経過しているからか、縄もしだいにゆるくなりはじめていた。

「ぐるるるるっ」

ナッツが小さな身体の底力をしぼりだしたそのとき、ナッツはついにグローブと死ぬ気丸を掴むことができた。

しかしそのあまりの勢いに、ナッツはごろごろと地面を転がってしまった。

「うわああ、ナッツ!!」

ツナは慌ててナッツのもとへはいずりながら近寄った。

「大丈夫かナッツ？」

「がる…」

ナッツは弱々しい声で鳴いたが、その口にはしっかりとグローブと死ぬ気丸がくわえられていた。

「ありがとうナッツ!!」

ツナはナッツに笑顔で感謝した。

ナッツもそれにしっぽをふってこたえた。

ナッツからグローブと死ぬ気丸を受け取り、なんとかグローブを手にはめた。

そして死ぬ気丸を地面に転がして服用した。

額とグローブに炎がともる。

身体に力をいれれば縄はいともたやすく破れた。

身体に痛々しい跡は残るものの、体力はそれほど消費してはない。

ツナはドアに手をかけたが、頑丈な上に鍵がかかっているため開かない。

「ドアを突き破るか、壁をぶち壊すか…」

ナッツの力を借りることもできたが、ナッツは先程の作業で疲れしており、さらにアニマルリングから現れたので力が制限されているのであまり無理はさせられなかった。

ズガンッ

試しにドアを殴ってみるが、多少のへこみができただけだった。

「おそらくここは地下だろうな…壁を壊してしまったら部屋自体が潰れてしまつかも知れない」

そうなればツナもナッツも生き埋めになってしまう。

となればここを脱出するにはこの頑丈なドアを壊すしかない。

ツナはひとつ深呼吸をして拳に力を込めた。

ある廊下では、戦いが繰り広げられていた。

山本は前に出て先陣をきる。

そして山本を守るように獄寺のSYSTEMA C・A・Iの防御のフィールドがまわりを漂っている。

敵が攻撃するとフィールドに邪魔をされ、反撃をしてくる山本の剣さばきはあまりの威力という最悪な状況に追い込まれつつあった敵は、だんだん冷静さが欠けてきていた。

「ガキのくせにふざけんな!!」

「ガキだからってなめんじゃねえ!!」

獄寺がフレイムアローを撃ち放った。

見事にそれは黒服の男たちに当たり、一人残らず倒れた。

「やるじゃねえか獄寺!!」

「当たり前えだ野球馬鹿！てめえこそなかなかじゃねえか」

山本は獄寺を素直に褒めた。

獄寺も毒つきながらも山本を褒めた。

しかし、二人共打撲や捻挫はないものの身体中に傷を負っていた。

だがそんなことを気にしている場合ではない。

早くツナを探さねばと二人は自分を奮い立たせて先へ進んだ。

「マキシマムキャノン！！」

了平のパンチをくらった男たちは次々と倒れていく。

「うわあああ！なんだこれは！！！」

黒服の男たちのまわりに火柱がのぼる。

クロームは後ろから幻覚で了平を援護していた。

同時にクロームはあまり戦えないランボのことを幻覚で隠していた。

「よくやったぞクローム！！」

「…ありがとう晴の人」

了平が礼を言つとクロームは頬を赤らめて微笑んだ。

「よし、次の部屋だ！」

クロームは頷いてランボを抱えて了平につづいた。

「こつち来ないでよ！しつこいのよあんたたち！！！」

結加は追いかけてくる男たちを光の玉で攻撃しながら逃げ回っていた。

しかし黒服の男たちは結加を捕まえようとしつこく追ってきていた。

「結加、僕にまかせて」

トンノは結加を後ろにかばい、オレンジの炎を放ち男たちの手と足を狙って突っ込んだ。

トンノの炎に当たった男たちは、調和の力によって手足が石化され、身動きがとれなくなってしまうた。

「ありがとうトンノ！」

「どういたしまして」

「でもびっくりしちゃった…。トンノが綱吉くん力で話せるようになったり、大空属性になったり…」

結加はひとつひとつ部屋を探しながらトンノに話しかける。

先程トンノからさまざまな事情を聞いたところだった。

「ツナはそれほど強い力を持つてるってことだよ。だからいろんな人に狙われる。そんなツナを僕は守りたいんだ」

トンノの目はオレンジ色に輝いていた。

それを見てトンノがどれほどツナを大切に思っているのかが痛いほどに伝わった。

「早く綱吉くんを助けなきゃね」

結加とトンノは互いに見つめ合い、搜索のスピードをあげた。

ズガンズガンッ

広い居間に銃声が鳴り響く。

それは威嚇するためのものであり、こちらに攻撃をしてくるようなものではなかった。

「おめえら、ツナがどこにいるかわかんねえのか？」

「残念ながらリーダーとその側近くらいしか知らないんだよ。オレらはんたらの足止め役つてわけ。」

「そつか、ならおめえらに用はねえ。消えろ」

リボーンは銃口を黒服の男たちに向ける。

男たちも怯まずに銃口をリボーンに向けた。

リボーンの口許がゆるむ。

男たちはその笑みに疑問を抱いた。

その瞬間、後ろからなにかに殴られた。
一瞬にして男たちは気を失った。

「よくやったな、雲雀。おめえ気配を消すのが上手いな」

「まあね」

雲雀はトンファーを振って得意げに答えた。

黒服の男たちはまんまとリボーンたちの囷作戦に引っ掛かったのだ。
った。

「こんな広い廃屋を探すのには無理があるよ、赤ん坊」

「まあな。だが、確かにツナは今生きてんだ。死ぬ前に見つけるし
かねえだろ」

リボーンはレオンを一回り大きい銃に変化させた。

「雲雀、耳を塞げ。こいつの銃声はかなり響くぞ」

リボーンがにやりと笑う。

雲雀は仕方なく耳を塞いだ。

(この音なら廃屋中に響くだろうっからな。気付けよ、ツナ)

そしてリボーンは引き金を引いた。

炎を帯びた拳がドアにぶつかり、一気にドアが砕け散った。

そして急いで一階へのぼる階段を探す。

そしてひとつの階段が見えた。

ツナはそれをものすごいスピードでのぼっていく。

一階へ降り立ち、あたりを見渡す。

すると、暗闇の中から声が聞こえた。

「おっ、逃げ出しちゃったのかあ坊主」

声のする方向を見ると、アルヴィーコラファミリーのリーダーが苦笑いをして立っていた。

「みんなはどこだ」

「知らねえよ、勝手にあいつらがやってきたんだよ。守護者全員来ちまうし、ヒットマンやら女の子やらも来たしよお」

その言葉にツナは驚愕した。

(みんなが…来てくれた!?)

獄寺たちだけでなくあの雲雀までもが来てくれたのだろうか。
リボンや結加も。

ツナは目を閉じ、そしてリーダーを見据える。

「オレの仲間に出すならば、オレが許さない。」

このとき、ツナの心に変化があらわれた。

それをまだツナは知らない。

標的28 最終関門“愛しさ”（前書き）

所々が雑ですね…

ちよっといつもより長くなりました

標的28 最終関門“愛しさ”

守りたい者。

傍にいたい者。

笑いあいたい者。

なくてはならない者。

その者のためならば、

人は何にでもなれるもの。

己を動かす感情。

自然の節理、自然な行動。

人はそれ無くしては生きられず。

理屈ではあらわせない感情。

それに気付いたとき、

人は強さを手に入れる。

「オレの仲間に出すならば、オレが許さない。」

ツナはアルヴィーコラファミリーのリーダーに向かって言う。

リーダーはツナを見て一瞬表情が強張った。

（嘘のない目：あれが大空か）

そしてあやしく笑いリーダーはツナに話しかけた。

「でもお前みたいな坊主がオレに勝てると思うのか？」

「勝てるさ。」

リーダーの挑発を嘲笑うかのようにツナが言い切る。

しばしの静寂のあと、動いたのはリーダーだった。

「あとで泣いても知らねえぜ！」

リーダーは銃をツナ目掛けて発砲する。

しかし、ツナは瞬時に移動し、リーダーの裏に回る。

「お前がな。」

背後から声が聞こえ、振り向こうとしたが気付いたときにはすでに遅く、背中にツナの蹴りが入った。

あまりの力に倒れそうになるが、なんとか踏ん張って持ちこたえた。

「…はっ！貧弱な身体のどこにそんなすげえ力があるんだか！」

「さあな。」

ツナは拳をリーダーに食らわせようとするが、手首を捕まれて阻止されてしまった。

「こんな軽い体重なら遠くまでぶっ飛ぶかもな？」

ギリツ、と力強く手首を握られ、ツナの顔が痛みで歪む。

だがツナは捕まれた手首を軸にしてリーダーの頭上をぐるりと回り、背中を蹴飛ばして拘束を逃れた。

「っく、この坊主が…！」

リーダーは再びツナを捕まえ、回し蹴りを食らわした。

「うあつー!!」

逃げる事ができなかったツナはもろにくらい、地面へ投げ出された。

そしてリーダーが倒れたツナに発砲した。

パアアアアンツ

「……」

「今のは……」

「……行ってみようぜ」

守護者たちは銃声のした方向へ向かった。

「……ちっ、はずれたか」

リーダーは舌打ちをして銃を指でくるくるとまわす。

その視線の先には、宙に浮かぶ少年。

「ずりいぞ、飛べるなんてよお」

「これはオレの力だ。ずるいとか関係ないだろ」

頭上からツナがリーダーを見る。

それが気に入らないのか、リーダーはまた舌打ちをしてポケットに手をつ突っ込んだ。

「ならこれもずるくもなんともねえよな!」

リーダーはポケットからもうひとつの銃と複数の手榴弾を取り出した。

そして時間をあけずに巧みに手榴弾と銃を使いこなす。

手榴弾を投げたかと思えば発砲、発砲かと思いきや手榴弾、といった小癩な攻撃を仕掛けてきた。

切り替えるスピードがとてつもなく速く、ツナは避けるのに精一杯だった。

シュツ、シュツ、シュツ、

手榴弾を避けると肌を銃弾が掠める。

銃弾を避けると手榴弾の破片が肌を傷つける。

ツナは顔やら手やら足やらが切りさいなまれていた。

(これじゃあ攻撃ができない…一度どこかに移動して…)

「十代目!!!」

「ツナ!!!」

「沢田!!!」

「ボス!!!」

「綱吉くん!!!」

一斉にツナを呼ぶ声。

振り返ると、守護者全員、リボン、結加、トンノがツナを見つめていた。

「みんな!!!」

ツナが一瞬敵の存在を忘れ、仲間に気を取られる。それをリーダーは見逃さなかった。

ドオオオオオンッ

「っ！！！！」

ツナがよそ見をしているうちに、リーダーはツナに手榴弾を投げつけた。

間近で爆発した手榴弾によって、ツナは吹き飛ばされ、壁へと激突した。

「十代目！」

獄寺たちがツナの元へ向かおうとするが、それをまだ残っていた部下たちに止められた。

銃を向けられ身動きのできない獄寺たちは、ただツナを見ていることしかできなかった。

「ははっ、ボンゴレ十代目と言っても所詮はガキだ。オレにかかればこんなもんだろ」

リーダーがゆっくりと倒れたツナに近づぐ。

リーダーの余裕の笑い声がツナの耳にはいりこむ。

(…身体が動かないや。このままオレ、死ぬのかなあ)

指先さえも動かすことのできないツナは、死を覚悟した。

(いつもオレはこうだ。なにをやってもダメダメで、ずっと悔しい
思いをして…)

コツ、コツ、と足音が近づいてくる。

(今までの努力は無駄になるんだな…ごめん、みんな)

ツナは目をぎゅっ、とつぶり死の時を待った。

「ふざけんな…!」

広い部屋にリボーンの声が響く。

誰もが黙ってリボーンを見た。

「悔しい思いなんて誰でもしてんだ!努力が無駄になることだって

あるんだ！だが、その悔しさは、努力は、いつか必ずどこかで役に立つんだ！

それをおめえはいつもダメダメな自分がいけないだとかで簡単に片付けやがって…。

いいか、ツナ。そんな無駄な感情は捨てる！自分を見下すな！あきらめるな！最初からあきらめてたら意味がねえだろ！

可能性はいくらでもあんだ、それが例えどんなに低くても信じる！

おめえは今、なにをするべきだ？

仲間を守るんだろ？

仲間を救いたいんだろ？

おめえが仲間に対して抱いた感情をさらけ出してみろ！

おめえが日常生活に対して抱いた感情をさらけ出してみろ！

オレが育てた生徒はそういう奴だ、わかったか、ツナ！！」

ツナは、はっと我にかえった。

(仲間…：日常に対しての…：感情…)

いつものように朝に目覚めて、優しい母とあいさつをする。

家を出れば友達が笑顔で出迎えてくれて、学校では昼寝したりたわいのない話をしたり。

夜はチビたちと遊んだり家庭教師から勉強を教わる。

現代でも未来でも、共に笑い、共に苦しみ、共に生きてきた仲間。

そして、死んでしまった仲間。

(ユニ… …)

『…沢田さん』

「!!!?!」

『おいボンゴレの十代目さんよお』

「この声は…ユニ、…?!」

『沢田さん、あなたが仲間に、日常に対して抱いている感情はなんですか?』

『てめえ、とつくにわかってんだろ?』

「わ、わかんないよ!」

『よく考えてみて、沢田さん。仲間とは、日常とはかけがえのないもの。あなたを動かしているのは、その感情なの。』

『仲間を守りたいだとか、それだけじゃねえだろ？もっと大切な感情があるんだろ？』

「もっと大切な感情…？」

『わたしたちのために泣いてくれるのはうれしいわ。そしてわたしたちは沢田さんに対してその感情を抱くの』

『この感情なくしては人間なんか生きていられないさ。ほらお前、あの生意気なジジイにぎゃふんと言わせてやれ』

「ユニ… …」

『さあ、沢田さん。みんなが待ってます』

『さっさと助けてやれよ』

二人は一瞬にして消えた。

ツナに大切な言葉を残して。

(仲間…：日常に抱く…：大切な…：人間が必ず抱く…)

ドクン、と心臓が跳ねる。

そしてぼかぼかとあたたかくなる。

「…ああ、そっか。そうだったんだ」

「あ？」

突然喋りはじめたツナをリーダーは不審な目で見る。

「オレは仲間のために、平和な日常を送るために…：戦ってたけど、ただ守りたいってだけじゃ勝てないんだ…」

ツナはふらりと立ち上がり、リーダーと向き合う。

「みんながいたから今のオレがいる。仲間も日常も、オレにとってかけがえのないもの。そして…」

「愛しいものなんだ…!!」

ツナの目がオレンジ色を帯びて輝く。

したたかで、まっすぐな。

そして炎が大きく燃えはじめ、風が吹き荒れる。

その威圧はすさまじく、その場にいた全員が圧倒された。

ヒュツ、と目の前からツナが消える。

先程よりもスピードが断然にあがっていた。

また後ろだろうとリーダーが振り向くと、ツナは真上から攻撃をしかけた。

思いきり蹴りをくらったリーダーは地面に突っ伏す。

リーダーが反撃しようとするが、ツナの動きのが速く、すばやく防御をして腹目掛けて拳を突き上げた。

その一撃でリーダーは完全に動けなくなり、その場に倒れてしまった。

それを見ていたリボンが笑う。

「十代目ー!!」

「ツナー!!」

守護者たちがツナに駆け寄る。
守護者たちは多少の傷はあるがツナほどでない。
そのことにツナは安心した。

「ツナ」

「リボーン」

足元でリボーンがツナを呼ぶ。

ツナはリボーンに視線を近づけるためにしゃがみこむ。

「合格だ。これで修行はコンプリートだぞ」

「…今回は、“愛しさ”だったのか？」

「そうだぞ。渡した紙を試してみる」

ツナはポケットから紙を取り出して見る。

守りたい者。

傍にいたい者。

笑いあいたい者。

なくてはならない者。

その者のためならば、

人は何にでもなれるもの。

己を動かす感情。

自然の節理、自然な行動。

人はそれ無くしては生きられず。

理屈ではあらわせれない感情。

それに気付いたとき、

人は強さを手に入れる。

「その詩のとおりだ。“愛しさ”という感情がなければ人間生きていけねえんだ。

それとお前が今まで修行をしても呪いに効果がなかったのは、お前に余分な感情があつたからだぞ」

「…余分な感情？」

ツナは、前にリボンが言っていたことを思い出した。

この呪いの進行を妨げるにおいて必要な感情は、
感謝、冷静、幸福、リラックス、勇気、安心、愛しさ。

必要のない感情は、
欲望、執念、無念、空虚、軽蔑、シャーデンフロイデ、嫉妬。

ツナは自分自身に悔しさを抱く無念と、自分自身をむなしく思う空虚を持っていた。

だがしかし、無念と空虚を捨て、愛しさに気付いた今、遅効されていた忍耐力を完全に働かせることができるようになったのだ。

「これでおめえの呪いは進行を遅らせることができるはずだ」

「やったじゃねえか、ツナ！」

「おめでとつございます十代目！」

山本と獄寺がツナにことほぎた。

ツナはオレンジの目にかすかな動揺を浮かべつつも、目の前にいる仲間に笑顔を向けた。

「…くそっ、今度こそはボンゴレを足蹴にできると思ったのに…っ

！」

地面に倒れていたリーダーは悔しそうに握りこぶしを震わせていた。

「おめえがツナをなめてたってことだ。おめえみてえな奴にボンゴレが潰せるかってんだ」

リポーンの言葉にリーダーは更に悔しそうな表情を見せた。

「…ボンゴレ十代目さんよお…、」

「なんだ？」

リーダーとツナの視線がぶつかる。

ツナのまっすぐな目にリーダーは少し怯みながらも言い放った。

「オレを…今すぐここでオレを殺せ！！！」

「っ、なに言ってるんだ！」

リーダーの突然の発言にツナは驚いた。

「お前さんに負けた今、オレはアルヴィーコラとしての権力を失った！居場所がなくなつた！生きている意味がなくなつた！だからオレを負かしたお前さんがオレを殺せ！」

「そんなこと、できるわけないだろ!？」

「うるせえ!それがマフィアの世界なんだよ!負けたら死ぬ、それが当たり前なんだ!！」

リーダーの言葉にツナは表情を歪ませる。

この男はマフィアの世界の決まりごとによって殺害を希望している。それがツナには許せなかった。

「…っ、ふざけんな!!!!!」

ツナの怒声にリーダーは驚いて目を見開いた。額の炎が怒りをあらわすかのように揺れる。

「ふざけんな!そんなくだらない決まりごとで死ぬなんて、おかしいだろ!？世の中には死にたくなくても死んでしまった人たちがいるのに…っ、命を無駄にするようなことはするな!！」

「しかしこれがマフィアだ!昔からの、マフィア世界の掟だ!」

「オレはそんなの信じねえ!もしそんな掟があるなら…オレがっ、…オレがそんな世界を壊してやる!！」

「!!!」

リーダーが、守護者が、アルヴィーコラの部下たちまでもが驚いた。

リボーンはにやりと笑ってツナを見た。

リーダーはしばらく目を見開いていたが、口許が緩み、自然と笑っていた。

「…ふつ。おもしれえな坊主。さすがボンゴレの次期ドンだ。…その指輪に気に入られてるわけがわかった気がするわ」

リーダーはツナに笑みを向けながら告げた。

「坊主。オレをボンゴレの部下にしてくれねえか？」

「…部下？」

「ふざけんじゃねえぞてめえ!!」

「落ち着けて獄寺!!」

リーダーの信じられない言葉にツナは戸惑った。

「…なぜ？」

「お前さんになら、ついていってもいいと思ったからだ。今後ボンゴレのためにオレは生きる。必ず誓つた」

ツナはリーダーの目を見た。
その目には、確かに偽りはなく、覚悟が見られた。

「お前が決める、ツナ」

リボーンが戸惑うツナに言う。
ツナは頷いてリーダーを見た。

「…わかった。お前を信じる」

「…さんきゅ、坊主」

ツナは優しい目をリーダーに向けた。
リーダーもはじめて優しい笑顔を見せた。

カツンッ

頭上から石が落ちて転がった。
なんだろう、とツナが上を見た。

すると、天井が今にも崩れそうな状態になっていた。

「っ！全員ここから離れる！！」

ツナの言葉で全員が異変に気付き、急いで部屋を出る。

リーダーも逃げようとするが、ついに天井が崩れ、リーダーに襲い掛かった。

「リーダー……!!!」

ガシャアアアアンツ

あたりに砂埃がたちこめる。
しばらく視界が煙でおおわれ、なにも見えなかった。

リーダーはふと、不思議に感じた。
まったく痛みがなかったのだ。
恐る恐る目を開けると、驚愕した。

「……坊主!!!」

「大丈夫……か？」

ツナがリーダーに無事を確認する。
ツナは瓦礫から守るようにリーダーに覆いかぶさり、瓦礫をツナ一人で受け止めていた。

「大丈夫って……坊主のが大丈夫なのかよ!？」

「…少し、大丈夫ではない気がする」

ツナは苦しそうに笑った。

炎が弱々しく揺れ、汗が滲み出していた。

「…くっ!!」

ツナは力を振り絞り、炎で自分に被さる瓦礫を退かす。

そしてふらりと視界が歪み、リーダーの隣に倒れ込んだ。

「坊主!!!!」

「ツナ!!」

リボーンがツナたちに駆け寄る。

「…やべえな」

「なにがだ?」

リボーンが焦燥の表情をうかばせる。
そしてある一点を指差した。

リーダーはその一点を見て驚愕した。

ツナの腹部に、鋭い瓦礫が突き刺さっていたのだ。
服に血がにじみ、ツナの顔色がどんどん悪くなっていた。

「…くそっ、おめえらはすぐにボンゴレの救助班を呼んで対応しろ
！いそげ！！」

守護者たちはリボーンの言葉ではじかれるように我に返り、忙しく
動き出した。

「…なんでオレなんかを庇って…！」

「そういう奴なんだ、ツナは。」

リボーンは応急処置をするために治療セットを取り出す。

「かつては敵だった奴でもツナは優しさを見せる。それにおめえは
さっきボンゴレの仲間になった。だからツナはおめえを助けたんだ。
…大空だからな。」

リボーンは無表情で治療の準備をする。

「…っ、リ…ボーン？」

ツナが荒く息を繰り返しながら、リボーンに話しかけた。

「坊主！！」

「…あなたは、無事…ですか？」

「お前さんが助けてくれたからな！」

「よかった」

その言葉にリーダーは驚きを隠せなかった。
自分のことよりも他人のことを心配しているのだ。
リーダーは目にあついなにかが滲むのを感じた。

「ツナ、痛いかもしれねえが我慢しろよ」

リポーンは生理食塩水でツナの傷を洗いはじめた。

ツナの表情が苦痛で歪む。
そしてふとリーダーを見た。

「…なんで泣いてるんですか？」

リーダーはたくさんの涙を流していた。
そしてそれをなくさめるようにツナが笑いかける。

「泣かないでくださいよ…」

そう言うとツナはゆっくりと目を閉じた。

腹が痛むがそれよりも眠気がツナを襲う。

ツナは深い眠りについた。

最終関門“愛しさ”クリア。

標的28 最終関門“愛しさ”（後書き）

ツナが怪我しちゃいました。
書いてて苦しかったです…

修行がおわったので、そろそろ違うアレを出そうと思います。

標的29 脱アルヴィーコラ(前書き)

お、お待たせしました…!

待たせてしまったくせに短い…!

ほんとにごめんなさい!

受験生は忙しいんです…

標的29 脱アルヴィーコラ

ピッ、ピッ、ピッ、ピッ、ピッ、ピッ

定期的に聞こえる音。

それはツナの生きていることを証明する音でもある。

広い個室の中では守護者たち、リボーン、結加、ロンジ、トンノ、元アルヴィーコラのリーダーが眠っているツナを黙ってみていた。

森の廃屋でツナはリーダーを庇って怪我をした。

腹部に刺さった瓦礫は思いのほか深く、あたりどころが悪ければ臓器に突き刺さり死亡していた可能性があった。

しかし奇跡が重なり、臓器にあたるすれすれのところで瓦礫は止まっていた。

出血は多かったが、リボーンの応急処置とツナの人並みを超えた生命力で一命を取り留めたのだった。

だが油断はできない。ツナの顔色はまだ悪く、意識も戻っていない。

「…なんで十代目がこんなことに！」

獄寺がツナの傍らで泣きそうになりながらつぶやく。

「オレのせいだ…すまない。オレがいたから…」

「そんなこと言つなよオッサン。オッサンは悪くないと思うぜ？」

自分を責めてうなだれるリーダーを山本がなぐさめる。

先程までは敵だったが、次期ボンゴレボスであるツナがリーダー仲間になると決めたため、リーダーも病室に居座ることになった。

「ツナがてめえを助けたいと思ったから助けたんだ。無理矢理じゃねえんだ。てめえが気にすることはないと思うぞ」

リボーンにもなぐさめの言葉をかけられ、リーダーは苦笑いをして応えた。

「おい、今日はもう遅えから一旦全員帰れ」

リボーンが部屋にいる全員に言い放った。
時計の針は午後十時をまわっていた。

「しかし、リボーンさん…！」

「心配すんな獄寺。ツナにはオレとロンジがついてる」

「そうですよ。皆さんお疲れでしょう。一回家でゆっくりなされたほうがよろしいですよ。」

納得のいかないというような顔の守護者たちにロンジが優しく促した。

「そんなやつれた顔してたら、目覚めたツナが心配するぞ。ツナのことを思うなら、家に帰って寝ろ」

ツナのことを思うなら、その言葉で全員は渋々帰ることを決めた。

「僕は風紀の仕事で忙しいし、群れるつもりはないから行くよ」

雲雀が上着を翻して部屋を出ていった。

素直じゃねえな、トリポーンは思いながら雲雀を見送った。

「ボス…またくるね」

「沢田！極限にファイトだぞ！」

そう言ってクロームと了平も部屋をあとにした。

「ランボくん、行こ」

「ええっつ、オレっち、ツナといたいんだもんね！」

「ママンが心配してるよ。こんな時間までお出かけしちゃってるんだから…。おいしいご飯つくって待ってるよ」

少し眠たそうにぐずるランボをあやししながら、結加がトンノに話しかける。

「あなたは…やっぱり、残るんだよね」

「うん、ツナの傍にいたいから。気をつけて帰ってね」

結加はトンノに微笑み、リボンたちにお辞儀をし、ランボを抱えて帰っていった。

バサバサと羽を羽ばたかせてトンノがツナのベッドへ降り立つ。

衰弱しているツナを見て、トンノは気付かぬうちに涙をばるばると流していた。

「…鳥が涙を流してる」

「そっぴや、普通に喋るし、やっぱり不思議な鳥なのな」

「今回のことは僕がいけないんだ。僕が気配に気付いてなかったから…」

トンノは涙を止めることができなかった。そして自分のせいだと己を責めるトンノを見て、リーダーは心が痛くて仕方がなかった。

「獄寺たちも帰れ。明日来ればいいだろ」

「そうツスね…。朝一で来ます！」

「なんか差し入れでも持ってきてやるからな！」

「ああ、ありがとな。獄寺、山本」

獄寺と山本は意識のないツナに明日来るから、と伝えて部屋を出ていった。

「……すまねえな、鳥さんよお」

リーダーが涙を流すトンノに謝る。トンノは驚いてリーダーを見遣った。

「オレが馬鹿なことしちまったから坊主はこんなになっちまった。」

ほんとに申し訳ねえ…責めるならオレを責める。オレが悪いんだからよ」

「……………」

トンノは黙ってリーダーを見つめていたが、ふるふると首を横に振り、リーダーに話しかけた。

「いいんです。僕はツナを守らなければいけないから…今回のことは僕の不注意だ。……確かに、あなたはツナをさらって、ボンゴレを潰そうとしたけど…、あなたは反省してるし、悪い人じゃないし…それに、もう僕たちは仲間ですよ？」

トンノの優しい言葉が信じられなくて、リーダーは目を見開いた。目の前にいる小さな鳥。

そのぬくもりは、自分を受け入れ、庇ってくれたツナと似ていた。

「…すげえな、大空ってよお。」

リーダーはくしゃっと笑ってトンノの頭を撫でた。

「ありがとよ、小さな鳥さんよお」

トンノは目を閉じてリーダーの手に擦り寄った。それが嬉しくて、リーダーは目に涙をにじませた。

「腹が減ったな。ロンジ、何か買ってきてくれ」

「かしこまりました」

リボーンに買い出しを頼まれ、ロンジは嫌な顔せずそれに従った。

ロンジが部屋を出ていくと、リボーンはベッドに飛び乗って、布団を静かにめくった。

ツナの腕から伸びる痣。

それは鎖骨のところまで伸びていた。

さらに右足にも痣がおよび、いつの間にか太ももにまで達していた。だが、忍耐力を強くする修行は完了した。

だから前よりは進行も痛みもマシになったはず。

しかし油断はできない。

相手がどれほどの力をもっているのかわからないから、その忍耐力までもを押しやって呪いの進行を早め、痛みを増させるかも知れないのだ。

「…そういえば、気になってたんだがよお、その気味わりい痣はなんなんだ？」

「そうか、おめえは知らねえのか。これは、ツナにかけられた呪いなんだ。」

「の、呪いだと!?!?」

リーダーが目を見開いて驚いた。
リボーンは静かに頷いて話を続けた。

「左手首にも同じような痣があるだろ？それと伸びる痣がすべて繋がると、死にまうんだ。
だが、その進行を遅くする方法：修行があることがわかった。ツナはさっきそれを完了させたんだ」

「さっき言ってた…“愛しさ”とかか？」

「ああ。それらが呪いに対抗する忍耐力を強くするのに必要だったんだ。だから一旦、今は一安心というところだな」

その言葉にも関わらず、リボーンが険しい表情をしているのに気づき、リーダーはそつとその痣に触れてみた。
しかし、すぐに手を離してしまった。

ツナの腕はとても冷たく、血の気はまったくくない。
先程のツナとはまったく違い、身体がひんやりとしていた。

「大丈夫だ。こいつの生命力はかなり強い。すぐに目が覚めるだろ」
リボーンがそう言うと、部屋のドアが静かに開き、ビニール袋をぶら下げたロンジが入って来た。

「おっ、早かったなロンジ」

「皆さんがお腹を空かせていらっしやるようでしたので…走ってきました」

ロンジは少し息を切らして笑顔で買ってきたパンを渡した。

「すまねえな。ほら、お前も食べ」

ロンジに礼を言って、リボーンはリーダーにパンを投げた。

「…ありがとう」

リーダーはぼかんとしたままりボーンに礼を言った。
そして受けとったパンを見たままつぶやいた。

「なんか…アルヴィーコラと全く違うな。アルヴィーコラはボスだけしか信じねえファミリーだよ…、こんなパンもらったり…優しくしてもらったことなんて一度もねえんだ」

「そんな冷てえファミリーなのか、アルヴィーコラは。」

「冷てえもなにも、仲間意識なんてもんはねえんだ。ボスだけが全て、みてえな集まりだったんだよ」

リーダーはくだらねえ、と鼻で笑った。
そのファミリーのボスが自分だった。
それがあまりにもくだらなく思えたのだ。

「まあ、アルヴィーコラがそんなファミリーだったとしても、ボンゴレは違うからな。ボンゴレは仲間意識は高いぞ。ツナがボスになれば、かなり仲間意識が強まるだろうな。こいつはそういう奴だからな」

パンを食べながらリボーンは言った。

リーダーは黙ってそれを聞いていたが、ふと口許をゆるめて笑った。

「オレはもうアルヴィーコラじゃねえ。オレが倒されたときから、もうアルヴィーコラなんていうマフィアは無くなったんだ。……オレは、こいつについてくさ。」

そう言うとリーダーはパンの袋を開けて一口食べた。

そして顔が綻びた。

先程の笑顔とは違う、優しい笑顔だった。

「…こんなうめえパン、はじめてだな」

リーダーと目が、一滴の水できらりと輝いた。

標的30 不完全な力(前書き)

がんばって一日2話更新!

では、ごきげん(、、)

標的30 不完全な力

真つ暗闇な空間。

光も音も、全てが遮断された場所。

そんなところに、ただ一人、ツナは立っていた。

「…」どこどころだろ？」

辺りを見回しても黒が広がっているだけ。

なんの感覚もなく、足も地面についているというわけではないらしい。

つまりは、浮いているようだ。

「なんでだれもいないんだよ…、おーいつ、誰かー!!」

終わりの見えない闇にツナは声をかけてみるが、なんの返答もない。

確か先程までは森の廃屋にいて、アルヴィーコラのボスと戦い、彼をボンゴレに迎え入れると言っていた。

すると天井が崩れ、自分が下敷きになった。

そこから何か会話をしたような気がするが、まったく覚えていない。

気付けばここにいた。

ただそれだけしかわかっていなかった。

「何がどうなってるんだよ……！」

見えるのは自分自身のみ。

精一杯手を伸ばしてみるが、何も触れるものはない。

ツナはただ立ち尽くしていた。

実際は浮いているのだが。

途方にくれていると、どこからか音がかすかに聞こえた。
方向はわからない。

ただ、自分を囲む闇全体から聞こえた。

わけもわからず、きよるきよると音の根源を探していると、かすか
だった音がだんだんとはっきりしたものとなってきた。

「……の……、……を……」

「え？」

ツナはじつとその音に集中した。

そしてその音は誰かの声だとわかった。

「……飛び去る鳥の帯びる光

その煌煌としたさまは

悪を浄化しあまねく希望

それを決して潰してはならない

それは人の及ばぬ世界の使い

ただ 優しく美しく光る者には

同じ景色が見えるであろう」

「……!？」

ツナは驚愕した。

それは聞いたことのある詩だった。

不思議な声はつづける。

「すべての生き物に与えられた試練

己よりも勝る力を持つ者に

恐れず逃げず立ち向かうとき

心に芽生える小さな芽は

やがて大きな己を生む」

「これって…」

ツナは驚きながらも耳をすまして声を聞いている。

「荒む天気 荒む空気

それは光を見失った心の暴走

しかしそれを包みなだめるのは

広く大きな晴れ渡る空

その優しい空に触れたとき

癒され浄化されるとき

完全な大空があらわれる」

「やっぱり、修行のときのヒントの詩だ…」

ツナは落ち着きを取り戻そうと深呼吸をするが、なかなか心臓は不
定期的な動きをやめない。

なおも声は聞こえてくる。

「ふと感じる暖かさ

それは当たり前前のように

手に入れ難いぬくもり

忘れてはならないぬくもり

気付いたときにはじめて

そのありがたさに包まれる」

「……………」

ついにツナは無言になった。

ただ緊張する身体を、手を震わせていた。

「守りたい者。

傍にいたい者。

笑いあいたい者。

なくてはならない者。

その者のためならば、

人は何にでもなれるもの。

己を動かす感情。

自然の節理、自然な行動。

人はそれ無くしては生きられず。

理屈ではあらわせない感情。

それに気付いたとき、

人は強さを手に入れる。」

ふと、声がやんだ。

しばしの沈黙。

それがさらにツナノ緊張感をあおる。

チカッ

暗闇の中で、なにかが瞬いた。

次の瞬間、あたりは光につつまれ、白におおわれた。

ツナはあまりの眩しさに目をつぶって、両腕で目を保護する。

光がおさまりかけたとき、また不思議な声が聞こえた。

「願う祈りは光となり

主を守る力となる

帯びる炎の力は

主を包む力となる」

ゆっくりと目を開けると、ツナは再び驚愕することとなった。

目の前にいるのは。

「オ……オレ!？」

くせのある髪の毛。

小さな身長。

両手にはグローブ。

目はオレンジ。

額にはゆらめく炎。

それはハイパー化したツナだった。

「な、ななななんで!？」

ツナは震える指先をもう一人の自分に向ける。
ハイパー化したツナは優しく微笑んだ。

「オレは、もう一人のお前。つまり、心の中に生きているお前ってわけ」

「もう一人のオレ!？」

目の前の自分が話している。

目の前の自分が存在している。

それだけで驚くには十分だと言っのに。

「忍耐力を強くするために、修行ってやつをしただろっ? そのおか

げで、長年封印されていたオレは目覚めたってわけだ」

「封印って…なに、知らないよ!？」

「お前は知らないだろうけど…まあ、オレ自身が自ら封印したんだけど」

「なんで自分で自分を封印するんだよ！」

ツナは驚くことに疲れてしまった。
だがそんなツナに単発入れずにもう一人のツナは話をする。

「お前が小さい頃、オレはお前の能力として心の中で生きていたんだが、お前の能力…オレがあまりにも強い力だったから、オレはオレ自身を封印したんだ」

「なんで封印する必要があったの？」

呆けた表情で質問するツナに、もう一人のツナがため息をついて説明しはじめた。

「考えてみればわかる。お前はプリーモの子孫だ。ということは必然的にボンゴレ十代目候補として名があがる。そうなるというんならから狙われるんだ。オレが心の中に生きていることで、お前は普通の人間とは違う気を纏っていた。それはマフィアの目にとまるものだった。お前を守るためにも、オレはオレ自身を封印した。こ

「こまで言えばわかるか？」

ツナはおずおずと頷いて苦笑いをした。
あまりにも自分とは違ったのだ。

雰囲気から喋り方、頭づくりりまでもが。

「ま、オレが封印されればお前はただの凡人にしか見えないからな。流石に中学生ともなれば、ボンゴレボスとしてのなにかが起ころかも知れないと思ってたんだが…変なことに巻き込まれまくったな」

「オレだって、まさかこんなことになるなんて思ってなかったよ！マフィアのボスだなんて…なれないのに」

ツナは膝を抱えてぼそぼそとつぶやいた。

もう一人のツナは呆れたように二度目のため息をついてツナに話しかけた。

「お前：ボンゴレをぶっ壊すんだろ？プリーモたちに宣言してたじやねえか」

「あれは勢いっていうか、なんていうか…」

「なんと言っても、お前はボンゴレのボスになるんだ。だが、その前に呪いを止めなければいけない。そのために忍耐力を鍛え、オレが目覚めた。」

もう一人のツナは真剣な眼差しでツナを見つめる。
それにつられてツナも見つめかえす。

「オレは目覚めたばかりだ。完全な形ではない。完全なオレを目覚めさせるには、まだ必要なものがある」

「必要なもの？」

忍耐力のほかになにが必要なのだろうか、ツナはあれこれ考えてみたが、その答えは意外なものだった。

「スプレランツァ speranzaの持つオレの…クオーレ cuore、心臓のようなものだ」

「し、心臓！？心臓って、じゃあオレには心臓がないっていつの！？」

「馬鹿。お前のじゃない。それに心臓のようなものであって心臓ではない。つまりはオレの中心核のようなものだ」

自分につっこまれるとおかしな気分だな、とツナは呑気に思っていたが、もう一人のツナは話を進める。

「オレが完全に目覚めるためにも、スベランツァ speranzaを目覚めさせるためにも、お前はtesoro nascosto（テゾーロ ナスコスト）を七人集めなければならぬんだ。ウライラに捕まる前にな」

「どうすればいいんだよ…」

「心配するな。お前は自分が正しいと思ったことをやればいい」

もう一人のツナは優しく微笑み、ツナの頭をぽんと軽く叩いた。

「そうだ、オレのことは綱吉と呼べ。」

「自分の名前を呼ぶのっておかしいよね…」

「気にするな。そろそろ目覚めたらどうだ？リボンが心配そうにお前を見ているんだけど」

もう一人のツナ…綱吉は、上を指差しておかしそうに笑った。

「オレはお前の一部だ。だからいつでもお前の心の中にいる。呼べば必ず答える。だから聞きたいことがあったらいつでも聞け」

そう言つと綱吉はツナの背中を軽く押す。
すると白い世界がゆがみ、ツナはゆがみの中へ引きずり込まれてい
った。

綱吉に話しかけようとしたが、その前にすべてが消えてしまった。

「…っう、ゲホッ、ゲホゲホッ！」

「ツナ!？」

突然ツナが苦しそうに咳込んだので、リボーンは驚いてベッドに飛
び乗った。

「おい、ツナ、しっかりしろ！」

その声に応えるように、ツナのまぶたがゆっくりと開かれる。

そして琥珀色の目がリボーンの姿をとらえた。

「……リ……ボーン？」

「……まったく、迷惑かけやがって」

リボーンがツナの額を叩いた。

少し痛かったが、リボーンがずっとそばにいてくれていたというところを知り、思わず笑顔になってしまった。

「ありがとう、リボーン」

「オレだけじゃねえ、全員にも言っとくんだぞ」

ツナは頷いて深く息を吸う。

今さら酸素マスクをしていることに気付いた。

そして腕には点滴やら何やらが沢山刺さっていたりついていたりしていた。

「おめえの運の良さに医者も驚いてたぞ。少しでも瓦礫がズレて刺さってたら、即死だったみてえだぞ」

「ああ…だからお腹が痛いのか…」

目覚めたときからズキズキとお腹に痛みが生じていた。
それは瓦礫の刺さったせいなのだと言いついた。

「よかつたなー、生きてて」

「おめえがすぐ死ぬようなヤワな奴だなんて思ってねえよ」

リボーンはロンジに買わせたであろう缶のエスプレッソコーヒーを
飲んでつぶやいた。

443

ツナはそうなんだ、と独り言を言い、思い出したようにリボーンに
話しかけた。

「…リボーン」

「ん、なんだ？」

「…ただいま」

ツナは笑顔でリボーンに言った。
リボーンもにやりと笑って答えた。

「ああ、おかえり」

朝方の清々しい大空は、町一帯を包み込んでいた。

大空の目覚めを喜ぶかのように、鳥がさえずりはじめた。

標的30 不完全な力（後書き）

なんだかんだで30話になりました。
まったくおわる気配がない！

！
こんなだらだらな小説ですが、これからもよろしくおねがいします

標的31 もう一人のツナ(前書き)

週末に沢山更新しようと思ったけど…
疲れすぎて寝てしまっていました！

ごめんなさい…

標的31 もう一人のツナ

「もう一人のおめえだと？」

リボーンが顔をしかめて確認する。

それにツナはおずおずと頷いた。

病院の広い個室にはツナ、リボーン、リーダー、ロンジ、トンノがいた。

だが、ツナとリボーン以外全員はソファで寝ていた。

起こしては悪いとツナはリボーンに静かに話しかけた。

「夢…っていうのかな？なんか最初は真っ暗だったんだけどさ、いきなり明るくなって、そしたらもう一人のオレが出てきたんだ」

「で、そいつがツナの“能力”だとか何とか言ってたんだな？」

「うん。でも姿はオレがハイパー化したときの姿で、頭も…悔しいけどオレより良かった…」

ツナが不満を表情にあらわす。

ツナの“能力”である“綱吉”は、ハイパー化したときの冷静さに加え、なかなか頭が冴えていた。

自分とまったく同じなのに、とツナは不平を言った。

「んで、今回の修行でそいつの一部が目覚めて、スランツァ s p e r a n z a

を探せと？」

「その人が、オレの…綱吉の中心核みたいなものを持ってるみたいなんだ。…あ。」

「ん、どうした？」

話の途中で突然口を開けて固まったツナに、リポーンは話しかける。ツナの顔は相当間抜けだった。

「…そういえば、話しかければこたえてくれる…みたい」

ツナがへらっと笑う。

そんな大切なことを忘れていたのかと、リポーンはため息をもらした。

「じゃあ、今も会話できるのか？」

「んっと…、待って」

ツナは自分の意識を集中させ、心に問いかける。

(…ねえ、綱…吉?)

(…どうした?ツナ)

「!!!!」

本当にこたえた。
もう一人の自分が。

その様子を見て状況を理解したりボーンは綱吉に話しかけた。

「おい、外にでられるか?」

(…でれないことはない)

綱吉は一瞬黙ったが、それにこたえた。

そしてツナの心臓部分が輝き、人の姿となってなにかがあらわれた。

「うわっ！」

「まじでツナと同じ顔か」

揺らめく額の炎とオレンジ色の目。

たしかに外見はハイパー化したツナだ。

だが、本物はベッドの上で驚いた顔をしている。

綱吉はそんなツナを見て微笑み、頭をぽんぽんと撫でた。

「おめえがツナの“能力”か」

「そうだ」

綱吉が短く返事をする。

リボーンはふんっ、と鼻をならしてツナと綱吉を見比べて言った。

「たしかに、綱吉のほづが冴えている雰囲気だな」

「なにそれ、ひどいよりボーン！」

ツナがりボーンに文句を言うが、それを綱吉に止められた。

「騒ぐな。傷口に響くだろ？」

「…っつ。」

綱吉に注意されツナは呻いて大人しくなった。
はたから見れば双子の兄弟にも見える。
そっくりすぎておそろしいが。

「おい、おめえ、まだ完全に目覚めていないと言うが、ツナの能力としては、どれほどの力を持つてるんだ？」

「能力として…か。よくわからないが、まあ…地球ひとつは支配できんじゃないか？」

「ありえないありえないありえないーいーいー!!」

真剣に考える綱吉にツナがつっこみを入れる。

(地球ひとつを支配!?なんで世界征服で例えてんの!?)

冗談はやめろ、とツナは綱吉を睨む。

綱吉は微笑んで話をつづけた。

「とにかく能力としては申し分ないほどだろうな。だがその分^{スベ}sp^{ランツァ}eranzaの元へ行くのは難しい」

「おめえは^{スベ}sp^{ランツァ}eranzaがどこにいるのかわらねえのか?そこにおめえもいるんだろ?」

「…それが……」

綱吉は眉を寄せて俯いた。

「…^{スベ}sp^{ランツァ}eranzaとオレの居場所が…霧がかかったみたいにか
らないんだ」

「なに？」

リポーンは深刻な顔をしている綱吉に聞いたです。

「自分の場所ならわかるはずなのに…まったくわからないんだ。なにかに邪魔されているみたいだ」

「なにかに邪魔されてる？」

「よくわからない…なにがどうなってるのか…」

綱吉はひそかに混乱しはじめた。
それをツナは感じ取った。

綱吉はツナであり、ツナは綱吉なのだ。

「…っ綱吉!!」

ツナは綱吉の服の袖をつかんだ。
綱吉ははっとしてツナを見つめた。

「綱吉…もういいよ!慌てなくて、焦らなくていいから!」

ツナは綱吉がかすかに震えているのを感じた。
スベランツァ
speranzaと綱吉自身の居場所がわからなくて不安なのだろ
う。

「大丈夫だよ！tesoro nascosto（テゾーロ ナ
スコスト）が揃えば連れてってくれるって言うし！綱吉が気にする
ことないよ！」

「…ツナ」

「そつだぞ綱吉。ツナが連れてってくれるんだ。安心しろ」

「え、オレが連れてくの!？」

tesoro nascosto（テゾーロ ナスコスト）が連
れてってくれるのではないか、とツナはリボンにつっこんだ。

それを見ていた綱吉は笑顔をこぼした。

「馬鹿みてえな笑顔もツナそっくりだな」

「ひでえ!!!」

「オレはツナ有能力だからな」

笑顔の戻った綱吉を見てツナはほっとした。

自分と同じ顔なのにまったく別人のように感じるのはハイパー化しているからだろうか。

「しかし、ツナと同じ顔のやつを綱吉って呼ぶのは変な感じがするな」

「…名前を変えたほうがいいか？」

「確かにオレも…変な感じしてたんだよね…」

リボンとツナは目の前の“ツナ有能力”の“綱吉”の名前に違和感を感じていた。

「よし、ツナ。決める」

「えっ、名前を!!!???」

ツナは綱吉の新たな名前を決めることにたじろいだ。
トシノの名前を決めたとき、ネーミングセンスがないと言われたからだ。

「オレが決めたら…へんな名前になるんじゃない…」

「ツナがつけてくれるなら…オレはかまわない」

ツナはまさか、と綱吉を見遣った。

綱吉は微笑んで頷いた。

「オレはツナがつけた名前がいい」

「…だそうだ。さっさとつけてやれ」

綱吉に指名され、リボーンに促され、ツナは後に引けなくなった。

前回のようなへマはしないように、ツナは真剣に考えはじめた。

ツナが一生懸命考えている間、リボーンと綱吉はツナの顔を見て笑っていた。

ひらめいたかと思えば暗い顔になり、しかし次の瞬間には明るい顔に戻り、とさまざま表情を浮かべながら考えていたのだ。

ツナが百面相を繰り広げて考えること数分。

「…うん。決めた」

ツナが自信満々に顔をあげた。
しかし。

「…なにやってんの？」

ツナは笑い転げているリボンと綱吉につっこんだ。

「いや…なんでもねえ。…で、どんな名前にしたんだ？」

リボンが笑いをこらえながらツナに聞いた。

ツナはこれでいいのかな、と独り言を言いながらも答えた。

「…と、徳松なんて…どっつ？」

「…徳松？」

綱吉ははじめて聞いた名前を聞き返した。

「徳松つつたら…將軍徳川綱吉の幼名であり、子供の名前でもある名だな。よく知ってんじゃねえか、ダメツナが」

「いや…小さい頃から父さんにずっと聞かされててさ…、オレの能力ってことは、オレ自身だし、なんか…オレの子供、みたいな感じがしたんだよね！」

ツナは照れながら笑い、綱吉を見た。

「…どう、かな？ 渋いかな？」

「…いい。」

綱吉は嬉しそうに笑って答えた。

「ツナが考えてくれたから…オレは、徳松でいい」

「親バカならぬツナバカだな」

リポーンはにやりと笑って二人を見た。

「んじゃ、おめえは今から徳松だ。よろしくな、徳松」

「ああ、よろしく頼む」

網吉は…徳松は、優しい微笑みで二人を見つめた。

「んー…なんだあ？さわがしいなあ」

もそりと、ソファで眠る男が起き上がった。

その男の懷で寝ていた鳥もつられて目を覚ました。

反対側のソファで寝ていたロンジは、寝起きではないかのようにスツキリとした顔で起きた。

「なにがあつたん……………」

なにがあつたんだ、と言いかけた途中で、リーダーは氷のように固まってしまった。

同じようにトンノもロンジもぴたりと固まってしまった。

「…ど、どうしたの？」

ツナが三人に問いたただすが返答はない。

「ねえ、ねえってば！」

「…っ、…っ、…っ、…」

ロンジが目を見開いてツナを指差す。

「…ツ…ツ、…ツ……」

トンノが小さな身体を震わせる。

リーダーは無口になっていた。

「…ねえ」

「綱吉様が目を覚ましたあああああ！…！…！」

「ツナが二人いるうっうっうっうっ！…！…！…！」

「ぎゃあああああああああ！…！」

ツナが目を覚ましたことに驚くロンジ。

ツナが二人いることに驚くトシノ。

なにに驚いているのかわからないリーダー。

三人の叫び声が、早朝の病院に響き渡った。

標的32 友人と能力の対面（前書き）

い、急いで書いたらこんなことに…（笑）

相変わらずのダメダメ文章ですが、どうぞ見てってください！

標的32 友人と能力の対面

ツナたちは耳が痛かった。

鼓膜がやぶれそうで、頭までもがキンキンと痛んだ。

その原因はロンジ、トンノ、リーダーの三人。

この三人が病室内で叫び声をあげたからである。

叫び声の理由はツナともう一人のツナ、徳松。
彼はツナの“能力”である。

ツナが目覚め、しかもツナそっくりの徳松がいるため、三人は驚いて叫んだのだった。

「うるせえ!」

リポーンが不機嫌そうに銃を三人に向けた。
すると三人はひっ、と小さな悲鳴をあげて固まった。

「おい、ツナ。説明してやれ」

「ええっ、オレ？」

「あたりめえだ。おめえの事で驚いてんだぞ」

それもそうだ、と徳松も頷いた。
ツナはしぶしぶ説明しはじめた。

説明をしはじめて数分、ようやく三人は落ち着きを取り戻し、冷静にツナの話聞いていた。

「つまり、この方は綱吉様であって綱吉様ではなく、綱吉様の“能力”と言うことですか？」

「うん、そうなんだ」

ツナは自分の説明で理解してくれるだろうかと心配していたので安心した。

「しっかし、まじで坊主と瓜二つじゃねえか。」

「オレはツナ有能力だからな」

徳松がリーダーに当たり前とでも言うかのように答えた。

「だが徳松、おめえこれからどうすんだ？そのままの姿でいんのか？」

「…そのつもりだけど」

「ちょ、ちょっと待ってよ！」

ツナが慌てて徳松を止める。

「オレとまったく同じ姿だったら、いろいろややこしくなるだろ！
？みんな混乱しちゃうって！」

ツナは自分の顔と徳松の顔を交互に指差して説明した。
徳松は、ああ…そっか、と今気付いたようにつぶやいた。
ツナよりも頭は冴えているが、どこか抜けているらしい。

「徳松…なんか、姿変えられない？」

「無理だな。オレはツナ有能力だから、ツナと同じような姿だけしか出来ないんだ。」

すっぱりと言い切られてツナは言葉をなくしてしまった。

一体どうすればいいのかと考えを巡らせていると、徳松がなにかを思い出したらしく、ツナに話しかけた。

「姿を変えることはできないが…小さくなるくらいなら出来るはずだ」

「ほんと!?!」

ツナが確認すると、徳松は目を閉じてなにかをつぶやいた。

すると、徳松から光が発せられ、その姿がみるみる小さくなっていく。

光がおさまると、そこには掌サイズのハイパー化したツナと同じ顔の徳松がいた。

ちよこんと座る姿はかわいらしい小人のようだ。

「どうだ、ツナ？」

「すごいよ徳松！」

「これならいつでもツナのそばにいれるな」

リポーンも納得したように頷いた。

「オレはツナ有能力だから、ツナの心の中で生きているけど、外に出るときはこの姿で現れればいいか？」

「うん、ありがとう徳松」

ツナは笑顔で徳松にお礼を言った。

それをロンジたち三人は黙って見ていた。

「なんか…すげえなあ坊主。」

「ツナ有能力ってまだ未知なんだ…」

「さすが綱吉様…ですね」

ツナは両手を振ってそんなことない、と否定する。
しかしそれを徳松は肯定した。

「tesoro nascosto (テゾーロ ナスコスト)の
セツラツジヨ serraggioから聞いただろ。 スベランツァ speranzaはツナを待
ってるんだ。地球を生み出した神がお前を頼っている。つまりそれ
は、ツナがそれほどの能力を持つてることだろ？」

「そうだぞツナ。だからおめえはアツジヨルナーレに狙われてんだ。
そんくらいわからねえのか」

二人にごもつともなことを言われ、ツナは何も言えなくなってしま
った。

「…そうなのかな。全然わかんないや」

「今はわからなくても、いずれわかる。近い将来にな」

徳松がツナの肩に飛び乗って言った。
その目は真実しか語っていなかった。

「うん、なんとか大丈夫…いててっ！」

ベッドから起き上がるうとすると、縫ったばかりの傷が痛み、ツナはベッドに伏せた。

「ダメツナが。手術したばっかなんだぞ」

「う…忘れてた…、いてーっ」

傷口をさするツナを心配して獄寺がおろおろしている。

山本は苦笑いで大丈夫かと声をかけた。

すると、山本がツナの首の後ろになにかがいていることに気付いた。

「ツナ…そいつ、誰だ？」

「え？」

ツナは首を指差され、なんだろうと首に手をそえる。

すると、こつとなにかが当たり、忘れていた存在に気付いた。

「…あー！！徳松っ！！！」

ツナは慌てて首の後ろに隠れていた小さな自分の分身を掌に乗せた。

「ごめん徳松！大丈夫だった!？」

「ああ…お前こそ、傷大丈夫か？」

徳松は苦笑いしてツナを心配している。

その光景を獄寺と山本はア然として見ていた。

目の前にはツナとツナにそっくりな人間。

だがそれはあまりにも小さく、しかもハイパー化したツナだった。

「…あ、あの…十代目…その、十代目にそっくりな…そいつは誰ですか？」

「まじでツナと同じ顔なのなー！お前誰だ？」

二人の問いにツナがたじろいでいると、徳松はツナのかわりに答えた。

「オレはツナ的能力である徳松だ。お前らは雨と嵐の守護者…だろ

？」

その堂々とした態度に少々驚きながらも、二人は頷いた。

ツナはなにも知らない二人に今までであったことを一通り説明した。

獄寺と山本は素直にそれを聞き、理解した。

「そっかー、すげえのなお前！」

「さすが十代目の能力様！」

「能力様、じゃなくて徳松だ」

徳松は“能力様”と呼ばれるのに違和感を感じ、獄寺に言った。

獄寺はすいません！と勢いよく頭を下げて謝った。

だが、いくら小さくても徳松はツナの能力だ。

ツナを尊敬する獄寺は徳松を呼び捨てにすることができなかった。

「と、…と…徳松…さん！」

「…呼び捨てでいいんだけど」

「いえ！十代目の能力様は十代目自身！オレが馴れ馴れしく呼び捨てをするわけにはいきません！」

獄寺は小さなツナの能力にペコペコと頭を下げた。

徳松は苦笑いしながらも獄寺を見ていた。

「ツナのまわりはおかしな人間ばかりだな」

ツナの耳元で徳松がこっそりと耳打ちをした。

「…個性が強いんだよ！おかしいなんて言っちゃだめだって！」
ツナは慌てて徳松に言い付ける。
徳松は笑いながら続ける。

「でも、そいつらのおかげで今のツナがいるんだろ？」

一瞬とぼけた顔を見ると、ツナは照れたように笑って頷いた。

「なら、オレはそいつらに感謝する。今のツナがここにいること、嬉しいから」

「…え？」

ツナはほづけた顔で徳松を見る。

「今のオレがいるのは、今のツナがいるからだ。今のツナがいるのは、その“個性の強い守護者たち”のおかげなんだろう？」

優しく徳松がツナに微笑む。

ツナはさらに照れながら笑った。

「…そうだね」

ひとつであり、ふたつのの大空がきらきらと輝く。

それは、まわりの人間、リポーンたちを優しく包み込むぬくもりとなった。

標的33 事実と陰謀（前書き）

久しぶりにあとがきを書きました。

最近ほんとに忙しくて…

日曜日しか休みがないです（；|；）

標的33 事実と陰謀

空は晴れ渡り、のどかな雰囲気醸し出す。

そんな空を病室から眺め、ツナは自分の上半身を見つめた。

怪しく広がる鎖の痣。

それは右の腕から伸び、今は右の鎖骨に及んでいた。

右足首から伸びる痣は、左の足に侵入し、さらには胴体をぐるりと一周していた。

修行を終える前に、相当進行していたらしい。

しかし、今は進行はありえないほどスピードを衰えさせていた。

だが痛みはあるし、進行が止まったわけではない。

近づくタイムリミットに、少しずつ焦りを感じはじめていた。

「ツナ、明日退院することになったぞ」

病室のドアが開き、リボンがてくてくと歩いて来た。

「え、まだ手術して数日しか経ってないよ？」

「てめえの体力ならギリギリ大丈夫だろ。時間がねえんだ、早くウライラの居場所を探らなきゃなんねえんだぞ」

ぴよん、と身軽にジャンプしたりボーンは、椅子の上にそのまま座って言った。

「そりゃオレも焦ってるけど…まだ立ち上がるだけでも痛いし」

「それはオレがなんとかする」

一瞬まばゆい光を放ち、目の前にツナそっくりの徳松が現れた。

「おい徳松、なんとかするってどういうことだ？」

リボーンが徳松に聞くと、徳松はリボーンを一瞥して話しはじめた。

「オレがツナの傷を治す力を補う。もちろん、ツナが今まで通りに戦えるようにもする」

「えっ、それじゃあ徳松の負担が…」

ツナが徳松を心配するが、大丈夫、と徳松が首を横にふる。

「今はツナがハイパー化したときの力に、目覚めたオレの力が加わるんだ。だから傷を癒すくらいのは力は使えると思う」

「そんなことできるのか？」

「オレはツナ的能力だ。ツナ的能力は未知だって言っただろ？」

その言葉を聞いて、リボーンはにやりと笑って頷いた。

ツナだけが、まだ納得していない。

自分の力が未だに信じられないのだ。

(徳松は嘘を言うはずない…けど…)

ちよつと前までは凡人の中の凡人だった自分が、世界を創造した人を救えるほどの力を持ち合わせているとは思えないのだ。

(確かに最初と比べれば自分は強くなったと思う。…でも、まだしっくりこないんだよなあ)

難しい顔をしながらツナは考え込んだ。
徳松は優しく微笑んでツナに告げた。

「信じられなくても、それが事実なんだ。オレがいる、ということ
はツナの力がすごいってことを証明してるんだ」

ツナはまっすぐ徳松を見つめた。

目を細めて笑う徳松はツナの指にそつと触れた。

「スズランツナ speranzaは、この手を待ってる」

「……………うん」

長い沈黙のあと、ツナは小さく頷いた。

徳松の一言で、すこしだけ実感がわいた。
指に触れる小さなぬくもりが、事実を訴えていた。

「ゆっくりできるのは今日だけだからな。しっかり寝とけ」

「うん、わかった」

リポーンはそう言つと椅子の上で銃の手入れを始めた。

ツナはゆっくりとベッドに横たえ、目を閉じた。

すると、小さな身体と一緒に布団にもぐってきた。

「…徳松？」

「休むことで、力が回復するだろ？だから、オレも寝る」

そう言つと徳松はすっぽりと布団をかぶって視界を遮った。

「…つぶしちゃうかも」

「死ぬ気で逃げるから安心しろ」

「あはは、じゃあちゃんと逃げてよっ。」

ツナは自分の分身に言い聞かせ、夢の世界へと旅立つ。

痣や傷は痛む。

だが、それに勝るようなぬくもりが、
たしかにとなりにあった。

「…なぜだ？」

暗闇の中、地を這うような声が響く。

その事実には動揺を隠せず、男は…ウライラは、動悸が激しくなるのを感じた。

「なぜ呪いの進行が遅いんだ…!?!」

苦しい胸を抑え、地面を見つめながら叫んだ。

ここ数日、ツナにかけた呪いの進行が遅くなった。

最初は自分が疲れていたのだろうとウライラは思っていたのだが、疲労を癒しても進行は断然遅いまま。

さらに時々呼吸ができなくなったり、胸が痛んだりと奇妙なことが起こっていた。

「なにがあつたんだ…」

痛みに耐え、ふらりと立ち上がって呪いを強めようと念じる。

しかし、いくら念じても呪いは強まらず、力を無駄遣いするばかりだった。

ひどい目眩がウライラを襲い、地面に倒れ込む。

「…確かめればいいんだ、事実を」

そう言つとウライラはゆっくりと目を閉じて意識を飛ばした。

行き着いた先は真つ黒な世界。

ここはウライラの意識の中であり、ウライラの力の中、とも言う場所であつた。

ウライラが頭の中でイメージすると、真つ黒な世界がみるみる景色を変え、広い空の真ん中に身体が浮かび上がった。

お気づきだろうか？

ここはツナの意識の中である。

以前、ツナに呪いをかけたときもここへ潜り込み、ツナを待ち伏せしていた。

意識の中は、その人の心をあらわす。

ツナは大空属性ということもあり、すべてに染まりつつ、包み込む大空が意識の中にひろがっていた。

それに対してウライラの意識の中は、ただの真っ黒な世界。すべてが謎のウライラにびったりだろう。

ウライラは気配を消し、飛びながらツナを探す。

こんな広い大空では探すのは不可能だと思うだろうが、そうでもない。

なぜなら、ウライラにとってツナは対照的な存在だからだ。

ウライラには、ツナはあまりにもまぶしすぎる。

そんなまぶしすぎる存在を探すのは簡単すぎた。

探すこと数分、ツナはすぐに見つかった。

ウライラは見つかからないように姿を消し、近すぎず遠すぎずの距離でツナを凝視した。

「…綱吉くんが…二人？」

信じられない、とウライラはつぶやいた。

そこにいたのは、琥珀色の目をしたツナと、オレンジ色の目で額に炎をともしたツナだった。

485

実際はツナとツナの“能力”の徳松なのだが、ウライラはそのようなことは知らない。

つい焦って、声を出しそうになってしまったが、落ち着きを取り戻し、二人を見つめた。

ツナを見ると、右腕と右足首からのびる痣が、鎖骨あたりと、腹のまわりにあるのに気づいた。

前までは順調に進行していたはずだとウライラは思い返していたが、

あることに気づいた。

（もう一人の綱吉くん…人間じゃない…？）

ハイパー化した時のツナ、つまり徳松を見て、ウライラは疑問を抱いた。

ツナからは人の気を感じるのに、徳松からは感じない。かすかに感じるものは、ツナと同じ気だった。

（力が圧縮されているから…なにかの力か？）

人の気を感じないかわりに、徳松からはとてつもない力を感じた。

しかも、ツナの力だ。

ウライラは、気づいてしまった。

徳松が、ツナ自身の力だということに。

そして、徳松がツナにかかった呪いの進行を遅くさせていることに。

（なぜだ…なぜだ！？あの呪いはそう簡単に操作できるものではないのに…！）

ウライラはひどく取り乱した。

“鎖の呪縛”は、最初呪いをかけた人の力で維持し、次第に呪いを受けた人の力で進行を早めたりする。

この呪いの難易度は高く、いくら力のある人物でもかけることは難しい。

もちろん操作することも難しいのだ。

だが、ツナの呪いは確かに進行が遅くなっているツナの手、徳松によって。

（なにをして、そのようなことを…綱吉くん）

チツ、と舌打ちをしたあと、ウライラはあやしく微笑んだ。

(この呪いを操ることができるよう、綱吉くんは強いってことだね…)

ウライラは目を閉じて、自分の意識をイメージする。

大空は消え、かわりに真っ黒な世界があらわれた。

「あの力が手に入れば…」

黒の世界にあやしい笑い声が響いた。

同時に泣き声も、かすかに響いた。

誰に聞かれるでもなく、それはぷつりと消えた。

標的33 事実と陰謀（後書き）

ウライラはすごい力を持っていますよ。

トンノと同じように、人の意識の中に潜り込めるんです。

気になる方もいらっしやるかと思いますが、最後の文章は、とても重要なことなんです。

勘の鋭い方は気付いていらっしやるかも…！

そういえば、今日で“その先には。”を書いて一ヶ月になります。

一ヶ月で34話…がんばったな、自分。

春休みで書きまくってましたからね…

最近は何となくイラストを書いたりしています。

ツナしか書けません。

あとサイトをはじめたり。

コンテンツを増やしたいんですが、忙しくて…泣けます。

でも、ほかの方の小説を見て元気をもらってます。

あんな文章を書ける力がほしい！

いつも閲覧ありがとうございます！

見てくださる方がいるかぎり、続けていこうと思います。

失礼しました(^ o ^) /

標的34 さまざまな苦難(前書き)

タイトルがあんま関係ないように思える…！

標的34 さまざまな苦難

目が覚めたとき、悪寒を感じた。

ツナは嫌な夢を見たものだ、部屋の時計を確認する。時刻は夜中の3時を少しすぎたくらい。まだ朝までは長いので、もう一度目を閉じる。

先程まで見ていた夢は、大空の真ん中で徳松と話をしているというもの。

それが普通に終わればよかったのだが、そうはいかなかった。

ふと辺りを見回すと、なにかを見た。

知らないものでありたかった。

知りたくはなかった。

それは、ツナが探している男、ウライラだった。

ウライラは奇妙な笑みで消えていった。

そこで目が覚めた。

あの笑みがあまりにもあやしく、ツナは眠ることができなかった。もう一度、夢を見たら次もウライラが出てくるのだろうか。そう思うと怖くて、眠れなかった。

痣が小さな痛みをツナに与える。

それがウライラと繋がっているということに目を背けたくなる。だが、それを許さないかのように小さな痛みはツナにその存在を示す。

ツナが小さな痛みに耐えていると、頭の中に声が響いた。

“おいで、ツナ”

徳松がツナを呼んでいる。
優しく話しかけるように。

“大丈夫だ。オレがいるだろ？”

その言葉にツナは安心し、心を落ち着かせる。

そして、ゆっくりと意識の世界へ旅立って行った。

「うえっっ、苦い…」

「そんなくらい我慢しろ。男だろうが」

ツナが病院とボンゴレから処方された薬を飲み込み、その苦味に顔を歪ませる。

ツナの怪我のことを聞き、ボンゴレは傷の治療を早める薬を送ってきた。

よく効く薬はだいたいまずい。

ボンゴレの薬も、とてつもない苦さだった。

例えるなら、カカオ99%のチョコレートのような。

薬の苦さをカバーするための市販のゼリーが食べたい、とツナは子供すぎる考えを抱いた。

最後の錠を水で飲み干し、苦さを消すために飴玉を口に放り投げる。

オレンジ味が口いっぱいに広がり、苦さが消えた。

「ツナ、大丈夫ですか？」

「大丈夫だよ、ありがとう」

ツナはシクロとシスイに礼を言う。

ツナがさらわれ、怪我をして入院していた間、tesoro セッラツジョna scosto (テゾーロ ナスコスト)のseraglio、シクロとシスイはずっと部屋でツナの帰りを待っていた。

だから久しぶりにツナを見たとき、嬉しさのあまりツナに飛びついた。

飛びついたのはかまわない。だが飛びついた場所が問題だった。

シクロとシスイは、ツナの腹目掛けて飛びついたのだ。

ツナは腹に刺し傷がある。
まだ治っていないのだ。

言葉もなく床に倒れ込んだツナを見て、シクロとシスイは慌てた。
自分たちが原因であるとも知らずに。

それを隣で家庭教師がにやりと笑いながら見ていたのは言うまでもない。

「「我らが飛びついてしまったから…ごめんなさい」「

「だ、大丈夫だって！二人のせいじゃないから！」

申し訳なさそうにうなだれる二人をツナが慌てて慰める。

だが二人は落ち込んだままで、立ち直る気配はない。

「すみません。しばらく休みます」「

二人はてくてくと歩き、寢床に潜り込んでしまった。

相当責任を感じているのだろう。

たしかにあのあと、しばらく歩くことができず、二階に上がってきた奈々に驚かれた。

奈々の手を借り、なんとかベッドにたどり着いたツナは、おさまらない痛みと格闘しつづけた。

シクロとシクロはおろおろとし、リボーンはそれを楽しそうに見ていた。

「二人のせいじゃないのになあ…」

「あれはしばらくは落ち込み続けるだろうな。立ち直るまでほっとけ」

リボーンはコーヒーを飲みながらツナに言った。

二人が気になったが、リボーンの言うとおり立ち直りそうにもなかったので、そっとしておくことにした。

「ウライラ様！」

部屋の扉が勢いよく開かれる。

「…！？ウライラ様、大丈夫ですか！？」

部下が慌てて苦しそうに胸をおさえるウライラに駆け寄った。

ウライラの額から汗がたらりとたれる。

呼吸は乱れ、顔色が悪い。

「すぐに、救護班を…」

「大丈夫大丈夫。すぐにおさまります」

ウライラはふらりと立ち上がり、ソファーに座って部下に話しかけた。

「で、どうかした？」

「ああ！ウライラ様、ようやく皆様の強化オペレーションが終了いたしました！」

その言葉を聞いて、ウライラはぴくりと反応し、あのあやしい笑顔を浮かばせる。

「そうかそうか！やっと終わりましたか！」

楽しそうにウライラは、部下の差し出した資料を受けとって眺める。

「弱点はあるけど、それさえカバーすれば前の彼らより何倍もの強さが発揮できる」

「ですがウライラ様、皆様はただ今休養が必要となっております」

「なんで？」

ウライラが聞くと、部下は言いにくそうに答えた。

「なれないプログラムのため、副作用が出てしまったようです。な
んせ、人には初めて使われたプログラムですので…」

「そっか。ある意味実験台になった彼らには悪いことしちゃったね」

さっきの苦しそうな姿は消え、自信に満ちあふれた顔をしてウライ
ラは陽気に笑っている。

資料を一通り読み、机の上にパサリと落とし、独り言を言う。

「もうすぐ僕の夢が叶うんだ」

歪んだ口から不気味な笑い声がもれる。

小さな小さな光が、精一杯瞬いている。

その光が意味するものとは。

それはまだ誰にもわからない。

誰にも。

標的34 さまざまな苦難（後書き）

今回も意味深なことをかいてみました。

かきすぎるとバレちゃうかな？

ひかえめにしておきましょう！

標的35 c a r p e d i e m (カルペ・デイエム) (前書き)

息抜きにと書きました。

平和な感じですよ。

標的35 carpe diem(カルペ・デイエム)

今を思いきり生きる。

悔いのないように生きる。

たまにこのような類の言葉を聞かないだろうか。

誰だって精一杯生きたい。

後悔なんてしたくない。

誰が好きで後悔をするのだろうか。

だが、生き物というものは、この世の中というものは、残念ながら
“完璧”というものを持ち合わせていない。

“完璧”、なんとも魅力的な言葉だろう。

勉強も、運動も、人間関係も、すべてがうまくいく。

問題になっている環境問題だって、日本が絶賛交渉中の北方領土問題
だって、自分勝手な子供のようなアジアの小さな国の問題だって、
すべてがうまくいく。

“完璧”な世界とは、どれほど素敵なものだろうか。

誰だって“完璧”を望むだろう。
ツナだって人間だ。
それくらいのことは望む。

だが、それを嘲笑ったのは、最強と謳われるヒットマン、リボーン
だった。

「馬鹿なこと考えてんじゃねえ」

まず、この言葉で現実に戻された。

「そんなくだらねえ事考えてる暇があるなら勉強でもしろダメツナ
が」

そしてこの言葉でツナは現実に戻されるどころか劣等感に襲われた。

いいじゃないか、夢を見るくらい。

ツナは心の中でこっそりと反抗する。

実際に口に出したら何をされるかわからないのだ。

しばらくは自宅で安静するように言われているので、することもないからと仕方なく勉強をすることにした。

だが、普段あまり勉強をしないツナは、何をどうすればいいのかわからない。

しばらく机の前で腕を組んでどうしようかと考えていると、それを見兼ねたりポーンが一冊のテキストを取り出した。

「…なにこれ」

「見てわかんねえか。国語のテキストだぞ」

リポーンに手渡されたテキストには、シンプルに“国語総合”と書かれており、中学生対応のものらしかった。

その厚さは推測で2cmほど。なかなか分厚いテキストだ。

ツナが不満そうな顔をしていると、リポーンがもう一冊テキストを取り出した。

「なんだ。国語が嫌なら数学にでもするか？」

「いいいいいい！！国語でいいです！てか国語がいいです！」

ツナは慌てて国語のテキストを掴み、数学のテキストを拒んだ。

学生の大半は、国語か数学かと聞かれたら、国語と答えるだろう。
(実際、わたしだって数学は大嫌いだ。)

「なら最初から素直に受け取っとけ」

そう言うとりポーンは部屋から出ていった。

部屋に一人残されたツナは、嫌々ながらもテキストを開く。

長文、長文、長文、長文。

評論、小説、評論、小説。

見るだけで眠くなりそうだ。

机に突っ伏し、ぱらぱらとページをめくる。

すると、他のページよりも文字数の少ないページにたどり着いた。

手を止めてそのページを見ると、“詩”と書いてあった。
どうやら有名な詩人の作品を引用しているようだ。

だいたいそういうものは、詩の一部を紹介し、あとは説明やら解説
やらという文章だろう。

それも読むのはめんどくさいが、他の長ったらしい評論や小説に比
べればかわいいものだ。

ツナは早速それを読みはじめた。

c a r p e d i e m

皆さんは、「c a r p e d i e m」という言葉をご存じだろうか。
「c a r p e d i e m」とは、「カルペ・デイエム」と読み、ラ
テン語である。

紀元前1世紀、古代ローマの詩人であるホラティウスの詩に登場す
る語句である。

「C a r p e」とは、「花などを摘む」ことを意味する「c a r p
o」の命令形で、「D i e m」は「日」を意味する「d i e s」の
対格で目的語となる。

ホラティウスは、日常生活や友人、愛などを綴った詩を多く残した。その中のひとつ、「carpe diem」は、長い一句の一部であり、正確には「Carpe diem quam minimu
m credula postero」、つまりは「明日のことはできるだけ信用せず、その日の花を摘め」という意味である。

ホラティウスが言いたいののは、「遠い未来を見るよりも、今日を見る。」、「理想ばかりを追い求めるのではなく、現実を受け止める」ということだろう。

ここまで読んでツナはふと気付いた。

「あれ、これって……」

(さっきリボンが言ったのとそっくりだなあ)

偶然だろうか、ツナは再び文を読みはじめる。

今日を捕らえよ。今を楽しめ。今この瞬間を楽しめ。今という時を大切に使い。

ホラティウスは、予想していたのだろうか。
毎日を退屈だとか、暇だとか嘆く人々のことを。

遠い未来を思い描くよりも、現実を見たほうがよいだろう。
確かに、予測は大切だ。

しかし、今から目を背けてしまっただけでは、何がおこるかわからない。
だから人は後悔をするのだろう。

前に進め。振り返るな。

限らない可能性を秘めたわたしたちにあるものは、幸せか、不幸か。
それは、わたしたち次第なのだ。

そこで文章は終わっていた。

これはまるで。

「さっき…オレが考えてたことに似てる…」

ツナは少し驚いてしまった。

偶然にもほどがある。

これほど偶然が重なると恐ろしくなる。

だが、これはおそらく。

「リポーン…だからこのテキストを見せたのかな」

ツナはそう思った。

リポーンはいつも、ツナをさりげなく正解へと導いてきた。

いつも迷っているツナを、リポーンはさりげなく救ってくれた。

そして今回も。

なんだかんだ言って、リポーンはツナを助けてくれるのだ。

「…ありがと、リボン」

ツナはこっそりと、下でくつろいでいるであろうリボンに礼を言った。

なんとなくページをめくると、今までの平和だった気持ちが一気に地獄へと突き落とされた。

そこには大量の問題。問題。問題。

当て嵌まる言葉を抜き出せとか、要約しろだとか、めんどくささ満点だ。

しばらく固まっていたツナは、大きなため息をついて問題にとりかかった。

部屋にはツナの悩む唸り声が響いていた。

「ツナ、頑張ってるみてえだな」

「そのようですね」

リビングではリボーンとロンジがくつろぎながら会話をしていた。

「僕、ツナのところに行きたい」

「我慢しろトンノ。これもツナのためなんだぞ」

「でも…」

トンノはツナの部屋の方向を見つめる。

先程、リボーンが出ていくときに無理矢理トンノも連れてこられたのだ。

トンノの隣には、未だ立ち直れていない セッラジヨ serraggio の二人が眠り続けている。

リボーンはツナを一人にさせたかった。

「誰の力も借りず、あの文章で今の自分の考えを直せばまあまあだがな」

リポーンはコーヒーのおかわりをロンジに催促する。
ロンジは笑顔でコーヒーを継ぎ足した。

「あの文章でわかんなかったら、どうしようもねえ奴だな」

リポーンは遠回しにツナを褒めた。

ロンジとトンノはそれをちゃんとわかっていた。

「なんだかんだ言っつて、綱吉様のことを大切に思っけいらっしやる
のですね」

「なんか言っつたか？」

「いいえ、何も」

リポーンが睨むと、ロンジは笑顔で対応し、リポーンの睨みをか
わした。

ほんとに素直ではないんですね、とロンジは内心思った。

それからツナの達成感あふれる喜びの声が聞こえたのは何時間か後
だった。

標的35 carpe diem(カルペ・ディエム)(後書き)

carpe カルペ・ディエム diemという言葉は冬に知りました。

わたしの大好きなアーティスト様のアルバム名になっていて、気になって調べたら“一日を楽しめ”的な意味だったんです。

それをなんとなくリボンとかけてみたらこうなりました。

相変わらずのダメ小説です！わあ！

さて、いつツナたちとアルヴィーコラさんたちを戦わせようか。
気のむくままに書いているところなんです(笑)

計画性がない小説ですいません！

標的36 言葉(前書き)

ほのぼの雰囲気はそろそろ終わります

標的36 言霊

リポーンに指示されたテキストをはじめてかれこれ数日。

国語から始まり、理科、社会、英語と次々に出された課題を、ツナは半泣きでこなした。

もちろん、ツナ一人では出来るものではないので、獄寺や山本に教えてもらいながら課題を終えた。

ただ、山本とは無駄話ばかりで獄寺だけが教えていただけだが。

今は数学の最中で、先程まで獄寺が教えてくれていたのだが、リポーンが帰らせてしまった。

「最後まで自分でやりやがれ」

そう一言告げると、意地悪そうな顔をして部屋をあとにした。

残る問題は基礎やら応用やらをまとめた難題の総集ものだ。

そんな問題を一人で解くのは不可能だとツナは嘆いた。

「今までの基礎や応用の総集なんだから、わかるはずだよ」

そう言い残してトンノはリポーンの後についていった。

渋々問題を解きはじめて数分。

なんとなく、なんとなくだが、ちゃんと解けている気がする。

苦手だったグラフやら面積やらが、前よりも理解している気がする。

それが嬉しくて、ツナはどんどん問題を解いていく。

一人で解きはじめて数時間。

終わるのは無理と思われた数学の問題は、あと一問というところまでできていた。

カリカリカリ

カチカチッ

カリカリ…ゴシゴシ

カリカリカリカリ

せわしなく動く右手。

数字を綴るシャープペン。

書き間違えた数字を消す消しゴム。そして再び数字を綴るシャープペン。

左手は今まで解いた問題のページをぺらぺらとめくっている。

カリカリ……………

右手が止まった。

ぴたりと、最後の数字を綴った。

「……………おわったああああ！」

ツナは思いきり伸びをして、喜びの声をあげた。

コキコキと身体の節々が鳴る。

何時間も机に向かっていたのだから当たり前だろう。

あまりの喜びに、ツナは腹の怪我のことも忘れてベッドに飛び込んだ。

「いってえええええ！」

いくら布団とは言え、腹からダイブすれば痛いものは痛い。

ツナは傷をおさえながら叫んだ。

「こちやこちやうるせえぞ」

リボンが迷惑だとばかりに顔を歪ませながら部屋に入って来た。

「ツナー！」

部屋の中にトンノがうれしそうに飛んできた。

そしてツナの傍に降り立ち、ツナに擦り寄った。

「ツナー、お疲れ様！やつと遊べるよー！」

「トンノ…ごめんね、かまってあげられなくて」

ツナが課題をしていた数日間、トンノはかまわせてもらえなかった。

トンノは寂しさを我慢して、ツナを応援していたのだ。

「ほんとにごめん…トンノ…オレ、…すごい疲れて…眠い」

ベッドに突っ伏していたツナは本当に疲れた顔をしていた。

「かまって…あげられないかも…」

「…ツナ」

声もだんだん小さくなり、目もうつろになっている。

トンノはそっとツナの頭を柔らかい翼で撫でた。

「いいよ、ツナ。目が覚めたら、一緒に遊ぼう」

ツナはぼそぼそと何かを言っていたが、声が聞こえなくなった途端、安らかな寝息が聞こえてきた。

「ふふ、寝ちゃったよりボーン」

「まったく、弱っちい奴だ」

リボーンは軽くツナの頬を叩いた。

トンノはせっかく寝たツナが起きてしまうと慌てたが、その心配はまったくなかった。

ツナは既に爆睡していた。まったく微動だにしない。

その幸せそうな寝顔にトンノは優しく話しかけた。

「明日、晴れたら一緒に散歩しようね」

簡単そうではかない夢。

叶いそうで叶わない夢。

全員、油断していた。

すぐそこまで、危険が迫っていることに気付かずに。

「久しぶりですね」

「ウ、ウライラ様！」

ウライラの姿を見て声を上げたのは、長髪の男、ミノイだった。

「ミノイくん、元気になりました？」

「しばらくぶりです、ウライラ様。ウライラ様が用意してくださった強化オペレーションは予想を遥かに越える辛さでしたが…おかげで私達は前と比べるとかなり力は強くなりました」

「そうかそうか！安心したよ！ほんとに待ちくたびれましたからね」
ミノイは素直に強化オペレーションを行ってくれたことに感謝した。自分たちがモルモットにされたということに気付かないで。

「ところで、ビンツたちは？」

ウライラはミノイの他に強化オペレーションを実行させたビンツ、ニコール、マリネ、アロッチ、スコッチの姿がないことに気付いた。

526

「ビンツたちは、それぞれの病室で休養中です。ですが…」

ミノイは苦い顔をして話を続ける。

「唯一の女性であるマリネは、今回の強化オペレーションの辛さにたえることができずに、かなりの重傷を負ってしまったらしく…」

「ああ、マリネは女の子だもんね。仕方ないか」

ウライラはわざと肩をすくませて、困ったような表情をして見せた。

「そんなことより、ミノイくん」

そう言うとウライラはミノイに数枚の紙を手渡した。

「…これは本当ですか、ウライラ様!!」

ミノイは紙に書かれた文章に一通り目を通した。
そこに記してあったことが信じられなかった。

「綱吉くんにそのような力が…?」

「驚きましたよね?僕も驚きましたよ」

ケラケラとあたかも驚いていない様子で答えた。

ウライラの手渡した紙には、ミノイたちが強化オペレーションを実行している間に起こった出来事が書かれていた。

もちろん、ツナの秘めた力のことも。

「予想外だったから、予定を早めようと思ったんだ」

「予定を…って、まさか…」

「うん、そうだよ」

ミノイが手に持っている紙をわなわなと震わせる。
何か言葉を発しようとするが、上手く声にすることができない。

「そんな動揺しなくていいよ、ミノイくん！君たちは十分強くなっ
たから大丈夫ですって！」

動揺しているミノイの肩を軽く叩き、なだめようとする。
冷静さが取り柄でもあるミノイが動揺することはめずらしかった。

「むしろ今がチャンスなんだ。より簡単にボンゴレリングと綱吉く

んを手に入れられるね」

欲望に満ちた声が、個室全体に響く。

「ね、ミノイくん」

ミノイは、自然と動揺が薄れ、いつもの冷静さを取り戻していた。いや、取り戻させられていた。

「がんばろっね」

「…ウライラ様の、仰せのままに」

ミノイは深々とお辞儀をした。

(これが、ウライラ様の…力が…！)

ミノイは驚いた。

勝手に身体が動いているのだ。

ミノイ自身の意志ではない。

ウライラの力だ。

(ウライラ様のこの力…言霊とは…なんとも強力な…っ)

頭を上げたくても、まったく上がらない。

力を入れているのに、まったく力が入っていない。

相手の名を呼び相手を思いのままにする。
それがウライラの持つ、言霊の力だった。

だが、これには条件がある。

まず、名前を知る。
これは基本だろう。

次に、言霊を使用する者と契約をする。
簡単に言うと、主従関係を作り出すのだ。

方法は、契約を交わす者同士の心、つまり魂を一部だけ分け与え合うのだ。
契約を交わした相手の魂を持ち続ける限り、どちらかが死なない限り、契約は破棄されることはない。

アッジョルナーレの七人は、すでに契約を交わしていたのだった。

「さ、ミノイくん」

ぴくりと、意志の通じない身体が動く。

「みんなを起こしに行こう」

標的36 言霊（後書き）

ウライラー！！

ひどい奴だなお前！

と書いている本人もウライラを非難。

でも、これには事情があるんですよ！

いろんな謎を解き明かしたいです。

わたしでさえも謎なことがあるんですから（笑）

標的37 計画実行(前書き)

ちょっと気分がすっきりしました！

標的37 計画実行

夜の森とは、なんとも不気味なものだ。

風によって揺れる木々がざわめく音

静かに鳴く鳥の声

照らすのは小さな月と星だけだ。

そんな誰もいないようなところに、男は歩いて向かっていた。

複数の部下が待つところへ。

「その傷大丈夫なの、マリネ？」

「ほつといてよ！ウライラ様が治してくれたの、大丈夫に決まっているじゃない！」

「せっかくニコールがあなたの心配をしてくれているんですよ。そんな言い方はないでしょう、マリネ」

一人で声を荒げている女、マリネにミノイは呆れたように声をかける。

ウライラの実験のモルモットにされたミノイたちの中でも、一番強化オペレーションの被害を受けたマリネは重傷を負っていた。

その姿は、普通の女性であればショックで立ち直れないだろう。多少ずぼらなところがあるマリネでも、一応は女性だ。

重傷を負った自分の姿を見て、数時間は思考力を失っていた。

所々の骨は折れ、切り傷、かすり傷は当たり前。

全身を包帯で巻かれていたのだが、その姿だけで衝撃は十分だった。

そんなマリネのところに、ウライラが現れた。

ベッドに座っている放心状態のマリネに、ウライラは微笑んで話しかける。

「大丈夫だよ。僕が治してあげますからね」

その言葉通り、ウライラはマリネの重傷を軽傷へ、そして多少の切り傷やかすり傷になるまでに治した。

そして、今ここにいるのだ。

「こんな切り傷、たいしたことないもの！」

「ふうん、それならいいけど」

ニコールはそっけなく返事をした。その態度にマリネが食ってかかる。

それを止めるのはいつもミノイの役目だった。

「遅くなってごめんなさいね」

その声を聞くと、そこにいた全員が振り返る。
口論をしていたマリネもだ。

「ウライラ様」

ミノイがお辞儀をすると、ウライラはにこっと笑って謝る。

「ほんとにごめんね。身体が言うこと聞かなくて！…ほんとに」
ウライラの笑顔がぐにやりと歪む。

「世話が焼けるったらありやしないよ、この身体とかね」

全員が不思議そうにウライラを見ていた。
しかし、次の瞬間にはウライラはいつもの笑顔へと戻り、全員に話

しかけた。

「準備はいいですか？」

その言葉に六人がうなづく。

ウライラが地面に手をかざすと、その掌に杖が現れた。

真っ黒なそれを、ウライラは地面にこっん、と当てる。

すると、そこからは光の届かない世界が一気に広がった。

ザアアアアアッ

あまりの風圧に、ウライラ以外の六人は飛ばされそうになる。
かばうかのように、ミノイがニコールとマリネを、ビントゥが双子の
アロツチとスコツチを掴んで風圧に堪えていた。

そんな六人にかまうことなく、ウライラは真っ黒な世界を作り出し

ていく。

真っ黒な世界の、ウライラの意識を。

「さて、一人残らず連れていけるでしょうかね」

ウライラは力を込めて、意識の中にもぐりこんだ。

「あれ？」

ツナは異変を感じて辺りを見渡す。

だが、広がるのは綺麗な大空で、異変はどこにも見られなかった。

ここはツナの意識の中。
つまり、ツナは今就寝中である。

「なにか、あつたね、ツナ。」

「徳松も感じた？」

ツナの隣にいたツナの“能力”、徳松が頷く。

ツナと徳松は一心同体。

だから同じように徳松も異変を感じたらしい。

「なにか…近づいてくるぞ、ツナ」

「うん…」

この広い大空になにかが入って来た。

そしてそれがどんどんこちらに近づいている。

今までで、ツナの意識の中に入り込めたのは、トンノとアツジョル
ナーレのウライラだけだ。

だが、トンノはこんな嫌な気配ではない。

ツナの大空属性の炎で実態化したトンノは、ツナと同じ大空属性で、
温もりのある気配だ。

だとすれば。

「まさか、また……」

きたのだろうか、ウライラが。

ツナと徳松は警戒して身構えた。

「お久しぶりですね、綱吉くん」

ザアアアツ、と音を立てて目の前に闇が広がる。
そこから現れたのは。

「…あ、あなたは……」

「こいつが……ウライラか……」

徳松がオレンジ色の目でウライラを睨む。

そんなことはお構いなしに、ウライラは二人に近づく。

「迎えにきましたよ」

「む、迎え…？」

ウライラは満面の笑みでツナに話しかける。

しかし、ツナにはその笑顔が怖くて仕方なかった。

憎悪と欲望が入り混じる笑顔だ。

「僕の願望がやっと叶うから。それには綱吉くんは必要不可欠だから、ですよ」

「なに言ってるんだあんた。ボンゴレリングも、ツナも手に入れていないくせに」

徳松が固まるツナを庇うようにウライラをさらに睨む。

だが、ウライラは徳松の睨みを気にすることもなく、話を続けていく。

「それはこれから集めるんです。リングなんてすぐに手に入れられるから。今は、」

ウライラの目が細められ、ツナを見据える。

その目があまりにも恐ろしく、ツナは金縛りにあつたかのように動けなくなってしまった。

「綱吉くんや徳松くんたちについて来てもらわなきゃいけないからね」

「…っお前、まさか!」

徳松が何かに気付いたようにウライラに噛み付く勢いで問いかけるが、そのときにはもう遅かった。

「話はあとだ。今はこっちに来てもらわなきゃ」

ウライラがまた笑顔に戻り言い放つ。

その途端、ウライラを根源として、真っ黒な世界が広がっていく。

真っ黒な、真っ黒な闇。

ツナの意識の大空が闇に染められる。

ツナの意識の大空が闇に飲み込まれる。

ツナの意識の大空が闇に包み込まれる。

全てに染まりつつ、全てを飲み込み包容する大空が。

「ツナ!!」

「どどどどこうなってんの!?!」

徳松は慌ててツナに手を伸ばす。

ツナは徳松の手を離さないようにしっかりと掴む。

そんな二人を見て楽しむかのようにウライラはへらへらと笑っていた。

「ようこそ、僕の理想世界へ」

ふたつの大空が、真っ黒な闇に消された。

標的37 計画実行(後書き)

やっと動き出しましたよ！

すっきりしましたね。

これをどうやって最後まで繋げるか…

標的38 見知らぬ森（前書き）

今週は忙しいので、あまり更新ができません…

標的38 見知らぬ森

…あれ？

「ここ、どこだろう。」

真っ暗で何も見えないや。

てか、なんでこんなところにいるんだろう？

さっきまでは確か…寝てて、夢の中で徳松と話してたはずんだけど…。

…あ、そっか！

アッジョルナーレのウライラがいきなり現れて、闇に吸い込まれたんだっ！

でもその後の記憶がない…。

徳松も一緒にいたはずんだけど…いないなあ。

オレの心の中にいないってことは、ここは夢…オレの意識の中？

この真っ暗などここに徳松はいるんだよね。

探さなきゃ。

それでこのことをリボーンたちに話さないと…

…あれ？

リボーンの声が聞こえる。

てかりボーンだけじゃない…。

トンノと…ロンジさん？あれれ、結加ちゃんの声も聞こえる？

どこから聞こえるんだろっ。

早く行かなきゃ、リボーンに怒られるよな。

早く、起きなきゃ。

「…おい、ツナ…！」

耳元で怒鳴られ、頬にビンタを食らい、ツナは覚醒した。

一瞬なにが起こったのかわからなかった。

そんな放心状態のツナに、リボーンはもう一度怒鳴る。

「ぼーっとしてると撃つぞ、ダメツナが！」

リボーン愛用の銃がカチャツと音をたてた途端、その音に反応してツナが悲鳴を上げた。

「ひい！？おおお起きてます起きてます起きてます！」

「なら返事くらいしろ」

リボーンが懐に銃をしまうのを見て安心したツナはため息をついた。

「あれ、どこどこ？」

ツナは辺りを見渡してリボーンに聞いた。

ツナたちがいたのは、見たことない森の中だった。

どうやら並盛の森ではなさそうだ。

なぜだかツナはそう思った。

超直感だろうか、それともただの土地勘か。

「オレにもわからねえ。気付いたらここにいたんだ」

「え、みんなも？」

ツナは傍にいたよく知る人物を指差して問う。

それに指を差されているトンノ、ロンジ、結加はこくんと頷いた。

「ちなみにこいつらもいるぞ」

リボーンがロンジの膝を指差す。

「うえっ！？シ、シクロとシスイまで！？」

ツナはロンジの膝の上で座っている セリシジseriagi のシクロとシスイを見て驚いた。

まったく気付かなかったのだ。

「なんで、オレたちはここに…」

そこまで言いかけて、ツナはあのことを思い出した。

「まさか、あいつが言ったのって…！」

「あいつって誰だ？」

リボーンがツナに問うと、ツナは先程までのことを説明した。

夢に突然、アッジョルナーレのウライラが現れ、こう言った。

「迎えにきましたよ」

「来てもらわなきゃいけない？確かにそんなことを言ってたのか？」

「うん、言ってた」

ツナが頷くと、リボーンは難しい顔をして考えた。

（迎えに来たってことは…ここはウライラのいる森ってわけだな。
…だが、どうして。なぜオレたちまで連れてこられたんだ？）

ツナを狙うならばツナだけを連れてくればいい。
なのにウライラはリボーンたちも連れてきた。

それがリボーンには謎だった。

「綱吉くん、大丈夫？」

結加がツナの傷を心配して声をかける。

ツナは大丈夫、と笑顔で答えた。

「なぜわたしや結加様までここにいるのでしょうか。綱吉様の話から、ここはウライラのアジトの近く、ということが予想できますが……」

「オレもそれを考えていたぞ。なんでオレたちもウライラに呼ばれたのか……」

ロンジもリボーンと同じことを考えていたらしい。

どうしてもその答えがまったくわからない。

「あのさ……」

トンノがツナたちに話しかける。

ロンジもリボーンも考え事をやめて、トンノの話に耳をかたむけた。

「僕の予想なんだけど、ツナ以外に僕らもここにいるってことは……」
ザワツと風で木々が揺れる。
数枚の葉がひらひらと舞って落ちた。

「…ボンゴレの守護者も、この森のどこかにいるってことだよな」

「！？」

ツナはまさか、とツナノの予想を否定しようとした。が。

「それはありえるな」

リボーンがツナノの予想を肯定した。
ツナはなぜだとリボーンに問い詰めるが、リボーンは冷静に言い放つ。

「ツナの他にオレたちも連れてこられたんなら、他の守護者たちもここにいる可能性は高いぞ。ウライラの目的はツナとボンゴレリ

ングだからな」

「あ、そっか…」

ツナはすぐに納得した。

なにをしようとしているのかまだツナたちにはわからないが、ウライはツナとボンゴレリングを欲している。

ボンゴレリングを持っているのはボンゴレの守護者たちであるから、ここに連れ込まれた可能性は十分にあった。

「じゃあ、どこに…」

「守護者、と言つと…ランボくんもそうだよね」

結加がぼつりと呟いて気付いた。

ランボも一応ボンゴレの守護者だ。

ツナやリボーン、結加にロンジとトンノ、セッラッシュserraggioのシクロとシスイがまとまって連れ込まれたということは、もちろんツナの家にいるランボもツナたちと一緒に連れ込まれたはずだ。

しかし、そこにはランボの姿がなかった。

「ラ、ランボがいない…!?!」

「どっかに飛ばされたのかもな」

ツナはあわてふためいた。

ランボはまだ小さな子供なのだ。

そんなランボがこんな見知らぬ森に一人で飛ばされたとしたら…。

「どうしよう、敵に襲われるかも!!!」

ツナはランボを探しに行こうと駆け出そうとしたが、小さな家庭教師の足にひっかけられ、豪快に転倒してしまった。

鼻が痛い。

鼻血が出たらどうしてくれるんだとツナは赤ん坊を睨んだ。

「あんな奴でも一応はボンゴレ雷の守護者だ。どうにかなるときはどうにかなるだろ」

「そんな…どうにかならなかったら!?!」

今までの経験で、ツナはリボーンの表情の見分け方がなんとなくだ
がわかっていった。

感情をあまり出さないリボーンは、口がにやりと曲がるか、への字
のように曲がるかくらいしか表情が変わらない。

だが、様々な経験をして、ツナはそんなリボーンの複雑な表情がわ
かってきていた。

そして今は、自信に満ちあふれている顔だ。

(リボーンがそう言うなら…絶対そうだよね)

ツナは終わりの見えない森の向こうを見渡して決意した。

全員を見つけてだし、全員無事に並盛に帰らせると。

標的39 忌憚の再会(前書き)

じりじりと動いてますー。

標的39 忌憚の再会

「あれ、少し…無理がありましたかね…」

荒く息継ぎをしながらウライラは杖を支えにして呟いた。

「大丈夫ですか、ウライラ。少しお休みになられたほうが…」

ミノイがウライラに休息を促すが、ウライラは断固として頷かない。

「やっと、…綱吉くんがここに来たんだ。休んでいたらもったいないでしょう？」

「ですが、この現状では…。綱吉くとそれぞれのリングがバラバラでは集めるのにも時間がかかってしまいますよ」

ミノイの言うとおりだ。

ウライラは、ツナたちをこちらへ連れ出すために、それぞれの意識の中へと侵入した。

そして無理矢理引っ張り出してきたのだが、限界があったのだろうか、全員まとめて連れて来るはずがバラバラになってこの森に散っ

てしまったのだ。

「まだこのようなモノを残しているとは…忌ま忌ましい身体ですね」

その言葉は何に対する言葉なのか。

ミノイたちは首をかしげた。

「ではウライラ様、こうなさるのはいかがですか？」

ミノイがひらめいたようにウライラに話しかける。

「バラバラに散らばったボンゴレたちを、私達が倒し、綱吉さんとリングを持ち帰ってきます。せっかく、私達も強くなったのですから任せてほしいのですが」

ウライラが用意した強化オペレーションは、この時のために実行した。

だが、まさかボンゴレがバラバラになってしまうとは予想もしていなかった。

本来は、まとめて連れてきたボンゴレを強化オペレーションによって強くなったミノイたちが倒し、ツナとリングを奪うはずだったのだ。

「ミノイくんたちが手分けして綱吉くんたちを探すってことですか……」

「いかがでしょう、ウライラ様？」

ミノイの提案した作戦を聞き、ウライラはしばらく考え込んでいたが、にっこりと笑って頷いた。

「うん、いいでしょう。」

ウライラは杖で身体を支えながらゆっくりと立ち上がってミノイたちを見る。

「あなたがボンゴレを倒して綱吉くんとリングを持ってくる。それがボンゴレをここにおびき寄せて一気にたたきのめす。わかりましたか？」

ウライラの言葉に全員が頷く。

「さて、はじめましょう」

心底楽しそうに、ウライラは言った。

「十代目！十代目ー！」

「そんなに騒ぐなよ獄寺」

彼独自のツナの名称を大声で呼びながら、獄寺はここにはいないツナの姿を探す。

その後ろを焦る獄寺をなだめながら山本が歩いていた。

「ここにはツナいないぜ？」

「わかんねえじゃねえかそんなの！おめえがいるってことは十代目もここにいるかも知れねえだろが！」

能天気な声に怒鳴る声が齒向かう。

獄寺たちもまた、ツナたちと同じように森に飛ばされていた。

目が覚めたら見知らぬ森。

隣には同じ守護者が眠っていた。

最初に目を覚ましたのは獄寺で、隣に眠っている山本を見て、しばらく思考停止の状態だった。

そして、山本がここにいるのならば、もしかしたらツナもこの森に
いるのではないかという考えに至り、ツナを搜索しはじめた。
そしてその声で山本が目覚めたということだ。

「なあ獄寺、なんでここにオレたちはいると思う？」

「知るか馬鹿！」

「オレさ、夢ん中に変な奴が現れて、そいつにもやもやした真っ黒いもんを吸い込まれたんだよね」

ぴたり、と獄寺の足が止まった。
それにつられて山本も足を止める。

「…おい、それまじか？」

「ああ、まじだぜ？」

「……………オレも、だ」

獄寺が小さく言う。

あまり聞こえなかったのか、山本が首をかしげる。

「オレも…夢ん中におかしな奴が出てきて…闇のような真っ黒な何かに引きずりこまれたんだ」

「一緒なのな！そいつ、変なこと言ってなかったか？」

「…ああ、言ってたな」

獄寺は顎に指をそえて思い出す。

夢の中には見知らぬ男がでてきた。

その男はあやしく笑い、獄寺たちに話しかけたと言う。

「僕の願いが叶うのを見せてあげよう。」

そして不気味な闇に包まれ、気付けばここにいたらしい。

「あいつ…誰だ？」

「わかんねえけど、オレの予想だと、アッジョルナーレ、とかいう奴らだと思っぜ？」

「っ！？アツジョルナーレって、まさか…」

目を見開いて獄寺は驚愕する。

以前、アツジョルナーレと名乗る敵である奴らに何度か襲われたのを思い出す。

「なんでわかるんだよ？」

「服だな。あいつ、アツジョルナーレと同じ服着てたぜ？」

白のラインと茶色の生地
の服。
それがアツジョルナーレの制服だ。

「アツジョルナーレ絡みということは…」

何か気付いたように獄寺がはっとした。

「……十代目が危ねえ……!!」

「あとオレらの持つてるリングもな」

二人は思い出した。

アッジョルナーレの目的は、ボンゴレリングとツナだと言うことを。

そして弾かれたように二人は駆け出した。

もし、もしここにツナがいたら。

その先を否定せずにはいられなかった。

「今さら気付いても」

「遅いよー」

その声を聞いた途端、鋭いなにかが二人に向けて飛んできた。

慌てて獄寺と山本は左右にわかれてそれをかわす。

地面にはきらりと輝く槍。

「あの声とこの槍……」

「ああ、あいつらだな」

二人は槍の飛んできた方向を見つめる。

すると、がざりと音をたて、見たことのある姿があらわれた。

「久しぶり」

「ボンゴレの守護者さん」

くすりと笑い、双子のアロッチとスコッチが二人に話しかけた。

獄寺と山本は黙って双子を見つめる。

「そろそろ綱吉くんと」

「ボンゴレリングを奪っても」

「いいころだから」

「奪いにきました」

交互に話す双子に、苛立ちを覚える。

そしてやっぱりかと獄寺と山本は心の中で舌打ちをした。

この森に、近くにツナがいる。

否定したかった事実を、認めざるを得なくなった。

まだツナは腹の傷が完全に癒えていない。

ボンゴレの開発した治癒を早める薬を服用しているからとは言え、傷はまだ痛々しく残っている。

「ツナとリングは渡さねえぜ」

「十代目には指一本触れさせねえ」

山本は時雨金時、獄寺は匣兵器“S I S T E M A C ・ A ・ I ・
”を出してかまえる。

睨んで威嚇する二人を見て、双子がまったくすとんと笑う。

「そんなこと言ってるのも」

「今のうち、なんだけどね」

見下す笑みと怒る睨みがぶつかりあう。

ひとつの戦いが幕を開けた。

標的39 忌憚の再会（後書き）

早く先に進みたい！

でもこの過程は重要なので、じっくりと進めます。

忙しくなかったら、ぱぱーっと書いてしまっんですが…。

一話に3時間くらいかけるので無理ですかね！

標的40 おかしなトリオ(前書き)

短いですー(; ;)

標的40 おかしなトリオ

見知らぬ森で以前戦った敵と出会った山本と獄寺。

突然、この森に連れ去られたのだ。

だが、連れ去られたのは二人だけではなかった。

「極限にここはどこだあああ!!!」

頭を抱えてただ叫ぶボンゴレ晴の守護者、笹川了平。

そしてそれを見つめながら、小さな子供をあやすのは…。

「ねーねー、ここどこー?」

「…わからない」

質問してくる雷の守護者、ランボを対応しているのは霧の守護者のクローム髑髏。

この三人の中では一番の常識人だろう。

「クローム！なぜオレたちがここにいるのかわかるか!？」

「だから…わからない。」

了平がクロームに言い寄るが、困ったように答えるだけのクローム。そしてそれをただ見ているだけのランボ。

なんともおかしな組み合わせができてしまったものだ。

どうしよう、とクロームが慌てていると、頭にクロームの尊敬する人物の声が響いた。

-クローム？

「…む…くる…様…?」

その名前を聞いて了平がぴたりと騒ぐのをやめた。

・クローム、無事ですか？

「…はい、無事です」

骸が自分のことを心配してくれたのがうれしくて、クロームは自然と笑みをこぼす。

骸はよかった、と安心したように呟いてから、話をつづけた。

・どうやら、これもアッジョルナーレの仕業のようです。夢の中で、男があらわれたでしょう？

クロームは見た夢を思い出す。

間接的に骸の話の聞いている了平とランボも夢を思い出すとする。

やはり三人が見たのも、獄寺と山本とまったく同じ夢だった。

・アツジョルナーレのボスには何やら不思議な力があるそうです。そのせいで僕はなにもできなかつたんですけどね。

クロームと骸は夢の中でも会話をしたりする。

お互い夢では自由に動けるのだが、男：ウライラがあらわれてから、骸は金縛りにでもあつたかのように動けなくなり、ウライラの力を阻止できなかつた。

そしてここにまんまと連れ込まれたのだった。

・どうやら、ボンゴレの守護者や関係者がこの森にいるみたいですね

「…ボスがここに？」

「なにつ、沢田もいるのか!？」

その言葉を聞いて、今までおとなしくクロームの腕に抱かれていたランボが暴れだした。

「ツナ、ツナがいるところにオレっちも行くんだもんね!」

「わっ…ランボくん、暴れちゃ危ない…」

じたばたとするランボをクロームが慌てて強く抱きしめるが、ランボの駄々こねはおさまらない。

「オレっち、一人で行くんだもんねっ！！！」

するり、とクロームの腕から抜け出したランボは、一人で走って行くとした。

「ランボ！！一人では危ないだろう！！？」

了平がランボを追いかけて、クロームもついていく。ランボは小さいため、すぐに了平に捕まってしまった。

「やだやだ、オレっちツナのどこに行く！！！」

「一人では危ないと言っているだろう！！オレたちも行くぞ！！！」

暴れるランボにしつかりと了平は言い付ける。
了平と目が合ったランボはそのままぽかんと口を開けて固まってしまった。

「…ほんと？」

「ほんとに決まってるだろう！」

了平は微笑んで頷く。
それを見てランボは一瞬で笑顔になった。

側で二人を見ていたクロームにも自然と笑みが浮かぶ。

だが。

・クローム、気をつけなさい！

キィィィン、と耳鳴りがする。

クロームは骸の警告を受けて辺りを見回す。

見渡すかぎりの森、森、森。

だが、先程とは違う異様な雰囲気。

ゾクリ、と悪寒が走る。

「あれ、前会った守護者じゃない！なんだ、仕返しできると思ったのに！」

了平とクロームは驚いて声の主を見た。

スタスタとこちらに歩いてくるのは、アッジョルナーレのマリネだった。

だが了平とクロームはマリネを見るのははじめてだ。

ランボは怖いのだろうか、今にも泣き出しそうな顔をしている。

「お前は誰だ！」

了平はランボの顔をうずめてマリネに尋ねた。

「わたしはマリネ。アッジョルナーレなんだけど…わかるよね？」

「ボスを…狙ってるマフィア……」

クロームがつぶやくとマリネはその通り、とにっこりと笑う。

「ちょっとしたトラブルがあって、全員揃ったところでボンゴレリングと綱吉くんを貰おうと思ったんだけど、バラバラになっちゃったから迎えにきたのよ」

「なぜ沢田とリングをねらうのだ？極限にわからんぞ！」

了平はマリネに答えを問うが、かえってくるのは曖昧な言葉。

「わたしたちはウライラ様のために動いてるから、詳しいことは言えないんだよーっ」

ケラケラと笑うマリネにクロームは少しだけ怯えた。笑っているのに笑っていない。

その笑顔は確かに笑顔だ。表面上は。

「あのさ、おとなしくリングを渡してくれたらあんたたちを殺さないであげてもいいんだけど、どうする？」

「そんな条件などいらん！渡さんものは渡さんのだ！」

了平が勢いよくマリネに怒鳴りちらした。

クロームもまっすぐとマリネを見て告げた。

「あなたたちにリングは渡さない。…ボスも、渡さない」

そんな二人を見てマリネはわざとらしくため息をついた。

次の瞬間、あたりに殺気が漂う。

「後悔しないでね」

にたり、とまがまがしい笑顔でマリネがつぶやいた。

標的41 幕開け

広い森のある場所で、男は目覚めた。

その瞬間、ただならぬ危険を感じ、とっさに身体を翻して退いた。

目の前には、棒のような武器をかまえる少年。

「待て待て待て待て待て！一応、オレもボンゴレだから！仲間じゃねえか！」

「なに言ってるの？僕は仲間でもなんでもないよ」

黒髪の少年、雲雀は淡々と無表情で言った。

雲雀に襲われているのは元アルヴィーコラのリーダー。

(言っておくが、リーダーというのはねっきとした名前である)

雲雀とリーダーは廃屋と病室で対面している。

もちろん、リーダーがボンゴレにはいったのも雲雀は知っている。だが、そんなことは雲雀には関係ない。

雲雀にとって、群れる奴はすべて咬み殺す対象となるのだ。

「ほんとに待とうぜ兄ちゃん!!」

「咬み殺す」

「一回話し合おうや!!」

「咬み殺す」

「攻撃すんのやめろっつの!!」

「咬み殺す」

「お前日本語わかってるのか!!!??」

なにを言っても「咬み殺す」という返事しかかえってこない。

リーダーは冷や汗がたらりと垂れるのを感じた。
同時に、命の危機も感じた。

「つくそ!!!」

仕方ない、とリーダーは懐から銃を取り出して、威嚇するために
発空に向けて撃った。

大きな銃声が森に鳴り響き、驚いた鳥たちがバサバサと羽ばたいて
いく。

588

「ワオ。君、なにやってるの?」

「お前さんがオレの話をちゃんと聞いてねえからだろ!!!」

雲雀のペースにリーダーは疲労を感じる。

なんておかしな少年なんだろう。
関わるのが嫌になる。

「あなたの話なんて聞く必要ある？」

「あるわ！！大有りだ！」

次々と繰り出される攻撃は衰えを知らず、リーダーに襲い掛かる。

リーダーはそんな攻撃をする雲雀を少しだけ感心しながらも、雲雀から逃げ出す方法を考えていた。

すると、突然雲雀の目つきがかわった。それにリーダーは少し驚き、次の瞬間には雲雀はリーダーの顔目掛けて攻撃してきた。

「うおわっ！！！！」

慌ててリーダーはその攻撃をかわす。

リーダーのおかしな声と共に、ドカンッ、というなにかがぶつかる音がした。

「おや？かわされちまったな」

「あなた誰？僕の邪魔しないでくれる？」

雲雀のトンファーが大きなハンマーの攻撃を防ぐ。

あんな身体のどこに馬鹿でかいハンマーの攻撃を防ぐ力があるのだろうか。

リーダーはしばらく呆気にとられていたが、正気に戻った瞬間、なぜ雲雀が自分の顔を狙ったかがわかった。

(こいつ…気付いてたのか…！)

リーダーは雲雀の攻撃をかわすのに必死で気付かなかった。後ろの攻撃に。

それに気付いた雲雀は、攻撃を防ぐためにリーダーの顔、ただしくはリーダーのうしろを狙ったのだ。

「す、すまん…坊主」

「僕を坊主呼ばわりするの、やめてくれる？咬み殺すよ」

ギロリ、と雲雀の睨みがリーダーをとらえる。
それを見てリーダーは苦笑いをした。

「余裕じゃねえか、雲の守護者さん？」

ハンマーの力におされ、雲雀が後ろに飛ばされる。
しかし、すぐさま空中で体勢を整えた雲雀は、綺麗に地面に着地した。

「あなた、誰？」

「オレはアツジョルナーレのビンツってんだ。前ボンゴレに会いに行った時はおめえらいなかったからな。…つかよあ、」

ビンツはへらへらと自己紹介すると、雲雀のそばにいるリーダーを見た。

「おめえ誰だ？ボンゴレか？」

「つい最近入ったもんだ。」

ビンツの問いにリーダーは簡潔に答えた。

それにビンツは「へー。」と、適当に相槌を打つ。

だが、そんなビンツに突然雲雀が襲い掛かった。

ビュッ、と空気を切り裂く音の後、ビンツの服が切られた。

ビンツが避けなければ、肌が切れていただろうか。

「不意打ちかよ雲の守護者さん。こっちはまだ自己紹介中だぞー」

「そんなの関係ないさ。目の前で群れる奴は僕が咬み殺すだけだからね」

「…え。オレ群れてるのか？敵とか？」

リーダーは自分とビンツを指差して雲雀に確認する。
それに雲雀が黙って頷いた。

そんな二人を見ていたビンツが、突然大きな笑い声をあげた。

「あっはははははは！…！！なんだ、ボンゴレの守護者さんは！！
変わった奴が多いつつうのは本当か！！」

ビンツの言葉を聞いて、雲雀の機嫌がさらに悪くなったが、それに
気付いているのかそうでないのか、ビンツは話をつづける。

「おめえとも仲良くなれそうだけどなあ、どっか似てるしな、オレ
とおめえ」

「……………」

馴れ馴れしくビンツがリーダーの肩を叩く。

リーダーはただおかしなものを見るような目をビンツに向けていた。

「ほんと、残念だ。おめえらがアツジヨルナーレにいたら面白かっただろうがなあ……………」

突然、空気が変わる。

ひやり、と空気が凍りついた。

リーダーは身の危険を感じてすぐにビンツから離れた。

「でもさ、オレたちは敵だから、戦わなきゃなんないんだ」

今までおとなしくしていたビンツのハンマーが、動き出す。いかにも重そうなハンマーを、ビンツは片手で軽々と持ち上げている。

「さあて、ボンゴレリング、ただだこつじゃねえか？」

大きなハンマーが、音を立てて振り落とされた。

「…!？」

ツナはなにかを感じたように顔をあげた。

とてつもない嫌な予感がした。

「どうした、ツナ」

「…なんか、すごい嫌な予感がして……」

ツナは森を見回す。

あつて欲しくない姿を探していた。

「…もしかしたら、だけど、」

とぎれとぎれに、ツナが言葉をつなげる。
リボンたちはその言葉の先を黙って待つ。

「……みんなが、ここにいる。」

「ま、まさかみんなと言うのは…！」

ロンジの驚く声にリボンが黙って頷いた。

やはり、飛ばされていたのだ。
ボンゴレの守護者、関係者が。

そして、この森に散らばっているのだ。

「よく気付いたね。それが超直感？」

どこからか聞こえる声。
それには聞き覚えがあった。

「…まさか、この声って……」

「あ、覚えててくれたんだ、うれしいなー」

ガサツ、と草をかきわける音がした方向を見ると、かつてツナたちを襲った姿があった。

「おめえ、確か…ニコールとかいう奴だったか」

リボーンはその敵を見てつぶやく。
ニコールは肯定するように笑った。

「久しぶり、綱吉くん。迎えに来たよー」

「迎え…？」

ニコールは頷いて話しはじめた。

「今から、ここにボンゴレリングを持った僕の仲間が集まるんだ。でも、僕らのボスはリングだけでは満足しないお方でね。綱吉くんがいないとリングを集めても意味がないから迎えに来たんだよ」

「…じゃあ、やっぱり……!!」

ツナは顔が青ざめるのがわかった。

やはり、ここにはボンゴレ守護者と関係者がいる。
そして、戦っている。
アッジョルナーレと。

「わかってくれた？じゃあ一緒に行こうよ。ボスが待ってる」

ニコールは固まっているツナに近づく。

だが、それをなにかが阻止した。

パシッ、とニコールの手をなにかがはじいた。

「…綱吉くんは渡さない」

「…結加ちゃん……」

ツナの目の前に結加が光の玉を作り出して立ちはだかる。
それをニコールはうっとうしそうに見た。

「…なに、君。リングを持ってないただの関係者？」

「ただの関係者、とは失礼ね。それでもボンゴレ九代目に認められた戦闘力を持つてんのよ」

口許をゆるめて結加がニコールを見つめた。

すると、さらにツナの前になにかが立ちはだかった。

「ツナは君達のものになんかならない。ツナは道具じゃないんだ」

バサバサと降り立った鳥…トンノは、大空属性の炎を纏ってニコールをにらむ。

「君はたしか…綱吉くんの手で実態化しちゃった空気、だった鳥だよねー」

「そんなことも知ってたのか」

リポーンは無表情でニコールに聞いた。

「そうだよ。それを聞いたときびっくりしたよ。そんな力を持つてるなんてさ……だから、綱吉くんの手が必要なんだ」

ニコールは懐から自分の武器、銃を取り出した。

「綱吉くん、一緒に行こうか」

カチャツ、とニコールの銃が音をたてた。

ボンゴレとアツジョルナーレの戦いが今、はじまった。

標的42 怒る炎と光、そして双子

「綱吉くん、一緒に行こうか」

仲間に突き付けられた銃。

今にも引き金が引かれてしまいそうだ。

だが、銃を向けられているにも関わらず、ツナの前に立ちはだかる仲間、結加とトンノは怯むことなく、動かない。

「結加ちゃん、トンノ!!!」

「綱吉くんはそこにいて」

「ツナはまだ傷が治ってないんだから、無理しちゃだめだからね」

結加とトンノはツナに微笑みかけた。

ツナは二人を止めようと立ち上がるうとするが、腹の傷が痛んですぐにしゃがみこんでしまう。

そんなツナを見ていたニコールが、おもしろそうに口を開いた。

「へえ、綱吉くんは怪我してるんだね。しかも結構痛そう」
指で銃をくるくるとまわしながら距離を縮めてくる。
トンノたちの身体が強張る。

「それなら、簡単に手に入れられそうだね」

ドカアアアアアアアンツ

ニコールが言葉を放った瞬間、どこからか爆発音が聞こえた。

「な、なに!?!」

「お、他のところも始めたみたいだね」

驚くツナに、ニコールはさりと告げた。

「始めた…って、まさか…」

嫌な予感ほ、見事に当たった。

戦闘がはじまったのだ。

ボンゴレ守護者とアッジヨルナーレとの戦闘が。

「派手にやってるねー。これならボンゴレ守護者なんてすぐに死んじゃうかもね」

へらへらと笑いながら言うニコールに、ツナが叫んだ。

「…みんなは、死なない！！！」

今まで数々の困難を乗り越えてきたのだ。

苦しいこともあった。

悲しいこともあった。

それを、全員で乗り越えてきた。

「お前らなんか…負けるわけない!!!」

ツナの言葉にニコールは驚いていたが、やがてまたへらっと笑ってツナに言う。

「怒らせちゃってごめんね。許してくれる？綱吉くんとは仲良くなりたいんだよ。」

カチャツとニコールの銃が音を立て、ニコールの手におさまる。ツナは黙ってニコールを睨んでいた。

「だって、綱吉くんは、アッジョルナーレの仲間になるんだから」

ニコールがそう告げた瞬間、バシュツ、と音を立ててニコールの足元へとなにかが放たれた。

「なに、鳥さん」

「ツナは渡さないって言ったはずだよ」

トンノはゆらりと炎を揺らめかせてニコールを見つめていた。

トンノから発せられる炎は、ニコールを威嚇するようにまたたいている。

「されど鳥。すぐに焼鳥にしてあげるからねー」

「侮らないですよ。僕はツナの炎で実態化した鳥だ。ツナには劣るけど、れっきとした大空属性だよ」

バサツ、とトンノが翼を動かした。
それに連動するように炎も大きく揺れ、あたりに散っていく。

「そんなの僕には関係ないよ」

ニコールがきつぱりと言い切る。
トンノに勝る自信があるらしい。

「綱吉くんやトンノには敵わないけど、わたしだって戦う」

結加の掌に発せられる光の玉が、煌々と輝いている。

「ふうん。ま、楽しませてくれるならいいよ」

ニコールは銃を構えてにっこりと笑った。

「勝つのは僕らアッジョルナーレさ」

凄まじい音が森に響き渡った。
その方向を見遣ると、黄色と白を帯びた光とオレンジ色の炎が空に消えていくのが見えた。

「あの光と炎…まさかっ!!」

「よそ見してたら危ないよ」

獄寺の顔すれすれで槍が横切る。
体勢を直して獄寺は目の前の敵に睨みをきかせる。

「おめえ…どっちだ？」

「うわ、失礼だな！僕はアロツチだよ！」

獄寺は双子の片割れ、アロツチと戦っていた。
だが双子の容姿はまったく同じなため、どちらと戦っているのかわからなかった。

「じゃあ、山本と戦ってるのがスコツチつつう奴か」

「そっだよ。なんでどっちがどっちっていうこともわからないのか

な！」

おかしく笑うアロッチは、軽く地面を蹴り空中へと移動する。

「いつだって…誰も僕らを個人として見ないんだ」

「は？」

突然寂しそうな顔をするアロッチに獄寺は疑問を抱いた。

だが、すぐにアロッチの表情は戻り、獄寺に槍を投げつけた。

「もう慣れたけどね！！！」

先程よりも槍のスピードがあがっている。
数も増え、逃げるのに精一杯だ。

「つちくしょう！」

獄寺はただ逃げることしかできず、ちらりと山本の方を見た。

「お前の槍ってすごいのかな！丈夫に出来てんだなー」

「普通の鉄に僕の力が注入されてるんだから当たり前さー！」

山本は時雨金時でスコッチの槍を弾き返す。

その度にキンツ、キンツ、という鋭い音が聞こえた。

「お前の力？なんだそれ？」

「僕らはさらに強くなるためにウライラ様が用意してくれた強化オペレーションを実行して、力を手に入れたんだ。僕らの能力を増す力をね！」

スコッチは得意げに山本に説明した。

山本やツナで言う炎の属性の“鎮静”や“調和”のようなものだろう。

「すげえなー。ていうかお前ら一人でも喋れるんだな？」

「馬鹿にしないでよ？双子でも僕らは個々の人間なんだから」

「そっか！わりいな！」

山本が素直に謝ると、スコッチの表情が少しだけ強張った。

それは、驚いたような、哀しいような、でも嬉しいような表情。
山本は首を傾げたが、スコッチは我に返って顔をそらした。

「…気にしないって決めたのに」

「何か言ったか？」

「なんでもないよ！勝手に聞くな！！」

スコッチは怒鳴って山本に倍の数の槍を投げた。

「危ねっ！自分で勝手に話してたじゃねえかよ！」

「黙れ！今すぐ黙れ！！」

スコッチは狂ったように槍を投げつつける。
次第に時雨金時で交わすには限界が見られた。

「どっすっかなあ……」

山本の笑顔に少しだけ焦りが見られた。

「どっせ僕らは」

「二人でひとつ」

「それ以外の何でもないんだろ？」

標的42 怒る炎と光、そして双子（後書き）

タイトルを考えるのが辛くなってきました（笑）

悩みます。ううーん。

この小説に挿絵があればいいのに、という意見をいただきました。

…わたしにそんな力はないです（；；）

でも、少しやってみたい気がします…

HPで載せてみようかな…

標的43 相性の良い二人(前書き)

書き散らしました！

短いですー(、´、´)

標的43 相性の良い二人

ツナたちが連れてこられた広い森。

そこにボンゴレの守護者と関係者が散らばっている。

北には獄寺と山本。

東にはツナ、リボン、トンノ、結加、ロンジ、
oヨのシクロとシスイ、
s e r r a g g iセッラッジ

南にはクロームと了平、ランボ。

西には雲雀とリーダー。

そしてそれぞれの場所にはアッジョルナーレが姿を現していた。

北には双子のアロッチとスコッチ。

東にはニコール。

南にはマリネ。

西にはビンツ。

それぞれがそれぞれの戦いを繰り広げていた。

さて、森の南側。

了平たちのいるところでは、極限ボクシング男とずぼら女が口論をしていた。

「あんた馬鹿じゃないの!？」

「馬鹿と言う奴が馬鹿なのだ!」

「だってあんた馬鹿じゃん!わたしの手裏剣に素手で立ち向かおうだなんて!」

「そんなん、やってみなくては極限わからん!」

ぎゃあぎゃあ騒がしい二人をクロームは戸惑いながら見ていた。

さっきからこの調子なのだ。

ランボは暇なのか眠いのか、うとうとし始めていた。

「どうなっても知らないんだからね!!」

マリネはどこからか手裏剣を取り出し、了平に向けて放った。

「きょっくげーん!!!!」

へんな雄叫びをあげながら、了平は拳を突き上げた。

刃物と素手では明らかに素手が負けてしまう。

クロームはとっさに了平の拳を幻覚で作り出した拳でカバーした。

手裏剣は幻覚の拳によって呆気なく砕けた。

「なっ!?!」

「ほらな！やってみなければわからんだろう！」

ほんとに素手で交わされてしまったマリネはショックを受けた。

了平はクロームの作り出した幻覚の拳が手裏剣を砕いたことに気付いていない。

自分の拳で手裏剣を砕いたと思っているらしい。

誇らしげに両腕をあげて笑っていた。

「晴の人…それ、わたしの幻覚…」

「ん？なにが言ったかクローム!？」

クロームは小さな声で了平に事実を言おうとしたが、言えなくなってしまった。

あまりにも了平が生き生きとしていたので。

「まじ意味わかんない！容赦しないんだからね!！」

マリネは悔しそうに歯を食いしばって、次々と手裏剣を放つ。

それにまたも素手で挑もうとする了平を慌ててクロームが手助けをする。

再び了平の拳を幻覚の拳で包み込み、手裏剣を阻止する。

きょっくげーん、きょっくげーん！！と何度も叫ぶ了平は太陽のように輝いていた。

「いい加減にしなさいよ！もう頭にきた！！」

怒ったマリネは、両腕を広げて指をパチン、と鳴らす。

すると、マリネの周囲におびただしい手裏剣が現れた。百個以上はあるだろうか。

手裏剣は空中にふよふよと浮いている。

「前のあたしとは違うんだからね！」

ふふん、とマリネは得意げになる。

以前のマリネに会ったことがない一人に言っても仕方ないのだが。

「行くわよ、手裏剣豪雨！！！」

おかしな名前を合図に、大量の手裏剣が一斉に二人に向かって飛んできた。

「それならば極限に阻止するだけだ！！！」

了平は拳に力を込めて振りかざす。

クロームもさらに集中してより強い幻覚へと変化させる。

「マキシمامキャノン！！！」

了平の拳を根源に、晴の炎と霧の炎が混ざり合う。

晴の炎は“活性”。

霧の炎は“構築”。

了平のマキシمامキャノンが、晴の炎によって活性化した霧の炎の構築によって、二人を守るバリアの役目を果たした。

砕かれた手裏剣はぱらぱらと地面に落ちていく。

マリネは言葉を失ってしまった。

「極限になれば誰でも強くなれるのだ!」

「みんなを守るために…わたしは戦うの」

「一見食い違いの多い了平とクローム。だが、実は相性のよい二人だった。」

標的44 リーダーの銃（前書き）

やっと出せましたー！

あたためていた技です！

標的44 リーダーの銃

真っ暗闇な空間。

すべてが黒。なにもかもが黒。

どこがどうなっているのかわからない。

そんなところにウライラはいた。

「叫んだって無駄ですよ。あなたの声は届かない。」

ウライラはおかしそうに笑って目の前でもがき、助けを求める人間の姿を見ていた。

「抵抗しようと無駄なんだ。あなたは消えた。この世から。」

「……………!!」

「なに、事実を否定するんだ？これが現実だと言っのに!!」

傑作だ、とウライラは大きな声で笑う。

目の前の人間は悔しそうに、辛そうにウライラを睨む。

それに気付いたウライラが馬鹿にするように鼻で笑った。

「あなたはもういない。僕が消してあげた。なのにまだここにいる
ということは、相当神経が図太いのかな？」

ウライラは見下すような目でその人間を見て、言葉を放った。

「完全に消してあげよう。綱吉くんが手に入ったらね。」

暗闇に悔恨と辛苦が入り混じった。

「そんなちっせえ身体でオレに勝とうってか!？」

「僕をちび呼ばわりするのやめてくれる？僕より小さい人間なんて腐るほどいる。例えば、」

沢田綱吉とかね、とつぶやき雲雀がトンファーを振りかざす。

それをビンツは馬鹿でかいハンマーで防いだ。

ハンマーにはトンファーの食い込んだ後がしっかりと残されている。

「げっ、なんてことしてくれたんだてめっ！」

「僕は悪くないよ。あなたのそのハンマーが弱すぎるんだ」

雲雀は無表情でビンツを睨む。

ビンツはにやりと笑ってハンマーを軽々と肩に担いだ。

「ちいせえから手加減してやったんだが…思い切りつぶされたいらしいな！」

ビンツは空いている片手の指をパチンと鳴らす。

すると、ゴゴゴゴゴゴ、という地響きのような音があたりに響きわた

った。

「何しようとしてるの?」

「教えてやらあ!」

ピンツはハンマーを振りかざして地面にたたきつけた。
すると、そこから亀裂がはいり、地面がぱっくりと割れていた。

その亀裂は数メートル離れている雲雀の足元にまで届き、雲雀は片方の地面へと飛び退いた。

「ワオ。」

「反応薄いなあ雲の守護者さんよお!!もつと驚いていいんだぜ?」

「これでも十分驚いてるつもりなんだけどね」

「嘘つけ!!まったく変わらねえじゃねえかその鉄仮面!!」

リーダーが雲雀に言うと、雲雀はくるりと振り返り、無言で怒りを

あらわにした。

睨むその目は、殺気が滲み出ている。

リーダーは苦笑いをして後ろに下がった。

(扱いにくいぜこの兄ちゃん!!)

そんなリーダーの心の叫びもつゆしらず、雲雀はハンマーを再び担いでいるビンツに話しかけた。

「あなたの力がどんなに強くても、僕には関係ないよ」

「おお、どうしてだ？」

雲雀の口許があやしく緩む。

「むかつく奴は咬み殺せばいいんだから」

「いい度胸じゃねえか！かかってこい！」

ピンツがハンマーを掲げて雲雀に向かってきた。

すると、雲雀のボンゴリングから紫色の炎が出現し、それはトンファーへとうつっていく。

雲のような炎を揺らめかせ、雲雀がピンツを、詳しくはピンツの顔目掛けて攻撃を仕掛けた。

「うおっとー、危ない危ない」

それをピンツはハンマーの柄えで防ぐ。

ピシリ、とハンマーの柄にひびがはいった。

「おいおい、こんなかってー木にひびいれるなんて、どんな力持ってんだよあんだ」

「だから、あなたのその武器が弱すぎるんだよ」

雲雀はそのひびを狙ってトンファーで攻撃する。

ピンツは舌打ちをしてハンマーを地面に打ち付けた反動で雲雀の後ろにまわり、ハンマーを振りかざした。

「！」

「おせえよ、雲の守護者さん」

ピンツがにやりと笑って雲雀にハンマーを振り落とした。

「スキヴァータ
Schivata!!」

パン、と銃声が鳴り響き、森にこだまする。

ピンツはとっさに弾を避けて雲雀から離れた。

「…なにしてるの、おじさん」

「おじさんじゃねえ!!リーダーだ!!つか助けてやったのになんだその態度は!!」

不満そうな顔でこちらを見ている雲雀に、リーダーは思い切り怒鳴った。

発砲したのはリーダー。
雲雀を助けるためだ。

なのに感謝されるどころか、迷惑だと言われんばかりの態度をとられた。

「なんだ、今の技か？」

少し離れたところでビントツがリーダーに尋ねる。
リーダーは、ああ、と答えて話しはじめた。

「オレの銃は特殊でな。命令を下せばその通りの攻撃ができるんだ」
銃を構えながらリーダーが誇らしげに笑う。

その銃の弾は攻撃と防御のふたつにわかる。

山本の時雨蒼燕流の攻防の型のようなものだ。

スキファータ
Schivataというのは

イタリア語で「避けること、かわすこと」「を意味する。
つまりは防御の弾だ。」

「攻撃つつうのはどんなんだ？」

「教えてやるよ」

得意げにリーダーは笑ってビンツの方へと駆け出す。
ビンツは警戒して構えをとった。

「ウルターレ
Urtare!!!」

勢いよく発砲された弾はビンツ目掛けてとんでいく。

ビンツは避けようと身を翻した。

翻したはずだった。

パシュンッ

「…なっ！！？」

ビンツが驚いて声をあげた。
リーダーがにっ、と笑った。

確かにビンツは避けたはずだった。
だが、弾はビンツの肌をかすめた。
弾がかすめた肌から、鮮血がたらりとたれた。

「…てめえ、なにをしゃがった？」

「お前さんが攻撃の弾を見たいつつうから見せてやったただけだぞ？」

にやにやとリーダーは笑いながらビンツに言った。

ウルターレ
urtareというのは「当たる」「ウルターレという意味で攻撃型だ。
その言葉のとおり、「当たる」。

「当たる」まで、標的を追いかける。

「リボンもこの技を会得して、銃も持ってるはずだがなあ」

「赤ん坊が？」

雲雀はそんなの見たことがない。

だいたいはレオンと愛用している銃を使う。

技だつて、「カオス・ショット」しか知らない。

「その反応だと、リボンはおめらの前で使ったことがねえらしいな」

雲雀の表情を見て、リーダーがつぶやいた。

「…ま、あいつがこれを使ったら恐ろしいからな」

そう言つとリーダーは再びビンツを見る。

弾がかすめた腕をおさえながら、ビンツが悔しそつにリーダーを睨んでいた。

「お手柔らかにやろつや、な？」

ずっと木の上から見ていた黄色い鳥が、おかしな音程で高らかに歌いはじめた。

標的44 リーダーの銃（後書き）

やっとリーダーの銃の技が出ました。

アルヴィーコラだった時から出そうか出さまいかと迷っていましたが、やっと出せました！

参考は山本の時雨蒼燕流。

攻防型だけ参考にしました！

リボーンの技をあまり見たことがないので、リボンにもこの技を会得してもらいました。

これからリボーンを動かすのが楽になりそうです。

標的45 二丁拳銃(前書き)

ぐだくだです)・・(

標的45 二丁拳銃

ズガアアンツ　ズガアアンツ　ズガアアンツ

「…銃声？」

遠く離れたツナたちにも、リーダーの銃声が聞こえた。その方向を見ると、キラキラとなにかが輝いていたり、煙があがったりしていた。

「…まさか、あいつ」

リボーンがぼつりと呟いた。

「ねえ、よそ見しないでくれますー？」

結加とトンノと戦っている敵であるアツジョルナーレのニコールがツナとリボーンに話しかけた。

その隙をついて結加が光玉をニコールに向かって放つが、ニコールはそれをやすやすとかわしてしまった。

「まったく歯がたたない…」

結加は息を荒くしながらニコールを睨んだ。

先程から何度攻撃を仕掛けても簡単にかわされる。

結加は数え切れないほどの光玉を放っていた。

結加の光玉は死ぬ気の炎を凝縮したもの。

沢山放てばそれなりに体力も消費される。

数え切れないほど光玉を放った結加の身体には大きな負担がかかっていた。

（身体が上手く動かない…）

もはや結加の身体は限界だった。

足元はおぼつかず、ふらふらしている。

そこを狙ってニコールが攻撃してきた。

「ほら、ぼーっとしてると危ないよー！」

ニコールの銃が発砲された。

結加はとっさに避けようとしたが、突然のめまいに襲われて避けきれなかった。

バシユッ

「……………っ！」

「結加ちゃん！」

脇腹を弾がかすめた。

結加は痛みに顔を歪ませてその場に倒れ込んでしまった。

「……………っ……………」

「痛そうだね。大丈夫、すぐに楽にしてあげるから」

ニコールはにっこりと笑って銃の引き金を引いた。

「結加！！」

トノノは瞬時に全身から炎を放出して結加をかばう。

弾は炎によって石化され、ころんと地面に転がり落ちた。

「邪魔だよ、鳥」

「何とでも言えればいい。僕はどかないよ」

トノノは威嚇するように炎を揺らめかせて対抗する。
それをニコールはうっとうしそうに見ていた。

「うざいなー。ほんとに邪魔だよ。」

チッ、と舌打ちをすると、ニコールは懐からもう一丁取り出した。

「一丁拳銃か…」

「今時珍しくないよね。最強ヒットマンのリボン。」

ニコールの問いに、リポーンは鼻で笑って答えた。

銃の腕前は誰にも負けないリポーンにとって、二丁拳銃などたやすい。

だが、今はそんなことを考えている場合ではない。

「逃げるなら今のうちだけど？」

「僕は逃げないよ。」

トンノが両方の翼を羽ばたかせ、結加を完全に隠す。

「トンノ…逃げ…て…!!」

「なに言ってるの、結加。結加を置いて逃げるわけないでしょ？」

脇腹を抑えて立ち上がるうとする結加にトンノが優しく話しかける。

「すぐにおいしい焼鳥にしてあげるよ」

「やってみなよ」

炎がさらに大きくなる。

トンノは神経を集中させ、ニコールの出方を待った。

「…ふっ」

ニコールがかすかに笑った。

次の瞬間、目の前からニコールが消えた。

「…消え…た！」

ニコールが消えたことに驚き、トンノは動揺した。

それをニコールは狙っていた。

「隙あり。」

「…っ、しまっ…」

しまった、とトンノは思った。

ニコールが消えたことに動揺したトンノは、炎を弱くさせてしまったのだ。

全身から放たれていた炎が消え、無防備な姿となったトンノをニコールは狙っていた。

トンノは死ぬ覚悟で目を閉じた。

「…ぐはっ…」

聞こえたのは誰かの声。

死んでいない。
生きている。

なぜ？

トンノはゆっくりと目を開けた。

「……！！！」

「大丈夫か？」

トンノは驚愕した。

なぜなら目の前にいるのは……。

「…ツナ…！」

ツナは優しい笑みをトンノに向けた。

さっきの声の主はニコール。
その頬には殴られた跡があった。

それをやったのはツナだ。

トンノたちの危険を感じ、ツナはすぐにハイパー化したのだ。

腹の傷があろうとも。

そんなことは気にしなかった。

「…綱…吉くん……」

「オレの仲間に出すな」

普段よりも低い声でツナが告げる。
目は琥珀色からオレンジ色へと変わっている。

額の炎は鮮やかに燃えていた。

「……っ」

ニコールは言葉を失った。

その姿が、その炎があまりにも美しかったから。

「…なるほど、ね。」

ニコールはゆっくりと立ち上がった。

そして口元から垂れていた血を袖で拭う。

「こんな力、誰でも欲しがるわけだよねー」

楽しそうにニコールは笑った。

ツナは無表情でニコールを見つめている。

「綱吉くんの力がすごいってこと、やっとわかったな」

「何がすごいんだ？」

「えー、気付いてないの？」

まあいいや、と言うとニコールは服の土を払い、再び銃を握った。

「綱吉くんは傷つけちゃいけないんだけど、その後ろの“お仲間”とかいう人たちは用がないから何でもしていいんだってさ」

「お前には指一本触れさせない」

ツナのグローブから炎がゴオツ、と音をたてて燃え盛る。

ニコールがおかしな笑みで言った。

「一人で五人と一羽を庇うなんて無理でしょ？」

「一人じゃないよ」

ツナの隣に同じ炎を揺らめかせるトンノが並んだ。

トンノの目はまっすぐニコールの姿を捕らえている。

「なんだ、焼鳥にされに来たの？」

「あんたこそ、石にされたい？」

負けじとトンノがニコールに言い放つ。

そんなトンノをなだめ、ツナはニコールを睨んだ。

「覚悟しろ」

「仲間になる人間になに言ってるの？」

「オレはお前たちの仲間になんかならない」

ツナがさらに激しさを増す。

ニコールは仕方ない、とでも言っつかのように肩をすくませた。

「多少の傷は我慢してよね」

二丁の拳銃が音を立てる。

ミシリ、となにかが鳴った。

それは黒い黒い、不吉な痣。

標的45 二丁拳銃（後書き）

やっと結加の光の玉の名前を出せました。

今まで出すのを忘れてました。

光玉です。

「じじいおよく。」

安直ですね。

標的46 双子合する(前書き)

GWは一日一話を目標に頑張ってます。
なんとか今日の分は間に合いました。

標的46 双子合する

あなたはどっち？

お兄ちゃん？弟さん？

同じ顔だからわからないわ

いいわよね

ふたりで一人のようなものだね

そうやって、ごまかして

いつだって僕を、僕を、

僕らを

ひとまとめにして扱った

みんな、みんな、みんな。

誰だって、

僕らを

一人として見ないんだ。

「…っ いい加減にしゃがれ！」

「そっちがだよ！まったく、しつこいたらありやしない！」

木々の間からは赤い炎と槍がちらほらとうかがえた。

獄寺は双子の兄、アロッチと戦闘中だ。

「ほんとにつつとつしい！なにそのゴキブリ精神！」

「誰がゴキブリだあ！！？果たすぞおめえ！！！！！」

アロツチは獄寺のしぶとさをあの姿を見るだけで誰もが顔を歪ませる虫に例えた。

頭にきた獄寺は嵐の死ぬ気の炎と少量の雷の死ぬ気の炎が合わさったフレイムアローをアロツチに向けて放った。

「おめえのがゴキブリだろが!!」

ドオオオオンッ

「うわあ!!?」

獄寺のフレイムアローが頬をかすめ、アロツチは慌てて距離をとった。

頬をなにかがったのがわかる。

「ちょっと!今放ったやつ、嵐の炎とか言うやつ?なんか緑色の炎も見えたんだけど!」

「ああ、今のは嵐の炎と雷の炎を合わせたもんだ」

アロッチは信じられないと叫んだ。
少しパニック状態に陥っているらしい。

「なんなのあんた！ボンゴレの守護者ってひとつの炎しか使えないんじゃないの！？」

「知らねえのか、おめえ」

獄寺は右手の甲をアロッチに向けて指に嵌まっているリングを見せた。

「…五つ？」

「ああ。オレは大空と霧以外の五つの炎が使えるんだ」

そう言うと、獄寺の五つのリングからは赤、青、紫、黄、緑の色の炎がポウツ、と音を立てて燈された。

「オレには嵐、雨、雲、晴、雷の波動が流れてるからな」

「そんなの知らないよ!!」

アロッチは目を見開いて驚いていた。

ウライラから聞いていたのは、この獄寺という人物は嵐の守護者で、嵐の死ぬ気の炎を使うと言うこと。

複数の炎を使うなんてウライラは言ってなかった。

「…どうして…ウライラ様!!」

「情報が足りなかったみてえだな!」

ショックを受けているアロッチに、獄寺は再びフレイムアローを放とうとした。

「これで終わ…っ!？」

突然、ただならぬ殺気を感じて獄寺は後ろへと退く。

すると、横から複数の槍が飛んできて獄寺のいた場所へ刺さった。

「アロツチに手を出すな!！」

「っおめえ…」

「スコツチ!」

目の前にあらわれたのは、アロツチと全く同じ顔の双子の弟、スコツチだった。

スコツチは眉間にしわを寄せ、怒りをあらわにしている。

「あ、獄寺!」

ガサガサとしげみから山本が出てきた。

「てめっ、山本!なに敵を逃がしてんだよ!」

「わりい!こいつ早いからさ!」

山本は笑って獄寺に謝罪した。

しかし獄寺は許す気などない。

「こいつが来なかったらトドメを…」

「させるか!！」

ヒュン ヒュン ヒュン ヒュン

再び獄寺に向けて槍が放たれる。
相当スコッチは怒っているらしい。

「死ぬのはおまえらだ!！」

スコッチが指をパチンツ、と鳴らす。

金属のジャラジャラという音と共に、大量の槍があらわれた。

その数、数百本。

「喰らえ!！」

スコッチの声で槍が一斉に獄寺たちに向かう。

獄寺は山本の手を引いた。

キン キン キン キン キン

槍は小さな衝突音を鳴らせて地面へと落ちた。

「なにそれ。」

「これも知らねえか？」

獄寺は得意げに笑う。

「これはSYSTEMA C・A・I・（スイステーマ シーエーアイ）の防御フィールドだ。簡単に言えばバリアだな」

「…それも、聞いてない」

「ウライラ様はそんなこと…」

「言つて」

「なかつた」

アロツチとスコツチの声が交差する。

声も同じなので一人が喋っているように聞こえるが。

「サンキューな、獄寺！」

「ぼーっとしてんな馬鹿！」

獄寺が山本の手を引いたのは山本をS I S T E M A C ・ A ・ I ・
(スイステーマ シーエーアイ)のフィールド内に入れるためだっ
た。

「一応言っておくが別に山本を盾にしようとしていたわけではない。」

「なあ、獄寺。あいつら前よりも強くなつてねえか？」

「確かにな」

「さっきあいつ、強化プログラムがなんとかって言ってたぜ」

「強化：プログラム？」

獄寺はあれこれと思考をめぐらせる。

双子の槍は前より断然スピードは早まったし、破壊力もあがった。

しかも前は指を鳴らして槍を出現させるなど、していなかったはずだ。

それに槍は手に持って放っていたのに、今は指示するだけで槍が放たれる。

（強化プログラム…って言うのとの関係があるのか？）

獄寺は頭の中で次々と状況を整理していく。

山本も双子の強くなった理由を考えた。

（…そういえば）

先程アロッチは言っていた。

“普通の鉄に僕のが注入されてるんだから当たり前さ！”

“僕はさらに強くなるためにウライ様が用意してくれた強化オペレーションを実行して、力を手に入れたんだ。僕らの能力を増す力をね！”

(…能力を、増す力？)

その言葉がひっかかる。

能力を増す力。

すると、顔をなにかが横切った。

「余裕ぶつてると死ぬよ！」

スコッチは大量の槍を獄寺たちに向けて放つ。

フィールドの間に入り込んだ槍が山本の顔を横切っていた。

「びつくりしたぜ！」

「呑気に驚いてんじゃねえ！！」

どんな状況でも山本は山本だ。

あはは、と笑っている。

本当に驚いたのだろうかと思ってしまう。

「ねえ、さっさと終わらせようよ」

「こんなくだらない茶番をね」

双子が獄寺と山本に話しかける。
その場の空気が一気に変わった、

「僕らは強くなり続けるんだ」

「あれがあるかぎりね」

同じ笑顔がふたつ、獄寺と山本に向けられる。

謎の言葉を残し、双子は槍を放った。

標的47 霧の男現る

我慢してちょうだいね

これはあなたのためでもあるの

あなたならできるわよ

だから、手を離して

わたし、行かなくちゃ

大丈夫

迎えに来るから

そう言っつて、二度と姿を現さなかったのはあんたでしょ

裏切ったのはあんたでしょ

誰も助けてくれなかった

だから、だからあたしは…

「きゃあー!!」

「おお、すまんな!!」

「謝るならその攻撃やめなさいよ!!」

ぼーっとしていたら目の前に拳が飛んできた。
マリネは慌ててそれをかわして退く。

しっかりしろ、と自分に舌打ちをする。

消えたはず。

忘れてたはずなのに…なぜ?

「…?」

幻覚で戦闘に参加していたクロームはマリネの異変に気付いた。

先程は余裕そうで、行動に無駄がなかった。

だが、今は余裕はなく、行動には隙だらけだ。

(なにか…あった…?)

クロームはマリネをじっと見つめた。

結構長いこと戦闘は続いている。

だがその間にはなにもなかった。

五感で確認できるうちは。

(…確かめなきゃ。でもどうやって……)

戦闘の間、マリネにあった出来事を調べなければ。

しかし、本人に聞くわけにもいかない。

クロームは悩み考えた。

そんなとき、脳内に響いた。

クロームが大切にしている人物の声。

-クローム。

「…っ骸様…！」

クロームは骸の声を聞き、はっとする。

・ やつとこたえてくれた。

「…ごめんなさい」

・ クロームが悪いわけではないのですよ。どうやら、その森は邪気が大量に漂っているようです。僕の力を遮るようなね。

クロームは黙って骸の話を聞いていた。

邪気とは、ねじけた気持ち、悪意などのことである。だがそんな異様なものは、ここに来て感じられなかった。

「骸様、そんなもの…わたし、感じてないです」

・ そうです。あなたたちは感じられないんです。…ボンゴレリングによって。

「…え？」

クロームは大きな瞳を揺らした。

そして右手の指に嵌められているリングを見つめた。

キラリと輝くリング。まるでその存在を示すかのようだ。

「なんで…リングが？」

- 僕にもわかりません。ですが、確かにリングの力によって私たちは邪気から守られているようです。…それより

骸の声がより真剣なものになる。
美しく、低い声が脳内に響く。

- あの女の正体を確かめなければ。

「でも、どうやって…」

すると骸は大丈夫です、と優しくクロームに言った。

- あなたには、リングが…匣兵器があるでしょう？

「…あ！」

なぜ気づかなかったのだろつとクロームは思った。
すっかり忘れていた。
ボンゴレ匣の存在を。

「…開匣」

クロームがリングに炎をともし、匣に注入する。

そして匣から藍色の炎を纏い、全身が白いフクロウが姿を現した。

クロームの匣兵器、霧フクロウVer. Vだ。

「ムクロウ、カンビオ・フォルマ形態変化」

クロームがムクロウに呼び掛けると、その姿を変えていく。

そしてあらわれたのは眼鏡のようなもの。

実体のつかめぬ幻影と謳われたD・スペードの魔レンズだ。

クロームは魔レンズを通して戦闘中の了平とマリネを見た。

「…え？」

クロームは目を疑った。

まさか、そんなことはあるまいと魔レンズの映し出した事実を否定した。

こんなことがあるものか。

普通なら絶対にはいはずだ。

普通なら。

・どうしました、クローム。

「…骸、様…。あの………」

骸は優しくクロームに問いかけるが、クロームは混乱していて上手く言葉を繋ぐことができない。

・しばらく身体を借りますよ。

声がぷつりと消えた。

そしてクロームの身体が霧に包まれる。

オッドアイの瞳が輝いた。

「クフフ、なんとかクロームと入れ代わることができましたか」

おかしな笑い方をして骸は手に持っていた魔レンズを再びマリネにかざした。

「…まさか、ですね。通りでクロームが混乱してしまったわけです」

骸は表情は変わらないが驚いているらしい。
またクフフ、という笑い方をした。

「さて、このボンゴレリング…本当に不思議なものだ」

骸はリングを眺めて呟いた。
ポウツ、と霧の炎が揺らめく。
骸は口許をゆるめた。

「沢田綱吉…あなたの力はどこまで未知なんでしょうか」

「おおっ、六道骸ではないか…！」

了平がやっと骸に気づき、骸に話しかける。

骸はやれやれと小さなため息をついた。

「気付くのが遅いですよ、笹川了平」

「すまん、こちらは戦闘中なのだ！」

「ちよつと無視しないでよ！」

その声と連動して大量の手裏剣が放たれる。

だが、それは先程よりもスピードが落ちている。

了平はステップを踏んで次々と避けた。

マリネが焦燥の色を見せている。

それと同時に、どこか苦しそうで、辛い表情をしていた。

「あなた、何者なんですか？」

骸がマリネに話しかける。

マリネは見知らぬ男がいつの間にか現れたことに驚いていた。

「あたしはアッジョルナーレのマリネだけど？」

「そういうことではなくて…」

骸は真つ直ぐマリネを見つめる。

マリネは固まった。動けなかった。

骸のオツドアイを見て。

震えた。

恐怖を覚えた。

「あなたのような人がなぜ、生きているのですか？」

「っ！！！！？」

マリネが目を見開いて言葉を失った。

口からはかすかな声と二酸化炭素しかでてこない。

「極限に何の話だ？」

「後々わかります。それより、質問にこたえなさい。なぜあなたのような人が生きているのですか？」

骸の視線がより強いものとなる。
宙に浮いていたマリネはすくと、と地面に入たりこんだ。

「…知ってるの？」

「ええ、あなたが何者かを。しかし、理由まではまだわかりませんがね」

もう少し魔レンズでマリネを観察すれば理由もわかるはずだが、まずは事実を確かめようと骸はマリネに話しかけたのだった。

「話す気は、ないのですか？」

「ないわよ!」

「そうですか…仕方ない。」

ため息のあと、骸の目つきが変わった。

右目が、六から三へと変わる。

「こたえないのなら、無理にでもこたえさせるまでです」

骸のまわりに藍色のオーラが漂う。

「女とて、僕は容赦はしませんよ」

森を強い風が通り抜ける。

骸のスキルが発動した。

標的48 雲の怒り(前書き)

一日一話のはずが、一日二話に(笑)

標的48 雲の怒り

お願いだから、ここにいて

絶対に外に出てはだめ

あなたは特別なの

特別な、子供なの

だから、たやすく人に姿を見せてはだめ

なにか特別なだ

オレを人から、世界から離れさせて

閉じ込めていたのは

オレが違うだからだよな

わかってんだよ、子供なりに

わかってたんだ

オレが普通じゃなかったことくらい

ところかわって森の西側。

ズガアアン　ズガアアン

銃声が鳴り響く。

その主は、大きな身体を軽々と宙に浮かせながら攻撃していた。

そしてその攻撃を避けるのは大きな身体と大きなハンマーを担いだ男。

「てめっ、その銃って飛ぶこともできんのかよ！」

「まあな。だが飛ぶと言っても一時的な跳躍だ。あとはオレの体勢の工夫だけだな」

リーダーは地面に銃口を向け、言い放つ。

「デスルトーリオ
desultorio!」

銃声が鳴り響いた瞬間、リーダーの身体が再び宙に浮いた。

そして、一気にビンツの目の前まで迫り、ハンマー目掛けて発砲した。

「スピントナーレ
spintonare!」

「っが!!!」

見事リーダーの放った攻撃はビンツのハンマーに当たり、ビンツは突き飛ばされ地面へ落ちた。

「…ちっ」

痛みに顔を歪めると、目の前に誰かの足があらわれた。

何だろうと顔をあげると、そこにいたのは黒髪の少年。

「なに君たち群れてるの」

「っ!」

雲雀はトンファーを構えてビンツを見下す。
ビンツは慌てて雲雀と距離をとった。

「お、兄ちゃんここにいたのか」

「ちょっとオジサン。僕の獲物とらないでよ」

「だからオレはオジサンじゃねえっての」

リーダーは苦笑いをして雲雀に言うが、雲雀は興味なさげにリーダーの言葉を流し、ビンツを見た。

「…なんだよっ」

「僕、あなたみたいな人嫌いなんだ」

リーダーが「は?」と疑問を浮かばせる。
だが雲雀は気にせずつづけた。

「ターザンみたいな野生生物みたいな人間、大嫌いなんだ。常識を知らないしね」

(お前が言えることじゃねえよ)

リーダーはひそかに雲雀にツッコミをいれる。

常識のある人間ならば、普通は初対面の人に攻撃したりしない。言っていることとやっていることが矛盾だらけだとリーダーは思った。

「失礼だなあ雲の守護者さんよ。オレが野生生物だって？」

「例えるならゴリラだね。でもあなたはゴリラの頭脳にも及ばないだろうね」

ピキリ、とビんツの額の血管が浮き出る。

それに気付いていないのか、雲雀は気にせず言葉をつなぐ。

「あなたみたいな馬鹿、僕は嫌いだよ。なにも考えずにお気楽そうに生きてる……」

突然、リーダーが腹を抑えて地面に俯せになった。
雲雀は少し驚いてリーダーを見ていた。

「なに、便秘なの？」

「そんなかわいいもんじゃねえっつの……」

はは、と渴いた笑い方をしたリーダーの口許には血がついていた。
それを服の袖で拭ってリーダーが事実を打ち明けた。

「実はよお……この銃の技……」ピストレロ “pistoleroの戯れ事” っ
て言うんだが、こいつには弱点があつてな……」

カチャ、と銃を取り出してリーダーが苦笑いをした。

「コントゥロバルティータ “contrappartita”……日本語で“代償” っつうんだ
が、こいつの代償は……」

「使う人間の命、ってわけ？」

「……ご名答だ、兄ちゃん」

リーダーは汗を浮かべながら力なく笑って答えた。
相当苦しいのか、息も乱れている。

「まあ、5発ぐれえなら身体に異常はないらしいんだけど、オレの場合、今回は多用しすぎたな」

「馬鹿じゃないの。僕は馬鹿は嫌いつて言ったでしょ」

その雲雀の言葉を聞いて、リーダーは静かに「すまねえ」と謝った。

リーダーの話をずっと離れたところで聞いていたピンツは、豪快な笑い声をあげた。

雲雀はうつとうしそつに振り向く。

「そんな危険な技を連発させたのか、馬鹿か！！やっぱ人間は馬鹿だよな！！！」

リーダーはピンツを睨みつける。
そして悔しそつに歯を食いしばる。

「みんな、みんな馬鹿だよな！物事の区別ができねえと思いやがってな！馬鹿だよなあ！！！」

「…ちよっと」

ピンツの罵言を雲雀が遮る。
その姿にはかすかに怒りが見えた。

「それ、僕も含まれてる？」

「ああ？当たり前前だが、馬鹿が！」

ピンツはまた大きな笑い声をあげる。

次の瞬間、周囲を殺気が包み込んだ。

流石にピンツも異変に気付き、笑いを止めた。

「…ねえ」

ゆらり、と雲雀が動く。
表情は見えないが、声はかなり低い。

「僕を馬鹿にしたよね、今」

リーダーは雲雀の後ろ姿しか見えなかったが、雲雀の怒りが痛いほどにわかった。

背中からも殺気が伝わるのだ。

「…咬み殺す。」

その瞬間、雲雀を紫の炎が包み込んだ。

ゆらゆらと揺れる炎はピンツを凄ませるのに十分だった。

雲雀はリングに炎をともし、取り出した匣へと注入した。

紫の炎を纏った動物が…ハリネズミがあらわれた。

「…なんだそいつは」

「この子は雲ハリネズミのロールって言うんだ。…ロール」

雲雀に名を呼ばれたロールは、「キュウ」と一声泣いて、球体から何本もの針を突き出している姿へと変わった。

「行くよ、ロール」

「キュウッ」

雲の炎が揺らめきながら燃え盛る。

ビーツは触れてしまった。

雲雀の怒りに。

触れてはならないものに。

標的49 違和感(前書き)

じゅう、読みにくいです

標的49 違和感

いい加減にしなさい

なぜわたしの言うことを聞かないの？

わたしの言うとおりにすれば

なんだってできるの

なににでもなれるの

だから、おとなしく

言うことを聞きなさい

そりゃあいろんな人に褒められた

いい子ねって、出来た子ねって

でも正直嬉しくはなかった

だって、僕が望んだのは

こんな自分じゃなかったから

「ほんとに、僕と戦うの？」

「オレの仲間を傷つけた以上、オレはお前を倒す」

オレンジの瞳が一人の男を捕らえた。

その男は両手に銃を持ち、こちらを見ていた。

「…そんなに戦いたいんだね」

「戦いたくはない。…だが」

その視線が痛いものへと変わる。

静かな怒りを含んだものに。

「お前たちのやっていることは間違っている。」

「間違っている？なにが？」

「むやみに人を傷つけることだ！」

ツナの声があたりに響く。

ニコールは苦笑いをした。

「僕は、正しいと思うよ。だってさ、」

ガチャツ、と銃の引き金に指をそえる。

一瞬の怯みそうな殺気。

そして。

「自分が一番正しいってわかってるからね！」

ドウンッ ドウンッ

発砲され、弾が素早くこちらに向かって来る。

だがそれよりも早く、トンノの炎がツナたちを包み込んだ。

トンノの炎に触れた弾は一瞬で石へと化し、弾としての力を失い地面に落ちた。

「邪魔だつて何回も言ってるじゃないか、焼鳥」

「学習能力がないの？僕は焼鳥なんかじゃないよ」

トンノが両方の翼を羽ばたかせ、炎をさらに大きくさせる。

後ろにいるリボーンたちとニコールの間で炎の壁を作り上げた。

ニコールの攻撃をリボーンたちに食らわせないためだ。

「リボーン」

「なんだ、ツナ」

ツナがふいにリボーンに話しかける。

リボーンはいつものように問いかけに答えた。

「…結加たちを頼む」

「ああ、わかったぞ。おめえも腹に負担かけんなよ」

リボーンは笑って了解した。

それにツナも口許をゆるめた。

「行くぞ、トンノ」

「了解」

ツナのXグロブから炎が放たれる。

一気にツナはニコールの目の前へと飛んだ。

「速いよー綱吉くん。どんな力持ってたんのほんとに」

ニコールは余裕そうに笑ってツナに銃口を向ける。

発砲される前にツナは上へと飛び、身体を翻してニコールに蹴りを入れる。

だが、ツナの蹴りはもう一方の銃に当たって攻撃を防がれた。

「腕がビリビリするよ。力入れてなかったら銃が飛んでっちゃってたかもね」

「ならば銃をぶっ飛ばしてやる」

再び舞い上がったツナは右足を蹴り上げて思いきりニコール目掛け
て蹴りを放つ。

だが、またもやそれはニコールの銃によって止められた。
銃は手におさまったままだ。

「甘いね、綱吉くん」

「お前がな」

ツナはそう言い放つとニコールから距離をとる。
すると、背中になにかが衝突した。

声もなく、ニコールは飛ばされ地面に突っ伏す。

「…ぐ…っ」

「僕のこと忘れてたでしょ」

バサッ、と降り立った大きな鳥は得意げに笑っているように見えた。

ニコールは恨めしそうにトンノを睨んだ。

「…生意気な、焼鳥め！」

怒りをあらわにしたニコールは、地面を蹴って真っ直ぐトンノの元へと走る。

両手に銃をかまえ、狙いをトンノに定めて引き金をひいた。

ドゥンッ　ドゥンッ　ドゥンッ　ドゥンッ

ニコールの銃から弾が発砲された。だが、それはトンノに向かうこととはなく、空へと放たれた。

「…綱、吉くん…！」

ニコールは目を見開いて後ろに立っている綱吉を見た。

引き金をひく瞬間、背中を蹴られた。

そして銃口が空を向いたとき、発砲された。

そしてそのまま倒れ込んでしまったのだ。

「お前の…やっていることは、間違っているんだ」

「そんなはずはない。僕はいつでも正しいんだ。僕自身、僕が信じ
たものが正しいんだ。綱吉くんこそ、間違っているんだよ」

ふらりと立ち上がってニコールは口を拭う。
手には血の跡がついていた。

「そんな力、使わないほうがもったいないじゃん。僕だったら絶対
使いまわすよ。すべてが自分の思い通りになるようにね」

「それが間違っていると言っただ」

「たわけたこと言っちなよ綱吉くん!」

ドウンッ ドウンッ ドウンッ

ニコールは笑いながら発砲しつづける。
まるで壊れてしまったかのようなようだ。

最初の印象とはまったく違う。冷静でおとなしそうだったニコール
は、今や衝動によって動いているようなものだ。

「ねえ、わからない？この世に信じられるものなんて一握りしかないってこと！家族だって友達だって簡単に嘘をついてさ、すぐに裏切るんだ！自分を守るためにね！信じていいのは己だけ、そうだから？」

乱雑なニコールの言葉にツナは眉をひそめる。
言い方がおかしいように聞こえたのだ。

まるで、同意を求めてすぎるような言い方だったからだ。

「気付きなよ、今綱吉くんが守ろうとしてる人間たちも、必ず綱吉くんを裏切るんだ！人間なんてそういうもんだからさ！」

「違う、…リボンたちは、そんなことはしない！」

「マフィアなんてなおさらだ！裏社会で何をしているかわからない集団なんだから、裏切るに決まってる。マフィアだけじゃない、ヒットマンだってそうだよ？」

もはや戦闘は近距離戦になった。

ふたつのオレンジの炎が乱発される弾を避ける。

ニコールはツナを傷つけてはいけないと言っことを忘れてしまっているようだ。

ビュッ

「…っ」

「ツナ！」

弾がツナの頬をかすめた。

摩擦の熱さと火傷の熱さに加え、かすめた痛さが頬に広がる。

それを見たトンノは、ニコール目掛けて炎を放った。

「ツナに何するんだ！」

「聞き分けの悪い子には痛みで覚えさせなきゃね！」

「そんな間違って！」

「間違ってなんかないさ！僕はそう教えられたんだ！」

トンノはその言葉に違和感を覚えた。

“僕はそう教えられた”

“僕は”

僕は。

「…まさか」

「ほら、頑張つてよけなよ」

にやりと笑ってニコールは二丁拳銃で乱射しつづける。
それを避けながら、トンノはさっきの言葉を思い返していた。

（まさか、だってあの言い方は…まるで、）

自分が、そう言われつづけていたかのよう。

「…ツナ」

「ああ、わかってる。あいつは…なにかがおかしい」

ツナはあやしい笑みを浮かべているニコールを見てつぶやいた。

「…その原因を、つきとめる」

「了解。」

ツナの言葉を聞き、トンノがニコールに向かって行く。

ツナも同時にニコール目掛けて飛んでいった。

「誰のいいなりにもならないよ。僕はアッジョルナーレしか信じない」

ぽつりと聞こえた小さな声。

それはかすかに震えを含んでいた。

「僕を救ってくれた、アツジョルナーレしか。」

信じない。

標的50 錯乱(前書き)

殴り書きとは、いろいろなことを言っているんですね…！

標的50 錯乱

「逃げてても無駄だって」

「何回も言ってるだろ？」

馬鹿にするようなふたつの笑いが合わさって鼓膜に響く。
それを鬱陶しく思いながらも、獄寺は走ることをやめない。

「おい、山本！ほんとにこっちなのかよ！」

「小次郎が向かってるから合ってると思うんだけどなー……」

山本は先頭をきって飛ぶ山本の匣兵器、小次郎を見遣る。
小次郎は雨属性の燕で、大気中の水分を雨に換えることができる。

先程いた場所は水分があまりなかった。

山本の時雨金時は水を使って技を編み出す。
水がないとなにかと不自由なのだ。

すると突然、小次郎が止まった。
くるくるとその場を飛び回る。

「……ここか、小次郎！」

山本が話しかけると小次郎は一声鳴いて返事をした。

「よし、頼んだぜ小次郎」

小次郎はバサツ、と翼を羽ばたかせて空へと向かった。

「なにやってるの？」

「やっと諦めた？」

「ミシリ、と木の枝が軋む。

流石に男が二人も乗れば枝だって軋むだろう。

「はっ、諦めてなんかねえよ」

「そつだぜ、オレたちが簡単に諦めるなんてありえないのな」

獄寺と山本が笑いながら言う。

双子はその表情にムツとした。

二人の余裕な顔が気に入らなかつたらしい。

「…なにその余裕」

「むかつくんだけど」

「おめえたちの余裕もむかつくんだよ！」

獄寺と双子が口論を始めようとしたとき、甲高い燕の鳴き声が響いた。

「おつ、準備できたみたいだな！」

山本がにっこりと笑って空を見上げた。

青い炎を帯びた燕が頭上を迂回している。

「…なんだろ」

「…燕？」

「よっしゃ、頼んだぜ小次郎！」

小次郎に向けて山本が大きく手を振った。

それを合図に、小次郎が炎をあたりに散らせる。

ザアアアア

大粒の雨が音を立てて降り出した。

双子は突然の雨に驚いて、慌てて空を見遣った。

「なんで雨が」

「降ってきたの!？」

「雨雲なんてなくて」

「晴れてるのに!」

見上げるとあるのは大きな空。
雨雲なんてひとつもない。

だが確かに雨は降っている。

「小次郎、もういいぞー！」

山本が声をかけると、小次郎は急降下して山本の肩に止まった。

「…なにその燕」

「こいつか？こいつは小次郎っていうんだ」

「…そいつが雨を降らしてたの？」

双子が問いかけると山本は「そうだけ」と笑顔で答えた。

その笑顔を見て双子はうろたえた。

かわいらしい双子さんね

見てるこっちが笑顔になっちゃうわね

そんな笑顔嘘だろう？

わかるよそれくらい

みんな嘘をつくのが下手だね

引き攣った笑顔が

むかつく

(…なんで、この笑顔)

双子は表情を強張らせる。

身体がまったく動かない。

山本の笑顔を見てからだ。

(…なに、こいつ)

(はじめて見た)

(今までのとは違う)

(なにかかもが…これは)

嘘偽りのない

ありのままの、笑顔。

「…どうした？」

山本に声をかけられ、双子は我にかえった。

「なにぼーっとしてんだ？」

獄寺が不審な目で双子を見ている。

双子は二人同時に舌打ちをした。

(忘れてたはずなのに…なんでいまさら！)

(もう僕らには関係ないじゃないか…なのになんで今…)

全身がカタカタと震える。

顔が青ざめるのがわかる。

血の気が引く。

頭が混乱する。

記憶が次々とよみがえる。

「…ついでだ！やめろ！」

双子が頭を抱えてひざまずいた。

獄寺と山本は突然の変化に驚いた。

「おい…どうしたんだよ！」

「大丈夫か？しっかりしろ！」

二人が双子に声をかけるが、双子はただうずくまって震えているだけだ。

「…っ来るな！」

「…っ思い出させるな！」

「…っ消えろ！！！！！！」

双子が叫んだ瞬間、突然の爆発音があたりに鳴り響いた。

「…っわっ！」

「…っなんだいきなり！」

獄寺と山本は腕で顔を庇いながら爆風にたえる。

「……！」

キーンッ

いきなり聞こえた金属のあたる音。

その原因が何なのかわからない。
あたりには爆風による砂埃がおこっていた。

「……くそ、なんも見えねえ……！」

獄寺がいらついで怒鳴るが、砂埃はやまない。
その間にも金属のぶつかりあう音はたえず響いていた。

ビュウウウッ

強風が砂埃を吹き飛ばした。
視界が一気に広がる。

獄寺の目に映し出されたものは…。

「…なっ！！！」

キンッ キンッ キンッ
キーンッ キンキンッ

目の前に広がっていたのは、仲間と敵の戦闘だった。

「山本！」

「やっべえぜ、獄寺！」

山本が冷や汗をたらりと垂らして苦笑いを浮かべている。

手には時雨金時、そして目の前には双子の敵。

だが双子の様子がおかしい。

顔は真っ青で、表情はとても辛そうだった。

そして双子のまわりを、幾つもの、おそらく千はあるであろう槍がジャラジャラと音を立てて浮いていた。

「黙れ！黙れ！黙れ！」

「消えろ！消えろ！消えろ！」

双子は錯乱状態で山本に槍を放ち続けていた。

「なにがどうなってんだよ！」

「わかんねえけど、いきなりこいつらが攻撃してきたんだぜ！？」

一旦山本が後ろに退き、体勢を整える。
身体には複数の切り傷ができていた。

「意味わかんねえけど…とにかくあいつらを止めるしかねえな」

「ああ、本気ださねえと死ぬかもな」

二人な頷きあい、リングに炎をともす。

「「開匣！！」」

赤い炎と青い炎が小さな匣に注入された。

双子を鎮める方法は、あるのだろうか。

助けて 助けて 助けてよ

僕らを、僕ら二人を…

お願いだよ

標的50 錯乱(後書き)

記念すべき50話目！

(実際は51話目ですが…)

なのにこんなひどい有様…

Let's 殴り書き。

50話記念にイラストを書いたのですが…

ツナが…ツナが!! (´、`ノ)(ノ)

肩幅広くなりましたとき。

でも載せてしまおう。

いつもこの乱雑小説を見てくださって、ありがとうございます！

目指せ100話！

…いけるかなあ？（、・、（

標的51 聞こえた声(前書き)

つめつめ　・　・　(ノ)

ちよつと予定変更しちゃいました。

標的 51 聞こえた声

周囲が悍ましい空気に包まれる。

ぞわぞわと鳥肌が立つ。

その恐ろしい雰囲気を作り出しているのは、あの双子。

双子を根源にして、どす黒いオーラが放たれている。

それを獄寺と山本がア然として見ていた。

状況がわからない。

なにがおきているのかわからない。

ただその異変を見ていることしかできなかつた。

「やべえな…あいつら。変わっちゃまったぜ」

「…だが、オレたちはあいつらを倒さなければいけねえんだろ？」

そつつぶやく獄寺は冷や汗を垂らす。
双子のオーラに圧倒されていた。

今ばかりは、勝つ自信を持てなかった。

「…やってみるしかねえな！」

山本は時雨金時を構え、双子に向かって走り出した。

…時雨蒼燕流 攻式一の型……

車軸の雨！！

時雨金時を思いきり双子に向けて突く。

双子は一步も動こうとしない。

「「……な。」」

「!？」

ドオオオオオオオ

刀が双子に当たる寸前、とてつもない爆風が山本を襲った。

「…っ山本!!!!」

山本が爆風で吹き飛ばされて地面にたたき付けられた。
慌てて獄寺は山本の元へ駆け寄る。

「…ってー……。なんだ、今の…」

頭をさすりながら山本が顔をしかめて双子を見る。
双子は先程と変わらない場所ですくまっていた。

「…な」

「……る」

ぶつぶつとなにかをつぶやいている。
だがあまりにも声が小さく、はっきりと聞こえない。

(止まらない…止まらない!)

(抑えられない…抑えられない!)

焦燥の色が伺える声。

そんな双子の声は、獄寺と山本には届いていない。

(誰か…誰か…あんなたちでもいい…!)

(お願いだ…お願いだから!)

お願い だから

…止めて 抑えて

お願いだから

……助けて。

「あ!？」

「…今の」

「…つまさか!！」

獄寺と山本に届かなかった声。

だが、その声は違う場所の違う人物たちに届いていた。

「…アロッチ、スコッチ!」

「極限にどうしたのだ!？」

マリネが突然、攻撃を止めて叫んだ。
今まで戦闘中だった了平と骸のことなど気にもせず、マリネは辺りを忙しく見回していた。

「…っきゃあ！」

「僕を無視するとは、いい度胸ですね」

マリネの足元がぐにやりと歪む。

骸のスキルが再び発動した。

「アロツチ…スコツチ！！」

骸の攻撃を受けながらも、マリネは双子の名前を叫びつつける。その様子を今まで大人しく隠れていたランボが見ていた。

「こいつ、なんかおかしいもんねー」

「うむ、さっきとはまったく違うぞ」

マリネは一生懸命骸のスキルから逃れようともがく。そのあまりの必死さに、骸は違和感を抱いた。

「アロッチとスコッチとは…人の名前ですね。あなたの仲間ですか？」

「そうよ！早く行かなきゃ…二人が、二人が！！」

骸が話しかけると、涙目のマリネがそう答えた。

意味はわからないが、そのマリネの必死さは嘘ではないとわかった。

「その二人がどうしたのですか？」

「早くしないと…飲み込まれちゃう、消えちゃう、なくなっちゃう！」

「なにがですか？」

「二人の、心がよ！！！！」

ついにマリネが涙を流した。

次々と大粒の涙が目から流れ落ちる。

それには骸も驚いた。
こんな人間ははじめて見たのだ。

「…詳しく、教えてください」

骸の表情が、より真剣なものとなった。

「アロツチ、スコツチ！」

ピンツが双子の気配を感じた方向へと走り出した。
だが、それを大きなトゲをはやした球体に妨げられた。

「つくそ！どけよ！」

「なに逃げようとしてるの？」

「逃げてねえよ！だが行かなきゃなんねえんだ！」

ビんツが苛々した様子で雲雀に怒鳴り散らす。
雲雀は機嫌悪そうに眉をひそめた。

「なんでそんなに焦ってるの」

「オレの仲間がやべえんだよ！助けにいかねえと…いかれちまう！」

「…どういづことだ？」

木にもたれながら、辛そうにしながらもリーダーがビんツに聞いた。
苛々しながらビんツはその質問に答える。

「…心が、なくなっちまうんだよ」

「…どうして？」

「言えねえ！だが…ほんとにやべえんだ」

舌打ちをして、ビんツが拳を震わせている。

そんなビんツを見てリーダーが笑って言った。

「じゃあ、そいつらんとこ行くか？」

「…あ？」

思いもよらないことを言われ、ビンツはマヌケな声を上げた。
かなりリーダーの言葉が意外だったらしい。

「なに行ってるの、オッサン」

「こいつの仲間が危ねえんだぜ？オレだったら仲間んとこに今すぐ飛んでいきてえって思うからよぉ」

アルヴィーコラにいたとき、そんなことは思わなかった。
だがツナと出会い、ボンゴレに入った今は、仲間の大切さを思い知ったのだ。

だから、ビンツの気持ちが痛いほどにわかる。

「僕は行かせないよ。ここでこいつを咬み殺す」

「待てよ兄ちゃん。こいつの仲間んどこに行けば、沢山の仲間が集まってるかも知れねえぜ？」

リーダーが雲雀をなだめて納得させようとする。
雲雀は黙ってリーダーの話を聞いていた。

「集まってきた仲間を咬み殺せばいいじゃねえか」

「……………」

雲雀のしかめっ面が少しだけやわらいだ。
ビンツには相変わらずの不機嫌な顔に見えたが。

「…ならいいよ」

「ありがとうございます！」

リーダーは雲雀に礼を言うと、腹をおさえながらゆっくりと立ち上がった。

ビンツは驚いた様子でリーダーを見ていた。

そんなビンツの肩を軽く叩き、リーダーは笑いかけた。

「ほら、行くぞ。仲間がいかれちまう前にな」

ビンツは、はっと我にかえって慌ててリーダーたちのあとを追いかけた。

胸の奥に、なにか不思議なものが芽生えた。

「…っ邪魔しないでよ!」

「なに逃げようとしてるんだよ!僕らを倒そうとしてるくせに!」

「うるさい!それどころじゃないんだ!」

目の前にはだかる大きな鳥をニコールは睨む。

こんなことをしてる場合じゃないのに。早く行かないと、危ないのに。

「それどころじゃないんだ!君たちの相手は後回しだ!」

「…なにかあったのか?」

ツナに問われ、ニコールは言葉をつまらせる。

言っただうにかなるものだろうか。

敵であるツナたちに、理由を言っただ逃がしてくれるのだろうか。

ニコールは口を開くことにためらった。

「…言わなければ、わからない。理由があるなら教えてくれ」

ツナのオレンジ色の目がニコールをまっすぐ見つめる。

その視線がニコールの目にぶつかった瞬間、自然とニコールは理由を話しはじめた。

734

「僕の仲間が…危ないんだ。なくなってしまっただも知れないんだ…
心が、…心が！」

炎を隔ててニコールを見ていたリボーンはその言葉を頭の中で繰り返した。

（心…？どういう意味だ？）

心がなくなってしまう。

どうなくなるのか。

心とは、心臓か、それとも…。

「止めないと…ばらばらになってしまっ！せっかく…見つけられたの…っ」

拳をぎゅっと握ってニコールがうつむいた。表情は隠されているが、声は震えていた。

「お前は、仲間がそんなに大切なのか？」

「っ当たり前だ！二人は…みんなは、僕の大切な仲間だ…」

そのニコールの表情を見て、言葉を聞いて、ツナはゆっくりとろくなずいた。

「…よし。行こう」

「…まじで言ってるのか、ツナ」

「ああ、本気だ」

リボーンがツナに問うが、ツナは迷いもなくしっかりと首をたてに

振った。

「今は仲間の方が優先だ。みんなが反対しても、オレは行かせる」

「…なぜ、綱吉くん……」

目を見開いて問いかけるニコールに、ツナは微笑んで言った。

「敵だろうが味方だろうが、仲間を思う気持ちは同じだろ？」

仲間を思いやる気持ちは、敵味方関係なく存在するもの。

自分のことよりも仲間を思うツナには、ニコールの気持ちは伝わったのだ。

仲間を心配し、かけつけようとするその思いが。

「だが、あやしい行動をするなら…オレは止める」

「…約束する。綱吉くんたちを襲ったりはしない」

ニコールはかたくうなずいた。
そして、小さな声でつぶやいた。

「…ありがとう」

かすかな声はしっかりとツナたちに届いた。

そして、ニコールの仲間がいる方へと駆け出した。

間に合うだろうか。

心がなくなってしまっまでに。

標的52 敵と味方

助けて 助けて 助けて

なんでこんなことになっちゃったのかな

前はこんなこと、忘れてた

…あれをしてからだ

こんな消し去ったはずの記憶を思い出すのは

あれが…原因なのかな

なら、早く知らせなきゃ…

みんなに知らせなきゃ…

…でも身体が言うことを聞かない

勝手に身体が動く

…ああ

飲み込まれていく。

「消えろ、消えろ、消えろ」

「やめろ、やめろ、やめろ」

ぶつぶつと同じ言葉を繰り返すだけの双子。
その二人を囲むのは、数え切れないほどの槍。
互いにぶつかりあってたえない金属音を鳴らす。

そんな異様な光景を、獄寺と山本は黙って見ていた。

「ほんとに何なんだ…あいつら！」

「すっげー殺気なのな。…ピリピリして痛いぜ」

双子から発せられるどす黒いオーラと殺気。

獄寺と山本はそれを至近距離で痛いほどに感じていた。
肌が針でつつかれていたような、そんな感覚。

「…とにかく、あいつらを捕まえてみるか」

「わかったぜ」

獄寺がS I S T E M A C ・ A ・ I ・ を、山本が時雨金時を構えて
双子を睨む。

そして先に攻撃を仕掛けたのは山本だった。

…時雨蒼燕流 攻式八の型……

篠突く雨！

刀が空気を切り裂いて双子に向かう。
が、山本の攻撃は双子の槍の壁によって再びかわされてしまった。

「…やっぱりな！！」

思った通りだと笑った獄寺が、山本の後ろから攻撃を放った。

「フレイムアロー！！」

赤い炎が勢いよく槍の壁にぶつかった。

ガシャアアアアアンツ

槍の壁は見事に破壊され、破片があたりに飛び散った。

その隙をついて、山本が再び時雨蒼燕流を仕掛けた。

…時雨蒼燕流 特式十の型…

スコントロ・ディ・ローンディネ
燕特攻！

前衛に小次郎を構え、山本が双子に一気に刀で突っ込んだ。

槍の壁が崩れた今、双子を守るものはなにもない。

「…ぐ…！」

攻撃を受けた双子は小さなつめき声をあげた。
だが、その表情は無だった。

「攻撃を受けたのに…表情変わんねえのな…」
「やっぱりおかしいぜあいつら！」

確かに今、山本の攻撃を喰らった。
確かに今、うめき声も聞こえた。

だが表情は変わらない。

「まじで意味わかんないのな」

「呑気に言ってる場合じゃ……っ！！」

双子の代わりに獄寺の表情が変わった。

破壊したはずの槍が再びあらわれたのだ。

ジャラジャラと音をたてて、不気味にゆれている。

シュッ

「うわっ」

慌てて二人は後ろに退く。

突然槍が二人目掛けて放たれたのだ。

それを合図に次々と槍が獄寺と山本を襲う。

「っちくしょう！」

逃げてでも逃げても追いかけてくる槍。

これではきりがないと獄寺は走るのを止めた。

「瓜！」

「によおん」

肩に小さな猫が飛び乗った。
獄寺は瓜に大きな声で言い放った。

「瓜、カンピオ・フォルマ形態変化！」

その瞬間、瓜が輝きを放ち姿を変えていく。
そして姿を変えた瓜を、獄寺が構えた。

嵐の炎を纏ったそれは、初代嵐の守護者が使っていたとされる、ジーのアーチェリー G
の弓矢だ。

「いくぜ瓜、トルネード・フレイム・アロー！！」

赤い炎の矢が向かってくる槍にぶつかった。
それを根城に、嵐の炎が飛び交う槍に伝わり次々と爆発していく。

槍は嵐の炎の“分解”の力により、破壊されてしまった。

「やるな、獄寺！」

「当たり前だ！」

山本に感心され、獄寺は得意げな笑顔を見せた。

だが、そんな二人をあの爆風が襲った。

身体が浮いた。

身体を襲う浮遊感。

目には青い大空が見えた。

だが一瞬のうちに、二人は地面へとたたき付けられた。

「っぐあー!!」

激痛が全身を駆け巡る。

頭がずきずきと痛む。

「…な、なんだ…今の…っ」

咳込みながら獄寺が起き上がるのと身体に力を入れる。だが力を入れると激痛が身体を襲った。

山本も同じらしく、うつぶせになったまま動かない。
二人はただ地面に転がっているだけだった。

「消えろ、消えろ、消えろ」

「やめろ、やめろ、やめろ」

ふらりと双子が立ち上がり、獄寺と山本の方へ向かってくる。
ゆっくりと距離を縮めていく。
逃げたくても身体が動かない。

無表情の双子が槍を構える。

二人は死を覚悟して目を閉じた。

「マキシمامキャンオン!!!」

真っ暗な視界に、聞き覚えのある声が響いた。
それと同時になにかが砕ける音も聞こえた。

獄寺はまさかと目を開けた。

目の前にいたのは、いつも口論をするあの男。

「極限に大丈夫か、タコヘッド！」

「…し、芝生頭…!!」

輝かしいほどの笑顔が獄寺を見下ろす。
存在自体が太陽のように眩しい、ボンゴレ晴の守護者、笹川了平だった。

「なんで、お前がここに…!!」

「僕もいますよ」

「ランボさんもいるんだもんね！」

他方から聞こえた声に、獄寺はまたもや驚愕することとなった。

目を見遣ると、かつては敵、今では同じ守護者である六道骸と、いつもざいと思っっている守護者のランボが立っていた。

そしてその隣には…。

「アロッチ、スコッチ！」

「今行つてはいけません。あなたも殺されかねませんよ」

双子の姿を捕らえたマリネは、双子に駆け寄ろうとするが、骸に腕を掴まれ止められた。

「…なんで、そいつがいるんだよ…っ！」

「彼女はその目の前にいる仲間を心配していたので連れて来ました」

につこりと骸が笑って答えた。

骸にしては珍しい行動をするな、と獄寺は骸を見た。

他人のことなどお構い無しな骸が、敵であるマリネと一緒に連れて来るものだろうか。

「タコヘッドと山本はここにいろ！」

了平が山本と獄寺を担いで木の幹にもたれさせた。

山本が痛みにあたえながら「サンキュ」と礼を言った。

「アロッチ、スコッチー！！！！」

「いつっ、いていていてえ！もう少しゆっくりしてくれ…！」

またまた他方から双子を呼ぶ声。
木々の間から、大きな男二人と、学ランを着た少年が現れた。

「あつ、ビンツじゃない！」

「うおつ、マリネ!？」

マリネとビンツは互いを指差し叫んだ。
驚いたビンツは、つい肩を担いでいたリーダーを放してしまった。

「ついてえ！なにすんだてめっ！」

「わ、悪い悪い！」

ビンツが慌ててリーダーに謝る。
いつのまに仲良くなったのだろうか。
二人が交わすのはまるで友達との会話だ。

雲雀は冷ややかな目で二人を見ていた。

すると、マリネがビンツに近づいて話しかけた。

「ビンツも…気付いたの？」

ビンツは急に真剣な表情になってうなずく。

「ああ、確かに聞こえたぜ…あいつらの声がよお」

二人はふと双子に視線をやる。

どす黒いオーラを放ち、無表情のアロツチとスコツチ。

そんな双子を見てビンツが舌打ちをした。

「なんでこんなことになっちまったんだ…オレだって忘れてたのに

…」

「…まさか、ビンツも？」

ビンツの言葉にマリネが目を見開く。

苦々しくビンツは答えた。

「忘れてたのに…記憶が蘇ってきてやがった…。おそらく、あいつらもな」

「だから、あんな姿に…」

マリネがかたかたと震え出す。

それをなだめるようにビンツがマリネの頭をそつとなでた。

「…とすると、来るぜ。二人もな」

ピンツのその言葉と同時に、ゴウツと強風が吹き荒れた。

その強風をつくりだすのは、炎を纏った大きな鳥と、一人の少年。

「…十代目!」

獄寺が目を見開いて名前を呼んだ。

大空にいるのは、自分の尊敬するボンゴレ次期後継者。

オレンジの炎を纏った沢田綱吉だった。

そしてツナの隣にいるトンノの背中には、リボン、結加、ロンジと セッラッ シヨ セッラッ シヨ セッラッ シヨ のシクロとシスイに、ありえない人物が一人。

「…あー!ニコール!」

「なに悠々と乗ってんだお前!」

トンノの背中におとなしく乗っているニコールにマリネとピンツが怒鳴る。

ニコールは二人の声を聞いた途端、鬱陶しそうに耳を塞いだ。

「聞こえない、聞こえない、聞こえない」

「うおらあああああ！！！！ニコール！！！！」

マリネとビンツの罵声が重なる。

ニコールは仕方ない、と耳を塞ぐ手を放した。

「綱吉くんがこの焼鳥に乗れって言うから」

「…いつになったら僕を焼鳥呼ばわりするのをやめてくれるの？」

トンノが呆れんばかりに大きなため息をついた。

そして羽をばたつかせて地面へとおりた。

「…アロツチ、スコツチ」

ニコールが双子に呼び掛ける。

だが、双子からの返答はない。

「どつするよ、ニコール」

「…もちろん助けなきや」

ビンツに問われ、ニコールは真剣な表情で答える。

マリネもしっかりとうなずいて双子に向き合った。

「…どうすればいいのか、わかるのか？」

ツナがニコールたちに話しかけたが、ニコールは首を横に振った。

「方法はわからない。でも、助けなきゃいけない」

「…仲間だから？」

その言葉に、今度はニコールは首を縦に振った。
ピンツもマリネも同様に。

そんな三人を見ていたツナは、優しい笑みで「分かった」と言った。
そして、拳に炎を纏って告げた。

「…オレも手伝う」

強く、たくましく炎がゆらめく。

それを見ていた一人の家庭教師がにやりと笑った。

敵味方など関係ない。

仲間を思つ気持ちは同じなのだ。

標的52 敵と味方（後書き）

あああああ…一気に書く人物が増えた…!!

大変だけど、がんばります(´・`・´)

ウライラの存在が消えつつあります。
ボスなのに（笑）

ファイト！(´・`・´)

標的53 信頼

「…?」

かすかに聞こえた声。

誰かが叫んでいるのだろうか。

…誰か、とは言ってもこの森にはウライラが連れて来たボンゴレ関係者とアツジヨルナーレの七人しかいない。

だからあの声はどちら側かのものだろう。

ミノイは一人、湖のほとりにいた。

彼も綱吉とリングを探し、森を移動していた。

誰かと一緒に戦うはずだった。

だが、移動中に激しい吐き気と頭痛に襲われた。

頭の中に映し出される、かつての自分。

忘れていたはずの、辛い過去。

あなたなんていららないわ

なぜ生まれてきたの

なぜこんなかわいくない性格なの

なぜあなたがわたしの子供なの

あなたなんていらわないわ

私を生んだのはあなたでしょう

なのになぜそんなことを言うのですか

私の、なにがいけないのですか

私は、必要ではないのですか

…いらないのですか

「…くっ」

ミノイは頭をおさえてうずくまる。

水面に映し出されるミノイの顔は、青白く汗がにじんでいた。

“…て”

また、聞こえた小さな声。
ミノイは耳をすました。
だが聞こえるのは爆発音。
誰かが戦っているらしい。

“…けて”

だんだんとはっきり聞こえてくる声。
それは外から得るものではなく、脳内に響いていた。

“…て、…て、…けて”

……………助けて”

「…この声…！」

はっきりと聞こえた助けを求める声。
この声は…。

「…アロツチとスコツチ…、まさか…っ…！」

ミノイは慌てて走り出した。
突然蘇った記憶。双子の声。

信じたくはない事実。

必死に双子の気配を探り当てて向かうが、またもや激しい頭痛に襲われる。

「…っ、こんなときに！」

ミノイは地面に膝をついて拳を握る。

早く行かなければいけないのに、頭痛が絶え間無くミノイを襲う。

痛みを耐えながら、ミノイは掌を広げ呪文を唱えた。

「コンプルサーレ compulsa re、アスピデ・コロッサレ aspide collosa le
! ! ! !」

ミノイの声が響いた途端、掌から光が発せられる。

そして地響きと小さな揺れのあと、地面が割れ亀裂をつくった。

ドオオンッ

亀裂から、巨大な蛇が現れた。

その蛇は長身であるミノイの何倍もの身体をしていた。

ミノイは猛獣を武器とする。

だがレパートリーが限られており、最も召喚する猛獣はこの蛇だ。

「さあ、急ぎますよ!」

ミノイの声に、蛇は細長い舌を動かして答えた。

そして頭にミノイを乗せ、ずるずると大きな身体をつねらせて双子のいる場所を目指す。

「…待っていないさい。アロツチ、スコツチ」

つぶやくようなミノイの声は、誰に聞こえるでもなく消えていった。

「手伝うって、正気なの綱吉くん!?!」

「正気だ」

「敵の手伝いなんか普通しねえぞ!?!」

ニコールたちが目を見開いて驚いている。

双子を助けるのを、ツナが手伝うと言ったからだ。

そんなツナをボンゴレ側は黙って見つめていた。

「今は敵味方なんか関係ない。あの双子を止めるのが最優先だ」

「…でも、綱吉くん。僕たちはアッジョルナレで君の敵。君を狙う人間なんだよ？もしアロッチとスコッチが元に戻ったら君を…」

「お前は、さっき言った。」

ニコールの言葉をツナがさえぎる。

「絶対にオレたちを襲わないって、約束しただろ？」

優しい笑みがニコールたちに向けられる。

その瞳はまるでニコールたちを信じているかのよう。

…いや、信じているのだ。

先程した約束を、ニコールたちを。

「…さすが、大空だ」

ニコールがぼつりと呟く。

そしてまっすぐツナの瞳を見て、微笑んだ。

「絶対約束は守る。ほんとに…手伝ってくれる？」

「ああ、…必ず、あの双子を救ってみせる」

なんと心強いのだろうか。

ツナが言うことは、何故か信じれる。

ニコールはいつのまにか、敵であるツナをとて信頼していた。マリネとビンツもまた然り。

「…でもどうやって元に戻るの？こんなの…初めてじゃない」

心配そうにマリネがニコールに言う。

元に戻る方法は誰も知らない。

「…弱らせて…みたらどうだ？」

獄寺が苦し紛れに提案した。

だがそれにニコールたちはすぐに反対する。

「そんなことできるわけないじゃないか！」

「そうよ、アロッチとスコッチは私たちの仲間なのよ！？」

「仲間を仲間が傷つけろっつうのか！？」

パアアアアンツ

三人が騒がしく反論していると、痺れを切らしたりリボーンが銃を発砲した。

一瞬で三人は黙り込んだ。

「ごちゃごちゃうるせえぞ。」

低い地を這うような声でリボーンが言う。

姿は赤ん坊だが、何故か迫力のあるリボーンに、三人は反抗できなかった。

「獄寺の言った方法は正しいっちゃあ正しいぞ。」

「…なぜ？」

「考えてみるニコール。双子は今暴走してんだ。暴走した奴に近寄ったりしたら、お前らが怪我するぞ。双子を救うどころじゃなくなるだろう。」

説得力のあるリボーン言葉に、三人は悔しそうに拳を握りしめた。

だが、次の瞬間にはリボーンは笑って三人に声をかけた。

「心配すんな。双子が怪我しても了平が助けてくれるぞ」

「そつだ！オレの匣兵器のコテで極限に治してやるぞ！」

了平は笑顔で匣を振りながら答えた。

ツナといい了平といい、なぜ敵である自分たちにごこまでするのだろうか。

なんだかんだであの骸と雲雀も、ニコールたちを会わせてくれた。

ニコールたちはそれが不思議でたまらなかった。

(…不思議な人が多いな、ボンゴレって。……でも)

三人に自然と笑みがこぼれる。

同じことを、ニコールたちは思っていた。

(一緒にいて、安心できる。)

ツナを中心としたボンゴレファミリー。

個性的な人物ばかりでおかしなマフィアだとばかり思っていた。

だが、その愉快なところがツナたちボンゴレ十代目ファミリーのいいところなのだ。

だから今まであったいろんな辛い出来事も乗り越えられたのだろう。

「…いいね、ボンゴレって」

「なんかウライラ様の情報と違う…ね」

「ほんとに家族みてえだな」

僕らも、こんな家族みたいなマフィアだったなら…

ニコールたちはそう思わずにはいらなかった。

早く、双子を元に戻してあげたい。

そして以前のように、笑ったり、喧嘩したり、楽しかった日々に戻りたい。

時間は戻せない。

時計の針は右にしかまわらない。

だが、双子は元に戻れるかもしれない。

もし、元に戻れたなら。

「…また、みんなで笑おうよ」

ニコールはマリネとビンツの手を握る。

一瞬二人は驚いていたが、強くニコールの手を握り返した。

「私たちは仲間よ」

「なんだかんだ言っであいつらはオレの弟みたいなもんだしな」

「僕もそう思う。みんな、…僕の家族だ」

握りしめた手はとてもあたたかかった。
触れているだけで落ち着くぬくもり。

この気持ちは、何と言っのだろうか？

標的53 信頼（後書き）

いつ、双子は元に戻るんでしょうか（笑）

今回から取り掛かろうと思ってたんですけど、ほのぼのして終わりました！

ほのぼの大好き（、、）
戦闘苦手（、、）あちゃー

ウライラかわいそう。

もう少し空気でいなさい！（笑）

標的54 真偽(前書き)

短いです。

標的54 真偽

人間は、みんなひどいものだと思ってた。

みんなみんな、自分だけが大切で、他人のことなんて気にしない。

だから僕は、僕らはあんな目にあってしまった。

それから、他の人間を恨みつづけた。

どうせ、お前たちも同じなんだろうって。

でも、それは間違いだったみたいだ。

僕らははじめて、人間の優しさに触れたんだ。

人間を信頼できたんだ。

この、小さくて、でも強くて、眩しいほどの美しい炎を燈した少年を。

僕らも、染めてしまった。

僕らも、飲み込まれてしまった。

僕らも、包容されてしまった。

このあたたかな大空に。

「手加減はする。だが攻撃をしてきた場合はやむを得ない。それでいいか？」

ツナが冷静な表情でニコールたちに確かめる。

「うん、あの二人を元に戻すためだ。仕方ないよね」

「大丈夫よ、アロツチとスコツチは強いんだから！」

マリネがニコールの服を掴んで言った。

そのとき、ニコールはわかってしまった。

(マリネ…自分に言い聞かせてるんだ)

兄弟のように常に一緒にいたニコールとマリネ。

離れることは少なかったため、お互いの性格などは全てと言っているほど知っている。

服を掴んでひっぱり、伏し目がち。

それは、マリネが何かを我慢しているときや、自分に言い聞かせているときの癖だった。

ニコールは優しくマリネの頭をなでる。マリネは一瞬顔を赤くしながらも、妹のようなかわいい笑顔を見せた。

「…アロツチ、スコツチ、待ってて」

ニコールたちは双子を見据える。

心が飲み込まれつつある双子にその姿は生物としか認識されない。

だが、三人には双子は双子でしかない。

大切な仲間であることには間違いないのだ。

ヒュッ

オレンジの炎が鮮やかに飛ぶ。

先陣をきつたのはツナだった。

相手の出方はわからない。

ならば自分が確かめるしかない、とツナらしい考えを出したのだ。

まっすぐ双子に向かって飛んでいく。

警戒していると、双子のまわりのどす黒いオーラがぐっぐめきはじめた。

ビュンッ

「…!?」

なにかがツナに向かって放たれた。
ツナはとっさに身を翻して避ける。

「…あれは、二人の武器の槍…？」

マリネが地面に突き刺さった輝くものを見てつぶやいた。

ジャラジャラと音を立てて、双子を大量の槍が囲む。

獄寺と山本は再び見る事となったその光景に拍動を乱れさせる。

あの双子は危ないと、本能が警報を鳴らす。
近づいてはならないと。

「十…代目、気をつけて、ください…！」

「その…槍は、いくらでも…出てきちまうか…らな！」

二人の呼びかけと槍の襲来は一瞬の間もあけなかった。
一斉に襲い掛かってきた槍を炎を使って次々と避ける。
ビッ ビッ ビッ

大量の絶え間無く襲ってくる槍を完全に避けるのには無理がある。
少しずつ、ツナの身体にかすり傷ができていた。

地味な痛みは地味に響く。

次々とつまれる傷の痛み顔に顔を歪めながらも、ツナは槍を避けつつ
けた。

「…綱吉くん」

ツナを見ていたニコールは汗を垂らした。
敵であるツナが敵である双子を助けようとして怪我をしている。
だが、仲間であるニコールは傷ひとつ作らず見ているだけ。

「…っ」

ぎゅっと拳を握ったニコールは、懐から武器の銃を取り出し、双子
に向かっていった。

「消えろ、消えろ、消えろ」

「アロッチ、スコッチ、僕だよ！」

ニコールが双子に自分の存在を示すが、双子の表情は変わらない。
何度呼びかけても反応はない。

「やめろ、やめろ、やめろ」

「アロッチ…スコッチ……」

こんな双子ははじめて見た。
いつもは人をからかったりしてよく笑っている。
でも今は無表情、無感情。

ニコールは怖くなった。

自分の知らない二人は、こんなにも無なのかと思った。

いつも見ていた双子は偽りの姿だったのだろうか？

(…違う)

ニコールが独り言のように小さな声で言う。

不安な思いは消えた。

双子を信じるニコールの思いによって。

(あの二人は…あの二人こそ、偽りだ。

本物は、僕らがいつも見ていた二人だ)

笑っている双子こそが本物。
その本物を取り戻すために。

(…僕らはいくんだ！)

ニコールは銃を持ち直し、深呼吸をする。

マリネは手裏剣を、ピンツはハンマーを構える。

二人が元に戻りますように。

またみんなが笑い合えますように。

そう祈りを込めて、三人は走り出した。

標的54 真偽（後書き）

閲覧数が7万を突破しました！

ユニークも7000突破しました！

ありがとうございます！

標的55 合流

「…っ、おとなしくしていなさい…!」

己の胸倉を掴み、ウライラは荒い呼吸を繰り返していた。

彼は一人、アツジョルナーレのアジト内の自分の部屋にいた。

「…なかなか、しぶとい…ね!」

語尾が力強く発せられた。

ウライラが身体に力を込め、拳で自分の胸を殴ったからだ。

その途端、ウライラの身体から力が抜け、大きな身体がソファーにもたれかかった。

荒い呼吸をなだめながら、せせら笑いをする。

「最近はずぐに暴れだすようになったな…。綱吉くんと接触をはかったときからだ…」

身体はだんだんと平然を取り戻し、ウライラは足を組んで天井を仰いだ。

「これでは時間の問題がありますね……。早くしなければ」

机の上に置かれた資料を眺め、黙読する。

読み終わったあと、ウライラはにやりと笑った。

「しっかりと時間稼ぎをしてください。僕が手に入れるまで」

ぐしゃり、とウライラは紙を握り潰した。

場所は変わり森の中。

こちらでは敵同士であるボンゴレとアッジョルナーレのニコール、マリネ、ビンツが力を合わせ、二人の人間を助けようとしていた。

人数的には圧倒的に双子は不利だ。

だが、それは双子が普通であるならば、の話。

双子は今、普通ではない。

なにかに心を、神経や精神すべてを飲み込まれかけているのだ。飲み込まれかけているからいいものの、完全に飲み込まれてしまったらどうなるかわからない。

一刻も早く双子を止めなければならない。

さて、今現在戦闘に参加できる者をまとめてみよう。

ツナ、了平、ランボ、雲雀、骸、リボン、トンノ、ニコール、マリネ、ビンツ

そして参加できないのは、負傷中の獄寺、山本、リーダー、結加の四人と、負傷者の手当てを行うロンジ。

このメンバーでどうなるのだろうか。

さあ、話を戻そう。

ニコール、マリネ、ビンツは意を決して双子に向かっていった。

見ていたって仕方ない。

仲間である自分たちが助けるべきなのだ。

傷だらけのツナを見て三人はそう思った。

「アロツチ、スコツチ！」

「痛いけど我慢してよね！」

「お前らのためなんだぞ！」

ニコールは双子を掠めるくらいの銃弾を、マリネも同様に掠るほどの手裏剣を放った。

ピンツは地面をハンマーで思いきり叩き、地割れを作り出す。しかし。

バアンツ!!!

「…!?!」

三人の攻撃はいともたやすくかわされた。

銃弾と手裏剣はどす黒いオーラに飲み込まれ、地割れは起きる前に場所を移動されてしまった。

地割れをかわすことならまだしも、銃弾と手裏剣を、しかも同時に止められるとなると、さすがにパニックに陥る。

「…あそこまで…力が使えるように……」

「あのオーラ、なんなの？」

「オレの攻撃って、かわしやすいう上にださいのか？」

一人だけ問題がズレている人間がいるが、それは置いておくとして
う。

本人以外の全員は、あえてその疑問には答えなかった。

「二人にあんな力、なかったはずだ。」

「どういうことだ？」

ツナがニコールに問うと、ニコールは口をつぐんだが、答えなければ
ならないという状況なので戸惑いつつも話しはじめた。

「二人は、僕らの中でも一番技の上達が遅かったり、力が弱かった
んだ。一番歳が下だからまだ未熟なところもあって…。だからこん
な力、二人には出せないはずなんだけど……」

「でもこんな力、ミノイくらいあるわよ！？あの一番歳が上で力も
上級並の！」

マリネの言うとおりでとビんツが頷く。

双子の力の成長は奇妙だった。

例えるならば、成績が最下位に近い人間が突然上位にあがるような。

一言で言えば、ありえない、のである。

「もしかしたら、」

リボーンが難しい顔をしてつぶやいた。

全員がその言葉の先を待つ。

だが、言葉が続けたのはリボーンではなく…。

「…無理矢理、か？」

「そつだぞ、ツナ。」

同じことを考えていたツナに、リボーンは上出来だと笑った。

無理矢理、とはどういうことか。

意味のわからないニコールたちは二人に聞いた。ただした。

「どういつこと！？無理矢理って！」

「その言葉通りだ。」

今はあの双子が出せる力の基準を上回ってるんだ。なにかによって、無理矢理にな。」

リボーンが双子を一瞥する。

ただならぬ殺気とオーラ。

いかにも危険な雰囲気を漂わせる。

未熟な彼らがここまで力を出せるはずがないのだ。

ニコールたちが黙り込んだ。

思考が狂いかけていた。

何がどうなっているのかもわからなくなってきた。

だがその混乱を不気味な音が突き破った。

…る、ずるずる、ずる、ずるずるずるずる

「…なんの音？」

マリネがニコールに寄り添って不安な表情を見せる。

どんどん近づいてくる音に、ツナは身構えた。

だが、そんな警戒は無駄なものとなる。

「…あ！」

ビンツが指をさして大きな声をあげた。

指差す方向には、ビンツたちのよく知る人物がいた。

「やっと…見つけました。」

「え、…ミノイ!？」

その場にいた全員が、大きな蛇の上に乗っている男を見て驚いた。驚く理由は様々だろうが。

だがアロッチとスコッチの様子はまったく変わらなかった。

「ミノイ…なんでここに!？」

「アロッチとスコッチの声が聞こえたので、何かあったのだらうと思っ
て探していたのですよ」

ニコールがミノイに駆け寄る。

巨大な蛇から飛び降りミノイは答えた。

「…まさか、ミノイも……」

「ええ、記憶のことでしょう？私も思い出しました」

顔をしかめたミノイの言葉を聞き、ニコールたち三人はまた黙り込んだ。

記憶、とはなんだろうか。

思い出した、とはどういうことだろうか。

ツナたちは疑問に思った。

だが、その疑問を解決させないかのように、いくつもの槍が飛んできた。

シュンッ シュンッ シュンッ

「…っ」

ツナがミノイたちの前に立ちはだかり、グローブの炎で槍を食い止める。

ジュウウツという音をたてて槍は溶け、地面に溶けた鉄がぽたぽたと落ちた。

その行動を不可解に思ったミノイがニコールに問うた。

「なぜ綱吉くんは、私たちを庇ったのですか？」

「…綱吉くんが、アロツチとスコツチを元に戻してくれるのを手伝ってくれるんだ」

ミノイは目を見開いて驚く。

状況を把握していないミノイにニコールがすべて話した。

「まさか、それは、本当なのですか？」

「ああ。」

静かに、だがはっきりと答えたツナを見て、ミノイはしばらく言葉を失った。

ミノイもニコールたちと同様に信じられなかった。

ニコールたちが嘘を言っているはずはない。

それはわかる。

でもなぜ敵を救おうとするのか、それがいまいちわからなかった。

「…本当に、不思議な人ですね…綱吉くん」

「？」

ツナはその言葉の意味がわからず首をかしげる。
そんなツナに、ミノイはただ笑いかけた。

(まったく、考えていることがわからないですね…。)

敵を助けるなどどうかしている。

ましてや自分を狙う敵を。

正気なのだろうかと疑ってしまう。

だが、ニコールたちの話を聞き、ツナを見て、ミノイはなんとなくだが理解した。

ツナの優しさを。

なんて、気持ちがいいのだろう。

なんて、心強いのだろう。

なんて、優しいのだろう。

なんて、美しいのだろう。

小さな大空に、ミノイは笑いかけた。

標的56 オーラの正体（前書き）

む、骸が沢山喋ってます！

標的56 オーラの正体

無、とは何とも恐ろしいものだ。

無表情。

無感情。

無神経。

無気力。

例をあげればいくらでもでてくる。

無とは、何も無いこと、存在しないことをあらわす。

それがどんなに恐ろしいことか。

わかる人は少ないだろう。

身の回りには有の方が多い、と人間は思い込んでいるからだ。

有るものばかりに目を向けて、無いものには気づかないのだ。

有るものと比べて、無いものに気付く。

無を認識するにはその方法しか知らない。

なんと愚かなものだろう。

無に慣れていない人間は無を恐れる。

有が当たり前となっっているからだ。

無に意味は、あるのだろうか？

人間がその答えを見つけることができるのは、いつになるだろう。

人間が恐れる無。

それにツナたちは遭遇していた。

人間としての表情や感情を無くした双子。

その姿はなんとも不気味。

目を背けたくなるほどの。

だが、それは叶わない。

救わなければならぬ。

いや、救いたいのだ。

たとえ敵であろうとも、助けたい。

ツナはそう思っていた。

「消えろ、消えろ、消えろ」

「やめろ、やめろ、やめろ」

操り人形の如く同じ言葉を繰り返す。
ホラー映画を思わせるような姿だった。

双子から発せられるどす黒いオーラがツナたちを襲う。
それを個々の技でかわしながら、全員戦っていた。
トンノは動けない獄寺たちをかばっている。

「なんででしょうか、このオーラは」

「極限に黒いぞ！一体なんなのだ!？」

骸は六道輪廻で、了平はフットワークで攻撃をかわしていた。
どす黒いオーラからは殺気が漂い、ぴりぴりと肌が痛む。

「この正体を突き止めてみましょうか。……その大きな鳥。」

「…もしかしなくても、僕のことだよね」

骸が“その大きな鳥”と呼んだのはトンノのこと。
トンノはため息をついた。

“焼鳥”といい、“その大きな鳥”といい、ろくな呼ばれ方をさ
れない。

「僕をあのオーラから庇いなさい」

「…は？」

何を言っているのだろうかこいつ。とトンノは骸を見た。攻撃をかわすのが疲れたのか、飽きたのか。意外にも失礼なことを思うトンノである。

「…どういうこと？」

「そのままの意味です。」

「なぜ？」

「今からこれで正体を確かめるからです」

骸は小さな匣を取り出し、リングに炎を燈して注入した。藍色の炎を纏って現れた霧フクロウのムクロウに骸は命令する。

「ムクロウ、カンビオ・フォルマ形態変化」

命令を受けたムクロウは光を放ち、魔レンズへと姿を変える。それを持ち、骸は双子の放つオーラを見た。

その間にもオーラは殺気を纏って次々と襲ってくるが、トンノが炎でかわしていた。

「…あのマリネのいう女といい、このオーラといい……なんていうマフィアなんでしょうか」

レンズをのぞきながら骸が呟いた。

その顔は、呆れたような感じの表情だった。

(本当に…何があったのでしょうか。この人間…生き物たちに)

骸はムクロウを元に戻し、毒蛇で攻撃を食い止めているミノイに話しかけた。

「そこの長髪のあなた。ちょっといいですか？」

「…なんでしょうか？」

ミノイは毒蛇をさらに増やし、骸を見た。

「あなたたちは…何者なんですか？」

「…どういう意味ですか？」

「あなたたち、正体は…」

骸がそう言いかけた瞬間、骸を狙うようにいくつもの槍が飛んできた。

それを三叉槍でかわした骸は双子を見た。

「消えろ、消えろ、消えろ」

「やめろ、やめろ、やめろ」

「おや、無表情で無感情なはずなのに、そんなに言われるのが嫌ですか？」

双子が集中的に骸へ攻撃を仕掛ける。
骸も負けじとスキルを発動させて対抗する。

「なんとも、執念深いと言つのでしょうか。正体を知られたくないという気持ちで魂自体にこびりついているのでしょうか？
…ああ、“魂”などあなたたちには合わない言葉でしょうね」

「…どひいっ、こつです？」

ミノイが眉をひそめて問う。

手が、腕が、唇が、少し震えていた。

「あなたたちの場合、“魂”ではなく“怨念”とでも言いましょ
うか」

「知って…いるのですね」

「ええ。あなたたちが何なのかも」

骸への攻撃がさらに激しくなる。

すでに他方への攻撃は薄れ、攻撃を受けているのは骸だけのようだ。

「…こんな強い力が出るとは、かなり怨念があるようです…ね」

骸が冷や汗を垂らした。

双子の攻撃はあまりにも強く、スキルを発動しても辛い。

「大きな鳥、なにをしているのです」

「僕だつて精一杯…！」

トンノは言葉をつまらせながら答えた。

炎でオーラを弾くが、あまりにもオーラが強力すぎて対処できてい
なかった。

「消える、消える、消える」

「やめろ、やめろ、やめろ」

ゴオオオオオオオオツ

どす黒いオーラに加え、爆風までもが骸を襲う。骸は踏ん張って足を地面に固定する。が。

「っ!」

一瞬の隙が生まれ、そこを狙ってオーラが放たれた。間に合わない、と骸は歯を食いしばった。

ボウウウツ

本当にそれは一瞬のこと。

目の前を、オレンジの炎が包み込む。

オーラから骸を庇うように。

「…沢田、綱吉」

「大丈夫か？」

ツナはまっすぐと骸を見つめて言った。
ああ、しまった。と骸は思った。

一瞬でも諦めてしまった自分が悔しい。
目の前の少年は、全く諦めなかったのに。

「…沢田綱吉」

「何だ？」

「あのオーラは、危険なものです。あれに触れたら…」

シュツ！ シュツ！ シュツ！

骸の言葉を、またもや双子が遮った。
無数の槍が骸を狙う。

三叉槍がキンキンと甲高い音を鳴らす。

「あの、オーラは…」

「…っ骸！」

目の前にはオレンジの炎…ではなく、少年が腕を広げていた。

骸は目を見開いた。

まさか、まさか。

ジュウウウウツッ！

「…つつ！…！！」

少年が、黒に触れた。
黒が、少年に触れた。

ふらりと傾く小さな身体。

「っ沢田綱吉！…！！」

骸は少年の名を呼んだ。
彼にしては珍しい大きな声で。

「…綱吉くん！？」

ミノイたちが慌ててツナに駆け寄る。
ツナは苦しそうに荒い呼吸を繰り返していた。
身体が小刻みに震えている。

「もろにあのオーラを喰らうとは…」

「どういうことだ、骸」

リボーンがツナの顔を見ながら聞いた。
その表情は深刻そのものだった。

「あのオーラは…双子の“怨念”、僕たちでいう“魂”です。双子のすべての恨みや怒りが含まれている。そんなものに触れたら…」

骸が言葉にするのを躊躇ったが、囁くように言い放った。

「…精神が、壊れてしまう」

その一言で、全員が言葉を失った。

誰もが、頭が真っ白になってしまった。

「…なんだこれは」

静寂の中にぼつりと咳かれた声。

リポーンはツナを見て絶句した。

首に、左の二の腕に、不吉な痣が浮かび上がっていた。

黒い、鎖の痣が。

閉じられたまぶた。

その奥に真つ暗闇な世界。

大空が閉じ込められた。

ミシリ ミシリ ミシリ ミシリ

なにかが音をたて、崩れはじめた。

標的56 オーラの正体（後書き）

骸一、活躍しすぎ）、・・、）
ツナがあんま喋ってないよ！！

とうとう、謎が判明しはじめましたね！
わたしがわくわくしちゃってます！

読んでくださってありがとうございます！

標的57 移行

「ツナ、ツナ！」

「綱吉くん！」

何度も何度もツナに呼びかける。
しかし応答はない。

ツナは骸を庇い、双子のどす黒いオーラをまともに喰らってしまったのだ。

荒い息が薄れてきた。

顔色も悪い。

冷や汗がたらりと垂れる。

「呪いも進行してるな…なんでいきなり進行が早まったんだ？」

リボンがツナの鎖のような痣を見て言う。

こんなにいきなり進行が早まるなんておかしいのだ。

「もしかして…」

「なんだ、骸」

「…おそらく、僕の推測ですが…あの双子のオーラの作用だと思います」

「…どういことだ？」

リボーンが問いかけると、骸が深刻な表情で説明しはじめた。

「“呪い”には怨念が含まれているでしょう。それが双子のオーラ、つまり“怨念”と共鳴してしまったのかも知れません。それで進行が早まってしまったのでしょうね…。」

「…なるほどな。かなり危ないっていうことが」

リボーンは苦しむツナに目を見遣る。

（この苦しみ方は、呪いじゃねえな…。だとすると、双子のオーラが原因か…。）

帽子を深く被り、リボーンは表情を隠した。

今自分はともひどい顔をしていると思ったのだ。

不安と焦燥が滲み出た表情をしていると。

「…ツナ。」

かすれるほどの小さな声で名前を呼んだ。

(…ツナ。)

ツナ。

ツナ。

…ツナ。

「…う、うう……」

びくりと指先が動く。

小さなうめき声を上げて、ツナは目を覚ました。

だが、視界は真っ暗。

ここがどこなのかもわからない。

あたりを見回しても、なにも解決しなかった。

「えっと、オレ確か…骸を庇って……」

なんとか状況を把握しようと思いを失う前までの記憶を探る。
いつのまにやら、ハイパーモードは解けていた。

「…双子のオーラが当たって…うう…それが原因…かな？」

ツナはなけなしの知能をフルに使い、今の自分がどんな状況かを理解した。

双子のオーラに当たった。

それはわかる。

そのせいで気を失った。

それもわかる。

だが、ここがどこなのかはわからなかった。

「……………」

「え？」

静寂な黒の世界に小さな声。

確かに聞こえた。

聞き間違いではないだろう。

ツナは耳をすまし、声を待つ。

気のせいではないと、なぜか思ったのだ。

「…よ……ね……」

ときれときれの声は、ツナの先方から聞こえる。

チカッ　チカッ

声のする方向を見ると、なにかが小さく輝いていた。
ツナを誘うように。

チカチカと瞬いている。

ツナはふらりと、自然とそちらへ向かっていた。

ためらいはない。

ただ、行かなければならないという気持ちになったのだ。

行かなければ、後悔する。

ツナの超直感がそう告げていた。

ゆっくりと瞬く光に近づいていく。

そして、ゆっくりとツナの姿が消えていった。

あの頃僕らは真っ白で
ただの普通の子供だった

あの頃僕らは真っ暗で
ひどく醜い子供になった

「うわああああ！！」

ガサガサガサガサガサガサッ

ツナは垣根に墜落した。

地面じゃなくてよかった、と思う。
打ち所が悪ければ死んでいたかも知れない。

だが背中から落ちたため、背中は痛むし枝がひっかかるせいで引っ
かき傷ができてしまった。

「いつてて…。なんなんだよもう！」

垣根から退き、服についた葉っぱや汚れを手ではたいた。

瞬く光を追って歩いていたら、突然落ちたのだ。
最初に見えたのは、綺麗な大空だった。

「…誰かの庭？」

きよろきよろと周りを見渡すと、広い庭に大きな家、沢山の人が楽しそうに会話をしている。

ツナの姿は見えないのだろうか、誰もツナに気付かない。

「まあ、あなたたちが双子さん？」

ひととき甲高い声がツナの耳に届く。

声の主は綺麗に着飾った貴婦人だった。

そして、その人の目の前にいる小さな子供は…。

「んなああああ！？…まさか…嘘だろ！？」

先程の叫び声よりも大きな声。

姿が見えなくてよかっただろう。

もしも姿が見えていたならば、どうなっていたことか。

それはさておき。

ツナが驚愕した理由。

それは貴婦人と会話をしている子供たちだった。

「うそ…あれって…」

信じれないが、事実。

間違いなく、事実。

「…アロツチと…スコツチ…？」

ツナよりも幼い二人の子供。

姿は小さいが、確かにあの双子だ。

同じ身長、同じ顔。

なぜ幼い双子がいるのだろうか。

あの二人は先程までツナたちを襲っていたはずだ。
幼い姿ではなく、青年の姿で。

何が起きているのかさっぱりわからないが、ツナは双子の様子を見ていた。

すると、貴婦人がにつこりと笑って隣にいた夫であろう男に話しかけた。

「ほんとにかわいいわね、アロッチくとスコッチくん」

「ああ、双子ってこんなにも似てるものなんだな。さて、どちらがどちらなのかな？」

男がふむ、と顎に手を当てて双子を見比べる。

「そついえばそつね」と貴婦人が双子に聞いた。

「あなたはどつち？」

お兄ちゃん？弟さん？

同じ顔だからわからないわ。

…いいわよね！

ふたりで一人のようなものだものね！」

くすくす笑って貴婦人が言った。

双子はただ黙って貴婦人を見ているだけだった。

(…て、)

「え？」

聞こえた声は、幼いものだが確かに双子のものだった。
だがそれも他人には聞こえていないらしい。

(…まただね、アロッチ)

(…そうだね、スコッチ)

二人だけの会話、いわゆるテレパシーがツナにも伝わってきた。

(…そうやって、ごまかして、
いつだって僕を、僕を、僕らを
ひとまとめにして扱った。

みんな、みんな、みんな。

誰だって、僕らを

一人として見ないんだ。)

ふと、双子の表情が変わる。

寂しそうな、憎んでいるような、複雑な表情だった。

「……………」

ツナはただ双子を見ているだけだった。

あの頃僕らは真っ白で
ただの普通の子供だった

あの頃僕らは真っ暗で
ひどく醜い子供になった

標的58 幼い双子(前書き)

短いですが、結構重要な話です！

標的58 幼い双子

あの頃僕らは真っ白で
ただの普通の子供だった

あの頃僕らは真っ暗で
ひどく醜い子供になった

「十…代目…！」

「騒ぐな獄寺。お前はじっとしている」

「ですが…リボンさん…！」

獄寺が身体中の痛みをしかめながらも、ツナの元へ寄りかかるとす
る。

傷が悪化してしまうだろうとロンジが慌てて獄寺を制止している。

負傷中の山本もリーダーも、そして結加もツナのことを心配してツ
ナに近づこうとしている。

「ツナ…は、大丈夫なのか？」

「動いてんじゃねえぞ山本。ツナは……まだわからねえ」

大丈夫だ、と言いたいのだが言えなかった。
まったく大丈夫ではないのだ。

息はどんどん浅くなり、肌の色も悪い。
痙攣するような震えは止まらずに苦しさのため汗が垂れる。
そしてゆっくりと、ゆっくりと肌が冷たくなってきた。

これはかなり危険だ。

なんとかしなければならぬ。

しかし、どうすることもできない。

「消えろ、消えろ、消えろ」

「やめろ、やめろ、やめろ」

双子の攻撃は衰えることはない。

次々とリボンたちに攻撃を仕掛ける。

それを了平やニコールたちが食い止めていた。
ツナのことを心配しつつも。

「…負けんじゃねえぞ、ツナ」

そっと小さなりボーンの手がツナに触れた。

ツナはぽつんと佇んでいた。

その瞳は二人の小さな子供を捕らえていた。

「今の…どういうこと？」

突然頭に響いた声に混乱する。

今の声はあの双子のものだ。

それは間違いない。

(…: そうやって、ごまかして、

いつだって僕を、僕を、僕らを

ひとまとめにして扱った。

みんな、みんな、みーんな。

誰だって、僕らを

一人として見ないんだ。)

重なった声。

それは寂しげに、苦しげに。

(…さっきのおばさんが言ったことと関係があるんだ)

おばさん、とは貴婦人のことだ。

ツナは先程貴婦人が言っていたことを思い出す。

(あなたはどっち？)

お兄ちゃん？弟さん？

同じ顔だからわからないわ。

…いいわよね！

ふたりで一人のようなものだものね！)

「……………」

無神経な貴婦人の言葉。

ツナはだんだん、双子の言葉の意味を理解する。

ガサッ

その音でツナは考えることをやめる。

見ると、双子がこちらへ歩いてくるのだ。
二人はうつむいている。

(わ、わ、わー!どうしよう!こっちにくるよ!)

わたわたとツナは慌てた。
だがすぐに「あ。」と間抜けな声を発した。

「…そういえば、オレの姿は誰にも見えてないんだっ…」

ツナは苦笑いをしてため息をつく。

「焦った…。見つかったらどうしようかと思」「お兄ちゃん、誰
?」「」

ぴたりとツナの動きが固まった。
まるで石になったかのように。

まさかそんなことはあるまい、とツナは視線を下にやる。

だが、その双子の瞳にはツナがしっかりとうつっていた。

「「お兄ちゃん、誰?」「」

「んなあああああああ！！？」

ツナは驚愕した。

これ以上はないというほどの大声を出した。

双子は驚きもせず、首を傾げてツナを見ている。

「え、え、な、ど…どうして！？君たちオレのこと見えてるの！？」

「もちろんだよ」

「でも他の人には」

「「見えてないみたいだけどね」」

双子は気づいていたのだろうか。
ツナが他人に見えないことを。

「え…えつとー…」

「「お兄ちゃん」」

双子と呼ばれ、両手を小さな手に握られる。
そしてぐいぐいとひっぱられた。

「わっ！ど、どうしたの！？」

「お兄ちゃん、遊ぼうよ」「

子供にしては強い力で引つ張られる。

ツナは逆らうこともせず二人に連れられていく。

子供の相手は慣れているのだ。

こういうときは一緒に遊んであげたほうがいいということを知っている。

二人に連れられたのは人気のない建物の裏だった。

結構走ったため、少し息があがっている。

「ここはね」

「僕らの」

「二人だけの」

「秘密の場所なんだ」

ね、と二人は顔を見合わせる。

「なんで、オレをここに？」

二人だけの秘密の場所に、なぜ自分を連れて来るのだろうかとツナ

は不思議に思った。

すると二人はきよとんとしながら言った。

「なんかお兄ちゃん」

「他の人たちと」

「違う気が」

「したから」

「違う…気？」

双子はこくりと頷く。

違う気、とはどういう意味か。

(凡人だから…とか？あ、馬鹿っぽいからとか？)

なんてツナは考えていた。

もちろん双子はそんなつもりで言ったわけじゃない。

「お兄ちゃん、なんか」

「とても、あつたかいんだ」

「ぼかぼかして、なんか」

「とても、落ち着くんだ」

満面の笑みがふたつ、ツナに向けられる。

その笑みはツナが以前見た双子の笑顔とは違った。

純粹で無垢で

汚れを知らない笑顔。

そんな二人の笑顔ははじめてだった。

あの頃僕らは真っ白で
ただの普通の子供だった

あの頃僕らは真っ暗で
ひどく醜い子供になった

そんな子供にしたのは、
大人たちだ。

標的59 それぞれの存在

鳥が数羽、大空を飛ぶ。
小さな小さなその鳥は、
遠いどこかへ消えていった。

「ねえ、お兄ちゃん」

「聞いてもいい？」

壁にもたれながら、両端を双子に挟まれて聞かれた。
覗き込む双子の瞳がツナをまっすぐ見ている。

(…あ。)

ツナがあることに気づいた。
とても小さなことなのだけれど。

「…お兄ちゃん？」

「…あ！ごめんね！何だった？」

双子に呼ばれ、慌ててツナは謝る。
「いいよ」と双子は笑ってツナに聞いた。

「お兄ちゃんは僕らの」

「名前は知ってるの？」

「うん。アロッチとスコッチでしょ？」

そう言うと双子はにっこりと笑う。
だが、先程の笑顔とは違った。

作ったような、偽りの笑顔だ。

「お兄ちゃんは僕らが」

「どっちがどっちか」

「わかるのかな？」

突然そう聞かれ、ツナは驚いた。
双子の態度も、笑顔もかわってしまったからだ。

「いきなりなんでそんなこと？」

「ただ、なんとなくわかるかなって思ったんだよ」

(…どうせ、今までの人たちとは違って、このお兄ちゃんも同じなんだよ。…僕らを、)

きよとんとしているツナを見ながら、双子は思う。

(僕らを一人として見ないんだ。)

双子の哀しい声は、双子にしかわからない。

ツナは双子がそのようなことを考えているなんて知らない。

「「わかる？お兄ちゃん」「

「え…っ」とー」

双子はツナの答えを待つ。

ツナの顔をしっかりと見つめながら。

「えっと、左にるのがアロッチで…右にるのがスコッチ…だよ
ね？」

しばらくの沈黙。

ただ風が吹くだけ。

ただ木々が揺れるだけ。

ただ雲が流れるだけ。

ただ、大空が広がるだけ。

「…あれ、ちがった？」

ツナは黙り込んでしまった双子を見て慌てた。
双子はうつむいて、なにもしゃべらないのだ。

「「…う」「」

「え？」

小さなくぐもった声。

次の瞬間、鼻をすすする音が聞こえた。

双子が、泣いていた。

「え、え、えー!？」

泣き出した双子を見て、ツナがおろおろとする。

「え、間違ってた!？ごめん、ごめんね!」

「「ちがつ、くて……」」

しゃくりあげながら双子は言う。

小さな手の甲で涙をぬぐう。

「…はじめ、て…だったんだ…」

「僕、らを…見分けられた…人は…」

とぎれとぎれに双子が言った。

だが次々と涙が流れる。

「…はじめて?なんで?」

不思議そうな顔をしてツナが続けて言う。

「二人は似てるけど…それぞれ違うじゃないか。 “二人でひとつ”
って言っても、それぞれが一人の人間でしょ?」

さも当たり前のように言うツナを見て、双子は呆気に取られた。

…今まで、誰も僕らを、一人として見なかった。

…見ようとしなかった。

“二人でひとつ”って言ってまとめて片付けたんだ。

僕らのそれぞれの存在を、認めてはくれなかったんだ。

…でも、この人は…このお兄ちゃんは、

……認めて、くれたんだね。

「お兄ちゃん、は」

「なんで、わかったの？」

「僕ら、が」

「どっちがどっちか、って」

たどたどしいしゃべり方で双子は問う。

その質問にもツナは当たり前のように答えた。

「二人の目、違うだろ？」

「…え？」

「だから、二人の目って色が違うんだよ」

意外な答えに双子が啞然とする。

口をぱかりと開いたまま、ツナを見ていた。

「アロッチが青、スコッチが少し薄い青…でしょ？」

二人のまぶたを指先で優しく撫でながらツナは笑った。
その動作はまるで……。

（お母さん、みたい、だ。）

双子は目を閉じて思い出す。

優しい優しい、母の記憶。

「アロツチの目は青で、スコツチの目は薄い青。お母さん、私たちの目の色が好きなのよ」

「でもお母さん、みんなそんなこと気づかないよ」

「でも、お母さんは知ってるわ。あなたたちは似てるけど、アロツチとスコツチって言う一人ずつの男の子でしょ？」

大丈夫、お母さんはわかってるわ。

それぞれのあなたたちが好きなのよ……………」

優しく笑う母。

優しく二人の頭を撫でる母。

…その人は、亡くなってしまった。

元来、身体が弱かったのだ。

父親はいなかった。

二人が生まれてまもなく病気で亡くなったらしい。

唯一二人を一人一人の人間として見てくれた母親。

その母親が亡くなってから、二人は二人でひとつと片付けられてきた。

誰も、双子をアロッチとスコッチとして見てくれなかったのだ。

だが、ツナは違った。

双子をアロッチとスコッチとして、見てくれた。気づいてくれた。

はじめてだった。

「あと、もうひとつ」

「…え？」

まだあるのだろうかと双子はツナをまじまじと見つめた。

「アロッチは泣くときに声を出さないけど、スコッチは唸ってるんだよ」

にっこりとツナは笑う。

そんなこと、自分たちでも気付かなかったのに。

さつきから驚かされてばかりだ。

「お兄ちゃん」

「名前は？」

泣いた後特有の声で二人は尋ねる。

「…ツナ！沢田綱吉！」

ツナが大きな声で言うと、双子はにっこりと笑った。

「……綱吉くん」

そう名前を呼ばれた瞬間、ツナは光に包まれた。
あまりの眩しさに目を開けることができない。

ふわり、と身体が優しく抱きしめられた。
両端にいた、アロツチとスコツチに。

「……ありがとう」

「綱吉くん……」

その声はぬくもりと共に消えていった。

標的59 それぞれの存在（後書き）

明らかにされましたね！

お疲れ様です（．．．）

標的60 おかえり

黒が、闇が

溶けていく。

掻き消されていく。

大空を染め、

大空に飲み込まれ、

大空に包容されて。

「…っ……………」

「…なんだ？」

全員が双子の異変に気付く。

ぴたりと、双子の動きがとまった。

同時に攻撃もとまった。

双子は唸り声をあげながらその場につづくまる。
頭を抑え、苦しそうな顔をしている。

「ど、どうしたんだ？あいつら…」

「アロツチ、スコツチ！どうしたのよ！？」

ピンツとマリネが戸惑いを見せる。

それもそのはずだ。

先程の威勢はどこへやら。

双子から発せられるどす黒いオーラの勢いが衰えはじめていたのだ。

「どづいつことだ？」

リボンもこの事態には疑問を抱く。

何故突然双子の動きがとまったのか。

何故突然双子のオーラが勢いをなくしたのか。

何故だ？

「……っっ」

「!?!、ツナ!?!」

全員の視線が双子からツナへとうつされる。
ツナの意識が戻ったのだ。

「ツナ、ツナ!?!」

「綱吉くん!?!」

身体をゆすつて呼びかけると、ツナは咳き込んでゆっくりと目を覚
ました。

「……あ、れ?…みんな…どうしたの?」

まるで寝ぼけているかのように問うツナ。
全員は呆気にとられた。

ツナはあくびをして大きく伸びをした。
仕舞いには「眠い」と言うのだから開いた口はふさがらない。

「ツナ、おめえ……」

「…あ！そつだ！」

ころころと変わるツナの態度。
もはや驚かすにはいられない。

ツナはA B型なのだろうかと疑わずにはいられない。
これではツナの一人漫才ではないか。

そんなことを考えている仲間たちをよそに、ツナはうずくまっ
ているアロッチとスコッチの元へと駆け寄る。

だが身体はふらつき、足元はおぼつかない。
何度も倒れそうになりながらも、ツナは双子の元へたどり着いた。

「アロッチ、スコッチ！！」

ツナは二人の肩を掴んで名前を呼ぶ。
だんだんと記憶が覚醒しはじめる。

(この二人は…苦しんでんだ。)

ずっと、ずっとずっと。

長い間、存在を認めてもらえないという悩みを抱えながら。

誰にも気付いてもらえず、認めてもらえずに。

「…ずっと、苦しんでたんだ」

ぼつりとツナがつぶやく。

双子の肩を掴む手に力がある。

「ずっと、ずっと…辛かったんだ」

ツナの声がかすかに震えている。

リボンたちは静かにツナを見ていた。

「長い間、二人だけで…辛かったんだよね？」

ふわりとツナの両手が双子を包み込む。

小さな身体が大きな身体をふたつ、優しく、優しく包み込む。

リボンたちは啞然としていた。

「もう、大丈夫だから」

ツナが二人に優しく言った。

にっこりと、あの時と同じ笑顔を見せながら。

双子が、ゆっくりと顔をあげる。
その瞳は、

青と、薄い青。

「」
…綱吉くん…「」

双子がツナの名前を呼ぶ。
青の瞳が揺れる。

そして。

笑みがこぼれた。

笑みが双子に戻った。

子供のような、優しい笑顔。

「」
…ありがとう「」

二人の目から涙がこぼれ落ちる。
涙の流れ方までもが二人一緒だった。

それがおかしくて、ツナはぷつと吹き出してしまった。

笑い出すツナを見て、双子もつられて吹き出した。

「…どづいづ、こと？」

「アロッチとスコッチが…元に戻ってらあ…」

「うそ…なんで…」

「なぜでしょうか…？」

上からニコール、ビンツ、マリネ、ミノイ。

四人は立ち尽くしたままただじつと双子とツナを見ていた。

双子が元に戻った。

ツナも目が覚めた。

どちらも喜ばしいことなのだが。

頭が状況を把握しきれていなかった。

「「あ。」」

双子が四人を見て声を発した。

四人はびくりと肩を動かした。

「ニコール、ビンツ……」

「マリネ、ミノイ……」

ツナが双子を支えながら立ち上がる。
そしてゆっくりとリボンたちの元へと歩み寄る。

「……よかったね、みんな」

満面の笑みでツナが四人と双子に言う。
双子たちは思った。

大空とは、なんて……

……なんて、優しいのだろう。

優しいだけではない。
強いのだ。

「…ありがとう、綱吉くん」「

再びツナに礼を言うと、双子は四人と向き合った。

「…あ、あのさ」

「…え、えっと」

「…………ただいま」「

双子は照れ臭そうに笑った。
いつもの、アロッチとスコッチだった。

ニコールも、ピンツもマリネもミノイも、いつもの笑顔で言った。

“ おかえり。”

ぐらりと、黒がかたむいた。

標的60 おかえり(後書き)

おかえり~~~~~(*´、*)ノ

わたしも心底安心しました。

あんな姿の双子を書くのがつらくて…(´・`・´)

はー、片付いた!

まだあるんですけどね!

あ、そう言えば、

今回の話で標的60を迎えました!

60話ですよ!

正確に言えば61話目ですけど…。

そこは譲らずに(笑)

サイトに記念イラストでも飾っておきます(^o^)ノ

読んでいただきありがとうございます!

標的61 辛い過去と事実

もうすぐ もうすぐだ

もうすぐで望みが叶う

しかし 邪魔なものがいくつかある

それを消さなければならない

…そうだ その役を

譲ってあげようじゃないか

散っていく姿を共に見よう

さあ 手をとりなさい

「みんな…怪我大丈夫なの？」

「こいつら双子が随分と暴れちまったからな…大丈夫じゃねえだろ」

リボーンが周りを見遣る。

全員が怪我をしていた。

かなりひどいものようだ。

獄寺、山本、結加、リーダーは重傷。

了平や骸、雲雀も切り傷、かすり傷はもちろん、打撲やら捻挫などの怪我もしていた。

ニコールたちもまた然り。

双子は力を使いすぎて体調がよくない。

みんなボロボロだった。

「人の心配より、自分の心配したらどうだ？」

「え、だってオレなんかかすり傷とかばっかだし……」

「じゃあその伸びてる痣はなんだ」

リボーンに指摘され、ツナが自分の身体を見下ろす。

「んなっ！！！？痣が伸びてるー！？」

ツナは大声で叫んだ。
呪いが伸びていたのだ。

左のひじにまで痣が伸びている。
左手首にたどり着くまであと少しだった。

「どどどどどっしょっしょー！」

「さっさとウライラを見つけるしかねえだろ」

ウライラ、という名前を聞いてニコールたちが反応する。

ウライラはニコールたち、アツジョルナーレのボスなのだ。
そしてウライラはツナとボンゴレリングを狙っている。
ニコールたちもその内の一人なのだ。

「…僕ら、敵だったね……」

双子が苦笑いをする。

だが、その目は伏せられて苦しげな声を出した。

「…綱吉さんと戦いたくない！」

「アロッチ、スコッチ……」

「だって綱吉くんは僕らを救ってくれたんだ！敵なのに！…そんな綱吉くんを…裏切りたくなんかない…」

ふたつの拳が地面へとたたき付けられる。
その拳はかすかに震えていた。

「…オレもいやだなあ」

「…あたしも、いや」

「…私もいやですよ」

ピンツも、マリネもミノイも小さな声で言う。

「…僕だって、いやだよ…」

ニコールは悔しそうに歯を食いしばる。
アッジョルナーレの六人はうつむいて黙り込んだ。

敵である自分たちを、救ってくれた。
受け入れてくれた。
敵である自分たちに、優しく笑いかけてくれた。

そんなツナを傷つけたくはない。
苦しませたくない。

ツナの仲間を消したくはない。
ツナが哀しむから。

ニコールたちはすっかり敵意をなくしていた。
戦いたくはなかった。

「…ウライラ様に言えば、どうなるかな……」

「そりゃあ、殺されるでしょ?」

笑いを含んだ声。

その声に全員が振り向いた。

黒髪の男がいた。

あやしい笑みを浮かべて。

その姿にニコールたちは驚愕する。

「…ウライラ…様…」

「ニコールくん、どういふことですか？」

ウライラがニコールに問う。

ニコールはかたかたと震えているだけだった。

「綱吉くんを傷つけたくない？ 苦しませたくない？
敵意がなくなつた？
戦いたくない？」

「……………ふざけてるのかな、君達。」

一気にその場の空気が変わる。
ひんやりと冷たくなる。
鳥肌がたつほどに。

「毒気抜かれちゃって…なにしてるんですか。
せっかく怨霊としてさ迷っていた君達を救ってあげたのに、損した
かな？」

「どづいづことだ」

リボーンが睨むようにしてウライラに聞く。

するとウライラはリボンにしっかりと視線をあわせて答えた。

「ニコールくんたちって、実は死んだ人間なんだよ」

「…うそだ!？」

ツナが目を見開いて叫ぶ。

(だって…ここにいるじゃないか!生きてるじゃないか!)

ニコールたちは現に今、ここに存在している。

魂を持っている。

死んだ人間が生まれ変わらずに再び魂を宿すなどありえない。

852

「かわいそうな最期を迎えたニコールくんたちを、僕が救ってあげたんですよ。僕の力で。」

…まあ、ニコールくんたちの魂は、彼ら自身が持っていた“怨念”なんだけどね」

「…骸の言ってたとおりだな」

先程骸も、ニコールたちの魂は“怨念”だと言っていた。

彼らの力の根源も“怨念”だと。

「彼らはそれぞれ同時刻に不慮の事故で亡くなってしまった人間で、

あまりにも強い怨念を持ってたから怨霊となってしまうってさ迷っていたんです。」

「：僕らは、持っていた怨念を根源にして、ウライラ様に再び魂を宿らせてもらったんだ。：条件つきでね」

「条件？」

ニコールの説明を聞き、ツナが疑問を問うた。

「：生き返らせてもらうかわり、ウライラ様の言うことを聞かなければならない。ウライラ様の計画を叶えるために動かなければならないって……」

「計画って、ツナとボンゴレリングを手に入れるやつか？」

「正解です、アルコバレ・ノのリボンくん。よく説明できましたね、ニコールくん。」

そう言うとウライラはツナたちの元へと歩きだした。

唯一動けるツナが立ちはだかる。
みんなを守るように。

「ニコールくんたちってかわいそうだよね。ほんとにかわいそうなの過去を持つてる」

だってさ、とウライラはおもしろそうに続けた。

「ニコールくんは母親の言いなりで自由なんて許されなかった子供。ピンツくんは重い病気で普通の人間とは違う姿だったから隔離されてた子供。」

マリネちゃんは親に捨てられた子供。

ミノイくんは望まれずに生まれてきて虐待を受けてた子供。

そして双子のアロツチくんとスコツチくんはそれぞれの存在をみとめてもらえなかった子供。

ね？かわいそうだよね？」

「…まさか、そんな……」

ツナはニコールたちの顔を見る。

ニコールたちは否定していなかった。

ただ悔しそうに、表情を歪ませているだけだった。

事実なのだ。

ウライラが言ったことすべてが。

「そんな彼らを哀れんで生き返らせてあげたのに、ひどいですよね。恩人である僕を裏切ろうとしている。…そんな、」

ぴたりとウライラの足が止まった。

「そんな人間、もういらないよ。」

低く、響く声はニコールたちを固まらせた。
石のように動けなくさせた。

「さようなら。」

そしてウライラは黒く長い杖をふりかざした。

ガキイイイインッ

なにかがぶつかる音。

その光景に全員が驚いていた。

「させない。」

ぐっ、と杖を握む手に力がはいる。

またたくのはオレンジの炎。

見つめるのはオレンジの瞳。

「…綱吉くん」

ニコールがツナの名前を呼ぶ。

それにツナが小さく微笑んで答えた。

「綱吉くん、何故彼らをかばうのです？もういらぬ人間だよ？」

「それはお前の勝手な考えだ。生きるか死ぬかを決めるのはあいつらだ。…お前なんか選ばせない。」

オレンジの炎がウライラの杖をはじく。

ウライラは一步下がってツナを見つめた。

「…彼らを処分するのは、君を手に入れてからにしようか。」

「そんなことは、させやしない。」

一段とオレンジの炎が揺らめく。

ツナの瞳はまっすぐウライラを捕らえている。

「必ず手に入れてやります」

ウライラはにやりと笑った。

黒とオレンジ。

闇と大空。

勝つのは闇か、大空か。

それはまだ誰にもわからない。

標的61 辛い過去と事実（後書き）

ぎゃあ！ウライラ来た！

空気化したウライラが復活！

でもウライラ好き。

自分のつくったキャラですから。

そういえば、怪我を負っている人たちの中に、名前がでてこなかった人が数名いますよね。

お気づきですか？

それはただの入れ忘れじゃなくて、ちゃんと意味がありますから！

ちなみにロンジは枠外です。

あの人は治療係

読んでくださってありがとうございます！

標的62 希望消失

「必ず手に入れやります」

不気味な笑みを浮かべるウライラ。
その存在自体が不気味だった。

全員が息をのんでツナとウライラを見つめる。

シュッ

先に動いたのは大空、ツナだった。
炎を使つて高速で移動し、ウライラの背後へとまわる。

ガキイーンッ

「その炎の力はすばらしい。是非僕のために使わせていただきたい」

「断る。」

拳をウライラの杖によって止められる。
すぐにツナは空中へと移動した。

「では、次は僕から」

そう言うとウライラは杖をコツンと鳴らして地面に落とす。すると、地面から大量の水が吹き出した。その水はツナだけを狙って襲い掛かる。

「…あれは幻覚か？骸」

「……いいえアルコバレーノ。…あれは……」

「本物、だよ。リボーンくん、骸くん」

ウライラがリボーンと骸の方を向いて言う。

「骸くんたちが使う幻覚とか、有幻覚とかじゃないんです。…試し
てみますか？」

口許がくにやりと歪む。

あの骸でさえもその笑みに怯んだ。

「よいしょっ」

ウライラは指先をリボーンと骸に向けた。

バシャアアアアッ

「リボーン、骸!!」

ツナが慌てて二人の名前を呼ぶ。二人の元へ行こうとするが、ウライの水が邪魔をして近寄れない。

「…まったく、何て言う人だ」

地を這うような骸の声。

その声と同時にウライの水が弾かれた。

そして骸とリボーンを庇うように作られていた鳶のようなものがガラガラと崩れ落ちる。

骸の有幻覚だった。

「あなたみたいな人がいるから…この世の中はだめなんですよ…この、腐れマフィアが!」

骸の身体がふらりと傾く。

だが骸はなんとか自分で身体を支え、倒れずにすんだ。

しかし、息は荒く苦しそうだ。

「だめでしょう、骸くん。弱っているのに力を使つては。」

大丈夫?とさも心配しているかのように声をかけるウライラだが、態度は全く心配している気配はない。

「お前の相手はオレだろ！」

ツナが不意をついてウライラに蹴りを入れる。

蹴りはみねうちにヒットし、ウライラの身体がよろめいた。

「…そうでしたね。ほつたらかしにしてすみません。…でも、綱吉くん」

ウライラの冷たい瞳がツナの姿を捕らえた。

「綱吉くん、実は疲れてるんでしょう？ニコールくんと戦って、アロツチくんとスコツチくんの相手までして…。」

今、お腹の傷はかなり痛いはずなんだけど、平気なの？」

ツナはその問いに答えない。

否定できないからだ。

ニコールとの戦闘、双子との戦闘の疲労に加え、喰らった怨念の毒がまだ体内に残っている。

その上、完全に塞がっていない腹の刺し傷が先程からズキズキと痛みを増していた。しかも呪いも地味に痛みを発している。

この状態で戦うのはかなりきつい。

ツナの頬を汗が一滴垂れた。

「痛みを我慢して戦うのはあのお仲間のため？…やめなよ、そんな無断なこと。」

ウライラがあやしく目を細める。
逆にツナの目が大きく開かれた。

ズキン　ズキン　ズキン　ズキン

痣の痛みが増した。

地味なものから強烈なものへ。

特に、左腕。

ツナは左腕を抑えて痛みに耐える。

「あんなお仲間のためなんかじゃなくて、僕のためにその力を使ってくださいよ。」

「…っ誰が、お前…なんかのために…」

ツナはとぎれとぎれの言葉を発する。

その間にも痛みはどんどんツナを襲う。

「綱吉くん力は僕のために生まれたものさ。それ以外のなんでもない。」

とうとうツナは地面に倒れ伏した。

息をつめて痛み抵抗するが、それは意味のない行動だった。

ゆっくりとウライラがツナに歩み寄る。

「…来る…な」

「綱吉くんが素直に僕の言うことを聞いてくれればこんなことにはならなかったのに……」

ツナがオレンジの瞳でウライラを睨むが、ウライラにはまったく効いていない。

むしろおもしろそうに見下ろしている。

「もうニコールくんたちは必要ない。代わりに君を仲間を迎えいれます。」

「…断る！オレは、お前、の…仲間になんか…っ」

苦しませてまなお、拒否をするツナを見ていたウライラは、小さなため息をついて杖を構えた。

「A contract start」

ウライラが呪文を唱えはじめる。

杖は倒れているツナの頭の先に立たされた。

「The name of the thou is Tsuna
Yoshi Sawada」

「…この呪文、まさか！」

ニコールたちが慌てだした。

ウライラを止めるため、動けない身体を動かそうと必死にもがく。
だがその間にもウライラの呪文はつづく。

「I get a soul of the thou

The thou gives me a soul」

「…っ！！」

杖がビリリ、と震えはじめた。

ツナが苦しそつに顔をしかめる。

「Promise that you obey me」

「ツナ、逃げる！」

リボーンが叫ぶが、その声は届かなかった。

バアアアアッ

杖から闇が放たれた。

「. The spirit which is present
in words completion.

笑みを含んだ呪文が響き渡った。
放たれた闇が風で散っていく。

そこには、一人の少年が立っていた。

「ツナ!!」

「綱吉くん!!」

リボンたちがツナに呼びかける。
だが、ツナは反応をしめさない。

「…交わされて、しまったのか……」

ニコールが震える声で言った。

「そう。交わしちゃったんだよ。残念だったね。」

ウライラがツナの肩を抱いてにっこりと笑う。

ツナはびくりとも動かず、顔を俯かせているだけだった。

「…そんな……交わされてしまった……」

ニコール、マリネ、ビンツ、ミノイ、アロツチとスコツチは希望を失ったかのような瞳でウライラとツナを見ていた。

「さあ、綱吉くん」

ウライラがツナに声をかける。

ゆっくりと、ツナのまぶたが持ち上げられる。

その瞳に…光はなかった。

ボウツ！！！！

ツナの額から勢いよく炎が燃え上がる。

だがその色は…。

「…黒。」

リボーンはただ啞然としてその姿を見ているだけだった。

交わされて、しまった。

消えて、しまった。

奪われて、しまった。

大空が、闇に。

「…言霊が、完了してしまった。」

大空は闇に支配された。

標的62 希望消失(後書き)

わー！ツナー！（）
こらなにやってんだウライラ！
と自分でもつつこんでしまいました。

…おそろしい、ウライラめ。

ウライラとツナは言霊を交わしてしまいました。
途中で呪文が出てきましたね。
その解説を試みます。

A contract start .

- 契約開始。

The name of the thou is Tsunay
oshi Sawada .

- 汝の名は沢田綱吉。

I get a soul of the thou
.
The thou gives me a soul .

- 我は汝の魂を得る。

汝は我に魂を与える。

Promise that you obey me .
- 汝は我に服従することを誓え。

The spirit which is present in
words completion .

- 言霊完了。

てな感じですよ。

… 文法が間違ってたらすいません。

「馬鹿じゃねーのこいつ！」とか言いながらスルーしてください
笑)

読んでくださってありがとうございます！

標的63 絶望の大空

大空は無限だ。

限りなく広がっている。

地上から見上げたとき、その瞳に映るものが空。
時には青く、時には黒く、時には白く。
様々な色へと姿を変える。

無限を持っている大空はとても稀少なものだ。
それと同じように大空属性も稀少な人物。

大空を中心として人は動く。

大空がなければ人は動かない。

では、大空をなくせばどうなるのだろうか？

……消滅だよ。

「契約完了ー！。どう？この綱吉くん。すいいでしょっつ。」

にこにこと笑いながらウライラがツナの肩を叩く。
ツナは何も言わずにリボーンたちを見ていた。
その瞳に光はなく、ただ黒く、感情はなかった。

「そんな…言霊が…！」

「言霊ってなんだ？」

焦るニコールにリボーンが問う。

ニコールは瞳を揺らしながらも説明しはじめた。

「言霊…っていうのは、ウライラ様の力で成り立つ術なんだ。
ウライラ様に服従させるために交わされる契約のことで…、僕らも
その契約を交わしていたんだけど、ウライラ様がその契約を放棄し
たから、僕らはもうウライラ様に服従しなくても済むんだ。でも今
は綱吉くんが契約を交わしたから…」

「…ツナはウライラの言いなりってわけか」

珍しくリボーンが冷や汗を垂らす。

ニコールは静かに頷いた。

「だから綱吉くんはもう君たちの知っている綱吉くんじゃない。僕
のために力を使う綱吉くんになったんだよ」

「…綱吉くんがウライラ様のものとなってしまった今、僕らは………」

ごくり、と全員が息をのむ。

「死ぬしかない。」

全員が絶望に立たされた。
全員が大空を失った。

…それは、死を意味する。

「残念でした。僕の言うことを聞いていればよかったのに…かわいい
そうに」

くすくすとウライラが肩を震わせて笑う。

リポーンたちはなにもすることができずに歯を食いしばっていた。

「さて、早速綱吉の力を試してみましようか」

ウライラはツナの目線に合わせてツナに話しかける。

「では綱吉くん、あなたの力を見せてください」

「……………」

ツナは言葉を発することなく頷いた。

そしてリポーンたちに向けて掌をかざす。

ドオオオオオンッ

ツナの掌から発せられた真っ黒な炎は、リポーンたちの後ろの巨樹にぶつかった。

メキメキと音を立てて巨樹は燃えながら崩れる。

「…こんなツナの攻撃、見たことねえのな」

「十代目…どうして！」

山本と獄寺は驚くばかりだった。

守護者の中でも一番ツナと関わっている二人でも、こんなツナは見たことがなかった。

いつもは美しいオレンジの炎を纏って戦っていた姿は、今は別人のようだった。

瞳も炎も黒。ただの黒。

目をそらしたくなるほどの冷酷さだった。

「せっかくだから、綱吉くんに君たちの命をどうするかを任せよう。」

「…どっぴいっつとだ。」

「だから、綱吉くんは君たちを殺させてあげるっていつの。嬉しいでしょ？仲間に命を奪われて」

その言葉を聞いてリボーンたちが目を見開く。

仲間であるツナが自分たちの命を奪う。

仲間である自分たちの命がツナに奪われる。

今まで一度も考えたこともない事態に絶句した。

「そんなこと沢田がするはずではないか！」

「そうだよ。その小動物にそんなことできるはずない。」

「馬鹿だね君たち。綱吉くんは僕に服従する者となったんだ。僕の言うことならなんでも聞くんだよ」

了平と雲雀の否定をウライラはあっさりと切り捨てた。
そして無言のツナに話しかける。

「綱吉くん。目の前にいるのは僕の敵なんだ。…だからやっつけちゃってよ」

無表情でこくりとツナは頷き、グローブから真っ黒な炎を出してリボーンたちに襲いかかった。

「やめろ、ツナ！」

リボーンの叫びも聞かず、ツナは炎を放った。

ジュウウウウツ

真っ黒な炎が青い炎に掻き消された。
煙を立ち込めらせて青い炎も消える。

「…今のすっげえ効いたのな…っ」

山本の身体ががくと崩れた。
握っていた刀はただの竹刀へと戻る。

「山本、おめえ」

「まだ動けるかと思ったら、今の一撃でだめになっちまったぜ…ははっ、情けねえな」

息を荒くさせて頬を伝う汗を拭う。

これで完全に山本は戦闘不能となってしまうた。

そんなことも気にせず、ツナは次の攻撃を仕掛ける。
だが、ここで意外な人物がいきり立った。

「こらーバカッナー！！ランボさんをいじめんなー！！！！」

ランボがツナの攻撃に怒り、リングに炎を燈して匣を開匣させた。それはあまりにも意外なことで、リボーンたちは啞然としてランボを見ていた。

そしてあれよあれよという間にランボの匣兵器、牛井を形態変化カンビオ・フォルマさせてしまった。「…激しい一撃を秘めた雷電と謳われたランボウの盾か。」

「バカツナバカツナー！！ランボさんがやつつけちゃうもんね！！」
一人で騒ぐランボを見てもツナの無言、表情は変わらない。
再びリボーンたちに向けて黒い炎を放った。

「コルナ・フルミネ雷の角！！」

ピシャアアアアンツ

ランボの雷が盾となり、ツナの炎を抹消した。
その炎と雷がぶつかり合う様は凄まじいものだった。

炎と雷がおさまる頃、ランボがこてんと地面に転がった。

「あの雷で防いでもだめか…」

目をまわして気絶するランボを見てリボーンが呟いた。

なんて強力な炎なんだろうか。
ツナの秘められた力はこれほどのものなのか。

(…いや、まだだな)

リボーンは直感的にそう思った。

まだツナの力は未知だ。

そんな計り知れないツナの力を今、解き放たれてしまえば…。

(……死、か。)

死を目の前にするとこれほど冷静になれるものなのか。
それとも持ち前の性格からか。

リボーンはただツナを見ているだけだった。

闇の奥底で瞬く光。

助けて助けてとチカチカと輝く光。

それに気付くことができるのは、

青い青い、大空だけ。

標的63 絶望の大空（後書き）

書いてて辛いです、ゆか空です。

ツナ〜（、；、；、）

あの優しいツナは何処…。

馬鹿馬鹿ウライラちゃんの馬鹿！

でもウライラ好k（ry

てか、

5月15日、この一日だけで閲覧数が3500。
ユニーク数が250に達してました。

ゝ（・・）ノワオ！

びっくりしました。

夢かと思いました。

嬉しいです。

ありがとうございます！

読んでくださってありがとうございます！

標的64 黒き大空の炎

絶望とはこんなにもおそろしいものなのか。

まるで崖に追い詰められたような、焦燥感もある。

望みは絶たれた。

希望は消えた。

光は失われた。

裏の世界で広く名を知られる人物。

最強とも謳われる凄腕のヒットマン、リポーン。

類い稀なる銃の腕を持ち、勝る者はいないと言われる。

これまで数々の体験をした。

恐ろしい経験は数え切れないほど。

だが彼は表情ひとつ変えずに、淡々と仕事をこなしていた。

しかし、流石のリポーンでも今回の出来事には表情を変えずにはいられない。

教え子が自分の、仲間の命を狙っているのだ。

いくつもの修羅場をくぐり抜けてきたリボンもこれほどの窮地に
追いやられるのは初めてのこと。

心臓はバクバクとせわしなく動き、次々と冷や汗が垂れる。

こんなときこそ、奇跡を願わずにはいられなかった。

「なんなら遺言でも残しておきましょうか？」

楽しそうに笑ってウライラがりボーンたちに話しかける。
本当に恐ろしい男だ。

仲間だった人間をも殺そうとしているのだから。

「さあ、綱吉くん。あのクズたちを消してしまいなさい」

その言葉を合図に、ツナは掌をかざす。

グローブからは真っ黒な炎が渦を巻いて放たれている。

時々ゴウゴウという風の音までもが聞こえる。

そしてその炎はツナの掌を根源にして大きな竜巻となった。

黒いそれは、見ているだけでもその威力がわかる。

触れたら身体は無事ではない。

巻き込まれたら即死だろうか。

その竜巻はどんどん威力を増して大きくなる。

すると、リボーンがあることに気付いた。

(あいつ…やべえぞ)

リボーンが見つめるのはツナの腹。

ツナの服に血が滲んでいたのだ。

そして竜巻の風力でのぞける腹に貼ってあるガーゼは、ほとんどが血に染まっていた。

これではツナの命も危ない。

(…だがツナは止められねえ。どうすりゃいいんだ……)

リボーンは止める術も知らない。

それに、生徒の危機には手出しができないのだ。

なにもできない自分に苛立つ。

なんて自分は愚かなのだろつとリボーンは小さな拳を握りしめた。

「さあ、消しなさい！」

ウライラの声が耳に響く。

そしてツナは言われるがままにその悍ましいほどの竜巻をリボーンたちに向けた。

ああ、もうだめなのか。

全員が死を覚悟して目を閉じた。

ポウウウツ

まず感じたのは風。

そしてあたたかな温もり。

その温もりは、覚えのあるもの。

心地のいい、包み込むような。

…オレンジの、炎。

「ツナ、やめてー!!」

「…トンノ、おめえ……」

リポーンたちは目を見開いて驚く。

目の前に立ちはだかる大きな鳥。

そして自分たちを守るように燃えるオレンジの炎。

その姿は、まるでツナを思わせるものだった。

「……おや、大空属性の炎……。君は綱吉くん力で実態化した鳥ですわね」

「黙れ！ツナを返せ！」

トンノの声がウライラの声を掻き消す。

怒りを含んだ声。

今まで聞いたことのないものだ。

「ツナは道具なんかじゃない！お前のためのもでもない！」

「それは間違っていますよ。綱吉くんは僕の計画のために生まれてきたんです」

「違う！違う！それこそ間違ってる！！お前することすべてが間違ってるんだ！」

トンノが叫ぶたびに炎の勢いが増す。

ツナの真っ黒な炎に対抗しながら燃え盛るオレンジの炎は衰えることとはない。

「ツナは一人の人間として、幸せになるために生まれてきた！そしてこれからも幸せになるために生きていくんだ！お前なんかには…お前なんかには、ツナの運命を決めさせない！！」

いよいよトンノの炎が怒涛のように燃え上がる。かすかに、ツナの炎がおされていく。

(トンノの炎のが威力は上なのか…？…いや、違う)

リボーンが腕を組んでふたつの炎を見つめる。

(…ツナの炎が弱くなってるだけだ。)

無表情のツナの顔に、汗が伝う。

表情には出さないが、腹の傷が相当痛むのだろう。

それで力が弱まっているのだ。

「なにをしているのです、綱吉くん。さっさとあのクスを消しなさい！」

そのウライラの声で再びツナの炎の威力が戻る。

だがトンノの炎とは互角。

傷の痛みのせいでそれが限界らしい。

ツナの力はトンノよりも上なのだ。
トンノと互角になるのはおかしい。

それにトンノも気付いていた。

「…リポーン」

「なんだ、トンノ」

「……力を、かしてくれない？」

トンノが顔だけをこちらに向けて言う。

ずいぶん高いところにあるトンノの顔をリポーンは見上げた。

「力ってなんだ」

「…リポーンの、意識だよ」

「…どういふことが説明しろ」

「僕には、人の意識に入り込める能力があるだろう？だからそれを使って、ツナの意識にもぐりこもうと思う。」

「…リポーンも一緒に。」

トンノのオレンジの瞳には小さなリポーンがうつっている。

リボーンの瞳にもトンノがうつっていた。

「できるのか、そんなこと。」

「リボーンが強ければね。…大丈夫だよ。」

優しくトンノが答える。

しばらく俯いて黙り込んだあと、リボーンは覚悟を決めたように顔をあげた。

「…よし。連れてけ。」

「………わかった。」

そう言うとトンノは目を閉じて正面を向いた。

ふわりと、リボーンの意識が軽くなる。

浮遊感、とでも言えばいいのだろうか。

「行くよ。」

トンノの声の後、リボーンは意識を飛ばした。

その小さな身体は地面に静かに倒れ込んだ。

絶望とはこんなにもおそろしいものなのか。

まるで崖に追い詰められたような、焦燥感もある。

望みは絶たれた。

希望は消えた。

光は失われた。

…君は、幸せになるために生きるんだ。

標的64 黒き大空の炎（後書き）

うわー、落ち着きません！

いつものかわいらしいツナが見たいです。

黒いツナ…も、かつこいいけど（笑）

書いてて思ったんですが、

ウライラが調子乗りすぎてました！

イライラしてる人すいません！

さて、テスト勉強してきます！

読んでくださってありがとうございました！

標的65 能力救出

願う祈りは光となり

主を守る力となる

帯びる炎の力は

主を包む力となる

大空と太陽が動き出した。

真の大空を取り戻すために。

まぶたをあげると、そこは闇だった。

「…なんだ、ここは」

リボーンがその闇にたじろぐ。

まるで深海のような、光の届かない闇。

すると、隣に小さな炎があらわれた。

「…流石リボーン。無事に潜り込めたみたいだね」

「トンノか。ここはどこだ？」

「ここは、…ツナの意識の中だよ。」

頭と尾の先にオレンジの炎を燈してトンノがつぶやく。
そんなまさか、トリボーンは疑った。

(ツナの意識は、こんなにも闇がひろがっているのか?)

その心情を読み取ったトンノはそれを否定する。

「違うよ。ツナの意識は大空なんだ。限りなく広がる、真っ青な。」

…こんなに闇が広がっているのは、ウライラに操られているからだ。
「

「…ここにツナがいるのか？」

「うん。それに徳松もいるはずだよ。」

リボーンは辺りを見渡すが、トンノの炎以外には何も見えない。
自分が立っているのか浮いているのかもわからない。

「…とにかく、二人を探さなきゃ。僕の力も限界がある」

真剣な眼差しでトンノは言った。

時間はあまりない。

トンノはツナの意識の中に潜り込みつつも、外では全員をツナの攻撃から庇っているのだ。

それにはかなりの力を要する。

「…だが、こんな暗闇の中どうやって探すんだ？」

「まず、徳松を探す。徳松はツナ有能力だから、徳松を見つければツナの攻撃を止めれるかも知れない。」

そう言うとトンノは目を閉じた。

ゆらゆらとオレンジの炎が揺れる。

「……………徳松は、近くにいる」

はっきりとトンノは言った。

確かに、徳松の気配を闇の中に感じ取ったのだ。

「…とにかく、徳松の居場所に案内しろ」

「わかった」

先の見えない闇の中、リボンとトンノは徳松を目指して駆け出し

た。

「アルコバレーノ、どうしたのです!？」

「リボーンさん、リボーンさん!」

隣にいた骸が呼びかけるがリボーンは倒れたまま返事をしない。獄寺たちの怪我の治療をしていたロンジが慌ててリボーンに駆け寄る。

「……脈はあります。意識を失っているようです」

ロンジはリボーンの脈を確かめて安心したようなため息をついた。

「しかし、何故リボーンさんは……」

「……そういえばこの大きな鳥も正面を向いたまま動きませんね」

骸が大きな鳥…トンノを指差す。

トンノは瞬きもせず、身体もピクリとも動かずにいた。だが炎だけは揺らめいており、ツナのアタックを防いでいる。

何が、起きているのか。

何もわからないロンジたちは、ただリボンが目覚ましてくれることを願った。

「…おい、トンノ。ほんとに徳松はいんのか」

走っても走っても徳松の姿はない。
痺れを切らしたりリボンがトンノに問いかけた。

「それは確かだよ。徳松の気配はだんだん大きくなって。……ただ、アロッチとスコッチの放ったオーラの毒がまだ残ってるみたい」

時々バサバサと羽ばたきながらトンノは答える。
闇からはかすかに双子が発していたどす黒いオーラが感じられた。それが徳松の気配をくらましているらしい。

すると、トンノがぴたりと止まった。
それにつられてリボーンも走るのをやめる。

「…いる」

トンノは目の前を睨んでいる。
だがトンノの視線の先には変わらない闇があるだけだ。

「…ただの闇じゃねえか」

「ううん。間違いなく徳松は目の前にいる。」

そう言うとトンノはリボーンに後ろに下がるように促した。
リボーンが自分から離れたのを確認すると、両方の翼を広げ、身体
からオレンジの炎を出現させる。

そしてその炎を目の前の闇に向けて放った。

ピキ ピキピキ ピキピキピキ ピキ

闇に亀裂が走る。

そしてその破片がばらばらと剥がれていく。

隙間から覗かせたのは、かすかな空と、オレンジの炎。

トンノはさらに力を込めて炎を放った。

まるでガラスが割れるような音を立てて闇が崩れた。

そこにいたのは。

「徳松!!」

ふらりと倒れそうになる徳松をトンノが支える。
徳松の現れた場所には、小さな空があった。

「徳松、徳松!!」

「……………っ、…トン…ノ？」

うめき声を上げながら徳松が目を覚ます。
額の炎はマッチ棒に燈される炎のように小さかった。

「大丈夫か、徳松」

「…ツナ、が……一体、どうなって…」

徳松は咳込みながら問う。

「どうやら状況がわかっていないようだ。」

「ツナはウライラによって操られてるんだ。」

「…だから、こんなに真っ黒なのか……」

「ああ。だから今ツナが外で暴れてんだ。…徳松、止めることはできないか？」

「…やってみる」

徳松は目を閉じて炎に力を込める。

…しかし。

「……………だめ、だ……。…力を抑えられない……………」

本人にとっても驚くことなのだろう。

徳松は啞然としていた。

「…ツナが…オレを…ツナの能力を引き出してる……」

「ちっ。ウライラめ…そこまでツナを操ってんのか」

「徳松：なんとかして止められない？」

トシノの問いに徳松は首を横に振った。

「オレは、ツナの意味で動くから…オレにはどうしようもできない…。」

やるせなさに徳松が己の身体を殴る。
何度も、何度も。

「やめる徳松。自分を責めたってなにも起きないだろ」

リボーンが徳松の拳をそつとおさえた。

徳松はかたかたと震えて顔を俯かせる。

徳松の悔しさが痛いほどに伝わってきた。

「…今は、ツナを探すぞ」

リボーンが徳松に言い聞かせる。

今はなんとしてもツナを見つけだして止めなければならぬ。

ツナを止められるのは、ツナしかないのだ。

「行くぞ、徳松」

しばらく下を向いていた徳松は、ゆっくりと顔を上げて頷いた。

トシノは背中に徳松を乗せ、ツナを見つけるために翼を羽ばたかせた。

必ず、ツナを見つけたす。

必ず、ツナを救いだす。

必ず、ツナの笑顔をよみがえらせる。

そうかたく決心して、闇の中へと消えていった。

やめて やめて
もう やめて

僕はどうなってもいい

だから

人を、傷つけないで。

標的65 能力救出(後書き)

ああ、話が暗い)、・・・)

テスト中だし話暗いし、なんちゅうこつちゃ!です。

標的66 声と光と暗闇

君はどこにいるの

この暗闇の中、僕らは君を探す

ねえ、僕らには

君が必要なんだよ

仰いでもそこに空はなくて

それがあまりにも悲しくて

待ってて、今行くから

そこにいて、必ず見つけだすから

消えないで、お願いだから

あてもなくさ迷うように、リボンたちは暗闇を駆け回る。

目的は、ただひとつ。

沢田綱吉という名の大空を、見つけだすため。

「おいトノ、ツナの気配はねえのか」

「…まったく、気配がない。徳松はわかる？」

「オレにもわからない。……まるで、何かに閉じ込められてるみたいだ」

ツナと一心同体である徳松にも、ツナの気配はまったくわからなかった。

一刻もはやく、ツナを救い出さなければならぬ。

刺し傷、呪い。

ふたつの不幸が重なり、さらにウライラに魂を奪われてしまった。これならいつツナに何が起きても不思議ではない。

最悪の場合は、死んでしまうだろう。それを阻止しなければならない。

…だが、ツナの居場所がわからない。

「…どうすりゃいいんだ」

悔しさの滲むリボーンの声は、暗闇に飲み込まれた。

「…その鳥、なんですか？まったく動きやしないじゃないか」

トンノが身動きひとつしないことに気付いたウライラが首を傾げた。

先程からずっとツナとトンノの炎がぶつかり合っている。
その波動は弱まることはない。

「…綱吉くんも疲れませんか？…仕方ない、僕も少しお手伝いしましょっ」

にやりと笑ったウライラは黒い杖の先をトンノに向ける。
だがトンノは依然として動かない。

（奇妙な鳥だ。大空属性だから少しくらいは役に立つと思ったけど、
……邪魔なだけだったな。…残念だ。）

ウライラは杖を握る手に力を込め、攻撃を仕掛けた。

「綱吉くんの黒い炎と、僕の黒いオーラを受ければどうなるんでしようね！」

その言葉の直後、杖からどす黒いオーラが放たれた。

双子が放っていたオーラとは比べものにならない、漆黒のオーラだった。

…しかし。

ジュウウウウッ

「…!?!?」

一瞬、思考が滞った。

ウライラの放ったオーラが、トンノの炎に飲み込まれたのだ。それはほんとに、一瞬の出来事。

「…少々侮っていたようですね」

少し動揺したような顔でウライラは笑った。

だが、反撃とばかりに次はトンノの炎がウライラに襲いかかった。

ジュワッ

腕をオレンジの炎がかすめた。

その炎はウライラにとっては、毒も同然であった。

身体にオレンジの炎が滲む。それはあまりにも強く、眩しく、

「……っ 忌まましい！」

虫酸が走る。

黒い身体に輝く炎が触れた。

それだけで不快だった。

「僕の黒を、崩そうとするな。」

ぼつり。

小さく低い声がかすかに聞こえた。

…ああ。

今だ、今だ、今だ。

今なら、できるだろうか。

やめて やめて。

もう、やめて。

僕はどうなってもいい。

だから、人を、傷つけないで。

“……ち……”

「？」

耳に届いたのは小さな声。

徳松は耳をすました。

「…どうした」

「今、なんか聞こえた……」

遠くを見つめながら徳松は答える。
リポーンもトンノも黙って耳をすます。

“……つち……”

「……なんだこの声は」

“「こ……つち……”

「こ、ち？」

“……つち。”

「こつち？……まさか」

突然聞こえた声に三人は警戒する。

「こつち」とは、なんだろうか。

「まさか、ツナの居場所……？」

「だがこの声はツナじゃねえぞ」

その声は低く、だが優しいものだった。
しかしそれはツナの声ではない。
少年のものではなく、青年のものだ。

「こつち、って何が？」

トノノは声の主に尋ねた。

答えてくれるかはわからないが、自然と尋ねていた。

“……の…る”

声が、少しずつ小さくなっていく。

今にも消えてしまいそうだった。

だが三人は佇んでその答えを待った。

“……………綱吉くんのところ”

「」「！！？」「」

三人は驚いた。

まさか本当に答えるとは思ってもいなかったのだから。

もしかしたら罫かも知れない。
ウライラが騙しているのかもしれない。
その可能性は十分にある。

「…行こう、か」

徳松は二人に言った。

この声を信じようと、信じなければならなかったのだ。
信じなければ、後悔すると。

「……わかった」

「行くしかねえしな」

トンノとリボーンは頷いて答えた。

すると、遠くになにかが見えた。

チカチカと、弱々しい光がまたたく。

「…あそこか」

その光を見つめたあと、三人は光を目指して進み出した。

誘うように、光は不定期なまたたきをしていた。

“…けて。……助けて。…助けて。”

大空を、救い出せ。

標的66 声と光と暗闇(後書き)

睡眠時間が一日2時間…

死んでしまう)・・・)

高校生なのに青春しきれてないです。
くそっ、受験め！

話もあんま進みませんね…
自分でもじれったいと思います。

のっそりと進めようかな、とか思ったり…して…ます。

読んでくださってありがとうございます！

標的67 誘導の果て(前書き)

最近短いですね。
ごめんなさい。

標的67 誘導の果て

やめて やめて

もう やめて

僕はどうなってもいい

だから

人を、傷つけないで。

リボンたちを導くようにチカチカとまたたく光を追う。
先程聞こえた声は誰のものかわからない。

“こつち”

“綱吉くんのところ”

確かにその声はこう言った。

それは真実か否か、わからなかったがリボンたちは信じた。

その声と光には、ひどく安心感を持てたのだ。

暗闇の中で輝く光は魅力的だった。

儂くて、今にも消えてしまいそうな光。
弱々しくも懸命にリボンたちを誘っている。

「随分と広いな。どこまで続いてるんだ？」

真っ暗でなにも見えないが、どこまでもつづくツナを意識の広さに
少々圧倒される。

「意識の広さつて人それぞれなんだ。狭い人や広い人、いろんな意
識があるんだよ」

トンノがりボンに説明する。

人の意識は、その人の性格や考え方などが関わっている。

例えば、小さな子供は広い意識を持つ。

子供は純粹で無垢、まだ知らないことが多いからだ。

それに、どんな人間になるかという無限の選択肢がある。

しかし大人の意識は狭い。

世の中の辛さや苦しさを知ってしまうからだ。

正しいものは正しいと、答えはひとつだけだと思いつく傾向がある
からだ。

子供の無限と大人の定義。

それはまったく異なる。

「だんだん大人になっていくと、意識は狭くなってしまっただ。本
当なら、ツナの意識も狭くなっているはずなんだけど……」

トンノは声色を変えた。

暗いものから明るいものへ。

「ツナはやっぱり大空だね。子供のよう無限で、だけど大人のよ
うにしっかりしてる。」

「…やっぱり変わった奴なんだな、ツナは」

リボーンはおかしそうに、けどどこか嬉しそうに笑った。
その笑みは帽子に隠されて誰にも見えなかった。

ピタリと、光が止まった。

リボーンたちを待っているかのようにそこにとどまっている。

「…そこにいるのか？」

「……徳松のときと同じで姿は見えないね」

トンノがスピードをあげてその光の元へと羽ばたく。

近くで見ると、その光はとても小さかった。

遠くからでも見えたのは、この暗闇とチ力チ力とまたたいていたおかげだろう。

「……ここに、ツナが」

先程と同じように、何も無いように見える。

トンノは再び炎を揺らめかせ、闇の破壊を試みた。

だが、その闇はまったくびくともしない。
ピキピキと小さなヒビがはいるだけだ。

「だめだ、壊せない。」

「……なにかに封されているのかも知れない」

徳松はそつとヒビに触れる。

そして手に力を集中させ、トンノと同じように炎を放った。

ピキ ピキ ピキ

それでもヒビはほんの少ししかはいらな
いやりなにかで封されているのだろ
う。

すると、小さな光がトンノたちの周りをくるくると回りはじめた。

小さな光からはキラキラと輝くものが降ってくる。

そしてそれは徳松の腕を伝って手に集まった。

再び徳松が力を集中させる。

ピキ ピキピキピキピキ ピキピキ

小さな光が発する輝くものがヒビを伝って亀裂を広げさせていく。

そして徳松は歯を食いしばって思いきりヒビ目掛けて拳を突き出した。

パアアアアンツ

闇が弾け、あたりに散っていく。

ぱらぱらと闇が破壊される。

そして現れたのは、小さな少年。

「…っツナ!!」

徳松がツナを助け出そうとツナの腕を掴む。

ジャラッ

「…!!?」

全員が目を見開く。

ツナの腕には、おびただしいほどの鎖。
だがそれは腕だけではなかった。

「…全身に鎖が絡まってやがる」

リボーンが小さく舌打ちをする。

ツナの全身には、逃がさまいと鎖が巻き付けられていた。
それは固く、ジャラジャラと音をたてるだけ。

「…ウライラの呪いか」

「こんな、ところにまで…」

リポーンたちはただ啞然とするだけだった。

かたく閉ざされたまぶた。

その顔に生氣はない。

まるで、人形のような。

「…ツナ……っ」

徳松が地面に座り込んでしまった。

握るツナの腕は、とても冷たかった。

「ツナ、ツナ、ツナ！！」

何度も何度も徳松はツナの名を呼ぶ。

しかしツナは反応を示さない。

徳松が腕を放すとツナの腕は力無く揺れた。

「…どうして、ツナだけ！！」

拳を握りしめて思いきり叫ぶ。

「どうして、どうして、どうして…！
どうしてツナだけなんだ！
どうしてツナだけこうなるんだ！

…どうして、オレじゃないんだ……」

ぼたり。

徳松の拳を涙が濡らす。

ふるふると震え、次々と涙は落ちる。

「…徳松」

「オレも、オレもツナなのに！ツナ有能力なのに！
なぜツナだけなんだよ！
なぜオレだけなんだよ！
ツナは動けないのに、オレは動けるなんて……。」

…なんで、なんだよ」

声が震え、それは涙に消えていった。

やるせなかった。

自分が、自分に、イライラした。

ツナ有能力なのに、ツナ自身なのに。

ツナと一緒になのに。

リボンも、トンノも、ただ徳松を見つめることしかできなかった。

小さな光は、哀しそうにかすかにまたたいた。

どうすれば。

どうすればいい。

この大空を救い出すには。

なにを。

なにをすればいい。

この大空を目覚めさせるには。

なにを、どうすれば、いい？

わたしのテストがおわるまで待ってて、ツナ！

天才の底力、見せてやる。

読んでくださってありがとうございます！

標的68 決意(前書き)

最近ほんとに短くて…読みごたえがないように思います。
ごめんなさい。

標的68 決意

僕にこんな力がなかったら、
こんなことにはならなかったのかな。

ああ、普通に生まれていたら、
僕は普通の人間だったのかな。

こんな力を持ってしまったから、僕は…

闇に侵されてしまったんだ。

ツナは発見された。

不思議な小さい光の導きによって。

リボーンたちはツナと再会することができた。

だが、それは最悪なかたちで。

痛々しいほどに身体に巻き付く鎖。

それはツナの肌に浮かび上がっている鎖の痣と酷似している。

いや、同じなのかも知れない。

黒く、おびただしく、目をそらしたくなるほどの、呪い。

「…徳松」

トンノが怖ず怖ずと徳松に話しかける。

徳松はただしやがみ込み、うなだれて肩を震わせているだけだった。

「…徳松、自分を責めるんじゃない」

「そつだよ。徳松のせいじゃないんだよ」

「……いや、オレがいけないんだ」

徳松は首を横にふって答える。

「……………オレはツナ有能力だ。
能力っていうのは、元は自身を守るためにあるもの。身体的だった
り、潜在的だったり…。

その中でオレはツナの身体、潜在共々の能力として存在しているん
だ。

…そんな奴が、主である者を守れないでどうするんだ……。
もう…だめだ……」

自嘲気味に徳松は言った。

徳松の言うことは正しい。
間違っではない。
あることを除いては。

「諦めんな。」

その言葉の直後、頭に痛みが生じた。

その痛みの原因は、目の前にいる赤ん坊だった。
リボンが徳松の頭を叩いたのだ。
いつもツナにするように。

「おめえが諦めてどうすんだ。ツナのことを救いたくはねえのか？」

ただ唾然として徳松はリボーンの言うことを聞いている。
トンノも同じように黙って耳をかたむけていた。

「救いてえなら、守りてえなら最後まで諦めんな。まだ何もやっちやいねえだろ。」

…それともおめえは、ツナを救うのをやめるのか？ 投げ出すのか？

大丈夫だ。ツナは柔じゃねえ。

…大切なもんは、信じるのが当たり前だろ？」

「…!!!」

オレンジの瞳が揺れる。
オレンジの炎が揺れる。

ああ、なんて自分は馬鹿なんだ。

最初から諦めて、終わらせようとしていたのだ。

何もせず、考えようともせず。

「…そう、だよな」

小さく徳松が呟いた。

「…何もしてないのに、諦めるなんておかしいよな。
ツナ有能力であるオレがツナを救わないで…守り切らないでどつす
るんだ」

徳松はゆっくりと立ち上がり、まぶたを閉じる。

その奥にうつるのは、大空とオレンジの炎。

「……………まだ、終わりじゃない。」

額の炎が、輝かしく、美しく、強く燃え上がった。

オレンジの瞳に、迷いはない。

リボーンは口許をゆるめた。

チカッ　チカッ　チカッ　チカッ

突然、あの不思議な小さい光が激しく瞬きはじめた。
せわしなく輝くそれを、リボーンたちは好奇の目で見ていた。

次は、何が起こるのか。

また、しゃべるのだろうか。
なにかを導き出してくれるのだろうか。

リポーンたちはそう思った。

だが、予想は間違っていた。

パァンッ

チカチカと瞬いていた光が弾けた。
前触れもなく、いきなりだ。

弾けた光は粒子となりキラキラと輝きながら散っていく。
その様は美しく、一瞬心を奪われたほどだ。

“……………て”

「「「！」「」」

また、聞こえた。

低く、優しい青年の声だ。

リボンたちをツナの元へと導いてくれた声だ。

“……えて……さ……えて……”

鼓膜を揺るがす声は、次第にはつきりしたものと変わる。

“…支えて。……君たちを、待っている”

「…支え…る？」

「どういふことだ」

「なにが、待っているんだ？」

三人の問いかけにその声は答えない。

ただ、“支えて”という言葉を残して消えてしまった。

その言葉の意味もわからず、リボンたちはその場に佇んでいた。

ああ、もうだめだ。

これ以上は、いられない。

早く、早くしないと。

気付いて。

お願いだから、気付いて。

その 大空で 僕を 助けて。

標的68 決意（後書き）

テストが終わった あー！

、（；；）ノ

いろんな意味で終わってしまった！

ひとまず寝ました。

小説を書くころと思ったけど睡眠には勝てませんでした。

何十時間も必要な睡眠時間を4時間におさめました。

無駄な節約。

いろいろ心配してくださってありがとうございます。

復活、リ・ボーンしますよ！

でもやっぱり話は短い。

もっと長めに書きたいんですが、区切りのいいところで切ってるんで短くなってしまっんです…。

空気化してるキャラも復活、リ・ボーンさせなくては（笑）

読んでくださってありがとうございます！

標的69 鳥の限界(前書き)

いつもより読みにくい文になっています、

標的69 鳥の限界

「……支える、って…なんのことだ…」

誰のものかわからない声の最後の言葉。

“支えて”

確かにそう言っ言葉は消えた。
キラキラと光を散らせながら。

支えて、とはどういうことなのだろうか。

ただでさえ混乱している頭をさらに混乱させる。
思考回路がパンクするのではないかと思ってしまう。
頭づくりがいいリボンでさえもだ。

「…あの声、なんだったんだろうな」

「…トンノも徳松も、聞いたことねえのか」

トンノと徳松は首を横に振った。

ツナを意識の状況を知っている二人だったが、あんな声は聞いたこ

とがないのだ。

そもそも、そんな簡単に意識の中に入り込めるものではない。
今考えられるとすれば。

「…ウライラが関係してるんだろうな」

ツナの声でもない。
当たり前だがトンノと徳松の声でもない。
意識の中に入り込めるのは特有な者のみ。

そうとなると、浮かび上がる人物はウライラしかいないだろう。

しかし、ウライラは敵だ。
今もツナの魂を奪い、操っている。
リボンたちや、かつて仲間だったニコールたちまでもを消そうと
しているのだ。

そんなウライラが、何故リボンたちに話しかけるのか。
ツナの居場所を教えるのか。

まったく理解できないことだ。

「まさか…あのウライラが…?」

「考えられるのは、そんならいしかねえだろ」

きっぱりとリボーンは言い切る。

どう考えても、その答えにしかたどり着かないのだ。

簡単なようで難しい問題。

その答えはあまりにも意外で、信じがたくて、でもそれは少なくとも事実で。

リボーンたちは頭を悩ませた。

「……………ツナ…」

…ジャラッ

「?」

沈黙の中に小さな音が響いた。

なにかが動いた音。

その音にはかすかだが聞き覚えがある。

そう、先程聞いた音だ。

それは、鎖の音。

それは、ツナに巻き付く鎖の音。

と、いうことは。

「……ツナが、動いた……？」

誰もツナに触れていない。

もちろん風も吹かない。

闇が広がるだけなのだから。

だとすると、原因はひとつ。

「……ツナが、……ツナが動いた！」

徳松は慌ててツナに駆け寄る。

そのあとをリボンとトンノが追う。

「ツナ、ツナ!？」

必死で徳松がツナを呼びかける。
何度も、何度も。

……ジャラッ

「!?!?…今、腕が動いた……」

「まさか、そんな……ほんとに?」

トシノが問うと徳松は大きく頷いた。

オレンジの瞳が、キラキラと輝いている。

「…なんでだ?ツナはウライラに魂を奪われて操られて…動くこと
なんかできないはずだ」

確かに、と二人は思う。

ツナは魂を奪われてしまった。

意識もこの有様だ。

操られている今、たとえ意識の中でも動けないはず。

「…もしかしたら」

トンノはツナの正面に立ち、ツナの顔を見つめた。

「…ツナ？」

優しく、静かにトンノがツナに呼びかける。

…ジャラッ

「…そっか、そうなんだね」

「なにがだ？」

くるりとトンノはリボンたちに振り返る。
そして力強く、はっきりと言い放った。

「ツナが、元に戻ろうとしてるんだよ」

「…つまさか!?!」

「ほんとなのか、トンノ」

そつだよ、と言ってトンノは再びツナを見つめる。

「どつなってるかはわからない…けど、確かにツナは元に戻りたがっているんだ」

「……………あ。」

徳松が掌で耳を覆って声を出した。
その掌は小さく震えている。

「……………ツナ?」

徳松がツナの名を呼んだ。

それに連動するように、ジャラツという鎖の音が響く。

「……………ツナの声が、……………聞こえた……………」

「!?!?」

「…ツナ……」

徳松のその言葉にリボーンは驚愕する。

トンノはやっぱり、と言って真剣な眼差しを向けた。

ガクンッ

「…!？」

闇が揺れる。

ガタガタと地震のように。

「…っ限界、か……っ」

トンノが悔しそうに顔をしかめた。

そして急いでリボーンと徳松を翼で包み込む。

「…どうしたんだ？」

「…あつちの僕が、限界…みたいだね」

「あつちの…って、オレたちの身体があるところか？」

「うん…これでももった方…だけどね…」

力なくトンノは笑った。

意識の中では飛び回ったり、炎を使ったり。

向こうでは操られたツナの炎から全員を守っている。

それはかなりの体力を消費していた。

そして、もうトンノの体力は限界に近づいていた。

「あつちに戻るのか？」

「仕方ないけどね…徳松、君も行くんだよ」

「…え？」

突然名を呼ばれた徳松は間抜けな声を出した。

「だから、徳松もあつちに行くんだよ」

「…そんなこと、できるのか？」

徳松はトンノに問いかけた。

徳松はツナがハイパー化しているときは、外に出られなくなっている。

ツナの体内で能力として力を使うためだ。

ツナは今、操られているとしてもハイパー化していることにはかわりない。

だから徳松は出られないはずなのだ。

「僕の中で一時的に出られるようにはなるはずだよ」

「でも、トンノはもう限界なんじゃ…」

確かに先程トンノは限界だと言っていた。

それなのにさらに体力を消費させるようなことができるのだろうか。

そんな心配を消し去るようにトンノは言った。

「大丈夫だよ、僕の力は少ししか使わない。重要なのは徳松の心だ」

「…心？」

「そうだよ。リボーンをツナの意識の中に連れてきたのと同じ原理

なんだ。」

何を言っているのかまったくわからないという様子で徳松はその話を聞いていた。

「えっと、要は心の強さ、かな。」

リポーンは心が強いから簡単にこっちにこれたんだよ。」

「だからおめえ、強ければって言ったんだな」

「うん。……徳松、君なら大丈夫なはずだよ。怖じけづかないで。」

950

トンノが優しく徳松に話しかける。

大空が大空をなだめていく。

「……オレは大丈夫だ。」

徳松がトンノに微笑みかけた。

大空が大空になだめられていく。

ガタガタガタガタ

闇の揺れが激しくなっていく。
もはや焦点があわないほどだ。

「……しっかり僕につかまってね」

トンノが全身に力を込める。

リボンと徳松を翼で包み込んで目を閉じた。

そして再び意識が軽くなる。

あの浮遊感がやってくる。

するりと三人は消えた。

残り火と金色の羽だけがその場に残っていた。

標的70 帰来

待っている 待っているんだ
君が来ることを待っているんだ

ずっと、君が来てくれると
信じていたんだ

それが、もうすぐ叶う

お願いだから、

僕を見つけてだしてくれないか

僕はここにいるから

その広い心で包み込んでくれないか

大空のような君を

僕は、ずっとずっと

待っているんだ。

「いつまで無駄な抵抗をしているつもりですか？さっさと降参すればいいのに！」

耳障りな笑い声が鼓膜を振動させる。

目の前にいる男、ウライラはツナに加勢するように攻撃を仕掛けてくる。

ツナの黒い炎とウライラの黒いオーラが勢いよくトンノの放つ炎にぶつかる。

二対一ではあきらかにトンノの方が不利だ。

しかも相手はトンノより能力が上のツナとウライラである。負けるとするならば、誰もがトンノだと思っただろう。

だんだんトンノの炎がおされていく。

オレンジの炎が黒い炎に飲み込まれていく。

もうすぐでトンノの炎が撃ち破られようとしていたその時。

「…っっ！！」

突然、ウライラが己の胸倉を掴んで苦しみだした。

それと同時にウライラの攻撃も止む。

ニコールたちはなにが起きているのかわからなかった。

「…ウライラ…様？」

「ちょっと…どうしたのよあの人」

「持病でも持ってたっけなあ？」

「…え、そうなの！？」「」

「そんなこと、聞いたことありませんよ」

ニコールたちもウライラの苦しむ姿は初めて見たようだ。
突然の事態に驚きを隠せないでいる。

「どうなっているんでしょうかね…ウライラといい、このアルコバレーノといい…」

骸が隣に倒れている小さな赤ん坊に目を向ける。

黒服に身を包んだ赤ん坊は、先程倒れてからまったく動かない。

どうしたものか、と骸が考えていると、その赤ん坊の小さな指がぴくりと動いた。

「…アルコバレーノ!？」

それに気付いた骸がリポーンに呼びかける。

するとリポーンは骸の声にこたえるようにゆっくりとまぶたをあげた。

「……………戻ってきた、のか」

「なんのことです?」

覚醒してからの第一声は謎の一言だった。

意味がわからなかった。

すぐにリボーンは起き上がってトンノの元へと駆け寄る。
骸やニコールたちはただ啞然としているだけだ。

「おい、トンノ！トンノ！」

「…聞こえてるよ！なに！」

トンノが声を荒げて返事をした。
穏和なあおのトンノが声を荒げる。
めずらしいこともあるものだとしりボーンは思った。

（目覚めてすぐにこんなことを考えられるのもめずらしいとは思っ
が。）

「徳松の姿が見当たらねえんだが」

「…徳松なら、ここにいるよ」

トンノの視線の先を見ると、小さな人間が一人、金色の羽の中に埋
もれていた。

「…僕、も…そろそろやばいんだけど……！」

ズルル、とトンノの足が後ろに引き下がる。
ツナの黒い炎の出力はかわっていない。
トンノの力が弱まってきているのだ。

「……あ、リボーン……」

徳松が目を覚まし、むくりと起き上がった。

「徳松、なんともねえのか」

「……ツナがこんなに力を使ってるから、あまり動けそうにない……
けど」

視線をツナへとうつし、徳松は言う。

「……わかるんだ。」

「なにがだ？」

「……ツナは、本当に戻ろうとしてる。……ここに。」

徳松はふわりと浮き上がり、リボーンの額に小さな掌を当てる。

ドクン、と血が騒ぐ。

頭になにかが流れ込んでくる。

ああ、これは。

この、あたたかな、ぬくもりは。

「…ツナだよ」

「………ああ、これはツナだな」

リボーンはにやりと笑った。

徳松の掌から伝わるのは、かすかなぬくもり。

大空のような、少年のぬくもり。

(……ダメツナが。)

確かに、ツナは戻ろうとしている。

気付いているのだろうか。
今の、この現状を。

かわってしまった、あの黒い瞳には何が映し出されているのだろうか。

それは、ツナには見えているのだろうか。それを見て、ツナはなにを思っただろうか。

961

「 ……ツナは頑張ってるんだ」

「 ああ、そうだな」

「 さっきの…あの言葉の意味、わかったただろ？」

「 当たり前だぞ」

「……だから、リボン」

「……わかってる」

徳松は掌をそっと放し、ツナを見遣る。

ゆらゆらゆら、とオレンジが揺れる。

「……オレたちが、……“支える”んだ」

ツナを。

大空を。

標的70 帰来(後書き)

はい、標的70までできました！

意外と続きます…。

そしてまだ終わらない…。

いや、終わらせない。

記念すべき標的70は…

ウライラが苦しめられたまま放置されてます。

これはわたしの嫌がらせ。

トンノがイライラしてます。

更年期ではありません。

必死なんです、ツナの黒い炎からみんなを守ること！

そして徳松さん。

トンノの羽の中で寝てた…気絶してました。

絶対トンノの羽は気持ちいいと思います。

もふつもふつもふつもふつ！

一緒に寝たい、(・・・)ノ

いろんな方から、キャラの空気化を指摘されるんですが…、

わたしとしては…一番空気化してるのは…、

っ、っ、っシクロとシスイですよ！

…え、そんな奴らいた！？と思われた方、いますよね……

いましたよ…結構重要なポジションの……

tesoro nascosto (テゾーロ ナスコスト)の…

テラジツヨ
serraggioの…

シクロとシスイ……

忘れないでいてあげてください(笑)

近々出します！

忘れないで！(笑)

今回も読んでくださってありがとうございます！

追記

おかげさまでもつすぐアクセス数が10万を越えます。
ありがとうございます！（先取り）

標的71 大空への思い(前書き)

なんとかかいつもより長めです！

標的 71 大空への思い

「……オレたちが、… “支える” んだ」

しっかりと、清明とした声で徳松が言う。

その視線の先には、大切な仲間であり、兄弟のような存在であり、分身であるツナがいる。

その姿は普段のツナとは真逆と言っていいほどに異なる。

瞳や炎は黒、闇のような黒だ。

さらに黒の瞳は光を失い、生気を感じられない。

感情も認識することができない。

あまりにも無だからだ。

長時間、炎を放出し続けているため、腹部の刺し傷からは血が少しずつ流れている。

それはツナの服を紅く染めた。

操られているから、魂を奪われたから、痛みは感じないのだろう。

だが身体は痛みは素直だ。

魂を失ったツナの心は痛みを感じない。しかしその身体は痛みを感じている。

そのため、ツナの頬を汗が伝うのだ。とっくに、身体は悲鳴をあげていた。

このままではツナは死んでしまう。

魂をなくした上に、死ぬ気の炎を放出し続け、あんな傷を負ってしまっていたら、どのようにして生きながらえることができるだろうか。

一刻も早く、ツナを止めなければ。
ウライラからツナの魂を奪い返さなくては。

大空は

ありのままです。

大空なのだ。

「…ツナ」

優しく徳松はツナの名を呼ぶ。
黒の瞳を見つめ、話しかける。

「ツナは、ありのままできてこそツナなんだ。戻ってきてよ。…ツナがいなくなってしまうたら、オレはどうすればいいんだ？」

だんだんと徳松の声が震えてくる。

しまいには、そのオレンジの瞳から涙が一滴流れた。

「…ツナがいないと……哀しいよ、辛いよ、苦しいよ！」

「…徳松……」

トンノは胸に込み上げる哀しさという感情をぐっところえ、徳松のあとにつづく。

「ツナ！…僕は、ツナがいたからこうして今、生きているんだ。」

……ツナがいなくなったら……僕は、僕らはどうすればいいの？」

すると、自然とトンノの目からも熱いなにかが流れ落ちた。

それは金色の羽を伝って地面へと吸い込まれる。

涙の通った跡はキラキラと輝いていた。

「…っそうですよ十代目！オレは…オレのボスは十代目だけなんですよ！あなたただけについていくと決めたんです！」

「なあ、ツナ。…オレの親友はツナなんだぜ？親友がいなくなっちゃったら…哀しいに決まってるじゃねーか！早く戻ってこいよ！」

「沢田ー！極限に戻ってこい！！」

共にボクシングをしようではないか！！」

「…小動物が…らしくないよ。」

「ツナー！ランボさんと遊ぶんだもんね！！」

「あなたの身体は僕が乗っ取る予定なんですよ。早く戻りなさい」

守護者たちの言うことはばらばらだった。

一人一人が言っていることが異なっている。

だがひとつだけ共通するものは。

“君が、必要なんだ。”

「…綱吉くん、僕まだ…君に言いたいことが沢山あるんだよ」

「ニコールの言うとおりよ！あたしだって、まだ綱吉くんとお話したい！」

「僕ら、綱吉くんに沢山沢山、お礼を言いたいんだよ！」

「アロッチとスコッチが世話になったしなあ、ゆっくりおめえと話してみてえんだがよ」

「…綱吉くん。私たちを救ってくれたあなたに、何もしてあげられないなんて…私はいやですよ」

自然と、ニコールたちもツナに話しかけていた。

君に、感謝してるんだ。本物を、見つけられる気がするんだ。

僕らは、知ってしまったんだよ。

優しく包み込んでくれる、大空を僕らは、

知ってしまったんだよ。

“君に、ありがとうを言いたいんだ。”

「綱吉様、私はあなたがボンゴレ十代目に最も相応しい方と思っています。」

このロンジ、いつかはあなたの側で働きたいと…思うのですよ。」

「ツナ、ツナは我らの封印を唯一解くことができる人間なんです。ツナが消えてしまったては、我らは…光を、なくしてしまう、希望を失ってしまうんです。」

「おい、坊主！オレはおめえのおかげで今生きてんだぜ？オレは、

おめえに従うって決めたんだぞ！」

「…綱吉…くん！綱吉くんが…ボスになるの、私…楽しみにしてるんだよ！」

ロンジも、シクロモシスイも、つられてツナに話しかける。
リーダーと結加は傷の痛みには耐えながらも言葉をかけた。

君は、選ばれたんだ。
相応しい者として。

“君は、選ばれし人間なんだ。”

「おい、ツナ。おめえはここで野垂れ死ぬつもりなのか？
オレが教えてきたのは、そんなんじゃないやねえぞ。そんなみじめな生き方をしろだなんて教えたことはねえ。」

オレはおめえの成長を間近で見てきた。だがおめえの努力は一番おめえがわかってるはずだ。
なのに、ここでそれを全部無駄にしちまうのか？おめえはそんな愚か者だったのか？

違うだろ。

おめえは愚か者じゃねえ。馬鹿で、阿呆で、ダメダメなダメツナだが、愚か者じゃねえ。

……仲間を大切にできる、そんな奴だっただろ。」

リボーンがまっすぐツナの顔を見た。

その黒い瞳に、本物を探す。

オレンジの光を。

今、ここで諦めるのか？

ここですべてを投げ捨てるのか？

君はそんな人間じゃないだろう？

“君は、生きるんだ。”

生きるんだよ。

…あれ、ここはどこだろう。

真っ暗でなにも見えないな……。

前も、こんなことがあった気がするけど……まあいいや。

ああ、なんか眠いや。

うとうとしてきた。

一眠りしようかな。

“……………”

…あれ、なんか聞こえる。誰の声だろう。

いろんな人がしゃべってるな。

“…………ナ、…………ツナ…………”

あ、オレを呼んでる。
でも誰が？

“君が、必要なんだ。”

“君に、ありがとうを言いたいんだ。”

“君は選ばれし人間なんだ。”

みんなの声が聞こえる。

……オレを、呼んでる。

なんでだろう。

起きなきゃいけない気がする。

はやく、みんなのところに行かないと……。

……でも、身体が動かないや。

ああ、寝てしまいそうだ。

“……ツナ、……ダメツナ”

わ、リボンだ……。
リボンまで……どうしたんだよ。

“君は、生きるんだ。”

……何を言ってるの？
よくわからないや。

ほんとに……寝そう……。

“……綱吉くん”

……聞かない声だなあ。
誰だろう。

“早く、起きて。待ってるよ”

待ってるって…みんなが？

…でも、身体が動かないんだ。

“諦めないで。みんなが、君を待ってるんだよ。”

……………そうだよね。

諦めちゃだめだよね。

よくわからないけど、みんなが待ってるなら、早く起きなきゃいけないよね。

早く、早くしないと。

みんなが待ってる。

早く、行かなくちゃ……

「…ふ、ははは！何みんなで呼びかけてるの！？無駄だよ！綱吉くんはもう元には戻らないんだよ！」

少しだけ苦しそうに呼吸をするウライラが笑って言う。
リポーンたちを嘲笑うように、醜く。

「さあ、綱吉くん。そんなあまつちよろい炎を止めて、一撃で仕留めてしまいなさい！」

ウライラがリポーンたちを指差しツナに命令すると、ツナは黙って頷いて一旦炎を止める。

そして次は片手ではなく両手をリポーンたちに向けた。

…もう、だめなのか。
誰もが一瞬諦めて死を覚悟した。

「……………」

「…綱吉くん？」

ツナが突然頭を抱えてうつむいた。
思わずウライラはツナに話しかける。

「なにをしてるのですか。さっさとしなさい！」

ウライラに怒鳴られ、ツナは再び掌をリボーンたちに向ける。

だが、その掌から炎が放たれる様子はない。

ツナが、攻撃を躊躇っていたのだ。

(……ダメツナが。さっさと戻ってきやがれ。)

宙に浮かぶツナをリボーンが黙って見つめる。
そして、ふとツナとリボーンの視線がぶつかった。

「……り、……ボーン……ん」

「……なんだ、ツナ。」

かすかにツナがりボーンの名を呼んだ。

小さな声だったが、確かにリボンには聞こえていた。

そして、もう一度、その名を呼んだ。

「……ツナ。」

パキリ

なにかが壊れた。

小さな音をたてて、静かに。

「……もついいです！僕が一思いに逝かせてあげましょう！」

とうとう堪忍袋の緒が切れたウライラが怒り口調で言いながら杖をリボンたちに向ける。

「さようなら！」

そして、最後のあいさつをしてウライラは黒いオーラを放った。

ジュウウウウウッ

「……………!?!」

消えた。飲み込まれた。

あの黒いオーラが。

ウライラは目を見開いて驚いている。

なぜなら、ありえないからだ。

ありえないことが、目の前で起こっているからだ。

「……な、ぜ……」

小さく声は震えていた。

揺らめくのは、オレンジの炎。

見つめられるのは、オレンジの瞳。

そこに浮かぶのは、一人の少年。

「……ツナ、おせえぞ」

リボーンはぼつりと独り言のように呟いた。

「オレの仲間に手出しはさせない。」

凜とした声が、響いた。

現れた。

戻ってきた。

大空が、よみがえった。

大空は

ありのままです。

大空なのだ。

標的71 大空への思い(後書き)

ゝ(・・・)ノ10万アクセス越え!

ユニーク数10000越え!

ああああありがとうございます!

(・・・)(三)・・・(オドオド

今回は一応全員:出したつもりです!

誰か忘れてないか心配:。

皆様に忘れられていたシクロとシスイも出しました!
空気化してる結加もリーダーも出しました!

疲れました(・・・)(

とうとうツナが復活、リ・ポーン!

ウライラをこらしめる!っ、っ(っ・・・

でもウライラがかわいそうなのでほどほどに(笑)

読んでくださってありがとうございます！

標的72 “支える”意味

視界が広がった

すべてが輝いて見えた

思わず涙を流しそうになった

でも声は出なかった

この奇跡に、声はいらないと思った

この奇跡を、言葉で表すにはどうすればいい？

ああ、やっぱり

君は、大空なんだ。

誰もがこの事態に驚いていた。
誰も動くことができなかった。

ただ、啞然として目の前の少年を見ているだけだった。

オレンジが、視界を、彩る。

「…ツナ!」

徳松がツナの元へ飛んでいく。
待ち望んでいたことが、やっと今起きたのだ。

ツナが戻ってきた。

それがどうしようもないほど嬉しくて。

ただ、ただ嬉しくて。

「ツナ!」

「…徳松」

優しい笑顔でツナが徳松の名を呼んだ。

その声を聞いた瞬間、徳松の心の黒いものがすぐに消えてしまった。

不安、恐怖、さまざまな“負”が消滅した。

そして、ひどく安堵感を覚えた。

「……ツナ、ごめん。オレはツナ有能力なのに……ツナを守れなかった……」

「……徳松……」

ツナは首を横に振った。
目をふせて、違うんだよ、と。

「徳松は何も悪くない。オレが……多分油断してたから……。
痛みを気にとられてたから、オレが悪いんだ。」

「……でも、前オレは言った。」

伏し目がちに徳松が小さな声で言う。

ツナの痛みを軽くすることができるよう自分が頑張ると。呪いの痛みを感じさせないように自分がツナを支えると。

そう言った。

なのに。

「…なのに、オレは…ツナを……あんな目にあわせてしまったんだ……」

悔しさをどこにぶつけていいのかわからず、徳松はただその小さな拳を握りしめているだけだった。

悔しい。

悔しい悔しい悔しい。

自分が、やるせない。

「…徳松。今、こうしてオレはここにいる。ちゃんと戻ってこれた。

…だから、いいんだ。

……ありがとう、徳松。」

ツナが小さな徳松の頭を撫でる。
栗色の髪の毛がふわふわと揺れる。

(…ああ。)

徳松はかたまった。
動くことを忘れてしまったかのように。

ただ、目の前の大空だけが見えた。

なんて、なんて人なんだろう。

なんて、なんて少年なんだろう。

なんて、なんて。

(……大空だ。)

己の能力をも包み込んでしまっその包容力。
その温かなぬくもりに誰もが飲み込まれる。

それが、大空。

それが、沢田綱吉。

「……ツナが、いてくれてよかった」

心からそう思った。

自然とその言葉が出てきた。

徳松はそつと目を閉じた。

「……つ綱吉……くん……」

その場の空気が一気にか変わった。

現実へと引き戻されたような感覚。

ツナはその声の主のいるところを見た。

「……なぜ……戻ってこれたのですか？」

ウライラは疑問を投げかけた。

不思議でならなかったのだ。

ツナの魂を奪って言霊を完了させたはずなのに。

言霊を完了させればその者は一生自分の言いなりなのに。

言霊はかけた本人以外は解くことができないはずなのに。

なぜ、ツナは魂を取り戻したのか。

なぜ、ツナは言霊を解除することができたのか。

「なぜ、ですか？」

「……………」。

ウライラが問いかけると、ツナは黙りこんだ。

その問いは、リボンたちも気になっていた。

だから全員がその問いの答えを待った。

「……………聞こえたんだ」

小さな声が沈黙を破った。

「…聞こえたって、なにがだ？」

「…声。」

ツナの意外な答えに全員は絶句した。

だがリボン、トンノ、徳松だけはその答えに心当たりがあった。

リボンたちはツナに呼びかけたのだ。

ツナの意識の中で、確かに。

やはり、それが伝わっていたのだろうか。

届いていたのだろうか。

「…最初はリボンとトンノ、徳松の音が聞こえたんだ。オレはそれに応えようとしたんだけど、できなくて。

…そうしたら、」

ツナの視線がウライラからリボンたちに向けられる。

「…みんなの声も聞こえたんだ。ニコールたちの声も。」

「…僕たちのも？」

ツナは静かに頷いた。

リボン、トンノ、徳松ははっとした。

やっと、ひとつの謎が解けた。
先程から、ひそかに心に引っ掛かっていた謎。

“支える”意味を今理解した。

ツナは戻ろうと必死だった。
でも無理だった。

戻れなかった。

一人では。

一人、では。

しかし、リボンたちの声が聞こえた瞬間、ツナは力がみなぎるよ
うな、そんな感覚がかすかにした。

そして今、ここにいる。

人は支えられて生きている。
支えなしではなにもできないのだ。

それに気付かない人間は多い。
自分は一人で生きていると思っ込んでいる者もいる。

だから、“支え”とは、かけがえのないものであり、儂いものなのだ。

「でも」と、ツナが思考を遮る。

「…でも、一人だけ…知らない声が聞こえた。…低くて優しい声だった。」

その言葉にリボーンは反応した。
低くて、優しい声。

聞こえたのはツナの意識の中であるとすれば。

間違いなく、リボーンたち三人も聞いたあの声だろう。

「…誰の声だ？」

しかしリボーンたちには聞き覚えのない声だ。
ツナも知らないと言う。

リボーンがその疑問を追究しようとした時、ザワリと嫌な気配が身体を震わせた。

ザワリ ザワリ ザワリ ザワリ

にじり寄るような、黒い気配。
その気配を醸し出していたのは。

「…そうか、そこまで来てしまっているのか。もう、時間がないと言っことですね。」

ぶつぶつと独り言を言うのは黒髪の長身の男。
その男がツナたちにザワリザワリと嫌な気配を感じさせていた。

「早くしなければ、いけない。」

ヒュッ、と空気が揺れた。
目の前からウライラが消えた。

「ツナ、後ろだ！」

「っ！」

とっさにツナは後ろを振り返り、攻撃を受け止めた。
グローブに長い杖がギリギリと押し当てられている。

「時間がないんだ。綱吉くん、観念しなさい」

「無理だ。お前が諦める。」

杖を思いきり突き飛ばしてツナは後退する。
攻撃を受け止めた左手がヒリヒリする。
ツナは腕を振ってその痛みを紛らわせた。

「綱吉くんの手をさえ手に入れば、ボンゴレリングなどたやすく手に入る」

「そんなことさせない」

黒とオレンジの瞳がぶつかり合う。

殺気があたりに漂う。

リボーンたちはそれを見ていることしかできなかった。

ズキリ

かすかな痛みが動いた。

やめて やめて
もう やめて
僕はどうなってもいい
だから
人を、傷つけないで。

標的72 “支える”意味(後書き)

どうでしたでしょうか。

“支える”の意味…お分かりいただけただけでしょうか。

…説明が下手なので伝わったか不安です!!

伝わることを祈りましょう

さて、これからの流れをどう上手く文にするか。

…難題です! (´・`・´)

がんばります!

読んでくださってありがとうございます! がんばりました!

標的73 強化オペレーション

H u r r y u p p .

B e f o r e a d r e a m i s o v e r i n a d r
e a m .

L e t ' s b u i l d i t t o g e t h e r .

T h e s p l e n d i d w o r l d t h a t I w i s h .

急ぎなさい。

1002

夢が夢で終わってしまう前に。

共に築き上げよう。

僕の望む見事な世界を。

ザワリ ザワリ ザワリ ザワリ ザワリ

ずっと肌を突き刺すような痛い気配。

ボウ ボウ ボウ ボウ ボウ

それに対抗するのはオレンジの燃え盛る炎。

黒とオレンジが睨み合う。

静かな戦い。漂う殺気。

見ている誰もがごくりと喉を鳴らす。

「覚悟しなさい」

「お前を倒す覚悟はすでに出来てる」

普段よりも少し低いツナの声が響く。
ウライラの表情がぐにやりと歪んだ。

その表情を見て、ツナは不快感を覚えた。

欲望が滲む、黒く汚れた表情だったからだ。

「……ツナ。オレがなるべく痛みをカバーする。でも傷がひどいから完全に痛みは消せないかも知れない。」

「……いける?」

「……ああ、頼む。」

了解、と言うと徳松の姿がさらりと消えた。意識の中に戻ったのだ。

外界よりも意識の中の方が能力としての力を発揮できるらしい。

徳松が消えた直後、意識がふわりとあたたかくなった。そして少し、腹部の痛みが引いた。

(……ありがとう、徳松)

意識の中にいる徳松に礼を言った。すると、額の炎が応えるように二、三度瞬いた。徳松の仕業だ。

能力として精一杯に働いているのだろう。言葉で答えることができないまでに。

それほど、傷の痛みをカバーすることに力を要しているようだ。

ツナは拳に力を込め、目の前の敵を睨む。

ズキリ　ズキリ　ズキリ

全身を痛みが駆け抜ける。

腹部の痛みか、呪いの痛みか。

すでにわからなくなっていた。

徳松が頑張っている。

意識の中で。

戦闘能力を上げながらも、痛みをカバーするように。

楽にしてあげたい、徳松を。

もはや徳松は兄弟のようなものだった。

能力という名の命を持って生まれた家族のようなものだった。

それに。

(…リボンたちを、助けたい)

怪我をしている獄寺たちや、疲労でもう戦うことができない骸たちを助けたい。

ボスに裏切られたニコールたちもまた然り。

ただ単純に、守りたかった。

「…なんですか、その目は」

ツナの目を見てウライラが鼻で笑う。

(……嘘偽りのない、まっすぐな目だ…)

そんな目、僕には必要ない。

僕は、欲しいものだけが欲しい。

いらぬものは捨てるか消すだけ。

僕は君の能力が欲しい。

でも君のその目はいらぬ。

ならば、

欲望に染めるまでだ。

「ひざまづかせてあげますよ!」

ビュンッ

杖が空気を切り裂いた。

そこから黒い世界が広がる。

それはあまりにも奇妙で、足がすくんでしまっほどの黒だった。

「…見てるだけで吐き気がしますね」

「……あれが、ウライラ様の……」

「…心の闇、なんだ……」

思わずニコールがミノイの袖を掴む。

それほど、その黒は恐ろしかった。

「綱吉くん、気をつけてください! その黒はウライラ様の心の闇、触れればどうなるかわかりません!」

「…なぜだ?」

「それはアロッチとスコッチのあのオーラと同じようなもの。心の闇とは恐怖や不安、憎しみなどが凝縮されているのです。それに触れたりしたら……っ!？」

バシユッ

ミノイは慌てて地面を転がった。
今までミノイのいた場所には、黒く焦げた跡。

「ミノイくん、親切に説明なんかしないでいいんだよ。
もう僕と君は敵同士。無駄なことをすれば消しちゃっよ。

…いずれ消えるんだけどもね。」

楽しそうにウライラは笑う。
ミノイは背中に悪寒が走るのを感じた。

これが、ウライラ。
残酷で悍ましい、すべてが黒。
そして、今まで自分たちのボスだった人間。

仮にも、命を救ってくれた恩人。

「君たちに強化オペレーションを実行させたのは無駄だった、とい

うことですね」

「強化：オペレーション？」

聞いたことのない言葉にツナは首をかしげる。
だがミノイたちは顔を歪ませて黙っていた。

「強化オペレーションというのは、僕が考えたものなんです。
力を引き出すために用いるんですよ。
でもそれはとても過酷なんです。」

黒いオーラを纏いながらウライラは説明しはじめた。

強化オペレーションには、ふたつの段階がある。

まず、体力面を強くする。

その方法は主に実戦スタイルだ。

それぞれの武器や技を用いて対戦する。

だが対戦するのは人間ではなく猛獣だった。

勝てばそのまま終われるが、負ければ猛獣に襲われる。
死と隣り合わせの練習だった。

次に精神面を強くする。

精神を痛め付けて追い詰め、それに耐えられるような精神を作り上げなければならなかった。

たとえば、彼らの辛い過去を思い出させ、苦しめさせる。

だがあまりのショックに全員が終えたあとには忘れてしまっていた。辛いものは消してしまえばいいと頭が勝手に認識してしまっていたのだ。

さまざまな苦難を乗り越え、体力と精神が強化されれば終了となる。

すべて、ウライラが考えたことだ。

「完了するのが遅くて失敗かと思いましたがね。何せあれはまだ完全なオペレーションではなかったのですから。」

「……どういう意味だ？」

「実は、この強化オペレーションは未完成だったんです。」

試したのは動物だけ、人間になど試したことはなかったんですよ。」

それを聞いたミノイたちは目を見開いた。

そして言葉を失った。

身体がカタカタと震え出した。

「……まさかお前……」

「そう。彼らにはモルモットになってもらったんです。おかげでいい実験結果がとれました。感謝しますよ。」

「そんな：ウライラ様！」

ミノイたちは思考を停止させた。

まさか、自分たちが実験のモルモットだったとは思っていなかったのだ。

確かにあの強化オペレーションは過酷だった。マリネは重傷を負ったのだから。

それは当たり前だと思った。強くなるためだから。

しかし、違ったのだ。まだ未完成だったからだ。人間には試したことがなかったからだ。

もしかしたら、誰かが死んでいたかも知れないのだ。なにが怒っても不思議ではなかったのだ。

「お前：仲間になんてことを……」

「仲間？確かにあれは仲間と言ったのだろうけど、僕は少なくとも人形、としか思ってなかったよ。」

僕が命を救ってあげたんだから、当たり前でしょ？」

平然と口に出すウライラに、全員が呆気にとられた。
なんて男だろう。

ミノイたちはショックで何も言えなかった。

「……………ふざけんな。」

拳を震わせてツナが言う。

「ふざけんな！！仲間を人形扱いして！命の恩人だからって、人を好き勝手にしていいってもんじゃない！！
そもそも人を人形扱いすることが間違ってる！」

「なに言ってるんですか。みんな僕のために働く人形なんだよ。」

「違う！お前のすべてが違う！」

お前はボスだろ、ボスなら部下の心配は絶対するだろ！仲間を思いやるだろ！それが当たり前じゃないのか！

…それもできないお前は、ボスでもなんでもない。

……………自己中心的なただの人間だ！」

ウライラの笑顔がぴくりと引き攣る。

オーラがぐにやりと歪む。

ツナは瞳が、ウライラの黒を貫く。

(……………まったく)

小さな嘲笑い。

見下すような目。

ウライラは目の前の少年を見た。

(……………ほんとうに、)

消してしまおうか、その瞳の光を。

標的73 強化オペレーション(後書き)

やっと強化オペレーションの内容が出せました！

…わかりにくいですね、ごめんなさいorz
とにかくすごいキツイんです。

猛獣とミノイの召喚する猛獣が戦ったらどうなるんでしょう？

…想像におまかせします(^ o ^) / 逃げた

さて、次回も秘密を明かせたらなあ…と思います。
確かまだ明かしてなかったはず…です。

ぐだぐだでごめんなさい！

読んでくださってありがとうございます！

標的74 闇の企み（前書き）

あ…タイトル…あんま関係ない気がします（笑）
深く捉えずに…！

標的74 闇の企み

世の中にはさまざまなものが溢れてる。
人間や、動物や、機械、ほかにもいろいろ。

それらがすべて静止することはない。
必ずなにかが動くんだ。

なぜだと思っ？

……命が、あるからさ。

命は止まらない。

もしも止まるときがあるのなら、それは死を意味するのだ。

命があるかぎり、なにかが生まれる。

いつまでも、いつまでも。

そんな単調な世界、いやだと思わないかい？

生まれて、消えて、生まれて、消えて。

そんなの、すぐに飽きてしまっただろっ？

考えたのさ。

どうすればそんなくだらしない世界を終わらせることができるのかっ
て。

そしてある日、思いついたんだ。

あまりにも簡単なことだったから、おかしくなってしまうたよ。

馬鹿らしい世界を終わらせる方法。

僕の望む新たな素晴らしい世界を作り出す方法。

すべてを

闇で

消し去ってしまった方がいいのね。

「…………ふっ」

歪んだ表情、歪んだ声、歪んだ思考回路、

歪んだ闇。

すべてが歪んで見えた。

「僕を自己中心的な人間と呼ぶなんて……」

クスクスと響くのはウライラの笑う音。
だが笑っているのは声だけだった。

「君がはじめてですよ、綱吉くん……」

その顔は憎しみが滲んでいた。
動く力を奪われてしまうほどの憎悪が。

「……ただじゃ済みませんからね。」

ぴたりと笑いが止まった。

すべてが止まったかのようだった。

ざわざわと闇が揺れる。

「………大空は黒くていいんだ。」

ビュンッ

ウライラが弧を描くように杖をひと振りすると、そこから再び闇が広がった。

じわり じわり じわり じわり

それは森を、空を侵食する。
ゆっくりと、だが衰えを知らず。

「…これじゃオレたちも闇に吞まれちまうぞ」

リポーンが小さく舌打ちをした。
どうすればいいのだ、と先程から考えてはいるのだが、まったく解
決策が浮かばない。

簡単に太刀打ちできる相手ではないとわかっているからだ。

「……できるだけ、みんな僕に寄ってきてくれない？」

不意に、トンノが全員に話しかける。

「…なんでだ、トンノ」

「いいから、早く!」

訳も分からぬまま、リボーンたちはトンノの傍に寄った。負傷している獄寺たちはロンジヤミノイたちが運んだ。もうかつては敵だったということも忘れていた。

だが、全員の息があがっている。

少し動いただけでも疲労をこんなにも感じる。体力は限界に近かった。

「…集まったぞ、トンノ」

「わかった……」

そう一言告げると、トンノはバサリと翼を広げた。

ポウツツ

トンノの身体から炎が放たれる。それは広げられた翼を伝い、リボーンたちを包み込むように炎の壁となった。

「…おい、トンノ。おめえ大丈夫なのか」

「…僕なんかより、…ツナの方が辛いんだ…これくらい、どづつてことないよ」

トンノは目を細めた。

この鳥は何を思い、何を願うのか。
金色の羽をきらめかせて。

「…おめえも伊達に大空じゃねえってことか」

「…なにそれ、どづつてこと」

「気にすんな、こつちの話だ」

かすかに笑ってリポーンはトンノから視線をそらした。

(…ツナといい、トンノといい…似てるもんだな)

すぐに他人を守ろうとする。

単純な感情で守ろうとする。

他人を犠牲にすることができない。

だから自分を傷つける。

それでも、笑顔は忘れない。
人を思いやる気持ちは失わない。

(…ツナの炎を吸ったからこうなったんだろっな)

おそらく、ツナの性格や思考がうつったのだろう。
その瞳も雰囲気もツナそっくりだ。

「……辛くなったら、言うんだぞ」

「うん、わかった」

優しい口調でトンノは答えた。

リポーンはひとつ、小さくため息をつく。

(どうせ、辛いなんて言わねえんだろ)

いろんなものを背負うんだ。
大空ってのは。

54519°

標的74 闇の企み（後書き）

秘密を明かすのやめました。

もう少し時間を置いて明かそうかなと。

今回は戦ってません。

ウライラの一人芝居みたいなものでした。

哀れ、ウライラ（、・、）すまん

重要な話はいつ書けるのか…！

読んでくださってありがとうございます！

標的 75 信念と仲間

君が頑張ってるから

僕も頑張らなきゃって思うんだ

君が強いから

僕も強くならなきゃって思うんだ

でもね、

頑張りすぎても

強くなりすぎても

優しさを忘れてしまったら、

意味がないんだよ。

君には言う必要はないんだろうけどね。

揺らめく炎の壁の内側から全員がツナを見守る。
バチンバチンとウライラのオーラをオレンジの炎が弾く。

「…あなた、そんな力が残ってたのですか？」

炎を一瞥して骸がトンノに尋ねた。
トンノは少し間を置いて答える。

「……火事場の馬鹿力かもね」

「なに、これは火事なのか!？」

「うるせえ黙ってる芝生!」

了平の勘違いに獄寺が声を荒げた。
だが傷に響いたのか、うめき声を上げてうなだれてしまった。

「…綱吉くん、大丈夫なのかな」

「ツナは…強いな。…だから大丈夫だつて!」

心配するニコールに山本が苦痛に顔を歪ませながらも答えた。

「ツナを信じるニコール。あいつなら…絶対大丈夫だ。」

「リボーンの言うとおりだよ。ツナを信じて。」

…僕は今ツナを信じることしか出来ないんだから。」

リポーンとトンノに真剣な眼差しで見られたニコールはしばらく固まってしまった。

(…二人の目……なんて、)

なんて強いのだろう。

目力？

……違う。

信念だ。

「……綱吉くんなら、大丈夫……だよね」

小さく微笑んでニコールは頭上の少年を見つめた。

「…君を、信じてるよ」

その眼差しから、不安なものは消え去っていた。

「おや、君のペットが炎でなにかしてますよ」

「トンノはペットじゃない。仲間だ」

「はっ、冗談を。仲間だなんて…気持ち悪い」

空中で二人の人間が対立する。

オレンジと黒。

炎と闇。

相反する二人だ。

「仲間なんて、重苦しいと思わない？」

「思わない。」

「綱吉くんはまだ中学生の子供だからそんなことが言えるんだよ。仲間なんて、邪魔なだけだ。足手まといなだけだ。そんな繋がりがあるだけで、どれだけのことが限られるか分かる？」

自分以外のものも守らなきゃいけないだなんて、力を無駄にしてしまっただけじゃない？」

すらすらと巧みに言葉を並べるウライラを、ツナはただじっと睨んでいる。

それに構わずウライラは話を続けた。

「結局、みんな自分が一番大切なんだよ。自分が一番かわいいんだよ。」

窮地に追いやられたとき、人はどうすると思う？

…自分を優先に助けようとするんだ。

誰よりも先に。仲間を裏切って。

そして修羅場が生まれる。

……ね、仲間なんていららないでしょ？」

同意を求めるようにウライラがツナを見つめた。

だがツナは冷静な目をウライラに向ける。

オレンジの、まっすぐな意志を持つ目。

その目は否定していた。

「お前の考えにオレは賛同しない。

…確かに、人はすぐ裏切る。簡単に大切な人を見捨てるときもある。

でもそういう人間もいれば、そうでもない人間もいる。

仲間を思い、仲間を守ろうとする。

自分のことよりも仲間のことを最優先する。

そういう人だっているんだ。

……少なくとも、オレの仲間はそうだ。」

獄寺だって、山本だって、了平だって。

小さい子供のランボだって。

あの骸だって。

なんだかんだ言って雲雀だって。

トンノも結加もロンジも。

リボーンも。

他人を思いやる気持ちを持っている。

それがどんな形であっても。

「人は己が一番大切だと言うが、確かにそうかも知れない。

でもそれは…

仲間を大切にできる自分が一番大切なんだという意味じゃないのか？
」

「きれいごとを！」

ウライラが杖を振りかざしてツナに襲い掛かる。
それをグローブで受け止めてツナはウライラに言い放った。

「お前はなにもわかってない！
自分の考えだけが正しいと思ってるだけだ！」

「当たり前じゃないですか！
自分だけしか信じれないんですよ、この世の中は！
十四歳のお子様が偉そうに！」

「お前は全てが間違っている！
他人の考えを信じようとしてもしない、聞く耳を持たない！
だからオレはお前を自己中心的な人間だと言っただんだ！」

その瞬間、ぴきりとなにかが割れる音がした。

ウライラの表情が固まった。

空気が凍った。

しかしツナは怯まずにウライラを睨みつつける。

「……………ふ、まだ言いますかその言葉」

ウライラの口許が吊り上がる。

不気味なほどに目が細められる。

カタカタとウライラの持つ杖が震えはじめた。

カタカタとウライラの肩が震えはじめた。

「僕を本気で怒らせてしまいましたね、綱吉くん！」

黒の瞳が怒りを帯びて見開かれた。

殺気がビリビリと肌に伝わる。

先程よりも痛いほどに。

「その発言をしたことを後悔するがいい！！」

ピシャアアアンッ

杖の先端から黒い雷いかずちが走った。

それはツナに一直線に向かってくる。

ボウツツ

「…くっ」

ツナはとっさに炎を放出して雷いかずちを受け止めたが、その凄まじい威力におされる。

手が、腕がビリビリと痺れる。

衝撃が全身を駆け巡る。

「降参しますか？」

「…っしない！」

「強がるのも、今のうちですよ！」

パアアアンツ

黒い雷いかずちが弾けた。

その風圧にツナは炎を噴射して耐える。

それをウライラは楽しそうに見ていた。

「…君が僕に従うまで時間の問題だ」

ゆっくり ゆっくりと

絶望を見せてあげましょう。

ゆっくり ゆっくりと

闇を見せてあげましょう。

ゆっくり ゆっくりと。

大空は黒であるべきだ。

そう思いませんか？

標的75 信念と仲間（後書き）

その先には。11万アクセス突破しました、（・・・）ノ

毎度ありがとうございます！

しかも週間アクセス数、図々しくもREBORNの小説の中で一位をいただいています。

…図々しくてごめんなさい（・・・）

こんなダメダメ小説でもこんなに見てくださってるとは、嬉しい限りです。

さて、ウライラさんが最近狂ってきました。

私の手にはおえません

彼を止められるのはツナしかいないんですから！（これが言いたかっただけ）

今回はちょっと空気化しつつある人たちの一部を出しました。

やっぱ全員は出せませんでしたけど…（・・・）

やはり結加ちゃんも重傷にするべきじゃなかった！

唯一喋れる女の子がマリネだけ！

しかもそのマリネは今回喋ってない！

…あーあ。

ツナに輝いてもらっしかない(笑)

ぐだぐだ文章でごめんなさい！

読んでくださってありがとうございます！

標的76 最終段階突入

やめて やめて

もう やめて

僕はどうなってもいい

だから

人を、傷つけないで。

ごめんなさい ごめんなさい

僕が弱かったから

こうなってしまった

もう取り返しはつかない？

いや 取り返しはつく

君なら止められる

君なら出来る

だから お願いだ

闇を、大空で、包み込んで。

「無駄な抵抗、だとは思わないのですか？」

「…思わない。」

「はっ、強がり。」

攻撃をかわすツナをウライラは鼻で笑う。

「本当は怖いのでしょうか？いいんですよ、怖くても。」

君はまだ子供なんだから、泣いたっていい。

逃げ出したっていいんですよ？

仲間を捨ててね。」

「オレはそんなことしない。オレは仲間を守り通すだけだ。」

「馬鹿なことを言うんですね。」

そんなこと無理に決まっているじゃないか。

仲間を守り通すには、僕を倒さなきゃいけないんだよ？

君に仲間を守り通すことは出来ないんだ、絶対に。

……現実を見な!!」

バシユンツ、とウライラのオーラがツナを弾いた。

ツナはオーラが肌に触れる寸前で炎を噴射させてそれを避けた。

「君が僕に平伏すのも時間の問題。

せいぜい足掻くがいい!!」

「お前になんか平伏さない!!」

負けてたまるかとツナもウライラに反撃をする。

グローブに剛の炎を燈してウライラに殴りかかった。

「スピードが遅いですよ!!」

ウライラはツナの拳をすりとかわした。

にやりと笑ってツナの表情を伺おうとすると、見えたのは炎を燈した拳だった。

バキツツ!!

ツナの拳をもろに顔面に喰らったウライラは後方へ飛ばされた。頬にとてつもない痛みが走る。

身体中に衝撃が伝わる。

熱く、やけに輝かしい。

(…っ綱吉くんの炎が身体にまわったか……っ)

身体を貫くのはオレンジの炎。

それはウライラにとっては気色の悪い、耐え難いものだった。

「…フェイク…だったとは……。ずる賢い子供ですね…綱吉くん」

「余裕をかましてるお前の不注意だろ。」

頬を手でおさえてウライラはツナを睨むが、ツナは構わず攻撃を仕掛ける。

だが先程の二の舞は踏むまいとウライラはツナの拳を掴んだ。

「っ」

「同じ罠には引っ掛かるほど僕は馬鹿じゃないんですよ!」

ウライラはツナの拳を掴む手に力を込めた。
その掌からは黒い煙がジユウウウ、と音を立てて揺れる。

「…つつ！！」

拳に痛みが走る。

ツナは腕を引こうとするが、ウライラは拳を掴む手の力を緩めない。
やがて、痛みは腕にまで浸透してきた。

ズキンッ　ズキンッ　ズキンッ

不規則に走る衝撃。

それは以前感じたことのある衝撃だった。

あの悍ましい、ツナの命を蝕む黒。
あの恐ろしい、ツナの肌を這う鎖。

「…まさか、」

「そうだよ。その痛みは綱吉くんのよく知る…」

ぞわりと背筋に悪寒が走る。
ズキリと全身に痛みが染みる。

「鎖の呪縛さ。」

ズキンッ!!

脳天を貫く痛みがツナを襲う。

ツナは炎を噴射させてウライラの手から逃れた。

「どうですか？痛いでしょう、直に呪いを受けるのは」

苦痛に顔を歪ませるツナにウライラは話しかける。

そんなウライラをツナは荒い息継ぎを繰り返しながら睨みつけた。

ぽた、と一滴の汗が伝う。

呪いは地味な痛みを帯びる。

(…っ鎖が…伸びた…)

ツナの左腕を覆う鎖。

それは着々と左手首の鎖に近づいていた。

鎖が繋がったとき、ツナは、

大空は、

消える。

「……………ウライラめ」

「綱……………吉くん……………」

リボーンは舌打ちをして低い声でウライラの名を呼ぶ。

全員は受け止め難い現実を見せられた。

鎖が繋がるときに、待ち受けているものを思い知らされた。

「さあ、最終段階だ。」

小さく笑ってウライラはつぶやいた。

「大空が消える瞬間を、とくにご覧あれ。」

標的76 最終段階突入（後書き）

少しだけバトルしてくれました！

苦手ですなあ（´・`・`）バトル…

ウライラさんの呪いも最終段階へ突入したことですし、物語のほうも最終段階へ…

…いきません（´・`・`）

キリはつけます。

ウライラをこらしめないで。

最近狂っちゃってるので！

挿絵をしている方いますよね。

すごいですよー！

わたしもやってみようと思っただけですが…

…どの場面を書けばいいのかわからなくて（笑）

やったほうが楽しいですかね？

しばらく悩んでみます。

今回はウライラがボンゴレにはいりません。

……嘘です（オイコラこの野郎

読んでくださってありがとうございます！

標的77 欲望の核

増えゆくは闇

消えゆくは大空

それらが対立したとき、
人々は絶望を味わう。

勝るのは闇か大空か。

消えゆく大空に

奇跡は起こるのだろうか。

はたして。

腕を這う不気味な痣。

それから発せられる痛みはツナの体力を少しずつ奪っていく。
少しずつ、少しずつ。

ツナの命を擦り減らしていく。

「痛い？痛いでしょ？怖いでしょ？
それでも、降参はしないんですか？」

「……するわけ、ない……だろ。」

「その強情っ張り、やめたほうがいいですよ。」

わざとらしく肩をすくめながらウライラはため息をつく。

「まあ、君に死なれては僕も困るんですけどね。

僕の計画が台なしになってしまう。」

「……計画って、なんだ。」

「あれ、言っただけでなかったかな？」

ウライラはきよとした表情をした。
だがその表情には欲望が滲んでいる。

力を欲する、黒い黒い欲望。

「僕は世界を変えようと思ったんだよ」

「世…界…:…?」

その言葉にツナは眉をひそめる。

「そう、ほら、この世界って単調すぎてつまらないだろ？」

生まれたり、消えたり、それを繰り返すだけじゃないか。
そんな変化のない流れ、なんとも感じないでしょ。

だから、そんな世界を変えてしまおうと思ったんだ」

当たり前でも言うかのようなウライラを、ツナは呪いの痛みに耐えながら黙って見ていた。

ウライラは続ける。

「僕みたいなすごい力を持った人間ってさ、なんでもできるわけ。だからこの世界にありふれてる日常生活って退屈で仕方ないんだよ。なんの変化もない人生。ただ死んでいくだけ。」

それがあまりにもつまらないから、僕が世界を変えてあげようと思っただのさ。」

納得できましたか？」

「するわけ、ないだろ！」

「ツナの言うとおりで。それが答えとして成り立ってると思ってるのか。」

ウライラの発言に反抗するツナに加え、リボンも納得できないと歯向かう。

そんな二人をウライラは冷めた目で見ていた。

「聞き分けの悪い人達ですね。」

「第一、世界を手に入れてえんなら、ボンゴレリングとマーレリング、それにアルコバレーノのおしゃぶりで成り立つトゥリニセツテを集めればいいじゃねえか。」

リボーンの言うとおりだ、とツナたちは思った。

以前、世界を我が物にしようと企んでいた白蘭は、ボンゴレリング・マーレリング・アルコバレーノのおしゃぶりの全て、トゥリニセツテを集めていた。

トゥリニセツテは世界の礎だと言うのだから、ボンゴレリングとツナのみだけを欲するのはおかしいのだ。

だが、ウライラはおかしそうに笑いはじめた。

「はははっ！僕は別に世界が欲しいわけじゃない。まあ、その三つが揃えば強大な力を入れることが出来るんだろうけど、僕の計画には必要ない。」

僕は、地球が欲しいわけじゃない。」

「どっという意味だ？」

ウライラの意味深な言葉に全員が首を傾げる。

世界を欲しているわけではない、地球を欲しているわけではない。
そうとなると、考えられることは。

「僕は宇宙が欲しいんだ。」

「…宇宙、だと？」

まさかの答えにツナたちは驚きを隠せないでいた。
宇宙という計り知れない規模のものを欲しているとは、どういう神
経をしているのだろうかと思ってしまった。

「だって、地球だけでは僕の力を使うのはもったいないだろ？
宇宙でこそ僕の力を使うべきだ。」

「…宇宙を手に入れて…どうするんだ？」

「馬鹿だな綱吉くん。
自分の思い通りの世界をつくるに決まってるじゃないか。」

万物の始まりは宇宙。
宇宙からすべてが始まった。

「…でも、宇宙を手に入れるには、必要なものがあつたんだ。」

限界を知らない宇宙。
今も広がり続ける宇宙。
謎に包まれている宇宙。

ほら、宇宙って真っ暗だろう？

僕にぴったりだろう？

でも、それを手に入れるには……

「綱吉くん、君が要となるんだ」

標的77 欲望の核（後書き）

ウライラの欲しがっているもの、宇宙なんですよ。

馬鹿だなあ（笑）

規模がでかい。

馬鹿だなあ（笑）

わたしはウライラを馬鹿にしたかっただけなんでしょうか）
（
・
・

宇宙を欲しがる馬鹿なウライラがかわいくて仕方がないです

今回は一段とつまらないお話でした。

ごめんなさい！

次回から…なにかが動きはじめるはず…！

今週は忙しすぎました。

ご了承ください）
（
・
・
（

読んでくださってありがとうございます！

標的78 熟知する闇

「宇宙だなんて、随分スケールの馬鹿でかい計画だな」

「褒め言葉ですか？リボーンくん。

ありがとうございます」

「褒めてねえ、罵ってんだ馬鹿野郎」

わざとウライラに聞こえるようにリボーンが舌打ちをする。

どうもウライラのペースにはいらいらしてたまらない。

喋り方も敬語を使うのか使わないのかはつきりしてほしい。

リボーンはウライラのすべてが気に入らなかった。

「君は黙ってて。今からは僕の革命がはじまるんだから」

「革命、だと？」

そうだよ、とウライラは満面の笑みをツナに向ける。

「そもそも“アτζヨルナーレ”って言うのは、“更新する、改定する”っていう意味なんだ。イタリア人のリボーンくんなら分かると思っただけど…わからなかつたかな？」

「おめえのくだらねえ組織に興味がねえだけだ」

ふん、と鼻を鳴らしてリボーンが踏ん返り返るように言った。
いらいらを増すリボーンに対し、ウライラはとても楽しそうである。
それがまたリボーンのいらいらを増させるのだが。

「こんな世界をつくった神様なんて、いらないだろ？
だから僕が完全に葬って、世界を、…宇宙を変えてあげようと思いまして」

「…もしかして、スペランツァのこと!？」

シクロとシスイが目を見開いて問うと、ウライラは大きく頷いた。

「その人、今は何処かで眠っているんでしょう？
スペランツァの居場所の手がかりを掴んでいるのが、君たち *tes oronascosto* (テゾーロ ナスコスト)。」

そして、それらの鍵を握っているのが、綱吉くん。

ちなみに、スペランツアのいるところに綱吉くんの能力である徳松くんの^{クォーレ}cuoreがある。

でしょ？」

ツナは言葉を失った。

あらゆることをウライラが知っていたからだ。

tesoro nascosto（テゾーロ ナスコスト）のこととはともかく、ツナの能力である徳松の核、^{クォーレ}cuoreの在り此までもを熟知している。

それが信じられなかった。

「…なぜ、知っている」

「内緒です。君が大人しく言うことを聞くなら教えてあげますよ」
卑劣な提案を持ちかけるウライラにツナは嫌悪感を抱いてばかりだった。

ウライラの傍にいと、

ウライラの姿を見ていと、

ウライラの声聞いていと、

身体の寒気が止まらない。

「早く降参しないと、綱吉くん、君死んじゃうよ?」

ツナの左腕を指差してウライラが笑う。

痣の位置は腕の中間地点。

あと少しで左手首の痣と繋がってしまうところだ。

だが、ツナには降参する気は更々ない。

「オレは、降参なんか絶対にしない」

ポウ、と額の炎が一段と燃えだした。

拳を握りしめ、決意するかのように言葉を放つ。

「オレは仲間を守る」

「その言葉、聞き飽きました」

はあ、とひとつため息をつき、ウライラは呆れた視線をツナに向ける。

「死に近づく恐怖を、」

ゾワリ、と殺気が強まる。

「とことん味わいなさい。」

ビュッ

杖をかまえ、ウライラがツナに襲い掛かる。どうやら近距離戦で決着をつけるらしい。

ツナはとっさに構えてウライラの杖をガキンという音を立ててはじいた。

それを見透かしていたかのように、ウライラは長い足を振り上げた。

「…ぐっ!」

それはツナの鳩尾に見事ヒットし、ツナはむせたように咳を繰り返す。

だがウライラは容赦なくツナに攻撃を仕掛けた。

ガスツツ

「…おや、鳩尾って急所でしたよね？」

「…確か、に…そうだ……が、」

「侮るなよウライラ」

リポーンがぽつりと言葉を発する。

二度目のウライラの蹴りをツナは片手で受け止めた。
ツナの手とウライラの足が押し合ってブルブルと震える。

「オレは、」

「ツナは、」

「お前になんか負けない。」

バキッ

今度はツナの蹴りがウライラの脇腹にはいった。

その小さい身体には似つかないほどの力の強さに、ウライラは顔を歪ませた。

「…肋骨を折る気ですか、綱吉くん」

「お前こそ、オレを殺すつもりか」

「まさか、君には生きていてもらわないと。でも多少の怪我はご愛顧、でしょう？」

ウライラがにやりと笑い、再び攻撃を仕掛ける。

攻撃、防御、攻撃、防御

その繰り返しに、リボンたちは息をのむ。

時々見える、ツナの腹部の傷。

先程のウライラの鳩尾への攻撃のせいで、さらに傷が開いてしまったのだらう。

かなり血が滲んでいるのがわかる。

だが、その痛みを感じさせないようにと徳松が頑張っている。

と言ってもツナは痛みを感じていないだけであって怪我をしているのには間違いない。

痛みはなくとも、ツナの命は十分に危ういのだ。

「十、代目………徳松さん………」

獄寺が戦うツナを見て、悔しそうに歯をくいしばる。

守護者である自分が、右腕である自分が、ツナを守ることができない。

それが情けなくて仕方がなかった。

握りしめた拳には、爪の跡がくつきりつつけられている。

少し血の滲むそれが、獄寺の心情を物語っていた。

そんな獄寺を、リボーンは黙って見つめていた。

(………何もできなくて悔しいと思ってるのはお前だけじゃねえ。

この場にいる全員がそう思ってたんだ。)

上空へ視線をうつすと、炎を纏って仲間を守るために戦うツナの姿。

(…今は踏ん張るしかねえ。耐えろ、ツナ。)

大きな漆黒の瞳を揺らし、リボーンは心の中でツナに言った。

近い 近い 近い

とても、近くにいる

ああ、ああ、ああ、

やめてくれ。

闇よ。

鎮まってくれ。

大空よ。

どうか、

包み込んでくれ。

標的78 熟知する闇（後書き）

さっさとウライラ倒れやがれ!!

と思ってる方もいるでしょう…（笑）

まさかこんなダラダラするとは、わたしも思ってたませんでした！

今回は設定のひとつである、

tesoro nascosto（テゾーロ ナスコスト）のこ
とを出しました。

みなさん、忘れていらっしやるかと思ひまして…（、・・・）

スペランツァ、眠り姫状態です。

男の人なんですけどね！

ツナの傷が痛々しくてヲヲヲってなります。

かわいそう、ツナ！

でも主人公が負傷しながらも立ち向かう話、好きです。
惚れます。

中学生に惚れる高校生、てか受験生。

なんだこれゝ(・・)(・)

強制終了します！(笑)

読んでくださってありがとうございます！

標的79 腐食のオーラ

ぶわり ぶわり ぶわり ぶわり

闇があたりを包み込む

それはただ黒くて、黒くて、
迷い込んだら、二度と出られないような黒で。

ゆらり ゆらり ゆらり ゆらり

炎が瞬き揺れている

それはただ綺麗で、綺麗で、
触れてしまいたくなるほどの綺麗さで。

そのふたつは、それぞれの存在を大きくあらわしていた。

ガキンッ ガキンッ ガキンッ ガキンッ

「よくもまあそんな体力が残っていますね」

「徳松が頑張ってくれているからな」

「ああ、綱吉くん 능력の…。」

響き渡るのはウライラの杖とツナのグローブがぶつかり合う音。それは不定期なリズムで繰り返されていた。

「実際、徳松くんを奪ってしまえば早く済む話なんだけどね…。どうせこういうのは、媒体から離れると力を発揮しなくなるパターンなんだろうね。」

「使えないおもちゃだな、徳松くん」

「徳松を馬鹿にするな！」

ガキイイイイインッ！

ツナの拳が杖を掠め、ウライラの頬を殴った。

パラパラと黒い破片が落ちていく。

ウライラの杖にひびが入り、一部がかけてしまったのだ。

それに頬までもを殴られた。
口の中に鉄の味が広がる。
ピリリツとしみて地味に痛い。

「からかったただけなのに、真に受けるとは……。最近の子供は冗談が通じないんですか？」

「お前のは冗談に聞こえなかった。」

それに、世の中には言っていていいことと悪いことがある。」

「おやおや、良く言いますね。」

誰だって他人の悪口は言いますよ。

言わない人なんて存在するのですか？

ははっ、そんな人がいるなら見てみたいですね！」

見下すような笑いをウライラはツナに向けた。

「所詮、人間などそういうものなんだよ！」

バシユンッ！！

ウライラのオーラが槍のような鋭いものとなってツナに襲い掛かった。

「土までもを腐らせるのか…」

「なんて恐ろしい力なんだ……」

ウライラのオーラによって腐っていく地面を見てリボーンは冷や汗を垂らす。

トンはさらに炎の出力をあげてそれを弾きとばした。

「…このままでは森は全壊しますよ。」

「だが、今のオレたちにはどうすることもできねえ……ただ、」

リボーンは上を見上げた。

「これが…ツナに当たったら……」

ジュワジュワと腐る土と同じ現象になるのだろうか。
それとも……。

バシユッ バシユッ バシユッ バシユッ

「ほら、ほらほら！ちゃんと避けないと！」

癩に障る笑い声が鼓膜に響く。

ツナは次々と襲ってくるオーラを炎でかわしていた。

だが止まないそれは、だんだんツナの体力を奪っていく。

(…キリがない。…だが、これ以上徳松に負担は……)

息がはずむ。汗がたれる。

筋肉が強張る。

ツナも、徳松も限界に近かった。

くらりと、目眩がした。

それをウライラは見逃さなかった。

バシユンッ!!

「…っ!!?」

全員が思考を停止した。

全員が目を見開いた。

肌色に、黒色。

「つぐ…!!!!」

「ツナ!!」

ツナの腕にウライラのオーラがあたった。
それはあまりにも突然のことです。

絶望が襲う。

「ああ、とつとつ当たってしまいましたか!!」

ウライラの笑い声はとても楽しそうで、嬉しそうで、でもリポーン
たちには届かなかった。

「…っっ…！」

全身に響く激痛。

それはさらに呪いの痛みを増させる。

じわりじわりじわりじわり

森が朽ち果てていく。

大空が朽ち果てていく。

人々は絶望を目の当たりにする。

やめて やめて
もう やめて

僕はどうなってもいい
だから
人を、傷つけないで。

標的 80 衝撃の真実(前書き)

展開が早いです！

標的 80 衝撃の真実

制裁する者

制裁される者

君はどちらになるだろうか？

もちろん、

制裁される者だろうか？

だって、

僕に歯向かうんだから。

「ツナー！」

「十代目！」

「綱吉くん！」

地上からリボーンたちがツナの名を呼ぶ。

だがツナは答えない。

激痛に顔をしかめるだけだ。

「…くっ」

「直に触れてしまいましたね、綱吉くん。痛いでしょうっ。」

くっくっつと肩を震わせながらウライラは言う。

「おや、炎が弱まっていますよ。」

「…っお前…！」

ウライラはツナに触れようと手を近づけた。だがそれをパシンと音をたててツナは弾く。

吸い込む空気は淀んでいる。

視界は歪んでいる。

ふらふらと身体が傾く。

「君って子は、本当に馬鹿ですね。
他人を守るためにこんなにポロポロになって…。」

後悔しますよ。

あの時、仲間を見捨てればよかったです。」

「っそんなこと、絶対に…思わない!」

「まだ言うか!」

バシユンツツ!

再びウライラがツナにオーラを放った。
二度目のそれはさらにツナを苦しめる。

「…っっ!!!」

……………<……………

突然、なにかが痛みと共に伝わってきた。
それは一瞬の出来事で何なのか考えることもできなかった。

(…?なんだ、今の……)

「ぼーっとしていると死んじゃいますよ!」

バシユンツッ!

……な……

また、伝わってきた。

それは全身を駆け巡って脳内に響き渡る。

(なんだ、これ……)

得体の知れないそれにツナは混乱した。

だが激痛に追い撃ちをかけるようにウライラの攻撃がツナを襲う。

バシユンツッ　バシユンツッ　バシユンツッ

……て……た……

オーラに当たるたびにそれはだんだん強くなっていく。

「諦めたのですか!？」

バシユウウウウンツ!

一際大きなオーラが放たれた。

黒いそれはツナに覆いかぶさった。

「ツナ!」

リボーンがツナの名を叫ぶ。

目の前からオレンジの炎が消えた。
大空が消えた。

広がるのは、黒。

ただの、黒。

闇に漂うひとつの炎

それはただ弱々しく

今にも消えそうな

希望

「うっひひ…」

闇に小さなつめき声。

その声の主である少年はゆっくりとまぶたをあげた。

「……………」
「……………」
「……………」

視界はただの真っ暗闇だ。

なにも見えない、なにも聞こえない。

最近、目を覚ませば見知らぬところというシチュエーションの多いツナはさほど驚きはしなかった。

だが、自分たちが置かれている状況を思い出し、一気に慌て出した。

「っそうだ、オレ…！」

(ウライラのオーラが当たって…呪いが進行して……………)

ツナは立ち上がって辺りを見渡す。

出口らしきものはどこにもない。

走り出そうとすると、すぐになにかにぶつかった。

ガツンッ

「いってー！」

ツナは額を押さえてしゃがみ込む。

思い切りぶつかったのでヒリヒリとして痛かった。

“……………あ……………”

額をさすっていると、耳になにかの音が入り込んできた。

なんだろう、と耳をすますとそれは聞き覚えのあるものだった。

“君たちにはもうなにも残されてませんよ！”

「……………この声……………まさか、ウライラ!?!」

聞こえた声にツナは驚く。

小さい声だが、それは確かにあのウライラの声だった。

“ツナに何をした！そのオーラを今すぐどかせ！”

「っトンノー！」

次に聞こえたのはトンノの声。
その瞬間、ツナは理解した。

(これは…ウライラの放ったオーラの中だ！)

ツナは自分がウライラの黒いオーラに閉じ込められていることに気が付いた。

しかし、なぜだかそれに触れてもなにも起きない。
ただ全身に変わらない痛みが続くだけだった。

ドンッ ドンッ ドンッ

ツナは早く抜け出そうと固まったオーラを拳で殴るが、まったくびくともしない。

気付けば、ツナはハイパーモードがとけていた。
額の炎は消え、グローブは手袋に戻っている。

「徳松、徳松！！」

ツナは慌てて意識の中にいるであろう徳松の名を読んだ。

「徳松っ、徳松！」

(……………ツナ?)

脳内に弱々しい徳松の声が響いた。
徳松も気を失っていたらしい。

「徳松、大丈夫!?!」

(…ごめん、ツナ。ちゃんと役目…果たしてない…………)

徳松は申し訳なさそうにツナに話しかける。

「そんなことないよ！徳松が頑張ってくれてるから…今も、少ししか痛みは感じないし…」

そつとツナは自分の腹部をさする。
先程よりは痛みは増しているが、それは本来感じるはずの痛みではないとわかる。

徳松が、まだ今も頑張ってくれていることがわかる。

(…でも、もう…………力を使えそうにない)

「……そっか」

さらなる窮地に追いやられ、ツナは冷や汗をたらす。

どうすれば、どうすればいいのだろう。

何をすればいいのかもわからず、ツナはやるせなさに拳を強く握りしめた。

……くん……

「！？」

再び聞こえた声。

ウライラのオーラを受けたときに聞いた声。

誰のものかわからない声。

……綱吉くん……

「っ誰…!？」

自分の名を呼ばれ、驚いたツナはその声の主に話しかける。

……助けて、綱吉くん……

「…助け、て…って……」

今助けてほしいのは自分の方なのに、見知らぬ誰かに助けを求められ、ツナは混乱した。

……君に、力を…貸すから…僕を助けて……

「力を、貸す？」

…君になら…できるから……僕を助けてくれるかい？……

ツナはたじろいだ。

誰かもわからない者に、力を貸すから助けてくれと言われたのだから当たり前だろう。

…君にしか、僕を助けることはできない……大丈夫、僕は君の味方だから……

どうすればいいのだろう、とツナは考える。
果たして、承諾していいものか。

だが、この声からは悪意はまったく感じられない。

この声の主は、悪い人物ではない。

そうツナの超直感が告げていた。

そして、この声を信じなければいけないとも。

「……あなたが誰だかはわからないけど……わかりました。オレに……力を貸してくれますか？」

ツナがそう言うと、声の主が安堵しているのを感じた。

……ありがとう、綱吉くん……

その声の主は嬉しそうにお礼を言った。

「あの、……あなたの名前は……？
あなたは一体、誰なんですか……？」

……僕は……僕の名は……

……

それは、受け止め難いことだった。
ツナは目を見開いてその話を聞いていた。

……信じられないかも知れないけれど……これが本当なんだ……

「まさか、本当に!？」

ツナは身体が震えているのがわかった。
信じがたい事実恐怖を覚えた。

(…すぐに助けないと!)

早く助けないといけないとツナは思った。
今すぐ、今すぐに。

「お願いです!あなたの力を…貸してください!」

……頼んだよ、綱吉くん………

その瞬間、ふわりと空気があたたかくなつた。
それと同時に、ツナの意識もぬくもりを取り戻す。

「…徳松、大丈夫?」

（ああ、大丈夫だ。

……いくぞ、ツナ！）

ポウウツ！！！！

額から炎があらわれた。

手袋は再びグローブへと姿を変え、炎を燈す。

（……待ってる！）

覚悟を決め、ツナは拳を振りかざした。

希望をたずさえ現るは炎

絶望を消し去り現るは炎

闇を打ち破りし大空よ

その力を解き放て

標的 80 衝撃の真実（後書き）

ああ…展開が早過ぎました…。
文が読みにくいです…ね。

ごめんなさい（、・・・、）

ああ、でもこれで謎が解けそうですね！

もうわかってしまったかも知れませんが…

ああ、やっぱりね

と心の中で思ってください！

標的 80 いきましたね。

まだ二ヶ月ですが…標的 80（笑）

衝動的に書きすぎましたねはい。

まだまだおわりませんから！
覚悟しといてください！（えー）

読んでくださってありがとうございます！

標的 8 1 大空再起

強くなりたい

強くなりたい

強くなりたい

みんなを守れるように 強く

最初は逃げ出してばかりだった

逃げてしまえば済むだろうと
ずっとそう思ってたばかりだった

でも、突然

そんな生活ががらりとかわった

小さな赤ん坊が現れて

銀髪のイタリア人が襲ってきて

野球少年を救って

ボクシング部の部長に入部を迫られて

もじゃもじゃアフロの子供が家に来て

風紀委員長に咬み殺されて

変な髪型の他校生に狙われて

生活が変わったんだ
変わりすぎたんだ

でも、楽しかったんだ

リングを巡って戦ったり、
未来に行って白髪の男の人と戦ったり、

いろんなことがあったけど、
辛かったけど、苦しかったけど、

その度に支えてくれたのは、
大切な仲間たちで

だから、オレはそんな仲間たちを
守ろうと思ったんだ

守りたいから
強くなろうと決めたんだ

たくさんの笑顔が消えないように

オレは

戦うんだ

オレンジ色の炎を纏って

“その拳はなんのためにある？”

“この拳は……………”

「ツナを解放しろ！」

「無理に決まってるでしょう。」

綱吉くんが抵抗するから、閉じ込めたんです。

悪いのは綱吉くんでしょう?」

子供のような言い訳をするウライラをリボンたちは睨む。

目の前には、黒い塊。

その中にはツナがいる。

ツナが閉じ込められている。

呪いが、鎖がもうすぐ繋がってしまふ。

死んでしまふ。

そんな状況で、誰が焦らずにいられるだろうか。

「…なにもできない、だなんて……」

トンノは悔しさに目を細める。
出来ることならば、今すぐツナを助けてあげたい。
だが、それは叶わない。

トンノも限界だったのだ。

リボーンたちを守るために身体から最大限の炎を放出しているのだ。

もうボロボロだった。

気を抜けば、炎は今にも消えてしまいそうで。

(…ツナ………！)

祈るしかなかった。

ただ今は、祈るしかなかった。

「…ツナ」

リボーンはぽつりとツナの名を呼んだ。

ツナの返事を待った。

いつものように、ツナが答えてくれるのを。

ツナ ツナ ツナ

お前は、そんなに弱くはないだろう？

強くもなく、弱くもない。

まだお前は可能性を持つてるからだ。

なあ、可能性を持つてるお前は、
こんなことで消えたりはしないだろう？

なくなったりはしないだろう？

これからまだまだオレがお前の家庭教師をしてやるんだ。

ちっちと出ていこよ。

なあ、ツナ。

ツナ。

……………ピキリ

小さな音が聞こえた。
全員がその音に反応した。

確かに、確かに聞こえた。

ああ、これは、

これは。

ピキリ ピキリ ピキリ ピキリ ピキリ

「……まさか、」

ピキリ ピキリ ピキリ ピキリ ピキリ

「……ほんとに……、」

ピキリ ピキリ ピキリ ピキリ
ピキリ ピキリ ピキリ ピキリ

パアアアアアアンツッ!!

黒が弾けた。
闇が弾けた。

光が見えた。

炎が見えた。

影が見えた。

人が見えた。

その立ちはだかる姿に、誰も視線を奪われる。

「……………なぜ、」

ウライラが表情を強張らせた。

カタカタと身体が震える。

にやり、と黒服の赤ん坊が笑った。

「…ウライラ」

透き通った声が響く。

炎はゆらめき、その瞳には陰りはない。

「…お前を、オレは許さない。」

やめて やめて

もう やめて

僕はどうなってもいい

だから

人を、傷つけないで。

お願いだ。

“この拳はなんのためにある？”

“ 1Jの拳士……………”

仲間を守るために、ある”

標的 8 1 大空再起（後書き）

よっしや！

ツナのターン宣言！

ピキリがうざすぎましたね。

ごめんなさい。（、・・・、）

さて、ここからが大事なところ！

読んでくださってありがとうございます！

標的 8 2 恨むのならば (前書き)

タイトルおかしいですが気にしないでください。

標的 8 2 恨むのならば

この拳はなんのためにある？

この拳は……………

人を傷つけるためにあるんじゃない。

この拳はなんのためにある？

この拳は……………

人をむやみやたらに殴るためにあるんじゃない。

この拳はなんのためにある？

この拳は、

仲間を守るためにある。

だから、この拳を振るうときは、
オレは仲間を守るために全てをかける。

ただ、単純に、
守りたいから。

「……綱吉くん、…なぜ…出てこられたのです…？」

「さあな。」

ツナは答えを濁らせる。
それにウライラは焦りを滲ませた。

「なぜ、なぜです！
僕のオーラを簡単に壊すなど…有り得ないはずなのに！！」

予想外の出来事に頭を混乱させながらウライラは叫んだ。
そんなウライラをツナは黙って見つめているだけだった。

「どんな手を、どんな手を使って出てきたのです！
君の能力、体力共々はもう限界のはずなのに！」

「……………オレは、」

ツナは一瞬黙り込んだ。
静寂が朽ち果てかけた森に訪れる。

「…オレは、支えられている。」

ただそれだけだ。」

「…っふざけているのですか…！！」

ウライラが鬼の形相でツナに襲い掛かった。
だがツナは冷静に、ウライラの攻撃を防ぐ。

ガキンツ

「!?!」

(…先程より、力が増している!?)

弾かれた杖から振動がビリビリと伝わってくる。
それはウライラの腕までもを痺れさせた。

「…本当に、何をしたのです!」

「…教えてやる。…だが、」

ゴウツ!と炎が燃え盛る。

「それは、お前を倒すことになるから覚悟しろ。」

ビュンツ!…!

目の前からツナが消えた。
ウライラは慌ててツナの姿を探す。

「……っどこに行った！」

「……ここだ。」

ガスツツ！

ウライラの背中に衝撃が走った。
振り返れば、探していた少年が無表情でウライラを睨んでいた。

景色がスローモーションで動く。
だが痛みは衰えない。

ゆっくりと、ゆっくりと身体が落下していく。

ガウンツ！

ウライラは地面にたたき付けられた。
一瞬、息が止まる。
一瞬、視界がブラックアウトする。

(…な、ぜ…っ！)

信じられない。

この僕が、この僕が。

誰よりも強い、宇宙を統べるべきこの僕が。

ただの少年に、地面にたたき付けられるとは。

(…いや、)

ただの少年ではない。

(…いつは……)

思ま思ましい

大空。

「……っこの餓鬼が！！！」

ウライラが地面を蹴って一気にツナに詰め寄る。
そして杖を大きく振りかざした。

ガキンツ

「っ!？」

また、杖から破片が飛び散る。
ヒビが再びはいる。

(…力が、はいらない!?)

ウライラは焦った。

先程より、力が出ないのだ。

体力も、能力も。

(…………なぜだ?)

疑問が多い。多すぎる。

ツナの回復といい、自分の力の減り加減といい。

突然のことにウライラは冷静を失った。

「……まさか、」

また、あいつか。

大空よりも忌ま忌ましい、

消したはずの。

「……まだ残っていたのか！」

「やっと気付いたのか？」

ふと、頭上から声がした。

見上げれば、炎。

「綱吉くん、知っていたのか!？」

「ああ。」

「ガオツ！」

ナッツはしっぽをひとつりしてツナの肩に降り立った。

「ナッツ、カンビオ・フォルマ形態変化、防衛モード（モード・ディフェンザ）！！！」

「ガオオツ！」

ツナの呼びかけに、ナッツは直ぐさま形態を変える。

バスンツ　バスンツ　バスンツ　バスンツ

「…っなんだ、それは」

低い声でウライラが尋ねる。

「一世のマント、マンテッロ・ディ・ボンゴレ・プリーモだ。」

ツナはバサリとマントを翻し、石化したオーラを振り払った。

マントは再び小さなライオンへと姿を変える。

「ふざけた真似を…」

ウライラは舌打ちをした。

マント一枚で自分の攻撃を防がれたのが悔しかったのだ。

「…ウライラ」

ツナがウライラの名を呼ぶ。

だがウライラは答えない。

ただツナを睨むだけだ。

「オレは、お前が今までどんな悪いことをしてきたかを知っている。」

その声には、怒りが込められていた。

「罪のない者たちばかりを犠牲にして、己の欲望を満たすためだけに、我が儘に力を使ってきた」

ビリビリと空気が揺れる。

力強い、押さえ込まれそうな力を感じる。

「…そんなお前を、オレは許さない。

……だから、」

オレンジの瞳が闇を捕らえた。

闇はぴくりとも動けなかった。

「過去の自分を恨め。」

過ちを犯した自分を、

恨め。

大空が 闇を

捕らえた。

標的82 恨むのならば（後書き）

ああ、初期のウライラはどこへ。

毛並みのよさそうなウライラはどこへ。

なに今の問題児ウライラ。

扱いやすいですけれども。ね。

さ、謎が：明かされていきます。

最初のファイナーレへ、皆様をお連れしましょう。

未知なる世界をこじ開けましょう。

紳士ぶるの疲れた。

（その前にわたしは女！）

読んでくださってありがとうございます！

標的83 恨み骨髓に徹す

気付いたときにはすでに時遅し

取り返しのつかないものへとなった

いつから いつから いつから

この世は汚れてしまったの？

なぜ なぜ なぜ

この世は汚れてしまったの？

その汚れにつけこんで

支配を目論んだ者は

愚かなものに見えるかい？

「過去の自分を恨めだど！？」

はっ、笑わせてくれる！

過去の僕は素晴らしい行いをしていただけさ！」

「何もかもを犠牲にしてきたことが素晴らしいとでも言うのか!？」

「そうさそうさ当たり前じゃないか!

人を思いやるだなんて生温いこと、誰しもがするわけないだろう! そんなこともわからないのかい、綱吉くん!」

本心剥き出しのウライラの言葉は重く頭にのしかかる。

呆れか、悔しさか、絶望か。

それらがウライラの言葉には含まれている。

完全に本性をあらわしたウライラは次々とオーラを放つ。

だがそれは己の力を出しきれていないものだった。

攻撃力は増した。

だが命中率は低い。

こんなにも力を出しているのに、これは本来の力ではない。いつもの自分ではない。

それがさらにウライラを苛立たせた。

「綱吉くん、君はこの世に何を期待しているのです! こんなくだらない意味のない世界に!」

「オレは、…まだわからない。

そんなこと、わからない。」

「でしようね！14年しか生きていない君にそんなことが、
「でも。」

ツナのその二文字がウライラを止めた。
攻撃、表情、すべての動きを。

「この世界をつくったのは、スペランツァだ。
スペランツァは最初からこの世界がどうなるかを知っていた。
すべてを、知っていたんだ。

人が人を殺めることも、罪を犯すことも、自分のために何かを犠牲
にすることも。

…だが、スペランツァは信じていたんだ。愛していたんだ。
この世界を、このありふれた世界を！」

ポウツ！

ツナの額の炎がさらに大きく燃えだした。
そしてその姿からは痛いほどに伝わる。

殺気ではない、覇気。

ウライラにはない覇気が。

「その減らず口、どうにかしてしまおうか……！」

ぎり、と歯を食いしばらせ、ウライラは再びツナに襲い掛かることにした。

地面を蹴るうとした。

ツナに詰め寄るうとした。

……ちめて。……

「っ!?!?」

ぴたりと、身体が硬直した。

……やめて やめて もう やめて……

「…ま、まさか……」

ウライラが目を見開いたまま呟く。カタカタと身体が震え出す。

……やめて やめて やめて……

「つくそ、くそー!!」

身体を動かそうとするが、身体に力がいらない。
まるで何かに捕われたかのように。

だんだんと焦りが滲む。

やめて やめて

もう やめて

僕はどっなくなってもいい

だから

人を、傷つけないで。

.....返せ。.....

「、お前……!!」

言いかけた途端、なにかを感じた。

凄みのある、威圧感。

それを発するのは。

「!?!」

「返せ!すべてを、返せ!!」

右手を後ろへ、左手を前へとかざす。
掌からは炎。

右手はやわらかな、左手は剛つよい炎。

その姿に、ウライラは抵抗を忘れた。

『ゲージシンメトリー、発射スタンバイ!!』

ピーーーーーッ

やめて やめて

もう やめて

僕はどくなってもいい
だから

人を、傷つけないで。

「X BURNER!!!!!!」

オレンジが広がった。

美しく、したたかな炎。

すべてに染まりつつ

すべてを飲み込み包容する

大空の力。

「ぐ…っ、ああああ!!!!!!」

男の叫び声が響く。
男が炎に包まれる。

その光景に誰もが釘付けになった。

「お、のれ…、おのれ…！！！」

ジユウウ、とウライラの身体から黒いオーラが放出される。
それと共にウライラの表情が険しくなる。

「せつかくの…努力を、お前になど……無駄にされて、たまる……か
……！！！」

一際大きな声でウライラは言い放った。

「…忌ま忌ましい、……大空が！！！！！」

ジュウウウウツ

闇が 消えた。

黒が 消えた。

大空が、ひろがった。

やめて やめて

もう やめて

僕はどうなってもいい
だから

人を、傷つけないで。

標的83 恨み骨髓に徹す（後書き）

ウライラー！！！！（）（）（）（）（）（）（）（）

フラグ立ちました。無念！

いや、そんな簡単にやられる奴じゃないはずだ、ウライラー！

わたしの中ではウライラはすごいかわいい子なんですから！

そういえば、今日（6月9日）は骸さんの誕生日。

おめでとう！

読んでくださってありがとうございます！

標的 84 失せた大空

黒が晴れた。
闇が晴れた。

空気はさらりと澄んでいる。

風が森を通り抜ける。

朽ち果てた木々

腐った土

見上げれば、大空。

見上げれば、少年。

X BURNERがウライラを包み込んだ。

命中した。確かに。

「……やった、のか……」

「ほんとうに……!？」

「……いや、待て。」

リボーンが制止する。
その目はまだ警戒していた。

「あれを見る。」

小さな指先がさす方向を全員が見つめる。
そこには。

「……うそ!？」

「まさか、まだ…！」

そこにいたのは、黒髪の男。

確かに、その姿は。

「…あれはウライラですかね」

「どう、なってんだ…！」

予想しなかった展開に全員が驚愕する。

ウライラは消えていなかった。

まだ残っていた。

目を伏せたまま地面に倒れている。

(どういうことだ…)

リポーンが頭上を見上げる。

そしてツナに真相を聞こうと口を開きかけた。

しかし。

シューウ

「!?!」

「つツナ!?!」

慌ててトンノが翼を広げて飛び出した。

どざり、とトンノの背中にツナが落下する。

「ツナ!?!」

トンノはツナに呼びかけるが、ツナの応答はない。どうしたのだろうか、とツナを見つめると。

「…!?!…!?!?」

その鳥は言葉を失った。

肌に浮かぶ黒い痣。

鎖が、繋がっていた。

呪いが、完了してしまった。

死んで、しまった。

「ツナ！ツナ、ツナ！！」

「綱吉くん！？」

「十代目！！」

ツナの元へ全員が駆け寄る。
傷の痛みさえも忘れて。

誰もが言葉を失った。
言葉を発しようとも、発することができなかった。

「…綱、吉くん……」

ニコールがふるふると身体を震わせながらツナに触れた。

「っ！」

だがすぐに手を離してしまった。

(…っ、冷たい………)

ツナにぬくもりはなく、ひんやりとしていた。

その冷たさで受け止めたくはない現実を見せられる。

少年の、死。

「…あたしたちのせい、で……」

「……オレたちが……」

「「ウライラ様、を……」」

「裏切ったから……ですか……」

マリネたちは顔を青くしてその場に座り込んでしまった。
絶望感と後悔が襲う。

ああ、あの時。

ツナに助けを求めなければ。
自分たちでなんとかしていれば。

ツナは、こんなことにはならなかったのだろうか？

「……………」

放心状態のリボンたちをつめき声が現実引きずり戻す。

全員が声のした方向を見る。

そして、絶句した。

「……………つなぜ!？」

「ちつき、あいつは…」

「…ツナが倒したはずだが……………」

次々と襲い掛かる信じがたい現実。

なぜ、なぜ？

「……………ウライラが、生きている…」

漆黒の瞳がゆっくりと、ゆっくりと開かれる。

漆黒の髪がさらりと、さらりと揺れる。

それは確かに。

アッジョルナーレのボス、ウライラ。

「てめえ、なんで生きてやがる！！」

「お前はさっき沢田に倒されたはずだ！」

ふらりと立ち上がるウライラに獄寺たちが言葉を投げつける。
全員が思っている疑問を問いたです。

(……………なにか、おかしい……………)

リポーンがなにかに気付く。

じっと歯向かう獄寺たちを見つめるウライラがおかしいことに。

違う、違う、違う。

なにかが違う。

……………ああ、こいつは。

「……………お前……………本当にウライラか？」

リポーンがウライラに問うた。

それに全員が驚く。

「リポーンさん、何言ってるんすか！」

「そうですよアルコバレーノ。あいつはたしかにウライラですよ。」

「……………そうだ、あいつはウライラだ。
だが……………」

リボーンはウライラを見つめて黙り込む。
真実を見つげるために、ただ見つめる。

「……僕は、」

ウライラが口を開いた。

たがその声は低く、どこか優しい。

リボーンはその声に聞き覚えがあった。
…リボーンだけでなく、トンノも。

「……この声、」

「…ツナの意識の中で聞いた声だ」

そう、リボーンたちをツナの元へと導いたあの声。

間違いなく、それは。

「……僕は、ウライラです。」

優しい微笑みがリボン達に向けられる。

それは先程のウライラとは違う、自然な笑顔。

「僕は、今まで…今まで……」

「操られて、いました。」

「操られて、いました。」

「操られて、いました。」

沈黙が訪れた。

真相が今、明かされる。

標的 84 失せた大空（後書き）

ぐだぐだでごめんなさい。

ちよっと今回書くの…難しかったです。

標的 85 ウライラの過去

思わぬ事態が起こるのはよくあることだ。

予想もしなかった事が起こるのはよくあることだ。

人間は万事を知るわけでも、為せるわけでもないのだから。

たいていの準備はできても、完全な準備はできやしない。

必ずなにかが欠けるのだ。

それが当たり前。

ただの人間には、ただの生物には全てを見透かせる力は与えられなかったのだから。

この世界に完全なものはない。

あるはずがない。

見たことはないだろう。

感じたこともないだろう。

だから生きていく上に驚きというものが生まれるのだ。

リポーンたちはその驚きというものを体感していた。

倒されたと思っていた人間が倒されていなかったのだから。そしてその人間の言葉が信じ難いものだったのだから。

“ 操られて、いました ”

「 操られて…：いただと？ 」

ウライラは真剣な表情で頷いた。
その目は嘘をついていなかった。
だが、そうたやすく信じることはできない。

「 嘘言ってるんじゃないの？ 」

「 命乞いに嘘をつくとは…：哀れな。 」

「 もっとましな嘘をついてみなよ。 」

次々とウライラに捧げられる言葉は、すべて「嘘だ」とウライラの言ったことを否定するものだった。

「 …：そう簡単に信じてもらえないことは…：わかっていました。 」

ウライラは悲しそうな表情をしている。
落胆したような、諦めていたような、そんな表情だ。

「でも、……綱吉くんは、信じてくれました」

「…ツナが？」

「はい。彼は疑いもせず、僕のことを受け入れてくれました。」

少し表情が和らいだウライラをリポーンはまばたきもせずに見つめた。

(…本当に悪い気が感じられねえ)

やはりウライラからは、先程のような悪い気は感じられない。殺気もすっぱりと無くなっている。

「…よし、今までおめえに何があったかを話してみる。」

信じるのはそれからだ、とりポーンはウライラに話すように促す。

「……話せば、長くなるのですが、」

ウライラはゆっくりと、だがはっきりと話しはじめた。

僕は、生まれたときから何もかも知っていました。
言葉も、様々な知識も、人間が知るもの全てを。

ですが、いくつか普通の人間が知らないようなことまでも知っていました。

……自分には、不思議な能力があったのです。

そんな僕を恐れて、周りの人間は僕に近寄ろうともしませんでした。
でも、父と母だけは僕を受け入れてくれました。

首も座っていないような赤子が普通に言葉を綴るのです。
歯も生えていないのに。

ですがそれは、僕が脳内で思っていたことを実際の声ではなく、テレパシーのようなもので周りの人間に話しかけているのだと知りました。

父と母は優しかった。

僕をかわいがってくれました。

僕は父と母が大好きでした。

それから数年、僕は普通の子供と同じように成長しました。
学校というものにも行きました。

僕は能力のことを隠していたので、沢山友達ができました。

それからまた数年して、僕は大人になりました。

僕の家は農家でしたので、父と母の手伝いをしていました。

僕は一度、父と母に僕の能力で仕事をしてみようかと提案しましたが、さすが二人は首を横に振りました。

「手間隙かけて育ててこそいいものが出来るんだ」

それから僕は能力を使わなくなりました。

僕の能力は、一本の杖を使って發揮するものでしたので、僕は杖を封印しました。

これからは能力に頼らず、普通の人間のように生きていこうとしたのです。

…しかし、その矢先。

父と母は伝染病にかかってしまいました。

でも何故か僕には伝染しなかった。

それが能力のおかげだと気付いたのは二人が助からないと知ったときです。

やつれていく二人を見て、僕は何度も涙を流しました。

何度も能力を使って二人を助けようと思いました。

でもそれは手遅れで、手の施しようもない所まできていたのです。

そして二人は死にました。

僕に「ありがとう」と言っ、ゆっくりと息を引き取ったのです。

僕は自分を責めました。

助けられなかった自分を責めました。

涙は止まりませんでした。

何日も何日も僕は泣いていました。

そして僕は放心状態のまま日々を過ごしました。
二人の身を整え、墓に葬りました。
僕は墓の前でただ座っているだけでした。

涙は枯れ、声も出ませんでした。

それがいけなかったのでしょうか。

突然、目の前に黒い霧もやのようなものが現れました。
僕はそれが何かもわからなかったので、ただそれを見つめていまし
た。

何故あの時逃げなかったのでしょうか。
今でもあの時の自分を責めたくありません。

「お前をわたしの器にしてやろう」

黒い霧は僕にそう言いました。

やっと身の危険を感じた僕は逃げました。
能力を使い、必死に逃げました。

しかし僕はたやすく捕まりました。
心の弱さに潰け込まれたのです。

黒い霧は僕の脳を蝕み、あっさりと僕の身体を手に入れてしまいました。
した。

僕は意識の片隅で叫びました。
助けてくれと、出してくれと。

しかし僕の身体を奪った黒い霧は、僕を意識の中に封印しました。
かすかに能力を使えた僕は、気付かれないように、消えたふりをし
てなんとか残りました。

ですが身体を取り返すことができませんでした。

それから、黒い霧は僕的能力を使い沢山ひどいことをしました。

…さ迷っていたニコールくんたちの魂を拾い、生き返らせたのもそ
のときです。

人を殺め、罪なきものを滅ぼしていきました。

そして組織をつくりました。

それがアッジョルナレです。

黒い霧はとうとう、本当の目的を実行しようとしたのです。

「ボンゴレリングと沢田綱吉を手に入れ、すべてを変えよう」

それを知った僕は、意識の中で止めようともがきました。

何度も抵抗しました。

でもそのたび、意識の中に押し込められてしまいました。

綱吉くんに呪いをかけ、それが進行していくのを黒い霧は楽しみに
していました。

そして綱吉くんたちをこの森へと誘い、最終段階へと乗り出しまし
た。

綱吉くんを操ったとき、僕は綱吉くんの意識の中に入り込むことに

成功しました。

そして綱吉くんの意識の中に同じように入り込んだりボンくん
とノンくんを導きました。

意識を取り戻した綱吉くんに放たれるオーラを用いて、僕は綱吉く
んに話しかけました。

何度も何度も諦めずに。

そして、綱吉くんは僕に気付いてくれた。

最初は驚いていました。

でもすぐに僕のことを信じてくれました。

黒い靄が操っている僕の身体が綱吉くんの炎に触れたとき、僕を押
さえ付ける力が弱まりました。

それを利用して僕は僕自身の能力を綱吉くんに与えました。

…綱吉くんが放った攻撃、…あれは僕を操る黒い靄を浄化するもの
でした。

僕は消してくれてもいいと言ったのに、綱吉くんは僕が助かる方法
を選んだのです。

無事僕から黒い靄は離れました。

僕はやっと、自分の身体を取り戻しました。

……しかし、綱吉くんの呪いが完了してしまっただのです。

僕が身体を取り戻すかわりに、綱吉くんが死んでしまった。

僕の、せいで。

「……まじ、かよ……」

「本当、みたいですね」

「これが、事実なんです」

涙を流しながらウライラは言った。
ごめんなさい、と謝ってツナに近づく。

「……………綱、吉くん？」

冷たいツナの身体に触れ、ウライラは名を呼んだ。
すると、ウライラの表情が変わった。

「……どうしたの？」

思わずトンノがウライラに話しかける。

「…もしかしたら、」

漆黒の瞳が揺れる。

「……綱吉くんを、生き返らせることができるかも知れない」

一筋の希望の光が差し込んだ。

標的85 ウライラの過去（後書き）

か、書きたかったことがやっと書けました！
少しすつきり。

ツナさんには申し訳なかったけど…。

いかがでしたでしょうか。

予想はついていたと思いますが…。

ウライラさんはかわいそうな人だったんです。

だからウライラさんを嫌いにならないでください！
かわいそうだよ（もう黙れ）

もう少しわからやすく、上手く綴ることができたなら…。

今回のウライラさんの語り、夏目漱石の「こころ」みたいですね。
あれは傑作です。

一度読んでみてください。

（話がズレた／そんなの気にしない／日常茶飯事だから）

さて、イラストでも描いてきます。

読んでくださってありがとうございます！

標的86 黒から白へ

もしも願いが叶うのなら、

僕はあの時に戻って、自分を叱ってしまいたい。

何もできなかった自分を、殴ってしまいたい。

能力を有しながら、無力な自分は、

なにを、どうすればいい？

人は無力だ。

ただ無力だ。

一人ではね。

「…生き返らせることができると、だと？」

ウライラはしっかりと頷く。
悍ましい黒い痣が浮き出る腕をそっと掴み、真剣な表情をする。

「どづいつことなんだ？」

「根拠はあるの!？」

「ええ、あります。」

かすかに、ですが…綱吉くんの気を感じるんです。………それに、

一瞬黙り込み、ウライラは目を伏せる。

「……この呪いは、呪いをかけられた人間の命を、一時的に所持する…つまり、自分のものにできるんです」

「…じゃあ、まさか、」

「はい。呪いをかけたのは操られていた僕。
意識は違えど、僕に変わりはないのですから…おそらく、僕は今綱吉くんの命を所持している。」

ウライラは己の掌を見る。

かすかに、ぬくもりのある何かがウライラの身体を包んでいることに気付いた。

(……………この暖かさ、は…)

間違いなく、大空の少年。

「…じゃあ、十代目はまだここにいるってことなんだな!？」

「本当に生き返らせることができるの?」

「……………確率は、五分五分ですが…成功すれば生き返ります。」

ゆっくりと立ち上がり、ウライラは拳を握り締め、天を仰ぐ。

髪が風で揺れる。

その隙間から見える瞳は、強く、何かを願うものだ。

ウライラは地面に転がっている杖を拾い上げた。

空気を切るように杖をひと振りすると、黒だったものが白へと色を変えた。

「それが、本当の杖の姿なのか」

「はい。……少し欠けてしまっていますが大丈夫ですね。」

ウライラは真の姿へと変えた杖につけられた傷を撫でながら呟く。
それはツナがつけた傷なのだが、致し方ない。

「……その前に、」

くるりとウライラがニコールたちの方に振り向いた。
ニコールたちはびくりと肩を震わせる。

「……ニコール……くんたち……ですよ……」

ぎこちない笑みを浮かべ、ウライラは名を呼んだ。

ニコールたちは身体を強張らせたままだ。
自分たちに話しかけているのは、意識は異なるが、確かに外見はあ
のウライラなのだ。

今までひどいことをしてきた、残酷な男。

恐ろしいと思うのは自然だろう。

「…君達には、たくさん…謝っても謝りきれないですね」

申し訳なさそうにウライラはうなだれる。

「……………綱吉くんを、生き返らせることが出来たなら…成功したなら、
……………君達とゆっくり話をしたいです」

ニコールは目を見開いてウライラを見つめている。

マリネが不安そうにミノイの表情を伺い、そんなマリネの頭をミノイは優しく撫でた。

啞然としている双子のアロツチとスコツチをビンツがぱしんと軽く叩く。

「「痛いよジジイ!」」と罵声を浴びせられるがビンツは素知らぬ顔をする。

そして口を開いた。

「オレはよお…、お前を見ると色んなこと思い出すんだが…、……………
……………でも、それが全部嫌なことって訳じゃねえんだ」

頭をポリポリとかきながらビンツは目を逸らす。

「「……………僕らも、ジジイの言うとおりだよ」」

「ジジイつつな、ピンツ様と呼べこのクソガキ共め」

もう一回ピンツが双子を叩いた。

それを横目で見ながらマリネがウライラに話しかける。

「あ、あたしは…あんたを操っていた奴に怪我させられたも同然、
なんだけど…でも、あんたの能力があたしの怪我を治してくれた
んだ、よ……」

そう言うとマリネはミノイの背中に隠れた。

「ふふ、素直じゃないんですからマリネは。

…確かにあなたはひどいことを繰り返してきましたが、それはあなた自身ではないのでしょうか」

「そうだよ。…あなたを見ると、ちよつと怖くなるけど……でも…
あなたを受け入れたいと、思うんだ。」

ニコールがまっすぐな瞳をウライラに向ける。

「…あなたと、向き合いたい。」

優しい笑顔が六つ、ウライラの視界を彩った。

それは自分が意識の中でかすかに感じたことのある、ぬくもりのあ

る笑顔。

歪んではいたけれど、みんなで笑い合っていたあの頃。

…ああ、あれが本当の僕であったならば。

…君達と、楽しく生きていられたのかな？

「……必ず、綱吉くんを生き返らせる。」

ふわり

ウライラの杖にオーラが燈った。

黒ではない、美しいほどの、白。

純粹で、無垢で、汚れない白。

「僕は、またみんなで笑い合いたい。」

心に優しい願いが宿った。

標的86 黒から白へ（後書き）

ほ、ほのぼのを目指したはずが……、……、……

ツナさんがいないと書く気がしない。

……予告しておきますと、展開はおそらくシリアスっぽくなります！

まだわかりませんが……多分。

一応覚悟しておいてください

読んでくださってありがとうございます！

標的 87 気付かない理由(前書き)

タイトルに関連性があるのだろうかと疑ってしまっ…。

標的87 気付かない理由

人ってさ、なんで生きていると思う？

理由はそれそれだけど、よく考えれば答えはひとつなのさ。

わかるかい？

これは難しくも簡単、簡単で難しい問題なのさ。

ある人は、運命の人と巡り会ったため。

ある人は、お金持ちになるため。

ある人は、……言っても言い切れない。

でも、それに気付けるのはほんの一部の人間なんだ。

ほとんどの人間はそれに気付かず人生をまっとうするのさ。

なぜ、人は生きるの？

なぜ、君は生きるの？

なぜ、僕は生きるの？

“目標”を達成するだけだよ。

「僕は、またみんなで笑い合いたい。」

歪んだものではなく、ちゃんとした、…日常の幸せを噛み締めたい。

そう思うのはおかしいだろうか？

そう思う僕を君達は笑うだろうか？

「……………ウライラ様、」

びくりとウライラの身体が震える。

顔をあげると、ニコールたちが優しい笑みを浮かべていた。

「……信じています、あなたを。」

だから、

綱吉くんを、助けてください。

口に出さなくても、ニコールたちの思いが伝わってきた。
なぜだろう。もう契約はきれているはずなのに。

なぜ、こんなにも彼らの気持ちがわかるのだろうか。

「…約束します。」

ぐっ、と拳に力が籠る。

幼い頃の気持ちがよみがえる。

彼らを守りたい。

ひたり、とウライラは地面に掌をおく。
すると、掌を根源にウライラを白い陣が覆った。

“ Answer my voice ”

低く優しい声が響く。

“ I return life of the thou with
my power ”

ウライラは掌をツナにかざした。

“ The name of the thou is Tsuna
Yoshi Sawada ”

すると、ツナの身体がふわりと浮き、トンノの元から離れた。

“ Light up the light. Erase dark
ness. ”

陣の中心にツナは横たわったまま降り立ち、呪いの痣である鎖が輝きはじめた。

“ . . . Even if my life fades away ”

パアアン、と光が弾けた。

リボンたちは目を開けていられなくなり、腕で己の目を庇う。

隙間からのぞくと、陣からは凄まじい風が吹き荒れていた。

だがウライラは服や髪をたなびかせるだけでそこに立っている。

白い杖がかざされた。

そしてそれはこつりと軽い音をたてて地面を叩く。

…ずるり、

リボンたちは目を疑った。

ツナの身体から、黒いもの……鎖が、次々と離れていくのだ。

ずるり ずるり ずるり ずるり

腕から、首から、脚から、全身から鎖が離れていく。

長々と続く鎖は、ウライラの胸へと吸収されていった。

ずるり ずるり ずるり

まがまがしい黒が白に覆われていく。
しかし。

パアアアアンツ

また、光が弾けた。

その衝撃でウライラの身体が吹き飛ばされた。

(……………ああ、)

ウライラは目を細めながら心の中で呟いた。

(……………失敗、してしまった……………)

成功させると言ったのに。

失敗してしまった。

自分の力が足りなかったのだろうか。

方法を間違えたのだろうか。

……それとも……。

浮遊感を味わいながらウライラは後悔した。

また守れなかった。

また……失ってしまうのだろうか。

……ああ、なんて僕は無力なんだろう。

“……………一人ではね。”

突然聞こえた声にウライラは目を開ける。

すると、浮遊感は消えて誰かに支えられていた。

「……………ウライラ様。」

「……!?!?!?」

ウライラは目を見開いた。

まさか、と後ろを振り返る。

そこにいたのは。

「……ビんツ、くん？」

「大丈夫ツスか、ウライラ様？」

優しい笑みをしたビんツがウライラを支えていた。

なんで、とウライラは言いたいが言葉を発することができなかった。

「…オレだけじゃありませんぜ」

その言葉の直後、掌をなにかに、沢山のあたたかなものに包まれた。

「……ウライラ様」

「ウライラ様！」

右手をミノイとマリネが。

「ウライラ様、」

「ウライラ様っ」「」

左手をニコールと双子のアロツチとスコツチが握っていた。

「……どっして、」

「ウライラ様の力になりたくて。」

驚きを隠せないウライラの顔を見て、ニコールたちは笑い出す。

「ははっ、ウライラ様すごい驚いてる！」

「……だって、……君達がここにいるから……」

「ウライラ様一人だけではお辛いでしょう？」

すとん、と足が地面につく。

ウライラはまだ驚いたままだ。

「……ウライラ様、知ってますか？」

不意に、ニコールがウライラに尋ねた。

「人間って、どんなに強くても、どんな能力を持っていても、結局は無力なんですよ。」

「……………」

ウライラは黙ってその話を聞いている。

「でもね、」とニコールが言う。

「傍に誰かがいれば…人間は誰でも強くなれるんですよ。能力も発揮できるんですよ。」

…結局、人間一人では何も出来やしないんです。誰かがいないと、何も出来ないんです。」

「……だから、あたしたちウライラ様の力になりたくて。」

「遠慮とかしても無駄ツスからね！」

「オレたちでも力になれるんですからね！」

「みんなの言うとおりです。わたしたちのなけなしの力でも合わせれば使い物になるはず。」

ウライラは何も言えなかった。

ただ瞳があつくなるのを感じるだけだった。

握られる手が、あたたかい。

見つめられる瞳が、あたたかい。

人は無力だ。
一人ではね。

「…君達の言うとおりですね」

ウライラは痛感した。

自分一人では何もできない。

だが、ニコールたちがいれば、…仲間がいれば、

「人は強くなれる。」

ぶわり、と風が吹き抜ける。

ウライラは自然と力がみなぎるのを感じた。

人ってさ、なんで生きていると思う？

“目標”を達成するためなんだ。

でも、その目標を達成すると……………。

“僕の目標、それは君たちと笑い合うこと。”

標的 87 気付かない理由（後書き）

ああ、わたしの好きな展開です。

絆とか、仲間とかが大好物なんです。

よかったね、ウライラさん！

書いててこっちが幸せになりました。

早く元気なツナが見たい。

一応話のストックはありますよ。

標的 90 まで書いてます。

…進むの早いですね……。

意味深な言葉を出させていただきました。

どういう意味でしょうね！

推理してみてくださいね。

読んでいただきありがとうございました！

標的 88 繋いだ手

昔、ある魔術師がいました。

その魔術師は強い力を持っていました。

誰も持っていない、誰も勝ることができない力。

そんな力を余していた魔術師は、いろんな術を生み出しました。

そしてそれを書き留めました。

…でも、どんなものにも危険はつきもの。

魔術師はある術を生み出すとその術の毒に侵されてしまいました。
苦しみの中、魔術師は思いました。

ああ、死ぬのだなと。

どんなに力を有しても、死ぬものは死ぬのだと。

死ぬのは怖くはありませんでした。

でも、心に引っ掛かることがひとつ。

それは自分の生み出した術をまとめた本でした。

せっかく自分がまとめた多くの術を、このまま誰にも知られずに無駄になってしまうのだろうかと不安になりました。

魔術師は最後の力を振り絞り、その本に刻まれた術を解き放ちました。

誰かの記憶に刻まれるようにと、自分の生み出した術がいつまでも絶えないようにと。

そして魔術師は深い眠りにつきました。

いくつかの問題を残して。

自分の死の原因となった、最後に生み出した術までもを解き放ってしまったのです。

もう取り返しはつきません。

誰にも止められません。

いつまでも、語り継がれる様々な術。

その中で、最も危険なもの。

魔術師を死に追いやったもの。

それは、

“鎖の呪縛”

陣の中心には一人の少年。

それを囲むのは七人の人間。
七人を繋ぐのは、それぞれの掌。

“人は無力だ。一人ではね。”

「……本当に、いいのですか？」

「今更なにを…僕はもう決めたんですよ。」

確認するウライラにミノイはため息をついた。

「もとはあなたが助けてくれた命。

あなたがいなかったらわたしたちはここにいないのですよ。
だからわたしたちはあなたの力になりたいのです。」

「………そう、ですか」

心がぼかぼかとあたたかくなる。
心地のいいぬくもり。

「………ひとつ、いいですか。」

ウライラの言葉に、ニコールたちは頷いた。

「……もし、綱吉くんを生き返らせることができ、
日常生活とい
うものを送ることができるようになったら………」

ザアアアッ、と風がウライラの言葉を掻き消した。
だがニコールたちは笑っていた。

「…もちろん。」

また、約束ができました。

それはどうしても叶えたい約束。

それを叶えるために。

「……………いきますよ。」

手を握る力が強まった。

掴んだこの手を、手に入れた居場所を、離すものか。

大切なものを、手放すものか。

だって、僕らは……………。

「…ウライラたち、何をする気だ？」

「さっぱりわからない、けど……」

光に包まれたウライラたちをリボーンたちは見つめる。
トンノはぼつりと呟いた。

「……………嫌な予感、が……………」

気のせいであってほしい。

この嫌な予感は、勘違いだ。

そう願わずにはいられなかった。

朝焼け色の炎が、不安に揺らめいた。

“ Answer my voice ”

再びウライラが呪文を唱えはじめる。

“ I return life of the thou with
my power .

The name of the thou .

Light up the light .

Erase darkness .

Even if my life fades away . . . ”

ウライラが更に手を握る力を込めた。

“ . . . Even if We abuse our power ”

ずくん、と動悸が一際大きく跳ねた。

掌から掌へ。

あつい何か伝わっていく。

痛みのような、衝撃。

その恐怖からウライラたちは互いの掌をさらに強く握り締めた。

大丈夫、大丈夫。

みんながいるから、怖くない。

大丈夫、大丈夫。

みんながいるから、平気なんだ。

大丈夫。

パアアアアアアアアアアアンツ！！！！

森を光が包み込む。
爆風が吹き荒れる。

だが繋いだ手は離さなかった。

だって、だって、

僕らは本物になるんだ。

だろっ？

標的 89 つかの間の喜び

僕らは道を間違えていた。

方法を間違えていた。

歪んでいた。

でも、今はもう違う。

正しいと思う。

本物になりたいと願うこの気持ちは、否定できないものだ。

否定するものなど、ない。

この人たちと、君たちと、

“本物になりたいんだよ。”

ウライラ様、ねえウライラ様。

僕たち、あなたを見て思い出すことは沢山あるけれど、
その中でキラキラと輝くものがあるんだ。

確かにおかしかった。

確かに歪んでいた。

でも、あの思い出は、

僕らのすべてなんだと思う。

辛いことも、苦しいことも、

全部あわせて“思い出”と呼ぶのならば。

双子がビンをからかって、

それにビンを怒って、

マリネが馬鹿にして、

ミノイがなだめて、

僕がそれを見て和んで、

振り返れば、

笑顔のあなたがいたんだ。

そんな思い出を、
はじめから、本物のあなたと、
作りたいんだ。

僕たちとあなたは、
本物になれるんだ。

ねえ、ウライラ様。

僕らは、“本物”になれるすよね。

ねえ、ウライラ様。

ジュウウウウウウウウ...

陣が煙を出して消えていく。
光もおさまり、平常の太陽の光が差し込む。

少年を囲んで立つのは七人の人間。

彼らはただ立ち尽くしていた。

目を閉じて、動かずに。

「……………終わった、のか？」

「…わからない」

リボンとトンノが汗を浮かべてウライラたちを眺める。
風が頬をかすめた。
ひんやりと冷たい。

静寂が訪れる。

聞こえるのは自然のざわめき。
人工的な音は、しない。

ぴくり、

大空が目覚めた。

「ツナっ！！」

「十代目え！！」

「沢田ああ！！」

「綱吉くん！！！！」

途端、胸があつくなつた。

なにかが溢れてきそうだった。

こらえきれない、無性にあついもの。

これを、人は何と呼ぶのだろう。

「……………みんな、な……………」

ツナはゆっくりと身体を起こす。

何が起こっているのかわからないようだ。

「まったく、ダメツナが。」

リポーンがぺしんとツナの額を叩いた。

「いてっ」とツナは額を押さえると、目の前の赤ん坊は笑っていた。

「オレの教え子に生き返った奴なんかいねえぞ」

「……オレ、死んでたの？」

「なんだおめえ、自分が死んだことに気付いてなかったのか」

「……普通気付く？」

ツナは正しいことを言ったと思う。

だがこの家庭教師様の前では常識は通じやしないのだ。

「みんな心配してたんだぞ」

「えっ、」

ツナは顔を上げた。

そこには、笑顔やら泣き顔やら。もちろん無表情もいた。

「心配したんスよ十代目！」

「おかえりなのな、ツナ！」

「極限に頑張ったな、沢田！」

泣き顔の獄寺、笑顔の山本、了平。

「ツナっっ！」

「小動物が何してるの」

「クフフ、帰ってきましたか」

泣き顔のランボ、無表情の雲雀、にたり顔の骸。

「綱吉様……」

「綱、吉くん……」

「おー、坊主っ」

「「ツナ！」」

今にも泣きそうなロンジ、泣き顔の結加、満面の笑みのリーダー、シクロとシスイ。

そして。

「ツナ、おかえりなさい！」

「おめえはやっぱいろんな可能性を持つてんな。
……………おかえり、ツナ。」

トンノと、リボーン。

かけがえのない、仲間。

大切な、仲間。

それは、自分の、居場所で。

「……………よく、わからないけど……………、……………ただいま。」

ただいま、ただいま、ただいま。

今まで、これほどこの言葉が心に響いたことはあるだろうか。

“みんな、ただいま。”

“おかえりなさい。”

「……………綱吉くん、」

優しい声が名を呼んだ。

振り返ると、黒髪の男が微笑んでいた。

そして、六人の青年たちも。

「……………ウライラが、助けてくれたの？」

「…僕だけではなく、彼らもです。」

両隣を見遣ると、ニコールたちも優しい笑みを浮かべた。

「……そっ…か、……ありがとう！」

ツナは心から感謝した。

今だに状況は把握しきれていないが、ウライラたちが自分を救ってくれたのは間違いないのだとわかっていた。

「……感謝するのは、こちらの方ですよ。」

ツナは言葉の意味がわからず首を傾げる。

「…まずニコールくんたちを、助けてくれた。操られていた僕の攻撃から守ってくれた。

そして、僕を操っていた黒い霧もやを浄化してくれた。

……十分感謝すべきことですよ。だから、」

ありがとう。

感謝しきれないだろうが、今は君に感謝の言葉を述べたい。君のおかげで僕らは今笑っていられるのだから。

「本当に…ありがとう……」

ふらりと、身体が傾いた。
それはまるでスローモーションのようだった。
七人の人間が、地面に倒れ伏した。

「っウライラ、みんな!!!」

ツナがウライラたちに触れようと手を伸ばした。

だが、その手はすりと身体を通り抜けた。

「……………え？」

今、身体を、通り抜けた？

ツナは掌を見つめた。

かたかたと震える。

それは恐怖。
でも何の？

消える、恐怖。

無くなる、恐怖。

ねえ、みんな。

ねえ、ウライラ様。

“ 僕らは、本物になるんだよ。
”

標的89 つかの間の喜び（後書き）

…早いすかね、進むの。

もう標的90にいけますよ。

一日一話はきついですね！

ストックしまくらなければ。

ツナが起きたと思ったらウライラたちが…！

本当につかの間でしたね。

短すぎた！少し後悔。

さて、これからの展開に重要なことが出てきますので、お楽しみに！

読んでいただきありがとうございます！

標的90 首謀の正体

身体が、動かなくなっただ。

思考が、止まってしまったんだ。

どうすればいいのかわからなかった。

目の前に、人がいる。

目の前に、人が、倒れている。

目の前に、

人が、

倒れて、いる。

そして、その人たちは、

透けて、いる。

「っウライラ!!?」

声が震えていた。

全身が震えていた。

特に、ウライラに触れようとした右手が。

ツナはウライラに触れようと手をのばしたのに、それは叶わなかった。

手が、するりとウライラの身体を通り抜けたから。

何が、起こっているのだろうか。

「ウライラ、ウライラ!!」

「……っ、なよし……くん？」

ウライラのまぶたが開かれた。
だがその瞳はうつろだ。

「どうしたんだ、ウライラ」

リボーンがウライラに問うと、ウライラはつつすらと笑みを浮かべた。

「……どうやら、…限界……みたいですね……」

「…限、界？」

その意味がわからず、ツナは言葉を繰り返した。

「……力を、使い尽くしてしまったのです。僕も、彼らも。」

ウライラが視線をやると、同じように倒れていたニコールたちも力無く笑っていた。

やはり、身体は透明になりつつある。

「……もしかして、オレのせい？」

(オレを助けたから？オレを生き返らせたから？)

ツナはそう思わずにはいられなかった。

だが、ウライラは首を横に振る。

「いいえ、綱吉くんのせいではないですよ。……僕らの精神、体力、能力共々が悲鳴を上げていたのでしょう。」

…それに、“鎖の呪縛”は操られていた僕がかけた。それを、僕…僕らが吸収したのが追い撃ちをかけたのでしょうか。」

あれはとてつもない怨念や恨みを含んでいます。そんなものを吸収すれば、こうなるのも同然です。」

ウライラは申し訳なさそうな表情をした。

「…そんなものを、君一人に背負わせてしまって、申し訳ないと思っ
ています。」

「なんでおめえ等七人が倒れるほどの呪いをツナー一人がかけられて
もこんな風に倒れなかつたんだ？」

それこそツナはすぐに死んでしまうだろう、トリボーンはウライラ
に言った。

ツナは痛みを苦しむも、すぐには倒れたりはしなかったからだ。

「…おそらく、綱吉くんの方でしょう。」

「力、って？」

「綱吉くんは大空属性。大空属性は“調和”でしょう。…だから、
わずかにでも呪いを綱吉くんが調和させたのだと思います。」

「…確かに、その可能性はあるな。」

ウライラの考えにリボーンが頷いた。

大空属性の“調和”なら、そういうこともできるかも知れない。

「……だから、綱吉くんは悪くはないのです。」

「……でも、」

ツナの視界がぼやける。

そして、手の甲に涙がぼたりと落ちた。

「………僕がいけないんだ。」

あの時、僕が弱かったから……」

黒い霧もやに身体を乗っ取られたあの時の自分をウライラは責めた。
あれがなければ、こんなことにはならなかったと。

『お前が弱いから悪いんだ、ウライラ』

森に声が響いた。

地を這うような、低い声。

その声を聞いた途端、悪寒を感じた。

「……誰……」

「この声、まさか………」

ウライラが汗をたたりと垂らす。

その顔には焦燥がにじみでていた。

『お前が弱いからだ。そのせいでそんな子供に私は負けた。お前のせいだな。』

しゅるしゅると黒い霧が姿を現した。

先程のどす黒いオーラのような、漆黒の霧。

「なんだあの気持ち悪いやつは」

「……あれが、僕を操っていた…正体です。」

ウライラが黒い霧を睨みつけながら言う。

するとその黒い霧は愉快そうに笑い出した。

気色の悪い笑い声が耳をつんざく。

『はっ、はははははは！無様だなあウライラよ！私の言うことを聞いていればよかったものを！』

「お前誰だ！」

ツナは黒い霧を睨みつける。

『この姿で会うのは初めてだからな。沢田綱吉。』

くすくすと笑いを含みながら黒い霧は言った。

『私の名はSebastiano Alfonso Castiglioni（セバステイアーノ・アルフォンソ・カステイリオーニ）。』

「イタリア人、なのか？」

『私は何人でもない。まず人ではないからな。』

黒い霧：セバステイアーノは嘲笑うかのように言い放った。
その態度が気に入らず、リボーン表情が厳しくなる。

『私は地球が出来る前から生きているのだ。お前たち、スペランツアを知っているだろう。』

「っっスペランツア様を知っているのか!?!」

シクロとシスイが身を乗り出すように反応した。

二人が待ち焦がれる人物、スペランツアを知っているとはどういうことなのだろうか。

『知ってるもなにも、私はあいつに封印されたからな』

「封印って……」

『私は宇宙が誕生したのと同時に生まれた。しばらく宇宙を漂い、己の力を用いて様々なことをしていた。』

だがスペランツアに見つかり私は奴に封印されたのだ。

私の持つ力が悪いものだと言うことを知ってな。

私は封印される寸前、奴の作り出しているという星に逃げ込んだ。それが地球だ。』

セバステイアーノの話の聞いているうちに、ツナはだんだんわかってきた。

奴がなにをしようとしているのかを。

「……スペランツァと関係のあるオレを使ってスペランツァを目覚めさせて、……スペランツァを消すつもりなのか!？」

『よく分かったじゃないか沢田綱吉。まあ、それだけではないがな。』

『今だ黒い霧状態（霧）のセバステイアーノの表情はわからない。だが声色からすべてが伝わってきた。』

奴は、おもしろがっているのだ。

『お前の未知なる可能性を持つ能力さえあれば、スペランツァを消すだけでなく、宇宙までもを統べることができる。こんなつまらない世界を、変えることができるのだ。』

言っただろっ?』

こんな単調で面白みのない世界など、

闇で消し去ってしまえばいいと。

標的90 首謀の正体（後書き）

わぁ！

きました、新キャラ。

Sebastiano Alfonso Castiglioni

（セバステイアーノ・アルフォンソ・カステイリオーニ）。

なっが！名前なっが！

……いちいち、セバステイアーノセバステイアーノ言つの面倒ですね。

…通り名、考えておきますね。

さあ、標的90突破しました。

早いです。書き始めてから三ヶ月も経っていないのに。

これからも凶太く続けていきますよ。

読んでいただきありがとうございました！

標的 9 1 力の元始

とうとう姿を現した。

ウライラを操っていたものが。

ツナたちを傷つけたものが。

様々なものを犠牲にしたものが。

諸悪の根源が。

「消し去ってしまえばいい、だと？」

リポーンがセバステイアーノに問うた。

表情の見えない、黒い霧もやに。

『そうだ。よく考えてごらんよ。』

例えば人間は、字を書く。

そして書く字を間違えたとき、消しゴムで消すだろう。
それと同じだ。

この世界は間違ってしまったんだ。
在り方を、在るべき姿を。

だからそれを消すのさ。

なかったことにしてしまえばいい。
忘れてしまえばいいだけのこと。』

「ただの字と地球や宇宙は違うだろ」

『同じさ。“いらなくなってしまったもの”としてひとまとめに出
来る。』

仕方ない。誰だって間違いはするものだ。』

なんて屁理屈だろう、とツナたちは思った。
字と地球、宇宙ではスケールが違う。それを無理矢理つなげるのだ。
そんなものただの屁理屈にしか聞こえない。

「…お前、本来の姿がそれなのか？」

『まさか、これは力を保存しておくための仮の姿だ。』

ずるじ

黒い靄^{くも}がおかしな動きをし始めた。
壊れた時計のような、水のような、言い表し難い動き。
一言で言うと、“気色悪い”。

ずるり ずるり ずるり

「気持ち悪いな」

「……………なんだよこれ、」

姿を変えていく黒い靄^{くも}を見て、誰もが顔を歪めた。

すると、黒い靄^{くも}はだんだん人の姿へと変化していった。

ずるりずるりずるりずるり

手が、足が、胴体が、

顔が、現れた。

「…人の姿、だ」

「失礼だな、君」

ツナが思わず本音をこぼす。

現れた姿が人だったことに正直驚いていた。
化け物のようなものに姿を変えるかと思っていたのだ。

セバステイアーノの姿は本当に人間だった。

おそらく190cmはあるであろう身長。

ウライラと同じような漆黒の髪の毛。

吊り目の色は青。

バサツ、と黒いコートを翻したその男はにやりと笑みを浮かべていた。

「…本当にただの人間だな」

「君たちは失礼という言葉を知らないのか。」

はあ、と嫌みつたらしくセバステイアーノはため息をつく。
お前が言えることが、トリポーンは内心思った。
だが直接口に出すのは面倒だと思い黙って聞き過ごした。

「私は、スペランツァに封印されたときに力を消されてしまった。

地球に逃げ込み、封印されて何もできない私はさ迷った。ただふらりと、なにをする訳でもなく。封印されても意識は自由に動けたのだ。

しばらく経ったある日、少しだけだが力を使えるようになったのだ。意識だけで。」

セバステイアーノが突然語りはじめた。

ツナたちは黙ってそれを聞いている。だが警戒は緩めない。

「何故だろうと私は思った。時が経つにつれて私の力は強くなったのだ。」

でも、そんな疑問はすぐに解決した。

私を強くするもの、それは、

“人間の醜い悪の心”

「人、間の……」

「醜い悪の心だと？」

「そうだ。」

人のむごさ、ひどさ……ははっ、言い切れないな。
人間は進化するにつれて汚れていったのさ。

その心が私を強くした。

逆にその心がスペランツァを弱くした。

長い年月をかけ、私は人を操れるほどの力を手に入れた。

丁度いいことに、ある能力を持つ人間を見つけた。そして私は思い
ついたので。」

ぐにやりとセバステイアーノの顔が歪んだ。

「その人間を、…ウライラを器にしようとな」

「っそんな！」

「ひでえ奴だ」

「どうとでも言えればいい!!
もはや私はそいつに用はないのだ。
もう何もかもからっぽじゃないか。
そんなものいらぬさ!」

セバステイアーノの高笑いが鼓膜を響かせる。

なんてひどい男なのだろうか。
ウライラを操っていた時同様、発言は自己中心的でひどいものだった。

「まだそいつを利用することはできたのだが、そいつが禁断の呪文を唱えたからもう助かりやしないのさ。
自殺も同然だろう。」

「禁断の、呪文?」

「…セバステイアーノ、余計なことを……!」

ウライラが歯を食いしばりながらセバステイアーノを睨む。

言うな、と漆黒の目で訴える。
だがそんなことセバステイアーノは気にもとめない。

「さっきいつが唱えたのは、“滅びの呪文”だったんだ！」

滅びの呪文。

それはツナたちの動きを封じるのに十分だった。

ひやりと、風がなぶるようにすり抜けた。

標的92 呪文の意義

やめて やめて

もう やめて

僕はどうなってもいい
だから

人を、傷つけないで。

ああ、なぜこの世界は
多くのものが犠牲になるの。

ああ、なぜこの世界は
善人が命を落とすの。

ああ、なぜこの世界は
悪人が生き延びるの。

なぜ、ねえ、なぜだい？

なぜこんなにも矛盾した世界を、
僕らは生きなければいけないの。

絡み合った糸のような人生を僕らは生きなければいけないの。

ああ、また

罪なき人が犠牲となる。

「滅びの呪文って、どういうこと!？」

「セバステイアーノ、貴様……それを言うな！」

ツナが真相を伺おうとウライラを見ると、ウライラは苦痛に顔を歪めながらもセバステイアーノに訴えていた。

それ以上言うなど。

余計なことを言うなど。

だがセバステイアーノがそんなことで黙る奴ではないことは確かだ。

むしろツナやウライラの反応を楽しんでいた。

「沢田綱吉、お前は知らないだろう。
死んでいたのだから。」

「ウライラが唱えていた、あの呪文のことだろ」

リボーンが言うと、セバステイアーノはこくりと頷く。

楽しそうな、人間らしさが見られない人間の顔で。

ウライラがツナを生き返らせようとしていた時のことを思い出して
いただきたい。

ウライラは陣をつくり、その中心にツナを横たえさせた。そして杖
を用いて、光と風の中、ニコールたちと手を繋いでこう唱えた。

A n s w e r m y v o i c e .

I r e t u r n l i f e o f t h e t h o u w i t h
m y p o w e r .

T h e n a m e o f t h e t h o u T s u n a y o s h
i S a w a d a .

L i g h t u p t h e l i g h t .

E r a s e d a r k n e s s .

E v e n i f m y l i f e f a d e s a w a y .

E v e n i f I a b u s e o u r p o w e r .

「…それがなんで滅びの呪文なんだよ？」

セバステイアーノは首を傾げるツナを嘲笑った。

頭の出来が平均以下とされるツナに突然英文の意味をとらえろというのは難しい話だ。
イタリア語じゃないだけましなのだが。

「アルコバレーノのリポーン、お前はわかるだろ？」

「当たり前めえだろ。」

ふん、と鼻をならしてリポーンは答えた。

滅びの呪文。
己を滅ぼす呪文。

A n s w e r m y v o i c e .

I r e t u r n l i f e o f t h e t h o u w i t h
m y p o w e r .

T h e n a m e o f t h e t h o u T s u n a y o s h
i S a w a d a .

L i g h t u p t h e l i g h t .

E r a s e d a r k n e s s .

E v e n i f m y l i f e f a d e s a w a y .

E v e n i f I a b u s e o u r p o w e r .

それは禁断の呪文。

恐ろしく、はかない呪文。

我の声に答えよ。

我の力を用いて汝の命を戻す。

汝の名は沢田綱吉。

光を照らせ。

闇を消し去れ。

例え我の命がしおれても。

例え我らの命を酷使しても。

それは禁断の呪文。

恐ろしく、はかない呪文。

身代わりの 呪文。

「……………そ、んな、」

へたりとツナは地面に座り込んだ。
やはり、自分のせいではないか、と。
自分のせいでウライラたちが身代わりになってしまったではないかと、自分を責めずにはいられなかった。

「体力精神能力、全部が限界に達していたのにあの恐ろしい呪いを被るなんて馬鹿としか言いようがない。
まだ休息を与えれば器として利用できただろうに。」

「っ、ウライラたちを物扱いするな！」

「自分より力の弱い奴は所詮駒にすぎない。利用できるものは利用しないと。」

…お前は本当に甘いな。それは同情なのか？」

馬鹿にするような言い方がさらにツナたちの怒りを増させる。
つくづくこいつの態度、言動全てが癢に触るのだ。

「っ滅びの呪文、は、己の意思だ！ニコールくんたちも同意してくれた！」

決して無理矢理ではない、自分が望んだことなんだ！」

だから、君は何も悪くはないんだよ、綱吉くん。

なおも自分を責めるツナにウライラは手を伸ばした。

するりと細い腕をすり抜ける。

指先が、見えない。

身体が、色を失いつつある。

身体が、存在を、すべてを失いつつある。

ウライラたちを待つものは、

「愚か者に待つものは、」

“無”だ。

標的92 呪文の意義（後書き）

先日、質問をいただいたのでここでも解説しておこうと思います。

魔術師は自分が死ぬ前に自分で考えた術を解き放った、と書きましたが、それが伝わったのはウライラです。

それはウライラのお母さんのお腹にいたころ、つまり生まれる前から刻み込まれていたという設定になってます。
その頃からはウライラにはちゃんと能力もありました。

魔術師はだいたい16世紀頃のイタリアにいた人です。その時代はイタリアは戦争が勃発し、経済力も危うくなり人々が苦しんでいたので、力を持て余していた魔術師はそれを救おうと術を編み出していた途中で亡くなってしまふという哀れな人だったのです。

そして魔術師の術は後世の類い稀なる人間に継承されるようになったのです。

でも魔術師の全ての術を継承したのはウライラだけで、使用することができたのも能力をもつウライラだけでした。
そんなウライラに目をつけたのがセバステイアーノ、というわけなのです。

…そんな感じですよ。

まだわからないことがあれば、ネタバレにならない程度にお答えいたします。

セバステイアーノが人気ない！（笑）
それは、まあ仕方ない！

読んでいただきありがとうございます！

標的93 去る敵と味方

……ああ、意識がだんだん遠退いていく。

腕に広がる痣が命を蝕んでいく。

遠くで聞こえるのは人間の叫び声、銃声、爆発音。

私は、愛する罪なき人々を救えないのだろうか。

この力で守ることができないのだろうか。

ああ、なんて哀しいことだ。

私の編み出した術も無駄になる。

それよりも多くの命が無駄になる。

もうこんなことが起きないように、私のような後悔をしないように、

私の術を継承する者よ。

どうか、同じような過ちはしないでくれ。

私の最後の術。

“鎖の呪縛”を解く唯一の術。

これを使うことは、己の死を意味する。

だが、己の命にかえても誰かを救いたいとき、これを唱えるのだ。
私の最後の術、“滅びの呪文”

どうか、どうか術を継承する人間が、

幸せであるように。

己の欲ではなく、他人のために使えるように。

私のすべての力で、解き放つ。

どうか、私のようにはならないでくれ。

「なあ、愚か者たちよ。」

見下すその声は低く、やけに耳に響く。

「無が、怖いか？」

「……………、怖くは、ない。」

「強がり。誰でも無になるのは怖いと思うだろう。死に際くらい素直になればよいのだ。」

「、怖くないと言っているでしょう!」

ものすごい剣幕でウライラが叫んだ。
それにセバステイアーノは少し怯む。

「…怖くはない。何も怖くはない。…………でも、」

ずきん、と身体に痛みが走る。

息が上がる。汗が滲む。

だんだん苦しさが増す。

透明度が増す。

「……………哀しい。」

寂しそうな笑顔をウライラは浮かべた。
ツナは心が痛むのがわかった。

せつかく、セバステイアーノから解放されたのに、自由になれたのに、ニコールたちと、ツナたちと向き合えたのに。
そんな幸せも充分に感じる事ができないまま消えるのだ。

それはニコールたちも同じだった。

「…ふっ、哀しいか。」

まあ私にとってはどうでもいいことだがな。」

「お前に干渉させるつもりなど毛頭ないですよ。」

負けじとウライラはセバステイアーノに歯向かう。
皮肉な笑顔のセバステイアーノは鼻であしらった。

「もうお前には用はない。私は沢田綱吉の能力に興味がある。お前などいらぬ。」

「っそんな言い方！」

ないだろうっ、とツナが続けようとすると、その言葉は喉につっかかって出てこなかった。

セバステイアーノが視線をツナにうつした。
悪寒がツナの身体を支配する。
どくん、と血が騒いだ。

危険だと、

こいつは危険だと警報が鳴る。

じゃり、

セバステイアーノがゆっくりとツナに近寄る。
ツナは身動きができなかった。
ぴくりとも、指も動かなかった。

…じゃり、

セバステイアーノの手が差し延べられる。

ポウウウウツ！

「っ！」

突然目の前に炎があらわれた。
手を伸ばしていたセバステイアーノは咄嗟に腕をひく。

指先が焦げて、ズキズキと痛む。

「……なんだこれは、沢田綱吉」

「気安くツナに触れるな」

凜とした声がセバステイアーノの鼓膜を振動させる。

射抜くような瞳がセバステイアーノの姿をとらえる。

「……お前、」

「徳松!!」

ツナを庇うように立ちはだかるのはツナの能力、徳松。だが姿はいつものような小さい姿ではなく、ツナと全く同じ姿だった。

瓜ふたつのツナと徳松を見比べ、セバステイアーノはにやりと笑う。

「おお、直接会うのははじめてか、沢田綱吉の能力。

「……………私の力となるもの。」

「オレには徳松という名がある。

それに、オレはお前の力になんかならない。オレはツナの能力だ。」

朝焼け色の美しい炎が威嚇するように揺らめいた。

(……………ふん、)

セバステイアーノは目を細めてツナと徳松を見下ろす。

(……………こいつらが大空か、)

まったく、

私には合わない。

大空なんていう、

忌ま忌ましいものは。

「…強気でいられるのも今のうちだぞ。

いずれお前たちは私にひざまずく。」

「ほざくな。」

ガスッ！

徳松が拳を振り上げてセバステイアーノに狙いを定めた。だがセバステイアーノはコートを翻してそれを避ける。

ジュウウウ、

「っ！何……」

徳松の炎が触れたのはセバステイアーノの髪。
そこから靄がたちこめる。

同様に、セバステイアーノの足先から、指先から、頭から靄がたちこめ、みるみるうちにセバステイアーノの姿が消えていく。

「…っち、大空の炎は厄介なものだ」

（悪の私には、その炎は毒でしかない。）

どンドン消えていくセバステイアーノは、不気味な笑みをツナと徳松に向けた。

「またいずれ。お前たちとボンゴレリングを迎えに来る。」

“覚悟、している。”

そう言い残し、セバステイアーノは姿を消した。
黒い靄は風に流されて散った。

「……あいつがウライラを操っていたのか。」

「うん……って、徳松！大丈夫なの！？」

「オレは問題ない。それよりツナの傷のが心配だ。」

徳松がツナの腹部を見つめる。

そこには紅い血がにじんでいた。

ズキリ、と痛みが走る。

「……そんなことより！」

ツナは慌てて倒れているウライラたちの元へと駆け寄る。
先程よりも身体が透けていた。

「……どうしよう、なんとか助かる方法は！」

「……ない、ですよ。滅びの呪文を解く方法は、僕の記憶には刻み込まれていない。」

ウライラはうつすらと笑う。

そんなウライラを見ていたツナは知らぬ間に涙を流していた。

「オレ、には…何も……つ出来ないの…?」

「…綱吉くん」

一瞬、ウライラは目を見開き、ツナの名を呼んだ。
そして、優しい笑みを浮かべた。

「…いいのです。これでいいですよ、綱吉くん。」

「…だっ、て!」

「君が、こうして僕らが消えることを哀しんでくれること、……嬉
しいんですよ。」

君を狙い、君の仲間を傷つけた僕らのために涙を流してくれる。
それだけで、嬉しいんだ。

本当に、

生きていて、よかったなあ

って思えるんだ。

「…僕らも、だよ」

「あたしも嬉しい！」

ニコールとマリネが微笑む。

「僕らを救ってくれて、僕らのために涙を流してくれて……」

「オレたちは幸せもんだなあ！」

「本当、いい人に出会いました。」

アロツチとスコツチも、ピンツもミノイも満面の笑みをツナたちに向けた。

「敵だった僕らを受け入れ、救ってくれた。

……本当に、うれしかったんです。

君のおかげで今、僕らはこうして笑っていられるのですよ。」

ツナは涙を止められなかった。

込み上げてくるなにかを、せき止めることはできなかった。

「…本当に、君に出会えてよかった。」

「！！」

ウライラたちの身体から眩しいほどの光が発せられる。
あたたかく、優しい光。

「ウライラ、…みんな！」

「……ねえ、綱吉くん」

“ありがとう。”

ビュウウウウッ

強い風が森を通り抜ける。
光は風にさらわれていった。

あたたかい、温もりがツナの涙を拭う。

広がるのは、美しい大空だった。

……ねえ、綱吉くん。

君に出会えて、本当によかった。

伝えきれないほどの“ありがとう”を君に。

君と君の仲間に。

ありがとう。

“ ねえ、みんな。”

“ ねえ、ウライラ様。”

やっと。やっとだね。

やっと目標に辿り着けた。

やっと、願いが叶うんだ。

“ ねえ、みんな。”

“ ねえ、ウライラ様。”

“ 僕は、
家族になれたんだね。
”

標的93 去る敵と味方（後書き）

あーーーーー!!!!!!

ウライラ！ニコール！マリネ！ピンツ！アロツチ！スコツチ！ミノ
イ！

自分で書いたのに哀しいです！（；；；）

彼らは本物の家族になりたかったのです。
なんてかわいそうなんだ…。

許せんねセバスティアノ。

そつえば彼の通り名決まりました。

近日小説内で出すつもりですので！

小説ストックが標的98まで出来ました。

テスト週間にはいるので土日までのしのぎができれば！

では、本日漢字検定なのでがんばってまいります！（関係ない）

読んでいただきありがとうございます！

標的94 辛さをバネに

失ったものはなに？

失われたものはなに？

それは、

七つの命と、笑顔と幸せ。

「……………そ、んな……………」

ツナの身体がかたかたと震える。

徳松はツナの傍に寄り添った。

リボーンは帽子を深く被り表情を隠す。

トンはツナと同じように涙を流していた。

獄寺も、山本も了平もランボも、雲雀も骸も言葉を発しない。

ロンジヤリーダーは顔を俯かせ、結加は両手で顔を覆って泣いた。

シクロモシスイも静かに泣いた。

誰もが辛い現実を目の当たりにしていた。

ウライラたちが、消えた。

「っウライラ…みんなー!!」

「…ツナ……」

ツナはもういない人間の名を呼ぶ。
だがそれに返事をする者はいない。

返事のない呼びかけ。

声が聞きたいのに、笑顔を見たいのに、その姿はどこにもいない。

「……泣くなよ、ツナ。」

小さくなった徳松がツナの肩に乗る。

「…頼む、泣かないでくれ。」

(ツナが泣いていると、オレも泣いてしまいそうになる。)

徳松はまぶたがあつくなるのを感じた。
分身であるツナが泣いているから、それにつられて泣くのを我慢できなくなってしまうそうになる。

「……泣くな、ツナ。」

しんと静まり返っている森にはつきりとした声が響く。

「……り、ポーン」

「もう泣くんじゃねえ。それ以上泣いたらウライラたちは哀しむんじゃねえのか？」

涙を拭うこともせず、ツナは黙ってリボーンの言葉を聞き入れる。ぼたり、ぼたりと涙は地面に吸い寄せられる。

「……それに、お前がすべきことは泣くことじゃねえ。」

まっすぐな瞳でリボーンは言い放った。

「お前がすべきことは、セバステイアーノを止めることだろ。」

「っ……!」

我に返ったようにツナはリボーンを見つめた。
リボーンはにやり、と笑ってツナに近寄る。

「ウライラたちの仇をとるためにも、セバステイアーノを倒さなきゃなんねえんだぞ。」

「…仇……」

ツナは俯いて、ためらいがちに口を開く。

「…でもオレ、そんなこと、」

「“殺せ”なんて言ってねえ。“倒せ”と言っただぞ。」

ツナの思考を見透かしているかのようにリボーンは言った。
口にも出していないのに返事が返ってきてツナは少し驚いた。

（“殺せ”じゃなくて“倒せ”……………）

人を殺すだなんてこと、ツナには出来るはずがない。

そんな残虐な行為をツナはしないとすることは誰もが知っている。

殺さなくてもいい。

倒せばいい。

仇のうち方など、沢山あるのだ。

「……………うん、」

ごし、とツナは手の甲で涙を拭い、まっすぐリボーンを見つめた。

「…オレ、やるよ。」

清音な声でツナは言葉を放った。

「セバステイアーノを、倒す。」

殺すんじゃない。
仇をとるんだ。

止めるんだ。

奴の陰謀を。

汚れた欲望を。

守るんだ。

大切な仲間を。

「…狙いがオレの能力だとしても。」

「ツナ……」

徳松は優しく微笑んだ。

「やりましょう、十代目！」

「オレらも頑張るのな！」

「坊主、オレも手伝っぜ！」

「ツナ、僕らがついてるから。」

獄寺たちの言葉に、ツナは一瞬驚いたが、また笑顔に戻って頷いた。

（……………大丈夫。）

みんながいるから、大丈夫。

オレには仲間がいる。

一緒に戦ってくれる仲間がいるから、

大丈夫。

「……………ツナ、」

耳元で徳松がツナを呼んだ。

なんだか徳松の様子がおかしかった。

「…どうしたの？」

「……………ごめん、…力使いすぎた……………」

ぐらりと小さな身体が傾く。
慌ててツナは徳松を受け止めた。

「…ありがとう徳松。もう休んでいいよ。」

「……でも、ツナの傷……」

「いいよ。オレの傷よりも徳松の方を心配してよ。

……ゆっくり休んで、徳松。」

うつろな目で徳松はツナを見つめ、小さく「ごめん。」と呟いてから姿を消した。

徳松が意識の中に戻った途端、激痛が身体中に走った。

かすり傷や切り傷などの地味な痛みや、腹部の痛みなどが一気にツナを襲う。

「ばかか。そんな重傷だったのに。」

「…思った、より……痛い……」

痛みに耐えながらツナは呟く。

これほどの痛みを、徳松はカバーしてくれていたのだ。

(…ありがとう、徳松)

意識の中にかすかに感じる、小さなぬくもりに礼を言って、ツナはゆっくりと目を閉じた。

リポーンが何かを言っていたり、獄寺たちが叫んでいたが、それはツナの耳に届くことはなかった。

……オレは、ウライラたちのために、

なにかをしてあげられたのかな。

……みんなで、笑い合ってるといいな。

“ ありがとう、ありがとう。”

ありがとう、綱吉くん。

僕らを導いてくれた、大空の少年。

… また、会いましょう。

おやすみ、綱吉くん。”

標的94 辛さをバネに（後書き）

うお……………

今回はぐだぐだしてしまいました。

もうウライラさんたちを書けないのか、と思うと悲しくなります。

…番外編でも、つくってしまいたいでしょうか。

ご要望があれば、出来る範囲でお答えしたいと思います。

次話でひとくぎりつきます。

小説自体は終わりませんけど。

これからの展開のプロットを作らなければなりませんね。
無計画で更にぐだぐだと失礼ですし！

読んでいただきありがとうございました！

標的95 第一章、閉幕

アッジョルナーレファミリーと名乗る敵に次々と襲われたツナたち。敵の狙いはボンゴレリングとツナの実力だった。

アッジョルナーレのボスであるウライラに呪い、“鎖の呪縛”をかけられたツナは、修行を積み重ねて呪いの進行を遅くすることに成功した。

その中でツナは逃走弾であったトンノを実態化させたり、tesoro nascosto（テゾーロ ナスコスト）であるシクロとシスイを目覚めさせたりと不思議な力を見せてきた。

だが、ツナや守護者たちは見知らぬ森に飛ばされ、そこで戦闘を繰り広げる。

アッジョルナーレの一員である双子のアロッチとスコッチを、敵であるにもかかわらず助けようとするツナを見てニコールたちはツナたちを襲うことに否定的になる。

しかしそこにウライラが現れ、ツナを操りリボーンたちを襲わせようとする。

リボーン、トンノはツナの意識の中に潜り込み、徳松を見つけだしてツナを取り戻そうと努力した。

突然謎の光と声に導かれ、ツナを発見して全員のおかげでツナを取り戻すことに成功する。

ツナはウライラを倒そうとするが一筋縄にはいかず、窮地に追いやられるが、あの謎の光と声の助けによってウライラを倒すことができた。

しかしツナにかけられた呪いが完了してしまい、ツナは死んでしまった。

そんな中、目を覚ましたのは今まで操られていたウライラだった。衝撃の事実を知り、リボーンたちは動揺してしまう。

ウライラはツナを救いたいと、己のすべての力、さらにウライラを受け入れたいと言ったニコールたちの力を用いて“鎖の呪縛”を解く唯一の方法、“滅びの呪文”を唱えてツナを生き返らせることに成功する。

だがすべての力を使い果たしたウライラたちは倒れ、消えてしまうと言う。

するとそこに今までウライラを操っていた諸悪の根源、Sebastian Alfonso Castiglioni（セバステイアーノ・アルフォンソ・カステイリオニ）が現れる。

様々な事実を知り、ツナたちはセバステイアーノに怒りを覚える。

セバステイアーノが去ったあと、助ける術もなく、ウライラたちは消えてしまった。

哀しむツナたちだったが、リボーンという言葉でセバステイアーノを倒

すことを決意する。

絶対に、あいつの好きにさせやしない。

絶対に、能力は渡さない。

絶対に、ボンゴレリングは渡さない。

必ず、セバステイアーノを倒す。

必ず、仲間を守る。

ウライラたちの仇をとる。

ゆるぎない覚悟。

それはゆらゆらと炎のように燃え盛る。

朝焼け色の、美しい炎。

それに集うは六つの炎。

橙 赤 青 黄 緑 紫 藍

調和 分解 鎮静 活性 硬化 増殖 構築

大空 嵐 雨 晴 雷 雲 霧

その七つをもってして、

挑むのはリングを持つ人間。

沢田綱吉

獄寺隼人

山本武

笹川了平

ランボ

雲雀恭弥

六道骸ノクローム髑髏

それに加わるは最強の赤ん坊リボーン

光玉を武器とする結加

ボンゴレに所属するロンジ

実態化したトンノ

ツナの能力である徳松

元アルヴィーコラのリーダー

tesoro nascosto (テゾーロ ナスコスト)のシ
クロとシスイ

そして新たな仲間

目指すべきものは、

地球を作り出したスペランツァ

討つべきものは、

宇宙支配を目論むセバステイアーノ

戦いの先に待つものは、幸か否か。

その先には。

第一章、閉幕

標的95 第一章、閉幕（後書き）

はい。

第一章が無事におわりました！
お疲れ様です。

しばらくは日常的なものが続くと思われませう。

お付き合いくださいませ！

読んでいただきありがとうございます！

標的 96 第二章、開幕（前書き）

非常に短いです。

標的96 第二章、開幕

昔から、闇は恐れられてきた。

不吉なものだと言われてきた。

そうさ、その通りさ。

私はお前たちにとって不吉なものなのだ。

お前たちが私にとって不吉なものであると同じように。

目障りなものは消してしまえばいい。

いらぬものは捨ててしまえばいい。

欲しいものは、どんな手を使っても手に入れる。

私は欲に素直なのだ。

こんな世界、ただ気持ち悪いだけ。

だから私が、宇宙ごと変えてしまえばいいのだよ。

だがそれは私の力では実行することができない。

必要なのは、

沢田綱吉

ボンゴレリング

必ずや、このふたつを手に入れてみせよう

そして、新たな世界を作り出そう

闇に包もう

光を遮ろう

私の名はSebastiano Alfonso Castigli
ioni (セバステイアーノ・アルフォンソ・カステイリオーニ)

またの名を、

Disperare
ディスペラーレ

さあ、その大空を、

絶望で染めよう。

いつ、いつだろうか。

いつ目を覚ませるだろうか。

ここには恐ろしい未来が待っている。

この星を、造ってはいけなかったのかも知れない。

今すぐ壊すべきなのかも知れない。

ああ、でも。

この多くの命を、私は消すことが出来ない。

愛しい、生き物たちを消すことは出来ない。

私が目覚めるその時まで、

どうか、あいつが現れないように。

待っているよ。

tesoro nascosto (テゾーロ ナスコスト) に導かれし少年、

沢田綱吉。

私の名は スペランツァ
s p e r a n z a

さあ、その大空を、

希望で照らすつ。

光と闇

希望と絶望

大空を染めるのは
希望か絶望か。

少年の力を目覚めさせるものはなにか。

少年を導くものはなにか。

少年をつきつごかすものはなにか。

“必ず、セバスティアーノを倒す。”

（なぜあなたは、）

（なんであんたは、）

（なぜお前は、）

（なんであなたは、）

（なんで君は、）

（なぜ君は、）

（なんでおめえは、）

幸せそうに笑うの？

（オレは、）

みんながいるからだよ。

（君たちを、）

守りたいんだ。

琥珀の瞳に宿るは炎。

揺らめく姿は心を奪う。

凜としたその姿を、

あなたは目にするのだ。

現実を受け止め、

それでも前に進もうとする、

少年たちの物語。

その先には。

第二章、開幕。

予想もできない未来、
変えられない過去、

ただ過ぎるだけの現在。

ひとつの物語を、

とくにご覧あれ。

標的96 第二章、開幕（後書き）

“その先には。”第二章突入！

今回は紹介的な感じで。

次回からはしばらくはまったりと進ませていただきます。

いろいろアドバイスやら質問やらをいただいで嬉しいです。

第二章も、よろしく願います！

読んでいただきありがとうございます！

標的97 空白の五日間

ズキリ ズキリ ズキリ ズキリ ズキリ

ああ、痛いよ。

お腹も、腕も、足も頭も。

ズキリ ズキリ ズキリ ズキリ ズキリ

“……………”

あ、誰かの声だ。

ぼそぼそ言ってるんじゃないよ。何もわからないよ。

“……………ナ、……………ツナ……………”

え、オレを呼んでるの？

でもオレまだ眠いんだよね。

“ツナ、…おい、起きろツナ”

うるさいなあ、もう少し寝かせてよ。
身体中痛いしだるいし辛いんだ。

おやすみ……………

「起きろつつつてんだろがこのダメツナが！」

「うぐっ！……！」

突然の衝撃にツナは目を覚ました。
いや、無理矢理目を覚めさせられた。

頬に走った痛み。

(…あ、口切れた。)

口の中に広がる鉄の味で、ツナは吞気に頭の中で言葉を発した。

「…もう一発食らわせねえと起きねえみてえだな」

「いついついついつい！起きてます起きてます起きてます！」

小さな拳にぐっ、と力が込められたのを見て、ツナは慌てて身体を起こした。

ズキンッ！

「いつ……たああああ！！」

再び身体に激痛が走り、ツナは布団へ逆戻りした。

(……え、布団？)

「てめえ、何日も寝こきやがって。」

(……え、何日も？)

「広がった傷を治療する手術だったつつうのに。」

(……え、手術?)

「それに、」

「ちよつと待ったー！ー！！！」

ツナは無理矢理リボーンの話を中断させる。

「ダメツナのくせに生意気だぞ。」と何か弾のようなものを放たれたがそれは置いて。!

「ここ何処！！何日も寝てたってなに！！手術ってどういふこと！！」

ツナは寝起きにしては物凄い剣幕でリボーンに問いただす。

「……ちっ」

(し、舌打ち!!?)

「おめえはな、」

「ちょ、今の舌打ちなんだよ!」

「…舌打ちなんてしたか?」

「したした!絶対した!」

わざとらしく首を傾げるリボーンをツナは恐ろしいと思った。
まったく侮れない赤ん坊だ。

「……………」

「……………」

「あのあとな、」

(舌打ちの意味なにー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!)

心の中でツナが思いきりツッコミをいれているのも知らず(知らな
いふりをしているのかもしれないが)、リボーンはここ数日間のこ

とを説明しだした。

ツナが倒れたのは五日前。

ぷつりと糸が切れたように意識をなくしたらしい。

リポーンたちは急いで重傷者であるツナ、結加、獄寺、山本、リーダーを巨大化したトンノの背に乗せ、病院に運んだ。

（残った骸たちはもう一度トンノが背に乗せていったとか。）

どうやら一番怪我がひどかったのがツナのようで、ツナだけが手術をしたのだ。

手術は無事成功したが、ツナは意識が戻らないまま何日も病院のベッドに寝かされていたのだという。

「大変だったんだぞ。毎日毎日いろんな奴がおしかけてきて、ツナは大丈夫か、とか同じようなこと聞いてきたんだぞ。」

「…そんな大騒動になってたんだ」

何も知らずに眠っていたツナは申し訳なくなった。

そして、あることに気付いた。

「………ということは、もしかして五日間、リボーンはずっとここにいてくれたの？」

「……………」

「………ねえ、」

「一応おめえはオレの生徒だからな。」

その瞬間、ツナはリボーンが神々しく見えた。

そして謝りたくなった。

さっきの無礼を許してくれ、とあの爆弾野郎の得意技である土下座をしたくなった。

「っりポーン、ありが」

「お礼はラ・ナミモリーヌのケーキでいいぞ。」

ぐしゃり、とその神々しさは消えた。

一瞬にしてりポーンが悪魔に見えた。

「……………ですよねー。」

はは、とかわいた笑いをツナは口から漏らした。

そつだ、この超俺様な赤ん坊が見返りを求めないわけがない。

先程の感動を返してくれ、と言いたかったが言葉にできなかった。

(……………意地汚いなあ)

「なんか言ったか？」

「いえ何も!?!?!」

結局、この家庭教師様には頭が上がらないのだ。

標的97 空白の五日間（後書き）

日常的なものは書いてて楽です。
あまりバトらないでいただきたいです。

しばらくはこんな、のほほんとした感じですね。

骸と雲雀が出演するかが危険です。

だって二人ともお見舞いとか来ないし！

骸はクロームが行くから来る、という感じになるんだろっけど…。

結加は！？とか、

獄寺、山本は！？とか、

リーダーは！？とか、

いろいろ気になる方もいるかと思いますが、安心してください。

ちゃんと出ますから！

無理矢理にでも出させますから！

もうすぐ標的100になります。

記念にイラストでも、と思い今描いています。

リーダーやロンジも描きました。

ウライラさんたちも描きたい！

サイト運営が楽しいです（＾o＾）

読んでいただきありがとうございました！

標的98 憂鬱

じめじめとした空気に機嫌は急降下する。

日本の美しい季節の中で最も億劫になる梅雨。

雨は止まず、空気は湿り、無駄に暑く感じる。

病室は温度調整が完璧なはずなのに、なぜか嫌なじめじめ感があった。

「……だるい」

「…何もしたくないよね…」

もさもさとうさぎの形に切られた林檎を食べながら、ツナとトンノは呟いた。

可愛らしい林檎のうさぎは次々と二人の胃の中へと入っていく。

特別お腹が空いているわけでもない。

だが何故か自然と林檎に手をつける。

無意識で二人は林檎を口に運んでいた。

「…おめえら、ちんたらしてんじゃねえぞ」

そんな二人を見ていたリボーンが注意する。
先程からツナとトンノを観察していたが、二人はただつまらない会話をしながら林檎を貪っているだけだった。

「ひゃっへ、ひははんはほん。」

「はへはっははひ、はんははふひひ。」

「口に林檎詰め込みすぎだ。何言ってるのかわかんねえよ。」

ハムスターのように頬に林檎を一杯詰め込んで喋る二人に、リボーンは静かに銃を向けた。

一瞬ツナとトンノはびくつと飛び上がり、必死に林檎を飲み込もうともがいた。

ごっくん。

「だって、暇なんだもん。」

「雨ばっかだし、なんかだるいし。」

「これが日本の季節なんだから仕方ねえだろ。」

暇だとかほざいてんじゃねえぞ。」

リポーンは懐に銃をしまつてひょいっとベッドの上に飛び乗った。少しだけベッドのスプリングが軋む。

「怪我するおめえが悪いんだろ。」

「それこそ仕方ないじゃん！怪我しないようにする余裕なんてなかったんだよ！」

思いきり叫ぶと、腹の傷に響いた。

「ふげえ」と不気味な声を出してツナは腹をおさえてうずくまる。

「ああっ、また傷が開いちゃうよ！」

バサバサと羽をばたつかせてトンノが慌てる。

トンノの翼によって起こる風が気持ちいいと痛みに耐えながらもツナは思った。

「…トンノ、そのままバサバサしてて」

「え！！？」

「甘ったれんな、ダメツナが。」

バチンッ！！！

「いつてえ！！！」

リボーンの掌がツナの頭を叩いた。

どうすればその小さな掌からそんな強い力が出るのか。常に疑問で仕方ないが、この最強の赤ん坊様には当たり前なのだろう。

叩かれたところをさすりながらツナはリボーンを睨んだ。

「はっ、おめえの睨みなんか痛くも痒くもないぞ。

それでもボンゴレ十代目か。」

「うっ、うるさいなあ！！！」

ツナの睨みを軽く鼻であしらわれたのが無性に腹立たしく、ツナはまた傷のことを忘れて叫んだ。

そしてつい「ボンゴレ十代目」という言葉をあっさりと聞き流していた。

「普段のおめえは迫力もないしな。

超死ぬ気モードの時のの方が幾分かは迫力があるぞ。」

これからもみっちり修行だな、と目を輝かせたりリボンを見て、ツナは何も言えなくなった。

(…絶対人をおちよくって楽しんでるよ！)

はあ、と大きなため息をついてツナはベッドに横たわった。

「…学校、もう始まってるんだよね」

「ああ、休校も解いちまったしな」

一定の速さで進む時計の秒針を見つめながらツナは呟いた。

修行があるとかでリボンが無理矢理学校を休校にしてから結構日が経っていた。

そろそろ再開しなければ学生の本業が忘れ去られてしまうだろうと休校を取り消したのだった。

「まあ、毎日一日中ここに獄寺や山本がいても喧嘩するだけだしな。了平も加わるとめんどくささが倍になる。」

「あ、はは……」

あとから聞かされた話なのだが、ツナが意識を取り戻すまでの数日は大変だったらしい。

重傷と思われていた獄寺と山本は、どうやら日ごろの鍛えのおかげで打撲やかすり傷程度だったらしい。

一応、一日だけ入院をし、次の日にはすっかり元気だったらしく、今は普通に学校に通っているようだ。

今だ入院しているツナのそばには、常に獄寺と山本がいて、一方的に獄寺が山本にかみつぎ、そこに見舞いに訪れる了平が加わって騒ぎがさらにでかくなるのだ。

（ただし山本は獄寺と了平のやりとりを見て笑っているだけなのだが。）

それがかなり耳障りで、リボーンが休校を解除した理由のひとつだと言っ。

「……………お前、どんだけ権力すごいの。」

「……………秘密だ。」

意味深な沈黙のあと、にやりとりボーンは笑った。

(……聞かないでおこう。)

ツナは超直感で何かを感じ、聞くのをやめた。

「そういえば、結加ちゃんやリーダーは？」

「ああ、おめえの意識がない間に退院しちゃったぞ。」

獄寺や山本と同様に負傷していた二人を思い出し安否を聞き、無事だということにツナはひどく安堵した。

「結加は自宅で大人しくしてないといけないらしいが、リーダーはすっかり完治してるみてえだ」

「よかった」

全員無事なようで、ツナの顔が安心して緩む。それを「マヌケな顔だな」とリボンが笑った。

そんな日常を、望んでいた。

こんな幸せを、望んでいた。

(みんなが無事で、よかった)

ツナはそう思わずにはいらなかった。

いずれ訪れるであろう戦い。

せめてそれまでは。

涙が出るほどの笑顔と幸せを。

標的 98 憂鬱（後書き）

林檎が食べたくて林檎を出しました。

ひ、標的 100 が近づいてきてます！

なぜか緊張します（、・・・）

何かお祝いをしなければ。

なにがいいんでしょうか。

読んでいただきありがとうございます！

標的99 忘れかけていた事

「よっ、坊主！」

「綱吉様、お体の調子はいかがですか？」

勢いよく病室のドアが開き、赤い髪の毛の男と礼儀正しい男が入ってきた。

「リーダー、ロンジさん！」

ベッドの上でリボンから出された課題（暇だ暇だと愚痴っていたらいきなりやれと言われた）を片付けていたツナの顔が一気に明るくなった。

「傷の方はどうだ？」

「…んー、まだ大声出すと痛いけど…大丈夫だよ」

そうか、と言い、リーダーはゴトリとビニール袋を備え付けの机の上に置いた。

「…なにこれ？」

「メロンだ。歩いてたら知らねえおばさんがくれてよお！」

にっこりとリーダーは笑って袋から立派なメロンを取り出した。

「うっわ、高そう……」

「どうもおおばさんが育ててるらしくてな、余ったから貰ってくれて言われたんだ」

片手でサッカーボールほどの大きなメロンを持ち上げてリーダーは言った。

するとリーダーは、「ほらよっ」とメロンをツナの方に投げた。

「わあああっ！……」

思わず両手でメロンを受け取るが、その重さに驚いた。片手で持っていたリーダーが信じられない。

「お、重い……」

「そっか？おめえが貧弱なだけだろ！」

「リーダーさん、あなたが怪力なだけだと思つのですが……」

ロンジが「すみません」とツナに謝ってからメロンを受け取った。なんだかんだ言つてロンジもメロンを軽そうに持ち上げている。

「…テンションが落ち。」

「ん？なんだ、嫌なことでもあつたのか？」

（あんたのせいだよ、あんたの！！）

なんて言うことは出来ないのでツナは曖昧に返事をしておいた。

1306

「綱吉様、ご退院はいつ頃なのですか？」

「それがまだわかんないんだよね。」

ツナは口を尖らせて不満そうな顔をする。

「重傷だつたはずの獄寺くんや山本は普通に学校に行つてるのにさ」

「あ？なんだ坊主。そんなに勉強がしたいのか？」

「違うよ。…ただ、暇なだけだよ。だってみんながないんだもん」
曇り空を見つめてツナが呟く。

いつも獄寺たちが学校帰りに病室に来てくれるのだが、二人の話を聞くたびに寂しさを募らせていた。

こうして誰かが見舞いに来てくれることが今一番の救いだった。

「ゲームも出来ないし、リボーンの課題は多いし」

「それはあれだ、あいつなりの愛情表現なんだ。
ありがたく受けとっとけよ」

にやにやとしながらリーダーは机の上の課題を手にとって見ていた。
少し形の悪い文字が並べてある。
それなりに課題はこなしているらしい。

「お、意外とちゃんとやってんじゃねえか！」

「失礼だな！なんだよ意外って！
ちゃんとやらないとリボーンが何するか分からないしさ…頭パンク
しそっだよ」

大きいため息をつくツナに、ロンジは微笑みかけた。

「でもちゃんと課題をこなそうとする綱吉様は立派ですよ。努力をした後には必ずいいことがありますから。頑張ってくださいね。」

どうぞ、と綺麗に切られたメロンを差し出され、ツナは礼を言って受け取った。

「ほんとにロンジさんってすごいよね。面倒見がいいって言うか…気が利くって言うか。」

「そりゃあ、ボンゴレ九代目についてたってんだから当たり前だろ。」

大きな口を広げてメロンを貪るリーダーにロンジは「メロンの果汁が垂れてますよ」とティッシュを差し出した。

「頭もいいよね。どうしてそんなにすごいのか?」

「そんなことはありません。いつも兄には負けてしまうので。」

「あ、兄?」

「おや、言ってませんでしたか?」

聞き返したツナにロンジは少し驚いた顔をした。

「私には兄がいて、二人で幼い頃からボンゴレにいたんです。兄は頭もよく、運動も出来た人でした。そんな兄が羨ましくて、私は兄に追いつこうと勉強をしたり運動をしたりしてました。」

ツナとリーダーは興味津々にロンジの話聞いていた。ふと、リーダーがロンジに質問をした。

「そついやあ、お前さん本名は？」

「それも言ってますでしたか。」

またまたロンジは少し驚いた顔をした。

「私の名前は Longi Cornelio Generali
(ロンジ・コルネリオ・ジエネラーリ)です」

「車みてえな名字だな。」

ふーん、と相槌をうつリーダーに、次はロンジが質問をした。

「あなたのお名前は？」

「ん？ああ、オレは、Leader Bartolomei Pacini（リーダー・バルトロメイ・パチーニ）だが。」

「二人ともかつこいい名前だね」

いいなあ、とツナは二人の名前を羨ましがる。
外国人の名前はやけにかつこよく聞こえるのだ。

「んだよ、坊主の名前だってかつこいいじゃねえか」

「“綱吉”。將軍徳川の五代目で、“生類憐れみの令”を出した人の名前ですね。」

さらりと日本の歴史の人物を簡単に説明しまったロンジ。
リーダーは知らなかったらしく、「へえー」とロンジを尊敬する目で見ていた。

「そんなたいそうな名前つけられても、こんなダメツナって呼ばれてるんじゃない、申し訳なくなるよ」

苦笑いをして言うツナに、ロンジは笑いかけた。

「綱吉様の何処がダメなんですか。」

例え頭の要領が悪くても、運動神経が優れていなくても、他人を思いやる優しい心を持っていればダメなはずないですよ。周りの人達は綱吉様の魅力に気付いていないのでしょっね。」

「そっだぞ坊主。オレみてえな奴を受け入れてくれたお前さんはダメなんかじゃねえぞ！」

「はっ、とリーダーに思いきり背中を叩かれツナはむせてしまったが、とても嬉しかった。」

自分のことをこんな風に言ってくれるんだ、と心が熱くなるのを感じた。

「お、そっいやあ、お前さんの兄貴って今もボンゴレで働いてんのか？」

「兄ですか？兄は今、九代目の命令で世界を飛び回っているそうですよ。」

突然ふられた質問に、ロンジは戸惑うこともなく答えた。

「お兄さん、なんで世界を飛び回ってるの？」

「兄は、tesoro nascosto（テゾーロ ナスコス
ト）を探しているらしいですよ。」

「へえー、そうなん……………」

ぴたりとツナが固まった。

ロンジとリーダーはどうしたのだろうとツナの顔を覗き込む。

汗がたらりと頬を伝う。

「……………わ、」

（忘れてたあああああああ！……………！）

心の中で大声で叫んだのと同時に、汗がぼたりと下に落ちた。

標的99 忘れかけていた事(後書き)

先日質問をいただきました。

“ ロンジとリーダーの名前は何か ”

そういえば公開してなかったなあと(笑)

ロンジさんは、

Longgi Cornelio Generali (ロンジ・コ
ルネリオ・ジエネラーリ)。

イタリアにはロンジっていう町っぽいのがあるといいます。

1313

リーダーさんは、

Leader Bartolomei Paccini (リーダ
ーバルトロメイ・パチーニ)。

そもそもイタリアでは、ミドルネームはあまりないみたいです。
でもなんとなくつけました。

名前考えるの楽しかった！

次回で標的100になりますよ！
意外と早かった！道のり！

読んでいただきありがとうございました！

標的100 手がかり

最近いろいろな事が起こりすぎて、ツナはすっかり忘れてしまっていた。

スペランツァを見つけ出すのに重要なもの。

tesoro nascosto (テゾーロ ナスコスト)。

七つの役割をもつ者たちの中で、現在見つかっているのは^セserri^ララッソであるシクロとシスイのみ。
aggio

以前二人はtesoro nascosto (テゾーロ ナスコスト) について説明をしてくれていた。

NO.7 ^{アッレアンツァ}alleanza

名前:セブラーノ

^{アッレアンツァ}alleanzaは同盟という意味を持ち、印判を守る。

NO・6 serraggio セツラジヨ

名前：シクロ(兄)、シスイ(弟)

serraggioは鍵をかけることで、錠と鍵を守る。

NO・5 atlante アトランテ

名前：ファイアス

atlanteは地図帳という意味で地図を守る。

NO・4 binocolo ビノーコロ

名前：フォア

binocoloは双眼鏡という意味で双眼鏡を守る。

NO・3 veicolo ヴェイコロ

名前：スリノキ

veicoloは乗り物という意味でほつきを守る。

NO・2 arma アルマ

名前：ツイ

armaは武器という意味で盾と矛を守る。

NO・1 genuino ジェヌイーノ

名前：ワンゴラ

genuinoは真実のことで水晶を守る。

これら全員が揃わないと、スペランツァの居場所はわからないらしい。
だがその前に誰が何処に眠っているのかわからない。

ロンジの話では、tesoro nascosto（テゾーロナスコスト）を見つけ出すためにロンジの兄が世界中を飛び回っているのだと言っ。

「……手がかりとかは、あるの？」

「一応、あるらしいのですがどれも曖昧みたいで……。」

ロンジは困ったような顔をする。

シクロとシスイは偶然ボンゴレが所有していたのですぐに発見されたのだが、残りは世界中にばらまかれているのだ。

探すことは難しいに決まっている。

しかも確証のない手がかりを元にしてだ。
どれだけ時間がかかるかわからない。

「……なんか、大変だね。」

「ちゃんとした手がかりもねえのかよ」

「ずいぶんと昔のことで、何より、セララギョserraggioのお二人の話を聞くまでほぼ謎の伝説のようなものでしたから……。」

食べ終わったメロンの処理をしながらロンジは苦笑いをした。

「……でも、」

ロンジがぴたりと動くのをやめる。

「……ある、諸説によると、」

ロンジの異変に気づき、ツナたちに緊張が走る。

ゆっくりと、ロンジは言葉を発した。

「tesoro nascosto（テゾーロ ナスコスト）の在りかは、……ボンゴレの大空属性、……つまり、歴代ボスの記憶に刻まれている、らしいのです。」

「……え？」

言葉の意味がわからず、ツナは目を丸くする。
リーダーもツナと同じように理解していないらしいが、リボーンは
真剣な表情になった。

「……tesoro nascosto（テゾーロ ナスコスト）
の在りかが刻まれているのですよ。…ボンゴレ十代目、沢田綱吉様
の記憶に。」

「…っんなあああああああああ！！！？」

「あああああああああ！！！？」

病室内にツナとリーダーの叫びが響いた。

「うるせえっ」とリボーンが二人の頭を殴った。
痛い。だがそれよりも驚きの方が勝っていた。

「ま、まままま待って！

オレの記憶に刻まれているって……tesoro nascosto
o (テゾーロ ナスコスト)の在りかが！？

そんなのオレ知らないよ！小さい時の記憶だつて曖昧なのに！！」

「これはあくまで諸説ですから、事実とは限りません。

…しかし、tesoro nascostoテゾーロ ナスコストと大空属性が関係しているということは間違いがないそうです。」

備え付けの椅子に腰掛け、ロンジが話を続ける。

「…seraggioセラジッジョのお二人がまだ封印を解かれていない状態で発見されたとき、九代目だけでなく、守護者の皆様も封印を解こうとしたのですが、できなかつたのです。」

「だから、封印を解くことが出来たおめえが、おそらくスペランツアに深く関係しているってことだ。

現に、徳松のcuoreクオーレはスペランツアの元にあると言っていただろ。」

今だ信じられなかったが、リボーン言葉に何も言えなくなつた。説得力があつたのだ。

「…じゃあ、九代目の記憶に残ってるんじゃない？」

「残念ながら、九代目の記憶にもないそうです。」

歴代ボスの記憶にもそれらしきものはなかったらしいのです。」

「シクロとシスイが言ってただろ。」

“悪は人を汚し、世界をも汚した。その力に耐えるため我らは己を封印し、目覚めのときを待った”

“我らは、いずれ訪れるであろう世界の波乱をなるべく抑えるため、このような姿となり世界に散らばった”

“我らを目覚めさせたのは、あなたがはじめて。あなたの力であれば、近づく悪を止められる”

二人は確かにこう言っていた。

「悪つつつのは、ディスペラーレDisperareのことだろう。」

「ディスペラーレDisperareって、セバステイアーノのこと？」

「そうだ。そいつを止められるのはツナ、おめえだってことなんだぞ。」

ツナは頭が混乱していた。

自分にそんなことが出来るのだろうかと思わずにはいられないのだ。

本当なのだろうか。

憶測ではないのだろうか。

ただの諸説ではないのだろうか。

ツナの口は言葉を紡ぐことを忘れてしまった。

標的100 手がかり（後書き）

無事、標的100を迎えることができました！

長かったです。

でもあつという間な感じもします。

わたしが運営しているサイトでコメントさせていただきましたので、お暇なときにご覧いただけると嬉しいです。

実質的には101話目なんですけどね！（笑）

これからよろしくお願いします！

読んでいただきありがとうございました！

標的101 闇夜の思考

静まり返った病院。

ちらほらと灯る明かりは、夜勤の看護師や医者がいるところだ。

ある個室、一人の少年は眠れずにベッドに横たわっていた。

真っ暗な部屋は暗順応の働きによってうつすらと何があるかはわかる。

ぼつりと空に浮かぶ月の光が差し込んでいる。

その中で、ツナは今日あった出来事を思い出していた。

「…いまいち、わからないんだけど。」

「今言ったことが事実だ。」

きっぱりと言い放ち、納得しているらしいリボーンとは逆に、ツナは納得していなかった。

リボーンの言うことは説得力はあるのだが、ツナがそれを納得できないのだ。

「tesororo nascosto（テゾーロ ナスコスト）は、マフィアに伝わるもんだって言ったことは覚えてるか？」

ツナはその言葉に聞き覚えがあったのでこくりと頷いた。

「さつきロンジが言ってた諸説つつうのは、長年、tesororo nascosto（テゾーロ ナスコスト）を研究していたマフィアに属する学者の言ってたことだ。

おめえが封印を解いたことで、ずいぶんと研究が進んだらしい。」
その学者はマフィアの中でも名が高く、評判もいい学者だった。意見は明確で、かつ根拠もしっかりしており、説得力がある。

そんな学者が言ったのだ。

“tesororo nascosto（テゾーロ ナスコスト）の在りかは、ボンゴレの大空属性、つまり、歴代ボスの記憶に刻まれている。”

マフィア界は混乱に揺らいだ。

マフィアの最高位であるボンゴレがtesoro nascosto
o (テゾーロ ナスコスト) に関連している。

ようやくtesoro nascosto (テゾーロ ナスコス
ト)のひとつである^{セツラツジョ}serreggioの封印が解けた。

しかもその封印を解いたのはまだ幼いボンゴレ十代目。

多くのマフィアは驚愕し、多くのマフィアは疑った。

ボンゴレ九代目でさえも解けなかった封印を、子供が解いたのだ。

ざわめくマフィアたちを黙らせたのは、その学者の言葉だった。

“わたしは今まで一度も間違ったことは伝えていない。

真実しか公表していない。

そんなに信じられないのならば、わたしが証明してみせよう。

ボンゴレ十代目、沢田綱吉の力を。”

「…で、近々日本に来るそうだ。」

「……は？」

「だから、そいつがおめえの力を研究しに来るらしい。」

「…っんなあああああああ！！？」

本日二回目のツナの叫び。

本日二回目のリボーンの拳。

ロンジとリーダーはただ苦笑いをしているだけだった。

「なんでまた殴るんだよ!!」

「おめえがつるせえからだろ。」

ふん、と鼻をならしてリボーンは購入しておいたコーヒーをすする。安物のそれはリボーンの口に合わないのか、リボーンは眉をひそめた。

「なんでその学者って人がオレを研究するんだよ!」

「自分の意見を否定されたのが悔しかったんだろ。」

あいつは自分の考えを絶対に曲げたりはしない。自分を納得させるような証拠がなければな。」

にやりと小さな赤ん坊は笑った。

「……なんでオレなんかを……」

はあ、とため息をついて窓の外を見つめる。

珍しく雨は降っておらず、星は輝きその存在をあらわしている。

ざわざわと木々は揺れ、静かな音を立てていた。

リボーンの話からツナは上の空になりがちだった。

見舞いに来てくれた獄寺と山本が話しているときも、ツナは考え事をして二人に心配された。

（あんな話をするリボーンが悪いんだ。）

ツナは隣の部屋で眠っているであろうリボーンを怨んだ。

なぜかりボーンは病室をひとつ借り、そこで眠っているのだ。

ロンジも「私もいいですか」と今日からリボーンと共に病室に泊まることになった。

なんでもツナの世話をしたいらしい。

リボーンは奈々にはちゃんと知っているらしく、承諾も得たと言っ

「……そろそろ寝よう」

時計の針は1を指している。

ツナは眠るために目を閉じた。

だが、何かがそれを遮った。

再びツナは目を開き、起き上がる。

(……何か、いる?)

ドアを見つめながら、ツナは思った。

超直感が伝えている。

“廊下になにかがいる”と。

もしかしたら、ディスプレイレかも知れない。それか他のマフィアか。

ツナはXグローブをつけ、死ぬ気丸を服用した。

額からオレンジ色の炎があらわれる。

鋭い眼差しにかわったツナの瞳もオレンジ色に輝いた。

(……徳松?)

ツナは意識の中にいる徳松に話しかけたが応答はない。意識を失ったあの日から、一度も徳松は目覚めていない。

痛み止めのおかげで腹の傷に痛みはない。
点滴をはがし、ツナは静かにドアに近づく。

心配がだんだん強くなる。

緊張がだんだん大きくなる。

ガラッ

ドアが開かれると同時に、ツナは炎を燈した拳を振り上げた。

標的102 真夜中の訪問者

廊下から感じた気配。

なにかがいると超直感が告げる。

炎を燈したツナは、慎重にドアへと近づく。

確かにいる。おそらくは人だ。

ツナは警戒を高め、相手の出方を待った。

……ガラッ

ドアがひかれた瞬間、炎を燈した拳で攻撃を仕掛けた。

ポウウッ!!

「っわああああ!?!」

「っ!?!」

「なんだ、もう来たのか。」

「あ、ああ……リボーンもいたのか……」

廊下に腰を抜かしている男は、リボーンの顔を見るとほっとしたような表情になった。

「……リボーン、こいつは……」

「こいつが、昼間言っていた学者だぞ」

リボーン of 言葉に、ツナは啞然としてしまった。
オレンジ色の瞳に動揺が伺える。

「こいつがお前の力を研究したいと申し出た、Oscar Acc
ardo（オスカル・アツカルド）だ。」

「……………は？」

流石は超死ぬ気モード。

普段のツナとは打って変わって変わって冷静に驚いた。
いつもなら「んなあああああ!？」とか奇妙な叫び声をあげるだ
ろう。

ツナはちらりと学者である男を見た。

「……わたしが、Oscar Accardo (オスカル・アッ
カルド)だ。

………よ、よろしく……な。」

力無く手を振り、へらへらとオスカルは笑った。

「……しかし、驚いたものだ。」

オスカルはベッドの上にいるツナを見つめながら呟いた。

今だツナの額には炎が揺らめいている。

先程、超死ぬ気モードを解こうとしたらオスカルに止められた。
そのあまりの必死さにツナは正直引いた。

「噂はもちろん、姿は写真で見たことはあるが…本当に子供だとは

」

「……………」

痛いほどの視線に、ツナはどうしていいのかわからなかった。

戸惑ってはいるのだが、そのポーカーフェイスに感情は隠されてしまっている。

心の中では、どうしようどうしようどと慌てているのだ。

「本当に、こんな小さな身体に力があるのか？」

「……………小さいって言うな。」

「すまない。だが、実に興味深いね。

炎の純度も綺麗だ。

なにより、大空のボンゴリングが君を選んだことに関心がある。」

ツナの右手をとり、指輪を見つめながらオスカルは笑う。

研究しがいがありそうだ、ととても楽しそうだ。

「どうだね。今から少し研究を……」

「馬鹿言つなオスカル。もう夜中だ。

それにツナは怪我もあるし、ゆっくり休ませねえと治りも遅くなる。

」

夜中だと言つのに研究をしようとするオスカルをリボーンは止めた。オスカルは不満そうな顔をしたが、リボーンの凄みに何も言えなかった。

「昼、ここに来ればいい。

それなら研究してもいいぞ。」

「…おい、リボーン、」

「わかった。ならば昼に再び来るとしよう。」

どっこいしょ、とオスカルは椅子から立ち上がり、ドアに向かっていった。

「では、また。」

オスカルはあっさりと挨拶をして病室から出ていった。

「……なん、だったんだ……あいつは。」

「だから、マフィアに属する学者の Oscar Accardo
(オスカル・アッカルド) だって言っただろ。」

「あの方は、夢中になると周りも何も見えなくなってしまうんですか
らね……」

ロンジは苦笑いをして、ツナの点滴を直した。
ちくり、と肌に痛みが走る。

「おめえも寝ろ。明日起きれなくなるぞ。」

「……ああ。」

じゅう、と額の炎が消え、グローブは手袋の姿に戻った。
瞳はオレンジから琥珀へと色を変える。

「…おやすみ。」

「チャオ」

「おやすみなさいませ。」

リボンとロンジはゆっくりと病室から出ていった。

病室に残されたツナは、しばらくドアを見つめていたが、眠らなければならぬとベッドに横たわった。

(…厄介なことになったなあ)

ため息をひとつついて、ツナはゆっくりと目を閉じた。

標的102 真夜中の訪問者（後書き）

し、新キャラ登場！

マフィアであり学者さんでもあるオスカルさん。

本名はOscar Accardo（オスカル・アツカルド）。
今回はロンジたちみたいなミドルネームはつけなかった。
元々ミドルネームなんてあまりつけませんし…ね。

オスカルさんをどうやって動かしていこうか楽しみです。

読んでいただきありがとうございました！

標的103 おかしな学者

ツナは眠かった。

まぶたが重く感じた。

眠たいせいか気分は優れない。

さらにそれに梅雨のじめじめ感が加わってひどい状況だ。

昨夜、謎の男が訪問してきた。

正確に言えば病院に侵入してきたということになるが。

その気配に気付いたツナはハイパー化し、敵かと思いその男を攻撃しようとしたが、そいつは敵ではなかった。

それほど会話はしなかったが、また昼に来る、と言って帰っていった。

どうやって忍び込んだのだろうか、とツナは思ったが、何故か聞いてはいけないような気がして聞くのをやめた。

ツナの超直感が聞かないほうがいいと、そう告げたのだ。

(つまりは不法侵入ということになるのだが。)

とにかくその男のせいでツナは寝不足だった。

課題を進めるスピードが遅くなっているのがわかる。

時々、意識が飛びそうになる。

「……………っ、あー！ダメだ！寝よう、よし、寝よう！」

耐えるに耐えれなくなったツナはついに課題を放棄した。
枕に顔をうずめ、就寝体制にはいる。

（一眠りすれば頭も働くようになるよね。それに今はリボンたちも買いい物で出払っているし、誰も見舞いに来ない時間帯だし。いいや、寝ちゃおう！）

頭の中で勝手に納得し、ツナは夢の中へ旅立った。

どれくらい時間が経ったのだろうか。

外は相変わらずの雨で、じめじめ感は変わらずにあった。
先程寝たのは十時くらいであったから、一時間くらいは経ったのだらう。

ツナは何かに起こされている気がした。
なにかがツナの名を呼んでいる。

それは耳からはいるものではなく、頭の中からのものであった。

それに導かれるまま、ツナはゆっくりと目を覚ました。

「……………え？」

「…あ。」

何かと目があった。

寝起きで視界はぼんやりとしていたが、確かに何かと目があった。

金色が見える。

水色の丸いものが二つ。

肌色、白色……………

「つんなあああああああ！！！！！？」

ツナは完全に覚醒した。

叫び声をあげて身体を勢いよく起こした。

目の前にいるのは、昨夜ここを訪れたあの男。

「…な、……な、なんで！」

「え、約束の時間は昼だっただろう？」

ほら、今は十二時十五分。」

腕時計を見せられれば、確かに針は十二を過ぎている。

ああ、そうか、と納得してしまいそうになったツナは、そんな約束はしていないことに気付いた。

「でも、オレ約束なんかしてませんよ！」

「したじゃないか。昼に来れば研究させてくれるって。」

「それはリポーンが勝手に言ったことでしょう！
オレは約束なんかしてませんから！」

確かにツナは約束はしていない。
勝手に約束をしたのはリボンだからだ。
確かにツナは承諾もしていない。
勝手に話を進めたのはリボンだからだ。

「って、なんですかそのカルテ！」

「病院からちよつと拝借したんだよ。
君が本当に人間かどうか確かめたくて。」

「わかるでしょう、普通に人間ですよ！ていうか勝手に人の個人情報
を拝借しないでください！」

ツナはカルテを奪おうと手を伸ばしたが、ひよいとかわされてしま
った。

そればかりか額を大きな掌で押さえ付けられて動けなかった。

「身長：157cm、小さいね。
体重は46.5kgって、君何食べてるの。痩せすぎだよ痩せすぎ。
筋肉ついてる？今が成長期なんだから規則正しい生活と運動をしま
いといけないよ。それと…」

「言わないでください！気にしてるんですから！…！」

大声を張り上げてツナは話を遮った。
何故か息が荒い。そして疲れた。

「……………余計な、お世話ですよ！
…えっと、名前は……………」

「昨日聞いてなかったの？
わたしはOscar Accardo（オスカル・アツカルド）。
45歳の学者だよ。」

よろしく、と差し出された手をツナは戸惑いながらも握った。
その手は大きいだけでなく握力も強かった。
ポキ、とツナの手の関節が小さな悲鳴を上げた。

「…で、いつ帰ってくれるんですか。」

「まさか！まだ帰らないよ！
君のことまだ何も研究してないんだからね！」

オスカルは束ねた長い金髪を指でくるくると巻きながら微笑んだ。
水色の瞳が綺麗だ、とツナは思ったが、まだ帰らないというオスカ
ルの言葉に焦った。

「え、帰ってください！オレは普通の人間なんですから！
宇宙人でも何でもないただの人間ですってば！」

「普通の人間が額から炎を出すわけないだろう。まず、マフィアの
ボスという時点で普通の人間じゃないよ。」

…ということだ、」

オスカルがにやりと笑った。

まるでリボーンが悪巧みをしているような顔だった。

「ボンゴレ十代目の沢田綱吉くんへの1000の質問、いきまーす！」

「なんでだあああああ！！！！！」

そのあとツナは全ての質問にふらふらになりながら答えた。

答え終わった頃にやっとリボーンたちが帰宅した。

標的104 学者の欠点

ああ、疲れた。
精神的に疲れた。

くらりと目眩がする中、ツナは疲労を感じていた。

少し昼寝をしようと思い、しばらく眠っていたのだが、目覚めたら目の前にはマフィアの中の学者だとかいう男がいた。

ツナが起きるなりその男、オスカルはツナに質問をし続けた。

どれもくだらないものばかりだったが（最初は誕生日やら血液型やら。さらには好きなタイプまで聞いてきた。）、後半はそれなりに真剣な質問になった。

何故かオスカルは骸と戦った時のことや、ヴァリアーとリング争奪戦をした時のこと、しまいには未来で白蘭と戦った時のことまでも聞いてきた。

オスカルが何故そのようなことを知っているのかはわからなかったが、ツナは質問に答えつつづけた。

「…ふうん、ディスベラーレ Disperare ね……」

今はウライラたちとのことを話していた。
マフィアだから情報が早いのだろうか。
結構詳しいことも知っていた。

「そいつが宇宙を支配って…お子様みたいな考えだね」

「それ、是非本人に言ってくださいよ……」

実際それを本人に言えば殺されるだろうが、そもそも今ディスプレイがどこにいるのかもわからないが、疲れきっていたツナはそんなことにも気付かなかった。

「…うん、質問はおわりだ。
答えてくれてありがとう！」

にっこりと笑って礼を言うオスカルは輝いているように見えた。
逆にツナはげっそりとしているが。

すると、病室のドアが開き、ツナのよく知る人物たちが入ってきた。

「おや、オスカル様。本当にいらっしやったのですか？」

「よっ、オスカル。研究は進んでるか？」

「リポーン。それに、ロンジさんだったかな。

まだ研究はしてないよ。

今は質問に答えてもらってたんだ」

「……それにしても、綱吉様が痩せこけていらっしやいますが……」

ロンジは手に持っていたビニール袋を降ろし、ツナの元へと駆け寄った。

「ご飯も食べていらっしやらないのですか？」

それに、熱があるように思いますが……」

「だって、この人が昼ごはんを食べようとすると次々と質問してくるし、具合が悪いつて言ってもお構いなしに話を続けるんだもん……」

ふらふらとしながらツナは答えた。

ロンジは急いでツナを寝かせ、額に濡らしたタオルを置いてやった。

「ちょっと、オスカル様！」

綱吉様に無理はさせないでください！」

「すまないすまない。夢中になりすぎてしまったんだよ。」

「そのおめえの悪い癖は昔から相変わらずだな」

リボーンはベッドの上に飛び乗り、ツナの頬をぺちぺちと叩いた。

「今こいつは普段より弱ってた。」

無理はさせんじゃねえ。これでも一応将来はボスなんだからな。」

「いてっ、いてっ！リボーン、ちょっと叩かないでよ！」

ツナは頬を叩くりボーンの手を払い、叩かれたそこをさする。

どこまで容赦のないやつなのだろうか。

少しは優しくできないのだろうかとツナは思った。

「そっだ、ツナ。学校から手紙が来てたぞ。」

ほら、とりボーンから手紙にしては大きな封筒を手渡され、ツナは不審に思いながらも封を開けた。

中には、何枚かのプリントが入っていた。

その内容は……

「……き、期末テスト……？」

そろそろ六月下旬。

世の中の学生たちが勉強に力をいれる時期だ。
最近は色々なことがありすぎて、ツナはテストという存在をすっかり忘れていた。

「…これ、受けるの？」

「受けなきゃ成績はねえぞ」

「でも、それまでに退院出来ないんじゃないか……」

すると、リポーンはにやりと笑って口を開いた。

「安心しろ、おめえは三日後には退院できるぞ。
それならテストには間に合うだろ。
よかったな、ツナ。」

なんていう絶妙なタイミングだろうか。

ツナは一瞬頭が真っ白になった。

「退院、ということとは…研究ができるな！」

「無理はさせないでくださいよ！」

「テストも受けれるし研究も出来る。よかったじゃねえか。なあ、ツナ。」

喜ぶオスカル。

注意をするロンジ。

楽しそうに笑うリボン。

ふらりと意識が遠退いた。
額の上のタオルがずるりとずれた。

今回ばかりは、入院が長引いてほしいとツナは願わずにはいられなかった。

標的104 学者の欠点（後書き）

最近タイトルが思い付きません…。
だからまったく無関係なものになったりしますよ！

オスカルさんが意外と人気でした。

お茶目なオッサンですよ、オスカルさんは！（笑）

リクエストもありましたので、

近日中に（おそらく今日中）オスカルさんの絵をサイトにアップしたいと思います。

学校はやっとクォーラーがつきはじめました！

テスト中は快適ですね（、、）

読んでいただきありがとうございます！

標的105 勉強好きと賭け

二日後には退院をする。

それは普通喜ばしいことなのだろうが、ツナは億劫でたまらなかつた。

学生が嫌うもの。

期末テストという難関がツナの目の前に立ちはだかった。

頭の弱いツナは常にテストの順位は最下位に近い。

それゆえに周りからダメツナと罵られる。

それが悔しいなら一生懸命勉強をすればいいのに、と思うだろうが、テストをしなければならぬ、と思うと途端に勉強に手をつけられなくなる。

そんな好き好んでテスト勉強をする者は滅多にいないだろう。ツナなんかはその逆なのだ。

「まだ時間はあるじゃねえか。

考えてみる。一週間以上も先のことだぞ。」

「わかつてはいるんだけど……テストって意識しちゃうと勉強したく

なくなるんだよね」

ベッドに突っ伏しながらツナはため息をついた。リボンから出された課題は先程終わった。今はその余韻に浸っているところである。

やだなあ、とツナが小さく呟くと、病室のドアが控えめに音をたてた。

「……あのー…、綱吉くんいますか？」

「ツナ、いる？」

顔を覗かせるのは、結加とその頭に乗ったトンノだった。

「結加ちゃん、トンノ！」

「なんだ結加、もう怪我はいいのか」

「おかげさまで歩けるようになりました。」

えへへ、と顔を綻はせながら結加は病室に入る。
トノノは結加の頭から離れ、ツナの元へと飛んでいった。

「ツナ、調子はどう？痛くない？」

「もう大丈夫だよ。」

「でも、それにしても元気がないよ？」

首を傾げながら聞くトノノに、ツナは苦笑いをした。

「いやぁ…昨日、学校からテストのことで手紙をもらって…やだなあ
あつて思ってたんだ……」

「あ、それ私ももらったよ」

結加もツナと同じように学校を休んでいたらしく、持っていた鞆の中
からツナが持つものとまったく同じ封筒を取り出した。

「テストなんて嫌になっちゃうよね…」

「そうかな？私はテスト好きだけどな」

共感を求めようとしたツナの表情が一気に強張った。

はじめて見た。
テストを嫌がっていない人間を。
稀少ではないだろうか。
もはや天然記念物ではないだろうか。

「……え、テスト好きなの!？」

「うん、楽しみ!だからさっき、本屋さんで参考書買ったんだ!」

うきうきしながら結加は鞆から何冊かの参考書を取り出した。
ツナはそんなもの自分とは無縁だろうと思っていたので、見るのは初めてだった。

「結加は勉強が得意だからな。
ツナも見習ったらどうだ。」

「綱吉くん、勉強嫌いな?」

「嫌いだし、苦手だし……まず勉強って何をすればいいのか……わからないし……」

後半は吃りながら目を横にそらすツナを見て、リポーンは呆れたと

言わんばかりにため息をついた。

トノノは勉強というものをあまり知らない（鳥だから当たり前だろうが）ので何も言わない。

「私も昔は嫌いだったけど…自分なりの勉強方法とか見つけて、頑張った自分にご褒美をあげてたらいっつの間にか勉強が好きになってたんだよね」

「ご褒美？」

「うん。お菓子とか、自分の好きなものをご褒美にするの。もちろん、勉強が終わるまではそれを我慢しなきゃいけないんだけどね」

今まで勉強にそれほど関心のなかったツナはすごい、と思った。自分なりの方法で苦手なものを克服しているのだ。

「…いいな、その方法。」

「え？」

リポーンがぼつりと独り言のように呟いた。その直後、嫌な予感がツナを襲う。

「よし、ツナ。今度のテストで平均点以下だったら罰ゲームだぞ。」

「なっ、なんでだよ！いやだよそんなの！！！」

突然の提案にツナはもちろん反対した。

リボーンの考える罰ゲームなんてものは酷いに決まっている。そんなこと、わかりきっているから尚更やりたくなかった。

「そこまでしねえと、おめえ勉強しねえだろ」

痛いところをつかれ、ツナは何も言えなくなった。

それを承諾として受け止めたのか、リボーンは話を進めた。

「おめえ、オスカルに研究されるの嫌がってたよな」

「そりゃあ、自分を研究されるのは嫌に決まって……、……まさか、」

頭の中で警報がけたたましく鳴った。

だがもうすでに遅い。

「全教科平均点以下、ひとつでも落としたり何があってもオスカルの

研究に付き合え！」

「そんなあああああ！！！！」

リボーンのはくそ笑む顔に、ツナは胃がキリキリと痛むのを感じた。

テストは一週間後。

それまでにツナは一般的な頭脳に追いつけるのだろうか？

はたして。

「是非平均点以下を取ってわたしの研究に付き合ってくれ！」

「いつからいたんですかオスカルさん！」

標的105 勉強好きと賭け（後書き）

最近ツナがかわいそうです！（笑）

次回からはやっと獄寺くんたちが出れそう…でしょうか？

入院生活はおさらばです。

わたしも今日、テスト最終日なので頑張ってきます！

読んでいただきありがとうございました！

標的106 久々の登校

太陽が眩しい。

空は青々と広がっている。

はるか向こうには、大きないくつかの入道雲。

梅雨の間の晴れ。

じめじめとした空気が一気に変わる。

アスファルトから照り返される熱。

まるで肌に突き刺さるようだ。

「……………あつい」

玄関から出たらこの天気。

久々の登校には迷惑きわまりない。

ツナは夏服の襟ではたばたと風をつくり、独り言のように呟いていた。

先日、ツナは無事退院した。

しかしそんなすぐに怪我が完治するわけがないので、今は運動を禁じられている。

苦手な体育を休めることは嬉しいのだが、少し走るだけでも腹部に痛みが走るのは辛い。

「学校まで歩いていけるかなあ……」

「無駄な心配すんじゃないねえ。」

何かあつたらナッツでも使つて助けを求めろ。」

見送りなのか、ただ喝をいれにきただけなのかはわからないが、中からリボーンがツナに話しかけた。

「無責任な！」

「自分の身体のこととは自分で責任を持って。ほら、さっさとしねえと遅刻するぞ。」

にやりと笑って追い払うようなしぐさをするリボーンを睨み、ツナは歩きだした。

「っ、いつてきます！」

「じゃあな」

足を進めた途端、生ぬるい風が頬をなぶる。

何故こんなにあついのか。

異常気象か、地球温暖化か。

ニュースで手に入れた情報を頭の中に思い浮かべながら、ツナは学校を目指した。

「おはようございます、十代目！」

「よっ、ツナ!!」

教室の扉を開けると、獄寺と山本が笑顔でツナに近寄ってきた。

久しぶりな朝の風景に少し感動しながらも、ツナは笑顔で挨拶を返した。

「ほんとに大丈夫なのか？その怪我。」

「歩くくらいなら大丈夫だって。」

「流石に走ったりはできないけど……」

「無理しないでくださいね、十代目！」

ツナは心配してくれる友人たちに感謝をし、自分の席へとついた。

その後も何人かの生徒に話し掛けられ、もちろん京子にも大丈夫かと言われた。

（その時ツナはとても幸せそうな笑顔だったとか。）

そのまま話しているうちに担任が教室に入って来て授業が始まった。以前はわからないからと半ば諦めていたが、今回はそういうわけにもいかない。

自分の身柄がかかっているのだ。（大袈裟に聞こえるがツナにとってはそれほど大きなことらしい）

ツナはわからないながらも必死に黒板を見つめ、教師の説明を聞いていた。

運が良かったのか、偶然なのか、習ったところは入院中にリポーンに出された課題の範囲だった。

「ツナー、今日は随分必死に授業受けてたのな」

「…うん、ちょっとね、」

「なにかあつたんすか？」

昼休み、屋上で昼食をとっていた中、山本がツナの授業態度の変化に気付き問いかけてきた。

その理由を教えてもいいのかと一瞬迷ったが、ツナは二人に打ち明けることにした。

「…実はさ、イタリアからへんな学者の人が来て、今度のテストで全教科平均点以上じゃないとその人の研究に付き合わないといけなくなっちゃってさ」

「研究…ってどんなだ？」

「まだわかんないけど、なんとなく嫌じゃない？研究って…。だから、なんとか平均点以上取らないといけなくて……」

「…そういうことだったんすか」

獄寺と山本は啞然としながらも、納得したような素振りそぶりを見せる。

「では、十代目が変な奴の研究に付き合わされないように、オレが十代目の勉強を手伝わせていただきます！」

「っ、ほんとに!?!」

「それなら、オレもやるぜ!」

獄寺は拳を握って意気込み、山本は満面の笑みで言った。

本当に、自分はいいい友人をもったと思う。

ツナはにっこりと笑った。

「二人とも、ありがとう!」

遠くから蝉の鳴き声が聞こえる。

日差しは容赦なく照り付ける。

梅雨があけようとしている。

ツナは穏やかな夏休みを迎えることができるのだろうか。

それは、全てテストが終わってから。

標的106 久々の登校（後書き）

先日、テストがやっと終わって帰宅し、疲れて寝てしまい、更新ができませんでした。

テスト週間で小説のストックがなくなってしまったので…。
5話分が一気に消えた！わああ！

本当にごめんなさい。

しかも今回はつまらなすぎた！
すみませんでした（´・`・`・`）

でも絵はどんどん生まれていくという（笑）

でもサイトに載せていないという（笑）

ホラー小説を書けるほどの文才をください。
（唐突！）

読んでいただきありがとうございます！

標的107 本番

何かに没頭するとこんなにも時間が早く過ぎるように感じるのかとツナは思った。

気付けばテスト当日。

カレンダーで日付を確認するが間違いない。

この一週間、本当によく自分は勉強したとツナは自身を褒めた。

はりきる獄寺が、「まずは今の勉強をどれくらい理解していらつしやるかテストをしましょう。」とお手製のテストを持ってきた。

そのテストの結果は全教科が三割程度しか解けない散々なものだった。

テストの結果を見た獄寺は、わざわざツナの得意な所や苦手とする所を分析し、ツナ特製の問題集を作り上げた。

山本の教え方は独自の解釈なのでツナにはまったく理解できなかつたが、山本の優しさが伝わってきた。

どうやら今回山本はいつもより余裕らしく、基礎問題は普通に解けるようになっていた。

そんな勉強会を毎日開き、土日は復習だとかでまた獄寺お手製のテストをやった。

結果は五割から六割ぐらいしか点数がとれなかったが、獄寺と山本は褒めてくれた。

ツナはそれが嬉しくて、教えてくれた二人のためにも頑張らなければ、と自分の心を鬼にして勉強に励んだ。

そんなツナを見てリボンがやりと笑っていたのをツナは知らない。

だが普段しない勉強を一週間も続けると流石にだれてしまう。

ツナの頭は容量がいっぱいになってしまったのか、それ以上に勉強をすることを否定するかのようになんて思えなくなってしまった。

しかし時間は止まりはしない。

焦りを覚える中、とうとうテストの日を迎えてしまったのだ。

「……っ、落ち着かないー！」

「しるせえぞ。」

起床してからの第一声が落ち着かない。

昨日から同じ言葉を繰り返す生徒に、家庭教師はいらついていた。ガチャリ、とわざと音をたてて銃を向けると、ツナは「ひいっ！」と甲高い悲鳴をあげ、両腕を目一杯高くあげて命乞いをした。

「昨日からうだうだうるせえんだおめえは。」

「だ、だって、もう全く何も覚えなくなっちゃって…！」

「おめえの頭が限界ってことじゃねえのか」

他人事のようにかわすりボーンをツナは睨む。

そんなツナを知っているのか知らないのか、リボーンは小さな声で言い放った。

「ま、それほどおめえは頑張ったってことだ。この一週間の努力を思いきりぶつけてこい。」

にやり、と笑ってリボーンは部屋からでていった。ツナは呆然としてリボーンがいた場所を見つめていた。

(……もしかして、励ましてくれた?)

スパルタの家庭教師が。
鬼の家庭教師が。
悪魔の家庭教師が。

最強のヒットマンとして恐れられている、あの家庭教師が。

「…ははっ」

(わかりにくいのがリボンらしいや)

小さく笑ったあと、ツナ表情は優しくゆるんだ。

「ありがとう、リボン。」

姿の見えない赤ん坊にツナは礼を言った。

登校中、獄寺に問題を出してもらい最終確認をしていた。
だがそれでもわからないものはわからないままで、教室に入り席についてからツナは何度も学んだところを見直した。

「どうしたんだー、沢田！何真面目に勉強してんだ？」

「……………」

「おーい、沢田、」

「うるせえ！黙ってる！十代目は今勉強してらっしやるんだよ！！」

こんなやりとりが何度も繰り返される。

普段勉強もろくにしないツナが真面目に勉強をしていることに疑問を持ったり、からかう奴らがいるのだ。

それを「十代目の邪魔をする奴は果たす！」と右腕の獄寺が追い払っている。

だがその騒動の原因であるツナは勉強に必死で気付いていなかった。

中学のテストは意地の悪いものだ。

教科は五つだけだが、それを一日で終わらせようとする。

それが生徒たちをさらに苦しませるのだ。

そうこうしているうちに、教師が現れ連絡をしたり注意事項を言ったりしていた。

ツナは慌てて勉強道具を鞆の中にしまい込み、しっかりとチャックをしめた。

「用紙が余ったらそこらへんに置いておけー。

いいか、絶対カンニングなどの不正行為はするなよ！」

ぶつぶつとしつこく注意しながらテスト用紙が配られる。

ツナの頭の中は一週間叩き込んだことがぐるぐるとめぐっていた。

(平均点以上取らないと…またおかしなことに巻き込まれる！)

平和を望むツナにとっては、これは一大事なのだ。

普通に生きて、なるべく何気ない日常を送りたい。

そう願わずにはいられなかった。

「はじめー！」

教師の合図と共に教室に紙のめくれる音が、次にカリカリと何かを

綴る音が響いた。

はあ。

ひとつ、深呼吸。

(落ち着け、オレ！)

心の中で己をなだめ、ツナはシャーペンを走らせた。

標的107 本番（後書き）

なかなか更新できなくてごめんなさい。

土日は午前午後部活で忙しくて）、 - - ;)

最近のお話はずまらないですね！
自分でも驚いています。

さっさとテストおわらせよう（笑）

読んでいただきありがとうございます！

標的108 開放感

開放感。

今はそれを楽しんでいる。

ツナはやり切った。

頭をフル回転させて期末テストに挑み、やっとそれを終わらせた。

今は帰宅し、ベッドの上に寝転んでいるところだ。

(ああ、疲れた……。やっと終わったよ……。疲れた疲れた……)

まぶたが重い。

視界が定まらない。

意識が遠退いていく。

「お、ツナ、帰ったのか。」

ひょっこりと、黒服の赤ん坊がドアの向こうから現れた。

だがツナは返事をすることも億劫で、ぼやけた瞳でその姿をとらえた。

「おい、寝るんじゃない。メシが食えなくなるぞ。」

リポーンに寝るなど注意されるが、ツナは睡魔には勝てない。

ゆっくりと、まぶたが閉じる。

意識は夢の中へと流れ込む。

「……………ぐうー……………」

「…ちっ、オレの言うことを無視するとは、いい度胸じゃねえか。」

小さく舌打ちをして、リポーンはツナを起こそうとベッドに飛び乗る。

頬を叩いてやるうか、と企んでいると、ツナの目元に隈くまがくつきりと出来ているのに気付いた。

寝る間を惜しんで勉強に励んだ証だ。

「……………仕方ねえな」

独り言のように言ったあと、リボーンはくるりと引き返し、部屋からでていった。

「…起きるまでは寝かせといてやるか」

レオンがリボーンの顔を覗き込む。

それを軽くあしらいつ、リボーンは階段をおりていった。

一面に広がるのは、ただ蒼い、蒼い大空。

ツナはそこにふわりと浮いていた。

ここはツナの意識の中。

大空属性であるツナの意識は、澄んだ大空なのだ。

「…どこにいるんだろう」

ツナはあたりを見回す。

もう何週間も、ツナは徳松を見ていない。

ディスプレイが去ってから、つまりツナが気を失う前から、徳松は眠り続けている。

入院中もテストの勉強をしているときも、一度も目を覚まさない徳松をツナは心配していた。

「……………あっ」

琥珀の瞳になにかをとらえた。

大空に浮かぶ、朝焼け色の炎。
脱色した茶色の髪の毛。

それは間違いなく、徳松だった。

ツナはすぐさま徳松のところへ駆け付けた。
だが徳松は眠っていた。
まぶたをかたく閉じて、目を覚ます気配はない。

「…そんなに、力を使わせちゃったかな」

ごめんね、とツナは眠っている徳松に謝った。

自分の能力なのに、自分自身なのに、ツナは徳松が本物の兄弟、家族に思えて仕方なかった。

「早く起きてよね、徳松。」

君がいないと、つまらないよ。

大空に小さく、寂しそうな声が響いた。

「……………あれ？」

視界は真っ暗。

少し蒸し暑い。

汗をかいていたのだろうか、風が頬をなぶるとひんやりと冷たさを感じる。

何時だろうと時計を見ると、針は1を指していた。

(…どれくらい寝てたんだろう)

ゆっくりと身体を起こし、ひとつ欠伸をする。

眠気はまったく取れていない。

どれだけ自分は疲れているのだろうか。

どうせ今日から二日間はテスト休暇だ。

いくら寝ても大丈夫だろう。

ツナは一先ず風呂に入るために部屋の明かりをつけた。

だが何気なく見た方向にあるものを発見し、絶句することとなった。

「……つなああああああ！！？」

「っ、何、どうしたのツナ！？」

ツナの悲鳴に驚き、寝ていたトシノも目を覚ました。
だがリボーンはすやすやと眠っている。

するとドアが開き、赤髪の男がはいつてきた。

「……んだよ坊主ー、ゴキブリでも出たのかー？」

今日はツナの家泊まっていたリーダーが眠たそうに欠伸をして問い掛けた。

「なんで、なんで、なんで!?!」

「なにがだ……って、うおおおお!!?!」

ツナがわなわなと震えながら床を指差す。
その方向を見たリーダーは一気に眠気が吹っ飛んだのか目を見開いて驚愕した。

「…なんだ、うるせえな」

流石に今の騒ぎで起きたのか、リボンが機嫌の悪そうな声色で問うた。

「リボン、どういふことだよ!!」

「なにがだ?」

「なにが、じゃなくて！これ！！」

リボーンがツナの指差す方向を辿る。

その先にいたのは、あの風変わりな男。

「……またか。」

ひとつ、大きくため息をついた。

リボーンの思考に気付いたレオンが手中に銃としておさめる。

「おい、不法侵入だぞ。」

ガウンツ！！！！

弾が勢いよく放たれた。

標的にされた男：オスカルは、目を見開いてかたまっていた。

標的109 不法侵入

世の中では無断で他人の家に乗り込むことは犯罪とされる。

いわゆる“不法侵入”だ。

法定刑では3年以下の懲役または10万円以下の罰金で、未遂も処罰される。

ツナたちの目の前には、そんな犯罪を犯してしまった愚かな学者がいた。

「てめえ、そのすぐに周りが見えなくなる癖直せ。いつか捕まるぞ。」

リポーンが呆れたようにため息をつく。

床に寝転んでいる愚かな学者、オスカルは苦笑いをした。

「それとも今、通報してやってもいいんだぞ。それかボンゴレが独自にお前を……」

「す、すまないすまない!!どうしてもこの癖は直らないんだ!謝るから通報しないでくれ!ボンゴレを敵にまわしたら私はどうな

るか…」

「わかってるじゃねえか。」

にやりと笑いリボーンはツナの隣に降り立った。
ツナとトンノとリーダーは啞然とした表情だ。

「…ねえ、この人なんなの？変人さんなの？」

「トンノの言うとおりだ。こいつ学者じゃなくてただの変人じゃねえか。」

リーダーの肩に乗っているトンノが本音をこぼし、リーダーもそれに頷いた。

確かに、今オスカルは学者ではなくただの変人にしか見えない。

「私は変人ではない！ちょっと風変わりなお茶目学者だ！」

「つまりはふざけた変人学者ってわけだな。」

うんうんと納得したようにリーダーとトンノは頷く。

何か否定のような叫び声が聞こえるが二人は気にしない。

「…どうしたんですか、オスカルさん。こんな夜中に……。」

やけに冷静なツナがオスカルに用件を尋ねる。

するとオスカルは思い出したようにツナの方に振り向いた。

「そつだそつだ！君に言わなくてはいけないことがあるんだ！」

途端にきらきらとオスカルの表情が輝いた。

だがツナはそのオスカルの表情に嫌な予感しかしない。

「そつといえば、君にまだ質問してないことがあつたなつて思つて。」

「…は？」

ツナはオスカルの言葉の意味がわからなかった。

いや、わかつてはいたがその意味を受け止めたくなかつた。

「ま、まさか……………」

「あの時すっかり忘れてたんだよね」

オスカルが持ってきた鞆をさばくり、笑顔でぺらぺらと言葉を綴る。するとバサリ、と音をたてて鞆の中から何かを取り出した。

見覚えのあるそれに、ツナは青ざめる。

「ボンゴレ十代目の沢田綱吉くんへの100の質問第二弾、いきまーす!」

「またかあああああああ!?!」

ツナの嫌な予感、見事的中した。

うきうきと楽しそうなオスカル、まさかの予感の中に啞然とするツ

しばらく部屋に静寂が訪れる。

一番最初に我にかえたのはツナだった。

「なっ、なにしてんだよ！！こんな夜中に銃を撃つなんて！
母さんたちが起きちゃうじゃん！」

「おめえらが呆けてるからだろ。」

ふん、とりポーンは鼻を鳴らしてそっぽを向いた。

ツナは耳をすましたが、外は騒いでいる気配はないし、奈々たちも起きてはこない。

はあ、とツナは安心のため息をついた。

「おい、オスカル。おめえは来るタイミングが悪すぎるんだ。
テストの結果が返ってくるまで来るな。
どうせ二日後に結果は分かるんだ。
それくらい我慢しろ。」

「……………うっ、わ、わかったよ……………」

少し不満そうにオスカルは頷き、手に持っていた質問事項が書かれた紙を鞆の中にしまう。

それを見てツナは安堵した。

「わかったならさっさと帰れ。

ツナ、おめえは風呂に入って寝ろ。

今日くらいならゆっくりしてもいいぞ。」

オスカルに帰るように言ったあと、リボーンは振り返ってツナに告げた。

少し帰ることを躊躇うオスカルをリボーンが蹴りを入れて追い出してしまった。

まったく容赦のない赤ん坊である。

そう心の中で呟くとリボーンがぎろりとツナを睨みつけた。

その睨みに一瞬怯え、ツナは逃げるように風呂場に向かった。

(ほんとに自分勝手だよなあ、リポーンって)

「文句あんのか、ダメツナ」

「勝手に心を読むなよ！」

標的109 不法侵入（後書き）

だんだんオスカルさんがあほになっていきます。
そんなはずではなかったのに…。

わたしはクールな人を書けないみたいです（笑）

ツナたちにとっての夏休み…長くなりそうです！
どうしましょう！

わたしの夏休みと共に終わることができるだろうか…。

ちなみに、ツナたちの夏休みは早めに始まりそうです。

読んでいただきありがとうございます！

標的110 テスト結果

(…っあ〜)。おさまれ動悸!!)

バクバクと外にまで漏れてしまっているのではないかと思うほど、ツナの心臓は音をたてていた。

ツナは緊張しているのだ。

本日返される、テストの結果に。

(平均点以上なかったら、オレ…どうなるんだろう)

もしかしたら、研究の一環だと言われて解剖でもされてしまうのではないだろうか。

そんな有り得ないことをツナは心配していた。

食欲もなく、そこそこに食事を済ませ、重い足どりで家を出た。

玄関では、リボーンが何か面白そうににやりと笑う姿を見てしまった。

あの顔は絶対今の自分を面白がっている、とツナは思った。伊達に家庭教師と生徒をやってきたわけではないのだ。それくらい、ツナにはわかる。

玄関のドアを開けると、いつものように獄寺がツナを待ち構えていた。

「おはようございます、十代目！」

「…あ、おはよ………」

力なく微笑むツナを見て、獄寺はツナの体調が悪いのかと心配をしてきた。

「傷に響くんでお荷物、お持ちします！」と言い、普段より重いツナの鞆（リボーンが「おめえは勉強道具を持って行かねえで、どう勉強するつもりだ。」と鞆に勉強道具を詰め込んだのだ）をツナから奪い取るように抱えた。

「え、いいよ大丈夫だよ獄寺くん！」

「いえ！十代目はまだ傷が癒えていらっしやらないし、なんだか体調も悪そうなのでオレがお持ちします！」

どんなに鞆を取り返そうとしても頑なに鞆を返そうとしない獄寺を見て、ツナはため息をついて諦めた。
と言っか諦めざるを得なかった。

獄寺の一方的な会話のおかげでツナはあまり話さずにすんだ。
適当なところに相槌をうつだけでいいのだ。

気分の晴れない今、あまり会話ができないツナにとって、それはとてもありがたかった。

「ツナ、おはよう」

「あ、山本おはよう」

後ろから肩を叩かれ、振り返ると朝から爽やかな笑顔の山本がいた。

山本は獄寺にも挨拶をしたが、

獄寺は「朝からやかましいんだよ、野球馬鹿！」と文句を言うだけ

だった。

「ん？そついや、ツナ元気ないな。
具合でも悪いのか？」

「十代目は今体調が優れていらっしやらねえんだよ！お前は黙ってる！」

「ぐ、具合が悪いわけじゃないよ！体調も良いし、どこも痛くないし！」

ツナは笑顔をつくり、獄寺から鞆を取り返して元気を繕った。

「それならいいけど、無理するなよ？」

「うん、ありがとう山本」

心配をしてくれた山本にツナは礼を言い、遅刻してはいけないからと足をはやめた。

自分の席についても猶も心は落ち着かない。

早くテストの結果を見たいという好奇心と、もしかしたら平均点がないかも知れないから見たくないという恐怖心とが葛藤していた。

そんな心の休まない時間を過ごし、とうとう教師が教室内に入ってきた。

その手には、大量の用紙。

どうやら一人の教師が五教科すべてのテストを返すらしい。

各時間にそれぞれの教科のテストを返すと思っていた生徒たちは驚きでざわついた。

ツナもまた然り。

驚愕で声も出ない。

そんな生徒たちをよそに、教師は連絡やら何やらを伝えていく。

その時間はツナにとってはとても長く感じた。

「よし、じゃあテストを返すぞ。」

今回は先生が全教科のテストを返すことになった。覚悟しとけよ。」

バサバサと教師が解答用紙を揺らす。
その顔はとても楽しそうだ。

「ちなみに平均点は、全教科が同じ点ってことはいつものことだから分かってるよな。」

今回は65点だ。その半分以下は赤点だからな!。」

(ろ、65点!?)

意外にも高い点数にツナはさらに驚愕した。
全教科がその点数なのだ。

今までそのような点を取ったことのないツナにとっては難関ではない。
ない。

「名簿順だからさっさと来いよー」

呑気に教師は解答用紙を返却し始める。

それとは真逆でツナは失神してしまうのではないかというくらい緊張していた。

次々と解答用紙が生徒の手に渡る。

生徒たちはそれぞれ喜びや哀しみの表情を浮かべている。

獄寺にも解答用紙が返された。

教師がなにやら「全教科95点以上はお前だけだぞ」と言っていたが獄寺はそんなことは気にすることなく席へと戻っていった。

「おい、沢田！」

「っ!?!」

とうとう来た。

運命の時がやって来た。

高鳴る心臓をおさえ、ツナはふらふらとしながら教師のもとへと行く。

その様子を獄寺と山本が心配そうに伺っている。

「沢田、今回どうした？」

「…なんですか、いつも通り赤点ばっかですよね……」

半ば諦めた表情でツナが呟いた。

だが教師は笑顔でツナの肩を叩いた。

「違うぞ。今回はよく頑張ったな！

赤点なんてひとつもないぞ！」

ほら、とツナの手在五枚の解答用紙が渡される。

ツナは教師の言葉が信じられず紙に穴が空くほど点数を凝視した。

国語 67点

英語 68点

社会 71点

理科 69点

ぺらり、と最後の解答用紙がめくられる。

数学 64点

平均点は 65点。

「っそんなあああああああああ！！！！」

ツナはその場に座り込んだ。

数学の点数が頭から離れない。

忘れない。見なかったことにしたい。

ああ、確か点数は。

平均、以下。

「じゅ、十代目……」

「惜しかったな…ツナ……」

しやがみ込むツナに獄寺と山本が駆け寄る。
ツナの肩はかすかながらに震えていた。

(そんな、そんなそんなそんな!!!
数学だけが…数学だけが平均以下なんて!!!)

もはやツナの瞳には涙がにじんでいた。

何も知らない教師や生徒たちは啞然としてツナを見つめているだけ
だった。

研究、その言葉がツナの頭をよぎった。

ツナの夏休みは、平和にはならないらしい。

標的110 テスト結果（後書き）

かわいいそう、ツナ！

でもこうしないと話が進まないの…。

平均点65点は難しいですね。

今思いました（笑）

わたしでさえも70点以上ほどなので…。

獄寺くんは満点たくさんとりそうですね。

ちなみに山本さんは全教科50点以上あったみたいです。よかった！

ツナには悪いですが…研究に付き合ってもらわなければ！

読んでいただきありがとうございました！

標的 1 1 1 諦念

絶望感、

落胆、

後悔。

空を見上げながら、ツナは様々な不の感情を巡らせていた。

バサバサと、鳥が空へと羽ばたいていく。

(…いいなあ、オレも自由になりたいなあ……)

ぼろりと、本音がこぼれた。

小さな悲しさを帯びる背中を、獄寺と山本は気まぐれそうに見つめていた。

「十代目……」

「そうとうショックだったみたいなのな…」

今は昼休み。

三人は屋上で昼食をすませているところだ。

だが先程からツナはあの調子で、二人はどう接していいのかわからず、フェンスに顎を乗せてうなだれるツナを見守ることしかできないでいる。

ツナのテストの結果は、凄まじい成長を遂げたものだった。

赤点なんていう話ではない。

今までそんな点数取ったことがあるのかというほど素晴らしい点数であった。

通りすぎる教師たちにツナは褒められた。

だがツナは喜ぶことができない。

“全教科平均点以上じゃねえと、オスカルの研究に付き合わされるぞ”

テスト勉強中、何度も聞いた言葉がよみがえる。

全教科、でないといけないのだ。
ひとつでも平均以下があればだめなのだ。

「……………はあ。」

腕に顔をうずめて、ツナはため息をつく。

苦手なものは苦手なんだ、と心の中でその言葉をくりかえした。

ツナをこんな状態にさせたのは、数学である。

唯一、数学だけが平均以下であった。

一点、たかが一点、されど一点だ。

だがあの家庭教師が一点を見逃してくれるはずなどない。

例えば一点足りなくても、平均以下には変わらないのだと言っはずだ。

空腹感はない。

ただ諦念ていねんの気持ちがツナを支配していた。

ガチャリ、と屋上の扉が開かれた。

獄寺と山本が「あ。」と声を揃えたのと、ツナの背中に衝撃が走ったのは同時だった。

「っいつてええええ!!！」

ガシャガシャとフェンスの網が鳴る。

ツナは衝撃の走った背中をさすって後ろを振り返った。

こんなことをする奴は、あいつしかいない。

「リポーン!!！」

「チャオツス」

黒服の赤ん坊が呑気に挨拶をした。

何もなかったかのような態度がとてもむかつく。

「なんなんだよ一体！学校に何か用なのかよ！」

「…おめえ、テストが返却されたんだろ？」

ぎくり。

ツナの肩が動揺に揺れた。

おそろおそろ、ツナはリボーンの顔を伺う。

にたりとした笑顔。

その表情は。

(…絶対結果知ってる!!!)

たらりと汗が頬を伝う。

逃げてしまいたいのに逃げるできない。

もし逃げる事ができたとしても、この赤ん坊には勝てない。

「おめえ、そんなにオスカルの研究に付き合いたかったのか？」

「っそんなわけないだろ！逆だよ、逆！
研究なんかされたくないよ！」

「じゃあなんで平均以下の点数を取るんだ」

「わざと取ったわけじゃないよ！

オレだって平均以上取るうと頑張ったんだよ！」

ぎゃあぎゃああと騒ぐうちに、ツナは本気で泣きたくなくなっていた。

普通に生きたいのに。

今の生活でもう十分すぎるのに。

平凡が、どんどん離れている気がする。

いや、それは事実だが。

「マフィアのボスに選ばれた時点で平凡なんて関係ねえだろ」

「オレはボスになんかなりたくない！

ってか勝手に心を読むなよ！」

騒ぎすぎたのか、腹部に痛みが生じる。

チクリチクリと地味なそれは、今のツナには十分なものだった。

ずるずると地面にへたりこんだツナを、獄寺と山本が心配して駆け寄ってきた。

「さつき結加の点数を教師に聞いたらな、獄寺には及ばねえが、全教科90点はあつたぞ」

「嘘！つてかりボン先生に聞いたのかよ！」

結加は今、一時的にイタリアに帰国している。
テスト明けの休みから一週間あちらに滞在するらしい。
だからテストの結果をかわりにリボンが受け取ったのだという。

「…赤ん坊を保護者同然に扱うなんて……」

「世も末、だな！」

山本が笑ってツナの言葉を紡ぐ。

確かにこれほど小さな赤ん坊が喋る時点でおかしいのだ。
ましてや銃を操るなど、まさしく世も末だ。

「とうとうこつた、今週末から研究に付き合っただけやれ」

「なっ！！？今週末って…明日！？」

あまりにも急すぎる、とツナはそれに抵抗の意を見せた。だがそれに素直に従うリボンではないのは百も承知だ。

「おめえの今の力を知れるチャンスだろ。

一応おかしなことをさせるんなら止めてやる。

だが心配するな。あいつはおめえの心配する解剖とか危ねえことはしねえぞ。」

ツナの今の力を知る、それがリボンの目的だったらしい。

だからオスカル願いの聞いたのかと今さら気付かされた。

「もしかしたら新しいことも発見できるかも知れねえからな。本格的な研究は夏休みだから安心しろ。」

じゃあな、と言ってリボーンは去っていった。

残されたのはツナと獄寺と山本の三人。

木々が風でざわざわと揺れた。

予鈴が寂しく、ツナの鼓膜に響いた。

標的 112 出迎え

……… ああ、真っ暗だ

これは真っ暗闇だ

… オレは前までここにいたのか

こんな、寒くて哀しくて寂しいところに

こんなところで、ひとりで眠っていたのか

… いや、ちがう

ひとりではなかった

だって、傍には誰かがいたんだ

何も見えないけれど、何も聞こえないけれど、たしかに誰かがいた

んだ

朝焼け色と、大空色と、白色と。

それに導かれるまま、

オレは、

まぶたを上げた。

導かれし魂よ

今封印を解かれ

あるべき所へ帰還する

その魂は炎となりて

世の悪を祓い清める

「……………ツナ、ツナ」

「……………ん、なに……………どうしたの、トシノ」

「ツナ、起きて。朝だよ。」

トシノがくちばしでツナの頭をツンツンとつつく。
くすぐりたいのか、ツナはすぐにうめき声をあげながら目を覚まし
た。

太陽の光が目にしみる。

「……………なんで。今日は土曜日……………」

「ツナ、オスカルさんとの約束があるだろ？」

そこでツナははっとした。
がばりと勢いよく起き上がり、トンノが驚いてベッドに転がった。

時計を見れば、朝の八時。

昨日、リボーンから聞いた話ではオスカルは朝の九時に迎えに来るとのことだった。

「よかった、まだ余裕あるじゃん。」

これなら遅刻せずにすむだろう、とツナは安心した。

バサバサツとトンノが羽をばたつかせて起き上がった。

「起こしてくれてありがとう、トンノ」

「えへへ、どういたしまして」

ツナが礼を言ってトンノの頭を撫でると、トンノは気持ち良さそうに目を閉じた。

「あ、そういえば奈々さんが朝ごはんがもつすぐできるよって。」

「じゃあ着替えてから行くから先に食べてていいよ」

腕にトンノを乗せて言うと、トンノは「わかった」と言って一階へ降下していった。

ぽすん、とツナはベッドに倒れ込む。

(……、変な夢を見た気がする)

でもそれがどんな夢だったかは覚えてない。

そんなことはよくあることだから、ツナは気にしなかった。

だが、なにかが引つ掛かるのだ。

(なにか、大切なことな気がするのになあ)

もそもそと、ツナは着替えをするべく立ち上がった。

朝食を終えたツナは、憂鬱で仕方なかった。

テストでノルマの結果（と言ってもリボーンが勝手に決めたのだからツナの意思はどこにもない）を出せなかったからと言って、オスカルの研究に快い感じはしない。

まだ何をされるかもわからないのだ。

解剖だけはされないので一安心だが。

「……お、来たぞ」

隣でコーヒーを飲んでくつろいでいたリボーンが顔をあげた。

リボーンの言葉のあと、すぐにチャイムが鳴り響いた。

「じゃあ母さん、行ってきます」

「遅くなったりする場合は連絡するから心配いらねえぞ、ママ」

「いつてらっしゃい、しっかり勉強してくるのよ」

奈々には「ツナの実力の研究をしてくる」などとは言えないので、知人の家で勉強をしてくる、と言っておいた。

「あら？」と奈々は首を傾げ、閉じた扉を見つめた。

出ていったのはツナとリボン、トンノにリーダー。

トンノならともかくリーダーまでもがツナについて行ったのだ。

だが流石は奈々。

そんな小さなことは気にしない、と朝食の片付けをしに台所へと向かった。

「…なんでついて来るんですか、リーダーさん」

「暇だし、気になっちゃまってよー」

気にするな、とリーダーがツナの背中を叩く。

一瞬むせそうになったが、そこはなんとかたえた。

「あ、こっちこっち!！」

門を出ると、電柱にもたれている金髪の外人が目に入った。

「おはよう、綱吉くん」

「おはようございます」

「おいオスカル。どこに行くんだ？」

リボンがツナの頭の上からオスカルに聞いたです。

「この先の、ずっと向こうの森の地下に研究所をかまえてるんだ。そこに行くんだよ。」

「並盛…じゃないんですか？」

ツナが首を傾げて問うとオスカルは笑顔で頷いた。

まさか並盛ではないが近くに研究所をかまえているとは、思ってもいなかった。

それはリボンも知らなかったらしい。

ふん、と鼻を鳴らして連れていくように促す。

「なあ、どれくらい時間かかるんだ？」

「えっと、歩いて5時間くらいかな」

「じつ…！？そんなに離れてるんですか！？」

「うん、5時間。交通機関はないよ、研究に差し支えがあるからね。歩いてもらうよ。」

まさかの数字にツナたちは驚いた。

まさかの歩きという手段にさらに驚いた。

ツナたちを迎えに来たオスカルは、5時間かけてここまでできたのだろうか。

だとすると早朝の四時には出発していたこととなる。

そろそろいい年だというのに、まだまだ元気らしい。

「そつえば、あのロンジさんとか言う人は今日は不在で？」

「ちょっと用があつてイタリアに行つてんだ。」

「へえ、綱吉くんの執事かと思つてたから常に傍にいるもんかと…」

「あの、オレ執事さんとかいませんから」

ロンジは結加と共にイタリアに帰国している。
どうやら結加の付き添いらしいのだが、詳しいことは知らない。

「沢山お土産を買ってきますね」と笑顔でロンジと結加は出かけていった。

おそらくはボンゴレに関することなのだろう。

「ほんとに5時間も歩くのか。」

「うん、ほんとに。」

「…それじゃあ疲れるし、ツナノ病み上がりの身体には負担がかかるよね」

人の気配がない川沿いにさしかかると、トンノがため息をついて乗っていたリーダーの肩から羽ばたいた。

トンノの身体からまばゆい光が発せられたかと思うと、それはすく一瞬でおさまり、目の前には大きな姿へと変わったトンノがいた。

「…っ、君さっきの鳥さんかい!？」

「正真正銘、こいつはさっきまでオレの肩に乗ってた鳥さんだ」

突然の出来事に興奮するオスカルを、リーダーがなだめるように静かに言った。

「ほら、僕に乗ってください。」

歩いて5時間なら、僕が飛べば数十分でつく。」

「…ごめんね、トンノ」

ツナが謝ると、トンノは気にしないでと言うように優しい表情を向けた。

バサツ、と金と白の美しい翼が動く。

トンノはオスカルに指示された方向を目指し、羽ばたいた。

「お、そうだ。トンノ、獄寺と山本を拾っていけ」

「えっ！？二人もくるの！？」

「それを先に言ってよ！」

標的112 出迎え（後書き）

やっと物語が動きそうです。

まさかの研究所が森の中。

しかも地下。

並盛の地下はツナたちがアジトを建てますしね！

あ、その森は、あのウライラさんと戦ったりした森ではありません。

結加ちゃんとロンジがイタリアに行ってしまったので少し寂しいですが…それにもちゃんと理由があるので！

おいおい物語に加えますからご安心ください。

最近毎日更新ができなくなってます。

ストックが切れたのもありますが、忙しさが増したのも理由のひとつです。

なるべく、更新を滞らないようにします。

…ですが、今新たな物語を考え中です（笑）

浮気をしそうです、わあ！

…ホラーを目指して、頑張ります。

読んでいただきありがとうございます！

標的 113 到着

あなたは誰？

“私は君の味方だよ”

なぜこんなところにいるんだ？

“今から眠りにつくからね”

ひとりで、寂しくないのか？

“寂しいよ。…でも、信じてるんだ”

なにを？

“いずれ、訪れるであろう、少年をね。
その子が訪れれば、私は目覚めることができるんだ。”

それまで、ずっとここに？

“ 待っているんだ。私一人では今はどうしようもないからね。”

なら、オレが傍にいてやる。

“ 駄目だよ。君は少年の一部となるんだよ。”

少年がいつかここに来るならば、それまで待てばいいだけだ。
ひとりでは、寂しいだろう？

“ 優しいね、君は。あの少年も、優しい子なんだろうなあ。”

大丈夫だ。いつか訪れるから。
今は不完全だが、少年が訪れればオレも本物になれるから。
心配するな。朝は、光は必ず訪れる。

“ そうだね。さあ、眠ろうか。”

おやすみ、まだ名もない小さな炎、
c u o r e。^{クオーレ}”

導かれし魂よ

今封印を解かれ

あるべき所へ帰還する

その魂は炎となりて

世の悪を祓い清める

ザアアアアッ

一際強い風が森を通り抜ける。

葉に紛れて舞うのは、美しい金と白の羽。

ひらひらと散るそれを、風が何処かへと運んでいった。

「ほんとに森なんですね」

きよろきよろと辺りを見回してツナは独り言のように呟いた。

元の姿に戻ったトンノは、疑うようにオスカルを一瞥し、ツナの肩へと飛び乗る。

「さあ、こつちだよ」

「ほんとにこんなところに研究所があんのかよ」

「ははっ、未来のオレたちのアジトみたいだな！」

獄寺が警戒するように森を見渡すが、それに対して山本はいつもと変わらずお気楽な様子だ。

リボーンは黙ってリーダーの肩に乗っており、リーダーは眠たいのか欠伸をしていた。

「一応私は何処にも属してはいないがマフィアの中の学者だからね、

あまり公おおやけに研究所をかまえられないのさ」

がさがさと草をかきわけ、オスカルがある一本の木の前で立ち止まった。

それと同時に、ツナは何かを感じ取った。

(…この木……)

「あの、オスカルさん」

「なんだい？」

「…その木、本物……ですか？」

控えめにツナが問うと、オスカルは少し驚いたような顔をした。しかし、すぐに笑顔になり問いに答えた。

「すごいね、よくわかったね！」

君の言うとおり、この木は本物ではない。中にはいろんな機械が詰め込まれている、カモフラージュみたいなものなんだ。これを見破れるとは…侮れないね、超直感は。」

オスカルはそつと木に手をかざし、何かを唱えた。

すると、ガチャン、という音が鳴り、目の前の木が横に退いた。

地響きのような音と共にあらわれたのは、鉄の扉だった。

「…すごい」

「ここから地下の研究所に行くんだ。私について来てね。」

そう言うとオスカルは一人が通れるくらいの階段を、小さなペンライトで明かりを燈して下っていった。

見失わないようにと、ツナたちは急いで彼の後について行った。

カツン、カツンと足音がこだまする。

研究所へと続く階段はひんやりとしており、夏にしては涼しすぎた。

しばらくすると、大きな頑丈そうな扉の前でオスカルが立ち止まった。

「いきなり眩しいところにでるから、目に気をつけて。」

そしてオスカルは、小さな鍵穴に鍵を差し込み、ガチャリとまわした。

ギイイイイ

「っ!？」

「わ……」

眩しさに目を細めながらも、ツナは思わず声を漏らした。

数十メートル上には広い天井。

壁は硬そうな素材で出来ており、シンプルな白でコーティングされ

ている。

部屋はだいたい百メートルは距離があるだろうか。だがその先にも扉はあるから、まだ部屋があるらしい。

一角には研究の機材やらが置かれ、それ以外には何も無い。

「…広い」

「だろう？まだ部屋はあるんだけど…まあ、ここがメインとなる部屋だね」

オスカルは機材の置いてあるところへ来るように促し、ツナたちは素直にそれに従う。

何台ものパソコンが並ぶ机の椅子に腰掛け、オスカルが何やらキーボードをせわしなく打ちはじめた。

「おい、何するつもりなんだオスカル」

「まずは綱吉くん健康チェックかな。脈はかったり…採血とか？」

「さ、採血!？」

ツナは顔を青ざめさせて後ろへと下がる。

まさか、オスカルが採血を行うのだろうかと怯えた。

「したほうがいいんだけど…まあ、健康そうだしいいかな。身長とか体重はもう聞いたし、健康チェックはいいや。」

カタカタとキーボードを打ちながらオスカルは言い、ツナは安心のため息をついた。

「じゃあ、綱吉くんの炎をとらせてくれるかな」

「炎?」

「炎の性質や精密さを調べてみたいんだ」

回転式の椅子をぐるりとまわし、オスカルは微笑みながら言った。

炎を調べる、ということとは超死ぬ気モードにならない。

ツナはズボンのポケットの中にある死ぬ気丸を取り出そうと手を入れた。

だが、それはある声に遮られた。

“お前、ツナに何をする気だ”

「、？」

「っいの声……」

ボウウウウウッ

声が聞こえたあと、オレンジ色の炎がツナとオスカルの間にあらわ

れた。

まばゆいほどの炎は、だんだん形を変え、小さな人間の姿になった。

「と、徳松!!」

「!!!??」

オスカルは突然あらわれた小さな人間を見て、動揺を隠せないでいた。

ふわりと浮いて徳松はツナの前に立ちはだかるようにオスカルを睨んだ。

「つ、綱吉くん…これは一体……」

オスカルがふるふると震える指先を徳松に向ける。
徳松の炎は警戒するように燃え盛っていた。

オスカルと同じように、ツナも徳松の出現に驚いていた。

標的 114 追憶？

ゆら ゆら ゆら ゆら

揺らめく炎は勇ましく、美しい火の粉を散らせて燃えていた。

オスカルは驚きのあまりかたまってしまっている。

ツナも突然の出来事に動揺してしまっていた。

「…と、徳松!!」

「ツナ、平気か？」

ツナが徳松の名を呼ぶと、徳松は心配そうな顔で振り返る。

だがオスカルへの警戒心はゆるめず、ツナの前からどろろとはしない。

「ツナ、こいつは敵か？敵なら…」

「ま、ままま待って！敵じゃない！敵じゃないから！！」

徳松の炎が一気に燃え盛ったのを見て、ツナは慌てて徳松を止めた。今だ驚いているオスカルを、徳松はじっと見つめている。

「あの、この人はオスカルさんって言って、……なんかオレのことを研究するとか……なんとか……」

後半どもり口調なツナの言葉を聞き、徳松の眉間がぴくりと動いた。

「研究とは失礼な！ツナは人間だぞ！くそつ、お前なんか今すぐ……」

「なあああああ！！！！徳松ストップストップスッー！！」

今にもオスカルに襲い掛かりそうな勢いの徳松をツナは必死になだめた。

小さな徳松は意外と力が強く、ツナの手からすぐに離れてしまいそうでツナは一瞬だけ背筋が冷えた。

「落ち着け徳松。ツナの言うとおりにこいつは敵じゃねえ。研究つつつても酷いことはさせねえから安心しろ。」

リボーンが落ち着いた声で徳松に言い聞かせる。
やっと正気に戻った徳松は、ツナの手の中で大人しくなった。

「…あの、綱吉くん、その子は……」

恐る恐るオスカルがツナに問う。

ツナはどう説明していいかわからなかったが、ゆっくりと徳松について話しはじめた。

「あの、徳松は…オレの能力なんです」

「能、力？」

「ああ。オレはツナの能力としてツナの心の中にいたが、ツナの能力があまりにも強すぎたから、オレは自らを封印し、目覚めるべき時を待ってたんだ。」

ツナの肩の上で徳松はすらすらと言葉を並べた。
オスカルは興味津々にツナと徳松の話聞き、キーボードを打つ。

「だが、オレの核：クオーレ cuore、人間でいう心臓みたいなものだ。
それはツナの元にもオレの元にもないんだ」

「、どういうことかな？」

「…お前、スペランツァを知っているか？」

スペランツァという単語を聞いた途端、オスカルのキーボードを打つ指がぴたりと止まった。

「…スペランツァって、tesoro nascosto（テゾーロ ナスコスト）の伝説に出てくる神のことかい？」

少し小さな声のオスカルの問いに、ツナと徳松は頷いた。

「オレの核、^{クオーレ} coreは…スペランツァの元にあるらしいんだ。」

「っ!?!?」

オスカルは目を見開いた。
指がかすかに震えている。

「…それは、本当かい?」

「ああ、事実だ。それに、オレがずっと眠っていた間、かすかに思い出したんだ。」

「、思い出したって何を?」

しばらく徳松は黙っていたが、小さく、だがはっきりと言葉を発した。

「…オレが、スペランツァと会話した時のことだ。」

「っ、な!?!?」

予想外の答えに、ツナも驚愕した。
リボンたちも驚いたのか、言葉を発しない。

「……ずっとずっと昔、スペランツァが深い眠りにつく前、オレはツナよりも先に生まれた。能力として。」

まぶたを上げると、優しそうな男の人が横たわっていた。

オレはその男の人に話しかけた。

……それが、スペランツァだったんだ。

これから深い眠りにつくと言うスペランツァは、どこか寂しそうで、でも嬉しそうだった。

一人でいることは寂しいと思ったオレは、スペランツァの傍にいてやると言った。

すると、彼はとても嬉しそうに笑ったんだ。

なぜオレがツナよりも数億年も前に生まれたかはわからない。

思い出せないんだ。
どうしても。

だが、そのときからスペランツァは知っていたんだ。

オレがツナ有能力である^{クオーレ}cuoreであること。

…ツナが生まれてくることも。

だが、なぜツナが生まれたときにオレが^{クオーレ}cuoreとツナの心に
生まれなかったのかはわからない。

こうして^{クオーレ}cuoreがないのにツナの前で能力として生きているの
かも答えが曖昧なんだ。

…でも、わかることがある。

スペランツァは、信じていたんだ。

…いや、信じているんだ。

「ツナが、必ず目覚めさせてくれることを、今でも。」

導かれし魂よ

今封印を解かれ

あるべき所へ帰還する

その魂は炎となりて

世の悪を被い清める

核は主の元になく

はるか遠くに眠っている

それが繋ぐものは

神と主の強い絆

標的114 追憶？（後書き）

更新が遅くなって申し訳ないです（・・）

ただいまいろいろ大変でして…全身が筋肉痛です。

小説は、やっとこの話の中心に近づいたかんじです。

やっと徳松さんが起きたのでわたしも一安心です。

読んでいただきありがとうございます！

標的 115 追憶？

“ スペランツァは信じているんだ。
ツナが、必ず目覚めさせてくれることを、今でも。”

広い部屋に静寂が訪れる。

誰も口を開かない。

時々、コンピュータや機械の音がするだけだ。

どれだけ時間が経ったのだろうか。

最初に言葉を発したのはリボンだった。

「…それは本当か、徳松。」

「……スペランツァは今深い眠りについているから、オレがあの日からずっと眠っていた間に直接話したわけではないけど…わかるんだ。」

強く確信を持った瞳で徳松は頷いた。

「多分、オレの^クcuoreがスペランツァと共にあるからだと思う。
でも、その在りかまではわからないんだ。」

まるで、深い深い霧で覆われているように、スペランツァと徳松の^{クオーレ}cuoreのある場所は隠されている。

その場所へ行く鍵となるのが、tesoro nascosto（テゾーロ ナスコスト）とツナ自身なのだ。

今、tesoro nascosto（テゾーロ ナスコスト）は^{テッラジヨ}seraggioのシクロとスイだけでしかない。

スペランツァと徳松の^{クオーレ}cuoreの居場所は到底不明であるだろう。

たどり着くまで道のりは長そうだ。

「スペランツァとは少ししか話してねえのか」

「……いや……、なにか言ってた」

しばらく思い出すような素振りを見せ、小さな声で何か呟きはじめた。

「……………導かれし魂よ

今封印を解かれ

あるべき所へ帰還する

その魂は炎となりて

世の悪を被い清める

核は主の元になく

はるか遠くに眠っている

それが繋ぐものは

神と主の強い絆……………」

「…なにそれ？」

徳松が唱えた謎の言葉にツナは首を傾げた。

「スペランツァが唱えていたんだ。」

…思い出した。他にも……あつた気がする。」

「よし、言ってみる」

リポーンに促され、徳松は記憶を辿ってスペランツァが言っていた言葉を綴りはじめた。

願う祈りは光となり

主を守る力となる

帯びる炎の力は

主を包む力となる

多くの欲望が渦巻く世界

混沌とする人々の心

しかし、それをなだめ

清め、澄ませるものは

ひとつの強い、強い炎

空と海の狭間で揺れる心

それを唯一動かすものは

覚悟と意思と希望と仲間

「それって確か、シクロとシスイが封印から解かれたときに聞こえた……」

「おそらく、この呪文が *tesoro nascosto* (テゾーロ ナスコスト) に纏まわる呪文ってことだろう。……そういえば、シクロとシスイは？」

「ああ、二人なら家に……」

家にいる、と言おうと口を開いた途端、部屋の空気がぶれた。

ブオン、と音がした方向を見ると、一点の空気が歪ひずみを起こしていた。

ブオン ブオン ブオン ブオン

だんだん大きくなる不気味な音と歪みに、ツナたちは警戒をする。

だが、次の瞬間にその警戒は無駄だったことを思い知らされることとなる。

ブオオンッ

「っ!？」

「え!？」

ツナは目を丸くした。
歪みから現れたのは。

「「あ、ツナ」」

「っ、シクロとシスイ!？」

空中には、小さな人間が二人浮いていた。

その二人こそが、たった今会話に出てきたtesoro nasc
osto (テゾーロ ナスコスト)のser^セraggio、シク
ロとシスイである。

「どうしたの、二人とも！
家で寝てたはずじゃ……」

「瞬間移動をしました」

「なんで…、まさか、なにかあった!？」

まさかツナたちが外出している間に、家でなにかあったのだろうか
とツナは顔を青くしたが、二人は首を横に振った。

「…じゃあ、どうしたの？」

「…感じたんです。」

シクロとシスイは互いの顔を見て頷きあい、言葉を放った。

「…我ら以外の、tesoro nascosto（テゾーロ
ナスコスト）の気配を。」

標的 116 宝物

ねえ、また僕ら、会えるときが来るよね？

ああ、また会えるさ。

本当かい？

本当だとも。

約束だよ、みんな。

これは僕らの合言葉よ。

そして、始まりの言葉だ。

さあ、誓いをたてよう。

願う祈りは光となり

主を守る力となる

帯びる炎の力は

主を包む力となる

多くの欲望が渦巻く世界

混沌とする人々の心

しかし、それをなだめ

清め、澄ませるものは

ひとつの強い、強い炎

空と海の狭間で揺れる心

それを唯一動かすものは

覚悟と意思と希望と仲間

さようなら、みんな。

いつか、いつか。

目覚めの時まで。

ねいねい。

「……ふんふん、ふんふん……」

ツナがシクロとシスイに問う。

二人は迷いのない表情で、再び言った。

「我ら以外の、tesoro nascosto（テゾーロナスコスト）の気配を、ツナ、あなたの近くで感じたんです。」

「オレの近く!?!」

ツナは辺りを見回すが、tesoro nascosto（テゾーロナスコスト）らしきものは見つからない。

あるのはコンピュータと複雑な機械、それだけだ。

「確かに、ツナの近くにtesoro nascosto（テゾーロナスコスト）がいます。間違いない。」

「我らは強い絆で結ばれています。それゆえ、近くに仲間がいると自然とわかるんです。」

珍しく二人が別々に説明をする。

二人はいつものようなかわいらしいシクロとシスイではなく、真剣な眼差しセツラツジヨの、セツラツジヨ serraggio という役目を背負った人間にしか見えなかった。

すると、今まで黙り込んでいたオスカルが口を開いた。

「君たちが、tesoro nascosto（テゾーロ ナスコスト）の セツラツジヨ serraggio かい？」

「いかにも。」

くるりとオスカルの方を振り返り、二人は頷く。

オスカルは静かに立ち上がり、二人に近づいた。

「…小さいんだね。」

「これは完全な姿ではありません。

我ら tesoro nascosto (テゾーロ ナスコスト) が全員揃った時、本来の姿に戻る事ができるのです。」

シクロとシスイの淡々とした説明を、オスカルは真剣に聞いている。

オスカルは本来、tesoro nascosto (テゾーロ ナスコスト) を主として研究をしているのだ。

目的のものが今、目の前に存在しているので必死であるらしい。

一通り話を聞き終わると、今度はそれをコンピュータに記録しはじめた。

カタカタとキーボードを打ちながら、オスカルは口を開く。

「私は、若いころからマフィアに伝わる tesoro nascosto (テゾーロ ナスコスト) に興味があつて、ずっと文書で調べたりしていたんだ。でもどれも曖昧で、明確なものはない

った。

だが、今本物の *tesoro nascosto*（テゾーロ ナスコスト）に出会い、本当の話聞いた。

私は、実に感動したよ。」

カタン、とキーボードを打つのをやめ、オスカルは椅子から立ち上がった。

「私の宝物を、君たちにあげよう」

「た、宝物？」

オスカルは頷き、ひとつの鍵を取り出した。

それを床の小さな穴に差し込み、右にまわす。

すると、タイル状の床がカタリ、と音をたて、オスカルがそれをどかした。

そこには小さな穴があり、中には小さな箱があった。

それを大事そうに手に抱え、オスカルはツナたちに向き合う。

小さな箱は、古そうだがとても頑丈そうで、少し薄汚れていた。

「…それは？」

ツナが小さな箱を指差す。

オスカルはそれをひと手でし、箱の鍵穴に錆び付いた鍵を差し込んだ。

がちゃり、と箱のふたがゆっくりとあけられる。

「「っ!?!」」

「、それは…」

シクロとシスイが目を見開き、リボンが少し焦った表情になった。

ツナたちはわけがわからず、箱の中身をのぞいている。

「…オスカルさん、これは？」

「……これはね、」

錆びたそれを手に取り、オスカルは微笑みながら言った。

「tesoro nascosto (テゾーロ ナスコスト) の
ひび、」

NO.7 アッレアンツァ alleanzaだ。」

小さな物体…印鑑が、ツナたちの視線と思考を奪った。

標的117 No.7 a11eanza(アツレアンツァ)

目の前の箱の中に入っている小さな印鑑。

それはツナをはじめとする研究所にいる全員を釘付けにさせている。はたからみればそれはただの印鑑にしか見えないだろう。

しかしそれは、マフィアに伝わる伝説の中に出てくるものだ。

これを巡って時々争いが起きるほどである。

「…なぜ、あなたがこれを……」

同じ顔で同じ声、髪型のみ異なるシクロとシスイがオスカルに問うた。

「私の父も学者で、tesoro nascosto（テゾーロ ナスコスト）について研究をしていたんだ。私はそんな父の手伝いをしていた。

…父が死ぬ間際、これを私に預けたんだ。

“時が来るまで、持っていなさい”とね。」

「時…?」

「おそらく封印が解かれる時のことだろうね。

…ああ、やっぱり。」

印鑑を手にとり、オスカルがつぶやく。

「これは、綱吉くんに反応してる。」

「オレに!?!」

「ああ。以前、この印鑑は錆びだらけで、模様も色もわからなかったんだけど…」

確認するように印鑑を見ると、錆びなどはついておらず、美しい模様をしていた。

ふちは金色、側面には大空と炎が描かれている。

シクロとシスイの時と同じである。

「綱吉くん、持ってみて。」

はい、とオスカルがツナに印鑑を渡す。
ツナは戸惑いながらもそれを受け取り、落とさないように両手に乗せた。

途端、印鑑が熱を帯びはじめた。

「っ!？」

「「印鑑が反応した!」」

シクロとシスイがツナの両手の傍に寄り、印鑑を見つめる。
次第に印鑑からは、トクントクンと小さな鼓動が伝わってきた。

「「ツナ、炎だ。炎をイメージして。」」

「ほ、炎?」

「ツナ。」

ツナが戸惑っている、肩から徳松が降り立ち、ツナと同化するように身体の中へと吸い込まれていった。

すると、両手があたたかくなり、ボウ、と印鑑にオレンジ色の炎が燈った。

「わあ!？」

“ツナ、心配するな。オレが印鑑に炎を燈しただけだ。”

驚くツナを宥める徳松の声が、ツナの脳内に響く。

ハイパー化もしていないし、グローブもしていないのに炎が燈ったのは徳松の仕業のようだ。

ドクン ドクン ドクン ドクン

鼓動が強まり、ツナたちに緊張がはしる。

ボウウウッ

ひとときわ強く炎が燃え、それと同時にツナたちの耳がなにかの音を
とらえた。

“……………、”

「…え？」

小さなそれを聞き取るうと耳をすます。

謎の音：声は、だんだん大きくなっていった。

“願う祈りは光となり

主を守る力となる

帯びる炎の力は

主を包む力となる

多くの欲望が渦巻く世界

混沌とする人々の心

しかし、それをなだめ

清め、澄ませるものは

ひとつの強い、強い炎

空と海の狭間で揺れる心

それを唯一動かすものは

覚悟と意思と希望と仲間”

パアアアアアンツ

炎が弾け、きらきらと輝いた。

一瞬閉じた目を、ゆっくりと開ける。

ツナの両手にいたのは、小さな人間だった。

「..!」

「はじめまして、こんにちは、若き我らの主。」

ぺこりと小さなお辞儀をする小さな人間。

黄色の髪の毛、瞳はオレンジ。
顔つきからして、どうやら男の子のようだ。

「僕はセブラーノ。tesoro nascosto (テゾーロ
ナスコスト)の^{アッレアンツァ}allieanzaで印判を守る者。
よろしく願います。」

「あ、オレは綱吉..!。ツナって呼んで。」

シクロとシスイにもそう呼んでもらってるし……」

「シクロとシスイ……？」

「セブラーノ……！！！！」

こてん、と首をかしげるセブラーノに、ふたつの小さな人間が突進していった。

一瞬、セブラーノが顔を苦痛に歪めたのをツナたちは見逃さなかった。

「セブラーノ！！」

「……え、ええ！？シクロとシスイ……なんで！」

二人の顔を見合わせ、セブラーノはあわてふためく。それに反してシクロとシスイは満面の笑みだ。

「まさか、君たちも封印を……」

「……一番最初に解いてもらったんだ。」

ふわりとシクロとシスイが両手に降り立つ。

小人のようなものが三人、何ともファンシーな光景だろう。

「ツナ、我らが瞬間移動できたのは、仲間が近くにいたからです。」

「」

「仲間が？」

「我らは仲間が近くにいるとひかれあい、巡り会おうとして引き寄せたり引き寄せられたりするので。」

だから今回の瞬間移動は、セブラーノの気配を感じたからなんです」

「」

「そうだったんだ……」

「……………綱吉くん」

オスカルに呼ばれ顔をあげると、視線の先にはきらきらと輝いているオスカルの顔が見えた。

(……………嫌な予感……！)

嫌な予感を感じ、ツナが一步後ろに下がろうとすると、オスカルに両手首を掴まれた。

その反動でシクロとシスイ、セブラーノが両手から転がり落ちる。

「やっぱり君は不思議な力を持っている！tesoronasco
osto（テゾーロ ナスコスト）に深く関係しているんだね！」

「え、いや、あの……」

「これからもっと忙しくなりそうだ！」

「さあ、一緒に研究を進めよう！」

「…は、ははは……」

有無を言わせようとしなないオスカル。

ただ苦笑いをするしかないツナ。

そんな二人を見ているだけのリボンたち。

そして床で何やらぎゃんぎゃんと叫ぶ小人たち。

ツナの日常がまたおかしな方向へと動いた。

標的 118 本題

ツナの仲間が増えた。

それはとても小さな小さな人間で、掌サイズである。

見た目は子供であるが、冷静に考えれば地球が出来る前から生きていたというから、年齢は恐ろしいものだろう。

小さな彼：セブラーノは、tesoro nascosto（テゾーロ ナスコスト）の一人で、シクロとシスイの仲間でもある。

これでまた一歩、スペランツァに近づいたというわけだ。

「……………」。

「……………」。

「……………そんなに怒らないですよ。わざとじゃなかったんだから……………」

じとり、といやな視線がオスカルの頬をチクチクと刺す。

その視線の正体は小さな人間、tesoro nascosto
(テゾーロ ナスコスト)の三人である。

オскарは興奮のあまり、ツナの両手首を掴んだ。

その拍子に、ツナの両手に乗っていたシクロとシスイ、セブラーノ
が転がり落ちてしまったのだ。

それに気付かず、オскарはつらつらとしばらく一方的に話し、三
人をこのように怒らせてしまったというわけである。

何度オскарが三人に謝っても、まったく許してはもらえず今に至
る。

そんな三人は、ツナの頭の上で静かに怒っていた。

「……………」。

「……………」。

「…だからね、ごめんねってば。
いつ許してくれるんだい、君たちは。」

困り果てた顔のオスカルが、なんだかかわいそうになったツナは、頭の上の三人に話しかけた。

「…ねえ、そろそろ許してあげなよ。こんなに謝ってるしさ……そりゃあ、オスカルさんも悪いけど、ごめんねって謝ってるじゃん。」

「…。」

「…。」

もそり、と三人が動いた。

どうやらあの痛々しい視線をやめてくれたようだ。

「今、君たちは“無視”をしてることになるんだよ。それって、意地悪でしょ。」

オスカルさんは「まあ、悪気があったわけじゃないんだし。」

でも君たちは“意図的に無視”をしているんだよ。…わかるかな？」

ツナが言い聞かせると、三人はふわりと頭から退き、オスカルと対面した。

先程とは違い、その視線は痛々しいものではない。

「…許してあげる。」

「我らも、無視をしてごめんなさい。」

素直に謝った三人を見てオスカルは少し驚いたが、すぐに優しい笑顔になった。

「うん、私もすまなかつたね。すぐ周りが見えなくなる私の悪い癖なんだ。」

オスカルの笑顔を見て、三人も笑顔になった。

それを見ていたツナはよかった、とひとつため息をついた。

「すげえのな、ツナ！ツナが説得したらすぐに解決しちゃった。」

「流石です、十代目！」

「よくチビたちの喧嘩の仲裁をするから、なれてるんだ。」

「ああ、あいつらづるせえからな」

「リーダーさん、そんなこと言っちゃいけないよ!」

ぼつりと何気なく呟いたリーダーを、トンノが慌てて注意する。

何億年も生きていた *tesoro nascosto* (テゾーロ ナスコスト) の三人を、あのランボとイーピン、フウ太たちと同じようには考えられなかったが、先程の三人は本当に子供らしかった。

本当にマフィアに伝わる伝説に出てくるものだろうかと疑うほどである。

「おい、オスカル。研究はどうすんだ。」

すっかり仲直り(?) をした四人の間に入るように、リボンが話しかけた。

オスカルは我に返ったように肩を強張らせ、くるりと振り返った。

「そつだそつだ！すっかり忘れていた！」

慌ててオスカルはコンピュータの前に戻り、カタカタとキーボードを打ちはじめた。

どうやら先程のシクロとシスイに聞いた `tesoro nascosto` (テゾーロ ナスコスト) についてのデータをまとめているらしい。

「…まず、綱吉くん。君の戦闘力はどのくらい？」

「……は？」

藪から棒にオスカルが問う。

ツナは間抜けな声で返事をしてしまった。

「だから、君の戦闘力。戦う力だよ。」

「いきなり言われても…自分の戦闘力なんて…」

自分自身の戦闘力を把握していないツナは、質問に答えられずに苦笑いをしながらオスカルから目をそらす。

そんなツナに、助け船を出したのはリボンだった。

「一応戦闘力はあるぞ。いろんな奴と戦ってきたからな。…ま、弱点もあるけどな。」

「…ふむ。そういえば幻術を使う人間や、ボンゴレ九代目の息子、世界征服を目論んだ白髪青年や、すべてを手に入れようとしている悪の塊と戦ったんだよね。」

他はいいとして、最後の“悪の塊”とはおそらくデイスペラーレに操られていたウライラのことだろう。

そうかそうか、と独り言を呟きながらオスカルは何か考え事をしはじめる。

すると、何かを思い立ったように勢いよく立ち上がった。

「よし、お手並み拝見だ！」

「は!?!?」

がしつ、と手首を掴まれ、ツナは引きずられるようにオスカルに連れられていった。

オスカルの力は思ったよりも強く、引きはがそうとしてもびくともしない。

無駄な抵抗をしているうちに、ツナはある扉の前に連れてこられた。

「…ここは？」

ツナが首をかしげると、オスカルは扉をゆっくりと開けた。

「ここは、…まあ危険な実験をするときに使う部屋だよ。なかなか広いだろう？」

先程いた部屋よりは少しばかりは狭いが、それでも広いと感じるほどの部屋だ。

不安がるツナをよそに、

オスカルはある機械の目の前に腰を下ろした。

追いついたりボーンたちも訳がわからずオスカルを見つめている。

「これはね、幻覚を利用した実験ができる機械なんだ。幻覚と言っても、匂いや感触はもちろん、声とかも実態化できるんだけどね。」

ほら、ボンゴレに“逃走弾”ってあるだろう？ トンノ君が元々そうだったでしょ。あれと一緒に。」

一時的に命を宿することができるんだよ。」

機械の電源を入れ、オスカルが振り向いた。

その瞳は真剣だった。

「君を、試させてもらおうよ。綱吉くん。」

標的119 期待と不安（前書き）

いつもよりぐだぐだな文章です。

標的 119 期待と不安

「君を、試させてもらおうよ。綱吉くん。」

まっすぐな言葉。

真剣な眼差し。

「…綱吉くん？」

「っは、はい！」

オスカルに名前を呼ばれ、ツナは慌てて返事をする。

オスカルのあまりの真剣さに、ツナは啞然としてしまっていた。

「今から注意事項を言うから、よく聞いていてね」

「わ、わかりました」

オスカルは機械に手をそえながら口を開く。

「先程言ったように、これは幻覚を利用した実験用の機械だ。幻覚と言っても、一時的に命を宿することができるから、感触や匂いはもちろん、すべてが生き物と同じようになる。

いいかい、これはただの実験ではない。危険を伴う戦いだ。面白半分ではいけない。」

「なんでそんな危険なものを、ツナに試させるんだ」

リポーンが少し低い声でオスカルに問うと、オスカルはわずかに顔を緩ませて答えた。

「これでくたばったら、ボンゴレ十代目はつとまらないよ。マフィアなんてもつと危険な目にあうんだ。ここで命を落とせば、それまでだってことぞ。」

「…“試す”ってそういう意味でもあるのか」

戦闘力を試す。
だがそれだけではない。

“ボンゴレ十代目として相応しいかどうかを試す”のだ。

(伊達にマフィアの学者じゃねえってことだな)

にやり、トリポーンが表情を変えた。
それにオスカルが少しだけ驚く。

「なめんなよ、オスカル。こんなチビでもツナは無限の可能性を持つたやつだぞ。
おめえが思っているほど、こいつは弱くはねえ。
なにより、」

リポーンがツナの肩に降り立ち、ツナの頬をぺしんと軽く叩いた。

「こいつはオレの生徒だからな。」

強く、しっかりとした声でリボーンは言った。

オスカルは目を見開き、ツナはぽかんと口を開ける。

(……あの最強のヒットマンと謳われるリボーンが、こんなに信用するとは……)

薄ら笑いをして、オスカルはツナを見つめた。

(…おもしろいじゃないか。)

これは、試す価値がかなりありそうだ。

そんなことを考えているオスカルをよそに、リボーンはツナの肩を蹴って床に降りると、くるりと振り返った。

「ほら、さっさと始める。
ツナもぼけっとしてねえで死ぬ気丸飲め。」

啞然としたままのツナに軽く（リボーンにとっては軽い）がツナにとっては軽くはない）蹴りを入れ、リボーンは実験を開始しよう促した。

突然足に痛みが走り、その場にしゃがみ込むツナに獄寺と山本が心配して駆け寄る。

「容赦ないね、リボーン……」

「ああいう奴なんだよ、素直じゃねえんだ。」

少し離れたところから様子を伺っていたトンノとリーダーは苦笑いをしていた。

だが、トンノのその笑みの中にわずかな不安がにじんでいた。

（…なにか、嫌な予感がするんだけど）

ザワザワと揺らぐ不安をトンノは感じていた。

ただ、その予感が当たらないことを願っただけだった。

「…さて、はじめようか」

「は、はい！お願いします！」

「………お願いしますって私が言う言葉だよ。研究させてもらっただからね。」

ふふ、と笑ってオスカルは機械の電源を入れた。

ウイイイイン…と機械音が聞こえ、オスカルが何やら操作をしはじめる。

「ほら、おめえも準備しろ」

「あ、うん……」

ツナはグローブをはめ、死ぬ気丸を飲み込む。

瞬時にグローブは姿を変え、額にはオレンジの炎が燈る。

ゆっくりと開かれたまぶたからは、吸い込まれそうな瞳がのぞく。

「準備はいい？綱吉くん。」

「ああ。」

冷静なツナの返事を合図に、オスカルはカチリとスイッチを押した。

ひやりと部屋の空気が変わる。

誰もが息をのむ。

(…君は、どんな力を見せてくれるのだろうか)

楽しみで、仕方がない。

期待と不安が入り混じる中、実験は開始された。

標的119 期待と不安（後書き）

最近、文章が書けません。

スランプでしょうか…。

それとも忙しくて頭が混乱してるとか…。

とにかくいつもよりぐだぐだな文章になってしまいます。

見苦しくてごめんなさい！

今日は世に言う海の日らしいですね。

わたしは一日部活ですが）、・・…（；

読んでいただきありがとうございます！

標的120 実験開始

「お父さん、それ何？」

お父さんの宝物だよ。綺麗だろう？

マフィアに伝わる伝説に出てくる *tesoro nascosto*
(テゾーロ ナスコスト) の中のひとつの アッレアンツァ *alleanza* だよ。

「ふうん、よくわからないや。でもすごく綺麗だね。」

だろう？お父さんはね、この研究をしているんだ。

tesoro nascosto (テゾーロ ナスコスト) の謎
を解き明かすのが夢なんだ。

「お父さん、僕もその研究がしたい！」

ほう、ならばお父さんと一緒に研究するかい？お前は賢いからお父さんのいい助手になるだろうね。

お前は好奇心が旺盛で、素直ないい子だ。将来はいい学者になるだろう。

…だが、どんなに優れた学者でも忘れてはいけないことがある。わ

かるかい？

「わからないや、お父さん。なに？」

“自分”だよ。

自分を見失ったら元も子もないだろう。好奇心があることはいいことだが、強すぎではいけない。

学者に必要なのは、“欲に負けない我慢”さ。そのためには自分を忘れてはいけない。

自分を忘れ、欲に負けて命を落とした学者は沢山いるんだ。

お前のおじいさんもそうだったんだよ。

研究熱心なために、危険を省みずに *tesoro nascosto* (テゾーロ ナスコスト) の研究を進め…事故で亡くなったんだ。

お前にそんな最期を迎えてほしくない。

…なあ、お父さんと約束してくれないか？

「なに？」

“自分”を忘れず、“欲に負けない我慢”をすることができれば、

研究をさせてやる。

もしそれが守れないのなら、研究には参加させてやれないな。

「僕守る！僕、お父さんとの約束守るよ！」

そうかそうか。じゃあお父さんと一緒に、
t e s s o r o ^{テッソーロ} n a s c ^{ナス}
o s t o ^{オスト}の謎を解明しよう。

約束だよ、絶対に。

“自分”を忘れるな。

“欲に負けない我慢”を持って。

お前を信じてる。

なあ、オスカル。

「…オスカル、この機械で何するんだ？」

突然声をかけられ、オスカルは驚いて肩をびくつかせた。機械の操作が途中であったことに気付き、慌てて操作を再開させる。

「幻覚で綱吉くんの戦闘力を試す、って言っただろう？」

「それはわかってる。幻覚で何を出すのかってことだ。次期マフィアのボスでも、あいつはまだ中学生だ。今まで危険な目にあってきたのは仕方ないことだが、今回は実験だろ。あぶねえもん出すんじゃないやねえだろうな。」

ぎろりとリボーンのかなきな瞳がオスカルを睨む。

(…綱吉くんの親になったつもりかい、あのアルコバレーノが)

オスカルは肩をすくませて、ひとつをため息をついた。

「…中学生でも次期マフィアのボス、だろう？しかもマフィア界の最高峰のボンゴレだ。」

これくらいのこととはかわしてもらわないと。」

「……誰かに頼まれてやってんじゃねえだろうな？」

「……綱吉くんの暗殺を？」

「ははっ、やめてよ。私は学者だよ。暗殺なんか君の仕事だろう、ヒットマンのリボーン。」

「これは私が独自で行うものだよ。綱吉くんを殺すつもりはないさ。まだ調べたいことが沢山あるしね。」

「……ただ、あんな小さな少年がマフィアになれるかも試したい。」

「……………」

リボーンは無言でオスカルを見つめたあと、くるりと足をかえした。

「……………たいがいにしておけよ、オスカル。」

背中を向けたままりボーンがオスカルに忠告をして、そのままリバーダー達の元へと歩いていった。

オスカルはその言葉を気にも止めず、機械の操作を急いだ。

「綱吉くん、いくよ」

「ああ。」

(…口調と態度は随分冷静沈着になったな)

ツナの様子を伺いながらオスカルはキーボードを打つ。

オスカルは実験をする場合、まず対象となるものを観察してから実験を行う。

先程実験を開始すると言ったが、今は観察の時間であるのだ。

一見何もしていないように見えても、すでに実験は始まっているのだ。

「…じゃあ、幻覚を出すよ」

せわしなくオスカルが機械の操作をしはじめた。

すると、機械にある開口部から白い煙りが放たれ、だんだんと形をつくりだしていく。

(…君たちは、これを見てどう思うだろうか)

オスカルが無表情でツナたちを見つめた。

「…あいつ……」

「リボーンさん、これは……」

「見たことねえのな……」

はつきりと形を成してきた幻覚を見て、リボーンはオスカルを睨みつけ、獄寺と山本は呆気にとられていた。

「…なんだこれ」

「……ツナ……」

リーダーは顔を歪ませ、ツナは心配そうにツナを見つめた。

「…グルルルルル」

ぎろり、と赤い瞳がのぞく。

足元を見ると、鋭い爪。

「ガアアアアアア!!」

ものすごい雄叫びで煙が一気に辺りに散っていく。

目の前に立ちはだかるのは。

「……動物、か？」

ツナは思わず目を疑う。

全身が真っ黒の毛に覆われ、頭には二つの犬のような耳、額には一本の角。

長い尾をゆらゆらと動かし、その生き物はツナを睨みつける。

「綱吉くん、そいつを倒すんだ。そいつに容赦はないよ。ただの猛獣、怪物だからね。」

「…でも、」

「ガールルッ」

身の危険を感じ、ツナは咄嗟にグローブから炎を噴射させて飛び上がる。

目の前を鋭い爪が横切った。

「…本当に容赦ないな」

背筋がひやりと冷えるのを感じ、猛獣を見下ろす。

赤い瞳はなおもツナを睨む。

(……なにか、ひっかかる)

でも、なにが？

心にひっかかるそれが何なのかもわからず、ツナはしばらくその猛獣を見つめていた。

忘れては、いけないよ。

“自分”を見失ってはいけないよ。

“欲”に負けてはいけないよ。

同じ過ちを繰り返すな。

君は、君だけは。

正しい道ヲ行ケ。

標的121 異体

朝焼けと赤がぶつかり合う。

聞こえるのは炎の燃える音と低い唸り声だけ。

黒い塊：猛獣からは痛いほどの殺気が放たれている。

チクチクと突き刺すような痛みを持ったそれは、ツナだけではなく
部屋の隅に避難したりボーンたちにもわかった。

「…すげえ殺気だな」

「十代目…」

「あの動物、幻覚…だよな？」

あまりの猛獣のリアルさに、思わず幻覚かどうかを疑ってしまう。

オスカルが先程言っていたが、この機械は幻覚に一時的な命を宿す
ことができるらしい。

目の前にいるこの猛獣は、ただの幻覚だが今は命を持っている。

その分殺気も足されるし、迫力も増すのであろう。

「おい、トンノよ。お前が言ってた嫌な予感ってこいつのことか？」

「…なんか、違う。この動物なのかも知れないけど…なにか、」

（この動物の出現についての嫌な予感だった？…でも、ますます嫌な予感がする。）

原因不明の嫌な予感に怯え、トンノは猛獣を見据えた。

「…なにかが、ひっかかるんだ」

心のざわつきがトンノを襲う。

いつでもツナを助けることができるよう、緊張の糸をゆるめない。

（ツナになにかしたら、許さない）

丸いオレンジの瞳に、黒い猛獣と金髪の学者が映された。

「ゲルルルルッ」

白い牙を剥き出しにして猛獣が唸る。

赤い目は吊り上がり、全身を毛立たせている。

額にある鋭い角はどんな硬いものも貫いてしまいそうなほどである。

「……………空想動物か？」

角がある赤い瞳の犬など、見たこともないし聞いたこともない。

だとすると、空想動物に因んだ幻覚だろうか。

UMAなど不思議な生物に詳しい獄寺なら知っているかも知れないが、あいにく彼は今離れたところにいる。

声も届くかどうかわからないし、直接獄寺たちの元へ行けば猛獣が襲い掛かり巻き込んでしまうかも知れない。

「……………徳松？」

(…ツナ、どうした?)

徳松に話しかければ、すぐに返事がきた。

「徳松、あいつが何かわかるか?」

(…ごめんツナ。オレもあいつの正体はわからない。)

申し訳なさそうに徳松は言った。

徳松が知らないのは当たり前なのかも知れない。
最近目覚めたのだから、生まれたばかりの赤ん坊も同然だろう。

(…でも、何か感じないか?)

今度は徳松がツナに問う。

ツナは徳松が何を言っているのかわからなかった。

「…何かって?」

(よくわからないけど、殺気の他に何かを感じるんだ。
ツナは何も感じないのか?)

「……そういえば、」

神経を集中させると、殺気の外に何かを感じた。
だがツナにもそれが何なのかはわからない。

「なんか、」

(なんか、)

やけに肌に馴染む何かを感じる。

「ツナ!!」

突然名を呼ばれ我に返る。

気付けば目の前に巨大な鋭い爪が迫っていた。

「ガウウウッ!」

ガシュッ！

「…っ！！」

間一髪のところまで炎を噴射して攻撃を避けた。

だが完璧に避けることはできず、爪が右腕をかすり、そこから痛みが生じる。

痛みを歪めながら目をやると、爪がかすったところからは血が流れていた。

(ツナ！)

「…油断した。たいしたことはない。」

ズキズキと痛む傷から意識をそらし、なおも唸りながらこちらを睨みつける猛獣を見つめる。

「グルルルルッ」

「…これだけ身体が大きいと、攻撃が効くかどうか……」

(とにかく、一度攻撃を仕掛けよう)

徳松に促され、ツナは拳に力をこめる。

「グアアアッ！」

大口を開けて襲い掛かる猛獣の脇を通り抜け、ツナは横っ腹に炎を燈らせた拳を放った。

猛獣の顔が歪み、攻撃が効いたかと思えば、黒く長い尾がツナの背中を勢いよく打ち付けた。

「つぐ!!!」

壁に吹き飛ばされ、ぶつかるすれすれのところでツナは炎を噴射させて激突を免れた。

背中が言い表せない痛みを帯びている。

それは腹部の傷にも伝わり、痛みがさらに増した。

「ツナ！」

トンノがツナの元へ向かおうとすると、後ろから伸ばされた腕に遮られる。

「待て、トンノ！」

「リーダーさん離して！ツナが危ないんだ！！」

掴まれる手から逃れようとトンノは翼をばたつかせて抵抗するが、リーダーはトンノを離そうとしない。

「なんで、なんで！リーダーさんはツナがどうなってもいいの！？」

「んなわけねえだろ！オレだって坊主が心配だ！」

「じゃあ、なんで！」

「これはあいつを試す実験だからだろ！」

ひととき大きくリーダーが叫ぶと、トンノの動きがぴたりと止まった。

「……今ここで坊主を助けたら、実験は中止になっちまうかも知れねえ。

そうだったら、坊主はまた同じような実験をしなきゃならなくなるかも知れねえ。…また傷を負わないといけなくなるかも知れねえ。そんなこと、坊主にさせたくねえだろ。」

「…でも、」

「大丈夫だ。あいつ、今までいろんな危機にあってきたが無事だったじゃねえか。」

…あいつを信じろ、トンノ。

みんな、心配だが我慢してんだよ。」

「……………」

トンノは頭上のツナを見つめる。

リーダーの手の力が緩み、腕に乗せられ頭を撫でられる。

「…すまねえな、トンノ。だがこれは坊主の問題なんだ。」

「……………ううん、気付かせてくれてありがとう。」

そうだよね、ツナが簡単にやられるわけないもんね。」

トンノは首を横に振ってリーダーに謝る。

「ツナなら、大丈夫だよね。」

今まで、例え傷を負っても、ツナは大丈夫だったじゃないか。

乗り越えたじゃないか、苦難を。

だから、今回も大丈夫だ。

絶対、絶対に。

そうだよね、ツナ。

苦難を乗り越えたら、

君なら、笑顔で抱きしめてくれるよね。

そつだろつ？

標的121 異体（後書き）

台風の影響は凄まじいものです。

皆さまは被害にあわれていないでしょうか…心配です。

わたしは自転車で風に吹き飛ばされそうになっただけです。

皆さま、風にはお気をつけて…！

さて、トンノがじっとしてられないようです。

ツナノ元へ行きたいと駄々をこねてしまいました（違う）。

我慢だよ、トンノ！

読んでいただきありがとうございました！

標的122 変異

To a t h i n g t o w a t c h f o r t h e f i
r s t t i m e , e v e r y b o d y i s c o n f u s e
d .

B e s i d e s , w e f e e l f e a r i f i t h a
s s t r o n g p o w e r .

w e a m f r i g h t e n e d b y i t a n d a m
c a u t i o u s a n d a m g o i n g t o p r o t e
c t o n e s e l f .

みんな、生きとし生けるすべての者は、そつであるつ。

如何なる勇氣を持っていても、必ずそつであるつ。

だから、だから。

これは……………。

「グルルルッ」

止むことのない唸り声。

赤い瞳がさらに猛獣の恐ろしさを引き出たせている。

その大きな身体は今にもツナに襲い掛かってきそうである。

（攻撃が…効かなかった…？）

「確かにあの巨体では、攻撃の威力は軽減してしまう。

…しかし、なによりこの殺気が…」

先程から、思わず怯みそうになる殺気が放たれている。

少しでも猛獣に近づけば、殺気がたちまち身体中を襲うのだ。

その殺気を感じると、鋭い痛みが走り、途端に吐き気や頭痛をもよおす。

さらに殺気によって攻撃の力が弾かれてしまうのだ。

巨体によって、さらに殺気のせいで攻撃の威力が減らされてしまう。

いくら攻撃力が強くてもそれでは痛くも痒くもないものになってしまっただろう。

1533

「…なんて強い殺気だ」

くらり、とめまいによって視界が歪む。

攻撃を受けた背中も右腕も、痛みを帯びてツナの体力を奪う。

(…………ツナ、平気か?)

「心配ない。…徳松は？」

（オレなら平気だ。…すまない、ツナ。オレは平気なのに……）

ツナの受けた攻撃や傷の痛みは、どうやら徳松には伝わらないらしい。

それがやるせなく、徳松が声を震わせる。

「…気にしなくていい。徳松が平気で良かった。」

痛みを感じながらツナは優しく言葉をかける。

それはツナの本心だ。

決して嘘ではない。

そんなことはわかりきっている徳松は、ツナの言葉に嬉しくなって、同時に哀しくなった。

（……すまない、ありがとう、ツナ。

なるべく、ツナの負担を今だけでも軽くできるよつにするから。

だからさ、ツナ、）

がんばろう、一緒に。

ふわり、と心があたたかくなるのがわかる。

「…ああ。」

拳を握りしめ、ツナは猛獣を見据える。

ゆらり、ゆらりと炎がたくましく燃える。

自然と力がみなぎってくる。

「グルルルルッ」

「…いくぞ、徳松」

（了解）

不意に、身体中の痛みが軽くなった。
腕をかざすと、かすかに炎が身体を覆っているのが見えた。

「……………よし、」

シュッ

視界からツナが消えた。

「!!」

「グルルッ」

オスカルも、猛獣も驚く。
猛獣は辺りを見回してツナを探す。

「ここだ。」

「ガルッ」

背後から声が聞こえ、猛獣は振り返ろうと身体を翻す。

その赤い瞳にうつつたのは、オレンジに包まれた少年。

「ガルルルッ！」

突然ツナが現れたことに驚いた猛獣は、ツナに牙を向けて襲い掛かった。

ひらり、と軽い動きでツナはそれをかわす。

その隙に攻撃を仕掛けようと、ツナは拳に力を込めた。

“……………”

「！！？」

赤い瞳と、視線がぶつかった。

その間、時間はスローモーションのように流れていく。

“……………よ……………”

視線がはずされる。

時間が元の流れに戻る。

ツナは目を見開き、猛獣を見つめる。

「グルルルッ」

「…なんだ、今の……………」

ゆらり、

オレンジが揺れる。

赤が揺れる。

ふらり、

オレンジが動く。

赤が動く。

それは動揺か、怨みか、

それとも。

標的122 変異（後書き）

今回は短めです。ごめんなさい。

しかも昨日は更新が出来ず…さらにごめんなさい。

夏休みに入りました。

補習と部活で一日が終わりましたが。

なんてつまらない夏休み一日目。

さて。

次回くらいから話を進めそうですね。

どんな流れになるか…勘のよろしい方はお分かりになってしまおうかと！

ひやひやしております。はい。

最初の英文は、できれば訳さないでいただきたいです。

少しネタバレになってしまっても知れないので。

あと、文法とかいろいろ間違ってると思うので！

読んでいただきありがとうございます！

標的123 必要なもの

「……なんだ、今の……」

不意に聞こえた何か。

か細く、小さく、弱々しく。

直接耳に届いたのではない。

頭の中に響いたのだ。

(ツナ、今……)

「徳松も、聞こえたか？」

意識の中の徳松にも今の現象がわかったらしい。
二人は何が起こったのか理解できないでいる。

「……あいつと目があつたとき、何かが聞こえたんだ」

猛獣とすれ違いさまに視線がぶつかった。
その瞬間、脳に何かが聞こえてきたのだ。

「…どういことだ？」

眉をひそめ、ツナは猛獣を見た。
全身の毛を逆立たせて猛獣はツナに向けて唸っている。

“……よ……っ……”

「っ、まただ！」

再び、脳内に不思議な声が響いた。

「グルルルッ」

“……い……よ……”

猛獣が動くたびにきらりと光る白い角と爪と牙。

それとは裏腹な、小さな小さな声。

それは何なのか、何を意味しているのか。

ツナと徳松はまったくわからなかった。

「…少し、気付きはじめたのかな」

オスカルはせわしなくキーボードを打ち、パソコンにデータを記入していた。

ふう、とひとつため息をつき、回転式の椅子を回してツナと猛獣のいる方に身体を向けた。

「この実験は、綱吉くんの戦闘力だけでなく、ボスとして相応しいかどうかを調べるって言ったけど……」

オスカルは手元の資料を見て、苦笑いをする。

「…実際、ボスに相応しいかなんて、まずこれだけで十分わかるもんだよね。」

金色の髪の毛を指でくると巻きながら、オスカルはつぶやいた。

「見抜く力、それが君には備わっているのか。…それがなければ、ボスになってもすぐ殺されてしまうからね、綱吉くん。」

「ツナのやつ、なにしてんだ？」

「まさか、さっきの攻撃で……」

「落ち着けよ獄寺。攻撃のダメージがかいんだったら、ツナはあんなふうには飛んでないんじゃないかねえか？」

先程から猛獣と睨み合うように動かないツナに疑問を感じ、リポーンが首をかしげる。

獄寺がツナの身を按ずるが、山本がそれをなだめた。

(……たしかに、さっきの右腕と背中へのダメージはでかいだろう。……だが、ツナはああして飛んでいる。おそらく徳松のおかげだろうが……なぜ動かないんだ?)

リボーンたちはツナから少し離れたところにいる。

ツナの表情がうつすらとわかるくらいの距離であるが、リボーンには今のツナは驚いているように見える。

(……なにか、感じたのか)

「そうみたいだよ、リボーン」

背後から声をかけられ、リボーンは振り返る。

声の主は、リーダーの肩に乗っておとなしくしているトンノだった。

「……お前、」

「あいにく、僕にはリボーンの心は読めないよ。でも、なんとなく考えてることはわかるから。」

まさか心を読まれたのではないか、トリボーンは一瞬焦りを感じたが、それはどうやら違うようだ。

ヒットマンが心を読まれてしまったら命取りになることがある。だから気安く他人に心を読まれてはいけないのだ。

「…トンノ、ツナは何してんだと思う？」

リボーンはトンノに問う。トンノにならわかるのではないかと思っただからだ。

「……なにかに気付いたんだよ。多分、猛獣のなにかに。」

とても、大事なことに。
なにかを見出だしたのであろう。

「…そうか。」

にやり、と笑いリボーンはツナの方向を振り返る。

「…なんだ、リボン。そんなに笑っちゃってよ」

「気にすんな」

リーダーが怪しがるような表情でリボンを見る。

顔をそらしてリボンはリーダーに顔が見えないようにしてしまった。

「……変わったなあ」

昔のお前とは違う。

変わったんだ、性格が。

それは、多分。

「…坊主、お前どんな力を使ったんだ。」

あの最強のヒットマンをここまでに変えるなんて。

複雑な、でも嬉しそうにリーダーはツナに笑顔を向けた。

「ガウウウウッ！」

鋭い牙を剥き出しにして猛獣が襲い掛かる。
ツナはそれをかわし、拳に力をいれ勢いよく放った。

ドシュッ

「グルルッ」

「…っ、」

くるりと宙を舞い猛獣と距離をとる。

先程から拳に燈す炎圧を高くしているはずなのに、それはまったく意味がなく効かない。

「…殺気で炎圧が軽減されてしまう」

(少なくとも、10万FVは殺気によって軽減されているな……)

息切れをしながら、ツナは腕で頬に伝う汗を拭う。

まったく猛獣に攻撃が効かない。
纏う殺気が強すぎるのだ。

時折、吐き気もするし頭痛はずっと止まらない。

“……………よ……………”

「……………この声といい、この殺気といい……………わからないことばかりだな」

どうすればいいのだろう。

なにをすればいいのだろう。

それがまったくわからず、ツナは途方に暮れた。

わかるはずなのに。

目の前のことに捕われ、わかるはずなものがわからなくなってしま
うのだ。

こうして人は、大事なものを失っていく。

大事な大事な、尊いものを。

君は、気付いているはずだ。

標的124 理解

灯台下暗し、という言葉を知っているかい？

自分の身近なものは気付きにくい、ということだ。

人間なんて、遠くのことには、未来のことに気をとられて、足元にある、手元にある大事なことに、気付かないものだ。

本当はもう、わかっているのに。

本当はもう、気付いているのに。

…本当はもう、見えているのに。

君は、知っているんだよ。

少年よ、君はもう、見つけているはずだ。

求めている、答えを。

バシユツ バシユツ バシユツ

「ガルルルッ!」

“……………つ……………”

オレンジ色の炎が猛獣に向けて放たれる。

だが、それは届くことなく空気中に散っていく。

「ガルルッ!」

ザシユツ

「っ、!」

間一髪のところ、ツナは猛獣の攻撃を避けるが、色素の薄い前髪がはらりと舞った。

「…っっ…」

何度目かの吐き気をツナはなんとかやり過ごす。猛獣から放たれる殺気がツナをどんどん弱らせているのだ。

くらりくらり、視界が歪む。

「ガールルウ！」

ガシッ

「しまっ…」

一瞬の油断、それはあらゆる後悔を生む。

吐き気と目眩に気をとられていたツナは、猛獣の大きな前足で地面へとたたき落とされた。

そのまま、ものすごい力で押さえ付けられる。

「っぐ!!」

(ツナ!!)

「ガルルルッ」

ツナはなんとか逃れようと力を振り絞るが、猛獣の前足はびくともしない。

「十代目!!」

「ツナ!!」

「坊主!!」

「っ、ツナ!!」

獄寺たちがツナの元へと駆け寄ろうとするが、横から伸ばされた腕により阻まれた。

「だめだよ。」

「…オスカル。」

「実験、中止になってしまっよ。それでもいいの?」

「脅迫か。」

リポーンが低い声で問うが、オスカルはふるふると首を横に振る。

「…今、戦っているのは綱吉さんと猛獣だ。僕らは手出ししてはならない。」

「…マフィアの世界は、生温いもんじゃない。それを一番わかっているのは、君じゃないか、リポーン。」

今までヒットマンとしてマフィアの世界に名を知られていたリポーン。

マフィアの争いを何度も見てきたし、何度も経験してきた。

それくらい、わかっている。

わかってはいる。

「…大丈夫、綱吉くんはもうわかっているんだ」

「何をだ？」

意味のわからないことを言うオスカルにリポーンたちは眉をひそめ

る。

目元にしわをよせ、オスカルは微笑んだ。

「…見ていれば、わかるよ。」

「…信じていれば、わかるよ。」

「グルルルルル…」

「ぐ…っ、」

(ツナ、ツナ、ツナ！！)

みしみしと骨がきしむ。

呼吸もままならない。

さらに殺気がツナを襲う。

(ツナ、痛みをオレにわけろ！)

「…っ、だめだ！そんなことできない！」

ただでさえ、ツナの傷の痛みをカバーさせているのだ。これ以上徳松に負担をかけさせるわけにはいかない。

ツナの身体を覆うオレンジの炎が、少しずつ薄くなっている。おそらく、徳松は目覚めたばかりであまり力が使えないのだろう。

「グルルルッ」

“……だ……っ……”

ぼやけた視界に、赤い瞳が見える。同時にあの不思議な声も聞こえた。

“……だ……っ……よ……”

だんだんと身体に力が入らなくなる。前足を押し退けようとしていた両腕も、ただそえるだけの形になっている。

「……？」

あることにツナは気付いた。

「…震えてる？」

両腕からかすかに伝わる震え。

猛獣の前足がカタカタと震えていたのだ。

ツナは少し驚いて猛獣の顔を見る。

「…！」

猛獣の瞳が、揺れていた。

前足だけでなく、全身が揺れていた。

“…だよ……………い……………”

“……怖いよ……”

「っ!!」

ツナは目を見開いた。

まさか、まさか、まさか。

赤い瞳が、ツナをとらえる。

その瞳は、まるで、

ツナと同じ、瞳。

……ああ、そうか、

ツナは、やっと、気付いた。

この猛獣の殺気、攻撃、あの不思議な声の意味を。

「……そう、だったのか……」

ツナはゆっくりと、震える前足を撫でた。

「グルル……」

猛獣がびくりと動く。

それでもツナは猛獣の前足を優しく撫でた。

「…そうか、そうだったんだな」

突然抵抗をやめて猛獣を撫ではじめたツナを、リボーンたちは啞然として見つめていた。

だが、オスカルだけはにっこりと笑っている。

「…ずっと気付かなくて、ごめんな。

お前、ずっと、ずっと……怖かったんだよな。」

「グル……」

「いきなり目の前に知らない奴が現れて、驚いたんだよな。

驚いて、怖くて、何がどうなってるのかわからなくて……、…オレに、殺させるとでも思ったんだろっ?」

ツナは目を細め、優しい笑顔で猛獣の頬を腕を伸ばして撫でた。

「…警戒して、攻撃をしていたんだよな。ずっと、怯えてたんだよな。」

……全部、自分で、自分を守るためだったんだよな。」

びたり、と猛獣の唸り声が止んだ。

少しずつツナを抑える前足の力が弱まっていく。

「大丈夫だ。オレはお前を殺そうだなんて思っていない。
攻撃したのは、すまなかった。

……でも、もうしない。」

しゅっつ、と額の炎が消え、瞳はオレンジから琥珀へと色を変える。

「オレは、お前の味方だよ。」

だから、警戒しなくていい。

怯えなくていい。

怖がらなくていい。

お前の、本物を、見つけたよ。

気付けなくて、ごめんね。

しばらくして、身体から重みが消えた。
猛獣がツナから前足をどけたのだ。

ぺろり、

「わあ！」

猛獣がツナの頬を舐めた。
見上げると、先程の殺気は消えており、吊り上がっていた瞳も穏や

かになっている。

「くうん、」

「…わかってくれたんだね」

ゆっくりと起き上がり、ツナは猛獣の頭をぽんぽんと軽く叩いた。

見ると、猛獣は長い尻尾をゆらゆらと振っている。

「…オレもお前も、同じだったんだね」

それが何故かおかしく思え、ツナは「馬鹿だよなあ、オレ」と苦笑いをした。

馬鹿だよなあ、

恐怖に支配されて、

力任せに相手を襲ってしまっただ。

本当、馬鹿だよなあ、

人は。

はじめてのものをみると、

恐怖と、好奇心が揺れ動く。

馬鹿だよなあ、

生き物は。

よく見ようとしないから、
わかるうとしないから、

早く安心したいから、

目の前のはじめてのものを、消し去ろうとするんだ。

馬鹿だよなあ、

みんな、みんな。

だからこそ、

愛しいと思えるのかも知れないな。

標的124 理解(後書き)

は、はー(、 - - ;)

なぜか疲れました。ううん。

猛獣さん、実はこんな感じだったのですが、どうでしたか？

…予想はついていたよ！という方もいらっしゃると思います。

ああ、ハラハラドキドキがこの小説には足りませんね！自覚してます！

さてさて、いつかのお話に、

To a thing to watch for the first time, everybody is confused.
Besides, we feel fear if it has strong power.
We are frightened by it and are cautious and protective of ourselves.

という文法や単語がぐっちょんぐっちょんな英文がありましたね。

その訳なのですが…

初めて見るものに、みんながうるたえる。

ましてやそれが強い力を持っていれば、恐怖を感じる。

それに怯えて、警戒して、自分を守るうとする。

です。

話の中で出すつもりはないのでここで訳を言わせてもらいました。

ぶ、文法とか単語とかぐっちょんぐっちょんすぎて泣けます！

えっと、感想でも聞かれたのですが…

シクロとシスイ、セブラーノはどこにいったの？

と疑問に思っいらっしゃる方々…

ご安心ください。

わたしは、忘れてませんよ！

ちゃんと話には出します。

ですが今は出すべきではないと判断したので…ごめんなさい。

ちゃんと理由もありますが、それは話の中で…。

長くなりました、申し訳ございません！

今日（7/24）は部活（吹奏楽）の大会なので、更新できるかわかりませんが…なるべく更新できるようにします。

読んでいただきありがとうございます！

標的125 種明かし？

リポーンたちは呆気にとられていた。

獄寺と山本はあんぐりと口を開け、リーダーは眉間にしわをよせており、トンノは鳥が驚いたときのように身体を細長くしてしまっている。

あのリポーンでさえも驚きを隠せないのだ。
ポーカーフェイスは相変わらずであるが、驚いているのは確かである。

実験を計画したオスカルも多少は驚いているようだが、なぜだか満足げな、安心したような笑顔を見せている。

「…オスカル、」

「なんだい、リポーン？」

「お前は、この結果を望んでいたんだな？」

リポーンの問題に、一瞬きよんとしたオスカルだが、すぐにまたあの笑顔に戻って頷いた。

「まあ、ね。でも正直、言葉だけで事をおさめてしまうとは思ってなかったよ」

「どづいうことだ？」

「…綱吉くんの炎には、浄化作用があるだろう？」

「てっきりそれで解決させるんじゃないかと予想してたんだ。」

「予想外のことが起きたからであろうか、オスカルは苦笑いを浮かべる。」

「…そもそも、オレの求めている答えを聞いてねえんだが」

「……ああ、あの猛獣のことだろうか？」

「わかってるよ、と言い、オスカルはリボンたちについて来るように促した。」

「お前、犬なの？」

「ゲルルッ」

首を横に振り、猛獣は否定する。

ちやんと言葉が理解できるらしい。

ツナは今、猛獣と正座で向き合っている。

猛獣は“ふせ”の姿勢でツナに鼻を撫でられて、気持ち良さそうに目を閉じている。

先程の凶暴さがまるで嘘のようだ。

「犬…じゃないんだ。じゃあお前……」

「その猛獣は“猛獣”でしかないよ。」

突然聞こえた声に驚き、ツナが振り返ると、オスカルやりポーンたちが勢揃いで立っていた。

しばらく黙っていたツナだが、琥珀の瞳をまっすぐオスカルに向け、そして問った。

「…本当に猛獣、なの？」

「……なんでそう思うんだい？」

「…え、つと……」

逆にオスカルに問われ、ツナは少し戸惑ってしまった。

「おめえが思ったことを、ありのままに答えてみる。難しいことじやねえだろ。」

リポーンに言われ、ツナはこくりと頷き、隣にいる猛獣を見ながら答えた。

「…こいつ、怯えてたんだ。見知らぬところでオレを見て、突然のことだったから何もわからなくて。」

オレを敵だと思って、自分を守るうとして攻撃してきたんだ。」

警戒して、恐怖に支配されて。

ただ、自分を守るためだった。

怖くて、不安で、…心細くて。

ただ、安心しなかった。

「オレも、こいつと同じだったんだ。

いつも、怖くて不安で、怯えて警戒して。

そんなことを思いながら、…実は戦ってるんだ。

こいつは悪いやつじゃないよ。

ほら、こんなにおとなしいし。」

微笑みながらツナは猛獣を撫でる。

猛獣は「グルル」と鳴きながらツナに擦り寄った。

「……………そうか。」

こつ、と音を鳴らしてオスカルはツナに近づき、しゃがみこんだ。

ツナとオスカル視線が合う。

しばしの沈黙がつづく。

ただ機械の音が聞こえるだけの、静かな空間。

「……………ふふ。」

不意に、オスカルが笑い出した。

「…ふふ、綱吉くんはすごいね」

「な、なにがですか？」

なんのこともかまったく分からず、ツナは首を傾げた。

まだ「ふふ」と笑いながら、オスカルは突然拍手をしはじめた。

「ブラボー綱吉くん！合格だよ！」

「…は？」

「どういうことだオスカル」

リボーンがツナの隣に降り立ちオスカルを睨む。

「猛獣への攻撃でだいたい綱吉くんの力はわかったよ」

「あれだけでわかったんですか!？」

拳や蹴りだけの攻撃で戦闘力がわかってしまったことにツナは驚いた。

「私は一目置かれる学者だよ。私の開発した機械でしっかり分析してあるんだからね！」

胸を張り、オスカルはいわゆる「どや顔」で主張する。

もっと大袈裟な技をしないといけないとばかり思っていたので、正直拍子抜けだ。

「今回は、戦闘力も調べたかったんだけど、個人的に綱吉くんのボスとして相応しいかどうかも知りたくて、見抜く力を調べさせてもらったよ」

「…見抜く力？」

「うん。…その猛獣の心理…まあ、考えてる事って言うのかな？それを当ててほしかったんだ。」

「なんで猛獣の心理を見抜かせたんだ？」

全員が知りたいであろう問題を、リボンがオスカルに問う。

オスカルはおとなしくしている猛獣に近づき、つぶやくように静かに答えた。

「猛獣は…動物は、普通は言葉を喋らない。そんな動物たちの心理を見抜けるかを知りたかった。」

「…変わっているだろう、私の考え方は、よく言われるんだ。」

「もちろん自分でもわかってる。…やり方も、他人とは違うんだよ。」

またオスカルが「ふふ」と笑う。

だが、その笑顔は先程のものとは違った。

何故か、寂しそうな、悲しそうな、複雑な笑顔だった。

標的125 種明かし？（後書き）

久しぶりの更新でこのような雑文…ごめんなさい！

先日、大会がありました、無事に県大会出場を果たしました。

安心して疲れてしまい…小説を書けず（笑）

疲れもとれないまま二日間更新なしでした。

そしてやっと更新できたと思ったらこのような…このような意味のわからない文！

自分の伝えたいことを伝え切れませんでした…。

…次回こそは！

更新が遅くなつてしまい申し訳ありませんでした。

読んでいただきありがとうございました！

標的126 種明かし？

“自分”を忘れるな。

“欲に負けない我慢”を持って。

お前を信じてる。

なあ、オスカル。

ねえ、父さん。

あなたがいなくなってから、幾度かの季節が過ぎました。

すっかり私も歳をとりました。

長年、父さんや祖父さん、アツカルド家が全てを捧げてきたtes

o r o n a s c o s t o (テゾーロ ナスコスト) について、
やっと謎が解明されてきました。

それがとても嬉しくて、私は…ある実験を行いました。

…まだ中学生の少年を試したのです。

信じていました。

彼が必ず実験を成功させてくれると。

彼は、見事成し遂げてくれました。

私は嬉しくて、…安心しました。

彼が無事でよかった、死なないでよかったと思っていたのです。

…その時、やっと気付きました。

彼を危険なめにあわせてしまった。
彼の仲間に心配をさせてしまった。

“自分”を忘れるな。
“欲に負けない我慢”を持って。

ああ、父さん。

あなたとの約束を、私は守れなかった。

“自分”を忘れてしまった。

“欲に負けない我慢”ができなかった。

自分のために他人を犠牲にしてしまったのかも知れない。

ああ、そんなことにも気付かなかったのか、私は。

ねえ、父さん。

私は、学者としてあるべき姿をしているのでしょうか。

ねえ、綱吉くん。

君は、私をどう思ったのでしょうか。

……。

……ん。

……ん。

「……さん、オスカルさん、オスカルさん!!!」

「、！」

鼓膜に己の名を呼ぶ声が響き、オスカルは我にかえる。

「どうしたオスカル、ぼーっとして」

リボンにまで名を呼ばれ、オスカルは少し焦ってしまった。

気付けば、全員がオスカルをどうしたのだろつともいうような目で見ていた。

「ずっとぼーっとしてるから…どうかしたのかなと思って。…大丈夫ですか？」

「…あ、ああ…大丈夫だよ。ありがとう。」

平然を装おそおつとすると、棒読みな上に声が震えていた。

しまった、とオスカルの顔が歪む。

「…本当に、大丈夫なんですか？何かあったんじゃないんですか？」

ツナが心配そうにオスカル顔をうかがう。

“大丈夫だよ。何も無いよ。”

そう言いたいのにも、言葉が喉に引っ掛かって出てこない。

ただ、二酸化炭素が吐き出されるだけ。

“自分”を忘れるな。

“欲に負けない我慢”を持って。

お前を信じてる。

なあ、オスカル。

「……すまなかった」

やっと出た声は、小さく絞り出したようなもので。

身体がかたかたと震え出す。

恐怖で、鼓動が早くなる。

「……すまなかった、綱吉くん。

君を、危険なめに合わせてしまった。……わかっていたのに。これが
どんなに危険な実験だったかを。死んでしまうかも知れなかった。

……自分の欲に、好奇心に負けて自分を忘れ、君を犠牲にしてしま
った。

……怪我までをもさせてしまった。」

先程とは打って変わって、次々と言葉が出てくる。

心の底から込み上げてくる。

謝罪。

やるせなさ。

後悔。

自分への怒り。

「…自分のために、他人を傷つけるなんて……私は学者として……人間として失格だよ。」

父親との約束も守れず、他人を犠牲にして自分には害もない。

そんなの、騙したも同然だろう？

「…オスカルさん、」

びくり、とオスカルの方が揺れる。

「……オスカルさん、大丈夫ですよ。」

優しい声色でツナはオスカルに言う。

オスカルは、俯かせていた顔を恐る恐る上げる。

ぴたり。

ツナの顔を見たたん、オスカルの身体の震えが止まった。

「…謝らなくて、いいです。確かに、危ない実験だったけど…でもそれは、オレのためだったんですよね？」

「……綱、吉くん……」

「変わった方法でしたけど、…オレも大切なことに気付けた気がします」

「…大切な、こと？」

オスカルが問うと、ツナは笑顔で頷く。

その笑顔を見た瞬間、オスカルは時間が止まるような感覚を覚えた。

落ち着くような、癒されるような、まるでゆりかごに揺られる感覚。

(…包容、されているみたいだ)

じわりと、瞳の奥が熱くなった。

標的126 種明かし？（後書き）

タイトルの関連性がゼロに等しいと今思ったゆか空です。

オスカルさん、気付くの遅いよ！

と内心ツッコミを入れてしまう方もいることでしょう。

仕方ないことです。

オスカルさんなのでから（答えになってない）

次回はツナさんのお言葉の続きからですね。

やつとtesororo nascosto（テゾーロ ナスコスト）
の三人を出せそうな…喋ってくれるかわかりませんが（笑）

読んでいただきありがとうございました！

標的127 種明かし？（前書き）

もうタイトルとの関連性は追求しません（笑）

標的127 種明かし？

「オレも大切なことに気付けた気がします」

「大切なこと？」

オスカルが首を傾げて聞くと、ゆっくりとツナは頷く。

ふわり、

(…なんだろう、)

とても暖かい。

落ち着く。

なにかが、剥がれ落ちていく。

重かった背中が、軽くなる。

ふわり、

「…オスカルさん、」

ツナに名を呼ばれ、オスカルは目線を合わせるためにツナの前にしやがみ込んだ。

「……えっと、オスカルさん」

控えめな、ツナの声が部屋に響く。

「オレ、…今まで沢山の人達と出会って、……中には危険な人もいて、」

その度に、戦わなければいけなくなって。

その度に、せつかく出会った仲間たちが傷ついて。

それが、怖くて。

傷つくのが、消えるのが、

…いなくなってしまうのが、怖くて。

その恐怖は消えることなく、永遠と続いて。

「見知らぬものに怯えて、恐怖を抱いて、…それは当たり前で。」

オレだって怖かった。

見知らぬ猛獣があらわれて。

大きな足に生えた爪は鋭くて、頭についでる角はざらりと存在を示して、時々見える牙は噛まれたらひとたまりもなさそうで。

赤い瞳は射抜くように強くて。

大きな身体はさらに恐怖を増させたんだ。

攻撃をされたとき、一瞬でも死を想像してしまった。

もしかしたら、と考えたくもないことを考えてしまったんだ。

腕からは血が流れてて、打たれた背中はずきずきと痛くて。

…怖くて。

目の前の現実が、怖かった。

「でも、怖いのはオレだけじゃないってわかったんだ」

鼻を撫でれば、猛獣は「グルル」と甘えた声を出す。

先程までツナに襲い掛かっていたあの猛獣が。

「こいつだって、怖くて怖くて、震えてたんだ。」

怯えて、怖くて、

逃げ出したかった。

ツナと同じように猛獣も。

だが猛獣はツナに攻撃を仕掛けた。

逃げるのではなく、立ち向かった。

恐怖を感じながらも、自分を守るために。

生物誰しもは、自分で自分を守らないといけない。

他人に守ってもらってばかりではいけない。

自分で、困難を、乗り越えなければいけない。

「…えっと、オレ馬鹿だから上手く言葉に出来ないんですけど、
……この実験で沢山の大切なことに気付けたんです。本当に。…そ
の、だから、」

ありがとうございました。

照れ臭そうに、ツナは頬を指先でかきながら笑う。

「……っ、」

ああ、

暖かい。

これが、マフィアのボスになる少年。

これが、ボンゴレ十代目、沢田綱吉。

これが、大空。

“すべてに染まりつつ、すべてを飲み込み包容する。”

広く、澄んだ、

大空。

「オスカル。」

視線をおろすと、リボーンがオスカルを見上げていた。

「どうだ、ボンゴレ十代目は。」

リボーンの問題に、オスカルは一瞬驚いたような顔をする。

だが、その顔はすぐに柔らかな優しいものへと変わった。

「……誰よりもボスに相応しい、そう思ったよ。」

何にも変えがたい、この包容力は君しか持ってないんだよ。

その優しさで、どれだけの人間…生き物たちが救われたのだろうか。

その秘めたる力で、この世界はかわるのだろうか。

「…これからのボンゴレが、楽しみだよ」

うす汚れた世界を、君はどうやって変えていくのだろうか。

“自分”を忘れるな。

“ 欲に負けない我慢 ” を持つ。

お前を信じてる。

なあ、オスカル。

ねえ、父さん。

約束は守れなかったけど、またもう一度、あなたと約束します。

“ 自分 ” を忘れない。

“ 欲に負けない我慢 ” を持つ。

父さんたちが大切にしてきたものを、私が守っていく。

彼が、仲間を守るつもりだ。

恐怖に立ち向かうのは何故？

戦うのは何故？

何故、君は

君は強くなりたいの？

“そのすべてが、大切なものだからだよ”

標的127 種明かし？（後書き）

最近さらに文のぐだぐださに磨きがかかっています。

夏バテでしょうか。（関係ない）

…というか！

tesoro nascosto（テゾーロ ナスコスト）出せ
なかつた（（；。 ）（ ）

1604

…出してはいけない空気でした。

でも次回は出せます！

わたしの超直感が告げています。（どや顔）

どうでもいい話ですが、最近持病が悪化しています（、。；）

いいいい痛いいいいい

と補習中に呻き笑われてます。

た、他人事だと思いやがって…！

なんでしょう、

あれですか、

四面楚歌。(違っ)

では、今日も四面楚歌な状況を楽しんでいます！(だから違っ)

読んでいただきありがとうございます！

標的128 猛獣の行く先

「いてて……」

「だ、大丈夫かい、綱吉くん」

痛みに顔を歪めるツナを心配し、オスカルがオロオロと落ち着かない様子だ。

右腕の傷は猛獣の爪による引つ掻き傷で、さほど深くはないがそれでも痛みはある。

猛獣の尾で打たれた背中は、打撲か捻挫だろうとリボーンは言った。

先程よりも痛みは強い。

「…そういえば、綱吉くん。

君の身体を包むそのオレンジの炎はなんだい？」

「あ、」

ツナは自分を包み込む炎の存在を思い出した。

実験のとき、徳松がツナの傷の痛みを軽くするようにと纏わせた炎だ。

「…っ、そういえば徳松……っ」

「どうした、ツナ」

徳松がやけに静かなことに不安を感じたツナだったが、それはすぐに聞こえた声によって消えた。

しゅるりと炎が目の前に現れる。

そしてそれは小さな人間へと姿を変えた。

「徳松！」

「っ!？」

突然現れた小さな人間に、オスカルは目を見開く。

徳松を見るのは二回目だが、どうも驚いてしまうようだ。

「ツナ、傷が痛むのか？」

「うん…この炎のおかげで痛みは抑えられてるみたいんだけど…」

やはり完全に痛みを封じることが今は難しいらしい。
ツナの疲労と徳松の力は比例する。

だから傷を負い、いつもより弱っている今、徳松はあまり能力として動けないのだ。

「…徳松、くん。その炎はなんだい？」

「これは大空属性の“調和”を利用した…まあ、バリアみたいなものだ」

「…バ、バリア？」

「身体を炎で包むことで、衝撃を和らげたり、痛みを少なくすることが出来る。」

まあ、炎が衝撃や痛みを吸収して調和させてしまっただ。」

徳松の説明を、オスカルは興味津々で聞いている。

きらきらと目を輝かせるその姿は幼い子供のようである。

「す、すごい！大空って便利だね！」

「いや…便利とかそういうことじゃないと思いますけど」

思わずツナがツツコミを入れた。

確かに“調和”は便利だ。

例えばボンゴレ匣では、属性に構わず全ての匣を開けることができる。

（ただしその匣の力を生かし切ることはできないが。）

こうして衝撃や痛みをも和らげたり出来るのだから便利なことには
かわりない。

だが大空属性を「便利」と言うのには何が違和感があった。

「……使える。」

「は？」

ぼつりと呟かれた言葉を聞き取れず、ツナは首を傾げる。

すると、さらに輝きを増したオスカルの瞳がツナに向けられた。

そのあまりの輝きに、思わずツナは「ひっ!」と小さな悲鳴をあげ
てしまった。

「実は、今回の実験の結果を分析して綱吉くんの新技を作りたいな
って思ってたんだよね!」

「し、新技!？」

「ほら、“死ぬ気の零地点突破”シリーズとか“X BURNER”とか!あるじゃないか、技が!

大空属性なら色んな技が生み出せそうだし、綱吉くん力ならすいものができそうじゃないか!

早口で熱く語るオスカルからつい一歩後ろへと引いてしまう。

生き生きとしたその姿は本当に無垢な子供さながらだ。

「よし、今から結果を分析するから怪我の治療して待ってて! 救急箱とかはその棚にあるから!」

オスカルはうきうきしながらパソコンの前に腰掛け、忙しくキーボードで作業をし始めてしまった。

ぼかんと口を開けていたツナたちだったが、リボンが「あいつはああいう奴だ。慣れる。」という言葉に苦笑いするしかなかった。

「そ、そういえば t e s s o r o n a s c o s t o (テゾーロ ナスコスト)の三人は?」

姿が見えない、と辺りを見渡すツナに、獄寺と山本が両手を差し出す。

獄寺の両手の上には、緑色の髪の毛をした小人が二人、山本の両手の上には黄色の髪の毛をした小人がすやすやと寝息を立てて眠っていた。

「どうやら、疲れて眠ってしまったみたいですよ」

「ツナの実験のときも、全然起きなかつたんだぜ？」

あの騒ぎの中、三人はずっと眠り込んでいたと言っただから驚きだ。

試しにほっぺを突いたり頭を撫でたりするが全く起きる気配はない。

「シクロとシスイは瞬間移動で力を使い、セブラーノは長い封印からやっと解かれて疲れたんだろ」

リボーンの説明にツナたちは納得する。

安らかに眠る三人の小人を見つめ、「おやすみ」と優しくツナは微笑んだ。

「ツナ、ツナ！」

背後から名を呼ばれ、振り向くとトンノとリーダーがああ猛獣の目の前にいた。

「この子、僕みたいに“本物の生き物”にできないかな!？」

「トンノみたいに…あ！」

ツナはこの猛獣が以前のトンノのように一時的に命を宿していることを思い出す。

トンノはツナの炎の力によって“本物の生き物”となったのだ。

それならば猛獣もトンノと同じく“本物の生き物”になれるかも知れない。

「もうすぐ、こいつ消えるみてえだ。坊主ならこいつを本物にできるんだろ?」

「ツナ、この子は“生きたい”みただよ。“本物”として。」

ツナが猛獣を見つめると、猛獣は「グルル」と鳴いた。

“……………生きたい、……………”

視線が交差したとき、再びあの声が聞こえた。

確かに、猛獣は生きたいと願っている。

消えるのではなく、生きたいと。

「…でも、トンノと同じようにできるかな」

「やってみる。おめえならできるぞ。」

リボーンが隣でにやりと笑う。

その笑みになぜだかツナは安心感を覚えた。

「…やって、みる」

ツナは頷き、猛獣に側に来るように手招きをする。

どずどすと微かに地面を揺らしながら猛獣はツナの目の前へとやって来て、座り込んだ。

グローブをはめて死ぬ気丸を服用し、額とグローブに炎を燈らせる
と、ツナは猛獣に優しく触れる。

そして大空の“調和”の炎を流し込むイメージをつくりだす。

ブワッッ！

ツナの掌を中心に風が生まれ、リボンたちをなびかせる。

きらきらと、輝かしく舞う炎。

それに誰もが、目を奪われた。

パソコンを見つめていたオスカルでさえも。

バシユンッ！！

炎が弾け、煙が辺りを包む。

何も見えず、身動きもとれない。

失敗か、と思いリボンたちは煙が晴れるのを待つ。

だが、それはいらぬ不安であったことを知る。

「……こら、くすぐったいだろ？」

晴れた煙の向こう、そこにいたのは。

「……い、犬？」

「なんか小さくなってるのな……」

獄寺たちは間抜けな顔でツナと猛獣を見つめた。

猛獣は小型犬ほどの大きさで、赤だった瞳はオレンジへと色を変えていた。

角は消え、代わりにオレンジの炎が燈されている。

「クウン」

まるで子犬のような鳴き声は、先程の猛獣だった姿を忘れさせてしまいそうだ。

甘えるように膝の上で尻尾を振る猛獣…小型犬を、ツナは優しい表情で見つめていた。

猛獣が小型犬へと姿を変え、実態化したことに感動してオスカルが再び目を輝かせたのは数十秒後のこと。

標的128 猛獣の行く先(後書き)

猛獣：実態化してしまいました。

最初は消えてしまう予定だったのですが、愛着がわくと駄目ですね
…消すのがかわいそうに思えて(笑)

トンノみたいに実態化させちゃえ！と路線変更してしまいました！！

そして、やっとtesoro nascosto (テゾーロ ナ
スコスト)を出せました…。
しかし彼らは寝ている(笑)

何よりも楽しみなのが、新技を出せることです！

読者様にもご協力いただき、新技の案ができました。

大切に、ゆっくりと出していきたいと思えます。

読んでいただきありがとうございます！

標的129 和解

ツナの膝の上で、真っ黒な小型犬がぶるぶると震えている。

「キュウウン」と頼りなげな声をだす小型犬を、ツナは優しく宥める。

小型犬が怯えている理由。

それは一人の学者にあった。

「つつつつつつ綱吉くん！？
今何したんだい！！？」

思わずツナも怯むほどの形相でオスカルは駆け寄って来る。

かつて猛獣だった小型犬はさらに恐怖に怯え、ツナの背に隠れてしまった。

「オスカル、落ち着け。小型犬が怖がつてるだろ。」

「す、すまないね。でも、本当に綱吉くん、君何をしたんだい？」

リボーンに呆れられ、苦笑いで謝りながらオスカルは再びツナに問う。

その手にはノートパソコン。

ちやっかりとデータを記入するつもりらしい。

「…トンノにしたのと同じように、こいつにも大空属性の炎を流し込んで、“調和”の力で実態化させた。」

「…実態、化……」

オスカルがツナの背後に隠れた小型犬をのぞきみる。

すると小型犬はびくつと小さな身体を跳ねさせ、さらに隠れてしまった。

「…この、頭の炎はなんだい？」

瞳の色も変化しているし……」

小型犬の頭に燈る炎とオレンジ色の瞳を交互に指差し、オスカルは問う。

「おそらく、ツナの炎の作用だろう。トンノもツナの炎で大空属性になったからな。そいつもトンノと同じように大空属性になったんだろうな。」

ツナが説明をする前に、リボンが簡潔に答えをまとめてしまった。しばらく考えるしぐさをしたあと、「ああ」と何かを思い出したようにオスカルは声を出した。

「そういえば、前に…質問したときに言ってたね」

「忘れてたのか」

「歳かな」

あはは、と一人笑う学者。

四十代で歳と言つのはおかしい気もするが、昔に比べれば歳老いたことを実感できるのだろう。

「キユウウ…」

「…お前が騒ぐから、さらに怯えてしまったじゃないか」

震える小型犬を抱き抱え、ツナはため息をついてオスカルを睨む。

小型犬はもそもそとツナの腕の中で、なるべくオスカルを見ないようにと顔を服に埋め込んでいた。

「…あー、かなり私を怖がってるね」

「今さら気付いたのな」

「おっせえんだよ、学者馬鹿！」

「ちよ、学者馬鹿って…獄寺君、」

「…ぶっ」

「リーダー！笑わないの！」

リーダーの肩の上で笑うオヤジを叱るトンノ。
足元ではリボンまでもがにやりと面白そうに笑うのだから、トンノは困り果ててしまった。

「獄寺の坊主、おめえは“馬鹿”ってあだ名をつけるのか？
ほら、山本の坊主にだって“野球馬鹿”ってよく言うじゃねえか」

「なんとなくだ！ってか坊主って呼ぶんじゃねえ！！」

「ああ、もうリーダー！！獄寺君もっ！！」

ついにリーダーの肩から離れ、トンノは二人のまわりを飛び回る。

ぎゃあぎゃあと騒ぐ獄寺とリーダー、注意をするトンノのやり取りを見て山本はただ笑っていた。

どれだけ騒いでもシクロとシスイ、セブラーノは眠りから覚めることはなかった。

「…あの子たち、なにしてるの」

「お前の呼び方から口論に発展しただけだ。まあ、気にするな」

「…いや、そこは気にするだろう」

静かにツナはリボンにツッコミを入れた。

だがそれをリボーンは「ふん」と鼻であしらってしまった。

「…あの、小型犬さん」

おかしな呼び方でオスカルは小型犬に話しかける。
びくりと大きく震え、恐る恐る小型犬はオスカルをうかがう。

「お、驚かせちゃってごめんね。…つい、君を見て学者の血ついでうものが騒いでしまつて…。まさかこんなに怖がつてしまつとは思つてなかつたんだ」

小型犬から視線を離さず、オスカルは慌てながら言葉を綴る。

その間、小型犬はオレンジの瞳を揺らしながらオスカルを見つめていた。

「…えつとー、私は君の敵なんかじゃなくて…その、…き、君と、と、…友達、…に、なりたいな…なんて…」

不慣れな言葉を並べ、オスカルは優しい笑みを向ける。

ツナは少し驚いたような、リボーンは相変わらずのニヒルな表情であった。

しばらくの沈黙。

雑音に口喧嘩が聞こえる。

もそり、と小型犬が動いた。

小型犬はツナの腕から飛び降り、オスカルの元へと向かう。

そして、座り込むオスカルの目の前で立ち止まり、じっとオスカルを見つめた。

“…あなた、いい人なのかい？”

「…っ！」

それは瞳から伝わる言葉。

直接耳に流れ込む声ではなく、脳内に響く声だ。

“…あなた、優しい匂いがする”

「…え？」

ぼすり、と腕の中に飛び込んできたのは、小さな小さな黒い犬。

突然のことにオスカルは動揺を隠せない。

「…え、…えっ!？」

「よかったな、オスカル。わかってくれたみたいだな。」

ツナは微笑みながらオスカルと小型犬を眺めた。

戸惑うオスカルと甘える小型犬。

正反対な一人と一匹がほほえましい。

目の前では和む雰囲気、背後では騒がしい口論。

真逆なふたつの光景に、ツナとリボーンは二人で笑った。

標的129 和解（後書き）

早くツナさんの傷の手当てをしてあげたいゆか空です

次回に絶対手当てしてあげます！絶対！

それまで徳松さん頑張ってください

今日は久々の休日です。

夜更かしはせず、しかし寝坊はしてやります。

イラストを描きたいですが：何を描けばいいのかわからないので
笑）

今日は小型犬さんのラフを描いただけなので。

近日中に小型犬さんの正式な姿を発表したいなとは思ってます。

いつのまにか、感想が100件を越えていました！

嬉しいです。嬉しい嬉しい嬉しい嬉しい！

いつも感想をくださる方々、ありがとうございます！

もはやわたしの支え。

感想をいただけるので小説も書けるのだと思います。

読んでいただきありがとうございました！

標的130 命名

「…いつてー……」

「大丈夫かい、綱吉くん？」

「あ、はい……すいません、怪我の手当てなんかさせてしまって…」

ツナが申し訳なさそうに言うと、オスカルは「かまわないよ」と笑顔で答えた。

無事、和解したオスカルと小型犬を見て安心したツナだったが、そろそろ疲労の限界なのか、ずっと黙っていた徳松がよろめいた。

「…すまん、ツナ。そろそろ傷の痛みを…カバーすることができない」

その言葉を残し、徳松は消えた。
ツナの意識の中へと戻ったのだ。

病み上がりも同然だったから早く疲労の限界がきたのだろう。

徳松が消えたと同時に身体を覆っていた炎が消え、切り傷と打撲の

痛みが一気に襲ってきた。

それに驚き、ツナの額の炎までもが消えてしまい、グローブもただのミトンの手袋に戻ってしまった。

そして今、痛みを訴えだしたツナの手当てをオスカルがしているというわけである。

「…よかったね、まだ浅くて。傷が深かったら縫うことになってたよ。」

「え、縁起でもないこと言わないでくださいよ…オレさういうの苦手なんですから!」

脱脂綿に消毒を浸し、傷口に当てれば地味な痛みが生まれる。

治療をするオスカルと痛がるツナのまわりを小型犬がおろおろと動き回る。

「…キュウウン」

小型犬は心配そうに前足でツナの足をひっかく。

「ツナのことを心配で落ち着いてらんねえみてえだな」

小型犬の隣に立って頭に手を置きリボンが笑う。

ツナが小型犬を見つめると、小型犬はぱたぱたと長い尻尾を振る。

“大丈夫？”

オレンジの瞳が揺れる。

「大丈夫だよ」

ツナは左手で小型犬を撫でる。

頭で揺らめく炎が暖かくて心地好い。

「ありがとう、……………えっと…」

「、、どうした」

「いや、あのね…」

吃り出したツナにリボーンが問うと、ツナは困ったような苦笑いをした。

「……名前、決めてないなって……」

「…あ。」

包帯を巻いていたオスカルが手を止めて小型犬を見遣る。

「そういえば、決めてなかったな。」

リボーンも名前がないことを忘れていたようだ。

すると、リボーンはツナを見つめ、にやりと怪しい笑みを浮かべた。

「よし、またお前が名前をつける、ツナ」

「ま、また!？」

「いいじゃねえか、今までお前がつけた名前は…ぷっ、……なかなか良かっただろ」

「トンノの時は笑ったくせに!？」

あれすごい落ち込んだんだからな!?!てか今笑っただろ!思い出し笑いだろ!！」

リボーン的笑みは嘲笑いにしか見えず、ツナは恥ずかしさで顔を赤らめる。

オスカルと小型犬は何のことだかわからず、同じように首を傾げていた。

「とにかく、オレは名前をつけない!

……オスカルさん、オスカルさんがこいつの名前をつけてください
「!」

「わ、私かい!？」

突然ご指名を受けたオスカルは驚愕する。

己の顔に指先を向けて確認すると、ツナは何度も頷く。

「…え、ええー……」

戸惑いながらオスカルは小型犬を見る。

小型犬は名前をつけてくれることを期待しているのだろうか、目をきらきらと輝かせてオスカルを見上げている。

ああ、引き返せない。

心の中でオスカルはそう思った。

オスカルは小型犬と向き合うように正座をする。
小型犬も綺麗に座って“待て”の状態を保つ。

“自分”を忘れるな。

“欲に負けない我慢”を持って。

お前を信じてる。

なあ、オスカル。

「……………決めた、よ」

両手で優しく小型犬を抱き上げ、視線を合わせて告げた。

「君の名前は、プロメツサだ」

「…プロメツサ？」

ふふ、と笑いながらオスカルは頷く。

外国人の名前だろうか、とツナは首を傾げた。

「「promessa」…イタリア語で“約束”という意味だな」

「え、イタリア語!？」

「そうだよ。…私は、かつて父親と約束をしていたことがあった。
……だが、それを私は破ってしまったんだ。」

“自分”を忘れるな。

“欲に負けない我慢”を持って。

それは父さんが何度も言っていた言葉。

父さんと私が、遠い昔にした約束。

「それをもう一度交わすように、もう二度と破らないように、父さんに代わってこの子に誓う、という意味だよ。」

「…そう、なんだ…」

「ふふ、…どうかな？」

オスカルは目の前の真っ黒な犬に問う。

すると、真っ黒な犬は尻尾を大きく振り、「ワンッ」とひとつ鳴いた。

それは、肯定の合図であった。

「そうか、良かった。」

安心したように、オスカルは小型犬…プロメッサを抱きしめた。

喜ぶように、プロメッサの炎がきらきらと輝いていた。

そんな感動の場面のような光景のうしろでは、今だに口喧嘩が続いていた。

「…獄寺くんたち、まだやってるよ……」

「めんどくせえからほっとけ」

標的130 命名(後書き)

やっと、小型犬さんの名前が決まりましたね。

プロメッサさんです。

少しかっこいい感じがしませんか？

またもや新技の案をいただいてしまいました！

ああああああありがとうございます！

こんなに沢山…感謝です。

全部出してしまいたい。
でもひとつずつ出さないと…。

そういえば、
アクセス数が23万、
ユニーク数が2万5千になりました。

いつもいつもありがとうございます…

たまに報告するようになります。

読んでいただきありがとうございます！

標的131 子犬の進化

こんにちは、はじめまして。

ねえ、早くお話がしたいよ。

ねえ、君たちと遊びたいよ。

この気持ち、伝わってるかな？

ねえ、この世界を、教えてよ。

期待に炎が揺らめいた。

「はい、できたー！」

「ありがとうございました」

オスカルがにっこりと笑って湿布やら包帯やらのゴミを片付けはじめる。

右腕と背中の手当ては、すべてオスカルがしてくれた。

右腕は包帯がしっかりと巻かれており、背中には湿布が何枚か貼つてある。

手際の良さも、出来もなかなかのものだった。

「クウ」

今までおとなしくしていたプロメッサが、ちょこまかと動き出した。

クウクウと鳴いてツナやオスカルのみわりをぐるぐると回っている。

「ど、どうしたんだよ」

「クウクウ！」

ツナのズボンの裾をくわえて引っ張り出したプロメッサをツナは抱き上げた。

「お腹でも空いたのかな」

プロメッサの行動に首を傾げていると、ツナとプロメッサの視線が合った。

“……とめなくていいの？”

「…へ？」

頭に流れ込んだ声。

それは今日何度も聞いたものだった。

「…とめるって、何を？」

聞こえる、正確に言えば脳内に響く声は、プロメッサのものだとなはわかっていた。

だから戸惑うこともなく、視線をそらさないプロメッサに問うた。

“…喧嘩、してるよ。とめなくていいの？”

「クウ」と鳴いてプロメッサがツナの背後を見遣る。

つられてツナもプロメッサの視線の先を追った。

すると、三人の人間と一羽の鳥が何やら言い合っているのが見えた。

「坊主は坊主だろうが。何が悪いんだ？」

「全部だ！何度言えばわかるんだ！オレは坊主なんかじゃねえつつてんだろうが！」

「オレから見ればお前らなんか坊主だろ。」

「てめえまだ二十代だろ！」

言い合うリーダーと獄寺。

そのまわりを飛んで何やら叫んでいるのはトンノだった。

「二人とも！いい加減にしてよ！坊主でもなんでもいいでしょ！」

そろそろトンノの仲介も雑になってきた。

口喧嘩をとめるのに疲れてしまったのだ。

「ははっ、飽きねえなあ、みんな。そんなに騒いだらこいつらが起きちまうだろ？」

口喧嘩を外野から見学している山本はただ笑っているだけ。

両手に乗っているのは三人の小人だった。

獄寺が今にもダイナマイトを出してしまいそうだったのでトンノが慌てて避難させたのである。

「や、山本…手伝ってよ…！」

「いや、こいつらとめらんねえのな。」

すっぱりと諦めた山本にトンノは呆れてしまった。

確かに、この二人の口喧嘩は今とはめられない。

何を言っても無駄なのかも知れない。

「トンノ！」

名を呼ばれ、振り返ればこちらへ走ってくるツナの姿が見えた。

「…っ、ツナー！」

トンノは真っ先にツナの元へ向かい、差し出された左腕に降り立った。

「…トンノ、なんかやつれた？」

心なしか、トンノがげっそりとやせ細ってしまったように見えた。

トンノはため息をついて、後方の言い合う二人を見遣った。

「あの二人、何言っても無駄なんだ。聞く耳なんか貸さないんだよ。…僕もっ、疲れちゃった。」

トンノのオレンジ色の丸い瞳がにじむ。

相当二人をとめるのに苦労していたようだ。

そんなトンノを慰め、二人をとめるべくツナは間に入ろうと走り出そうとした。

だが、それは隣に見えた真っ黒いものに遮られてしまった。

「ガウウウウウウ!!!」

凄まじい雄叫びが部屋に響き、空気を揺らした。

「…え、」

「…な、」

ツナとトンノは固まってしまった。

隣で吠えた、真っ黒い生き物。

ゆらりと揺れる、頭の炎。

優しいなオレンジの瞳がツナとトンノをとらえた。

「…プ、プロメツサ!？」

咆哮ほうごうの正体はプロメツサだった。

だが、その姿は先程までの小さくかわいらしいものではなく、あの猛獣の姿であった。

それを見て、口喧嘩をしていた獄寺とリーダーも、笑っていた山本も、ゴミの片付けをしていたオスカルも啞然としている。

リボンだけはにやりと笑っていた。

「…あ、あの……プロメツサ?」

おそろおそろツナが名を呼ぶと、プロメツサは大きな身体を擦り寄せてきた。

思わずツナはよろめいてしまっが、それをプロメッサの長い尻尾が防いだ。

そして目を細め、ひくひくとヒゲを動かした。

「大丈夫、綱吉？」

呆気。

「しゃべったあああああ！！！！！！！！！」

プロメッサが喋った。言葉を発した。

それは脳内に響くものではなく、直接耳に届くもの。

全員が驚きで目を見開いていた。

プロメッサだけは、嬉しそうに尻尾を揺らした。

こんにちは、はじめまして。

ねえ、早くお話がしたいよ。

ねえ、君たちと遊びたいよ。

この気持ち、伝わってるかな？

ねえ、この世界を、教えてよ。

期待に炎が揺らめいた。

標的132 同様

ぱたぱたと音をたてて揺れる長い尻尾。

燃え盛る炎は切れた瞳と同じ朝焼けの色。

真っ黒な毛並みはつやつやとして美しい。

だが、それは大きな身体の猛獣だった。

「…プ、プ、プロメツサ!？」

先程まで小さな子犬だったものが猛獣へと変化した。

変化しただけならまだ良かったのだが。

その言葉のすぐ後、ツナの背中に痛みが走った。

ツナは突然の衝撃に声も出せずにそのまま倒れそうになったが、それをプロメツサの尻尾が防いだ。

本日プロメツサの尻尾に助けられたのは二度目だ。

ずきずきと痛む背中をさすり、ツナは背後を見た。

リボーンが蹴ったのだ。打撲している状態の背中を。

「な、に、するんだよりリボーン！

怪我人の背中を蹴り飛ばすなんて！」

「おめえが馬鹿だからだろ」

「理由になってないだろ！」

蹴るには理不尽な理由にツナは怒鳴った。

だがリボーンは表情も変えず、ただ笑って口を開いた。

「トンノが実態化したとき、しばらくしたら喋るようになっただろ。」

「……あ、そういえば……」

「それと同じだ。おめえの炎の力によって、トンノと同じようにプロメッサも言葉を発することができるようになったんだろ。」

「そうか」とツナは納得する。

プロメッサには、トンノの時と同様にツナの炎を流し込み、実態化させた。

だからプロメッサにもトンノと似たような兆しが訪れるのだろう。

「それぐらい自分で気付け」

「だって……すっかり忘れてたし……」

今ではトンノは普通に仲間として共にいるし、かつてボンゴレの特殊弾であったことを忘れてしまっくらいなのだ。

「綱吉、綱吉」

「ん、ああ、何？」

くいくいと服の裾を引っ張られ、顔をあげるとプロメッサが嬉しそうな表情をしていた。

「見て見て」

プロメッサが鼻先で何かを示す。

その方向に目をやり、「あ。」とツナは声をあげた。

視線の先にいたのは、三人の人間。

先程までくだらない口喧嘩を繰り返していた獄寺とリーダーと、それをただ見ていた山本だ。

うるさいほどだった口喧嘩は止まり、ぽかんと口を開けて三人はこちらを見ていた。

おそらくプロメッサに驚いているのだろう。

突然猛獣へと姿を変え、自分たちに向かって咆哮し、言葉を発したのだから。

「…あ、あの、三人共……」

「静かになっていいじゃねえか、しばらくほっとけ」

「ひどくない、それ！」

リポーンは固まる三人を放置し、その小さな手をプロメッサの真っ黒い大きな身体にぴたりとひつつけた。

「つやつつやだな」

「えへへ、女の子だからね」

「へえ、女の……」

「……………女の子?」

「うん、女の子」

聞き間違いだろうか、とツナは何度も聞き返す。
そのたびにかえってくる返事は、肯定するものばかりだった。

「…ほ、んとに女の子?」

「うん。リボーンは気付いてたでしょ?」

「勇ましかったが雌の気配だったからな」

この小さな赤ん坊はなんでもお見通しなのだろうか。

さも当たり前でも言うかのようににやりと笑った。

「さて、プロメッサ」

リボーンが名を呼び、プロメッサは答えるかわりに顔を前足の上に

置き、「伏せ」の状態になる。

「おめえ、オスカルとこれから一緒にいてやれ」

「なっ、」

「オスカルと？」

クウ、と鳴いてプロメツサは首を傾げる。

間抜けな声をあげて驚いたのはオスカルだった。

「一緒にいる、って…」

「オスカルの傍にずっといるってこと？」

リボーンはこくりと軽く頷き、オスカルを指差した。

「こいつは、研究に夢中になると我慢がきかなくなることがしばしばある。それを監視してほしい。」

「なんか明かに私を変人扱いしてないか、リボーン…」

「心配すんな。人間なんか誰しもが変人だ。お前はその上に行く変人の中の変人だ。」

「…。」

オスカルは哀しくなった。同時に虚しくもなった。自然と苦笑いがこぼれる。それをツナが慌てて宥めはじめた。

そんなことはお構いなしに、リボーンは再びプロメッサに問う。

「…いやか、プロメッサ」

「……………」

プロメッサは答えることもなく、まっすぐリボーンと視線をかわす。

ゆらり、

炎の動きが変化した。

「…私が、オスカルの面倒を見てあげる」

優しい声で、嬉しそうにプロメッサは言った。

表情のないはずの顔に、笑顔が見えた。

「…そうか。」

頑張れよ、とりボーンは言葉をかけた。

「えへへ」とかわいらしい笑い声でプロメッサは頷いた。

「…人はみんな、変人なんだってさ……」

「またりボーンに何か言われたんですか？…オスカルさんって意外と心が弱いんですね」

「…意外、は失礼だよ、綱吉くん。」

もう笑うしかない。

そうオスカルは思った。

標的132 同様（後書き）

途中から獄寺くんたちが固まり続けてます。

プロメッサの姿、咆哮、言葉を発したことに驚きすぎてしまったのですよ。

わたしなら失神します（どや顔）

あ。お気づきになられた方もいらっしやるかもしれませんが、「その先には。」のあらすじをやっと変更することができました！

ずっと、一ヶ月前くらいから変えなきゃ、変えなきゃと思ってましたが、いい文が思いつかず…。

昨日不意に変えてみたら納得のいくあらすじになったので変更しました！

さて、今日で補習は一旦お休みです。

がんばってきます！

読んでいただきありがとうございます！

標的133 三つの会話

「まじで驚いた…」

「心臓に悪いのな………」

「めっちゃ驚いてたもんなあ、オレたち………」

プロメツサが猛獣へと変化してから少しの時間が経った。

驚愕で啞然としていた状態からなんとか正気に戻った三人は、ぽつりぽつりと言葉を発しはじめていた。

三人の視界には、楽しそうに会話をしているプロメツサとリポーンがうつっている。

端っここでは何故か体操座りをしているオスカルを慰めるツナとトンノの姿があった。

「驚いている間に何かあったみてえだな」

「…てかなんでオレたち驚いてたんだっけ？」

「あの犬さんが巨大化して吠えたからだろ、山本の坊主………」

首を傾げながら笑う山本を、リーダーは「大丈夫か、こいつ」とでも言うような目で見ていた。

「こいつはそういう奴なんだよ、ジジイ」

「そうか…、一瞬認知症じゃねえのかと疑っちゃまったぜ」

掌の上で眠る三人の小人を見つめながら「ちっせーなー、軽いなー」と何やら独り言を言っている山本を、二人は呆れたような感じで見

た。

「…ジジイ」

「なんだ、獄寺の坊主」

呼び方は結局これでいいのだろう。

「ジジイ」と呼ばれても、「坊主」と呼ばれても二人は呼び方について何も言わなかった。

「…なんで十代目が落ち込んでる四十代のオッサンを慰めていらっしやるんだろうか」

リーダーは獄寺の視線の先を追う。
そこには今だ体操座りでうずくまるオスカルを慌てたように慰めて
いるツナの姿があった。

「……さあなー」

リーダーはその場にどっかりと座り込み、「腹減ったなー」と一人
呟いた。

「…人は弱い生き物だ」

「…めんなさい」

「…精神は脆いんだ」

「…すみません」

「…ガラスのハートを持っているんだ」

「も、申し訳ございませんでした」

オスカルのいちいちの言葉にツナは謝る。

体操座りをして膝に顔が埋もれているせいか、オスカルの声はくぐもっていた。

先程からずっとこの調子で、もうツナはお手上げである。

「ほ、本当にごめんなさいオスカルさん。顔をあげてくださいよ……」

「…私のことは気にしなくていいよ、綱吉くん。」

「いや、気にするなと言われても……」

オスカルがこうなってしまったのは少なくともツナのせいだし、放っておくこともできなかった。

「どっしりよっ、トーン…」

「僕に言われても……」

肩の上の鳥も困った様子だ。

一人と一羽の大空は目の前で落ち込む学者をとにかく慰めるのだった。

「……ふむ、」

顎に手をそえて、リボーンは頷いた。

「おめえも特別な力は使えるんだな」

「そうみたい。」

小型犬へと姿を戻したプロメッサはちょこまかと動き回る。

だがその全身にはオレンジの炎を纏っていた。

「なんかこの炎ってあたたかいね。癒されるっていつか…」

「大空だからな。大空属性は貴重なんだぞ。」

「へえー！」

ぴよんぴよんと跳ねてプロメツサは声を上げた。

舞い散る火の粉が輝いて美しい。

「貴重なのになんで綱吉は私を大空属性にすることができたの？」

「それはオレにもわからねえんだ」

リポーンは腕を組んで少し離れたところで困り果てているツナを見た。

「あいつの力は、よくわからねえ。だが、無限の可能性を秘めていることだけはわかる。」

“調和”とは不思議なものだ。

本物の炎としても活用できる。

石化させたり、浄化させたりもできる。

ツナの場合は、トンノヤプロメッサを実態化させてしまった。

使い方次第で、どんなこともできるのではないかと思っくらい、
“調和”はすごい力を持つ。

さらに、ツナには誰も知らない謎の力があるのだ。

「実際、オレはあいつの力を把握しきれていねえ。普段は勉強も運動も何をやってもダメダメな奴だが、驚かされるほどの成長を見せるんだ。」

プロメッサはおとなしくリボーンの隣で興味津々に話を聞いている。

そんなプロメッサをリボーンは小さな手で頭を撫でながら笑った。

「育てがいのある生徒だな」

その大きな真つ黒い瞳は、満足げに、楽しそうであった。

標的133 三つの会話(後書き)

8月4・5日は、更新できるかわかりません。

ちょっと家族で遠出をします。

更新できたらいいんですが、多分疲れてしまっただろっし…。

読んでいただきありがとうございました！

標的134 一休み

オスカルの研究所に到着したのは午前の十時頃。

それから実験やら何やらをして、今は午後二時をまわっている。

昼食をとっていないので、それぞれの空腹感はピークに達していた。

「お腹空いた……」

ぐうぐうと鳴る腹をさすり、ツナは呟いた。

完治していない腹の傷が先程の実験の際に痛みだし、腹が鳴るたびに振動でかすかな痛みを帯びるようになった。

痛いし、お腹は空いた。

まだ落ち込んでいるオスカルも空腹のようで、鈍い音を腹から鳴らせてやっと顔をあげた。

「オ、オスカルさん……」

「落ち込んでたら空腹感がさらに増したよ……。いつまでも落ち込ん

でたら意味がないね。すまなかつた、綱吉くん。」

どっちらせ、と言ってオスカルは立ち上がり、大きくのびをした。

「ごはん食べようか！みんなお腹が空いてるだろう？」

「オスカルさん、料理できるんですか？」

「手先は器用だし、イタリア料理なら得意だよ。」

まさか料理もできるとは。

ツナはオスカルの意外な一面に驚いていた。

(…研究だけしかできないと思ってた。)

口に出せばまた落ち込んでしまいそうなことを、ツナはひっそりと心の中で思っていた。

それを読心術で読み取った赤ん坊がいたことは言うまでもない。

「ここにはキッチンも装備されてるんだ。パスタでも作ろうか。」

「こっちだよ」とオスカルに促されるまま、ツナたちは実験室をあとにした。

ツナは左肩にトンノを乗せ、オスカルの後をついていく。

「綱吉っ」

「うわっ」

右肩にプロメッサが跳びうつり、ツナは思わずよろけた。

だがすぐに体制を直し、転ぶことは避けることができた。

プロメッサはすっかりツナに懐いてしまったようだ。

「ダメツナッ」

「いてっ」

次は頭に何かに乗った。

容赦のないリボーンは思いっきりツナの頭に跳び乗ったのでツナは前屈みになる。

「い、痛いだろリボーン！」

「気にするな」

「意味わかんないよ！」

はあ、とため息をついてツナは再び歩きだした。

今のやりとりを、後ろにいた獄寺たちは黙って見ていた。

ツナが何度か転びそうになっていたが、本人がなんとか耐えていたので手を貸す必要はなかったのだ。

「なんか面白い光景なのな！」

山本が笑いながら言うと、獄寺とリーダーは素直に頷く。

右肩にプロメツサ、左肩にトンノ、頭にリボーンを乗せたツナの姿はおかしかった。

重くはないのだろうかと思うほどである。

「おもしれえなあ、坊主は。」

「十代目は信頼されてんだよ」

ふぶん、と自分のことのように誇らしげに獄寺は鼻をならした。

ツナが多くのものに信頼されているのは右腕（自称）として嬉しいことなのだ。

すっかりご機嫌になった獄寺の横顔を見て、「単純だなあ」とリーダーは嘖き出した。

「「ごちそうさまでした！」

ばん、と両手を合わせてツナは言った。

「美味しかったかい？」

「はい！オスカルさん、本当に料理上手だったんですね。」

「材料がなかったから適当に作ったんだけど…よかった。」

オスカルが立ち上がって片付けの準備をし始めたのでツナは食器を運ぶのを手伝う。

適当に作った、と言ってもオスカルの作ったパスタは美味だった。

最近和風パスタにハマっているとかで、作ってくれたのも和風パスタだ。

さっぱりとした味で、ツナはおかわりまでしてしまったほどである。

「日本の醤油や味噌は素晴らしいよ。私は味噌汁が大好きなんだ。」
食器を洗いながら語るオスカルは、とても楽しそうだった。
隣で食器を拭くツナも好きな料理などの話でつい盛り上がってしま
う。

まさか、学者とこんな話をするとは思ってもいなかった。

オスカルとの出会いはおかしかったのだ。（なにせ入院している病
室に深夜に訪れたのだから）

だが今はこうして笑い合っている。

（…不思議だなあ）

しみじみと人との交流の深さを感じつつ、ツナは食器を片していっ
た。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………クウ……………」

「…やめなよ三人とも。プロメッサが困ってるよ。」

見兼ねたトンノが言葉を発した。

机の真ん中には全身真っ黒の、頭に瞳と同じオレンジ色の炎を燈した子犬がぶるぶると震えていた。

それを獄寺、山本、リーダーの三人は凝視し続けている。

そのあまりの視線にプロメッサは怯えてしまっていたのだ。

「…プロメッサがかわいそうだよ……………」

注意しても観察をやめようとしなない三人に、トンノが痺れを切らして翼で思いつきり叩いたのを、エスプレッソコーヒ^{はた}ーを飲んでのんびりしていたリボンとレオンは愉快そうに見ていた。

標的134 一休み(後書き)

なんとか更新できましたね！

今は大阪にいます。

ログハウスに泊まっています。

虫がたくさんいます(笑)

大阪は怖いです…てか都会が怖いです(。(。11)

愛知県の田舎生まれ田舎育ちのわたしには都会が恐ろしくて恐ろしくて！

田舎が恋しいです。

オスカルさんが作ったパスタを食べてみたいです。

ボンゴレパスタを作ってほしいですね！

もう後書きでも何でもない(笑)

読んでいただきありがとうございます！

標的135 プロメッサの能力

遅めの昼食をすまし、ツナたちは談話室でくつろいでいた。

オスカルの研究所は、どうやら様々な部屋が多々あるらしい。

実験室は三つ、台所や談話室、さらには個室がいくつつかある。

オスカル曰く、彼の部下に研究を手伝わせるときに使用するらしいのだが、滅多に使わないと言う。

「ほんとにアジトみたい……」

「参考におけよ」

ソファーに腰掛け、ツナはオスカルから渡された研究所の見取り図を見ていた。

使用している面積は広いが、階はそれほどない。

あまり日本には来ないので、この研究所を使うことは数年に一回ほどだと言う。

「ここはオスカル父親がつくつたらしい。あいつの家系…アッカルド家は相当な金持ちだからな。」

「オスカルさんってお坊ちゃんなの？」

「トンノ、お坊ちゃんって…」

ツナの膝の上にいたトンノがこてん、と首を傾げた。

隣ではプロメッサが丸くなって寝ている。

一羽と一匹はいつのまにか仲良くなったようだ。

「…あれ、そういえばオスカルさんは？」

食事の後片付けをしてからオスカルの姿が見えないので、ツナは談話室を見渡すが、オスカルはいなかった。

「オスカルなら、さっきの実験の結果を分析するとかでパソコン片手に自室にこもったぞ。…そういえば、結果について話があるとか言ってたな。」

「は、話って？」

「オレが知るか。」

リボーンはそっぽを向いてコーヒークップに口をつける。
その素っ気なさにツナはため息をついた。

「……む、」

ぴよこ、と眠っているプロメッサの耳が動き、すぐにまぶたをあげた。

勢いよく起き上がり、きよろきよろと辺りを見渡して長い尻尾をゆらゆら揺らした。

「…ど、どうしたのプロメッサ？」

「綱吉、オスカルが呼んでるよ。」

オレンジの瞳を前足でこすりながらプロメッサは告げた。

それにツナは目を丸くする。

「…今、なんて？」

「だから、オスカルが綱吉のこと呼んでるよって。」

ツナは言葉を失った。

トンノも言葉を失った。

リボーンは相変わらずの無表情で顔をこちらに向けた。

「な、なんでオスカルさんが呼んでるってわかるの!？」

「犬に人の思考が分かる能力なんてあったの!？」

「あるわけねえだろ。」

リボーンが間を開けずに混乱するトンノにツッコミをいれた。

それを見てプロメツサは微笑み、口を開く。

「私にもよく分からないんだけど、オスカルと意思疎通ができるみたい。さっき気付いたの！」

姿勢良く座り、嬉しそうにプロメッサは尻尾を振る。

意思疎通、つまりテレパシーだ。

おそらく、実態化して大空属性になってからその力が生まれたのだろう。

「プロメッサ、それは誰にでもできるのか？」

「多分ね！」

リボーンの問いに、プロメッサは嬉しそうに答えた。

(∵ 予測がつかねえな。大空属性とツナの持つ能力が合わさると、)

一体何が生まれるのか。

一体何が出来るのか。

一体何が起こるのか。

それは予測不可能な掛け合わせ。
不思議な能力が作り上げる奇跡とも言えるだろう。

「…夢中になるはずだ。」

「何が？」

突然怪しく笑い出したリボンを見て、ツナは不審なものを見るような目を向けた。

それが癩に障り、リボンはひとまずツナの頭を殴っておいた。

（未知の可能性を持つ能力だなんて…誰もが興味を持つだろうな）

目の前で頭をおさえ痛がる少年を、赤ん坊はオスカル同様に好奇心を抱いた。

「あ、綱吉くん！」

プロメッサに連れられ、ツナたちはオスカルの自室にやって来た。

自室と言っても、複雑な機械が多く置いてあり、片隅にベッドがぽつりと置かれていただけだ。

実験室とさほど変わりはないように見える。

「オスカル、分析は終わったのか？」

「ああ、終わったよ。」

回転式の椅子をまわし、満面の笑みでオスカルは頷いた。

手元にある紐をひくと、目の前に大きなスクリーンがあらわれた。

「ほら、そこに座って！」

柔らかそうなソファに促されると、ソファの前には会議室にあるような長い机があり、その上には何やら資料のようなものがあった。

全員が席についたのを確認すると、オスカルはプロメッサを肩に乗せ、パソコンを操作しはじめる。

「…さて、はじめるよー!」

部屋の電灯が消され、スクリーンに画面が浮かび上がる。

午後三時、能力分析についての会議がはじまった。

標的135 プロメッサの能力（後書き）

久しぶりの更新となりました。

遅くなって申し訳ございません…！

忙しすぎて、寝不足で小説がまったく書けませんでした。

まだ県大会もあるので、更新できない日があるかもしれません。

暇が欲しいです（・ - ・ ;）

いつにも増してぐだぐだな文章でごめんなさい！

早く技を出したい……………

読んでいただきありがとうございました！

標的136 会議

一言で言うなら、驚いた。

それしか言葉が出てこない。

しばらく、画面に見入ってしまった。

全身に鳥肌がたったよ。

ほら、よくあるじゃない。

感動すると鳥肌がたつあれだよ。

とにかく私は感動したんだ。

身体が震えて、しばらくパソコンをまともに操作できなかった。

tesoro nascosto (テゾーロ ナスコスト) 同様に、興味をもてる。

さて、この結果から何が生まれるだろうか。

薄暗い部屋に映し出されるスクリーン。

ツナたちは浮かび上がる画面を見入る。

スクリーンの傍でオスカルがパソコンを操作し、プロメッサが手元の資料をオスカルの操作に合わせるようにめくる。

もはやプロメッサはオスカルの助手ではないだろうかと思うほど、プロメッサの作業はオスカルの動きに合っていた。

「なんだあの犬…」

「ただの犬じゃないのなー」

獄寺がプロメッサの動きの俊敏さに呆気にとられ、山本は驚きながらも感心している。

「すげえなあ、あの犬っころー!」

「リーダー、君まともに名前呼べないの？」

大口を開けて拍手を送るリーダーの呼び方に、トンノが指摘するが、リーダーは「気にするな、気にするな」とトンノの背中をぽんぽん叩いた。

「ちよ、そんなに騒いだらtesoronascosto（テゾーロ ナスコスト）の三人が起きちゃうよ！」

トンノが翼でリーダーの頭をぺしんと叩く。

疲労で眠っているシクロとシスイ、セブラーノは机に置いたクッションの上ですやすやと寝息をたてていた。

「すまねえな」と叩かれた頭をさすりながらリーダーは笑顔で謝罪した。

それをよそに、ツナは資料に釘付けになっている。

自分の戦闘力やら能力やらがまとまっているのだ。

見入ってしまうのは当たり前だ。

そんなツナに気付き、リボーンがにやりと笑った。

「なんだ、そのかたい表情は」

「な、なんか…複雑じゃない？自分のデータが資料としてまとまってるなんてさー…」

少し分厚い資料を指差しながら、ツナは苦笑いをする。

「まあ、確かにな。」

戸惑いを見せるのも仕方ない、とリボーンも資料を見る。

一枚めくれば、今回の実験の用途についての説明が紙いっぱいにかかれてあった。

おそらく、そのページを見ればツナは「うげえ」とか言って嫌な顔をするだろう。

だが、このページは読まずにとばしたのだろうか、ツナは「うげえ」とも言わないし嫌な顔もしていなかった。

「えーっと、まずは今回の実験結果を見てもらうね」

オスカルが目配せをして、スクリーンをかえる。

映し出されたのは、オレンジの炎と数字だった。

「実験中、綱吉くんの炎を検出させてもらったんだけど、純度は申し分ないね。八割は高純度だよ。」

「それと、」とオスカルがキーボードのエンターキーを押すと、オレンジの炎が勢いよく燃えだした。

「オスカル、それはなんだ。燃える勢いがすごいが。」

「これは綱吉くんの炎の最大FVファイアンマホルテージを圧縮させてあらわしたものだ。今回の実験での最大FVは36万FV。でも、おそらく綱吉くんの炎の最大FVはこんなものじゃない。」

真剣な面持ちで、オスカルが資料をめくった。

「これは私の推測だが、…ディスプレイに操られていたウライラを浄化させたときの炎は…おそらく、67万FVだ。」

「ろく…!？」

ありえない数字にツナがあんぐりと口を開けた。

まさか、そんなことはないだろう。

そう思っつてツナはオスカルを見るが、オスカルは事実には満ちた表情をしていた。

「なんでそんなことがわかるんだ？」

「あくまでも予想だから、絶対とは限らない。もしかしたらもつと数値が高いかも知れないんだ。だが、私のパソコンで分析した結果はこの数値だ。確かな数値はこれから出していくんだよ。」

「じゃあ、なんで今回数値を出したんですか？」

これから確実な数値を出していくのだから、今のこの数値はいろいろなのではないだろうか、とツナは思った。

だがそんなツナの腕をリボーンの小さな手が捻る。

「いてっ、いててててて!!!!」

「馬鹿かおめえ。ある程度の数値を出しておかねえと目標も何も考えられねえだろ。」

右腕だけでなく、左腕までも負傷させる気か。

容赦のないリボーンの力にツナはそんなことを考えた。

「今回はちゃんと目的があるんだよ、綱吉くん。」

「も、目的…?」

捻られた腕をさすりながらツナは首を傾げる。

オスカルは頷き、リボーンはにやりと笑った。

「今回、新しい技を生み出すためにこの数値を出したんだよ、綱吉くん。」

より、強くなるために。

新たな技を作り上げるんだ。

標的136 会議（後書き）

やっと…やっとだ！

やっと新技について触れることができました！

楽しみで仕方ないです（＾Ｏ＾）

てか、未来編終了時のツナさんの炎の最大FVってどれくらいなん
でしょう？

メローネ基地では25万FV、チヨイスのときは30万FVくらい
あった気がします…。

今回小説に出した数値が、何故か少ないように思えました。

今日は県大会です。がんばってきます！

読んでいただきありがとうございました！

標的137 新技企画

「新…技……？」

「そつだよ、綱吉くん」

ぽかんと口を開けるツナにオスカルは笑顔で頷く。

「君、今どんな技が出来る？」

「…えつとー、」

ツナは首を傾げて考えるしぐさをする。

ツナが今使える技は、

死ぬ気の零地点突破（だがこれはダメージが大きいので使うことはないだろう）

死ぬ気の零地点突破・改（応用として白刃取りがある）

死ぬ気の零地点突破・初代エディション

ファースト

X BURNER

X BURNER AIR

X BURNER

ハイパーイクスプロージョン
超爆発

Xストリーム

あとはボンゴレ匣のナッツの形態変化によるビッグバンアクセルやバーニングアクセルなどがある。

「…これくらい、かな」

だいたいの名前はあげただろう。
ナッツの形態変化によるマントは武器であるだろうからツナは技には入れなかった。

他に忘れているものはないか、とツナが再び考えようとする。オスカルが「うーん」と唸りだした。

「…ど、どうかしたんですかオスカルさん」

眉間にしわを寄せてうなるオスカルに、何かまずいことを言ったのではないかとツナは心配になる。

すると顎に手をあてて、オスカルはパソコンを操作しはじめる。

すぐに画面が変わり、スクリーンにツナが今言った技の名前がずらりと並べられていた。

「前綱吉くんに質問したときの技についてのデータなんだけどね、なにか…こう、ぱっとしないんだ」

「ぱ、ぱっとしない?」

ぱっとしない、とはどの意味だろうか。

冴えない、ということだろうか。

隣では獄寺が「十代目の素晴らしい技がぱっとしねえとはどういうことだ!」と叫び立ち上がったので、ツナはますます心配になる。

「…なにかさ、ほとんどのものが体力を大量に消費したりするじゃ

ない？」

「……そういえば……」

「確かにオスカルの言うとおりだな」

オスカルの言葉にツナモリボーンも頷く。

「体力の消費が激しいと、長時間の戦闘も無理だし、身体に負担がかかって危ない。だから今綱吉くんが使える技を……すべて連続で使ったら、間違いなく綱吉くんは倒れるよ。いくら戦闘の経験があったとしてもね。」

「……まあな。体力の消費が少ない攻撃方法は肉弾戦くらいしかねえしな。」

オスカルの意見を肯定するように、リボーンが補足をする。

「だから、体力の消費が少ない、かつ使える技を編み出したいと私は考えたんだよ」

ちらりとオスカルがプロメッサに目配せをすると、プロメッサはオスカルに代わってパソコンの操作をしはじめる。

それに欠伸をしていたリーダーが驚いて、欠伸をしたままぴたりと固まってしまった。

「ははっ、おっさん顎はずれたのか？」と山本がリーダーの肩を叩きながら笑う。

そんな二人はさておき。

画面が変わり、あらわれたのはまたしても大空属性の死ぬ気の炎だった。

「綱吉くん。大空属性の炎は“調和”の力があつたね。」

「は、はい…。」

質問をされ、ツナは怖ず怖ずと返事をする。

「“調和”は、ばらばらなものをひとつに纏める。それを少しひねれば、自分に合わせることができるとことだと考えることができる。

だから上手くいけば敵の力を封じたりすることができるってわけだ。

「

あまりオスカルのことかわからずツナは首を傾げるが、リボンは理解したようでありと笑う。

解^げせないツナ達（特にツナと山本とリーダー）を見て、オスカルは苦笑いをして説明を加える。

「だからね、敵の力・攻撃を封じる…防衛しながら攻撃も出来るようになると思うんだ。」

「おお、なるほどな！」

山本とリーダーの声が見事合わさった。

だがツナは納得しないような顔をする。

「どうした、ツナ」

「…あ、の、さ、」

腑に落ちない表情のツナは戸惑いながらも話しはじめる。

「防衛しながら攻撃する…っていうのは、わざわざ新技を作らなくてもできるんじゃないかなって…」

「どうして?」

「オレの匣兵器の…ナッツに、防衛モード（モード・ディフェンザ）があるし…大丈夫だと思うんですけど………」

ツナは自らの指に嵌められたライオンの形をした指輪を見せる。

すると指輪…ナッツが「ガオツ」と鳴き、まばゆいほどの光を放ち指輪から小さなライオンへと姿を変えて現れた。

「おおっ!」

突然現れたライオンにオスカルが驚いて声をあげる。

机の上でびくりと怯えたナッツをツナが抱き抱えた。

「あの…こいつがナッツで……オスカルさん見るの初めてでしたっ

け？」

「声を聞くのは初めてだよ！」

オスカルは目を輝かせてナッツを凝視する。

びくびくと震えるナッツはオスカルに背を向けて恐る恐るオスカルの顔を見ていた。

「…この子についてはおいおい調べさせてもらうことにして、」

こほん、とひとつ咳ばらいをしてオスカルは再び話をする。

「この子の…防衛モード（モード・ディフェンザ）があるから防衛の技は大丈夫って言ったよね？…でも、もしこの子が怪我をしたりしたらどうなる？君は体力の消費が激しい技でかわすか、肉弾戦で身体に衝撃を受けて流すか…逃げるなんてできないだろう？」

「…そっか……」

「だから、ちゃんとした防衛の技もあったほうがいいと思うんだ」

オスカルの意見を聞き、ツナは確かにそうだと納得した。

頷いたツナを見て、オスカルは真剣な表情から柔らかい表情へと変えた。

「…では、聞かせてくれないか？」

スクリーンを消し、オスカルは腰掛ける。

「綱吉くんの、意見をね。」

標的137 新技企画（後書き）

県大会、無事奨励賞をいただきました。

安心して帰宅したらずぐ寝ました。なので更新ができませんでした。

…ごめんなさい！

今回…終わりがたがわからず中途半端におわらせてしまいました。

最近前よりさらに上手く文が打てなくなりました。

スランプでしょうか！？

…ひとまず書き続けましょうか。

新技、と考えるだけでわくわくしますよ！

読んでいただきありがとうございました！

標的138 意識内の会議

ざわざわと木々が揺れる。

真っ暗な部屋の中、「すびびびー」という寝息が聞こえる。

少し寝苦しさを感じつつ、ツナは真っ直ぐ天井を見つめていた。

そしてひとつ、ため息をつく。

「……新技、かあ……」

「綱吉くん、君の意見を聞きたい」

「…意見？」

「そう。新技についての、君の意見だよ」

そんなこと言われても、とツナは戸惑ってしまふ。

今まで新技だなんてこれっぽっちも考えてなかったのだ。

それも、防衛の技など。

今のままで充分だと考えていたのだ。

「……………えっ……………」

ツナが吃っているのを見て、オスカルは「ふっ」と微笑んだ。

「…急に話をふってごめんね。」

……………明日、もう一度聞くから。
それまでに、考えてくれないかな。

「はぁー」

寝返りをうち、壁と真っ正面になる。

「わかんないよ……」

そんな、何も考えていなかったのに。

オスカルは「また明日おいで」と言った。
だから、明日オスカルの場所に行くまでに考えなければならぬのだ。

…けれど。

「…眠くて、考えてられな」

ツナは睡魔に導かれるまま、ゆっくりと目を閉じた。

「ナ、……ツナ……」

「……んー……」

「ツナ、起きて……」

自分と呼ぶ声に誘われるまま、ツナは目を覚ます。

広がるのは、視界いっぱいの大空。

そう、ツナの意識の中である。

「ツナ、起きた？」

「…徳松」

ツナの寝転ぶ隣には、徳松が座っていた。
額に炎を燈らせ、ツナが徳松の名を呼ぶとにっこりと微笑んだ。

「徳松、もう大丈夫なの？」

「ああ、しばらく休んだら少しは良くなった。まだ実態化はできないがな。」

昼間、病み上がり同然である徳松は力を使いすぎてしまった。

だから意識の中で深い眠りについていたのだ。

まだ完全に回復したわけではないが、意識の中だけでは動けるようになったのだろう。

「…ツナ、お前新技のことで悩んでるんだろ？」

「えっ！？なんで寝てたはずの徳松が知ってるの！？」

「オレはツナ有能力、つまりツナの一部だからな。ツナの考えてることは自然とわかるんだよ」

へえ、とツナは思わず声を上げる。

徳松はあぐらをかいてツナに悩みを口に出すことを促した。

「戸惑ってるんだろ？」

「……うん。突然、新技だなんて…今までそんなこと考えてもなかったしさ…」

ツナは体操座りをして、腕の中に顔を埋める。

「確かに今まで防衛の技って言ったたらナッツの形態変化カンビオ・フォルマくらいしかなかったし…避ければ大丈夫だと思ってたからさ」

死ぬ気の炎であれば凍らせることもできる。

それにX BURNERで攻撃を掻き消すこともできるはずだ。

だがそれは体力の消費が激しい。

確かにオスカルのこととおりなのだ。

「どんなのがいいのかわからないよー…」

腕に顔が埋まっているのでツナの声がくぐもっている。

「うーうー」と唸っているツナを見遣り、徳松は口を開いた。

「…ツナはさ、実験でプロメッサと戦ってたとき、どうだった？」

「どうだったって？」

「プロメッサの攻撃を受けて、傷を負った。…それで充分わかってるんじゃないのか？」

“どんな防衛技が必要であるかを。”

「……徳松は、なんでそう言えるの？オレがわかってるか、なんて」

自信ありげに悟る徳松にツナは問う。

「またも徳松は当たり前のように答えた。」

「言っただろ？オレはツナの一部だから、ツナの考えてることはわかるって。」

徳松はツナ有能力、つまりはツナの一部。

先程徳松はそう言った。

ツナの一部であるから、ツナの考えていることは自然とわかると。

「冷静に考えてみれば、答えが出てくるよ。…オレも、一緒に考えるからさ。」

ぼん、と徳松の手がツナの背中を軽く叩いた。

ツナは目を丸くしたが、徳松の笑顔を見て表情が綻ほころんだ。

「そつえば、明日もオスカルの所に行くのか？」

「…うん。実験とか会議とかしてたらあつという間に夕方になつちやつて、もう遅いから明日にしようつてことになつたんだ。」

会議が終わつたのは、夕方の5時。

このまま会議を続けたら真夜中になってしまうだろうということで一
時帰宅ということになつたのだ。

「それと…リボーンの提案で、夏休みはオスカルさんの研究所で新
技の開発とかするみたい」

「…やる気だな、リボーンのやつ」

はあ、と二人同時にため息をつく。

夏休みまであと数日。

せつかくの長期の休みまでもりぼーんに振り回されるのかと思つて、
憂鬱で仕方がなかった。

標的138 意識内の会議（後書き）

思うように更新ができません。

時間がない、文章を書く力がさらに劣ったのが理由です。

書きたいのに書けない…辛いです。

読んでいただきありがとうございます！

標的139 悩み解決

意識の中、ツナは徳松と沢山会話をした。

それはほとんど新技についての話題だった。

夢と同じように、意識内では時間の感覚はない。

一瞬のように思えたり、とても長い時のように感じる。

今回は後方で、どれくらい時間が経ったのかわからないほど徳松と話していたのだ。

だから、起きるべき時を覚えてくれたのは徳松だった。

「ツナ、そろそろ起きる時間だ」

「えっ、今何時!？」

「朝の七時半。オスカルの所へは九時に行くとき言ってただろ？」

ツナは思わずあたりを見渡す。

だがまわりは変わらずの天空。

ここは朝も昼も夜も関係ないのだろう。

確かにツナが眠ったあと、自然と意識の中へ誘いざなわれるが、いつも大空は明るい。

意識内の大空が暗かったことはない。（過去に一度真っ暗闇になったことはあるが。）

「じゃあ起きようかな」

「ああ。オレはもう少し休んだら実態化できるだろうから、オスカルの研究所で」

「うん。ありがとう徳松」

ツナは笑顔で徳松に礼を述べた。

すると、ふわりと身体が軽くなり、ツナは目を閉じた。

浮遊感がなくなり目を開けると、そこはいつもの自分の部屋だった。

ちらりと目を向けると、ハンモックはもぬけの殻。

どうやらすでにリボーンは起きているらしい。

ベッドから抜け出し、机の上を見ると三人の小人がすやすやと眠っていた。

シクロとシスイ、セブラーノは全く起きる気配がない。

（そういえばオスカルさんが数日は起きないだろうって言ってたな…）

セブラーノの気配を感じ、シクロとシスイは瞬間移動をし、セブラーノは長い封印から目覚めた。

シクロとシスイが瞬間移動のため、セブラーノが封印から目覚めたばかりのため、疲労で眠っているのだという。

試しにツナが三人の小さな頭をつつくが、まったくびくともしない。

しばらく三人にちよっかいをだしていたツナだが、下から奈々に名を呼ばれたため一階へと降りていった。

「ツツ君、夏休みに合宿するんですって？リボン君から聞いたわよ」

「ご飯をよそいながら奈々はツナに問う。

突然の問いに戸惑いながらも、ツナは適当な相槌をうつ。

「獄寺くんたちも一緒の勉強合宿なんですよ？この前のテストの結果もいつもより良かったし、最近ツツ君頑張ってるわね！」

「ま、まあね……」

嬉しそうな奈々の言葉から、嫌な出来事を思い出す。

ツナがオスカルの研究所へと出向くのは期末テストの結果がノルマに達していなかったからである。（精一杯の努力をしたつもりだった。）

だがセブラーノを見つけることができたり、怪我を負ったがプロメ

ツサに出会えたりと、嬉しいこともあった。

だから今回、テストのノルマを達することができなかったのも良かったのかも知れないと思いはじめているツサであった。

朝食を食べ終え、ツサは自室に戻り準備にとりかかる。

あとからトンノがついてきて、机の上の小人たちを見下ろしていた。

「この三人はどうするの？」

「オスカルさんが数日は目覚めないって言ってたから、このままゆっくり休ませてあげようかなって」

トンノは「ふうん」と言いツサの準備が出来るまで三人の小人の傍に座っていた。

まったく目を覚まさないので心配になっているのだろう。

まるで親鳥のようなトンノを微笑ましく見ていると、ピンポンとチャイムが鳴った。

すぐに奈々が玄関の扉を開けたのだらう、獄寺と山本の声が元気よく聞こえた。

急いで階段をおりると、朝から元気な二人と「おはよう」と挨拶をかわす。

「準備はできたか」

リボーンがツナの頭に飛び乗り、バサバサと羽ばたく音をたててトンノもやって来た。

ツナは頷いて奈々に「いつてきます」と声をかけて家を出た。

誰にも見られないように人気ひんげのない並盛神社でトンノは巨大化し、ツナたちを乗せてオスカルの研究所へと向かう。

大きな翼が風を切り、美しい毛並みがキラキラと輝く。

ふわふわなトンノの背中で到着を待っていると、ふいにリボーンがツナに話しかけた。

「ツナ、新技はどうなったんだ」

「…徳松と話をして、なんとか考えてはみたんだけど、オスカルさんがどう思うかなって」

ツナの答えにリボンがふん、と鼻を鳴らす。

そしてぺちんと軽く頭を叩かれた。

「オスカルがどう思うかは置いてけ。おめえの考えがまず大切なんだ。」

「そうですよ十代目！オスカルの野郎が十代目の案を否定したらオレが果たしてやりますから！」

「大丈夫だって。ツナと徳松が一生懸命考えたんだから誰も否定なんかしねえのな！」

獄寺の「果たす」に危険を感じたツナだったが、三人の言葉で安堵した。

(…多分、大丈夫だよな。徳松も一緒に考えてくれたんだし。)

少し不安を抱えつつも、ツナたちはオスカルの研究所に向かった。

標的139 悩み解決（後書き）

タイトルは無視で！（笑）

昨日更新しようとしたら寝てしまいました。
気付けば朝の8時。ガーン。

しかも書き途中でした。ガーン。
どちみち更新できなかったですね。

わたしの頭の中は新技コールが！

わくわくわくわくわくわくわくです！

だがしかし、文才がないのでせっかく考えていただいた素敵な技を
披露しきれないのでしょね。

残念すぎて泣けます。

シクロ、シスイ、セブラーノを早く起こしたい。
結加ちゃんとロンジさんを帰国させたい。

だが小説の進みが遅い！（泣）

もう終業式とかすっ飛ばしてやります。
一気に夏休みにしてやります。

テストの終わった時期が一緒だったのに小説内ではまだ夏休みに入っていないとか！

時間の狂いですね。

では、毎日更新復活を目指してがんばります！

読んでいただきありがとうございました！

「あつ、いらつしゃいー!」

長い長い地下へと続く階段を下り、扉を開けるとオスカルとプロメツサが出迎えてくれた。

「お、おはようございます」

「おはよう。疲れただろう?」

「オレは疲れてませんが、トンノが少し…」

ツナは腕の中でへばっているトンノを見遣る。

長い距離を、朝にもかかわらず炎天下の中何人も背中に乗せて飛んだのだ。

へばるのも仕方がない。

「トンノ大丈夫?」

「…大、丈夫…かなあ……」

トンノは途切れ途切れに答えるが、その様子は「大丈夫」とは言い難い。

翼はだらりと広げられ、頭と尻尾の炎は弱々しく燃えている。

瞳は虚ろで、如何にも具合が悪そうだ。

「暑さにやられたんだね…。プロメッサ。」

トンノの様子をうかがい、オスカルはプロメッサに声をかける。

するとプロメッサは了解したように動きだし、炎をひときわ大きく燃え盛らせた。

燃える炎に呼応するようにプロメッサの身体が大きくなっていく。

だが、実験のときの大きさではなく、大型犬ほどの大きさに変化した。

「お、大型犬？」

「まさにただの犬だな」

ツナとリボーンの言葉に苦笑いしながらも、プロメッサはトンノを背中に乗せて部屋をあとにした。

「プロメッサはどこへ…」

「治療室だよ。あの子は優秀だから看病もしてくれるよ。…さて、」

オスカルの声がかすかに変わる。

その変化を感じ取って自然とツナは息を呑んだ。

「…新技は、どうなったのかな？」

本題に乗り出し、オスカルは問う。

その場にいた誰もがツナに視線を向けた。

「どうなんだ、ツナ」

「…え、っと…」

リボーンにも問われ、ツナは思わず吃くもってしまふ。

どう説明していいのかわからず、ツナは急いで話そうとするが上手く言葉を紡ぐことができない。

おろおろしていると、突然ツナの心がふわりとあたたかくなった。

“慌てるな、ツナ”

声のした瞬間、ツナの目の前にオレンジ色の炎があらわれた。

それはすぐに小さな人の形となり、そして額に炎を燈す人間となった。

「あ、徳松……」

意識内で行ったとおり、徳松が姿をあらわす。

徳松はツナの肩に降り立ち、「おはよう」と言った。

「……なんで徳松くんが？」

「オレもツナと一緒に新技を考えた。そしてオレはツナ的能力だけ

らな。」

「そうだね。じゃあ、どんなのか聞かせてくれる？」

オスカルは納得し、ツナたちにうながす。

ツナが徳松の顔をうかがうと、徳松がふわりと浮いた。

「ツナ、ハイパー化して」

「う、うん……」

徳松に言われ、ツナはミトンの手袋をはめて死ぬ気丸をふたつ服用する。

するとツナの額に炎が燈り、手袋はグローブへと変化する。まぶたを上げれば瞳は琥珀色から朝焼け色へと変わった。

「あ、実際にやってくれるのかい？」

「…説明するよりも見せた方がいい」

簡潔にツナが答えると、徳松に目配せをする。

それに徳松が頷くと、徳松は両手をかざして炎を放出した。

ポウウウッ

燃え盛る音をたてながら、その炎は姿を変えていく。

「な、なんだあれは…」

「形が変わってくのな…」

獄寺と山本が啞然としながら姿を変えていく炎を見つめる。

リボーンは何も言わず、オスカルは興味津々でまばたきもしていない。

誰もが注目する中、炎は揺らめき変化する。

そして、徳松の放った炎は鳥の形となった。

「徳松、それはなんだ」

「炎を鳥の形にただけだ。所詮は炎。だがオレの意思で動かすことができる。」

徳松の言うことに従うように、炎の鳥は火の粉を落としながら飛び回る。

その速度はどんどん上がり、目で追うのも難しいほど速いものになった。

「…どうするんだい？」

「…見てればわかる」

徳松はツナから離れてオスカルの肩に座る。

炎の鳥は広い部屋を素早く飛び、まるでツナを挑発するようだ。

ツナは、ひとつ息を吐き、グローブから炎を噴射させて飛び立った。

(…追いつくか?)

試しにツナは炎の鳥を追う。

だが炎の噴射を強くさせても、炎の鳥には追いつけなかった。

「さすが、徳松だ」

ふ、と笑みを浮かべツナは徳松を見遣る。

炎の鳥の飛ぶ速度は徳松が操っている。

これほど速度が速いということは、例えオスカルたちに見せるだけのことであっても本気でやれと言っことだろう。

ぐっ、とツナは右手に力を込める。

昨日負った傷が痛むが、利き腕である右の方が使いやすいし炎をコントロールしやすいので痛みに耐えるしかない。

ツナは目を閉じ、耳を澄ます。

周りを羽ばたく音と、炎の燃える音だけが耳に届く。

そして炎の鳥の気配だけに集中する。

目で追うから、惑わされる。

それならば、視界をなくせばいい。

目に見えるものと、耳に届くものがさらに己を混乱させる。

それならば、どちらか片方を遮ればいい。

耳を澄まし、気配を感じ取る。
心を落ち着かせ、空気を吸う。

パチンッ

「！」

気配をとらえた。

超直感が働き、完全に炎の鳥の気配をとらえた。

ツナは右手を前にかざし、さらに気配に集中する。

気配を真つ正面に感じ取った瞬間、掌から炎を放った。

バシユンツ

「ギャギャツ！」

ツナの放った炎はとぐろを巻くように炎の鳥を捕らえる。

それはあまりにも一瞬のことでリボンたちは啞然としていた。

「ギャギャギャツ！」

炎の鳥が逃げだそうと暴れだした。

その暴れる様を見て、炎の鳥を縛り付ける炎が解かれてしまうのではないかと誰もが危惧する。

だが、それは無駄な心配であった。

…パキ、

「ギャギャッ！」

パキパキパキパキ

「炎が…」

「…石になつてく………」

パキパキパキパキパキパキパキパキ

パキン！

とぐるを巻いていた炎は石へと化した。

炎の鳥の身体にしっかりと巻き付き、身動きもできないようだ。

石化した炎に巻かれ、炎の鳥は逃げることを諦めてうなだれていた。

炎の鳥を捕らえる石化した炎はロープのようにツナ的手中に収まっている。

ツナは炎を引いて地面に降り立ち、オスカルたちに向き直った。

「…こういう技、なんだが…オスカル？」

なおも唾然とし続けるオスカルにツナが声をかけ、掌をオスカルの目の前でひらひらと振る。

はっ、と我に返ったオスカルはたちまち目を輝かせ、ツナに問うた。

「つつ、つつつつ綱吉くん！いい今のはなんだい!？」

オスカルの勢いにツナは思わず後ずさる。

だが流石はハイパーモード。

冷静さは保ったままである。

「…大空属性の“調和”による石化で相手の動きを封じるんだ。—
応、防衛だと思っただが……」

「“調和”による石化か…いい案だね。」

オスカルは何度も笑顔で頷く。

そしてツナの言葉をパソコンではなく紙にまとめていく。

ふと、オスカルの手が止まった。

「そういえば、技の名前はあるの？」

「……あるが……」

ツナも忘れていたようで一瞬黙ってしまった。

少しの沈黙のあと、ツナは口を開いた。

「Barbazzale di Cielii」
バルバツァーレ・デイ・チエーリ

Barbazzale di Cielii。
バルバツァーレ・デイ・チエーリ

日本語で、「大空の拘束」。

「Barbazzale di Cielii……かあ……」
バルバツァーレ・デイ・チエーリ

「ツナにしては考えたな」

「徳松が一緒だったから……」

ツナが微笑むと、徳松は頷きツナの肩に飛び降りた。

そして徳松が指をパチンと鳴らすと、ツナの石化した炎で拘束されていた炎の鳥は火の粉を散らして消えた。

「相手を拘束し、そこで更に技を加えることもできる。ただしこれは応用だな。」

ふう、とため息をついて徳松は伸びをする。

「…それと、」

思い出したように、徳松が付け足す。

「一応まだ、もうひとつある」

機嫌がとてもいいゆか空です。

やっと、やっとやっとやっと！

新技を出せました！

いつも感想を書いてくださる方が考えてくださったものです。
名前はわたしが考えさせていただきました。

わたしにはない素敵な発想で大変助かりました。
本当にありがとうございます！

さて、最後に徳松さんが「もうひとつある」と言っていましたか……
これはわたしが考えたもので、過去にひっそり(?)出てきてます。

もうお気づきの方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

そっだ、ここで付け足しを。

今回の話を読んで、

「あれ……リーダーいない……」

と思った方…いますか？いないような気が（笑）

残念ながら…彼は来てません。

理由はくだらないので…後に本編で書きますが、本当にくだらないのです。

今回はいつもより長くなりました…疲れた。

毎日更新…するぞ！

読んでいただきありがとうございます！

標的141 Baluardo di Cielì (バルアルド・ディ・チエー

「一応まだ、もうひとつある。」

「もう、ひとつ?」

見事オスカルたちに新技を披露することができたツナと徳松。

相手の動きを封じることができるBarbazzale di Cバルバ
ツッアーレ・ディ・チエーリielìを見て満足したオスカルだったが、徳松の言葉に「まさか」と疑ってしまう。

1751

「もうひとつって…防衛技が?」

「ああ。…まあ、たいしたものではないと思うが。」

ツナの肩に乗っている徳松が腕を組んで言う。

「たいしたものじゃないわけないだろ。」

徳松の言葉をツナが否定する。

もうひとつの防衛技がどのようなものかも分からないリポーンたちは肯定も否定も出来ない。

「とにかく、見せて…くれる?」

「あ、…ああ。」

「…わかった。」

静かに言い争いをするツナと徳松をオスカルが制止した。

ツナと徳松は我に振り返事をする。

「…徳松。」

ツナが名を呼ぶと徳松は目を閉じ、火の粉を散らして消えた。

「え!? 喧嘩してどっか行っちゃったの!？」

「…違う。意識内に戻っただけだ。そもそも喧嘩なんかしてない。」

徳松が消えたことを喧嘩のせいだと勘違いしてオスカルは焦るが、喧嘩でなくただの言い争いをしていただけのツナは冷静ながらも訂正をした。

意識内でも徳松が「喧嘩などしてないのにな」とくすくす笑っている。

「いいからさっさとやってみろ、ツナ。」

リボンが急^せかし、ツナは短く返事をしてまぶたを閉じる。

「…頼む、徳松」

“了解”

徳松の答えの後、再び心があたたかくなる。

胸の奥から、なにかが込み上げるような、沸き上がるような感覚に襲われる。

襲われるという言い方はおかしいかもしれないが、その言葉が一番当てはまるとツナは思った。

頭や指の先や、身体の隅々までがあたたかくなっていく。

額の炎が、せわしなく揺らめきはじめた。

ブワアアアッ

「うおっ!?!」

突然の熱風にオスカルがおかしな声をあげる。

あまりの風の強さにリポーンたちは腕で顔を庇い、足を持っていかれまいと耐えた。

ヒュウウウウウ……

すぐに熱風は弱くなり、そつとまぶたを上げる。

「…お。」

「……え、あれって…」

ぱちくり。まさにその音が合つたろう。
オスカルは大きくまばたきをする。

獄寺も山本もぱちぱちと目をまばたかせる。

リポーンはにやりと笑って満足そつに鼻を鳴らした。

かすかに風が吹く中、ツナは佇んでいた。

そしてそつと、まぶたをあげる。

「…成功、したみたいだな」

ツナは安堵したような、それでいて嬉しそうな表情になった。

“ なんとかな。効力も大丈夫だと思うが。 ”

ふう、と安心したようなため息をついて徳松は言う。

何が起きたか、もうお分かりであるだろう。

ツナの身体は、炎に包まれていた。

そう、実験のときと同じだ。

「技の名前は、B a l u a r d o d i C i e l l i。日本語で“大空の防壁”これは徳松が考えた。」

「…これは、どういう効力があるんだい？」

「これも、大空属性の“調和”を利用したものだ。身体を炎で覆い、“調和”で攻撃や痛みを和らげることができるんだ。…だが、これには弱点がある。」

「……弱点？」

まゆをひそめ、ツナは小さく頷く。

「…これは、徳松に負担がかかるからあまり長くはできないんだ。頑張ったとしても、今は五分ほどだと徳松は言っていた。それに、成功するのはごく稀らしい。」

「まだ使いこなせはしないってことか…」

オスカルは顎に手をそえ、唸りながら何やら考え出す。

「どうしたオスカル」

「ん…いや、使える技だが弱点があると…うーん、負担があるし失敗することもあるのか…」

ぶつぶつと独り言をつぶやき、しばらくしてオスカルは顔をあげた。

「…綱吉くん、徳松くん」

名を呼ばれ、ツナはまっすぐオスカルを見つめる。

徳松も意識内を出て実態化して現れた。

そして、オスカルは真剣な声で二人に告げた。

「少しでも弱点を克服して、いつでも成功できるように、その時間をのばせるようにしないかい？」

標的141 Baluardo di Cielii (バルアルド・ディ・チエー

今回はわたしが考えさせていただいた技です。

技と言えるかわかりませんが。

しかも一度小説に出てきていた(笑)

利用してしまいましたよ。ごめんなさい。

Baluardo di Cielii

バルアルド・ディ・チエーリ

と

Barbazzale di Cielii

バルバツァーレ・ディ・チエーリ

…似てる(笑)

ややこしいですね…ごめんなさい。

今日から補習が再開します。

めんどくさいです。

でも頑張ります。

毎日更新完全復活したいです。

読んでいただきありがとうございます！

標的142 弱点

「少しでも弱点を克服して、いつでも成功できるように、その時間をのばせるようにしないかい？」

「…克服？」

オスカルの提案にツナと徳松は首を傾げる。

弱点を克服する。だがしかし、どのようにして？

「今聞かされたから、まだ方法なんかは考えてないんだけど…その技は使える。だから少しでも弱点を克服できれば、それは大きな力となると思うんだ。」

「まあ、何がどうであれ弱点を克服するに越したことはねえだろうしな。」

オスカルの言葉を肯定するようにリボンが続く。

確かにそうだろう。

Baluardo di バルアルド・ディ・チエーリ cieliは敵の攻撃を弾いたり、傷の痛みを和らげる効果を持つ。

それを使いこなせればお構いなく敵を攻めることができるのだ。

ある意味、無敵になれると言うことだろう。

「君たち、成功するか失敗するかって言ってたけど、なんでそんなことわかるの？」

「…夜、意識内で試してみたんだ。だが五回中二回しか成功できなかった。」

「オレだけに負担がかかるんじゃない。ツナの身体にかなり負担がかかる。」

ツナと徳松は無表情であるが疲れた様子で言った。

ツナが眠ったあと、ツナは意識内で徳松と新技について話し合った。

そのとき、徳松が実験中に生まれた Baluardo di Ci バルアルド
・デイ・チェーリ
e I i を技にしてみたらどうだと提案したのだ。

その技の効力は使えるかと思えばツナも賛成したのだが、いざ意識内で

Baluardo dice cileiを試そうとすると上手く使
こなすことができなかった。

バルアルド・ディ・チェーリ

一回目は失敗。二回目はなんとか成功したのだが思いのほか負担が
大きくわずか一分しか保てなかった。

意識内でも夢とは違って痛みはあるらしい。身体中がぎしぎしと軋
み、傷を負っている右腕、背中、腹部に痛みが走った。

三回目、四回目も失敗。

五回目はやっと成功し、出来るかぎり時間を延ばそうと耐えた。
だが五分で効力は切れ、そのあと何度か試したが成功することはな
かった。

「難易度が高いのか…。」

また考えるしぐさをしてオスカルは唸る。

唸るのが癖なのだろうか、「うううう」とくぐもった声が聞こえ
た。

唸りはじめて数十秒、オスカルはやっと顔をあげた。

「…ひとまず、Barbazzale di CieliiとBairardo di Cieliiバルアルド・デイ・チエーリのデータをとらせてもらおうかな。」

「データ？」

「二つの技の効力を数値で出したほうが何かと役立つしね。いいかい？」

「ああ。」

データをとる分には構わないのでツナと徳松は頷いた。

「プロメッサ？」

オスカルが呼ぶと、しばらくしてプロメッサが扉の向こうから現れた。

今までずっとトンノの看病をしていたのだろう。

「プロメッサ、綱吉さんと徳松くんを実験室に案内して、データを取るから準備をしてくれないかな」

「わかった！」

明るく返事をし、プロメッサはツナの服を引っ張ってついて来るように促す。

ツナと徳松はプロメッサのあとについて行く。

獄寺と山本もあとに続くこうとすると、リボーンが目の前に立ちはだかった。

「うおっ、なんだよ小僧！」

「どうしたんですかりボーンさん！」

「おめえらはここで別のことをしてもらっぞぞ」

行く手を阻まれた上、意味のわからないことを言われ獄寺と山本は首を傾げる。

「おめえらにも、新しい技をつくらせる。そのためにここにいるんだからな。」

珍しくも、リボーンは笑いを浮かべず真剣な表情だった。

標的143 別行動

「オレたちも…十代目のように新しい技をつくるんスカ!？」

「おいおい、聞いてないぜ小僧!」

新たな技のデータをとるため別室へ移動したツナ。

当たり前のようにその後をついて行こうとした獄寺と山本をリポーンが止め、二人も新たな技を作り出すんだと言ったのだ。

まさかそんなことを言われると思ってなかった獄寺と山本は驚いて口をあぐりと開けている。

「なんだおめえら、不満か？」

「ふ、不満じゃないですが…そんないきなり……」

「予告なしにそんなこと言われたら驚くのな!」

睨みをきかしたりポーンに脅され、獄寺は慌てて否定をするが山本は相変わらずであった。

リボーンに頭のあがらない獄寺は、怖ず怖ずとリボーンに問う。

「ですがリボーンさん、今はリングも原形に戻り力が上がったうえ、ボンゴレ匣もあるんですよ。」

「そつだぜ小僧。原形のリングと匣があれば大丈夫じゃねえか？」

確かにボンゴレリングは原形に戻り、それによりリングの力も上がった。その上ボンゴレ匣もある。

この二つがあれば新たな技などいらぬのではないかと言う二人の意見も分らないことはない。むしろ頷ける。

だが、リボーンは違った。

「なら聞くが…おめえら、今のままで満足なのか？」

リボーンの問いに獄寺と山本はびくりと肩を動かす。

不意に胸の奥に蟠^{わたかま}りが出来たような錯覚に陥った。

「オレから見ると、お前たちはまだ未熟だ。ボンゴレの跡を継ぐ者の守護者として…部下としてな。まだガキっばいところもあるし、喧嘩っ早いところもある。それじゃ、ただのやんちゃ坊主だ。」

リボーンが言葉がぐさりと突き刺さる。

身体が鉛のように重たく、否定しようにも言葉が出てこない。

…つまりは、尤もなことを言われているというわけだ。

それが悔しくて、二人は拳を握りしめる。

爪のあとがくつきりと残るほど、力の加わるところが白く変色してしまっほど。

唇を噛み締めて、二人は俯いて黙っていた。

そんな二人を見て、リボーンは笑んだ。

「ま、未熟つつうことはまだまだ可能性を持っている、という意味でもあるしな。ガキっばい、喧嘩っ早いのは、戦う意欲を持っているからだとも思える。」

先程より幾分柔らかくなったリボーンの声を聞き、二人は顔を上げる。

「どうだ、悔しかったか？」

少しの沈黙のあと、やっと二人の口から言葉が出た。

「……、悔し……かったです。」

「オレも、悔しかったのな。」

二人の素直な返事を聞き、リボーンは鼻を鳴らした。

「それなら満足してねえも同然だな。……新たな技、必要だと思えるようになっただろ？」

「はい！十代目の右腕として、もっと強くならなければならないと改めて実感しました！」

「オレはツナの親友として、助太刀できるくらいの実力が欲しくなったのな！」

握りしめていた拳を胸の前へ持って行き決意をあらわす。

先程の曇った表情ではない。

新たな目標を見つけ、いきいきと輝いた表情だ。

「よし。んじゃ、早速案を出してみる。おめえらの属性、得意不得意などを考えてな。」

ばらばらではあるが意気込みのある返事が聞こえ、リポーンは内心満足であった。…だが。

(…こいつらはいいとして、まだ問題がいくつかあるんだがな)

思考の読めない表情をした赤ん坊は目の前の少年たちを眺めていた。

瓜ふたつの顔をした二人、ツナと徳松は言葉もなく一匹の子犬を観

察していた。

プロメツサに実験室に案内され、椅子に座るよう促されたのでそれに従うと、プロメツサは何やら機械をいじりだした。

パソコンや、プリンターのようなもの、何やらスイッチやコードが沢山ついているものを器用に使いこなしている。

本当に子犬であるのだろうかと目を疑うほどの手捌きであった。

しばらくそれを観察していると、実験室の扉が開き、オスカルが入室した。

「やあ、待たせたね。…プロメツサ、準備は済んだ？」

「あとはシールとパソコンを繋げるだけだよ。」

「うん、ありがとう。」

二人の会話の内容に思わずツナは首を傾げてしまふ。

ちらりと徳松を見ると、徳松も訳がわからないように同じように首を傾げていた。

普段のツナなら表情に少しでも不安が滲むはずだが今は額に炎が燈

っている。

その表情は相変わらずの冷静さを保っていた。

「じゃあ、早速データをとらせてもらおうかな」

プロメッサと共に機械を操作していたオスカルが顔をあげ、声をかけた。

「データって…どんな方法でとるんだ？」

「まあ、実践っていうことは確かだけど…このシールをつけてもらうよ。」

差し出された手を見ると、正方形の、シールと言うには随分厚めのなにかが乗っていた。

よく見ると、ランプのようなものがピカピカと光っている。

「…これがシールなのか？」

「シールと言っても、“付着式データ採取装置”って言って、データをとりたい対象に引っ付けてデータをとる装置なんだ。だからシールって呼んでるんだよ。」

オスカルから小さな装置を受け取り、ツナはそれをかざしてみたり凝視してみたりした。

だがそれは何の変哲もないただの黒い箱に見えた。重さもないし、例えるならばチロルチョコが半分以上薄くなったようなものだ。

「これをどうするんだ？」

「そつだな…：利き手はどっち？」

「…右だが。」

「じゃあ右腕につけて。本当はお腹につけるのが一番安定するんだけどお腹だと傷に障るだろう？右腕の包帯の巻いてないところに貼っておいて。」

ツナは言われたようにシールを右腕につける。それは自然と馴染み、違和感は感じられなかった。

「じゃあ、データをとらせてもらっつね。」

オスカルの確認に、ツナと徳松は短く返事をした。

こうして、ツナと徳松は新技のデータ採取、獄寺と山本は新技考案をはじめた。

標的143 別行動(後書き)

なんか今回はすらすらと書けました。不思議です。

プロメツサさんが天才すぎて怖いです。機械をいじる子犬とか、もはやホラーです。

最近悩んでいます。

「その先には。」ばかり書いてると疲れてしまう(オイオイオイオイ)ので、他に小説を書いてみようかなと、6月くらいからずっと考えてて、∴あれ、二ヶ月たってる。

その小説を、ここ(小説家になろう)か自分のサイトで書こうか悩んでいます。

多分リボン関係だと思えますが∴少し、オリジナルも書いてみた
いなど。

受験が終われば何作か書きたいんですがね、難しいです受験)、
- ∴ -

もうしばらく悩んでみます。

明日も更新がんばるぞ！

読んでいただきありがとうございました！

標的144 データ採取開始

機械の音が止まない中、二人の人間と一人の小人、一匹の子犬がいた。

一人はパソコンを片手に、もう一人と小人は部屋の真ん中に佇んでいる。

子犬はパソコンを持つ人間の肩に乗って口にはコードをくわえていた。

「綱吉くん、今なにもしていないよね？」

「見てのとおり、なにもしてないが……」

奇妙な質問をされ、ツナは眉をひそめる。

ただ地面に足をつけているだけなのにおかしな事を聞く奴だと思った。

「いや、変な質問してごめんね。今炎圧の数値を見たんだけど……」

興味津々に、オスカルはパソコンの画面を見つめている。

ツナは気になってオスカルの傍に寄り、パソコンを覗き込んだ。

「今なにもしていない状態で、綱吉くんの炎圧は1万5230FV。おそらくその額のものなんだろうけど…ちなみにそのグローブから炎を出すとどうなるの？」

オスカルに問われ、ツナは何も言わずに両手を上げ、意識を集中させると、たちまち両手から炎が燃え上がった。

その瞬間、パソコンの数値が大幅に変化した。

「お！また上がった！」

「…3万3527FV？」

予想外な数値にツナはオレンジの瞳を丸くする。

それに気付いたプロメッサがオスカルの肩からツナの肩へと移動した。

「どうしたの、綱吉？」

「…もっと、数値が低いかと思ってた。」

己の掌を見つめ、ツナは呟く。

するとツナの頭の上でパソコンを覗き込んでいた徳松が「あ。」と声を発した。

「オレが…封印から解かれたからか？」

「徳松が…？」

「ああ。オレはツナ的能力だ。ツナが幼いころ、オレはツナの能力である自分を自ら封印し、力を制限させた。だがオレの封印が解かれたことで、力の制限がなくなった。だから本来の力が次第に引き出されるようになってるんだ。たとえ能力、オレの核^{クォーレ}cuoreがここになくてもな。」

難しいようで簡単な説明。

何も知らない人が聞けば必ず首を傾げるだろう。

だがオスカルはツナから徳松のことを聞いているので理解したようだ。

「じゃあ、これからもまだ数値は上がるってことだね？」

「ああ、そうなるな。cuore^{クォーレ}が元に戻れば、凄まじい数値になるだろうしな。」

「へえー！是非知りたいね！」

徳松の話をおスカルは目を輝かせて聞いている。

前のめりになるおスカルのプロメッサがなだめ、落ち着かせていた。

「おスカル…そろそろデータとらないと…綱吉も疲れちゃうでしょ？」

「…あ、そうだったね。ごめんね！」

おスカルは慌てて謝り、ツナと距離をとった。

「…じゃあ、まずはBarbazale di バルバツァーレ・デイ・チエーリ Cieliiのデータからとらせてもらおうよ？」

「わかった。…徳松、また標的を頼めるか。」

「了解。」

返事をする、徳松は先程と同じように炎の鳥を作り出した。

だが、炎の鳥は飛び回らず、ツナから三十メートル離れたところで

大人しくこちらを見ている。

「今回は飛び回る必要もないからな。だがついでに速度もはかっていたほうがいいだろ。」

「…気が利くな、ありがとう徳松。」

ツナが礼を言うと、徳松は微笑んで炎を小さく揺らした。

それに呼応するように、炎の鳥もゆらゆらと炎を動かした。

「…………やるぞ。」

拳に力を込めて、自分に言い聞かせるように小さく呟く。

ふう、とひとつ息を吐き、炎の鳥を見据える。

静かに片手をかざし、脳内にイメージをつくり、神経を集中させる。

バシユンッ！！

「!？」

「…速、い！」

炎は長い渦となって放たれ、目に見えぬ速さで炎の鳥に巻き付く。

その瞬間、逃げる間も与えないかのように炎はパキパキと音をたてて石化した。

「………完了。」

右手をおろし、ツナはオスカルの方を振り向く。

だがオスカルは何の反応も示さず、ぽかんと口を開けて言葉を発しない。

「…オスカル、オスカル？」

「…あ！」

ツナに名を呼ばれ我に返ったオスカルは、思わずパソコンを落としそうになる。

「…大丈夫か？」

「うん大丈夫！ごめんね！…あ、ちゃんとデータもとれたみたいだ。」

パソコンの画面を見遣り、キーボードを操作してデータを引き出す。

「えっと、…15万FVか。速度は…っと……」

画面がかわり、映し出された速度を見た瞬間、オスカルは再び言葉を失った。

「…またか。」

ツナと徳松は顔を見合わせ、やれやれと肩をすくませながら先程と同じように画面を覗き込む。

そして二人も、オスカルと同様言葉を失った。

画面に映し出された速度は。

「…621 km / s ……?」

「…は?」

普段冷静さを保っている表情が、動揺で歪んだ。

有り得ない数字に、誰もが驚いた。

広い実験室という空間に、静寂が訪れた。

標的145 赤ん坊の助言

ツナと徳松、オスカルにプロメツサがBarbazzale di
バルバツァーレ・デイ・チエーリ
Cieliiの予想外なデータ結果に驚いていた頃。

異なる部屋では獄寺と山本が椅子に腰を下ろして新技を考案していた。

だがその様子は順調とは言い難い、むしろ滞っているようだ。

「…んー」

「新しい技…って言ってもな……」

リポーンに諭され新技考案に踏み出した二人であるが、全く自分の新技のことなどこれっぽっちも頭になかったので何も思いつかない。

先程リポーンに用紙とペンを手渡され、「それにいくつか案を書いておけ」と言われリポーンは部屋から出て行った。

しかしせっかくもらった用紙は黒い線が行き交い、文字が書けるところなどない。

「この紙、もう使えねえ……」

「裏返せば使えるのな。…はは、全く何も思いつかないのな。」

ぺらり、とほほ黒に染められた用紙を裏返す。

するとまっさらな白があらわれ、二人の口からは重いため息がこぼれた。

「…つくそ、まじで何も浮かばねえ！」

とうとう獄寺が音を上げ、椅子の背もたれがぎしりと軋んだ。

それにつられて山本もペンをぱいっと投げ出し、苦笑いをして後頭部で腕を組む。

「どんなのがいいんだろうな……」

「おめえは勿論、時雨金時を使うんだろ？」

「そうなんだけど、なんつーの？土台みたいな、種類みたいな？そ

れがわかんねえんだ。」

「…ああ、主題か。」

机に肘をつき、手の甲に顎を乗せて獄寺はまたため息をついた。

「どうだ、何か思いついたか」

後ろから声をかけられ、振り向くと黒服の赤ん坊が片手にコーヒーを持ってこちらに歩いてくる。

勝手にキッチンでも借りたのだろう。

「…その様子じゃ、まだ何も考えついてねえな。」

獄寺と山本の微妙な表情を見て、感づいたりボーンはひとつ息を吐いた。

コーヒーの入ったカップを持ちながらも、器用に机の上に飛び乗る。

「…たく、のろのろしているとツナとの差が増すぞ。」

「ツナは新技二つも考えてデータまでとってるしな…。」

「さ、流石です十代目…オレたちなんか、何も……」

リボーンの言葉に二人はうなだれる。

今別室では新技を考えたツナがデータをとっている。

そう思うと、出遅れている感じがしてたまらないのだ。

「…焦ってんだろ。」

二人の心情を読み取り、リボーンはにやりと笑う。

核心をつかれた獄寺と山本はびくりと肩を大きく揺らし、言葉もなく頷いた。

「焦ったって仕方ねえだろ。何もしないんじゃないやどうにもならねえんだ。……その焦りは無駄だ。焦る時間が無駄なんだ。そんな暇があったら、技の一つや二つ考えれるだろ。」

「…はい。」

「…だよな。」

喝を入れられた二人は、小さく返事をする。

やれやれ、トリボーンは肩をすくませと二人の前に座り込んだ。

「…そんなに、深く考えなくていいんだぞ。」

リボーンの声にうつむいていた獄寺と山本は顔をあげる。

「おめえらは考えすぎなんだ。簡単でいい。単純でいい。ただ、今のおめえらに必要なものを、欲しいと思ったものを作り出せばいいんだ。問題にぶち当たったら、その都度直せばいい。だから今は難しいことは考えずにシンプルに考えてみる。」

「…簡単に、単純に、ですか。」

「…確かにそうなのな。」

納得したような、何かに気付いたような表情と声色。

リボーンは鼻を鳴らして二人に再び諭す。

「おめえらにはそれぞれに武器がある。ダイナマイト、時雨金時、そしてボンゴレ匣。おめえらにしか出来ない、特別な技を作れ。」

「は、はい！ありがとうございますリボーンさん！」

「だな！サンキューな、小僧！」

獄寺と山本はリボーンに礼を述べ、獄寺はダイナマイトと匣を、山本は時雨金時と匣を取り出し、用紙に何かを次々と記していく。

(……世話のかかる奴らだな)

小さくため息をつき、リボーンは冷めたコーヒーを口に含む。

目の前では夢中になりながらペンを持つ手を動かし、それぞれの武器と匣を見比べたりしている。

(これで技は出来そうだな)

やれやれ。

リボーンは再び肩をすくませる。

そして空になったカップを持ち、一杯目のコーヒーを作ろうと机から飛び降りてキッチンに向かった。

標的145 赤ん坊の助言（後書き）

この小説を書いて五ヶ月が経ちました。

五ヶ月で145話（正確には146話）書いたんだなあとしみじみしています。

最近は思うように更新できなかつたりして、いらいらしてました（笑）

まったく文章を書くのが上手くならず、一時期は諦めてしまいそうになりました。小説を強制終了しようとも思いました。

ですが、評価をしてくださったり毎日感想を書いてくださる優しい方々のために、自分のためにも諦めてはいけないなと己を奮い立たせてなんとかここまでできました。

まったく成長の見られない小説ではありますが、まだ見えない終わりまでお付き合いしてくださると嬉しいです。

…本当に、いつ終わるんだろうか（笑）

終わりがわかりません。どうしよう………！

そろそろトンノを復活させたいです (^o^)/

読んでいただきありがとうございました！

標的146 様々な問題点

「…621km/s…」

「……う、そ…」

Barbazzale di バルバツァーレ・ディ・チエーリ cieliのデータ結果が映し出されているパソコンの画面を覗き込み、オスカルとプロメッサが言葉を漏らす。

ツナと徳松はその数値を聞いて驚いているが黙ったままである。

「…ま、まさかね…目に見えない速さではあったけど、ここまで速度があるとは……」

「ツナと徳松が驚きすぎて黙り込んでるよ…」

オスカルは苦笑いしながらパソコンから目を逸らし、驚きで固まっているツナと徳松に話しかけた。

「おーい、綱吉くん、徳松くん！」

「……あ、ああ、なんだ」

肩を小さく動かし、ツナと徳松が振り向く。
冷静ながらも驚きはかくせないものなのか、とオスカルは少し微笑
んだ。

「次はBaluardo di バルアルド・デイ・チエーリ Cieleiなんだけど……できるか
な？」

「…失敗はするかも知れないが。」

「じゃあ、やってみて。」

再びオスカルとプロメッサはツナと徳松から距離をとる。

二人が立ち止まったところを見て、ツナと徳松は同時に深呼吸をし
た。

「徳松、頼む」

「了解」

先程と同じように、徳松が意識内に戻っていく。
その瞬間、また何かが込み上げる感覚を覚える。

ゆらゆらと、炎の揺らめきが強くなる。

しかし。

シューウウウ……

「…ん？」

「どうしたの？」

何か空気の抜けるような小さな音がした。
オスカルとプロメツサは離れていながらもその音に気付く。

「…失敗した」

“ごめん、ツナ。さっきより疲れてるみたいだ…”

「気にしないでいいよ。」

意識内で謝る徳松をツナはなだめる。

Baluardo di バルアルド・ディ・チエーリ Cieliiはツナと徳松、身体と精神共に負担がかかる。
体力も使うので、なかなか成功はしないのだと言う。

“もう一度、やってみてくれ。”

「わかった。」

返事をする、再びあの不思議な感覚がくる。
炎も先程よりも大きく揺れはじめ。

身体全体があたたかさに包まれ、ツナは目を閉じた。

ブワアアアアッ

また足元を風にすくわれ、思わずオスカルはよろめいてしまう。

それになんとか耐え、オスカルとプロメッサは目を細めながらもツナと徳松を見た。

「成功したな。ありがとう徳松。」

“ツナこそ、ありがとう。”

ふう、と息を吐いて顔を伝う汗を拭う。

身体が少し重く感じ、目眩で小さくふらついてしまう。

「大丈夫かい、綱吉くん」

「少し身体が重いだけだ…心配ない。」

小走りで駆け寄ってきたオスカルはふらつくツナの背中を支える。
するとオスカルの手がぴくりと引き攣った。

「…熱い。」

「炎で全身が包まれているからな…熱いのも当たり前だ。」

ツナの全身は淡いオレンジ色の炎で包み込まれている。

この炎が敵からの攻撃を遮ったり、傷の痛みを和らげるのだ。

「……ちよつとごめんね」

そう言うとオスカルはポケットにしまっていたボールペンを取り

出し、軽くそれをツナに投げた。

バチンッ！

「おおっ！？」

炎に触れた途端、ボールペンは勢いよく弾き返されオスカル足元に転がった。

見るとボールペンは黒くこげ、割れてしまっている。

「うわぁ…おっかない……」

そっとボールペンに触れると、まだ熱が残っておりすぐに指を引っ込める。

「オスカル大丈夫か？」

「ん？うん、大丈夫だよ。」

「ボールペンなんて投げるからだよ！」

ぶつぶつと文句を言いながらプロメッサが黒い尻尾で使い物にならなくなつたボールペンをまとめる。
そんなプロメッサに「ごめん」と苦笑いをして謝り、オスカルはパソコンを見た。

「炎圧が、51万FV。Barbazzale di バルバツァーレ・ディ・cieli チェーリよりもかなり多いね。そんな炎圧を保つのは難しいか。」

「だから、そんな長くは続けられないのか……」

身体のだるさに思わずため息が出る。

本来、大空属性の“調和”で身体の痛みなどを和らげる作用があるはずなのだが、今は上手く使いこなせていないので身体のだるさは残っている。

「今の時点で51万FVか……弱点をなくせばもっと炎圧はあがるんだね」

「……多分。」

ぐらりと一瞬視界が歪んだかと思うと、身体の熱が一気に引いていく。

すると徳松が意識内から再びあらわれ、ツナの肩の上でうなだれていた。

「大丈夫か、徳松……」

「……きついな、かなり。」

「疲れたら意識内で休んでいい。無理に出てくることはないから。」

ツナが優しく声をかけると、一瞬黙り込んだ徳松だったが、か細い声で「すまない」と言い、意識内へ戻って行った。

その瞬間、ツナの体力も限界だったのか額の炎は消え、グローブもただの手袋に戻ってしまった。

「っ、疲れた……」

「Baluardo di バルアルド・デイ・チエーリ Cieliiを保つてた時間は5分24秒。お疲れ様、綱吉くん。」

床に倒れ伏すツナにオスカルは笑顔で言う。

ツナは緩んだ表情でそれに答え、はあ、と大きく息をついた。

「あ。」

「お。」

二人が声を出したのは同時だった。

リボンから助言をもらい、新たな技を考案していた獄寺と山本。

先程の悩んでいた表情とは打って変わって、今はいきいきとした表情である。

そんな二人の手はペンを止めることなく走らせていたが、二人同時に声を出した途端、ペンはぴたりと動くことを止めた。

「…そうか、これが！」

「…よし、これでいっくぜ！」

ガタンツ、と音をたてて二人は椅子から立ち上がり、そして互いに顔を見合わせる。

「…んだよ、お前も出来たのか」

「そつちこそ、出来たみてえだな」

どちらの顔も、晴々とした感情が伺える、口元を得意げにあげる笑顔だった。

二人は椅子から離れ、広い部屋のと真ん中に佇む。

「まず、これを実際に出来るかが問題だな…」

「獄寺のはどんな技なんだ？」

山本が獄寺の持つ用紙を覗き込む。

一瞬顔を歪ませた獄寺だったが、小さく舌打ちをして山本に用紙を手渡した。

代わりに獄寺は山本の用紙を奪う。

「…なんだこれ」「」

二人は呆気にとられた。

獄寺の用紙は、ずっしりと文字が並べられており、ちらほらとイタリア語が書かれている。

一方山本の用紙には、何やら擬音が多く意味のわからない文章であった。

共通しているのは、それぞれの武器のダイナマイトと時雨金時、ボンゴレ匣がイラストとして描かれているところだけである。

「こんなん一般人に伝わるわけねえだろ野球馬鹿!!」

「別に人に見せるわけじゃないからいいじゃねえか。獄寺のだって何が書いてあるかわからねえのな!」

外野から見ればどっちもどっちであるだろう。

だが二人はそれぞれの考え方をしての結果である。

自分の考えを否定されては黙ってはいられない。

しかし、今すべきことは言い合いではない。

早く新たな技を完成させ、ツナに追いつくのが二人の目標でもあったから、ここで無駄なことをしている場合ではないのだ。

「…っ、お前と言い争いなんかしてる暇はねえんだよ!」

獄寺はまた舌打ちをして山本に背を向ける。

ぽかんと山本は口を開けていたが、すぐに「ははっ」といつものように笑った。

後ろで笑う山本に苛立ちを覚える獄寺だが、文句を言つのをぐっと我慢してボンゴレ匣を取り出す。

そしてリングに赤い炎を燈し、炎を匣の穴に注入した。

ゴウッ！

「によおんっ」

ベルトにつけられた十五個の匣。指には五つのリング。そして肩には嵐猫 *ver・V* の瓜ガット・テンベスタ パージョンボンゴレが乗っている。

「瓜、カンビオ・フォルマ形態変化！」

「によおんっ！」

獄寺の声に応えるように瓜が一声鳴いて輝きを放つ。

小さな猫だった瓜は赤い炎を散らしながら姿を変えていく。

輝きがおさまると、獄寺の手には形態カンビオ・フォルマ変化した瓜、Gの弓矢アーチェリーがおさまっていた。

「…さっき、オスカルが標的を使うなら何とかって言ってなかったか？」

「ん？ああ、これか？」

獄寺に問われ、山本はポケットから小型の機械のようなものを取り出す。

先程、オスカルがツナの新技のデータを採取しに行く前、山本にまとめて手渡したものだ。

“もし新技を試す際に標的が欲しければ、これを使ってね。”

「なんかスイッチがあるって言ってたな…あ、これか？」

丸いスイッチのようなものを発見し、山本は人差し指で軽く押す。

すると小さな機械からヘリコプターのプロペラのようなものがあらわれ、すぐにパラパラと小さな音をたて山本の手から離れた。

「どうやら小型のヘリコプターらしい。」

それはぐるぐるとゆったりとしたスピードで天井近くを飛んでいる。

「獄寺ー、それでどうすんだ？」

「まあ、見てろ。」

得意げに笑うと、獄寺は手に矢ではなくダイナマイトを構えた。

山本は首を傾げつつも獄寺に注目する。

ギリリツと弓がしなり、獄寺は天井近くの小型ヘリコプター目掛けてダイナマイトを放った。

バシユンッ！

獄寺の手から離れた途端、ダイナマイトは黄色の炎を纏わせた。

ぐんっ、と一気にダイナマイトのスピードが上がったかと思うと、次は紫色の炎を纏った。

その瞬間、山本は思わず己の目を疑うことになる。

バシユッ バシユッ バシユッ

「ダイナマイトが増えた！？」

山本の驚いた声が部屋に響き、次に複数に増えたダイナマイトは緑

色の炎を纏う。

すると増えたダイナマイトからピキピキピキと小さな音が聞こえた。

「……………」

もはや山本は言葉を無くす。

まばたきもしない。いや、出来ない。

ダイナマイトの変化のスピードが早いのだ。

一瞬目を逸らしてしまえば、ダイナマイトは変化を遂げてしまう。

それを見逃さないようにと、山本はじつと視線をダイナマイトにだけ向けていた。

次々と変化するダイナマイトはスピードを劣らせることなく小型のヘリコプターに向かう。

当たるか、と山本は一瞬思ったがそれは無駄な心配であった。

ぐんっ

左に逸れたヘリコプターを追うように複数のダイナマイトも左に逸れた。

すると一瞬で、ダイナマイトの炎が赤と青の二色に変化した。

ドカアアアンッ!!

全てのダイナマイトは見事ヘリコプターに当たり、衝突音を響かせた。

ヘリコプターからは黒い煙りが立ち込める。

だが山本はヘリコプターは壊れないだろうと考えていた。

なぜなら、先程小型ヘリコプターを渡されたときにオスカルに言われたからだ。

「これは簡単には壊れないからね。何せ地雷でも壊せないものなんだから。」と。

だからいくらダイナマイトの攻撃を受けても、黒い煙りを立ち込めさせても、ヘリコプターは動き続けるだろうと思った。

だが。

「なっ!?!」

嘘だろう。

そう思わずにはいられなかった。

地雷でも壊せなかったという機械が。

ぐしゃり、と音をたてて落ちたのだ。

黒い煙りを纏い、黒焦げになって。

山本は原形をとどめていないヘリコプターであった機械に駆け寄った。

見ただけでもわかるように、完全に壊れている。

「…すっげ、まじかよ……」

「どうだ、オレの新技は。」

振り向くと、獄寺がにやりと笑って立っていた。

驚きを隠せない山本は、呆気にとられながらも獄寺に問うた。

「…どういう、仕組みなんだ？」

「お前には理解できるかわからねえが、一応教えてやるよ。」

なぜか上から目線口調な獄寺は、手に先程と同じ大きさのダイナマイトを持ち、説明を始めた。

「まず、このダイナマイトにオレが持つ、五つの属性の炎を流し込む。そして、Gの弓矢^{アーチェリー}で放つ。」

獄寺は山本に理解しやすいようにダイナマイトを放つ真似をする。

「んでまずは晴の属性“活性”でダイナマイトのスピードを上げる。次に雲の属性“増殖”でダイナマイトの数を増やす。そしてそのダイナマイトを雷の属性“硬化”で硬さを強化する。」

説明通りに、獄寺の指に嵌められているリングから次々と炎が燃え上がる。

「そして、嵐の属性“分解”で標的を破壊し、雨の属性“鎮静”で標的の動きを無くすんだ。本当は本物の矢でやりたかったんだが、矢なんか持ってねえからダイナマイトを代用にしたんだ。」

「…すつげえのな……」

どうやら山本は獄寺の説明を理解できたらしく、ぽかんと口を開けている。

ふふん、と得意げに獄寺は笑い、それに呼応するようにリングの炎がそれぞれ勢いを増した。

「…その技の名前、何て言うんだ？」

山本がそう口を開くと、獄寺は誇らしげにそれに答えた。

「フレッ
「Freccia di cinque fiamma」(フレ
チャデーチンクエフィアンマ)」、「五炎の矢」だ。」

標的147 Freccia di cinque fiamma)フレッチャ

だ、出せた…！

無理矢理だが出せた…！

今回は長くなってしまいました。こゝ、こんなはずではなかった…。

この技は、毎回感想をくださる、???様が考えてくださったものです。

ですが少し変えてしまいました。ごめんなさい！

矢なんて…獄寺くんにすぐに用意できないだろうなと思い、本物の矢だったところをダイナマイトにしてみました。

あと炎の属性の順番も変えさせていただきました。

ご、ごめんなさい…！

ちなみにFreccia di cinque fiamma)フレッチャ デイ チンクエ フィアンマ)、五炎の矢というもの??様が考えてくださった名前です。

すばらしい技の名前をありがとうございました！

次は山本か…う、難しい。

でも楽しいです。すごく！

今日は夏休み最後の補習なので頑張ってください！

読んでいただきありがとうございました！

標的148 風雨

「ふ…ふいれ…?」

「Freccia di cinque fiamma(フレッチャ
ヤ デイ チンクエ フィアンマ)だ。」

聞き慣れないイタリア語を頭の中で整理しきれない山本は、噛みながらも技の名前を言おうとするが、言えずに獄寺に訂正されてしま
う。

日本語で“五炎の矢”という意味のこの技は、その名のとおり獄寺
の持つ五つの属性の炎を、矢に装ったダイナマイトに流し込んでそ
れぞれの炎の属性を生かす技だ。

五つの属性を持つ獄寺にしか出来ない難しいものである。

「すっげえな獄寺！オレびっくりしちまったぜ！」

山本の褒め言葉に獄寺は踏ん張り返り得意げに鼻を鳴らす。

「まあ、まさか一発で出来るとは思ってなかったけどな。だがまだ
コントロールがなってねえ。練習して完璧にしなきゃなんねえな。」

本音を口に出し、銀色の髪の毛をがしと掻き分けながら獄寺はため息をつく。

肩にはいつ元に戻ったのだろうか、瓜が眠たそうにあくびをしていた。

「おい、おめえも出来たんだろ、新技。今ここでやってみせろよ。」

「オレも成功するかわからないけどな……」

山本にしては珍しい苦笑いで返事をする。

だが「よしっ」と一度伸びをして山本はいつもの笑顔に戻った。

「一応やってみっか！失敗してもまた試せばいいしな！」

そう言うと山本は肩にかけていた竹刀を取り出す。

それを一振りすると、竹刀はたちまち本物の刀、時雨金時へと姿を変えた。

そして右手の指にはめられているリングに青色の炎を燈し、炎と同じ色のボンゴレ匣を取り出してそれに注入する。

バシユッ

青色の炎を纏い宙を舞うのは雨燕Ver.V(ローンディネ・ディ・ピオツジャ バージョンボンゴレ)の小次郎。

甲高い鳴き声をあげると、小次郎は差し出された山本の指にふわりととまった。

「そいつを使うのか？」

「小次郎にも手伝ってもらわねえとな。ここの部屋、濡らしても大丈夫だと思うか？」

「機械に当たらなけりゃいいんじゃないかねえのか？」

山本は「そっか」と返事をして、先程獄寺が使ったのと同じ小型のヘリコプターを取り出し起動させる。

ヘリコプターは羽音をたてて飛び立ち、ぐるぐると部屋を飛び回る。

「よし、小次郎。雨を降らせてくれ。」

山本がそう言うと小次郎は一声鳴き、山本の手から離れて天井に向

かって飛んで行った。

そして円を描くようにぐるぐると徘徊しながら飛び回る。

次第に空気が湿っぽくなり、獄寺が顔をあげると、頬にぱたりと雫が落ちてきた。

見ると、山本たちの頭上からのみ雨が降り出している。

ザアアアアアッ！

「うおっ!?!」

途端に激しく降り出した雨に獄寺は驚き、慌てて雨が降っていないところへ避難する。

肩の上の瓜は全身についた水を身体を震わせて飛び散らせた。

小次郎の降らせる雨のせい、山本の足元には水溜まりがいくつか出来ている。

「よし、もういいぜ小次郎!」

山本の声に答えるように雨はすぐに止み、一仕事終えた小次郎は何故か獄寺の頭に降り立った。

「なっ！なんだよおめえ！」

「小次郎、そこで休んでてな！」

「休んでてな、じゃねえよ！！」

文句を言う獄寺にくるりと背を向け、山本は一息つく。

頭上にはせわしなく飛びつづける小型のヘリコプター。

時雨金時を力強く握り、山本は走り出した。

バシヤ バシヤ バシヤ バシヤ

山本は水溜まりを踏み付けるように走り、ヘリコプターを睨みつける。

「小次郎！！！」

大声で山本が名を呼ぶと、小次郎は大きく羽ばたき山本の元へと向かう。

ブワッ！

翼をばたつかせると、小次郎が青色の炎を纏わせ、飛ぶスピードを上げた。

そして小次郎が山本の目の前を横切り、纏う青色の炎がカーテンのように視界を覆った。

「っ！」

バシャアッ！

時雨金時で水溜まりの水が掬い上げられ、炎のカーテンと重なった。

「…時雨蒼燕流、攻式十二の型、」

ブンッ、と空気を切る音。

高く振りかざされた刀が一気に振り下ろされた。

「風雨！！！！」

バシヤアアアアンツ！！

掬い上げられた水と、死ぬ気の炎が時雨金時で斬られた。

水と炎は斬られた衝撃により、凄まじいスピードで小型のヘリコプターに襲い掛かる。

自動で動くヘリコプターは、センサーで危険を察知して山本の攻撃を避けようと横に逃げた。

だが、それは無駄な行為だった。

「っ、範囲がでけえ！」

あんぐりと獄寺が口を開ける。

斬られた水と炎は広範囲に飛び散ったのだ。

それを避けるのは誰もが無理と言うほど不可能なことであった。

ビシヤアアンッ！

水と炎が作り出した衝撃波がヘリコプターに的中した。

衝撃波に加え、炎の属性“鎮静”により、ヘリコプターは飛ぶ力を失い、バチバチと電気を発しながら落下した。

「…なんとか出来たのな！」

先程の真剣な態度とは打って変わって、いつもの山本に戻る。

啞然としている獄寺の頭に、再び小次郎が飛び降りた。

それに気付かないのか、獄寺は何も言葉を発しない。

「はじめてにしちゃ出来だな。まだ小次郎に力の加減とかいろいろやっってもらわねえとな…」

山本は時雨金時を素振りしながらぶつぶつ独り言を言う。

そしてくるりと振り向いて獄寺の頭に乗っている小次郎に笑顔で告げた。

「小次郎、この技を使いこなすためにオレと一緒にがんばろうな！」

それに答えるように、小次郎は大きく鳴いた。

標的148 風雨（後書き）

き、昨日は更新できずすいません…でした！

最近体調がよろしくなくて、補習に行くのもやっとで…薬が手放せません。

今回…ぐ、ぐだぐだですネ！

驚いた、水の表現ってこんなに難しいんだ！

次回はツナさん出れるかな…まだ山本の技の説明とか終わってないからな…。

ん、迷います。どうしよう。

読んでいただきありがとうございます！

標的149 治癒の雨

「綱吉くん、調子はどう？」

「少し…だるいです。あと傷が痛みます…。」

床に座り込むツナを心配し、オスカルが声をかける。
ツナは右腕の包帯をさすり、背中と腹に視線をやる。

Baluardo dice バルアルド・ディ・チエーリlieの副作用と言っべきだろう。

大量に体力を消費する上にこの傷の痛み。

やはり改善すべきところは沢山あるようだ。

「ひとまず、研究室に戻ろうか。獄寺さんと山本くんの様子も気になるし。」

「あ、はい。二人とも、新技を考えてるんですね。」

ツナは足に力を入れて立ち上がる。

ふらつく身体をなんとか堪えさせて、一息ついた。

足元をおぼつかせながらも入り口に向かい、扉を開ける。

「あ、十代目！」

「おっ、ツナーお疲れ！」

ツナに気付いた獄寺と山本は笑顔で駆け寄って来る。

「二人とも、新技はできたの？」

「もちろんです！まだ修正しないといけねえところがありますけどね。」

「オレも出来たぜ！一応一つはやってみた……」

そう言いかけた山本の表情が笑顔から真顔へと変わる。

上がっていた口元は下がり、瞳は真剣なものとなる。

「…ツナ、どうかした？」

「え、な、何？」

突然問われ、ツナは戸惑ってしまった。

山本は顎に手をあて、「んー」と唸りながらツナのまわりをぐるりと一周する。

「…もしかしてさ、ツナ、傷が痛むのか？」

「え!？」

「あとさ、それと疲れのせいで立ってるのも精一杯なんじゃね？」

「ええ!？」

ツナは大声をあげて驚いてしまった。

それにより、足の力が一気に抜けて座り込んでしまう。

「な、ななななななで、なんでわかったの!？」

「んー、なんとなく具合が悪いつてか、調子悪そうだったからな。」

「ほんとに!？」

はあー、とツナは大きくため息をついてうなだれた。

扉を開ける前、ツナは二人に心配をさせまいと、傷の痛みや疲労を隠すために全神経を集中させていた。

だがそんなことに慣れていないツナの演技力では隠しきれなかったらしい。

「顔色が悪いように見えたが…気のせいじゃなかったのか。」

「獄寺くんもわかってたんだ…。」

山本どころか、獄寺にもわかりきっていたらしく、ツナは苦笑いをするしかなかった。

もう一度立ち上がるうとするが、上手く力が入らず無駄に終わる。

「やっぱり大丈夫じゃないんだね、綱吉くん。」

「無理なさらないでください十代目！」

オスカルと獄寺がツナを気遣う中、山本は先程と同じように考える仕種をしていた。

眉間にしわが寄っており、怒っているようにも見えたのでツナは少し驚いて山本に控えめに話しかける。

「や、山本…？何か怒ってる…？？」

「…いや、別に怒ってないぜ！それよりツナ、もしかしたらその傷の痛みとだるさ…抑えられるかも知れねえぜ？」

「え！？ほんとに！？」

まさかの言葉にツナはもちろん、獄寺とオスカルも啞然としてしま
う。

何を言い出すかと思えば、ツナの傷の痛みや疲労感を抑えられるか
も知れないとのこと。

獄寺は疑いの眼差しで山本を見た。

「…まじかよ。」

「多分な！ちよっと、獄寺とオスカルさんは部屋の隅に寄ってくれ
ねえか？」

「あ、ああ。わかったよ。」

山本が何をする気かはわからないが、獄寺とオスカルは言われたとおり、部屋に部屋の隅に寄った。

部屋の真ん中には座ったままのツナと立っている山本のみだ。

「よし、始めるぜ！」

「うん、うん…。」

ツナは戸惑いながらも頷く。

いくら親友だからと言っても、何をされるかわからないので不安は隠せない。

山本はリングに炎を燈し、ボンゴレ匣を取り出して炎を注入する。

匣から勢いよく山本の匣兵器の小次郎が飛び出した。

「小次郎、カンピオ・フォルマ形態変化！」

山本の声に答えるように小次郎は鳴き、炎を纏って時雨金時と合体して長刀へと姿を変えた。

青色の炎を纏うそれを両手で持ち、山本は構えをとる。

「よっしゃ、行くぜツナ！」

「えっ！ちよっ、や、山本！？」

刀を向けられても、とツナは焦る。

だが山本はそんなことを気にもとめず、刀を構えたままツナに向かって走り出した。

「んなああああ！？山本おおお！！？」

「なっ、何してんだよ野球馬鹿ああ！！！」

「どうしたんだい山本くん！！！」

山本の突然の行動に誰もが焦燥を浮かべる。

仲間に刀を向けて走り出したのだ。

どうかしてしまっただろうかと思うのも仕方ないことだ。

「山本！山本！ストップストッパー！！！」

ツナが必死で制止するが山本は止まらない。

むしろ刀を包む炎は人を包んでしまえるほど巨大化していた。

山本が刀を上にかかげるとガチャ、と音が鳴る。

恐怖と驚きと焦燥で声の出なくなってしまったツナは、身体を動かすことも出来ず、まぶたを固く閉じた。

ダンッ、と力強い音をたてて山本は地面を蹴り宙に浮く。

「時雨蒼燕流、守式十三の型……」

巨大化した炎を振り払うように、山本は刀を振り下ろした。

「治癒の雨!!!」

バシャアアアアンッ

刀が振り下ろされたことにより、死ぬ気の炎が瞬時に小さな幾つかのかたまりとなってツナに向かう。

バシャンッ バシャンッ バシャンッ

ツナは全身に炎を浴び、思いもよらない出来事にまぶたを上げた。

「な、何！？なんだこれ!？」

「ツナー、どうだ、身体の調子は？」

「身体の調子って……あれ………」

ツナは自分の身体を見て、腕を振ったり足を動かしたりする。

ぽかんと口を開けたまま、ツナは山本を見上げた。

「……傷も痛くない、それに身体もだるくない……」

「へへっ、だろ？」

「どういふことだ野球馬鹿！」

部屋の隅にいた獄寺とオスカルが駆け寄り、山本に問う。

山本は「まあまあ」と凄い剣幕の獄寺をなだめ、説明をし始めた。

「これは、オレの炎の属性“鎮静”の作用でツナの傷の痛みやだる

さを抑えたんだ。ま、麻酔みたいなもんだろ！」

「…もしかしてこれも新技？」

ツナが問うと山本は笑顔で頷き、言葉を付け足す。

「自分にやるときは刀に炎を伝らせて傷口とかに炎を送り込むんだ。でも、炎を当てすぎたら身体の機能までもが抑えられちまうから調整が必要だけどな！」

「へえ、便利だけど難しい技だね…。」

オスカルが感心したように頷き、ポケットから取り出したメモ帳に何やら書き足していく。

「立てるか、ツナ」

「うん、立てるか…も…あれ？」

ツナは足に力を入れるが足はびくともしない。

なぜだろう、と首を傾げていると山本が苦笑いをしてツナに謝った。

「ごめんな、ツナ！さっきツナに炎を沢山浴びせちまったみてえだ！」

「えっ!?!」

「てめえ!この野球馬鹿が!」

獄寺が山本に殴り掛かろうとするので、ツナはそれを立てないながらも止める。

二人を近づけまいと獄寺の足を引っ張り距離を持たせている。

そんな光景を見て、オスカルは楽しそうに笑った。

「…あいつらも、技はだいたい出来たってわけか」

片手にコーヒーマグのマグカップを持ちたりボンが、扉の陰からツナたちの様子を見ている。

「そろそろ他の奴らにも伝えるべきだな。」

にやりと笑った赤ん坊は、あたたかいコーヒーを口に含んだ。

標的149 治癒の雨（後書き）

おかしな山本の新技登場となりました。

どう二つ目の技を出させようか迷い、この出し方が一番じっくり来たのですが…ツナさんがかわいそう（笑）

今回はどんな感じにしようかまだ決めてません。

そろそろほんとにトンノを出したいです。

読んでいただきありがとうございます！

標的150 効果観面

ツナは新技のデータ採取、獄寺と山本は新技を作り上げた。

一段落ついた三人は、オスカルに料理をごちそうになり、やわらかいソファの上でくつろいでいた。

「ツナー、調子どうだ？」

「まだ上手く身体は動かないけど…傷も痛まないしだるくもないよ。」

先程山本の新たな技、「治癒の雨」を受けたツナは、傷の痛みや身体の疲労を今は感じていない。

だが、山本が完全に調整できないままの炎を浴びてしまったせいで身体が自由がきかなかった。

「腕は動くんだけどなあ。なんで足は動かないんだろ…」

「多分、腕は怪我を負っているからそこに効果が集中したんだよ。でも足は怪我をしていないから効果が足全体に広がって動かなくなってしまうんじゃないかな？」

力を入らないツナの足を持っては放し、持っては放しを何度も繰り返す。

返しながらオスカルは推測する。

足の動かなくなってしまうたツナは、実験室の整理を終えて現れたプロメツサにより運ばれた。

どうして動けないのかとプロメツサはオロオロしながらツナに問いただしていた。

その様子は子を心配する親さながらだったと言う。

「プロメツサがすごい心配してたよね。涙目だったし。」

「あはは……あれ、そういえばプロメツサは？」

苦笑いをしたあと、ツナはプロメツサの姿が見えないことに気付く。きよるきよるとあたりを見渡すが、プロメツサはどこにも見当たらない。

すると、思い出したようにオスカルがツナの疑問の答えをくれた。

「あ、プロメツサなら……確か治療室にいるトンノの元へ向かったはずだよ。」

「え、トンノの所ですか？」

そつえば体調不良を訴えていたな、とツナは心配になる。

トンノの様子を見に行こうと思いつくツナは立ち上がるつもりだが、足に力が入らないことをすっかり忘れており身体を支えていた腕を滑らせて転んでしまった。

ピタンッ！

「へぶっ！」

「うわっ！？つ、綱吉くん！！？」

見事顔から転んだツナにオスカルが驚愕する。
慌ててツナを起こすと、ツナの鼻が赤くなっていた。

「だ、大丈夫かい！？」

「いてて…な、なんとか……」

ツナは痛々しく赤くなった鼻をおさえる。

顔を思いきり床にぶつけていたようだが、どうやら鼻血は出てい

ないようで、オスカルは「よかった」と安心のため息をついた。

「無理しちゃだめだよ。そのうち来るから。」

「はい…すみませんでした…」

じんじんとした痛みが鼻を支配し、思わず涙目になってしまつた。

情けないと言われてしまつかも知れないが、痛いものは痛いのだ。

ツナがソファへ這いながら座りなると、部屋の扉が開いた。

ひょっこりと顔を出したのは、真っ黒な小型犬。

その後ろから金色と白色の毛並みをした鳥があらわれた。

「トンノー！」

「あ、ツナー！」

ツナを見るやいなや、トンノは翼を羽ばたかせてツナの元へ飛んでいく。

「ツナ、新技は出来たの？」

「まだ色々調節は必要だけど、一応できたよ。トンノは、体調の方は大丈夫？」

「プロメッサのおかげで良くなったよ！」

はしゃぐ子供のようにトンノは落ち着かない様子で話す。

ツナに会えたのがそれほど嬉しかったのだろう。

「よし、休憩もとったことだし、次は獄寺くんたちのデータでもとらせてもらおうかな！」

思いきり伸びをしてオスカルは立ち上がる。

そして獄寺と山本にデータ採取を持ち掛けようと後ろを振り向くと、いつのまにか二人の姿は消えていた。

「え…あれ…二人は？」

「オレが転ぶ前に…何か言い合いながら部屋を出ていきましたけど………」

知らぬ間に獄寺と山本は部屋を出ていたらしい。

それにまったく気付かなかったオスカルは「うそ!？」と大声をあげた。

「二人ならさつき研究室に入ってたよ？」

「本当かい？ありがとうプロメッサ！」

プロメッサに礼を言うと、オスカルは慌てて部屋を出て行った。

部屋に残されたツナとプロメッサとトンノはしばし無言になった。

「…オレ、どうすればいいんだろ。」

「効果が切れるまで休んでなよ。そしたら綱吉の傷も診てあげるから。」

「そっか。ありがとう。」

プロメッサの優しさに思わず笑みがこぼれ、漆黒の美しい毛並みをなでた。

炎の効果が切れるのはいつだろうか。

いつ訪れるかわからないその時を、ただ気ままに待つしかなかった。

何もすることのないツナはソファに突っ伏してため息をつく。

感覚のない足が一刻も早く元に戻ることを願い、目を閉じた。

標的150 効果観面（後書き）

タイトルは、「こうかてきめん」と読みます。

な、なんか内容の薄いものになりました。

すいません。

もう少し濃く書けるはずだったので、模試を控えているので時間がなくて…。

が、がんばってきます…！

読んでいただきありがとうございます！

標的151 頭の中の水

そこは、他人が滅多に立ち入ることができない不思議な場所。

しかし、誰もが持っている不思議な場所。

見上げれば澄んだ大空が広がっている。

真っ青な、限りを知らない大空。

だが、見下げれば水が宙を漂っている。

知らぬ間に意識の中へ入り込んでいたツナは、まぶたをあげた途端驚きの声をあげた。

「んなっ！み、水…！？」

思わず足を動かせば、ぱしゃりと水がはねた。

すると水しぶきと共に、小さな揺らめく炎が目に映った。

青色の、炎。

「青色って…山本の炎!？」

ツナはもう一度足元に漂う水を蹴り上げるように足ですくう。

水滴と共に舞うのは、たしかに山本の雨属性の炎であった。

何故、ツナの意識の中に山本の炎があるのだろうか。
今まではこんなことはなかったのだが。

「おーい、とく……」

ツナは徳松に問いたただそうと名を呼びかけたが、声は途中で出なくなつた。

「…そういえば、徳松は疲れて寝てるんだつた……」

先程の実験とデータ採取により、徳松は疲れてしまいこの広い大空の何処かで眠っている。

それを探して起こすのはかわいそうだと思い、ツナは自分で考えることにした。

「なんたる…冠水…じゃないよなあ……、水が浮いてるなんて…まさかここ宇宙!？」

有り得もしない答えばかりが出てくるので、まったく正解に辿り着けない。

…サ…バサ…

しばらく唸り続けていると、どこからか音が聞こえた。

何だろうとツナはあたりを見回し、音の根源を探す。

「…ナー…ツ…」

「ん？」

次は声のようなものを耳がとらえた。

耳をすますと、次第に声と音は大きくなっていく。

意識の中には他人は滅多に立ち入ることができない。

だとすれば。

「…もしかして！」

思い当たるふしが見つかり、ツナは声と音のする方向を見た。するときらきらと輝いたなにかがこちらへ飛んできている。

黄色、白色、そしてオレンジ色。

その三色が大空に混じり合い美しく存在をあらわしていた。

「ツナ、ツナー！」

「やっぱりトンノだ！」

バサバサと音をたてて、トンノがツナの元へと飛んできた。左腕にトンノをとまらせると、ツナはトンノに問うた。

「どうかした？何かあったの？」

「いつのまにかツナが寝ちゃって、治療をしようと思ったんだけど泥のように眠ってたから…様子見に来た。」

「そ、そっか…ごめん。」

ツナは苦笑いをして謝ると、トンノは「気にしないで」と言った。

「…あれ、徳松は？」

トンノが徳松のいないことに気付き、首をのばして周囲を見渡す。

「多分、疲れてどこかで寝てるんだと思う。オレも徳松を探そうと思っただけど…あ。」

「どうしたの？」

「…トンノなら…わかるかな。」

「何が？」

トンノが首を傾げると、ツナはこれ、と指をさす。

その方向を見ると、水が宙に浮かび漂っていた。

「…これ、水だね。」

「なんか山本のつばいんだよね…。なんで大空に水が漂ってるかわかるかなー…って思ったんだけど…どう？」

トンノが空中に漂う水を凝視し、「んー」と唸る。

試しに羽の先で突いてみると、水滴と共に青い炎がはねた。

「間違いなく山本の雨属性の水だね…あ！」

「なに、わかったの!？」

「うん、多分！」

もう一度、ぱしゃりと水をはねさせてトンノは頷く。

「ツナ、山本の炎を被ったよね？」

「え、ああ…うん。」

「それだよ。」

確信したように、トンノは強い口調で言う。

「ツナが山本の炎を被って、ツナの身体に炎の力の効果があらわれたよね。それがここにも、意識の中にもあらわれたんだよ。身体も意識も、ツナだからね。ただそれだけのことだと思っよ。」

「…そ、それだけ？」

「うん。それだけ。」

山本の炎が意識の中にも影響した。ただ、それだけであった。

もっと、何か重大なことでも起きているのではないかと思っていたツナは安堵のため息をつく。

つまり、目の前で漂う水は“鎮静”の効果が無くなれば自然と消える。

心配しなくても勝手になくなるものであると言っことだ。

「心配して損したかも…」

「へへっ、大事じゃなくてよかったね。」

よく見れば、水は先程よりも少なくなっている。

だんだん効果が薄れているということだろう。

「早く消えないかなー。」

「んー……そうだねえ……」

再び漂う水を凝視し、二人はどうかできないものかと首を傾げる。

すると、トンノが思い立ったように「そうだ!」と声を上げ、ぱさりと羽を動かした。

なにをするのだろうとツナは何も言わずトンノを見つめる。

「よ……いしょっ!」

おかしな掛け声のあと、トンノの身体から炎が発せられる。

ゆらゆらとオレンジの炎が揺れ、一回り大きくなったそれを纏いトンノが羽ばたく。

ブワッ!!

翼から風が起こされ、それに乗り炎が流れる。

すると炎が漂う水に覆いかぶさり、ジュワツと音をたてて煙を立ち込めらせる。

シュウウウウ……

「み、水が……」

みるみるうちに水が蒸発してなくなっていく。

そしてすぐに水は消え、それと共にトンノの炎も消えた。

「き、消えた！」

「よかったー消えた！」

ツナは驚きの、トンノは歓喜の声をあげる。

宙を漂っていた水は見事綺麗に消え、跡形もない。

「え、どうやったの？」

「普通に炎で蒸発させたただだよ。山本の炎だから出来るか心配だ

「ただだね。」

「へ、へえ……」

トンノが訪れてから問題がさくさくと解決していくので、ツナは状況にあまりついていけない。

つまり、呆気にとられていた。

「これでちゃんと怪我の治療もできるね！」

「う、うん。ありがとね、トンノ。」

戸惑いながらもツナは礼を述べる。

トンノは嬉しそうに「どういたしまして」と言ってお照れ臭そうに羽を震わせた。

「…あ、プロメッサが呼んでるよ。」

「へ？」

「起きろって言うてる。」

頭上を見上げながら何気なくトンノが言う。

耳をすませば、なんとなくであるがプロメッサの声が聞こえる。

プロメツサの声に気付かなかったということとは、ツナは眠りが深かったらしい。

「そっか、じゃあ起きようか。」

ツナは起き上がり、まぶたを閉じる。

次第にプロメツサの声が大きくなっていく。

再びまぶたを上げると、蛍光灯の眩しさに思わず目を細めた。

少し顔を動かすと、プロメツサがこちらを見ている。

「おはよう、綱吉！」

「ごめん…いつの間にか寝てたみたい。」

「構わないよ、疲れてるんだもん。それより、身体は動く？辛くない？大丈夫？」

プロメツサの態度がまるで母親のようで、ツナは思わず笑ってしまっ

なぜ突然ツナが笑い出したのかわからず、プロメツサは首をかわいらしく傾げた。

「…あれ、トンノは？」

「今起きてすぐに…救急箱持ってくるって飛んでったよ。」

「す、すごいな……」

自分のまわりはすごい動物ばかりだ、とツナはまた笑う。

すごいだけでなく、優しい。

それでいて、強い。

「…すごいなあ。」

ぼつりと呟いて、ツナはプロメッサの頭をなでる。

プロメッサは目をとじて子犬らしい声をだした。

標的151 頭の中の水（後書き）

昨日、寝過ごして更新ができませんでした。
ね、寝過ごして…寝過ごして…（笑）

次回から獄寺くんと山本のデータ採取をさせたいなと思ってます。

…更新できるかわからないけど

読んでいただきありがとうございます！

標的152 不明な点

「あれ…腕の傷、もうこんなに治ったの？」

包帯をとき、ガーゼを外すと見えたのは鋭い切り傷。

その傷を負ったのはつい昨日のこと。

傷を負った直後は、傷は意外にも深かつたし、広範囲であった。

だが、今は傷は半分ほどが塞がっていた。

「綱吉、なにかした？」

「…え、なにかした…かなあ？」

手当てをしていたプロメッサに問われ、ツナは心当たりがないかと考える。

すると、はた、と何かを思い出した。

「…Baluardo di Cielioと、バルアルド・ディ・チエーリ山本の…炎…？」

心当たりは、それしかない。

特別なことと言えば、それだけだ。

「……もしかしたら、Baluardo di バルアルド・テイ・チエーリ Cieliiと山本の炎の力かも……」

「Baluardo di バルアルド・テイ・チエーリ Cieliiって、身体を炎で覆って傷の痛みを和らげたり、敵の攻撃を無効化する技、だよな？……まさか、それが傷に……？」

オレンジの瞳がきよろきよろと驚きで揺れる。

「……でも、オレはそのふたつのせいじゃないと思うんだ。」

ツナはおずおずと、だが瞳には確証を持って否定した。

山本の死ぬ気の炎には雨属性の“鎮静”の力がある。

それを活用した技でツナの傷の痛みや疲労感を和らげた。

だが、いくらまだ技においての炎を調節できなくて必要以上に炎を浴びせてしまっても、山本の炎だけではこれほど傷の治りを早くすることができない。

なぜだろうか。

それは簡単だ。

山本の炎は“鎮静”。つまりは鎮まり落ち着かせる効力を持つ。

だから例え山本の炎が働いているとしても、傷の痛みや進行を鎮ませることしかできないのだ。

だがしかし、ツナの傷は治りつつある。

一般人の傷の治りは一日で、深い切り傷を半分も塞ぐことは不可能だ。

バルアルト・デイ・チェーリ

さらに、ツナの防衛技、Baluardo dice iliaは傷に関しては痛みを和らげるのみ。治療の効力は多少はあるが、これほどに治りを早めるほど強くはない。

そう考えると。

「……………綱吉の、力……………」

黒い前足から、包帯がゆっくりと落ちた。

ふるり、と身体が震えた。

それは、恐怖に似たもの。

ツナは己の腕を見つめ、震える声でつぶやいた。

「…オレ、に……」

一体、

何が起こっている？

ズドン　ズドン　ズドン

聞こえるのは爆発音。
見えるのは煙と人影。

そして、赤と青のふたつの炎。

「なかなかやるな、獄寺！」

「けっ！オレを見くびんなよ！」

獄寺と山本は、先程完成した技で標的を撃ち落としていた。

赤の炎はさまざまな色に変わり、突き刺すように放たれる。

青の炎は小さなかたまりにわかれ、飛び散るように放たれる。

そんなせわしない状況の中、オスカルはパソコンの画面とにらめっこをしていた。

「…ふむ。」

画面には赤と青の炎。それに数値。

今は、獄寺と山本のデータ採取をしているところである。

「獄寺くんの炎圧…8002FVで、74.3FV/sか。瞬間的な炎圧が低いんだね。山本くんのは…420FVと、5001FV/s…。逆に山本くんは持続的な炎圧が低い…と。…：…へえ。」

興味津々にオスカルは口をゆるめる。

これは、なかなかおもしろいデータだ。

「二人が協力しあつたら…綱吉くんまでには及ばないが力は相当上がるってわけだね。」

ちらり、とオスカルは獄寺と山本を見遣る。

技を発しながらも、二人は何やら言い合いをしている。(しかしそれはいつもの獄寺が勝手に山本に文句を言っているだけの言い合いだ。)

一見、ちぐはぐのように見える二人だが。

「実は、いいパートナーになれるんじゃないかな。」

愉快そうに笑い、オスカルはパソコンを操作する。

次に出てきたのは、二人の新たな技のデータだった。

「獄寺くんの *Freccia di cinque fiamme*
(フレッチャ デイ チンクエ フィアンマ) が：1万4230 F
Vと、935 FV/s。山本さんの風雨が634 FVで、8638
FV/sね。通常るときよりかは炎圧は高いんだ。」

データからすると、やはり獄寺の炎は持続的、山本の炎は瞬間的に力が強いらしい。

逆に、獄寺の炎は瞬間的、山本の炎は持続的な力が弱い。

「相手にないものを補い、協力する。それが戦いにおいて大切なんだけど……二人にはまだ無理かもね。」

やれやれ、とオスカルは肩をすくませた。

標的153 異常

だんだん、だんだんと

大きくなっていく力。

目覚めたばかりで、あどけないような小さな力は、だんだんと大きくなっていく。

無邪気な子供が冷静な大人になるように。

それを我が物にできるのは、いつだろうか。

もはや強大な力は抑えられない。

その力と連動するように、彼も、彼も覚醒していく。

時が満ちるのは、そう遠くはない。

何が、起こっている？

この少年に、この身体に。

顔をのぞけば、琥珀色の瞳が動揺で揺れていた。

「……………っ、綱吉……………」

一言も喋らないツナを心配してプロメッサが控えめに声をかける。

だが、ツナは己の掌を見てただ震えているだけだ。

ただの人間とは思えないほどの治癒力。

それを目の当たりにし、ツナは動揺しているのだ。

ああ、どうしよう。
どうすればいいのだろう。

こういふとき、何て声をかければいいのだろう。

プロメッサは自分のやるせなさに苛立ちを覚えた。

かつり、と背後から靴の音。

何だろうとプロメッサが後ろを振り返ると、ツナの叫び声が聞こえたのは同じだった。

「ぎゃっ……」

「え!？」

驚いて見遣ると、床に俯せうつせで倒れているツナと、その背中に乗っかっているリポーンが目に映った。

「チャオ、プロメッサ。」

「リポーン……! 綱吉からおりて!」

のんきに挨拶をしてくるリボンに慌ててツナの背中からおりるよ
うに注意する。

ツナは背中を打撲しているのだ。

そんな打撲中のところに乗れば痛くないはずがない。

リボンは身軽にツナの背中からおりて、ソファに座り込む。

すると、ツナが唸りながら左腕を支えにして起き上がった。

「綱吉、大丈夫？」

「いてて…右腕はなんとか無事だけど………」

ツナの額が赤く変色している。

どうやら擦りむいてしまったらしい。

だがそれ以外に怪我はなく、右腕も腹部も無事だと言っ

「…背中はどう？」

「せ、背中…なんで？」

「綱吉、背中を打撲してたでしょ？」

プロメッサに言われ、ツナは思い出したようにはっとする。

その反応を見て、プロメッサだけでなくリボンまでもが唾然としてしまう。

「…え、忘れてた…の？」

「わ、忘れてた…痛みがなかったから…」

ツナは背中をさすりながら苦笑いをする。

まさか、とプロメッサは再び唾然とした。

不審に思ったりリボンはツナの背後にまわり、背中を何度か叩いたり押したりしてみる。

だがツナは「痛くないなー」と言うだけだ。確かに痛がっていない。

右腕の切り傷といい、背中 of 打撲といい、やはり治癒が早過ぎる。

先程のツナの動揺を見たこともあり、プロメッサはそれについて話題を切り出せない。

言おうか言わまいか迷っていると、そんなことお構いなしにリボーンがツナに問うた。

「ツナ、おめえこんなに怪我が治るの早くなかったよな。」

「えっ……………」

びくり。

ツナの肩が大きく揺れた。

恐る恐るツナは振り返る。

すると、一人の赤ん坊と目があった。

「…り、ボーン……………」

「おめえ、傷の治りが早くなったのか。」

率直に聞かれ、ツナは戸惑いながらも小さく頷く。

そうか、と一言発し、リボーンは黙り込んでしまった。

しばらく沈黙が続く。

カチ、カチ、と時計の針が時を刻む。

それが何秒か、何分か何時間か。

どれだけ時間が経ったのかわからない。

頭が動揺や不安に支配されている。

沈黙に耐え切れず、ツナが震える声でぼつりとつぶやいた。

「……オレ、おかしいのかな……」

思わぬ言葉にリボンとプロメッサはツナの顔を見遣る。

そこには、恐怖に怯えるただの少年の顔があった。

標的154 普通

おかしい。

おかしい。

あの日から、あの時から。

少年の中で何かが動き出した。

それが何なのかも、わからない。

誰も、少年でさえも。

「……オレ、おかしいのかな……」

「な……!!」

「……。」

ツナの思いがけない発言に、プロメツサは瞳を揺るがす。リボンも身体を強張らせ、小さく眉をひそめた。

「そ、んな…ツナはおかしくないよ！どこもおかしくなんかない、ツナは普通の人間だって！！」

俯くツナの膝の上に乗る、プロメツサは必死に否定する。

だが、ツナはプロメツサに目を合わせずに拳を握りしめた。

「…普通の人間が、こんなに怪我の治りが早いわけないし、……徳松みたい有能力があるわけないだろ…？」

その言葉に、プロメツサは何も言えなくなってしまった。

絞り出される声は小さく、震えている。

口元は歪み、自らを嘲笑うかのような笑みをしていた。

その時、プロメツサは「ああ、こんな表情をするんだ」とただ思った。

自分を受け入れてくれた、生を与えてくれた優しい少年。

昨日出会ったばかりだったが、プロメッサはツナが大切な存在であると思っていた。

自分を救ってくれたかわりに、自分はツナを守るんだと。

自然とそう思っていたのだ。

それは仲間意識であると言うことを、プロメッサは知っていた。

今、目の前で大切な仲間が苦しんでいる。

なのに、自分はなにもできない。
なにもしてやれない。

その悔しさに、プロメッサは黙り込んで自分を責めた。

しかし。

「おい、ツナ。」

重い空気を撃ち破るように、リボーンがツナに話しかけた。

ツナは返事もなく、ただ俯うつむいているだけだ。

それでもおかまいなしに、リボーンは言葉を発しはじめる。

「おめえ、自分が普通じゃねえって言ったよな。」

リボーンが問うが、またもツナは答えない。

耳が聞こえているのだろうか、と疑ってしまう。

だがリボーンは問いを続けた。

「おめえの思う“普通”って何だ？怪我の治りがこんなに早くなくて、徳松みたいな能力が存在しないことか？」

数秒、リボーンは待つがツナの応答はない。

リボーンはひとつため息をついた。

「…おめえの普通、ってのは、毎日寝坊して、学校に行つて勉強して、獄寺や山本たちと話して、帰宅して漫画読んだり、ゲームしたり、ママンの作る食事を食ったり……そんなんじゃないのか？」

ぴくり、とツナの指が動く。
それはただの震えでなく、ひとつの動作。

「それをしてるってんなら、おめえは普通だ。普通の人間だ。だいたい、普通だなんて人によって違うだろ。金持ちは沢山の金を持つてるのが普通だし、…オレの場合、傍らにレオンがいるのが普通だ。そう考えると、普通なんてのは人それぞれだって言うことがわかるだろ？」

琥珀色の瞳が、揺れた。
ゆらゆらと、動きを持った。

プロメツサはリボーンに顔を向け黙って話を聞いている。

「……おめえは、選ばれてんだ。特別な能力を持って生まれた、選ばれた人間だ。そのどこがおかしいんだ？どこもおかしくないだろ。すげえことだろ。…それをおめえは否定して、それでも“おかしい”と嘆くのか？」

ツナの肩が、大きく揺れた。

そしておそろおそろ、首を動かしてリボーンと目が合う。

その表情は、自らを嘲笑うような笑みでなく、目を見開いた驚くものであった。

「…ツナ、おめえはそれでも自分を“おかしい”と言っのか？」

「……言わ、ない……」

小さな声が否定をする。

その答えに満足し、リポーンはにやりと笑んだ。

「じゃ、そういうことだ。おめえはおかしくなんかない。」

「…うん。」

リポーンの言葉が、深く心に響いた。

先程までの不安や恐怖はすっかり消えた。

身体の震えはなくなり、強張りもおさまっている。

リポーンが落ち着かせてくれたのだ。

ツナの非を、否定してくれたのだ。

おかしくなんかないと。

ツナは選ばれた人間なんだと。

「リボン、」

いつも理不尽なことを言い、意地悪や無茶をおしつけてくる赤ん坊。

だが、いざという時はこうして力になってくれる。支えてくれる。

「リボン、ありがとう。」

ツナが礼を言うと、リボンは「ふん」と鼻を鳴らして笑った。

その姿はなぜかあたたかい存在に見えた。

(心配するな、ツナ。)

おめえはおかしくなんかねえ。

例え今のおめえがおかしいとしても、おめえの仲間は離れたりはしねえからな。

T i a c c e t t o p e r q u e l l o c h e s e i .

…あるがままの君を受け入れる。

「まあ、いずれおめえはマフィアのボスになってそれが普通になるんだがな。」

「感動を返してよ。」

標的155 一段落

「十代目！」

「ツーナ！」

「あ、獄寺くん、山本！」

ツナがプロメツサに右腕の包帯をかえてもらっている途中、部屋の扉が開き、少し汚れている二人が顔を覗き込ませた。

何やら二人は疲れている様子で、力無い笑顔をしていた。

どうしたのだろう、と思いツナは二人に問うた。

「二人とも、何してきたの？」

「え、ああ、少し新技のデータ採取を…」

「そしたらなんか獄寺と勝負みたいな感じになっちゃってさー！」

あはは、といったものように笑い、山本は服についた汚れを手で払う。

獄寺は小さく舌打ちをして、ソファに腰掛けた。

すると、また扉が開きパソコンを手に持つオスカルが現れた。

「あ、お疲れみんなー」

「オスカルもお疲れ様」

ツナの怪我の手当てを終えたプロメッサが笑顔で答えた。
救急箱のふたを閉め、いそいそとオスカルの肩に飛び乗る。

オスカルがため息をついて首をならすと、ポキポキと骨が鳴った。
そのままどっかりと椅子に座り、パソコンを開く。

「二人のデータも取れたのか」

リボーンがオスカルのパソコンを覗き込む。

「ああ」とやけに疲れたような声で返事をし、オスカルはキーボードを打つ。

「どうしたの、そんなに疲れたの…?」

「ん、ああ…なんだかね、いつもより疲れてしまったみたいだ」

プロメッサが四本の足でオスカルの肩をほぐす。

目頭をおさえてまたため息をつき、オスカルはうなだれた。

だがパソコンを操作する手は止まらず、カタカタとキーボードの音が続いていた。

「…はい、これがみんなのデータ結果だよ」

パソコンの画面がかわり、それをリポーンに見せる。リポーンはじつと画面を見つめた。

「……あいつらの力はまだ伸びそうか？」

「え、まあ…伸びるんじゃないかな、若いし。」

「若いりやなんでも出来るわけじゃないんだよ、オスカル……」

曖昧な返事をしたオスカルにプロメツサは苦笑いをする。

だがリポーンはそれを肯定するような言葉を発した。

「確かにな。若いってのは力になるしな。あいつらも若さでここまでできたのかも知れねえ。」

「え…そんなもんなの…？」

「若いときにいろんなことをしたくなるじゃねえか。窓ガラス割ったりする時期があるだろ。」

「それはごく一部の人間だよなー」

オスカルが笑い、リポーンは言うだけ言って再び画面を見つめる。

もうプロメッサは黙るしかなかった。

何が正しいのかわからなかった。

二人の言うことは冗談か本気が判断することができなかった。

そんなプロメッサをよそに、リポーンは食いつくようにパソコンの画面を見ている。

(……思ったより、数値が高いな……)

少し感心したようにリポーンは一人頷く。

だが、彼は凄腕のヒットマン。

知力、能力などはかなり優れているからなのだろう、この数値では満足しないらしい。

(現時点でこれくらいなら、まだ伸びるはずだ。あいつらの可能性はまだわかんねえからな。…それに、)

ちら、とソファに座って会話をしているツナたちを見遣る。

また獄寺が山本に何か文句を言っているらしく、それをツナが苦笑いで止めていた。

(…まあ、若いしな。)

ふっ、と口元を緩め、一人笑んだリボーンは再び画面に視線をうつした。

……ズズズ

ある森の奥、深い洞窟の中で何かがこの音が響く。

忌ま忌ましいほどの邪気を放つそれは、暗くて姿は見えないが、音からしてかなりの大きさである。

「……………グルル……………」

低い唸り声をあげたそれは、ぎらりと細い目を光らせた。

それは偶然か否か。

誰も知らないその暗闇で、奴は静かに目を覚ました。

誰にも気付かれず。

ゆっくりと、運命が軋みだした。

標的155 一段落(後書き)

き、昨日更新できず…ごめんなさい！
気付いたら寝てました。え！なぜ！

今回はだらだらとつつ、重要なことを出しました。
いつ出せるかわかりませんが…それまでお待ちください。
今月中には出ますよ(長い)

ひとまず彼らに夏休みを与えたい…です！

読んでいただきありがとうございました！

標的156 終業式

「学生の本業は勉強であり、本来であるならば夏休みという……」

マイクが声をひろい、スピーカーから大音量で流される。

その長々としたつまらない話は、学生たちの耳には届いていない。

学生だったら誰もが体験したであろう、学校長の長い話。

それを真剣に聞く者はちらほらといるだけで、ほとんどの者は早く終わることを願っている。

たとえば、この暑さの中であってもだ。

体育館というものは、風通しがよくないといけないものだが全校生徒や教師が集まると風などまったく吹かない。

蒸し器状態の空間で、長く、どうでもいい話を聞かされる。

それは一種の拷問ではないかと思ってしまうほどだ。

もちろん、その蒸し暑さの中では熱中症などで倒れてしまう人は少なくはない。

だがたとえば生徒が倒れても学校長は話をやめようとはしないのだ。

それを「鬼だ」と呟いて手で作られる微風を感じていたツナは、も

しかしたらこのまま溶けて消えてしまふのではないかと思っていた。ちら、とあたりを見渡せば獄寺は時折舌打ちをして学校長を睨みつけており、山本はバットを持つ構えをしていた。

他にも俯うつむいている生徒や、コソコソと友達と話をする生徒など、好き勝手にしている生徒はなかなか多い。

「…早く終わらないかなー」

ため息をついて天井を仰あおぐ。
ふらりと一瞬目眩めくらがするが、頭の中に響いた声で我に返った。

(……ツナ、平気か?)

「あ、徳松起きたんだ。」

新技のデータ採取の後、疲労がたまり眠りについたままだった徳松が目を覚ましたらしい。

目覚めたばかりであるというのにツナのことを気にかけている。どうやらこの暑さやだるさが徳松にも伝わっているようだ。

「暑くて長くて…きついけどね。徳松は大丈夫？」

（ああ、心配ない。ただツナのたるさが伝わってきたから気になっただけだ。）

ツナは声には出さず、頭の中で言葉を並べて会話をする。

時折、こういうことが出来るのは便利だと思う。
授業中でも徳松と会話ができたりするのだ。

「もうすぐで終わりそうだから、心配してくれてありがとう。」

（礼には及ばんだろ。）

楽しい時間は早く過ぎる、というのはなんとなくわかる。

徳松と会話をしていると、あっという間に学校長の話は終わった。

終業式を終え、教室に帰ればすぐに成績表が返された。

喜んだり落胆したりと、生徒たちが様々な表情を見せる中、ツナは何やら微妙な表情をしている。

（…どうした、ツナ。不満か？）

「不満っていつか…何とも言えないなあって……」

ツナは苦笑いをして、成績表を見つめる。

期末テストをいつもより頑張ったので、そのおかげで通常よりは成績は良かった。

だがやはり、どうリアクションをしていいのかわからないものだった。

すぐにそれをかばんにしまい、ツナは窓の外を見た。

空は遠く、蝉がけたたましく鳴いている。

吹く風は生温いが、それがさらに夏を実感させた。

「沢田」

頭上から声が聞こえ、見上げると担任の教師がツナを見下ろしていた。

「は、はい…」

「すまないが、この封筒を日向井ひむかいに渡してくれないか？」

「日向井ひむかい……あ、結加ちゃんにですか？」

手渡されたのは茶色のA4サイズの封筒。なにやら分厚い。

「あいつ、今故郷に帰ってるだろ。成績表とかいろんな書類を入れといたから、渡してほしいんだ。お前の家に居候してるんだろ？」

「あ、はい。わかりました。」

ツナが素直にそれを受け取ると、「頼んだぞ。」と一言残して教団に戻っていく。

終業式とは打って変わってHRはすぐに終わった。

ツナがかばんに配られた宿題などをしまっていると、獄寺と山本が荷物を抱えて現れた。

「十代目、帰りましょう！」

「あ、うん。」

ツナもかばんを肩にかけ、二人と一緒に教室から出ていく。

外に出ると、強い日差しが肌につきささった。

「疲れたのなー、成績も微妙だったしさっさと帰って昼寝でもすっかなー！」

「ばか、昼寝してる暇なんかねえだろ！帰ったら荷物をまとめねえといけねえんだよ！」

「あ、そっか。」

山本は大きく伸びをしながら笑い、獄寺は山本を睨みつけて舌打ちをする。

ツナたちが新技のデータ採取をした日、リポーンが三人を集めてこう言った。

「夏休み初日から、ここ、オスカルの研究所で合宿をするぞ。」

リポーンの説明だところだ。

新技を強化させるため、また新たな強力な技を作り出すために設備の整ったオスカルの研究所に寝泊まりをするのだ。

期間はどれくらいになるかわからないらしい。

もちろん夏休みの課題などはしっかりとやらなければいけないと言
う。

聞けば、オスカルが部屋を用意してくれるとのこと。

まるで未来のボンゴレアジトだなとツナは思った。

今日は終業式。

そして明日は夏休み初日。

だから今日のうちに荷物をまとめなければならぬのだ。

まあ、それはいいとして。

「びつくりしたのが…お兄さんやランボたちも参加させるってこと
だよね……」

ツナが苦笑いをする、獄寺と山本も同感して頷く。

「クロームや雲雀にまでも新技を作らせるんすよね？」

「それはオレも驚いたのな。てかクロームはともかく雲雀は無理だ
と思っせ。」

「だよー……リボーンの奴、何考えてんだろ。」

ツナはため息をついて、肩をすくませた。

遠く離れた空には大きな入道雲。

真上にある太陽の光が遠慮なく照り付けている。

何やら騒がしい夏休みが始まりそうだな、とツナは苦笑いをした。

標的156 終業式（後書き）

やっと…終業式…です……。

これで心置きなくみんなを動かせますね。よかったです。

なぜ学校長の話はあんなに長いのでしょうか。

わたしの学校では、今年赴任した方なのですが話が一分もないので
楽です。

しかし立つたままなので倒れてしまう人がいます。

あれは地獄だと思います。

台風、今回はなかなか被害が大きかったですが、皆様は大丈夫で
したか？

わたしは雨に打たれ、石みたいな雨粒が目当たってしばらく視力
を失いましたが大丈夫です。

今ではばつちり見えます。

強風で自転車が煽られ転びそうになりましたが大丈夫です。

が、学生って大変…！

読んでいただきありがとうございます！

標的157 夏休み初日（前書き）

お久しぶりです、ゆか空です。

更新停止につきましたは、多大なるご迷惑をおかけしてしまい、まことに申し訳ございませんでした。

標的157 夏休み初日

これは、数日前の出来事。

ツナたちの知らない出来事。

……イタリアにて。

「ああ、帰ってきたね。おかえり、ロンジと結加^{ゆい加}。」

「ただいま帰りました、九代目。」

「お久しぶりです九代目！」

ボンゴレ本部のある部屋：ボスである九代目の部屋に、ロンジと結加^{ゆい加}は訪れていた。

先日、突然九代目から一時帰国するようにとの命^{めい}が下ったのだ。

二人は何かあったのだろうか、とも思ったが、問題が起こったというような内容は一切聞かされていない。

理由もわからぬまま、二人はイタリアに帰国したのだ。

「疲れただろう。そこにくつろいでくれ。」

二人を気遣い、九代目はソファに座るようにと促す。
一言礼を言い、腰掛けた二人の向かい側に九代目が座った。

「…それで、あの、用件は何でしょう?」

結加が不安そうに問うと、九代目は微笑んだ。

「そんな心配しなくていいんだよ。ただ君に渡したいものがあったね。ロンジは付き添いで来てもらったんだ。」

「わたしに?」

「ああ。ちょっと待っててね。」

九代目が席をたち、扉を開け部屋をあとにする。

ロンジと結加はお互いの顔を見合わせ、首を傾げた。

しばらくすると、扉が開き九代目が戻ってきた。

だが九代目は両手を背中にまわし、にこにこ笑っている。

「きゅ、九代目…いかがなさいました？」

ロンジが不審に思いたじろぎながら問う。

すると「ふふ」と笑い、九代目が両手を前にまわした。

その途端。

「…え…！？」

結加^{ゆいか}が驚きの声をあげた。

これは、数日前の出来事。

ツナたちの知らない出来事。

……イタリアにて。

「つ、ついたぁー……」

頭の炎を弱々しく燈らせ、トンノはうなだれた。

翼はだらしなく広げられ、倒れ込むように地面に寝転がる。

「お疲れトンノ……ごめん、病み上がりに沢山働かせちゃって。」

ツナが優しくトンノを抱き上げ、苦笑いをして詫びる。

それにトンノは唸り声で答えた。

今日は夏休み初日。

しばらくオスカルの研究所で生活するため、ツナたちは荷物をまとめてトンノに運んでもらっていた。

ツナ、リボーン、獄寺、山本と、その四人分の荷物を一度で運ぶのには無理があった。

だからトンノは並盛と研究所の長い距離を何度も往復したのだ。

病み上がりから時間が経っていない小さな身体にはそれはかなり負担がかかった。

「とにかく…中に入ろう。」

ツナはトンノを抱え、沢山の荷物を持ち階段を降りていく。

時々その重さにふらつくが、なんとか耐えて一歩一歩慎重に下る。

「大丈夫ツスカ、十代目。オレが荷物をお持ちしましょうか？」

「い、いいよ獄寺くん。君も荷物重いだろっし…。ほら、もうすぐだから大丈夫だよ。」

心配そうに声をかける獄寺に振り返り、ツナは笑ってみせた。

獄寺は「はい…」と返事をする。

だがそれでも心配らしく獄寺はいつでもツナの手助けができるように後ろからツナを見守っていた。

「いらっしやい、みんな。」

重い扉が開かれ、オスカルが笑顔で出迎える。

オスカルには頭部にオレンジの炎を燈し、真っ黒な毛並みの子犬のプロメッサが尻尾をせわしく揺らしていた。

「オスカルさん、あの…またトンノが体調を崩してしまっただけですけど……」

「おやおや……」

ツナの腕の中でうなだれているトンノを見て、オスカルは少し慌てたように駆け寄った。

「…オスカル、トンノの治療引き受けるよ」

ひょいっと肩から飛び降りたプロメッサは、大型犬の大きさになりトンノを背中に乗せる。

ぐったりしているトンノは「うううううう」と小さな唸りながらプロメッサに運ばれていった。

「…あの子も少し、体力つきたいんじゃないかな」

「そ、そうですね……」

「最近平和ボケしてるからな。あいつにも課題を出すか。」

去っていくプロメッサとトンノを見送りながら、オスカルとツナは苦笑いをする。

リポーンは「ひとまず体力を戻さねえとな」とため息をついた。

標的157 夏休み初日（後書き）

お、覚えていらっしやいますか…ゆか空です。

この度は、「その先には。」更新停止につきまして、多大なるご迷惑をおかけしてしまったことを、心よりお詫び申し上げます。

新学期に入りまして、いよいよ受験を目の前に控え、さらにはテストや予習復習、小テストや文化祭体育祭の準備で小説を更新する時間がありませんでした。

本当にごめんなさい。

一週間が、とても長く感じました。

毎日更新を目指すと言ったのに一週間も更新出来ず…。

ですが更新を停止している間も、多くの方からお言葉をいただきました。

ほんとに、うれしかったです！

今週は金曜までは毎日更新出来るはずです。

土日は…部屋のもようがえが

こうして更新出来たことがとてもうれしいです。

こんなぐだぐだなわたしですが、今後ともよろしくお願いします。

標的158 Alea jacta est (アーレア・ヤクタ・エスト)

すでに始まっていた。

誰も知らないところで、ひっそりと。

黒い欲望が重々しく、
禍禍まがまがしくあたりの空気を、光を、すべてを呑
む。

終わりの始まり。

それは何をもたらすのか。

そのまま、終わるのか。

それとも、新たな始まりか。

誰にも止められない。

今は。

誰も、気付いてはいないのだから。

A l e a j a c t a e s t
アレア・ヤクタ・エスト

……
賽は投げられた。

「……………」
「？」

ぴくり、小さく肩が震えた。

その途端に、ぞわぞわと悪寒が走る。

それは、恐怖にも似た感覚。

「どうした、ツナ。」

「んぎゃああああっ!!」

長く続く廊下に断末魔のような叫び声が響き渡る。

あまりにも大きいそれは、空気をびりびりと揺らした。

「うつせえな。」

ちっ、と舌打ちをしてリボンが迷惑そうに顔をしかめる。

我に返ったツナの顔が一気に青ざめ、「ひいひいー!!」「ごめんなさいいひいひい!!」と必死に謝る。

リボーンの問題に阿呆な声を出し、ツナは目を丸くする。

「な、何か、って……」

「とぼけんな。おめえ、確かに今何かを感じ取っただろうが。」

「なん……!」

なんで知っているんだ。

そう言葉にしたかったが、それは叶わなかった。

動揺によって声が出なくなった。

吐き出されるのは言葉ではなく二酸化炭素だけであった。

「気付かないわけねえだろ。凄腕のヒットマンなめんじゃねえ。」

ふん、と鼻を鳴らしリボーンは腕を組んだ。

しばらく動揺していたツナは落ち着きを取り戻し、口を開いた。

「い、いや……ちょっと、嫌な感じがしたんだ……」

「嫌な感じ？」

ツナは小さく頷き、続ける。

「なんか、悪寒…みたいなの。とにかく嫌な感じだった。」

「どこからわかるか。」

「…どこから………？」

悪寒によりたった鳥肌をなくすように腕をさすりながら、ツナは先程の感覚を思い出す。

「えーっと………」

たしか、悪寒を感じたのは。

「……「こつち？」」

ツナは首を傾げながら左を指差す。

その方向を一度見て、リボーンは「左……北か」と呟いた。

その言葉にツナは疑問を感じる。

言葉の意味を説明するべく、リボーンは口を開いた。

「様々な国などでは、左は不吉な方向と考えるところが多い。北は…日本では北枕は駄目だとか言うが、あんなん問題ねえ。問題なのはおめえが指差したのが左ってことだ。」

「北枕は駄目だって聞くけど…え、問題ないの？」

ツナの疑問にリポーンは無言で頷く。

ある説では、釈迦が入滅する（亡くなる）際に、頭を北にしていたことから死者も頭を北にして寝かせるようになったと言われている。だが、いつからかそれは「北枕＝不吉な方向」という考えになってしまった。

今では科学的に北枕は分析されており、それは健康的な寝方であると言われている。

人間の体内には鉄分があり磁界というものが存在している。頭を北にして寝ると、地磁気に逆らうことのない自然的な向きになるために、血液の流れがスムーズになるのだと言う。

さらに、風水でも北枕は金運がアップすると言われており、他にも運氣の上がる向きと言われているのだ。

「だから北枕は別に悪いことじゃねえ。個々の意見はあるがな。北枕にしたら金縛りにあって幽霊を見ただとか。」

「へ、へえ…そうなんだ…。」

「だが左ってというのが気になるな。確か左は山だ。山に何かあるの

かも知れねえな。」

もし悪寒を感じたのが右、つまり街であるならば悪意を持つ人間の思念が伝わってきたのかも知れないとも考えることができる。

だがツナが悪意を感じたのは左、つまり山だ。

山に人は滅多にいない。

いるのは、動物や昆虫ほどだ。

「何かあるのか？」

リボーンは眉をひそめて左を見た。

そこには壁しかない。

だがその向こうには山のある土地がある。

そこで、何かが起きているのだろうか。

何の悪寒なのか。

すべてが、謎であった。

すでに始まっていた。

誰も知らないところで、ひっそりと。

黒い欲望が重々しく、禍^{まがまが}禍しくあたりの空気を、光を、すべてを呑^のむ。

終わりの始まり。

それは何をもたらすのか。

そのまま、終わるのか。

それとも、新たな始まりか。

誰にも止められない。

今は。

誰も、気付いてはいないのだから。

A l e a j a c t a e s t
ア・レ・ア・ヤクタ・エスト

……
賽は投げられた。

標的158 Alea jacta est (アーレア・ヤクタ・エスト) (後

Alea jacta estは、アーレア・ヤクタ・エスト確か古典ラテン語で、「賽は投げられた」と言う意味です。

これは共和政ローマ時の軍人及び政治家のカエサルという言葉です。

彼は第一回三頭政治を行った人で、元老院に逆らい軍を率いていたとき、ある川に行く手を阻まれてしまったのですが、その時に冒頭の「Alea jacta est」と言アーレア・ヤクタ・エストって見事川を渡ったらしいのです。

昔と今では解釈はことなるようで、「運命の歯車はもう廻ってしまった」という解釈が今は一般的です。

1923

世界史の授業で習ったので多分あってますが…間違ってたらごめんなさい。

その前に話が難しくてごめんなさい！

学校の先生に詳しいことを聞いてみましょう。ここで説明すると長くなるので…。

読んでいただきありがとうございます！

標的 159 北

「え、北？」

「ああ、北だ。」

「なんだい、藪から棒に。」

突然問われたオスカルは目をぱちくりと瞬かせた。

だがそんなオスカルの反応をよそに、リポーンは答えを促す。

「理由は話すが、今は質問に答える。北の山には何かあるのかって聞いてんだ。」

「相変わらず勝手だなあ……。北の山……。何かあったかな。」

オスカルは考えるしぐさをして、机に並べられたファイルを取り出し、しばらくとめくる。

先程、廊下でリポーンはふとツナの顔を見た。

すると、ツナは怯えたような、恐怖を感じているような表情をしており、顔色は悪かった。

身体は小刻みに震えていたし、腕には鳥肌が立っていた。

何かと問えば、左…北の方向から悪寒を感じたのだと言う。

その原因を探るべく、リボーンはこうしてオスカルの自室を訪れていた。

しばらくすると、「あ。」とオスカルが声をあげ、手を止めた。

「ん、なんだそれは。」

「この地域一帯の地図や資料さ。」

「見せてみる。」

「はいはい。」

オスカルはソファに座るリボーンにファイルを手渡す。

リボーンがそれに見入っている間、喉の渴きを潤そうとオスカルは自室の隣にある給湯室へと入っていった。

(……山ばっかだな。)

地図と資料を照らし合わせて、見比べてみる。
だが、それはやはり山しかない。

(ツナが感じた悪寒は……なんだったんだ?)

おそらく、超直感が働いて感じ取ったのだろう。

超直感に間違いはない。

ボンゴレのボスが持つに相応しい、優れた直感なのだ。

そう簡単に使えるものではないし、ましてやそう簡単に授かるものではない。

だから、ツナの感じ取った悪寒は間違いではないだろう。

(何か、何かあるはずだ。)

リポーンは目を凝らし、地図と資料を見つめた。

だが、やはりなにもない。

悪寒の原因は山ではないのだろうか。

リボーンはそう思いはじめ、ページをめくった。

「……」

そのページを見た途端、リボーンの様子が一気に強張る。

そして紙に穴が開いてしまいそうなほど、リボーンはそのページを見つめた。

「……匂うな。」

怪しい。

リボーンはそう思った。

長年の、勘で。

「北の山……ねえ。」

イタリア人らしくなく、やかんでお湯を沸かしながら、オスカルはぼつりと呟いた。

妙なことを聞くものだ、と思ったが、リボーンのことだから何かあったのだろう。

そんなことを考えつつ、オスカルは紅茶の葉を取り出した。

「…あ、そういえば。」

こんなことを聞いたことがある。

星に守られしある村に

魔物が現れ不幸を招く

それに悩み歎く村人は

怯えながら生きていた

村に現れし旅人は

不思議な力を用い^{もち}

魔物を山の奥深く

真つ暗な洞窟^{どうくつ}へと

封印して去りゆく

再び村に平和が訪れ

村人に平和が戻った

星に守られし村

村を救ったある旅人

その旅人が誰なのか

それは誰も知らない

「確か、その村は街に移って村のあったところは手のつけられない
荒地地になったみたいだけど……」

トレイにカップなどを乗せ、オスカルはまた独り言を呟いた。

「……ああ、その方向がここから北だったなあ。」

標的159 北（後書き）

す、すみません！

昨日は眠って更新できないという恥ずかしい理由で……あの、ごめんなさい（笑）

さてさて、小説の展開がかわってきましたが……いかがでしょう。

わたしの考えはわかりやすいので、展開がわかってしまっんじゃないかと不安ですが……。

昨日は体育祭だったので、見事足を負傷して不思議な痣が沢山できました。

若い子はいいなあと思いました。

青春もしました。楽しかったです。

明日も更新できるようにがんばります！

読んでいただきありがとうございました！

標的160 北の山の昔話

むかしむかし、まだこの地が未開だったころ。

山の中のある洞窟ほくに魔物が住むと言われていました。

その近く、山のふもとに小さな村があり、村人たちはいつも魔物に怯えていました。

魔物は、たまに村を干渉しに下りてくるのです。

その度に家畜や穀物、さらには人間までもを奪われ、村人たちはいつも怯えていました。

いつ、いつ奴が来るのだろうか。

今日か、明日か、ああ…それとも、今？

常に怯えていなければならぬ生活に、村人たちは毎日涙を流していました。

ある日、村に一人の人間が迷い込んできました。

彼は遠くの寺の僧らしく、修行のために旅をしているのだそうです。

しばらく、ここにおいでください。

僧はそう言い、頭を下げました。

優しい村人たちはその僧を快く迎え入れました。

ですが、魔物のことは話しておかなければと思い、彼にすべてのことを話しました。

話を終えると、僧は無表情で、無言でした。

ですが、それはすぐに笑顔へとかわり、明るい声で言いました。

私が、その魔物を封印してみせましょう。

その日の夜、僧と村人たちは村の入り口で魔物を待ちました。

星の见えない、くすんだ夜空の日。

そついつ日に魔物はあらわれやすいのです。

松明^{たいまつ}に炎を燈し、彼らは山をじっと見つめていました。

すると、地響きのような音が村に、山に鳴り響きました。

きたぞ、奴がきたぞと村人は叫び逃げ回ります。

ですが、僧だけは動かずに山の方向を見つめていました。

どすん、どすん、と重い音が近づいてきます。

光はなく、地面で燃えている松明^{たいまつ}とほんの少しの月明かりで周りが見えるくらいです。

ふと、前が真っ暗になりました。

僧が上を見上げると、村人が叫ぶのは同時でした。

魔物だ、と。

その瞬間、僧は顔をしかめました。

魔物の放つ邪気がとても酷いものだったからです。

ぞわぞわと、ずっと感じていた悪寒。

ああ、なんて気持ち悪いんだ。

早く、鎮めなければ。

もはやそこには僧と魔物のみ。

ひとつ、風が吹き松明の炎を吹き消してしまいました。

ぎらり、と魔物の目が輝きました。

僧はひとつ深呼吸をし、地面を蹴りました。

太陽が顔を覗かせ、村に光が戻ってきます。

逃げ隠れていた村人たちが恐る恐る、村へと戻ってきました。

すると、村人たちは言葉を失いました。

村が、乱れていないのです。

何も、壊されていないのです。

家畜も穀物も全部、何一つ欠けてはいなかったのです。

すると、壁に一枚の紙を見つけました。

それには、こう書かれていました。

魔物は無事に、封印しました。

この先の洞窟の奥深くに眠らせています。

封印が解かれないかぎり、この村に魔物は現れないでしょう。

辺りを見回しても、僧の姿は見えません。

名前も、何も聞いていなかったので、彼が寺の僧だということ以外、何もわかりませんでした。

こうして、村に平和が訪れたのです。

星に守られしある村に

魔物が現れ不幸を招く

それに悩み歎く村人は

怯えながら生きていた

村に現れし旅人は

不思議な力を用い^{もち}

魔物を山の奥深く

真つ暗な洞窟^{どうくつ}へと

封印して去りゆく

再び村に平和が訪れ

村人に平和が戻った

星に守られし村

村を救つたある旅人

その旅人が誰なのか

それは誰も知らない

標的160 北の山の昔話(後書き)

また…同じ過ちを繰り返してしまった…!

すみません昨日も寝てしまい更新ができませんでした!

本当にごめんなさい…!

「あたりめえだろ。オレはボンゴレの血はひいてねえ。」

「…じゃあ、ただの勘か……」

リボーンの向かい側に座ったオスカルは、紅茶の用意をしながら語りだした。

「星に守られしある村に

魔物が現れ不幸を招く

それに悩み歎く村人は

怯えながら生きていた

村に現れし旅人は

不思議な力を用い

魔物を山の奥深く

真つ暗な洞窟へと

封印して去りゆく

再び村に平和が訪れ

村人に平和が戻った

星に守られし村

村を救ったある旅人

その旅人が誰なのか
それは誰も知らない」

「……なんだ、それは。」

「ここ周辺の言い伝えだよ。」

貸して、とオスカルはリボーンの持つ資料と地図に手をのばす。

リボーンは今の言い伝えを疑問に思いながらも、オスカルにそれを渡した。

そしてオスカルは何かを探すように資料のページを次々とめくって
いく。

「……あ、あった。」

オスカルがリボーンに見やすいように資料を逆にして見せる。

そこに綴られているものにリボーンは釘付けになった。

星に守られし村。

その「星」とは、宇宙にある星ではなく、村に伝わる秘宝である。

秘宝とは、円盤の真ん中に石が埋め込まれているもので、その石が美しく光を発することから「星」と呼ばれるようになった。

だがそれは普段光を発することはなく、月の出る夜のみ輝くのだという。

不思議なそれは、昔からその村を災害などから守るものとして崇められていたのだ。

村の人々は、それを「星守石」と呼んだ。

だが、それがある日突然消えたのだ。

謎の僧が現れ、彼が魔物を封印した後に。

一時は、その僧が星守石を盗んでいったのではないかと囁かれた。
だが、そんな盗つ人が命の危険を顧みず魔物に立ち向かうわけがない。

しかし、星守石はどこへ？

探せど探せどそれは見つからず、時が経つにつれて星守石は幻として語り継がれるようになった。

もちろんのこと、星守石が存在していた時に生きていた人などもうこの世にはいない。

だから星守石の有無は誰にもわからないのだ。

いつしか、村は山を離れ街へと移った。

そして星守石は忘れ去られてしまったのだった。

「…という事は、その星守石は今にはここにないんだな。」

「資料によるとね。でも、わたしが気になっているのはそれだけじゃないんだ。」

そう言うとオスカルは資料を退かして地図を手を持った。

そして、ある場所、リボンが怪しいと感じた場所を指差した。

「さっきさ、君ここが気になるって言ったたろうっ？」

「ああ。それがなんだ。」

「……ここなんだよね。」

苦笑いをして、オスカルは静かに言った。

「……魔物が封印されているという洞口だよ。」

標的162 悪寒の震源地

「まったく…なんだよいきなり呼び出してー……」

ぶつぶつと文句をこぼしながらツナは長い廊下を歩いていた。

その顔は不満そうで、口から文句が絶えることはない。

「プロメッサはなにか聞いてる？」

「わたしはなにも聞いてないけど。ただオスカルの部屋に寄ったら綱吉を呼ぶように言われたただけだもん。」

ツナの肩に乗っているプロメッサは困ったような表情を言った。

先程、リボーンと別れ用意された個室に着いたツナは、部屋を見回したあと、ベッドに潜り込んで昼寝をしていた。

するとそこにプロメッサが現れ、リボーンが呼んでいると眠っているツナを起こし連れ立たせたのだ。

「あー…眠いなー……」

何度目かのあくびをしながらも、ツナはオスカルの自室へと赴いた。おもむ

「あ、綱吉くんいらっしやーい！」

扉を開けると、にこにこ満面の笑みでオスカルが出迎える。

その隣には、優雅に紅茶を飲むリボーンの姿があった。

「なんだよりポーン、いきなり呼び出したりして！……って、あれ、みんなは？」

ツナはあたりを見回すが、部屋にはオスカルとリボーン以外誰もいない。

てっきり獄寺と山本も呼ばれたかと思っていたのだ。

「おめえだけに用がある。二人は呼んでねえぞ。」

「え、オレだけ？なんで？」

「それを今から話す。まあ、座れ。」

リボーンに促され、ツナは首を傾げながらも腰掛けた。

すると、突然目の前に見たこともない地図が出された。

授業で見る日本や世界の地図ではない。

「……………なに、これ。」

「ここ周辺の地図だ。」

「それがなんだって言うんだよ……………」

またひとつ、大きなあくびをするとリボーンが「あほか。」と言ってツナの頭を叩いた。

「いつ、痛いな！なんで叩くんだよ！」

「てめえがあほだからだろ。」

ふんっ、と鼻を鳴らし、さも自分は悪くないと言っかのよつな態度

をとる。

そんなリボーンに少しいらつきを覚えながらも、ツナは再び地図を見た。

地図には山ばかりで、所々に川などがあるのみだ。

(…この地図がなんだって言うんだよ本当に……)

あくびを噛み殺して、ツナは地図の下の方を見た。

……ゾワリ

「、！」

突然身体中を走った悪寒に、ツナは身体を強張らせる。

おそろおそろ地図の下部分を見つめる。
そして、地図上を指先をたどらせてみる。

……………ソワッ！

「っ、わぁ！！？」

ツナは声を上げて地図を落としてしまった。
その過剰な反応を見てリボンとオスカルが眉をひそめる。

オスカルが床に落ちた地図を拾い上げ、ツナに問うた。

「どうかしたのかい？ 顔色が悪いけど……………」

「…いや、あの……………」

ツナが戸惑いながら地図を見る。
すると、頬を冷や汗がたった。

(今の感じって……)

驚きと戸惑い、緊張や焦りなどの感情が次々とツナを襲う。

今でも、かすかに残る悪寒。

それは確かに、

(さっき感じた……嫌な感じだ……)

先程廊下で感じた悪寒。

それを今、地図に触れて感じたのだ。

「……どこに触れて、悪寒を感じたんだ？」

今だ顔が青ざめているツナに、リボンが静かに問う。

ツナは震える手をゆっくりと動かし、ある場所を指差した。

その瞬間、リボーンとオスカルは驚愕した。

ツナが指差したのは、先程リボーンが何か匂うと言った場所、つまり洞口だった。

しかもただの洞口ではない。

魔物が封印されているという、あの洞口だった。

標的163 帰国

「ここから悪寒がするんだな」

「う、うん……」

リボーンに問われ、怖ず怖ずとツナは頷く。

まだ身体に残る悪寒。

それは神経をも麻痺させるような、忌ま忌ましいものだった。

わけもわからないツナは、二人に問うた。

「あの……ここにはなにかあるんですか……？」

すると、リボーンとオスカルは押し黙った。
なにやら複雑な表情をしている。

ツナは二人が話すのをじっと待ち続けた。
せかすわけでも、促す^{うなが}わけでもなく。

そして間もなくしてオスカルが口を開いた。

「…これは、まだ確かめていないから…確証はないんだけど、ね…」

オスカルは何やら苦笑いをして、カップに紅茶を注いでいく。

そしてそれをツナに差し出し、資料と地図を取り出した。

「……昔、」

静かに、淡々とオスカルは語りだした。

ところかわって並盛。

きらきらと照り付ける日差しの下、一人の男と一人の少女は歩いて
いた。

「…あ、あつい……」

「日本はあついですね…イタリアの方がまだ涼しかったですね……」
屋気楼の見える道路の上で、イタリアから帰国した結加とロンジは
暑い暑いと言いながらも足を進める。

つい先程、帰国した二人は居候いせうしている沢田家に戻った。

だが、そこにはツナ、リボン、トンノはいなかった。

居間でくつろいでいたリーダーに問うと、

「あ？ああ、あいつらな、オスカルの研究所に合宿しに行ったぞー」

とどらしなく答えながら二人に一枚の紙を手渡した。

その紙には、こんなことが書かれていた。

チャオつす！二人ともイタリアから帰国したみてえだな。

お前ら二人が何で呼び出されたかは知らねえが、とにかくこの紙を見たら指示通りの場所に来てくれ。

オレたちは今、あの Oscar Accardo（オスカル・アツカルド）の研究所にいる。

理由はあとで話すが、ひとまず来い。

数日分の荷物も持ってこい。

地図を書いておいたが、それは誰にも見せるなよ。

リボン

「オスカルって…あのマフィアの間で有名な学者さんだよな？
綱吉くん、結局研究に付き合うことになったんだね…」

「そうですね…それにしてもまとまりのない手紙ですね………」

手紙をたたみ、ロンジは苦笑いをした。
そしてリボーンの言うとおりにオスカルの研究所に向かうために、
まずは荷物をまとめようと立ち上がる。

「……あなたは行かないのですか、リーダーさん。」

「んあ、あーオレはまだ呼ばれちゃいねえからな。リボーンが呼んだら来いって言ってたからまだ行かなくていいんだろ。」

大きくあくびをしながらそう答えると、「喉渴いたなー」とだるそうに起き上がり台所へと向かった。

すると、そのときはじめて家にリーダーしかいないことに気付く。

耳をすませるが、子供の声も何も聞こえない。

おそらく買い物にでも出かけているのだろう。

「結加さん、荷物をまとめ次第、すぐに向かいましょうか」

「うん、わかった!」

結加は笑顔で答え、2階へと駆け上がっていった。

あらかじめホテルに戻り偶然にも荷物をまとめていたロンジはソファで一休みしようとシャツをくつろがせた。

そんなこんなで、結加ゆいかとロンジは荷物を持ち炎天下の中足どり重く歩いているのである。

（ホテルに戻って荷物をまとめておいてよかった…こんな暑さの中無駄な距離は歩きたくないですからね……）

額の汗をぬぐい、ロンジはため息をつく。

視線を落とすと、結加ゆいかは暑そうではあるが元気に鼻歌を歌いながら歩いている。

若さってすごいなあ、と呟き年寄りにでもなったような気分になり、ロンジは空を見上げた。

そして、ふとあることを思い出した。

(……そういえば、)

「結加^{ゆいか}さん、九代目から渡された……あれはどうしたのです？」

「…あ、あれ？」

鼻歌をやめ、結加^{ゆいか}は暑さにも負けない笑顔で問いに答えた。

「ちゃんと持ってきたよ！」

「そうですか。はじめて見たときわたしも驚きましたが…綱吉様たちも驚いてしまつかもしれませんね。」

「えへへ、綱吉くんたちびっくりしてくれるかな！」

楽しそうに笑む結加^{ゆいか}を、微笑ましく思いながらもロンジはもう一度空を見る。

照り付ける太陽はひたすら眩しく、けたたましいのは蝉の声。

ロンジは深呼吸をして、笑みを残しながら足を進めた。

これから起る恐ろしいことなど、知るよしもなく。

標的163 帰国（後書き）

台風がきてますが…みなさま大丈夫でしょうか。

わたしの住む愛知県は朝からやばいらしいですが…みなさまお気を
つけてくださいね！

読んでいただきありがとうございます！

標的164 体験談

君は知っているかい？

迫っている危機を。

君はわかっているかい？

その身に起こることを。

君は、なにがあっても、

自分を保っていられるかい？

さあ、これからだ。

悪夢の予兆を、楽しむがいい。

「……と、言うわけなんだけど。」

パタン、と資料が閉じられオスカルがツナの顔をうかがう。

今までツナは、悪寒の原因の可能性があるとされる洞口についてや、この地域に伝わる物語などをオスカルから聞いていた。

聞き終わった今、ツナは頭の中で内容を整理しようと必死だった。

魔物、せいしゅせき星守石、僧……………

様々なことが頭の中をぐるぐるとまわり、さらにツナを混乱させた。

そんなツナを見て、オスカルは苦笑いをし、リボーンは呆れたと言
うかのようにため息をついた。

「…難しかった、かな？」

「あつ！いえ…そういうわけじゃ……なくもない…です。」

「結局難しかったんじゃないか。」

やれやれ、とわざとらしく肩をすくませるリボンに多少の反抗を覚えながらも、ツナは再び内容を整理しようと頭の中で連想させる。理解しようと必死なツナを見てオスカルは思わず吹き出し、それにツナは恥ずかしさを覚えた。

「資料と地図を見たほうがわかりやすいと思うよ。これ、好きに見ていいから。」

「あ、ありがとうございます…。」

オスカルに資料と地図を手渡されたツナは苦笑いをして礼を述べる。

ぺらり、と資料をめくれば思いのほか字数は少なく、ところどころにイラストや写真が掲載されており、読みやすい。

これなら大丈夫そうだ、とツナは資料に目を通していった。

「……なあ、オスカル。」

「なんだい、リボーン。」

ツナが資料に没頭しているあいだ、リボーンがオスカルに話しかけた。

「おめえは、その洞口に行ったことはねえのか？」

「うーん…行ったことはないなあ……」

眉をひそめて、オスカルは答えた。
だが、すぐに「でもね、」と言葉を付け足す。

「その周辺に行ったことのある人の話は聞いたことあるよ。」

「…聞かせる。」

静かにリボーンはその話の先を促した。^{うなが}

この近くの街に住むある年老いた男は、登山家でよくこの先の山を登っていた。

一人では物寂しいもので、いつも愛犬を連れて山に行っていた。

ある日、いつものようにその山を登っている途中、愛犬が騒がしく吠えはじめたのだ。

一体何事かとその男は思った。

どうやら愛犬はある方向を向いて吠えている。ただ、その方向を見つめて。

不思議に思ったその男は、愛犬が吠える方向に歩きだした。

歩けど歩けど愛犬の吠える声は止まない。逆にそれはけたたましさを増している。

しばらく歩くと、突然愛犬が吠えるのをやめた。

どうしたのだろうと愛犬を見ると、愛犬は身体を震わせ、何かに怯えているように見える。

その先に進もうとしても、愛犬が頑かたくなに拒むのだ。

仕方ない、と男は愛犬を繋ぐリードを近くの木に巻き付け、一人で先へと進んだ。

次第に薄暗くなる道。

ただ風が吹くだけで、鳥の囀りなどはまったく聞こえない。

不気味に思いつつも男は足を止めない。

恐怖よりも好奇心の方が勝っていたのだ。

すると、ぞわりと背中をなぶるような寒気を感じた。

それを疑問に思いながらも、男は前に進もうと足を踏み出そうとする。

だが、それは叶わなかった。

足が、まるで金縛りにあってしまったかのように動かないのだ。

どれだけ足を動かそうとしても、足はびくりとも動かない。

それに焦りを感じた男は必死に金縛りをとこうともがいた。

突然、金縛りがとけて不意をつかれた男は地面に倒れ伏してしまっ
た。

痛みに顔を歪めながらも目線をあげると、目の前には大きな洞口が
あった。

それを見た瞬間、男は言い表せないような恐怖に襲われたという。

何を見たわけでもない、何をされたわけでもない。

ただ、視界に洞口が入っただけなのに。

頭の中でサイレンが鳴り響く。

本能が男に告げる。

“逃げる。”と。

男は必死に逃げた。

足の動く限り、遠くへ。

途中、男はあることに気付く。

よく見れば、道には動物が倒れ伏していたのだ。

それはびくりとも動かない。

そう、死んでいるのだ。

さらに恐怖を覚えた男は速度をあげた。

来た道をひたすらに戻った。

ただ、あの洞口から離れたくて。

一心不乱に走りつづけた。

息も絶え絶えになってきた頃、聞き慣れた鳴き声が耳にはいつてきた。
た。

見ると、愛犬が尻尾を振ってこちらを見ていたのだ。

その姿を見て安堵した男は、無意識に泣いていた。

ぼろぼろと涙が溢れてきた。

それを止めることはできなかった。

しばらくの間、男は愛犬を抱きしめてその場にうずくまっていた。

それから男は、その洞口の方向には近づかなくなった。

いや、近づけなかった。

もう二度と、あのような恐ろしい体験はしたくない。

生きた心地のしない、あんな体験など。

それから何日か経って、男は足に違和感を感じはじめた。

最初は気のせいかと思っていたが、日に日に足が重くなっていく。

なんだろう、と男が足を見ると。

その足には、大きな痣ができていた。

まるで、何かが掴まっているような。

標的165 連行

オスカルが語ったのはある男の体験談。

それはあの洞口を実際に見たというもので。

話を聞き終わったりボーンの第一声は、

「ホラーか。」

という冷めたものだった。

1976

「足に掴まれたような痣だなんて、ただのホラーじゃねえか。」

「確かにホラーみたいだけど…もっと他に言うことないの?」

苦笑いをして聞くオスカルに、リボーンはきっぱりと「ない。」と答えた。

ひとつため息をつき、オスカルはツナの方を見る。

するとどうやらツナも今の話を聞いていたらしく、こちらを見て少

々青ざめていた。

顔色が良くないのが気になったが、オスカルはツナに問うた。

「綱吉くんは、今の話を聞いて何か思ったことはある？」

すると、ツナは小さく頷いてこう答えた。

「…ホラーみたいですね。」

オスカルはついに苦笑いから無表情にかわってしまった。

表情をつくることもできなくなった。

この話を聞いて、もっと他に思うことはあるだろうか。

何故二人そろって「ホラーみたいだ。」などと言っただろうか。

そんなオスカルを、プロメツサだけが理解できた。

ああ、呆れているんだな。

そう思いつつもプロメツサはオスカルを見つめていた。

そして次第にオスカルが憐れあわに見えてきたので、プロメツサは慌ててオスカルに質問をした。

「あ、あのさつ、途中で動物が死んでたって言ったよね？それってどういうことなの？」

「…え、ああ、えつとね……」

無表情だったオスカルが少しだけ微笑んだ。

質問をされ、表情が柔らかくなったオスカルを見てプロメツサは安堵のため息をつく。

「わたしもそれを疑問に思って聞いたんだけどね、わからないって言うんだ。多分逃げるのに必死だったから原因を突き止めようとも思えなかったんだろうね。」

「オスカルはその原因について何も調べてないの？」

「残念ながらね。でもそろそろ調べようかなと思っていたところなんだ。」

オスカルはソファから立ち上がり、服のしわを直す。

そして壁に掛けてあった重たそうなかばんを背負った。

「…え、まさか今から調べに？」

「そうだけど……」

そんな唐突な。とプロメツサは啞然としてしまう。

たった今話を聞いたばかりなのに、それはあまりにも突然すぎるのではないか。

だがオスカルにしてみればその話は随分前に聞いたことであり、調べに行くのには期間が空きすぎていると思っっているのだろう。

そう考えるとオスカルの行動はまったくおかしくない、とプロメツサは納得した。

「すぐに帰ってくるのか。」

ずっと黙っていたリボンが口を開く。

オスカルは考えるしぐさをして、首を傾げながら答えた。

「時間はかかるかもなあ…何せ山の洞口だしね。荷物は重いし。」

背負っているかばんを揺らしてみせると、かばんがガチャン、と音をたてた。

リボーンは「ふん」と鼻を鳴らし、にやりと怪しい笑みを浮かべる。

そしてリボーンは床に飛び降り、ツナの方を振り返った。

「じゃあ、オレたちも行くぞ、ツナ。」

「は!?!なんで!」

「その洞口がどんなものか気になるだろ。それに動物の変死についても原因を知りてえじゃねえか。」

「オレは気にならないし知りたくない!」

ツナは必死に行くことを拒む。

洞口から結構距離があるこの場所でも、地図を見るだけでも悪寒を感じるのだ。

現場に行けばどうなることか。

それを恐れてツナはひたすらに拒んだ。

だがこの赤ん坊はかなり強引だ。

ツナの言葉には耳を貸さなかった。

「よし、行くぞ。」

リポーンは赤ん坊とは思えぬほどの力でツナの足を引っ張る。

そのあまりの力にツナは敵わず、転びそうになりながらも連行されてしまった。

「本当にいいのかい？」

オスカルが心配そうに聞くが、リポーンは「問題ねえぞ。」ときっぱりと答えた。

それにツナが否定の言葉を投げつけるがやはりリポーンは無視をしたらまたツナの足を引っ張りつづけた。

「…行きたくない……」

ぼつりと呟かれた言葉は、虚しくも森に消えていった。

オスカルの研究所から無理矢理連れ出されたツナは研究所の入り口で大きくため息をつく。

だがそんなツナにお構い無しにリボーンは洞口へ行く道を確認していた。

「綱吉くん、大丈夫かい？」

「本当に行ってもいいの？」

オスカルとプロメッサがツナを心配して声をかける。

ツナは「もういいです。」と落胆しながらも答えた。

どうせ今抵抗したってあの赤ん坊に連れていかれるのだ。

だからツナはすでに諦めていた。

はあ、と何度目かのため息。

その直後、ツナは何かを感じた。

ピクリ、

後ろから視線を感じたツナは振り返って辺りを見回す。

だがなにもない。

ただ森が広がっているだけだ。

気のせいだろうか、とツナは首を傾げる。

だが、それは気のせいではなかった。

ガサガサッ！

「っ、何…!？」

茂みが音をたてて揺れた。
風など吹いていないのに。

ツナはその茂みをただ見つめる。

その方向は視線を感じたところであった。

ガサガサガサガサ

不気味に動く茂み。

ツナは身構え、まはた瞬きもせず茂みを凝視した。

ガササツ！！

「っ！？」

茂みから何かが現れた。

ツナが目が大きく見開かれた。

叫び声が聞こえたのは、すぐあとのことであった。

標的166 謎の物体現る(前書き)

我ながらタイトルのダサさに吹きました。(どうでもいいですね。)

標的 166 謎の物体現る

「うわあああああああ！！？」

森に叫び声が響き渡る。

リボンとオスカル、プロメッサはその叫び声のした方向を見た。

そこには、仰向けに倒れたツナがじたばたと手足を暴れさせていた。

「どうしたの綱吉くん！」

オスカルが慌ててツナに駆け寄りつつとする。

だが、それより早くオスカル足元をなにかがすり抜けた。

それは真つ黒な毛並みの子犬の姿をしたプロメツサだった。

「綱吉っ！」

プロメツサが素早い動きでツナの元へと向かう。

もしかしたら、敵に襲われたのかもしれない。

それを警戒してプロメツサは牙を剥き出しにし、鋭い睨みをきかせてツナの傍に駆け寄った。

だが、その警戒は虚しくも無駄なものとなった。

「…………え？」

プロメッサのオレンジの目が丸くなる。

牙を剥き出しにしていた口は間抜けなほどにぽかんと開けられてしまった。

その異変に気付いたオスカルとリボンもツナの傍に寄る。

そして二人もまた、プロメッサと同じように呆気にとられてしまった。

「……………なんだこいつは。」

リボーンがぼつりと言葉をこぼす。

地面には倒れているツナ。

その顔は啞然としている。

そしてツナの上には、何やら白いものが。

顔、四本の足、胴体、尻尾。

その見た目は、いかにも。

「……………い、犬……………?」

倒れたままのツナがそう言うと、白い犬（のような動物）は「ワンッ！」とけたたましく吠えた。

なぜこんな森に白い犬（のような動物）がいるのだろうか。

迷い込んだ飼い犬か。

それとも捨てられたのか。

ツナたちは白い犬（のような動物）の出現に驚いていた。

すると、ガサガサ、と茂みが揺れた。

ツナは倒れながらも身構え、リボーンたちも同じように警戒する。

ガサガサガサガサッ

ガサガサガサガサッ！！

ガササッ！

「っ！」

ひとときわ茂みが大きく揺れたあと、茂みから何者かが姿を現した。

空気がさらに張り詰める。

…と思われた。

「……は？」

「……あ？」

「……え？」

「……お？」

上からツナ、プロメッサ、オスカル、リボーンの声だ。

敵の出現と思っていたツナたちは拍子抜けしてしまった。

なぜなら、茂みから現れたのは。

「……あれっ、綱吉くんにリボンさん！」

毛先に少しくせのある茶髪の少女、結加ゆいかだったからだ。

「んなっ、ゆ、ゆい、結加ゆいかちゃん！？なんで！！？」

「っ、綱吉くんこそなんで地面にねっころがって…あー！！」

ツナを見てぼかんと口を開けていた結加は、次にツナの上に乗っている白い犬（のような動物）を見て目を見開いた。

そして慌ててツナに駆け寄り、尻尾を振る白い犬（のような動物）を抱き上げた。

「こんなとこにいたの！？だめじゃない、勝手に一人でどこかに行つて！あなたすぐ迷子になるんだからっ」

白い犬（のような動物）を抱き上げた途端、結加は白い犬（のような動物）を叱り付けはじめた。

それにツナたちは再び呆気にとられた。

突然ツナに白い犬（のような動物）が飛びつき、茂みから結加が現れ、その白い犬（のような動物）に説教を始めてしまったのだ。

状況に追いつけない。

今、何が起きている？

そんなことは、誰もわからなかった。

「あなたはいつも一人でお散歩してすぐ迷子になってるでしょ？なのになんでそれを繰り返しても懲りないの！寂しくて怖くて情けない声出して助けを求めろくせに！心配することうちの身にもなってよね！まだ理解できないようなら今度から首輪を、」

「あのつ、結加ちゃん！！」

止まない結加ゆい加の説教をツナが止める。

きよんとする結加ゆい加と叱られて耳を垂らす白い犬ゆい加のような動物。

説教が止まったのを見てツナは結加ゆい加に問うた。

「…あのさ、その動物、何？」

ツナが白い犬ゆい加のような動物を指差す。

すると先程とは打って変わって結加ゆい加は笑顔でツナの質問に答えた。

「えーっと、この子はpreceプレーチェ。ホワイトオオカミの子供です！」

そう言って結加^{ゆいか}は白い犬（ではなくホワイトオオカミの子供）をツナたちに見せるように抱き上げた。

垂れていた耳はぴんっと立ち上がり、「ワン！」と元気良く一声鳴いた。

「…………お、おおかみ？」

ツナたちはますます状況がわからなくなり首を傾げるしかなかった。

突然のホワイトオオカミの登場。

それはさらにツナたちを混乱させるものとなった。

標的167 所以(ゆえん)

「……お、おおかみ？」

「そう。でもただのおおかみじゃなくてホワイトオオカミ！」

ツナたちの目の前には、尻尾を揺らしてこちらを見つめるホワイトオオカミと、それを抱きかかえている笑顔の結加が。

突然の動物と人間の登場にツナたちは驚いていた。

「……えーつと、」

苦笑いをしながらツナは状況を整理しようと結加に問うた。

「な、なんで結加ちゃんがここにいるのかな……？あとの、ホワイトオオカミって……何者？」

「あー、わたしがここに来たのはリボンさんに呼ばれたからであ、呼ばれたのはわたしだけじゃないの。もう一人いるの。」

「は？」

状況を整理するために質問をしたのに、さらにツナの頭は混乱してしまっ。

結加^{ゆい}がここにいるのは、リボーンに呼ばれたから。

だが呼ばれたのは結加^{ゆい}だけではないのだと言っ。

他に誰が呼ばれたのだろうか。

それに、なぜリボーンはここに結加^{ゆい}を呼んだのだろうか。

ますますわけがわからなくなり、ツナが首を傾げていると、背後から「あ。」という誰かの声が耳に入った。

後ろを振り返ると、真夏なのに真っ黒なスーツをしっかりと着こなしている青年、ロンジが茂みから現れた。

「ロ、ロンジさん！！」

「お久しぶりです綱吉様。お元気でしたか？」

涼しげな笑顔でロンジはツナに挨拶をする。

ロンジの格好は見ているこっちが暑く感じてしまっただけであつたが本人は平然としている。

暑さを感じないのだろうか、と誰もが思ったがあえて誰も口には出さなかつた。

「なんでロンジさんまで…あ、結加ちゃんゆいかが言つてたもう一人つてロンジさんのことか！」

やっと謎がひとつ解けた。

リボーンが呼んだのは結加ゆいかとロンジの二人だつたのだ。

だがしかし、まだいくつか謎は残っている。

「じゃあ、なんで二人はここに呼ばれたんですか？」

「それがわたしたちにもわからなくて…リボーン様に一言“ここにこい”とのご指示が書かれたメモを渡されただけです。」

ロンジはすみません、と苦笑いをして謝る。

結加ゆいとロンジがここに呼ばれた理由は、二人も聞かされていないらしい。

という事は。

「リポーン、なんで二人をここに呼んだんだよ！」

ツナは小さな赤ん坊に視線を落として問う。

するとリポーンは表情を変えずにこう言った。

「まあ、こんなところで話すのもあれだ。一回中に入るぞ。」

そしてリポーンはさっさと階段をおりていく。

ツナたちはその後ろ姿をぼかんとしながら見つめていた。

「……………洞窟は、見に行かなくていいのかな？」

「ちゅあ……………」

洞窟を見に行くつもりで外に出たのに、とんだ無駄骨だ。

オスカルとプロメッサは本来の目的を果たせず少々不満ではあったがリボーンの後についていった。

結加ゆい加とロンジは例の洞窟のことなど知るよしもないので、二人がなんのことを言っていたのかわからなかった。

そんな中、ツナは洞窟に行かなくて済んだという安心でひとつため息をついていた。

「はい、ごっせ。」

「あ、ありがとうございます。」

「わざわざすみません。」

オスカルに紅茶を入れてもらい、結加ゆい加とロンジは礼を述べる。

おかしな対面を果たした三人ではあったが、それぞれ自己紹介をしていた。

少しずつではあるが三人は打ち解けてきたらしい。

「リボン、なんで結加ちゃんたちを呼んだんだよ。」

ツナが再びリボンに問う。

一人だけコーヒを口にしていたりリボンは、カップを置いて質問に答えた。

「二人に今のオレたちの状況を説明するためと、結加には技の上達、ロンジにはまわりの世話をしてもらいたいからだ。」

「技の上達と、まわりの世話？」

その意味があまりわからず、ツナは言葉を繰り返す。

リボンはそれに頷くと話を続けた。

「結加には“光玉”というものが使えるが、あまり使いこなせてないだろう。だからここで実践を加えて修行してもらおう。

ロンジには、ツナたちのサポートも兼ねて今まで通り世話をしてもらいたい。」

リポーンが視線を結加とロンジにうつすと、二人は笑顔で「はい。」
としっかり答えた。

そのために二人は大荷物を抱えていたのか、とツナも納得した。

そして、ツナはもうひとつの疑問を思い出し、次は結加に問う。

「それで、あの…そのホワイトオオカミって結加ちゃんのペットなの？」

ツナは結加の膝の上で大人しくしているホワイトオオカミを指差す。

ホワイトオオカミは首を傾げてツナをじっと見つめていた。

「うん、この子はわたしの家族みたいなものかな。日向井家には、昔からホワイトオオカミを飼う習慣があつてね、この子は6代目なんだよ。」

日向井、とは結加の名字である。

結加の話によると、先祖代々ホワイトオオカミを使役していたとい

その発端は謎に包まれているらしいのだが、結加ゆい加が生まれた時にはもうこのホワイトオオカミのprecheプレーチエはいたらしい。

それから十四年間、結加ゆい加の傍にはプレーチエが常にいたのだ。

「生まれた時からいたのに、なんでこんな小さいままなんだ？」

「それはわたしもわからなくて…お母さんの残してくれた手紙に理由が書かれてるんだけど、文字が色あせてしまっているのか読みにくくて…」

結加ゆい加は困ったような表情をして真っ白な封筒を取り出す。

封筒にははっきりと“結加ゆい加へ”と書かれているのだが、中を見ると確かにつつすらと文字が綴つづられていた。

リポーンがそれを受け取り、目を凝らしてみるがやはり読めないらしい。

「……おそらく、他人に知られてはいけないことなのかな。」

「そうかも知れない…。昔お母さんが言ってたの。このホワイトオオカミは珍しいものだから気をつけるようになって。」

結加がプレーチエを抱えて見つめる。

プレーチエは「ワンッ」と一声鳴いて尻尾を大きく揺らした。

すると、不意にプレーチエがツナの方を見る。

ツナはわけもわからずプレーチエと目があつたまま固まってしまった。

「プレーチエ、綱吉くんと遊びたいの？」

プレーチエの視線がずっとツナに向けられていることに気付き微笑んだ。

ツナを見つめ尻尾を振りつづけるプレーチエ。

それはただツナと戯たわむりたいという意味表示だけだろう。

その場にいた誰もがそう思った。

しかし、ツナだけは違った。

その青く光る瞳が、何かを訴えているように見えた。

標的168 脱走

God who protects my family .

A white , beautiful coat of fur .

Blue , clear eyes .

The state to hangs
wind seems
to be totally God .

A white wolf .

Eternally with us .

気付くのは、いつ？

「ここが、結加ちゃんゆいかとプレーチエの部屋だよ。」

「わざわざありがとうございます、オスカルさん！」

結加ゆいかが笑顔で礼を述べ、部屋の扉を開ける。

それと同時にプレーチエが結加ゆいかの腕の中から飛び降り、シンプルな部屋のつくりと家具をぐるりと見回す。

白くふさふさとした尻尾が大きくせわしなく揺れている。
早くもこの部屋が気に入ったらしい。

「しばらくここにお世話になるからね、プレーチエ。」

そう言うとプレーチエは「ワンツ」と一声鳴き、また尻尾を揺らした。

長旅で疲れた結加は、ベッドに寝転がりひとつため息をつく。

不意に襲ってきた睡魔に抵抗することもなく、結加は重くなったまぶたをゆっくりと閉じた。

それをプレーチエはおとなしく見ていた。

小走りでベッドに寄り、結加の顔をそつと疑う。

結加は寝息をたてて寝てしまっていた。

すると、プレーチエはベッドから離れて部屋の扉の隙間から廊下に飛び出す。

あたりをきよろきよろと見回し、鼻をすんすん鳴らしながらプレーチエは走り出した。

ガウンッ ガウンッ ガウンッ

バシユッ バシユッ バシユッ

広い部屋の中には、オレンジの炎が素早く動き回っていた。

火の粉が舞い散り、頬をなぶるのは己の炎から発せられる熱。

その熱さと激しい動作により、汗がぼたりと床に落ちた。

「ラストスパートだぞ。」

そう言うてにやりと笑んだりボーンは銃口を宙を舞うツナに向け引き金を引いた。

ガウンッ　ガウンッ　ガウンッ

目に見えぬ速さで放たれた弾は全てツナの姿をとらえている。

凡人であれば撃たれてしまっただろう。

しかし、ツナは凡人ではない。

(……………いけるか。)

ツナは掌てのひらを前にかざし、力を込めた。

バシユンッ！

グローブからオレンジの炎が放たれた。

それはすぐにいくつかにわかれ、きらきらと輝いて銃弾を包み込んだ。

…ピキ、

その瞬間、銃弾を包み込んだ炎が音をたてて色を変えていく。

ピキピキピキピキ！

炎は石へと姿を変え、銃弾のスピードをなくしてしまった。

そしてそれは銃弾としての力を失い、カツンと床に転がり落ちた。

「……まあ、いいだろう。」

にやり、と赤ん坊が笑う。

手に持っていた銃をおろし、それはすぐにカメレオンの姿へと戻った。

ツナは肩を上下させ、汗をぬぐう。

放たれた銃弾を炎で捕らえて、それを *Barbazzaledi*
バルバツァーレ・デイ・チエーリ
cieli で無効化する。

そんなことを先程から何度か繰り返していた。

リボーンによると、瞬発力と物事を見極める力を鍛えるためなのだから。
とか。

だが、これには集中力をかなり酷使してしまったようだ。

「……疲れた。」

はあ、とため息をついてツナは床に足をつく。

いつも凜としている超死ぬ気モードの表情には疲労が滲んでいた。

「しばらく休憩していいぞ。」

「…ああ。」

短く返事をして、ツナはかたい床に腰をおろす。

途端に疲れが身体を遅い、力を抜けば超死ぬ気モードがとけてしま
いそうなほどだった。

「…疲れた。」

ぼつりと呟き、ツナはまたため息をつく。

すると、なにやら背後に何かの気配を感じた。

この部屋にはツナとリボンしかない。

獄寺と山本は個室で寝ているし、結加ゆじかももちろんいない。
オスカルとプロメッサは自室で作業をしており、トンノは治療室に
いる。

だとすると、侵入者か。

ツナはゆっくりと背後をふりむく。

しかし、そこにいたのは。

「ワンッ！...」

「...プレーチエ？」

そこにいたのは、侵入者ではなく、白い毛並みのオオカミのプレーチエだった。

プレーチエは尻尾を振り、きらきらと青い瞳を輝かせている。

「...どうしたお前。何かあったのか？」

ツナはプレーチエを抱え、顔を覗き込む。

だがプレーチエはオオカミであり、人間の言葉は話せない。
もちろん、ツナはプレーチエの考えていることなど解せるはずもないのだ。

「…オオカミの言葉がわかったらな。」

苦笑いをしてツナはプレーチエの頭を撫でる。

すると、プレーチエがすすんと鼻を鳴らしはじめた。

その行動をツナは黙って見ている。

何か匂いでもするのだろうか。

試しに腕の匂いを嗅いでみるが匂いはまったくしない。

嗅覚のすぐれている生き物にしかわからないのだろうか。

ツナが首を傾げていると、プレーチエはツナの額に燈る炎に鼻を近づけた。

「…っ、危な、」

火傷をしたらどうするんだ、とツナはプレーチエを炎から離そうとするが、プレーチエは抵抗をする。

そしてプレーチエは、ツナの阻止を振り払いその勢いで真っ白な額

と炎をくつつけてしまった。

「っ！」

やばい、とツナは焦り目を見開く。

だがプレートエは悲鳴も出さず、動かない。

ジュワ……！！

その瞬間、プレートエから光が放たれた。

あまりの眩しさにツナとリボンンは目を閉じた。

God who protects my family

A white, beautiful coat of fur

Blue, clear eyes

The state to hang
wind seems
to be totally God

A white wolf

Eternally with us

気付きの好い？

それは、
すぐ間近に。

標的168 脱走（後書き）

しばらく放置しててごめんなさい！

更新しようとは思ってたのですが、学校から帰ってきたら勉強したりしてそのまま寝てしまったりと…タイミングを逃しました。

ほんとにごめんなさい！

今は考查期間中なのでまた更新がとまると思います。

二週間後には推薦入試を控えているので、満足に更新はできないかと。

ほんとにすみません！

読んでいただきありがとうございました！

標的169 狼の異変

契約を交わそう。

それはずっと続く契約。

わたしがお前を守るから、

お前はわたしを遣うがいい。

それはずっと絶えない契約。

お前の子孫をわたしの子孫が守るから、

お前の子孫はわたしの子孫を遣えばいい。

さあ、契約を交わそう。

「っ、プレーチエ!？」

目を腕で覆いながらツナはプレーチエを呼ぶ。

だが光は止まず、応答もない。

プレーチエがツナの額に燈る炎に触れた途端、プレーチエからまばゆいほどの光が発せられた。

その原因はわからない。

なぜ、プレーチエから光が発せられているのかツナにもリボーンにもわからなかった。

2021

「、プレーチエ、プレーチエ!」

「ツナ、どうなってんだ。」

リボーンが冷静に問うが、何も知らないツナにはどう答えればいいのかわからない。

「わ、わからない…プレーチエが、オレの炎、に、触れたら……」

ツナはとぎれとぎれに答え、まだおさまらない光に目を細める。

“……………La
guarnizione
e
statar
isolta”

「、なん…だ…?」

突然聞こえた声。

それは今までにまったく聞いたことのないもの。

だが、とても優しい声色。

「……な、にが……」

どうなっているんだ。

その言葉を紡ぐこともできず、ツナとリボーンは光にのまれた。

我が家系を守る神

白く美しい毛並み

青く澄んだ瞳

風にたなびくその様子は、まるで神のようである

ホワイトオオカミ

永遠に我らと共に

“ 契約を交わそう。 ”

“ 契約？ ”

“ そうだ。 ”

それはずっと続く契約。

わたしがお前を守るから、

お前はわたしを遣うがいい。

それはずっと絶えない契約。

お前の子孫をわたしの子孫が守るから、

お前の子孫はわたしの子孫を遣えばいい。

さあ、契約を交わそう。”

“わかったわ。”

だから、約束よ。

ずっとそばにいて。”

それは昔に交わされた。

幸せな、哀しい契約。

それは昔に交わされた。

嬉しくも、はかない約束。

「……………っっ」

重たいまぶたがあがり、オレンジの瞳がのぞく。

どうやら気を失っていたらしい。

ゆっくりと重たい身体を起こし、あたりを見回す。

先程の光はおさまっている。

隣にはリボンが倒れているが、帽子の影で表情をうかがうことはできない。

大丈夫か、とツナがりボンに声をかけようとすると、反対側から何かに服を軽く引っ張られた。

そちらに視線をうつすと、ツナの目が大きく開かれた。

白い毛並みをした子犬ほどの大きさのオオカミ。

その青い瞳はまっすぐとツナの姿をとらえている。

だが、先程とはまったく異なるところがあった。

「…………なぜ、額に模様が…？」

ツナの視線の先。

プレーチエの真っ白な額に、不思議な模様が浮き出していた。

筆で綴ったような、見たことのない模様。

何が、起きているんだ。

超死ぬ気モードのツナの頭でも冷静に考えることができないでいた。

しかし、混乱に支配されているツナをさらに混乱させることが起きた。

“……………封印は解かれた”

「…」の声…っ
「…」

耳に届いた声、それは光にのまれる前に聞いたものだった。

標的169 狼の異変（後書き）

お久しぶりですゆか空です。

やっと考査がおわりました！

これで更新ができるー！と舞い上がりかけましたが、来週推薦入試
ってことを思い出してテンション下がりました。

まだ…毎日更新できない…orz

てことでまた消えます。どろん！

こんな更新もできない小説でごめんなさい…！

読んでいただきありがとうございます！

標的170 封印は解かれた

“……………封印は解かれた”

何処からともなく聞こえたのは優しい声。

先程聞いた、誰かの声。

“封印は、解かれた。”

“……………La guarnizione e, statar
isolta”

「……………なんだ……………」

何が起きているんだ。

ツナは少し目を見開いて、隣で倒れているリボンと目の前にいるプレーチエを交互に見遣る。

普段のツナならおかしな叫び声を出してパニックに陥っているはずだろう。

「…おいリボン、大丈夫か？」

ツナがりボンの身体を小さく揺らして呼びかける。
だがリボンは起きる気配がない。

そして次にツナは目の前にいるオオカミ、プレーチエを見た。

さっきまではなかった、額の不思議な模様。
よく見れば、それは太陽にも似ている。

なぜいきなり額に模様があらわれたのだろうか。

ツナが神妙に驚いていると、プレーチエが顔をツナの手に押し付け

てきた。

「…どうした？」

少し声を揺らしてツナはプレーチエを見る。

プレーチエの青く澄んだ瞳が、きらりと輝いた。

“……………沢田綱吉様”

「…！？」

聞こえたのは、先程も聞いた優しい声。

その声は、確かに今ツナの名前を呼んだ。

ツナはその声の主を探し、辺りを見渡す。

だが、誰もいない。

“…綱吉様、わたしです。こちらですよ。”

優しい声はすぐ近くから聞こえる。

後ろではなく、横でもなく、上でもなく。

ツナは声のする方を、前を、下をゆっくりと見た。

「……プレーチエ？」

“はい。わたしです綱吉様。”

プレーチエはふさふさと尻尾を揺らして答えた。

「……………へっくしょい！」

静まり返った部屋に突然おかしなくしゃみが響いた。

お世辞にもかわいらしいとは言えないくしゃみの主は、己のくしゃみに驚いて目を覚ました。

「…あれ、寝ちゃったのかなわたし……………」

ひとつあくびをして、結加^{ゆいか}は辺りを見渡して眩く。

しばらく寝ぼけたままほうけていると、ある姿がないことに気付いた。

「……………プレーチェ？」

結加はプレーチエの名を呼ぶが、応答はなく部屋は静まり返っている。

いつもなら名前を呼べば一声鳴いて、尻尾を振って駆け寄ってくるはずなのだが。

「プレーチエ？おーい、プレーチエ！」

ベッドから降り、机や椅子の下、クローゼットの中など部屋の隅々を探したがプレーチエの姿はない。

ふと、部屋の入口を見るとしっかりと閉めたはずの扉がかすかに開いていた。

まさか、と結加は嫌な予感を感じる。

「まさか、また勝手に外に……？」

いくら身体が小さく子犬のように見えても、プレーチエは結加が生まれた頃から傍にいるオオカミだ。

歳もかなり上だろうし、元氣そうに見えるが実は弱ってきているの
かも知れない。

それがさらに結加ゆいかの不安を煽あおった。

顔を青くした結加ゆいかは、部屋を飛び出した。

「……………プレーチエ……………」

「プレーチエ……………お前、話せるのか?」

“いえ、これはテレパシーのようなもので、実際に話しているわけではないのです。”

だんだんと落ち着いてきたツナはプレーチェと向き合い、いくつか質問を試みることにした。

確かにプレーチェの口は動いておらず、声も自然と脳内に響いている。

「どうしてオレはお前のテレパシーが伝わるんだ？」

“それは、あなたがボンゴレボスになるお方だからです。”

「…ボンゴレボスに？」

プレーチェの言うことの意味がよくわからず、ツナは眉をひそめる。

するとプレーチェは頷き、言葉を付け足していった。

“日向井家が代々、ホワイトオオカミを使役してきたことはご存じでしょう。わたしはその六代目にあたります。日向井家の先祖とわたしの先祖が契約を交わしたのは、今から何百年も前：ボンゴレが

出来た頃とそう変わりません。”

「ボンゴレが…ってことは、ボンゴレプリーモと日向井家ひむかいの先祖、お前の先祖は何か関係しているということか？」

“そのとおりです。話せば長くなりますが…これはずっと語り継がれてきた、ボンゴレと日向井家ひむかい、それに使役するわたしたちホワイトオオカミの起源のお話です。”

落ち着いた声で、プレーチエは静かに語りだした。

時々光の反射で輝く青い瞳と白い毛並みがとても美しかった。

ツナはそれに引き付けられるように、プレーチエの語りに耳を傾けた。

標的170 封印は解かれた(後書き)

お久しぶりです、ゆか空です。

数日ぶりの更新になりました。

しばらくはこの状態が続きそうです。

感想の返信もろくにできなくて申し訳ございません。

読んでいただきありがとうございました！

標的171 記憶？

それは、何百年も前の話。

ある日本人の女性は、イタリアの森に住んでいた。

静かに、ひっそりと。

街から遠く離れた森の中に住んでいた。

生活は貧しくなく、だが裕福でもなく。

つまりは一般的な家庭であった。

その女性には、夫がいた。

同じ日本人で、優しくいつもその女性のことを気にかけている夫であった。

二人は幸せに暮らしていた。

時給自足の生活は苦ではなく、むしろ楽しかった。

女性は夫がいれば、夫は女性がいればそれだけで幸せだったのだ。

ある日、その地域を大雨が襲った。

雨や風は激しく、森は荒れた。

女性は家が壊れないかと心配し、一度外に出て家を確認してみるところにした。

扉を開ければ雨と風が女性を襲う。

女性は雨と風に負けまいと踏ん張りながら外に出た。

片手にライトを持ち、あたりを見回す。

すると、女性は木々の間に何かがいるのを見つけた。

何だろう、と女性は恐る恐るそれに近づいていく。

それを見て、女性は驚きで言葉を失った。

それは、真っ白な毛並みのオオカミだった。

しかし、オオカミはびくりとも動かない。

死んでしまったのだろうかと女性はオオカミにそっと触れる。
とくんとくん、と鼓動が伝わってくる。
どうやら生きているらしい。
それに女性は安堵した。

しかし、よく見るとオオカミの足が倒れてきたであろう木に挟まれている。

女性は急いでその木を退かし、オオカミを抱き上げた。

オオカミは重く、大きい身体であったが女性は諦めずにオオカミを家まで運んだ。

家の扉を開ければ、夫が目を見開いてオオカミを見た。

そして急いでタオルやお湯を用意し、オオカミの身体を綺麗に拭いて温めた。

二人は一晚中オオカミを看病した。
暖をとり、ミルクを与え、手厚く看病し続けた。

そして夜が明けるところ、雨と風は止み雲の隙間から光がこぼれた。

その光でオオカミの毛並みはきらきらと輝き、美しく二人の目に映る。

まぶたを開ければ、その瞳は青く澄んでいた。

しばらく二人は、そのオオカミに魅了され言葉を失った。

なんて、美しいのだろう。

ぽつりと、女性はつぶやいた。

そのオオカミは神々しく、ただのオオカミではないと二人はわかった。

なにかあると、なにかをもっていると、二人はそう思った。

オオカミは前足で身体を起こし、二人に視線を合わせた。

後ろ足は痛々しく包帯が巻かれている。

だが尻尾は動くらしく、ぱたぱたと揺れている。

きらり、と青い瞳が輝いた。

“感謝する、人の子よ。”

突然聞こえた声。

それは美しく優しい声。

“あのままであればわたしは間違いなく死んでいた。助けくれたことに、心から感謝する。”

深々と、オオカミはお辞儀をする。

二人はぽかんと口を開け、オオカミを見つめているだけだ。

“わたしは、この森の奥にあった千年樹の精霊。昔からずっとこの森を見守ってきた。だが、昨夜の雨と風、そして雷で樹が破壊されてしまったのだ。母体であった樹がなくなってしまいう前、わたしは危惧してこの姿となり樹から逃げ出したのだ。母体なくしては、わたしは生きていくことができない。そこでわたしは、倒れた木に挟まれている瀕死状態であったこのオオカミに宿ったのだ。…だが、オオカミは息絶えた。まだこの身体に馴染んでいなかったわたしは、

力を使うこともできずに苦しんでいた。そこに、お前が現れたのだ。”

オオカミの話を、二人は黙って聞いている。

混乱していた心も落ち着きを取り戻した。

だがその視線はオオカミから一切離れない。

オオカミは続ける。

“あのとき、お前が助けてくれて本当によかった。わたしはお前に礼をしたい。……そうだな。”

オオカミは考えるように首を傾げる。

そして、耳をぴくりと動かし瞳を揺らした。

“……お前、おかしな小僧と知り合いか？”

おかしな小僧？と二人は顔を見合わせ首を傾げる。

人里から離れた森に住んでいる二人には、知り合いはあまりいない。いるとすれば親戚か昔からの友人だけである。

おかしな小僧と言われるほどの知り合いはいただろうか…と考え込むと、女性が声を上げた。

おかしな小僧。

そう呼ばれてもおかしくない知り合いが、そういえばいた。

“…おかしな小僧って、もしかして……”

数年前、まだ二人が街に住んでいたころ、ある少年たちに出会った。

治安の悪い街で、日々絶えない喧嘩が起こっていたとき。

二人は偶然それに巻き込まれてしまったのだ。

金を請求され、ないと言えば暴力を振るわれ。

夫は女性を守り、庇っていた。

だが夫は傷だらけで、足元は覚束ない。

ついに、夫は地面に倒れてしまった。
そこに、容赦なく暴力が振るわれる。

もうだめだ、と二人は目をつむった。

だが、突然暴力は止まった。

恐る恐るまぶたをあげると、暴力を振るっていた男たちはある方向を見つめ、身体を震わせていた。

その方向にいたのは。

“ やめないか。 やめないと言うのなら、力付くでやめさせるぞ。”

額と拳にオレンジの炎を燈らせた少年が、男たちにそう言った。

それが、“おかしな小僧”こと、後に巨大な組織をつくることとなる“ボンゴレプリーモ”との出会いであった。

標的171 記憶？（後書き）

お久しぶりですみなさま…！

お元気でしたでしょうか…ゆか空はただいま風邪を引いております。

今回は実に久々の更新となっ…てしまいました…申し訳ございません
…orz

無事推薦入試も終わり、今は結果待ちです。

最近毎日が忙しすぎて…やっと小説のストックがたまってきたところ
です。

出来れば明日も更新をしたいと思…います（^^）

読んでいただきありがとうございました！

標的172 記憶？

二人は、いや二人だけでなくその場にいた誰もが言葉を失った。

突然目の前に現れた、額と拳に炎を燈らせた一人の少年。

“ やめないか。 やめないと言つのなら、力付くでやめさせるぞ。”

透き通った声で、全員がはっと我に返る。

すると、喧嘩をしていた全員がその場から立ち去って行った。

あいつが例の奴か。

奴から早く逃れなければ。

口々に男たちはそう言い、そそくさと消えていった。

その場には、女性と夫、そして謎の少年だけが残された。

しばらくの沈黙が続く。

閑静な住宅街に、冷たい風が吹き抜ける。

ジャリ、と音を鳴らし少年の足が動いた。

それに二人はびくりと身体を震わせる。

“大丈夫か。”

少年は二人にそう声をかけ、目の前にしゃがみ込む。

夫の傷の具合を見て、しばらく考えるようなしぐさをする。

そのあいだ、二人はその少年の顔をずっと見つめていた。

この少年は一体誰なのだろう。

なぜ額に炎を燈らせているのだろう。

さまざまな疑問が二人の頭の中をぐるぐるとまわっている。

その混乱が表情に出ているらしく、少年は二人の顔を見て笑んだ。

“心配するな。オレは先程のような悪い奴ではない。”

そう言うと少年は夫を支え、立ち上がらせる。

家はどこだ、と問われ女性は慌てて少年を案内した。

そのときは、知らなかったのだ。

二人を助けてくれたこの少年が、今発展を遂げているマフィアのボスであることを。

“……………ありがとうございます。”

家路につき、女性は少年に礼を述べ深々とお辞儀をした。

少年は二人の家まで夫を担いでくれたのだ。

細身な身体ではあるが、見た目よりも力があるようだ。

少年は優しく笑み、構わないと述べた。

女性は夫の手当てをしながら、まだゆらゆらと燃え続けている少年の額の炎をちらりと見た。

普通であるならば額に炎が燈ることはないはずだが。

これは言うべきか黙っておくべきか。

二人は顔を見合わせた。

“…日本人か。”

ぽつりと少年がつぶやいた。

それに女性が慌てて肯定をする。

“イタリア語が流暢であるな。声だけであればイタリア人と間違えてしまいそうだ。”

少年は感心したように言い、二人に向き直る。

今だ燃える炎に二人は視線を奪われてしまった。

そんな二人の反応に気付き、少年があ、と声をもらす。

すると瞬時に炎は消え、何事もなかったかのように少年は会話を続けた。

“オレは昔から日本に興味があつてな、日本についてさまざまなことを知りたいと思つているのだが、生憎あいにくまわりに日本に詳しい人間がおらず、一応日本の知り合いがいるのだがあまり会えなくてな…、文ふみを交わしてはいるのだが質問ばかりではつまらぬし限りがあるからな。”

それでだな、と少年はまっすぐ二人を見つめる。

吸い込まれてしまいそうなその瞳に、二人は息をのんだ。

“オレに、日本のことを教えてくれないか？”

真剣な表情にしては、その言葉はおかしなもので。

気付けば二人は笑ってしまっていた。

少年は瞬まばたきをして首を傾げている。

それを見て、二人はさらに笑ってしまった。

標的173 記憶？

謎の少年はジヨットと名乗った。

彼は地域住民を守る自警団を立ち上げたらしいのだが、最近はその組織が大きくなりマフィアとなってしまうのだという。

それは霧の守護者の仕業らしい。

彼の立ち上げた組織はボンゴレと言い、その中心はジヨット、そして彼を囲む六人の守護者と呼ばれる者がいるという。

守護者はそれぞれ属性を持ち、それ相応のリングを持っている。

雨、嵐、雷、晴、雲、霧。

そしてジヨットは天空。

そんなことを一般人であるわたしたちに話してもよいのかと女性は問うたが、ジヨットは微笑んでこう言った。

“ かまわない。お前たちを信じているからな。”

初対面も同然である彼のその自信はどこからくるのだろうかと二人は首を傾げた。

だが彼の言うことは当たっていた。

二人は誰かに言うつもりもなく、マフィアと聞いても驚きも怖がりもしなかった。

目の前の彼、マフィアのボスは凶悪には見えず、優しい笑みを浮かべているからだ。

それからジヨットと夫婦は何度も交流をした。

ジヨットが夫婦の家に出向くこともあったし、夫婦がジヨットの家……つまりボンゴレのアジトに出向くこともあった。

夫婦がボンゴレに出向くときは、他の守護者と会話することもあった。

唯一日本人である雨の守護者には数えるほどしか会わなかったが、相手の気さくな性格ですぐに打ち解けたものだ。

ある日、いつものように二人がジヨットの元を訪れたとき、ジヨットは突然ぼつりと語りだした。

“オレの額に燈るこの炎について、お前たちになら話してもいい。”

静かに、額に炎を燈してジヨットは全てを語った。

それは死ぬ気の炎と言い、その炎でものを燃やしたり空を飛べたりするらしい。

二人はその炎に見とれた。

美しく輝くオレンジに、

心を奪われた。

“…そうか、おかしな小僧とそんな出会いを。”

真っ白な毛並みのオオカミは頷いた。

二人はなぜジヨットのことを小僧と呼ぶのかオオカミに問うた。

すると、オオカミは青い瞳を細めて語った。

“わたしは、稀にはあるが母体である千年樹から少しの間離れ、街におりることがあった。ある日、いつもと同じように街におりると、ある方向から不思議な力を感じたのだ。そこに向かうと、あの小僧がいた。額に炎を燈らせて。”

オオカミは懐かしむように、二人に話す。

心地のいい声はなおも続ける。

“わたしは精霊であるから、小僧にはわたしの姿は見えていなかった。しばらくわたしは小僧の炎を観察した。：：どうやら、あの炎には秘めたる力があるようだ。小僧はそれを上手く使いこなしている。わたしはとても感心した。”

ぱたり、と尻尾を一振りし、オオカミはひとつ息を吐く。

そしてまぶたを上げ、青い瞳を二人に向けた。

どきり、と二人の鼓動が高鳴る。

それはあまりにも美しい眼差しだったからだ。

“……こうして話を出来るのも、お前たちがわたしを助けてくれたおかげだ。とても感謝している。”

深々とオオカミはまたお辞儀をする。

それにつられて二人もお辞儀をし返した。

再び顔を上げたオオカミが、何かを決意したようにこくりと頷いた。

そして口を開く。

“…お前たちに、わたしを助けてくれた礼をする。”

標的173 記憶？（後書き）

風邪がなかなか治らないゆか空です。

しつこい風邪だ…彼氏さんにもうつしてしまいました（・・）

早く治らないかな…。

本日11月11日はポツキーの日ですね！

わたしはスーパーに寄ってポツキーを買いました。

学校でポツキーパーティーします（^o^）

高校最後のポツキーの日なので楽しみたいです。

そして11月12日はわたしの誕生日でもあります。

とうとう18歳：パチンコができますね（笑）

まだまだ若いままです。時間が止めることはできないので悔しいです。

高校を卒業するのも嫌ですし。

どうすることもできないので、今を思いきり楽しんでやろうと思います。

明日も更新できると思っていますので、よろしくお願いします。

読んでいただきありがとうございます！

標的174 記憶？

“…お前たちに、わたしを助けてくれた礼をする。”

ぱちぱちと暖炉から薪の燃える音。

あたたかな部屋の真ん中で、二人の人間と一匹のオオカミ…もとい精霊は見つめ合っていた。

“…お礼？”

“そうだ。さっきも言っただろう？”

表情は変わらないが、声からしてオオカミは苦笑いをしているようだった。

“わたしはあのままであつたら死んでいた。精霊は滅多に死ぬことはないが、力を使い果たしたときや、母体を持つものは母体を失うと死んでしまう。わたしもお前たちが助けてくれなかったらあのま

ま死んでいたのだ。母体を失い、新たな母体は命尽きたからな。”

だから、礼をする。

そう言っただけオオカミは身体を動かした。

後ろ足は動かないものの、前足のみでその白い身体を少しずつ動かす。

ふう、とひとつため息をつき、オオカミは女性を見つめた。

2067

“ 契約を交わそう。”

“ 契約？”

“ そうだ。”

それはずっと続く契約。

わたしがお前を守るから、

お前はわたしを遣うがいい。

それはずっと絶えない契約。

お前の子孫をわたしの子孫が守るから、

お前の子孫はわたしの子孫を遣えばいい。

さあ、契約を交わそう。”

唄うように、オオカミは呟いた。

契約、とは。

それはどうやらオオカミが二人を守ってくれるらしい。

所謂、守護霊ということだろう。

しかも二人の子孫までもを。

“…そんなこと、できるの？”

“わたしの力を持ってすれば、たやすいこと。だが条件がある。”

“…条件？”

“ああ。お前たちが死ぬとき、わたしも死ぬ。それは子孫たちにも共通する。わたしたち精霊の死は、お前たちの死と共にする。そういう、条件だ。”

それはあまりにも驚愕的な、言葉もでないほどの条件だった。

精霊は最悪な場合がないかぎり、命が尽きることはないというのに。

簡単に言えば、命は永遠に続くことができるのに。

契約によって、永遠を捨てて人間の寿命と同じほどこしか生きられないくなる。

“…でも、いいの？永遠を捨てて、人間と同じ寿命を辿るなんて…
…”

女性は不安そうにオオカミに問う。

だがオオカミは目を細め、首を横に振った。

“…お前になら、お前たちになら、わたしの命、力、全てを使ってもいい。……それに、”

オオカミは一瞬だけ黙り、再び言葉を紡いだ。

“永遠が、良いわけではない。”

人は、誰もが一度は永遠を夢見る。

死を恐れて、生を望む。

それは虚しく消える願い。

叶うことのない、願い。

もし仮に、永遠を手に入れたのであっても、

今ある命を、大切にしようだなんて思わないだろう。

大切な人を、愛そうとはしないだろう。

永遠という終わらない時間に甘え、惰眠を貪るように、時間を無駄にする。

そんなことがないように、

一瞬一瞬を精一杯生きることができるよう、

人には、動物には植物には、永遠は与えられなかった。

全てのものに、終わりはくる。

例え、精霊であっても。

“だから、良いのだ。”

永遠などいらぬ。

何かのために、命を、力を使うのであれば、

永遠など、いらぬ。

“……………そう。”

女性は、目を伏せた。

その瞳に涙を浮かばせて。

ふるふると、長い睫毛を震わせて。

(…ああ、なんて、)

永遠など、馬鹿らしいことだろうか。

溢れる涙を拭い、女性は笑みを浮かべる。

そしてその震える声で、オオカミに言った。

“ わかったわ。

だから、約束よ。

ずっとそばにいて。”

命尽きる、そのときまで。

共に、生を唄おう。

標的174 記憶？（後書き）

お久しぶりです。

やっと更新ができました…。ふう。

なかなか毎日更新復活はできません。

来週から考查期間に突入するので…！

短いですがまた！

読んでいただきありがとうございます！

標的175 追憶V(前書き)

お久しぶりです。

標的175 追憶V

“……これが、わたしの先祖と日向井家ひむかいの出会いです。”

一通り語り終えたプレーチエは、ゆっくりと息を吐いた。

聞く側であったツナもふう、とひとつため息をつく。

オレンジ色の瞳が、驚きとわずかな動揺でゆらりと動いた。

「……まさか、プレーチエの先祖が精霊だったなんて……」

“驚くのも無理ないです。こんなことを聞いて驚かないなんてことはまずないでしょうね……”

プレーチエは苦笑いをして答える。

それにつられてツナも苦笑いをした。

すると、ふと気になる疑問が浮かび上がる。

「…ということは、プレーチエも精霊か？」

“その通りです。日向井家の守護霊ひむかいとなった初代から五代までの精霊の力をわたしは受け継いでいます。わたしたちは守る対象が生きているかぎり、共に生きていますが…守る対象が命尽きたとき、わたしたちも共に命尽き、その力は次の代へと受け継がれるのです。”

簡単なようで難しい。

それをツナは素直に受け止め、冷静に対処する。

超死ぬ気モードでこそ成なせることだ。

そして、次に浮かび上がった疑問をツナはプレーチエに問いかけた。

「…この契約とボンゴレボスと…どんな関係があるんだ？」

するとプレーチエの耳がぴくりと動いた。

同時に首を傾げ、何やら考えるしぐさをする。

“……確か……”

“この契約を、小僧にも手伝ってもらおう”

“小僧って…ジヨットさんにも?”

オオカミはこくりと頷き、言葉を続ける。

“わたしは長い間を生きてきた精霊。その分力も相当強いらしい。こうしてオオカミに宿っていても、ただのオオカミには見えぬ、不思議な力が発せられてしまっているのだ。それを抑えるために、あの小僧の炎の力を用いたい。^{もち}…どうやらあの炎にはそういう作用もあるようだからな。”

そう言うと、オオカミはじっと二人を見つめる。

しばらくの沈黙のあと、やっとオオカミが口を開いた。

“…やはり。お前たち、あの小僧の元で働く気にいるだろう。”

“……どうして、それを……”

オオカミの言うことは事実だった。

二人は、ジヨットに仲間にならないかと勧誘をされていた。

共に戦わなくていい。

ジヨットの話相手になってくれればいいと言われていたのだ。

それを二人は快く受け入れた。

だが話相手だけではなぜだか気が引けた。

だから二人は話相手をしつつ、護身術などを習うつもりでいた。

そして、いつかはジョットの役に立ちたいと。

そう思っていたのだ。

“それならばちょうどいい。…もし、わたしの子孫が本来の力を必要とするとき、ボンゴレボスに封印を解いてもらうようにする。今、わたしは本来の力は必要ではないから、小僧に封印をしてもらう。それが一番いい方法だろう。”

オオカミは尻尾を揺らし、一人頷いた。

女性と夫もオオカミの言うことを理解して顔を見合わせ頷く。

それを見てオオカミは満足そうにため息をついた。

「…このことは、結加は知ってるのか？」

“いえ、結加は何も知りません。彼女はわたしを老犬と思い込んでいます。一応、彼女の母親がこの事実を手紙に書き留めたのですが、他人の耳に入ってはまずいので特殊な加工をしたのです。”

「特殊な加工？」

“はい。死ぬ気の炎…ただし、ボンゴレボスの炎のみで文字を浮かび上がらせるような、とても特殊な加工です。”

そんな加工もできるのか、とツナは内心驚いた。

プレートエたちの封印といい、手紙の特殊な加工といい、死ぬ気の炎はなんとも不思議なものだ。（そう思うのは今さらではあるが）

「…だったら、お前の封印が解かれた今、結加ゆいかに言うべきじゃないか？何も知らないんだったら何かと困ることがあるだろ。」

“そうですね、動揺はするとは思いますが…彼女なら大丈夫………
あ。”

ぴたりとプレーチェは話すことを止める。

すると耳を小刻みに動かし、鼻をすんすんと鳴らした。

“…ちょうどいい。結加ゆいかがこちらに向かっていますね”

ぱたりと尻尾を動かしプレーチェは言った。

しばらくすると、プレーチェの言つとおり廊下からぱたぱたと足音が聞こえてきた。

何か叫んでいるようだが、せいせいという息切れしている音のほろろが大きかった。

「…相当お前を見つけるために走り回っているようだが」

“…そうみたいですな”

二人は顔を見合わせ、小さく笑みを浮かべた。

標的175 追憶V（後書き）

みなさま、覚えていらっしゃるでしょうか…。ゆか空です。

最近思うように更新が出来ず、間をあけてしまいました。

まことに申し訳ございません。

これからは復帰できるよう、少なくとも週一更新をしたいと思えます。

読んでいただきありがとうございます！

標的176 話すべき時(前書き)

お久しぶりです！

標的176 話すべき時

ばたばた、というよりはばたばた、という音だろうか。

その音は止まることなく、常に少女の耳に届く。

耳をすませど、聞こえるのは自分の足音と呼吸音、あとはばくばくと鼓動する心臓の音。

(…どこに行っちゃったんだろう……！)

きよろきよろと辺りを見回し、真っ白なオオカミの姿を探す。

少女…結加^{ゆいか}は、昼寝をしてしまった自分を、部屋の扉をしっかりと閉めなかった自分を責めた。

あの時昼寝をしなければ、あの時扉をしっかりと閉めていれば…と後悔が渦巻く。

(プレーチエに何かあったらどうしよう…大切な子なのに…)

ホワイトオオカミは日向井ひなたい家に代々伝わる家宝同様。

元々は珍しい品種でもあって、売買されればかなりの高値がつく。

そんなことのないように、結加ゆい加は幼いころから注意されてきたのだ。

プレーチエを見失ってはならないと。

(もう14年も生きてるんだから、年だし…いつ何が起きてもわからない…!)

焦りは募りつもの、結加ゆい加の走るスピードをさらに上げた。

どうか、無事でいて。

そう願わずにはいらなかった。

茶色の瞳から、一粒の涙がこぼれ落ちる。

泣いていても何も変わらないのに、と慌てて結加は涙を拭いた。

鼻をすすり、ある部屋の前を通り過ぎる。

すると、聞き慣れた声…鳴き声を結加の耳がとらえた。

「ワンッ!」

「…っ、今のって……!」

ぴたりと足を止め、結加は耳をすます。

すると、次ははっきりと「ワンッ!」とプレーチエの鳴き声である
う声が耳に入った。

「プレーチエ!」

結加は鳴き声のした部屋の扉を開ける。

すると、そこにいたのは。

「……………綱吉くん……………」

結加ははあ、と息を切らす。

視線の先には、超死ぬ気モードのツナと行儀良くお座りをしているプレーチエ、その少し離れたところにはリボンが倒れていた。

どんな状況か。

結加は一瞬思い止まったが、プレーチエの姿を再び視界に入れて駆け寄った。

「もう…プレーチェ！心配したんだからね！」

そっと抱き上げたかと思うと、次の瞬間にはプレーチェを思いきり抱きしめた。

かすかに「ぐえっ」という潰れたような痛々しい声をツナはその耳でとらえた。

「すぐあなたは何処かに行っちゃうんだから！あなたももう14歳のご老体なのよ！いつ何が起きてもおかしくないんだから！わたしはお母さんたちにあなただけを大切にするようにと小さい頃から言われているの！まったく、いつまでもやんちゃなんだから………」

くどくどと続く結加ゆい加のお叱りを、プレーチェはきよんとした表情で聞いている。

ツナはそんな二人を真顔で見つめていた。

ふと、抱きしめられているプレーチェと目が合う。

(……どうしよう、綱吉様……)

ツナの超直感がブレイチエの心情を感じとった。

ブレイチエは今にも情けない鳴き声が出てしまいそんな表情をしている。

どうするべきか。

そうツナは考え、首を傾げる。

話すべきか。

話さないべきか。

だがこれはいつかは知ること。

早く知っていたほうがいいだろう。

そう思い、ツナは口を開いた。

「……………結加、」

「ん、何？」

ツナが結加に声をかけたおかげで、プレーチエの身体の圧迫はなくなった。

結加がプレーチエを抱きしめる力を緩めると同時に、「はふっ」という開放されたような鳴き声を出した。

そんなプレーチエを憐れに思いながらも、ツナは再び口を開く。

「…プレーチェのことだが……」

途中まで言いかけるが、なんとなく気が引ける。

自分が言っても良いものだろうか。

そう考えて踏み止まり、ツナは黙り込んだ。

「…どうしたの？」

「……これはオレから言うべきではない。」

ぼつりと呟き、ツナはプレーチェを抱き上げる。

「……やはりお前が言うべきだ、プレーチェ」

まっすぐプレーチェを見つめ、ツナは力強く言った。

結加は何のことかわからず、首を傾げている。

プレーチェはしばらくツナを見つめていたが、首を動かして結加を見た。

青い瞳がきらりと輝く。

どきり。

結加の鼓動が高鳴った。

“……恐れ多いことは存じますが、わたしが真相を…日向井家ひむかいに
代々伝わるホワイトオオカミの事実を、述べさせていただきます。”

標的176 話すべき時（後書き）

お久しぶりです、約一週間ぶりの更新となりました…。

センターに向け日々勉強に励んでいますゆか空です。

思うように更新ができなくて申し訳ありません！

冬休みには…多分毎日更新できるはず…です…。

短いですがこれで。

読んでいただきありがとうございます！

標的177 手紙の解封(前書き)

冬休み毎日更新はじめます。

標的177 手紙の解封

結加^{ゆい加}は驚愕^{きょうがく}していた。

目を丸くさせ、口をあんぐりと開けたまま。

それも当然のこと。

今まで大切に育ててきた家族同然のホワイトオオカミのプレーチエが、人間の言葉を発したからだ。

“……恐れ多いことは存じますが、わたしが真相を…日向井家^{ひまかい}に

代々伝わるホワイトオオカミの事実を、述べさせていただきます。”

低くもなく、かと言って高くもない声は巧みに言葉を紡ぎ結加に秘密を語っていく。

結加は最初こそは驚きを隠せなかったが、そのオオカミの優しい声を聞き、また姿を見てだんだんと落ち着きを取り戻していく。

そんな二人をツナは黙って見つめていた。

額の炎はゆらゆらと燃える。

オレンジの瞳はまっすぐな光を帯びている。

さらにそんな三人を、違う視点から見つめる者がいた。

契約を交わそう。

それはずっと続く契約。

わたしがお前を守るから、

お前はわたしを遣うがいい。

それはずっと絶えない契約。

お前の子孫をわたしの子孫が守るから、

お前の子孫はわたしの子孫を遣えばいい。

さあ、契約を交わそう。

“……以上です”

静かに、プレーチエはそう言って目を閉じた。

ツナに話したことを全て同じように結加ゆい加に話した。

結加ゆい加に混乱させないようにするため、プレーチエはゆっくりと優しく語った。

その時間、およそ1時間。

話を聞き終えた結加ゆい加は、ただ黙ったままだった。

表情に混乱の色は見えないが、ぴくりとも動かない。

試しに結加ゆい加の目の前でツナが手をひらひらと振ってみる。

だがしかし反応はない。

「…結加^{ゆいか}？」

次にツナが声をかける。

だがしかしまたもや反応はない。

どうしたものか、とツナは困ってしまう。

眉間を歪ませ、無言で結加^{ゆいか}を見て、プレーチエを見遣った。

“…相当驚いたのでしょうか。”

プレーチエも困ったように首を傾げる。

目の前で固まる少女に二人はお手上げだった。

すると、プレーチエが何かを発見する。

“…おや、これは……”

プレーチエは結加ゆいかの服のポケットに入っている封筒を取り出す。

それは、結加ゆいかの母が結加ゆいかに宛てた手紙だった。

だが手紙は真っ白で、何かが書いてあるようだが文字はまったく
していて読めない。

たしか、プレーチエの話では死ぬ気の炎を使えば読めるようになる
らしい。

それを思い出したツナは、指先に小さく炎を燈して真っ白な手紙に
近づける。

すると、

ポオオオッ！

「!？」
「!？」

“ちゃんと作用しましたね”

真っ白な手紙はオレンジの炎に包まれ燃え上がった。

だが紙であるはずのそれは塵にはならず、原形をとどめたままである。

ぱちぱちと音をたてて手紙の炎は燃えつつける。

すると、真っ白だった手紙に文字があらわれはじめた。

「…文字が……」

だんだんと文字は姿をあらわしていく。
その文字は小さいが丁寧だった。

紙一面に文字があらわれると、炎は消えて手紙はゆっくりと床に落ちた。

ツナはそれを広いあげ、視線を結加にうつす。

今だに結加は放心状態で、少しも動かない。

「…結加^{ゆいか}、これを見る」

手紙を差し出し、ツナは結加^{ゆいか}の肩を揺する。

しかし結加^{ゆいか}には何の反応もない。

仕方ない、とツナはため息をついて再び指先に炎を燈す。

それを見てプレーチエはまさか、と目を見開いた。

“つ、綱吉様…まさか…!!”

「…………大丈夫だ。」

心配するプレーチエをなだめ、ツナは指先を結加^{ゆいか}に近づける。

そして指先に力を込めた。

ポウウウッ！

「っ、きゃあ！」

結加^{ゆい加}の身体がオレンジの炎に包まれると、瞬間に結加^{ゆい加}は悲鳴を上げた。

それにプレーチエも驚き、びくりと身体を震わせる。

結加^{ゆい加}が我を取り戻したのを見て、ツナは炎を消し去った。

「…やっと我に返ったか。」

「っ、綱吉くん……」

苦笑いをするツナを見て、結加^{ゆい加}は何が起きたのかわからず慌てる。

その様子にプレーチエは驚いた。

“…あの炎は熱くなかったのですか？”

「…熱くないように調節した。あれは形だけの炎だ。なんの力もない。」

「そういえば熱くなかった…」

結加は身体中を見渡して火傷がないか確認するが、それらしきものは見つからない。

それを見てプレーチエは安堵のため息をもらした。

「…結加、お前の母さんからの手紙だ」

「……あ！」

ツナが手紙を手渡すと、結加はそれを驚きながらも受け取る。

真っ白だった手紙には文字が綴られており、それは確かに…

「…お母さんの、字だ……」

手紙の文字を懐かしむように、結加は声をもらす。

長年、真っ白だった手紙に文字がうつしだされた。

それは自分のよく知る、懐かしい文字。

自分の大好きな、母親のもの。

しばらく手紙に手をそえていた結加^{ゆいか}は、ゆっくりと手紙に目を通して
はじめた。

ずっと、知りたかった事実を知るために。

標的177 手紙の解封(後書き)

みなさまお久しぶりです。

やっと2学期もおわり一段落…！

ですので今まで更新できなかつた分、冬休みに更新してしまいたい
と思ひまして、

冬休みは毎日更新をしたいと思ひます。

滞らないようにがんばります！

読んでいただきありがとうございます！

標的178 手紙(前書き)

毎日更新二日目!

標的178 手紙

結加へ

この手紙を読んでいるということは、プレーチェから話を聞いたの
でしょうね。

そして、ボンゴレボスから封印を解いてもらったのでしょうか。

…結加、お母さんは昔からあなたに言っていましたね。

ホワイトオオカミは日向井家の宝同然。

決して失ってはならない。

それを守り通し、ここまでできたのですね。

ということは、あなたも立派な日向井家の当主となれるのですね。

…プレーチエから日向井家とホワイトオオカミ、そしてボンゴレの始まりを聞いたことでしょう。

相当、驚いたことと思います。

あなたには、日向井家はボンゴレの代々の使いと話してきましたがそれは上辺だけのこと。

本当はホワイトオオカミが大きく関係しているのです。

日向井家のホワイトオオカミはただのオオカミではなく、精霊の宿った特別な力を持つオオカミ。

その力ゆえ、他人に知られては必ず狙われてしまいます。わたしたちはマフィアという危険な世界に関わっています。命の保証もできません。

それを知って、初代のホワイトオオカミはボンゴレボスに協力を依頼したのかも知れませんね。

ホワイトオオカミは、わたしたち日向井家ひむかいの当主を守ってくれ
という契約をいつまでも交わしてくれると言います。

わたしが死んでも、あなたが死んでも、ずっとずっと…。

それは、もしかしたらあなたにとって辛いかも知れません。

彼らの永遠を、わたしたち人間が奪ってしまうことを、あなたは哀
しむかも知れません。

でも、これは彼らが決めたこと。

初代のオオカミ…もとい精霊と初代の日向井家ひむかいの当主が同意の
もとで決められたことなのです。

先程も言いましたが、彼らは特別な力を持っています。

その力をもってすればこの契約は解除できるはずです。

彼らがこの契約を嫌だと思っているなら、すぐに解除しているはず。

でも、今もなお契約は続いています。

…どういふことが、わかりますね。

力を持つ彼らが契約を解除しない理由は、この契約を快く思ってい

るからです。

彼らは嫌がってなどいません。
実際、わたしは聞きました。

この契約は嫌でないのかと。

すると、オオカミはこう言ったのです。

嫌だと思ったことは、一度もありません。
もし、あなたの先祖がわたしの先祖を救っていなかったら、わたしの先祖はこの世に存在していなかった。
そして、この契約がなかったらわたしはあなたと出会っていなかった。

わたしは、あなたに出会えてよかったと思っています。

あなたのために生きることが、わたしの喜び。

あなたとともに生きることが、わたしの幸せ。

…だから、嫌などと思ったことはありません。

あなたのオオカミ…プレーチェも、おそらくそう思っているでしょう。

だから、あなたが辛く感じたり哀しむ必要はないんです。

直接、プレーチェに聞いてみて。

プレーチェは必ず、いい答えをくれるから。

そういえば、昔あなたは何故日向井家の当主は女性ばかりなのかと聞いてきたことがありますね。

それは、日向井家は女性しか生まれませんからです。

その仕組みはわかりません。

今だに謎に包まれているのです。

お父さんは婿養子だということは知っていますか。

お父さんはボンゴレに仕える部下でお母さんと出会ったのです。

おおかたのことは、プレーチェから聞いたことでしょう。

だから、お母さんから話すことはなにもないはず。

…これは、お母さんのただの勘だから、気にしないでほしいのだけれども。

この手紙を読んでいるときには、お母さんはもうあなたの傍にいない気がするのです。

距離的なことではなく…生きていないかも知れないということ。

もし、そうだったら…あなたには辛い思いをさせたいと思います。

…ただ今は、お母さんの勘が当たらないことを願うばかりです。

……ねえ、結加^{ゆいか}。

あなたがこれを読んでいるとき、ボンゴレがどうなっているかはわからないけど、もしボンゴレのボスに危険なことが起きたら、あなたがボスを守るのよ。

女性に何ができる、と思われてしまつかも知れないけど、あなたはあなたのできることをすればいいの。

また、お母さんの勘だけど…ボンゴレの十代目はとてもいい方だと思うの。

そして、今後のボンゴレに重要な方になると思う。

その方を、失ってはならない。

あなたには、光玉ひかりたまがあります。

これは日向井家ひむかいに伝わる技。

これを使いこなせば、大きな力となります。

まだ、大人ではないあなたには重くのしかかる事実かもしれない。
無理に理解はしなくてもいい。

あなたに無理はしてほしくないのです。

ゆっくりと、時間をかけてもいいのです。

ただ、逃げないでほしい。

目の前のことから逃げないでほしいのです。

いつかあなたにもわかる日がくるでしょう。

長い文章で申し訳なく思います。

でも、あなたに伝えたいことが多かったのです。

これが、少しでもあなたの力になれば幸いです。

ひむらこ
日向井家五代目当主

ひむかこゆこな
日向井結那

標的178 手紙（後書き）

毎日更新二日目です。

さて、本日はクリスマススイブですね。

みなさまは何をされる予定でしょうか？

わたしは一応お出かけしてきます。

特別な日とイヴが重なったので、せっかくだからお出かけしようという事になったので^^

23日に補習を受けたので、しばらくはありません。
時間がとれる…！

ざざざかと小説を書き進めたいと思います。

読んでいただきありがとうございます！

標的179 残された子(前書き)

毎日更新二日目!

標的179 残された子

今まで真っ白だった手紙。

何を書いてあるかもわからず、謎だらけだった手紙。

それには特殊な加工がしてあり、ボンゴレボスの死ぬ気の炎の作用で紙に文字が浮かび上がる仕組みだった。

小さいが丁寧に綴られた文字。

優しい言葉が並べられているそれを、ツナたちは読み終わってもなお黙って見つめていた。

広い室内に沈黙が続く。

かすかに機械音がするが、それ以外は無音と言っていいほどに静かだった。

だがそんな長い沈黙を破ったのは、誰かの鼻をすする音だった。

「……………ぐすっ……」

手紙を持つ手がかたかたと震え出す。

ふと、ツナが手紙から視線をはずし顔を上げる。

すると、結加ゆい加が涙をぼろぼろと流して泣いていた。

“っ、ゆ、結加ゆい加? どうかしたの?”

プレーチエが焦って結加ゆい加に問いたです。
だが結加ゆい加はただ涙をこぼすだけだ。

ぱさ、と手紙は結加ゆい加の手から離れてゆっくりと舞い落ちた。

「…結加ゆい加、どうしたんだ?」

ツナが優しく問いかけると、ただ泣いているだけだった結加ゆい加は小さく口を開いた。

「……お母さん、の勘が…当たってる、から………」

「勘……？」

一瞬、結加ゆい加が何を言っているのかわからなかったが、床に落ちた手紙に視線を落とすとすぐにわかった。

結加ゆい加の母、結那ゆいなが手紙に綴っていたこと。

……結那ゆいなの命は、そう長くはないということ。

「……お前の母さん……もしかして………」

「……亡くなったの。わたしが小さい頃、病気で………」

か細い声で結加ゆい加は答えた。

それを聞き、ツナは目を見開く。

プレーチェの方を見ると、プレーチェは黙って頷いた。

“…結加ゆい加が幼い頃、病で結那ゆいなは死んでしまったんです。父親も、任務の途中で命を落としてしまい……”

…という事は。

「…両親が、いないのか……？」

思いもしなかった事実にも、ツナは言葉を失った。

結加ゆい加は普段は明るく、前向きな性格を持つ子だった。

笑顔を絶やさず、何事にも一生懸命に取り組む真面目な中学生、のはずだった。

しかし、事実は両親を失った一人ぼっちの女の子。

辛い過去を背負って生きてきた…一人の人間であった。

「…じゃあ、お前は今まで……」

「九代目がわたしのことを面倒見てくれたの。日向井家ひむかいの当主であるわたしを。いろんな技やマフィアについてのことを教えてくれた。…九代目には本当に感謝してるの。わたしが日本に渡るときも、プレーチエのことを保護してくれていたし……両親をなくしたわたしにとっても優しくしてくれたの。」

目に涙をためながら、結加はぼつりぼつりと言葉を発する。

手紙をそつと拾い上げ、大切そうにそれを見つめる。

ぼろり、と一粒の涙がまた結加ゆいかの目からこぼれ落ちた。

「…昔は、確かに辛かった。夜中に一人で泣いてしまうときもあったし、どうしてわたしだけこんなめにあうの、とか思ったけど…今

は大丈夫なんだよ。」

「……なぜ？」

ツナが問うと、結加^{ゆいか}は顔を上げて言った。

「綱吉くんやプレーチエ、みんながいるもの。」

きらり、と何かが輝いた。

それはいつもの明るい少女の笑顔だった。

…ねえ、真っ白なオオカミさん。

“なんだい、結那^{ゆいな}”

どうやら、わたし…そう長くは生きられないみたい。

“…どういうことだい？”

…病気がね、進行していたの。治療しても無駄なくらい。

“…それは、みんなには話したのかい？”

まだ話してないわ。話すのが怖くて。

“…わたしに話したのは、お前が死んでしまえばわたしも死ぬからだね？”

…そう。ごめんね、短い命で。もう少しあなたに長く生きさせてあげたかったのだけれど、無理みたい。

“ そんなこと、気にしないで。お前は残りの命をどう使うかを考えなければ。結加ゆいかをどうするかもね。”

…あの子には、沢山辛い思いをさせてしまうわね。少しでもいいから、…あの子と一緒に、生きたかった。

“ ……ならば、今からでも一緒に過ごせばいい。限られた時間の中で、お前ができることをすればいい。”

…そうね。ありがとう、真っ白なオオカミさん。

“ …… Di ディ n i e n t e ニエンテ ”

限られた時間の中で、人は何ができるのだろうか。

叶えたいことは沢山あるし、やり残したことも沢山ある。

だが、短期間でそれらすべてをやり通すことはできない。

その中で、大切なことをするべきだ。

いつか、終わりがくるその日まで。

大切なものを、守り抜こう。

標的179 残された子（後書き）

メリークリスマス！

みなさまいかがお過ごしでしょうか？

わたしの地方では雪が降るらしいです…！

それほど寒いということですので、みなさま体調にはお気をつけて
…っ

読んでいただきありがとうございました！

標的180 当主と「ツツマン」の約束(前書き)

毎日更新四日目!

標的180 当主と「ツナマン」の約束

「封印を解いてくれてありがとう、綱吉くん」

“わたしからも、本当にありがとうございませす”

結加とプレーチェは深々とお辞儀をしてツナに礼を言う。

何だかこっ恥ずかしくなってしまったツナは、二人に顔を上げるように言った。（超死ぬ気化しているので表情に変化はあまり見られないが）

「…オレは、そんなたいしたことはしていない……」

「え、封印を解くことってたいしたことだよ！だって……」

“ボンゴレボスにしかできないことなんですよ！”

「…そうなのか……？」

結加とプレーチェの凄みにツナは若干引いてしまう。

二人はしっかりと頷き、ツナの否定を認めようとはしない。

確かに、プレーチェと手紙の封印を解いたのはツナだ。
プレーチェに関しては半ば強引にプレーチェが解かせたも同然ではあるが。

とにかく、ツナなしでは事は進まなかったということである。

それに二人は感謝していたのだ。

「…ほんとに、ありがとう綱吉くん。」

満面の笑みで再び礼を述べる。

それを見て、ツナはぱちくりと目を瞬まばたかせたが、すぐに口元を緩め笑顔を作った。

「…ああ。」

その笑顔を見て、結加ゆいかとプレーチェは照れ臭そうに顔を見合わせた。

場の空気が和んでいるところに、突然三人以外の声が響いた。

「そんな話はオレも初めて聞いたぞ。」

それにツナたちは驚き、何者かと警戒する。

…が、声の主を見たとき、たんにその警戒はすぐにとけた。

「なに警戒してんだおめえら。」

「…リボン。」

いつ目を覚ましたのだろうか、気絶していたままだったりリボンがこちらを見てにやりと笑っていた。

「…いつ起きたんだ？」

「随分さつきだぞ。プレーチェのテレパシーが近くにいたオレにも伝わり、その声で起きたんだ。」

驚いたままのツナの質問に、リボンは平然と答える。

「まったく、起きた気配にも気付かないなんてな…まだまだだな。」

「……仕方がないだろう。プレーチェのことで動揺していたんだ。」

リボーンの厭味いやみつたらしい言葉にツナは静かに反抗する。

するとリボーンは再び嫌な笑みを浮かべ、プレーチエを見た。

プレーチエはリボーンの視線を感じて身体を強張らせる。

「…このことは誰も知らないのか？」

“リボーン、とは？”

「ボンゴレと日向井家ひむかいの真の関係と、お前のことだ。」

“はい。日向井家ひむかいに関する者にもこの事実は打ち明けられません。なのでボンゴレボスと日向井家ひむかいの歴代当主とそのパートナー…つまり夫にしか知られることはないのです。”

「…となると……」

ちら、とツナはリボーンを見遣る。

ツナの視線に気付いたリボーンもツナの顔を見た。

「……リボーンが知ってはまずいんじゃないか。」

“……………あ。”

「……………あ。」

ツナのごもつともな言葉に、プレーチエと結加ゆいかはしまったというよ
うな表情をする。

ツナはボンゴレボス、結加ゆいかは日向井家ひむかいの当主なのでこの事実を知っ
ても問題はない。

だが、リボーンはボンゴレボスでもないし日向井家ひむかいの当主でもない。
ましてや結加ゆいかのパートナーでもない。

言ってしまうえば、リボーンはただのヒットマン。何の関係もないの
だ。

なので、このことを知ってしまうということは大変まずいのである。

「……………どつしどつし、プレーチエ！」

“どつしどつし、”と言われても……知られてしまったものは仕方がない

から……”

おろおろとプレーチエは結加とツナの周囲を歩き回る。

力を有する精霊なのに抜けているところがあるのか、とツナは呑気なことを考えていた。

すると、ぴたりとプレーチエの足が止まる。

いい解決法でも考えついたのかと結加がプレーチエの顔を覗き込む。

“…あ、頭に衝撃を与えれば忘れるかな”

「え、何言ってるのプレーチエ!!」

プレーチエのとんでもない言葉に結加は慌てる。

何とも精霊らしくないやり方だ。

マフィアらしいと言えばマフィアらしいが。

そんな二人をなだめるように、ツナが間に入る。

「…リボーン。このことは内密にしてくれるだろ？」

「まあな。そんなにオレは悪い奴じゃねえからな。」

十分悪い奴だろう、とツナは口に出してしまいそうになるがそこは耐えた。

しかし、読心術を得ているリボーンにはわかったらしく、ツナに蹴りを入れた。

だが流石は超死ぬ気化しているだけあって、リボーンの蹴りをツナはなんとかかわす。

(小さくリボーンの舌打ちが聞こえたが気にしないふりをした。)

「…リボーンさん、ほんとに内密にしてくれるの？」

「ああ、約束してやってもいいぞ。」

何気にかから目線の言葉であるが、結加とプレーチエを安心させるには十分であったらしい。

二人は安堵の溜め息をついて顔をほころばせた。

…うっかりさんだわ、やっぱり。

“あんな子で大丈夫なのだろうか？”

やるときはやる子よ。結加^{ゆいか}もプレーチエも。

“確かにそうだが…。やはり親であるわたしたちにとってはまだ心配だ。”

ふふ、そうね。でも信じているから…大丈夫よ、絶対。

我が子にあらん限りの幸福と勇気を。

一人と一匹の親は、そう祈りを捧げた。

空高く、美しい世界から。

標的180 当主とピットマンの約束（後書き）

小説のストックがなくなっていく…！

今さっき標的185を書き終えたところなんですが…やばい、焦る。

ほんとに小説を書くのが遅いので…時には一話に一週間かけるときもあります（笑）

ただうまく書けなくて延ばしてるだけなんです…。

なんとか頑張ります、よ！

読んでいただきありがとうございます！

標的181 特訓(前書き)

毎日更新五回目!

標的181 特訓

「遅いぞ、そんなんじゃすぐに殺されちまうぞ。」

「はいっ！」

先程までの和やかな空気は何処へやら。

ただっ広い部屋の中は爆音や爆風が響き渡っている。

その原因は一人の赤ん坊と一人の少女。

リボーンと結加だ。

リボーンはレオンを変化させた銃で、結加は光玉で応戦している。

だがこれはただ単に戦っているわけではなく、リボーンが結加に攻撃や防御の仕方、力加減のコントロール方法を指導しているのだ。

あまりの過激さに、はたから見れば抗争でも起きたのではないかと勘違いをしまいそうになる。

そんな二人を、ツナとプレーチエは安全な場所から見ていた。

「……………すごいな。」

“リポーンさん、厳しいですね…………”

落ち着いているように見えるが、これでも二人は驚いているのだ。

ツナはまだ超死ぬ気化しているから、プレーチエは驚きのあまり言葉が出ない状態だから落ち着いているように見えるのだ。

なぜ二人が蚊帳かやの外状態なのかと言うと……………。

先程、リポーンがこう二人に言っていた。

「オレが今から結加ゆい加の指導しうどをする。その間おめえらも特訓とくくんでもして
る。」

何でも、まだ結加ゆい加は光玉ひかりたまを使いこなせていないのでリボーンが直接
指導しうどを行うと言いうのだ。

それを聞いた瞬間しゅんかん、ツナは結加ゆい加を気の毒にくだと思った。

今までツナはリボーンリボーンの厳しい特訓とくくんを嫌きらまと言いうほど受けてきたので、
辛辛いさは十分にわかってわかっている。

それを思おもうての同情どうじやうをツナは抱かかいた。

だが結加ゆい加は女の子おんなこ、多少手加減たかへんはしてくれらるうとツナは思おもって
いた。

流石さすがのリボーンでも、辛辛いい指導しうどはしないだろうと。

…しかし、それはとんだ間違まちがいだっただのだ。

指導しうどを始めた瞬間しゅんかん、リボーンは結加ゆい加に銃じゆうを連続れんじゆくでぶっ放はなした。

それに結加もツナもプレーチェも驚いた。

まったく手加減の色が見えない。

まったく手加減する気もないだろうとツナはその時わかった。

たとえば結加が女の子であっても、リボンには関係ない。

相手が老若男女でも、リボンは手加減などしないのだと。

だが、またもやリボンがツナの心を読んだのか、指導をしながらもこう言った。

「戦いの場において、男女など関係なくなる。逆に、女は狙われやすい。男よりも体力が低いなどという理由でな。」

その間も、銃声は止まない。

引き金を引き続けながらも、リボンは言葉を紡ぐ。

「今のままでは、結加^{ゆいか}は真っ先に適に狙われ殺される。だから今のうちに叩き込むんだ。攻撃、防御、コントロールの仕方をな。これを練習だと思うな。死ぬ気でいけ。」

淡々としたリボーンの言葉には説得力が十分にあつた。

確かにそうだとツナは納得をしてしまった。

それから数十分、二人の攻撃と防御はおさまらない。

それどころか激しさを増している。

ツナとプレーチェは二人の特訓が気になり、自分たちの特訓をしようにも集中できないのだ。

「…心配か？」

“え？”

「結加のことだ。」

突然問われ、プレーチエは首を傾げる。

「結加はお前の主だろう。それにあいつとお前の命は連動している。あいつに何かあったらお前も危ないんだろ。」

“……確かにそうです。わたしとあの子の命は連動しています。結加の命が消えるとき、わたしも消えますから。……でも、”

プレーチエはしっかりとツナの顔を見つめ、答える。

“わたしはあの子を信じています。信じることしか出来ません。あの子は出来る子ですから。大丈夫、どれだけくじけても、あの子は必ず立ち上がることが出来るのです。”

揺るぎないプレーチエの瞳と言葉、そして気持ちにツナは一瞬息を呑む。

時が止まってしまったかのような感覚に陥ってしまった。

まるで、爆音も爆風もなくなったかのような感覚に。

ツナは見た。

その青い瞳に潜む、確かな心を。

「…そうか。」

ツナは小さく笑み、そして立ち上がる。

一度リボンたちの方を見遣り、再びプレーチェを見つめた。

「…特訓をはじめよう。主を守る、それがお前の役目だろう。そのためにも、強くなるんだ。…オレも、守りたいものがある。」

大切な仲間や家族を。

ただ守りたい。

プレーチェは一瞬目をぱちくりとさせたが、すぐに“はい。”としっかりと返事を返した。

ツナはプレーチェと向き合い、ひとつ深呼吸をする。

手に力を込めれば、グローブに鮮やかなオレンジの炎が燈る。

「オレたちも、死ぬ気でいくぞ。」

大切なものを守るために。

死ぬ気で、やり遂げる。

さあ、共に強くなろう。

標的182 精霊の覚悟(前書き)

毎日更新六日目!

標的182 精霊の覚悟

「…そういえばプレーチエ、お前はどんな力が使えるんだ？」

特訓を始めようとツナとプレーチエが互いに向き合つと、ふと疑問に思ったツナはプレーチエに問うた。

その質問にプレーチエは「うーん…」と言いながら首を傾げて答えを出そうとする。

「そうですね…精霊の力をもってすれば、多くの力を使えますが…ただしてはいけないこともあります。」

「しては…いけないこと？」

「ええ。例えば…命にあまり干渉してはいけません。自らの命を断たせたり制限するのはいいのですが、逆に命を延ばしたりしてはいけないのです。他人の命もまた然別しから。…それを破ってしまえば精霊は命を失い、今まで生きていた証も消されてしまいます。それほど禁じられたことなのです。」

精霊の力は計り知れない。

生きている時間が長いほど、その力は強くなる。

だが、そんな彼らでも命の干渉は許されない。

どれだけ力を有していても、永遠を求めることは許されない。

精霊の命はさまざまだ。

すぐに死んでしまうものもいるば、長く生きるものもある。

中には何千年、何万年と生きたものもいる。

彼らは命の終わりを自らの意思で決められる。
消えたいと思えばすぐに消えることもできる。

しかし、命を延ばすことは許されないのだ。

「…結構シビアなんだな。」

「ふふ、そうですね。」

ブレイチェは笑って答えるが、これは笑い事ではないくらいに重要なことだ。

何せ命がかかっているのだ。

何よりも大切な命が。

「…笑い事ではないんじゃないか……」

「ああ…それもそうですね。」

思い直したようにプレーチエは笑うのをやめ、再び真剣な表情となる。

凜としたその瞳にツナは一瞬のまれそうになった。

青く輝く瞳が美しく、確かな覚悟をそこに感じたのだ。

何にも負けぬような、固く強い覚悟を。

(……こいつの覚悟が何かはわからないが、)

相当な覚悟であるということとはわかる。

ツナも今まで何度も覚悟を試されてきた。

その覚悟は嘘ではなく、偽りのないものであった。

……似ていたのだ。

そのときの自分の瞳と、今のプレーチエの瞳が。

瞳の奥に燃える、覚悟が。

「……プレーチエ」

「はい、なんでしょう。」

「……お前の覚悟は何だ？」

「覚悟、ですか……」

問いを繰り返し、プレーチエは動きを止める。
ぱたぱたと揺れていた尻尾もぴくりともしない。

後ろでは爆発音がたえない。

だが二人のあいだは無音、静寂である。

外の音も、気配も、すべてが二人から遮断された。

まるで、時間が止まったかのように何も感じられない。

「…わたしの覚悟は、」

ぽつりとプレーチエがつぶやいた。

その瞬間に時間も音も気配もすべてが元通りになる。

再び、爆発音が響き渡る。

一度、プレーチェは目をふせてひとつ息を吐き、そして顔をあげる。

きらり、瞳が輝いた。

「わたしの覚悟、それは精霊としての誇りを持ち、結加ゆいかを守り抜き
あの子と生死をともにすることです。」

生まれたときから決めていた。

使命にも似た覚悟。

揺るがない覚悟。

何があるつと、それは変わらない。

「……………そうか。」

そう一言つぶやき、ツナは黙り込む。

プレーチェの瞳が、言葉が、覚悟があまりにもかたく真剣で。

射抜くようなその視線を、なぜか見ることができなかった。

「……プレーチェ、」

「はい。」

ツナは一步後ろに下がる。

そして両手をかまえ、グローブに炎を燈らせた。

「…始めよう。」

「了解しました。」

プレーチェも一步後ろに下がり、かまえをとる。

プレーチェの準備が整ったのを確認し、ツナは炎の出力をあげた。

「……かかってこい。」

その覚悟を胸に。

共に強くなるんだ。

標的183 日向井家の光玉(前書き)

毎日更新七回目!

標的183 日向井家の光玉

「…っはあ……………」

額に汗を滲ませ、ツナは地面に倒れ伏す。

その隣に真っ白な身体のオオカミ、プレーチエがぱたりと倒れた。

「っ、…綱吉様……………大丈夫でございますか……………」

「あ、ああ…プレーチエは大丈夫か…？」

「…久しぶりに、動きました……………すっかり身体がなまってしまっていたようです……………」

プレーチエがツナに話しかけるが、当の本人はツナの問いにとぎれとぎれの返事をしてうなだれたままである。

二人は今まで激しい特訓を繰り返していた。

攻撃と防御を繰り返し、どちらも力は衰えなかった。

だが特訓をはじめて数十分、体力の限界もあり二人は力や表情に疲労を滲ませてきた。

そして二人の動きがぴたりと止まり、同時にその場にへたりこんだのだ。

「…お前も光玉を使うのか……」

「ええ…日向井家に伝わる光玉は、わたしたち精霊の力が元となっています。ですから精霊であるわたしたちにも使えるのです。」

ブリーチエが尻尾をひとふりすると、その真つ白な身体のまわりにはきらきらと輝く光の玉…光玉がいくつかわれた。

ふわふわと浮くそれは、まさしく結加が出すものと同じである。

「光玉には死ぬ気の炎が混ざっているということをご存知ですか？」

「…ああ、聞いたことがある」

「日向井家の人間は、ボンゴレボスや守護者と違い死ぬ気の炎を出すことができません。その理由はさだかではありませんが…ただ、こうして光玉に混ぜることで、力だけは死ぬ気の炎として使えることができるのです。今だに炎の形で出すことはできないようですが

…。」

色からすると「晴」の炎…了平と同じ死ぬ気の炎だが、効力は「活性」だけではないらしい。

それはどうやら光玉自体の力らしく、工夫をすれば攻撃と防御の両方をこなせるのだと言う。

だが、光玉を使いこなすことができたのは今まで誰一人としていなかった。

今も結加は光玉をコントロールしきれていない。
相当難しいらしい。

「…プレーチエは使いこなすことができるのか？」

「ええ、だいたいは…。ですが先祖と比べるとまだまだ、へなちよこですよ。」

プレーチエは苦笑いをしながら光玉を消す。

へなちよこことは言うものの、少なくともツナはそう思っていなかった。

先程プレーチェと特訓をしていたとき、プレーチェの出す光玉の力
やスピードなどのコントロールはなかなかのものであった。

正直なところ、結加ゆい加よりも優れているとツナは思ったほどである。

「…そういえば、結加ゆい加たちは……」

自分たちよりも前に特訓を始めていた結加ゆい加とリボーンのことを思い
出し、二人のいる方向を見る。

すると、どうやら二人も特訓を終えていたようで爆発音などはす
でにやんでいた。

自分たちの特訓に必死になってすっかり忘れていたようだ。

結加ゆい加は壁にもたれかかり、リボーンの話話を聞いている。

リボーンの身なりはきちんとしているが、結加ゆい加は服に汚れがついて
いる。

息もすっかりあがっており、動くのも億劫億劫そうだ。

どつちやら相当激しい特訓をしたようである。

「結加^{ゆい加}、動けるか」

「ち、ちよつと…動けません…流石はリボンさんです、ね…」

力なく笑った結加^{ゆい加}ではあるが、その顔には疲労が滲み出ている。

さらに女性の体力の限界を優^{ゆう}に超えているとみえる。

「…だがさっきよりはコントロールが上達したぞ。よく頑張ったな。」

「えへ…ありがとうございます…」

そう言つと、結加^{ゆい加}はずるずると倒れ込み、ため息をひとつついてそのまま^{まぶた}瞼を閉じた。

そしてぴたりと動かなくなっていました。

リボーンが軽く頬を叩いてみるが、起きる気配はない。

疲労も体力も限界に達してしまったのだ。

「…無理させちまったか」

ぼつりとそうつぶやき、リボーンはツナたちの方を向く。

眠り込んでしまった結加ゆい加を運ばせるため、ツナとプレーチエにむかって歩きだした。

標的183 日向井家の光玉（後書き）

タイトルって…話と関連性がないと意味ないですよね……。

最近関連性がないタイトルばかりで悩んでいます。
どうしよう…！

読んでいただきありがとうございました！

標的184 二人の守護者参上(前書き)

毎日更新八日目!

標的184 二人の守護者参上

……さあ、そろそろだ。

笑っていられるのも、今のうちだ。

これは冥。

世界が終わり、新たな時代へと生まれ変わるのだ。

共に、世界の終わりを見ようじゃないか。

「……！」

ぴくりと肩を動かしてツナはあたりを見回す。

「…まだだ……」

ツナは自分の腕をさすりながら表情を歪ませた。

辺りに何もなかったことを確認し、ツナはベッドにもぐりこむ。

一瞬ではあるが、再びあの悪寒が襲ってきたのだ。

(ツナ、どうかしたか?)

「…ちょっと、嫌な感じがしたただだよ」

徳松がツナの異変に気付き声をかける。

徳松はツナ有能力、ツナの一部であるからツナの異変に気付かないわけではない。

だが徳松には今の悪寒は感じられなかったらしい。

前よりも悪寒が短く弱かったからだろうか。

「…大丈夫、だよね……」

ツナはもう一度辺りを見回し、変化がないことに安心してまぶたをおろした。

朝日の差し込むことのない地下にある研究所の一室。

そこには深い眠りについている少年がいた。

その少年、ツナはよだれを垂らして爆睡中だ。

ただ声をかけるだけでは起きないだろう。

だがそんなツナが目覚めたのは、ある大きな声のせいだ。

「朝だー！！起きろー！！！！！！」

「、！？」

部屋の扉が勢いよく開かれ、途端に耳をつんざく声でツナは目を覚ました。

寝ぼけまなこで起き上がれば、扉の前には仁王立ちをしている人間がぼんやりと見えた。

覚醒しきれていない頭で何が起こっているのか、扉の前には何がいるのか確認しようとする。
しかしそれを鼓膜の痛みが邪魔をしている。

いまいち状況の掴めていないツナに、大声の主はもう一度声をかけた。

「いつまで寝ておるのだー！！さっさと起きろ沢田ああああ！！」

ぼんやりとした姿、耳をつんざく声、ツナの呼び方でツナはその人物が誰だかを認識した。

「お、お兄さん！？」

「極限にそうだ！」

ツナは目をこすってみるが、その人物は間違いなくボンゴレ晴の守護者、笹川了平である。

なぜ了平がこんなところにいるのか。

まずその疑問が浮かび上がった。

「な、なんでお兄さんがここに…!?!」

「沢田を起こせと言われたからだ!?!」

「じゃなくて!?!なんでこの研究所にいるんですか!?!」

「なぜだかは聞いたのだが、極限に忘れた!?!」

ここに来た理由を忘れて豪快に笑う男に、ツナは呆気にとられてしまった。

この男はいつもそうだ。

空元気な性格で状況を理解したり説明したりすることが苦手なのだ。

その上忘れやすい。

こんな了平の性格にいつだったか獄寺が苦勞していたのはご存知であるだろう。

そんな了平にただ呆然とするツナを、彼は構わずに部屋から追い出して誘導していった。

「沢田を連れてきたぞー!!」

またもや扉が勢いよく開かれ、その音と声にツナは顔を歪ませた。

キンキンと痛む耳に入ってきたのは、いつもの赤ん坊の声だった。

「ご苦勞だったな了平。ツナ、いつまで寝てんだオメエ。ちんたらしてねえでさっさと起きろってんだ。」

「リ、リポーン！」

目の前には、優雅にコーヒーを飲んでいる赤ん坊、リボーンの姿があった。

ツナはリボーンになぜ了平がここにいるのかと問いただす。

「なんでお兄さんが研究所にいるんだよ！」

「なんでって、そりゃあ新しい技を完成させるためだろ。」

さも当たり前のように言うリボーン言葉に、ああそうかと一瞬納得してしまいそうになる。

だがそれは間違いだということにすぐに気づきツナは否定の言葉を述べた。

「そんなん知らないよ！」

「オレは言ったつもりなんだが。」

「言われた記憶にないし！」

「オメエが忘れてるだけじゃねえのか。」

どれだけツナが反抗をしても、リボーンは自分の言葉を変えるつもりはないらしく、マイペースにコーヒーを口にしていく。

そんなりぼーンに口答えをしていることに疲れてしまったツナは、ひとつため息をついて椅子に座り込み、そして机にうなだれてしまった。

すると机に突っ伏すツナに誰かがお茶を差し出す。

それに気付いたツナは礼を述べようと顔をあげた。

「あ、ありが……」

しかし、途中でツナは言葉を失ってしまふ。

なぜなら、ツナにお茶を差し出した人物がまたもや意外な人物だったからだ。

「……ボス？」

「ク、クローム!？」

目の前には某南国果実のような髪型をしたボンゴレ霧の守護者、クローム髑髏が首を傾げていた。

標的185 pugno corretto e solare)プゲノ コ

毎日更新九日目!

(2011年最後の更新!)

「おめえら、ちゃんと考えてきただろうな。」

「極限に考えてきたぞ!」

「…わたしも、考えてきた。」

実験室の真ん中では、リボーンが平とクロームに技の確認をしている。

どうやら前もって二人に技の提案について話をしていたらしい。

一応ではあるが二人には案があるのだという。

2185

何やら会話を続けている三人を、ツナは部屋の片隅から眺めていた。

「…ツナは、今日は何もしなくていいのか?」

「うん。午後から技の練習すればいいってリボーンが言ってたから…。それに、二人のことも気になるし。」

徳松はツナの肩に座り、ツナと一緒に三人のやり取りを眺める。

了平は騒がしく、クロームは物静か。

相反する二人である。

「そつえば、結加や獄寺たちは……」

「結加ちゃんとプレーチエは光玉の特訓、獄寺くんと山本はまたデ
ータ採取してるみたい。」

「ふうん……。ツナは暇人ってわけだな。」

徳松がくすくすと笑い、ツナは気に食わない表情をする。

徳松の言つことはごもつともなのだが、何だか癪にさわったのだ。

しばらく無言で今の不満を訴えていたが、気にしないようにしているのか徳松はツナを無視してあさつての方向ばかりを向いていた。

「それじゃ、まずは平から説明してみる。」

「おう！まかせろ！」

了平は握りこぶしを振りかざし、張り切った様子で返事をする。

どつやらかなり自信があるらしく、満面の笑みである。

「お兄さん、どんな技を考えたんだろう…！」

「了平のことだからな…何があるのかわからないな」

ツナと徳松は不安な面持ちで様子を伺う。

了平を疑っているわけではない。
だがあの性格だ。

何を考えているのかまったく理解できないのだ。

(…どんな技なんだろう)

期待と不安がぐるぐると頭の中で渦巻く。

彼なら何とかなるだろう、とは思っているのだがどこか心配なのだ。

それが徳松に伝わったらしく、徳松はくすりと笑い「大丈夫だ」とツナに一声かけた。

そうこうしているうちに、了平の準備ができたようで、何やら雄叫びをあげている。

「なにか標的を出してくれないか！」

「わかったぞ」

了平の要望に応えるべく、リポーンはオスカルから技の標的に用いるようにと渡されていた小型のヘリコプターを取り出した。

獄寺と山本の新技披露の際にも用いたものである。

ボタンを押せば、パラパラと音をたててヘリコプターは飛びはじめる。

くるくると了平たちの頭上をまわると、数メートル離れた場所で止まった。

場所を確認すると、了平は右の握りこぶしに力を込める。

「お兄さん、ボンゴレ匣使わないのかな…」

「みたいだな。」

了平はボンゴレ匣を取り出そうとはしない。

そのかわり、指にはめたボンゴレリングに黄色に輝く炎を燈らせた。

「極限にいくぞー！」

その声と同時に、了平の右手から右肩までに死ぬ気の炎が一気に広がった。

きらきらと輝くそれは、特に右の拳に濃く集中している。

一体どんな技なのだろうと誰もが息をのんで了平を見守る。

しばらくヘリコプターを見つめていた了平は、小刻みに跳びはねはじめた。

よくボクシングの選手がしているあれである。

とん とん とん とん

軽やかなリズムを刻むフットワークを繰り返す。

すると、突然それはぴたりと止まった。

(…いくぞ!)

了平のまぶたが一際大きく開かれた。

まるで、

「……太陽、みたいだ……」

ツナには自然と、その言葉が発せられていた。

了平によって破壊されたヘリコプターは、跡形もなくばらばらと破片だけが床に落ちた。

そのひとつひとつから煙が立ち込め、黒く焦げておりほぼ灰と化していた。

了平の右腕からも煙がもくもくと上がっていた。

彼は右腕をゆっくりとおろし、こちらを振り向く。

「極限にどうだ？」

了平の頬に汗がひとつ伝う。

息もあがっており、肩が上下にゆっくりと動いていた。

リボーンはしばらく了平を見つめて、ぽつりと言葉を発した。

「…きついのか。」

「な、なんのこれしき…どうってことない……」

「…その技は一回しか使えねえのか。」

了平が無理をしているのは見え見えだった。

そんな彼を心配して部屋のすみにいたツナと徳松が駆け寄る。

「お兄さん、今の技って……」

「…極限に大量の体力を使うらしいな……」

試したのは小型のヘリコプターであるが、威力は凄まじいものだった。

今でも熱風による肌の痛みは治まらないのだ。

あれを実際に使うとなると、大きな力となるだろう。

だが、その分代償は大きいらしい。

「おめえもまだ特訓が必要だな」

「おう…極限にまかせろ！」

了平は返事だけはしっかりとっているが、見た感じは辛そうだった。

常日頃トレーニングやランニングをしている了平がきついと感ずるほど、この技体力を使うらしい。

そんな了平を眺めていたリボーンは、ふと問うた。

「この技の名前は考えたのか？」

「名前か…極限に考えたのだがいまいち言葉にできないのだ！」

がはは、と笑う了平を見てツナと徳松、クロームはぽかんと口を開けてしまう。

ただ一人リボーンだけはため息をついてやれやれと肩をすくませていた。

「仕方ねえ、同じ晴属性の誼よしみとして、オレが特別に名前をつけてやるうじゃねえか。」

「極限に助かるぞ!!」

リボーンはにやりと笑い、しばらく考えるしぐさをする。

そのあいだ、ツナたちはどんな技名になるのだろうかとりボーンの

言葉を待った。

それから数十秒後、リボーンの口元がにやりと歪んだ。

「決めたぞ。」

“ p u g n o c o r r e t t o e s o l a r e (プ グ ノ
コ
レ ッ ト エ ソ ラ ー レ) ” 、 “ 太 陽 の 右 拳 ” だ 。 「

2011年最後の更新…かな…？

どうも、ステーキを二人前食い荒らしたゆか空です。

いい加減にしるよ…！

2011年も終わりますね。

リポーンを好きになって八ヶ月…小説を書きはじめて七ヶ月…。
長いようで短い期間でした。

これだけ書いてるんだから、少しは文才は伸びた…のか…？(成
長が見られない)

なんか今年中に小説が完結するはずだったんですが、全く完結する
気配がありません。

この調子だと二年は終わらない…(笑)

もう少し展開を上手く書けるよう頑張ります。

さて、最後になりましたが…。

こんなわたしの小説を読んでいただき、コメント・評価をしていた

だき、そしてこんなわたしと仲良くしていただきありがとうございます！
ました！

2012年もお付き合いいただけると幸いです。

本当にありがとうございました！^^

今後とも、「その先には。」をよろしくおねがいたします！

2011・12・31 ゆか空

標的186 思わぬ再会(前書き)

B u o n c a p p o d a n n o !

毎日更新十日目！

標的186 思わぬ再会

「…“ pugno corretto e solare (プグノ
コレット エソラーレ) ”…:か。」

了平はリボーンの提案した技名をぽつりと呟く。

「イタリア語で“太陽の右拳”という意味だ。」

「よくわからんが、極限に感謝するぞ！」

わかっていなければ意味がないだろう、とりボーンたちは思ったがそこは置いておくとして。

「次はクローム、おめえだぞ。」

くるりと振り返ってリボーンはクロームに言う。

クロームは小さくこくりと頷き、部屋の真ん中に向かった。

「クローム、おめえも標的がいるか。」

リポーンがそう言うと、クロームはしばらく無言でいたが、人差し指をある人物に指して言葉を発した。

「……ボス、手伝ってほしいの。」

「えっ、オレ!?!」

突然指名を受け、ツナは驚いてしまう。

まさかのこと戸惑っていると、リポーンに軽く足を蹴られてしまった。

「うわっ、なんだよ!」

「ちんたらしてねえでさっさと行け。手伝ってやるくらいいいじゃねえか。」

「わ、わかったよ! わかったから地味に蹴るなよ!」

ツナは蹴られていたところをさすりながら、ぶつぶつと文句を言いつつもクロームの傍に寄った。

二人が向き合っていると、リボンと了平は数メートル離れて二人を見守ることにした。

状況をよく掴めていないままで、ツナは落ち着かない様子で辺りをきよろきよろと見渡す。

そんなツナに、クロームが静かに話しかけた。

「…ボス、ごめん。突然頼んじゃって……」

「えっ、い、いやっ、いいんだ気にしなくて！ただびっくりしただけ……」

少ししょんぼりとしてしまったクロームに慌ててツナは言葉をかける。

そして、なぜ自分を相手に指名したのかを問うた。

「…クローム、なんでオレを指名したのかな？」

「……それは……」

クロームは何かを言いかけ、そのまま黙り込んでしまう。

そんなに言いにくい理由なのだろうかと思いつながらもツナはクロームの言葉を待つ。

しばらくして、クロームは小さく口を開いた。

「…ボスなら、大丈夫と思って。」

「…どっぴいっしょと？」

「……この技、もしかしたら危険なものになってしまうかもしれないけど……でもボスなら強いから、危険も回避してくれるかなって思ったの……」

“危険”

その言葉を耳にして、ツナは苦笑いをした。

危険かもしれない技を、今はじめて試されるのだ。

自分を標的にして。

そんな状況におかれ、恐怖を感じない人はいるだろうか。

…いや、いないだろう。

誰しも、恐怖は感じるだろう。

「……そんなに、危険なの？」

「……わからないの。もし万が一、危険なことがあつたとしても、ボスなら大丈夫って思ってた頼んだの。」

それはどんな信用か。

何故自分なら大丈夫なのかわからなかったが、今さら断ることもできない。

叶うことなら辞退したいところであるが、それも悪いと思いつなは

不安を抱えつつも標的役を引き受けることにした。

「わかった。がんばるよ。」

「…ありがとう、ボス。」

クロームは可愛い笑みでお礼を述べる。

その笑顔にツナは照れてしまい、つられて笑ってしまった。

そんなほんわかとした雰囲気壊すように、リボーンの声が二人を引き戻した。

「おい、さっさとはじめろ。」

「い、いめえ…。」

クロームは慌てて謝り、もう一度ツナを見る。

ツナは頷き、死ぬ気丸を二つ服用する。

それと同時に肩に乗っていた徳松は姿を消し、入れ代わるようにツナの額にはオレンジ色の炎が燈った。

「クローム、いいぞ。」

普段より低くなった声でツナはクロームに声をかける。

クロームは頷き、三叉槍をかまえてひとつ息を吐く。

そしてしばらく目を閉じて集中力を高める。

しばらくのあいだ、部屋には沈黙がおとずれる。

(…どんな技なのか……)

ツナは緊張を感じつつ、油断をせずにクロームの出方を待った。

「……………幻覚、開始。」

ぽつりと小さな、だがはっきりとした声で呟き、三叉槍をこつんと床に音をたてて突き立てた。

ドカンッ！！！

馬鹿でかい音をたてて、真っ白な煙が部屋いっぱい広がる。

ツナはすぐにクロームの姿を見失ってしまい、一瞬戸惑う。

「…何も見えない……」

(クロームの気配も感じられないな…)

意識の中で徳松が警戒心を増す。

視界は悪く、ついには五感が狂ってしまった。

こついう場合、無駄に動かない方がいい。

そう思いツナは身動きもせず、瞳を閉じてクロームの気配を探した。

次第に煙が消えて、視界が晴れていく。

ツナはゆっくりとまぶたをあげ、辺りを見回した。

するとうつすらと見えてきた人物に…ツナは驚愕することとなる。

「……な、」

(あいつは、確か……)

ツナの目は大きく見開かれ、動揺の色を隠せないでいる。

そんなツナの動揺を感じ取り、徳松も啞然としてしまっている。

まず、景色はオスカルの研究所の部屋ではなかった。

そこは、ただ木々が並ぶ森だった。

下を見れば土、見上げれば大空。

頬をなぶる風は、本物とかわりない。

だが、今はそんなことを感じている余裕はなかった。

ツナの視線や思考は、すべて目の前の人物に集中していた。

「……どういふことだ……」

「極限にどうなってるんだ？」

部屋の片隅にいたりボーンと了平も、同じ景色、同じ人物を見ていた。

リボーンも状況を掴めきれておらず、了平はちんぷんかんぷんだとお手上げ状態だ。

ちらり、とりボーンはツナを見る。

(……怯むんじゃねえぞ、ツナ)

声には出さず、リボーンはツナに告げた。

ツナの心に届くことを信じて。

「……………なぜだ…」

なぜこいつが目の前に現れた。

ツナは混乱していた。

幻覚だということも忘れていた。

(…ツナがこんなに混乱するほどの人物なのか……………)

徳松はツナのアマリの混乱さに驚いていた。

それほどまでに彼等を混乱させ、啞然させ、驚かせる人物とは。

白い髪の毛

白い服

目の下にはタトゥーのような模様

紫の瞳

……そう。

かつて、ツナが未来で命を懸けて戦った男。

「……………白蘭……………」

にっにっ、

白い彼はあやしく笑った。

標的186 思わぬ再会（後書き）

B u o n c a p p o d a n n o !

あけましておめでとつございませす！

2012年最初の更新です^^

今年も「その先には。」を連載できるようにがんばりますので、よろしく願ひします！

ではでは！

2214

読んでいただきありがとうございます！

2012.1.1 ゆか空

標的187 mondo della fantasia(モンド デミッラ

毎日更新十一日目!

「……………白蘭……………」

ツナはぼつりと目の前にいる人物の名前を呼んでいた。

彼は…白蘭は、にっこりと笑んで右手をひらひら振った。

「やあ、綱吉くん」

白蘭は陽気にツナに挨拶をする。

それを見てさらに啞然としてしまうツナであったが、すぐに我にかえって白蘭を睨みつけた。

だが、

「…どうせ幻覚だ、とか思っていないかい？」

そう白蘭に言われ、ツナは肩をびくりと大きく揺らした。

…本心をつかれたからだ。

そのまま無言でいると、白蘭は声をあげて笑った。

「否定しないっていうことは、ほんとにそう思ってるんだね。どうせ幻覚だ、されど幻覚だ、とか……油断しないほうがいい。」

だんだんと、白蘭の声が低くなっていく。

ツナは背中を汗がひとつ流れ落ちていくのを感じた。

…こんなに混乱するなんて。

握りこぶしをつくると、グローブが「ぎゅっ」と音をたてた。

「ふふ、混乱してるね。仕方ないよ、まだ中学生だもんね。」

「…馬鹿にするな。」

「だって事実だろう」

幻覚なのに、ツナは惑わされてしまう。

まるで、本人であるかのように話しかけてくるからだ。

表情も、声の抑揚も、未来で戦った男と同じ。

それがさらにツナを惑わせた。

「……クロームは何の目的で白蘭を幻覚にしたのだ？」

「オレにもわからねえ。だがこの幻覚…なかなかだな。」

リボーンは地面に触れ、砂をつまんでみる。

その感触は本物そのまま、舞い落ちる葉っぱの色は艶やかな緑で

ある。

さらには、白蘭までもが本物のよう。

見事な幻覚だ。

「…どういふ訳かは知らねえが、今はツナが落ち着きを取り戻すことが第一だ。」

だから、怖じけづくな。

静かに小さな拳に力が込められた。

「もしかして、僕のこと怖い？」

「怖いも何も、お前は未来でオレを殺そうとした……」

「ああ、そうだね。でも結局僕は君にやつつけられちゃったわけなんだけど。」

けらけらと笑う白蘭は、幻覚には見えなくて。

次第に落ち着きを取り戻してきたツナは、炎を揺らめかせて彼に話しかけた。

「…幻覚であって本物でないお前だからか、あまり悪意は感じられない。それどころか未来のような悪に満ちた顔ではない。」

「あははっ！ひどいこと言うなあ、綱吉くん！」

「だが、本当にそう思った。クロームのつくった幻覚だからかもしれないが……」

「へえ…そっか……」

しばらく白蘭はあやしい笑みをしてツナを見ていた。

すると、彼は左手に真っ白な小さい箱を取り出した。

「っ、それは……」
「そ、匣だよ。」

白蘭はマーレリングに炎を燈すと、それを匣の小さな穴に注入した。

ポウウウウッ

現れたのは、真っ白な身体の龍、白龍だ。

普通、匣は実在する動物のみで形をとることができるのだが、白蘭は空想上の動物を匣にすることができた。

白龍はくるりと白蘭のまわりを回り、こちらを睨みつけている。

「…試して、白龍と戦ってみてよ。」

「、いきなり何を……」

何を言い出すんだ。

そうツナは言おうとしたが、それは叶わなかった。

「!？」

(避けるツナ！)

ツナは炎を逆噴射させ、その場から離れる。

その一瞬後、白龍が物凄いスピードで突っ込んできた。

「、何をするんだ！」

「何って、攻撃？」

白蘭は当然とでも言うかのようににっこりと笑った。

「攻撃と言っても、戯たわむれのようなもんだよ。本気だったら…こっし

ちやうからね。」

ぞわり、

ツナを悪寒が襲う。

一瞬だけ、ツナは身動きができなくなってしまった。

そんなツナに、白龍が容赦なく襲い掛かる。

(っ、ツナ、避けるツナ！)

「っ！」

徳松の声で身体が自由が効くようになり、ツナは炎を逆噴射させた。

バシユッ！

「、！」

だが一瞬の隙をつき、白龍はツナの左頬をかすめた。

摩擦による鋭い痛みのもと、生暖かい何かが頬を伝う。

（大丈夫か、ツナ！）

「…心配ない。ただの擦り傷だ。」

ツナは腕で流れる血を拭い取る。

ピリピリとした痛みで表情が引き攣る。

まだ痛みを感じる傷でよかった、とツナは思った。

傷の痛みを感じなくなったときがまずいのだ。

痛みを感じる神経が壊されると痛みを感じなくなる。

その状態がつづけば、当然命の消える可能性はあるのだ。

だから、痛みを感じる間はまだいい。
我慢できる痛みなら、まだいい。

「油断しないほうがいいよ、綱吉くん。大丈夫かい？」

「…悪ふざけも、いい加減にしろ。」

「ごめんごめん」

白蘭は白龍を匣に戻し、ツナに謝罪の言葉を述べる。

幻覚相手に本気になってしまっ自分がおかしいのではないかとツナは己を疑った。

自分は何をしているのかも、定かではなくなってしまう。

自分は今誰と話をしている？

「…そろそろかな？」

ぼつりと白蘭が呟いた。

ツナは顔をあげて白蘭を見る。

彼は、また笑っていた。

「久しぶりに君と話せてよかったよ。楽しかったし」

「…どういっ、」

どういう意味だ、とツナが問いたただそうとすると白蘭の身体が透けはじめていた。

白蘭だけではない。

まわりの景色もだ。

「…クロームの限界がきているのか。」

「そ。だからこれでお別れだね。…ねえ、綱吉くん。」

白蘭は数歩ツナに近づき、少しだけ背を屈かがませる。

「僕とこうして話して、どうだった？」

「…どうだったって……」

ツナは白蘭の質問の意味がよくわからなかった。

だがしばらく考え込み、自分が思ったことを正直に話した。

「…姿を見たときは、怖かったし驚いた。それに不安だった。…でも今はそれを感じない。」

「…ふうん、そっか。」

「流石みずがに白龍に攻撃されたときは何事かと思ったがな。」

「うん、ごめんね。」

へらへらと白蘭は笑う。

ツナはその笑顔を見て、何かを感じた。

それが何かを考える前に、白蘭が言葉を発した。

「質問に答えてくれてありがとね。じゃあね、綱吉くん。またね」

「、まっ……」

ツナは白蘭を引き止めようとしたが、間に合わず白蘭は消えていった。

途端に景色はオスカルの研究所の部屋に戻り、風も止んだ。

今のは夢だったのか、と思うほど終わりはあっさりとしていた。

だが、今だピリピリと痛む傷が現実であることを物語っていた。

「……ごめん、ボス。幻覚が切れちゃったみたい……」

「気にしなくていい。クロームは大丈夫か？」

「うん、ありがとうボス。」

クロームの顔色が少しだけ悪い。

今の幻覚に力を使いすぎたのだろう。

はあ、と息を吐いてクロームは座り込んでしまった。

「…クローム、今のって……」

ツナはクロームに目線を合わせ問う。

長いため息をついた後、クロームは説明をし始めた。

「…今のは、幻覚空間を作り出してその中の有幻覚と戦わせるって
いう技なの。相手の記憶を探って、その人が今まで出会った…恐れ
た人物を有幻覚にするの。わたしはその恐れた人物を幻覚で分析し
て、よりリアルに作り出すことができるの。…ボスの場合は白蘭で、
…有幻覚で未来ではなくて今の時代の白蘭の雰囲気や態度をあら

わたしたんだけど…今の時代の白蘭がどういう人かわからなかったから“危険”かも知れないって思ったの。」

「…クローム、幻覚で分析するってどういうことだ？」

「幻覚で対象の人を分析できるの。性格や喋り方、仕種とか…生きていれば、その人が何を考えているかとかは一時的にわかるの。」

難しい説明を頭の中で整理して、ツナはすべて理解した。

それと同時に、新たな疑問が浮かび上がる。

先程、白蘭が言っていたことだ。

“久しぶりに君と話せてよかったよ。楽しかったし”

…もしかして。

「…あれは……」

“ 久しぶりに君と話せてよかったよ。楽しかったし ”

“ その人が何を考えているかとかは一時的的にわかるの。 ”

まさか、あれは……

「……白蘭の本心……？」

そんなまさか。

そんなことはない。

今、白蘭が生きているならば未来での記憶はユニの力によって伝えられているはずだ。

白蘭が、ツナによって倒されたことも。

なのに、彼はツナと話せてよかったと、楽しかったと言っていた。

…どづいづいとだろっか。

ツナはさっぱりわからなかった。

「クローム、調子はどうだ。」

そんなツナをよそに、リボーンがクロームに声をかける。

クロームは「大丈夫」と言うが明らかに体調は悪そうだ。

顔色は悪いし息はあがっている。

了平と同じようなものだ。

「クロームも特訓が必要だな」とリボーンは二人を交互に見遣った。

そして再びクロームに問うた。

「んで、技名はあるのか。」

「…技、名……………」

クロームは少し考えるしぐさをして、小さく柔らかい声で呟いた。

「……」
「mondo della fantasia」(モノド
ラ ファンタジア)」、イタリア語で、「幻想の世界」……」

標的188 今すぐのこと(前書き)

毎日更新十二日目!

標的188 今すべきこと

了平とクロームの新技披露を終え、二人がリボーンにそれぞれの個室に案内された後、部屋にはツナだけが残された。

部屋には灰と化したヘリコプターも残され、ただ殺風景だった。

ただ焦げ臭い匂いがかすかに残り、地下だから窓もないし風も吹かない。

どこか閉塞感のある部屋で、ツナは己の炎を見つめていた。

「…ツナ、どうかしたのか？」

先程から何も言わず、ただぼーっとしているツナを心配して徳松が声をかける。

ツナは「いや……」と否定の言葉を述べようとしたが、口をつぐんだ。

「…さっきの、白蘭の言葉が気になってたんだ。」

「白蘭って、あの真っ白なチャラ男か。そいつの言葉って何だ？」

少し、いやかなりツナは徳松の発言が気になったが、それは置いておくとして徳松の質問に答えた。

「白蘭が、去り際に言ってたことだよ。」

白蘭の言葉、それは……

“ 久しぶりに君と話せてよかったよ。楽しかったし ”

何がよかったのか。

なぜ楽しかったのか。

それがまったくわからなかった。

クローム曰く、有幻覚としてあらわれた彼は今の時代の白蘭の性格や心情をうつしているのだという。

なので、あの白蘭の言葉は本心には間違いないのだ。

だが、信じる事が出来ない。

未来であんなことがあったら、そう簡単に信じれるわけがない。

いくら今の時代の白蘭と未来の白蘭が違うと言っても、未来での記憶は今の時代の白蘭にも伝わっているのだ。

未来で自分を倒した相手に出会い、「よかった」や「楽しかった」とは言わないだろう。

「…よく、わからない。」

はあ、とため息をついてツナは腕に顔をうずめた。

元来白蘭は何を考えているのかわからなかった。

謎に包まれた男なのだ。

そんな人間を理解しようとすることは無謀に近いのかもしれぬ。

「…それでずっと悩んでたんだな。」

ツナの悩む原因がわかり、徳松は小さく笑う。

「……………今、ツナがすべきことは白蘭について悩むことなのか？」

「…！」

「ツナがすべきことは、もっと強くなることじゃないか？そのために、新技を特訓するんじゃないのか？」

その言葉にツナは顔を上げる。

すると、目の前には自分と瓜二つの小さな人間が浮いていた。

「…さつき、プレーチェに言っただろ。強くなるうって。仲間を、大切な人を守りたいんだろ。新技を使いこなせることができるようになれば、ディスプレイを倒すこともできるかもしれないだろ。」

「徳松……」

「…今、ここに白蘭はいない。だから白蘭の考えていることは教えてもらえない。そんなわからないことをずっと考えて悩んでいるより、強くなるために特訓をしたほうがいい……そう思わないか？…あ、いや、これはオレの考えだからツナに強^しいるわけじゃなくて、助言みたいなものだから……」

焦って補足する徳松の慌てっぷりに、ツナは自然と笑みをこぼした。

そして徳松の言うとおりだと自分に言い聞かせる。

「…その通りだな。悩む時間がもつたいないよな。オレはもっと強くならなければいけないのに……。」

馬鹿だな、と呆れたように笑い、ツナは徳松を掌^{てのひら}に乗せた。

「ありがとう、徳松。気づかせてくれて。」

「…どういたしまして。」

徳松の炎が照れ臭さを隠すようにゆらゆらと揺れた。

ツナは立ち上がり、グローブに炎を燈す。

その炎の勢いはツナのやる気をあらわしているかのように大きく強いものだった。

「……強く、なるんだ。」

強くなるために、

こちらへ前へと。

「……………なにそれ。」

「手紙です。リボンさんから。」

「ふうん…貸して。」

少年は男の手から手紙を取ると、封を開けてそれに目を通した。

しばらくして、その少年は手紙を丁寧に封筒に戻してポケットにしまった。

「……………なかなかいい条件だね。気が進まないけど、行ってあげても

いいかな。」

「行くのですか。」

「うん。」

少年は椅子から立ち上がって、窓に寄り掛かる。

すると、彼の肩には黄色い小鳥が音痴な歌を口ずさみながら降り立った。

「ミードーリーターナービクター……」

「君も行くかい。」

少年は小鳥に声をかけ、学ランを閃かせて扉へと向かった。

「……行ってらっしゃい、委員長。」

「。じ」

部下に見送られ、委員長こと……雲雀恭弥は部屋を後にした。

標的189 雷の子(前書き)

毎日更新十二日目!

標的 189 雷の子

一切自然な光の差し込まない部屋でツナはすやすやと眠っていた。

地下だから生活の中の光はもちろん電気のみだ。

なので当然窓もなければ風も吹かない。

だから時計を見なければ何時なのかもわからないのだ。

今は朝の8時半。

だが電気はついておらず、部屋は真っ暗である。

心地好い程度にクーラーが効いたその部屋で、突然悲鳴が聞こえた。

「っなああああああー!!」

その声の主、ツナは飛び起きた。

一応言っておくが、ツナが自分の声に驚いたわけではない。

ツナは咳を何度もして、腹をさする。

突然、腹に衝撃が走ったのだ。

内側からでなく、外側から。

つまり、何者かに腹を殴られたか蹴られたか…攻撃をされたのだ。

侵入者か、とツナが慌ててその姿を確認するべく部屋の電気をつけた。

しかし、目の前には……

「がははははっ！ツナ起きるの遅いぞ！ランボさんのが早起きだもんね！」

「ラ、ランボ！？」

ツナは口をあんぐりとさせ、目の前で無邪気にはしゃぐ牛…いや、無邪気にはしゃぐ子供を見た。

ここはオスカルの研究所だ。
しかしランボは家にはいるはず。

どうしてなのだろうか。

ツナはランボを抱き上げ、質問した。

「ランボ、なんでお前がここにいるんだよ！」

「ランボさんねー、赤いオツサンと一緒にここにきたんだよー」

「赤いオツサン…？」

ランボの言う“赤いオッサン”が誰だかわからず、ツナは首を傾げる。

皮膚の赤いオッサン、ということだろうか。
だとしたら普通に怖い。

服装が赤で統一されているオッサン…そんな人間はツナのまわりにはいない。

ツナが思考を凝らして考えていると、部屋の扉が乱暴に開けられた。

「このガキ！おとなしくしてろって言っただろっが！」

「ぐびゃっ！！赤いオッサンだもんね！」

ランボは途端に怖がってツナの背中に隠れる。

“赤いオッサン”と呼ばれた人物を見て、ツナは「ああ！」と納得した。

「そっか、“赤いオッサン”ってリーダーさんのことか!…確かに赤いもんな……」

ランボはリーダーの赤い髪を見て“赤いオッサン”と呼ぶことにしたらしい。

確かにリーダーと言えば赤い髪という連想はある。まだ30歳にも達していないが何処かオッサンの雰囲気醸している。

ランボが考えた“赤いオッサン”という呼び方もおかしくはない。むしろ頷ける。

「よう、坊主。起こしちまって悪かったな。」

「あ、そろそろ起きる時間だったし……リーダーさんとランボは何故ここに?」

リーダーがツナの背後にいるランボを抱え上げ、苦笑いをして答え

た。

「それがよお、昨日いきなりリボーンに呼び出されたんだ。こいつを連れて来いってな。」

リーダーはランボを指差す。

それが気に入らなかったのかランボは手足をじたばたさせて降りようつとする。

「そ、それだけ？」

「まあな。このあとオレは一旦イタリアに行かなきゃならねえし、まあ…ついでだな。」

リーダー曰く、先日九代目から呼び出されたと言う。

彼がボンゴレに入ってから一度も挨拶に行けていないので、是非話をしたいとのことだ。

「んじゃ、飛行機の時間に遅れちまうからガキのこと頼んでいいか

「？」

「あ、うん！気をつけて！」

「ありがとうさーん」

リーダーは手をひらひらと振って部屋を後にした。

彼を見送ると、ツナはランボを抱えてリボーンの元へ向かった。

「お、起きたか。」

「リボーン、なんでランボまでここに連れて来るんだよ！」

「何度も言ってるだろ。ランボだって立派な守護者だ。たとえ馬鹿なガキだとしても。」

「ランボさん馬鹿じゃないもんね！リボーンのおほー！！」

ぎゃあぎゃああと三人（正しくはリボーンを除く二人）が口論をしているのを、朝食の準備をしていたオスカルが苦笑いを見ていた。

「まあまあ、落ち着いて。でもリボーン、こんな小さな子供に新技を考えるだなんて無理じゃないかな？」

オスカルのごもつともな意見にツナは激しく頷く。

ランボはまだ五歳の子供だ。

そんな子供に敵を倒すための新技を生み出せと言っても無理な話だ。

だが、そんなごもつともな意見を否定するかのように、リボーンはあやしい笑みを浮かべた。

「オレに考えがある。大丈夫だ、なんとかなる。」

はっきりとそう言ったあと、リボーンはエスプレッソを一口飲み、

新聞に目を通しはじめた。

(……休日のお父さんみたいだなあ。)

「何か言っただかオスカル？」

「な、なんでもないよ！」

標的190 地震(前書き)

毎日更新十四日目!

標的190 地震

……カタカタッ

「あ！」

オスカルが小刻みに揺れる食器に気付く。

しばらくの揺れのと、食器は動かなくなった。

「昨日から地震が多いなあ。五回くらいかな？」

「でもここは大丈夫なんだよね？」

「まあ、地下だしね。」

オスカルとプロメツサは自室でデータの整理を行っている。

昨日からやたら頻繁に地震が起きるのを二人は気になっていた。

だがここは地下だ。

地下は地面と共に揺れるため、地上よりは揺れも被害も少ない。

だがこれほど地震が起きると心配にもなる。

「ここは耐震性も十分にしているし、大丈夫だけど…調べてみる必要があるかな。」

はあ、とため息をひとつ吐き、オスカルとプロメッサは再びデータの整理に取り掛かった。

それと同時に、自室で休んでいたツナも地震の揺れに気付いた。

「あれ、地震かな…」

「くう……」

ツナの隣にいたナッツは怯えるようにツナに寄り添う。
そんなナッツを優しく抱き抱え、ツナはあたりを見渡した。

揺れは弱い方で、何も倒れたりはしなかった。

しかし、結構長く揺れは続いた。

「くううう…」

「大丈夫だよ、ナッツ。」

揺れがおさまったあとも、ナッツはぶるぶると身体を震わせていた。
たてがみのような炎が頼りなく燃えている。

戦闘中はたくましいこのライオンは、普段はツナにまんまそっくり
なのだ。

「くうくうっ！」

「わっ！」

ナッツは情けない鳴き声で布団の中へ潜り込む。

地震でこれほど怖がるものなのか。

何かおかしいと思いつながらもツナはナッツをなだめようと布団からちよろつとはみ出ているナッツの尻尾を引っ張った。

「ナッツ、そんなに怖がらなくても大丈夫……」

苦笑いをしていたツナの表情がかたまる。

身体も同時に動くことをやめる。

ナッツの尻尾を持つ右手も停止した。

不意に感じた不快感。

これは前にも感じたもの。

……………ゾクリッ！

「……………っ！！」

びくりとツナの身体が跳ねる。

腕に、足に、いや全身に鳥肌が立つ。

そして身体がかたかたと痙攣し始める。

ナッツの尻尾を持つ右手もかたかたと震え出した。

ぱたりとシーツの上に落とされたナッツの尻尾も小刻みに震えている。

「な、に……………」

ツナの顔が一気に青ざめる。

「……………今のって……」

全身を駆け抜けた悪寒。

それは以前にも感じたことのある悪寒。

「……………」

その後しばらく、ツナは言葉を失ったままだった。

……さあ、そろそろだ。

笑っていられるのも、今のうちだ。

これは宴。

世界が終わり、新たな時代へと生まれ変わるのだ。

共に、世界の終わりを見ようじゃないか。

じゆんす じゆんす じゆんす

暗闇の中で響く気味の悪い音。

それと同時に悪寒が濃さを増す。

それに気づくのは

いつか。

標的190 地震(後書き)

とうとう標的190になりました…。

あと10話で標的200ですってよ皆様

早いような遅いような…遅い？

今回は短めでしたね…。すみません。

文の量にムラがあるのは自覚してますが…どうもおせません)・
(・・)

そろそろ2章の山場に差し掛かりたいのですが上手くない…！

冬休みが終わったら毎日更新もしばらくできなくなると思います。

センターが近いので…すみません。

ですが今のうちにストックをためて更新を怠らないようがんばります…っ。

読んでいただきありがとうございました！

標的191 中心地(前書き)

毎日更新最終日！(かも知れない)

標的191 中心地

「大丈夫ですか十代目……。」

「もう大丈夫だよ。そんなに心配しなくてもいいよ。」

「しかしまだ顔色が……」

今だ顔色の悪いツナを獄寺が心配する。

そんな彼をツナはなだめるが、彼の心配は減るどころか増すばかりだった。

地震の後に襲ってきた悪寒にツナがかたまっていると、部屋の扉が勢いよく開かれ、獄寺が「無事ですか十代目！」と叫びながら部屋に入ってきた。

顔色が真っ青なツナを見るや否や、獄寺は慌てだしてツナをベッドに寝かせたのだ。

具合が悪いとでも思ったのだろう。

どこからか冷えピタやら薬やらを持ってきてツナを看護しはじめた。

ツナがどれだけ大丈夫だと言っても、獄寺は「十代目の右腕なので！」などと言ってツナの看護を続けた。

そして今に至る。

「どうしたんスカ十代目…。あんなにお顔を真っ青にして…ナッツも元気がないですし……」

獄寺はツナの隣で丸くなっているナッツを撫でながら問う。

言おうか言わないか迷ったが、ツナは先程起きたことを話すことにした。

「…さっき、地震が起きたあとにまた悪寒を感じたんだ……」

「悪寒って先日話していた……？」

ツナはこくりと頷いて話を続ける。

「それをナッツも感じたみたいで…ずっと怯えてるんだ。」

「それで……このことはリボンさんには……」

「まだ言っていないよ。悪寒でかたまっていた時に獄寺くんがかけつけたんだから。」

「じゃあ、オレリボンさんを呼んできます！」

「あ、ありがとう。できれば、オスカルさんとプロメッサも連れて来てくれる？」

「わかりました！」

獄寺はすぐに立ち上がって足速に部屋を出ていった。

部屋に静寂が訪れ、ツナは隣で怯えているナッツを抱き上げた。

「ナッツ…お前も感じたのか？」

「くう……」

それはおそらく肯定の鳴き声だ。

どうやらナッツにも悪寒がわかったらしい。

小さな身体はふるふると震えている。

「…なんだろう。すごく嫌な感じがする。」

さっきからどうも体調がすぐれない。

熱はないのだが、だるさが身体に残っている。

悪寒のせいなのか、先程から徳松と会話ができない。

どれだけ声をかけても、徳松はこたえないのだ。

確かに、ツナの意識の中にいるはずなのに。

「…徳松………」

ツナは小さく名前を呼んだ。

しかしそれに彼がこたえることはなかった。

「…本当か、ツナ。」

「うん。確かにあの悪寒だった。前にも感じた…。」

「前のあの洞窟どうくつのかい？」

「間違いないです。」

リボンとオスカルは難しい顔をする。

その隣でプロメツサはナッツの様子を見ていた。

「…やっぱりナッツも悪寒にやられたみたい。」

「くう…。」

プロメッサは真っ黒な尻尾でナッツの頭を優しく撫でる。

それを一瞥し、オスカルは口を開いた。

「…さっきの地震についても調べてみたんだけどね、どうもおかしいんだ。」

「なにがだ？」

「これを見てくれないかな？」

オスカルが数枚の資料を取り出す。
それを受け取り、ツナたちは凝視した。

その資料にはこちら一帯の地図がいくつか載っている。

「……さっきの地震、どうやらこちら一帯だけなんだ。しかも、地震速報や情報はいつさい載っていないんだ。」

「…どついでことだ。」

「だから、さっきのは地震ではないんだ。わたしがこちら一帯に設

置した機械でさっきの揺れの中心地を探ってみたら……」

ペら、とオスカルは資料をめくり、ある場所を指差す。

それを見て、ツナたちは驚愕した。

なぜなら、そこは。

「揺れの中心地が、あの洞窟^{ピュヘッ}なんだ……。」

標的191 中心地（後書き）

冬休み企画、毎日更新はおしまいです^ ^

ですが明日もできたら更新しようかなあと…
できるところまで毎日更新を続けたいと思います。

冬休みって終わるのが早いですね…今年は一日早く終わるんですよ。
ね。

高校生最後の長期休みかなあ…春休みなんて準備で忙しいだろうし。

専門学校でパソコンがいるとかで買わないといけないんですよ…。

嬉しいけど自腹…っ。

話がそれてしまいました。

小説もいいところにさしかかっているの、できるかぎり更新を怠らないようにがんばりますね！

読んでいただきありがとうございます！

標的192 証拠

最近頻繁していた地震。

だがそれは地震ではなかった。

オスカルがネットなどで地震速報や情報を調べても、それといったものは見つからなかったのだ。

詳しく調べれば、その揺れはあの洞窟ほらを中心地ちゅうしんちとしているらしい。

そう、以前ツナが悪寒を感じると言っていたところだ。

一体、どういうことなのか。

「……まどか。」

「わたしもそう思ったよ。…でも、そのまさかだ。」

ツナが震える声でつぶやき、オスカルは難しい顔をして答える。

「やはりあの洞窟うへつで何か起きているんだ。地震といい、悪寒あくかんといい……。おそらくあの昔話も関係していると思うんだ。」

早く調べるべきだった、とオスカルは頭を抱えてため息をつく。

今さら後悔をしても遅いのだが、そう思わずにはいられないのだ。

「わたしは今から原因を詳しく調べてみるよ。そのあと洞窟うへつに向かうことにするから、君たちは特訓でもしてて。」

気難しい表情で言うと、オスカルは部屋から出ていく。

プロメッサが彼のあとを慌ててついていった。

おそらくこのあと自室にこもるのだろう。

二人を見送り、ツナたちはしばらく黙ったままだった。

「…徳松はまだこたえないのか。」

突然のリボーンの問題にツナは戸惑いながらもこたえる。

「う、うん…何回呼んでも返事がないんだ。」

「それはさっきの地震と悪寒の後からか？」

「うん。確かに意識の中にいるんだけど……。」

ツナは再び何度か徳松に声をかける。
だが気配は感じられても返答はない。

何かに繋がりを遮断されているような感覚。

例えるならば、電話線が切れてしまったような。

存在はある。

なのに会話はできない。

それが不安でたまらない。

そんなツナの不安を感じ取り、リボンたちはまた黙り込んだ。

「プロメッサ。その赤い回線は右に。青い回線は下のコードと繋いでくれ。」

「了解。」

オスカルとプロメッサが自室でせわしなく動く。

口と尻尾を器用に使ってプロメッサはオスカルの言うとおりに回線を繋げていく。

すっかりオスカルの手先である。

オスカルはパソコンの画面を凝視し、キーボードをかたかたと素早く打っていく。

画面には記号やら英語やらが映し出されてはすぐに消えていく。

プロメッサが最後の回線をつなげるとパソコンの画面に地図が表示された。

地形からして、研究所一帯のものである。

2278

「…増えてる。」

「何が？」

「地震がだよ。」

オスカルの指さす場所を見れば、ほくろ洞窟を中心地として何度も揺れが発生していた。

はやくて数分間隔、遅くて数時間間隔で。

「…本当だ。」

「あと、サーモグラフィも設置してあるんだけど……」

かち、とオスカルがマウスをクリックすると画面が変わる。

地図にはかわりないが、そこには赤やら青やら緑やらの色が分布されていた。

森や池は夏なのでややあたたかいのか、黄色になっている。

しかし、例の洞窟を見ると。

「……………なんで洞窟だけ……」

「おかしいだろう。洞窟は涼しい場所だけれど、これは異常なんだ。」

「

二人の視線の先には、洞窟周辺の地図。

だが、その色は黒に近い青。

つまりは、温度がかなり低い。

「なんで…これってマイナスの域に近いじゃない……。」

洞窟は比較的^{どくつ}温度の低い場所だ。

例えば鍾乳洞^{しゆにゅうどう}でも冬場並みの温度、つまり10度前後のところもある。

しかし、この洞窟^{どくつ}は異常だった。

温度の域がマイナスを越えるのだ。

時間をおいて見てみると、温度が高くなったり低くなったりする。

短くて5分で温度が20度もかわるときもあった。

これはおかしい。

こんな簡単に洞窟うくの温度はかわらない。

「…昔話……」

オスカルはふとあの昔話を思い出す。

もし、本当にあの洞窟うくに魔物が封印されているなら。

それが関係しているなら。

「…もっと調べてみよう。」

オスカルは再び手を動かした。

「…まあ、落ち着くまで少し休んどけ。」

「でも特訓が…」

「出来そうもないだろ。」

「そうですねよ十代目。ゆっくり休んでください。まだ顔色が優れ
ませんし…」

ツナは起き上がろうとするが、二人に止められ仕方なく布団に戻る。

何だか落ち着かないのだ。

ぞわぞわとするような、とにかくなくなにかがツナを噓はやし立てる。

「獄寺は山本を連れてトンノの見舞いにでも行ってこい。」

「わかりましたリボンさん。では十代目、安静にしてくださいね！」

行きとは打って変わって獄寺は静かに扉を閉める。

部屋にはツナとナッツとリボンの三人のみとなった。

「…がう。」

「ちょっと元気になってきたみてえだな。」

ナッツが尻尾をゆらゆらと揺らし、小さく鳴く。

そんなナッツの頭を撫でると、リボンは立ち上がった。

「そろそろだな。」

「何が？」

そう問うと、リボンはあやしく笑んだ。

その笑みにツナの超直感が働く。

とてもいやな予感がした。

「な、何を」

企たくらんでいるんだ、と言いつわる前に、ツナの部屋の扉が大きな音をたてた。

ガンッ　ガンッ　ガンッ

獄寺が忘れ物でもして戻ってきたのだろうかと考えたが、先程の彼の行動を思い出すとこんな乱暴に叩くはずがない。

誰か、と声をかけようとした途端、扉は無残にも蹴り飛ばされてしまった。

そして、扉の向こうにいたのは。

「やっと来たな。遅いぞ。」

リポーンが話しかけるが、ツナはその人物を見て固まってしまった。

ツナは驚いて目を見開き、口をぱくぱくとさせる。

「な、な、な、なっ……………」

「君、日本語も喋れなくなったのかい？」

その人物は無表情でそう呟き、リポーンの前で立ち止まる。

「やあ、君の言うとおりに来たよ。あの手紙の内容は嘘じゃないよね。」

「ああ。嘘なんかじゃねえぞ。オレは嘘なんかつかねえからな。」

その発言が嘘ではないか、というツッコミは置いておくとして。

香気に会話をしている二人に、ツナはさらに腰を抜かした。

ナッツはツナの背後に隠れてしまっている。

「ちやんと考えてきただろうな。」

「もちろんだよ。あの手紙の内容が事実だったら教えてあげるよ。」

口元を小さく上げ、学ランの少年………雲雀恭弥はあやしく笑った。

標的193 委員長、来訪

突然目の前にあらわれた少年。

それは誰もが恐れる並盛町の君主。

「ひ、ひ、ひ、ひ、雲雀さん!!?」

ツナは震える指先で雲雀を指差し、言葉を上手く出せずにいる。

それほど驚愕しているのだ。

なぜこんなところに雲雀がいるのか。

今まで何人かの守護者が研究所に訪れたが、これほど驚愕することはなかった。

雲雀が来ることはまずないだろうと思っていたのだ。

群れることを嫌う、あの孤高の彼が来るはずがないと。

しかし、間違いなく彼は今ここにいる。

夢ではなく、現実だ。

「赤ん坊、もう行っていいかな。群れるのは嫌いなんだよ。」

イライラしたような口調で雲雀がリボンに問う。

彼の手にはちゃっかりとトンファーが握られていた。

それなのにリボンはマイペースさを崩さずにゆっくりと答えた。

「そんな怒るな。オレが案内するから少し待ってる。」

「そう。じゃあ僕は外にいるよ。」

ひらりと字ランをひるがえして雲雀はさっさと部屋から出ていった。さつき雲雀に破壊されかけた扉には痛々しいトンファーのあとが残されていた。

「リポーン！なんでこんなところに雲雀さんがいるんだよ！」

「オレが呼んだからだぞ。」

「なんでそう簡単に呼べるんだよ！」

あの雲雀をそう簡単に研究所へ呼べるはずがない。

一体どんな手を使って彼を呼び出したのかをツナはリポーンに問いただす。

するとリポーンはにやりと笑って言葉を発した。

「雲雀と約束したんだぞ。」

「約束…？」

「ああ。まだ言えねえがな。後々話すからおめえは寝てろ。」

リボーンはベッドから飛び降りて部屋を出て行ってしまった。

納得のいく答えを得ることができないままツナは部屋に取り残されてしまった。

こういふときこそ、信頼のできる徳松の声が聞きたくなるのだが。

「…徳松？」

彼は答えない。

会話出来ない寂しさを取り残された孤独感を噛み締め、ツナはナッツを抱きながら目を閉じた。

ナッツの炎が今のツナにとっての唯一の心の支えだった。

「まさか君に呼ばれるとはね。しかも約束つきで。」

「まあな。今回は緊急事態だからな。」

雲雀の頭にはリボーン、リボーンの頭にはレオン、レオンの頭にはヒバードというなんともおかしい風景が出来上がっていた。

彼らは長く続く廊下を歩き、実験室を目指す。

「そういえば、どんな技を思いついたんだ？」

ふとりボーンが雲雀に問う。

一瞬の間をあげ、雲雀はその質問に答えた。

「もちろんトンファーを使うよ。でも見てからの楽しみだよ。」

ふふ、とあやしく笑んだ雲雀を見て、リボンもニヒルな笑みを浮かべる。

どこか似たような二人と動物たちは歩をはやめた。

……さあ、そろそろだ。

笑っていられるのも、今のうちだ。

これは宴。

世界が終わり、新たな時代へと生まれ変わるのだ。

共に、世界の終わりを見ようじゃないか。

「なに、ここを自由に使ってもいいの。」

実験室についた雲雀は部屋をぐるりと見渡す。

「十分な広さもあるし、床も壁も頑丈に出来ているらしいからな。多少暴れてもどうつてことねえぞ。」

「ふうん……」

「だからあの約束もちゃんと叶えてやるぞ。」

「それは楽しみだね。」

かちゃり、と音をたてて雲雀はトンファーをかまえる。

どうやら新技を披露するらしい。

「雲雀、標的はあるか。」

「なに、君が標的になってくれるのかい？」

「ちげえぞ。オレじゃなくてこの小型ヘリコプターだ。」

リボンが空中にそれを放り投げる。

するとヘリコプターのプロペラがぱらぱらと回りはじめ、空中を飛び回った。

もう新技披露にはお馴染みのものである。

「こんなものが僕の相手？」

「新技披露出来たらもつといい相手で戦わせてやるぞ。オレは約束は破らない男だからな。」

「ふうん…まあいいや。」

雲雀は空中を飛ぶヘリコプターを一瞥し、リボーンたちから距離をとる。

彼の肩にとまっていたヒバードは相変わらず音痴な校歌を口ずさんでいる。

そんなヒバードに黙るように雲雀が目配せをすれば、たちまちヒバードは歌を止めた。

ヒバードの頭を人差し指で撫でると、雲雀はトンファーをかまえた。

「さあ、やってみようか。」

雲雀の鋭い瞳がきらりと輝いた。

獲物を捕らえた猛獣のように。

標的193 委員長、来訪（後書き）

小説のストックが切れてしまった…！

ただ今続きを製作中でございます。

なんとか明日も更新したい…！

読んでいただきありがとうございました！

標的194 nasccondo una nube(ナスコンド ウーナヌー

今回はいつも以上にぐだぐだです…すみません！

標的194 nasccondo una nube(ナスコンド ウーナヌー

(…相手がヘリコプターね……………)

宙に漂う小型ヘリコプターをぼんやりと見つめながら、雲雀はトンファーを構えなおす。

新技の相手が小さな機械だということが気に入くわならしい。

やはり相手をリボーンに代えてもらおうと口を開こうとした。

しかし、雲雀はリボーンとの約束を思い出す。

(……………まあ、いいか。)

雲雀は口をつぐみ、再びヘリコプターと向き合う。

プロペラがぱらぱらと音をたてるのがなんとなくであるがいらだたしい。

「たとえ機械でも、容赦なんかはしないよ。」

だって、

咬み殺してしまいたいんだもの。

ジャキ、

小さな金属音が聞こえた途端、目の前から雲雀が消えた。

上を見上げれば、小型ヘリコプターをトンファーで攻撃をしようとする彼の姿が見えた。

ガキンツ!!!

攻撃のヒットした音が聞こえたが、ヘリコプターは何事もなかったかのように飛んでいた。

それを一睨みし、雲雀は問う。

「…赤ん坊、あの機械壊れないんだけど。」

「そう簡単に壊れるもんじゃねえぞ。この部屋の壁や床と同じ素材でつくられてるらしいからな。」

「ふうん。少しは退屈せずにすむってことだね。」

先程のいらいらは何処へやら、雲雀は目を輝かせて楽しそうに言った。

すると、もう一度床を蹴ってトンファーでヘリコプターを攻撃する。

バキッ!

大きな音をたてたが、それでもヘリコプターは飛び続ける。

いったん攻撃をやめて、雲雀は下からヘリコプターをじっと見つめた。

すると、彼はあることに気がついた。

(……………カメラ?)

彼はヘリコプターに攻撃を仕掛けたとき、見つけたのだ。

ヘリコプターの左隅に、小さな穴があってそこに何やらレンズのよ

うなものとあると。

雲雀がもう一度ヘリコプターに向かいトンファーを振りかざす。

だが視線は小さなカメラに向けて。

バキンッ！

やはりヘリコプターはびくともしない。

無傷のままである。

しばらく雲雀はヘリコプターを見上げたまま動かないでいた。

ただ、頭上を飛ぶ小型の機械だけを瞳にうつして。

(…もしかしたら、)

雲雀は何か思いついたのか、一瞬目を小さく見開いたあと、右手に握っていたトンファーをヘリコプターに向けて投げた。

…パキ、

「！」

ヘリコプターはトンファーを避け、再び同じ場所に戻る。

落ちてきたトンファーを受け止め、雲雀は小さく笑みを浮かべた。

「…そうじゃないよ。」

そう呟くと、雲雀はボンゴレリングから炎を出した。

紫色の美しい炎だ。

それをトンファーに燈らせ、炎はいつそう激しく燃え上がった。

そのとき、後方にいたリボーンはあることに気付いた。

(……あの炎……)

リボーンは炎を見つめ、首をかしげる。

(…まさか、あいつ……)

小さな赤ん坊は、燃え盛る紫色の炎に異変を感じた。

わずかな、異変を。

雲雀は炎を燈らせたトンファーを構え、再び床を蹴る。

ヘリコプターと同じくらいの高さまで跳びあがり、先程と同じようにトンファーを振りかざした。

ガキンッ！

だがヘリコプターは相変わらず無傷でゆらゆらと宙を漂う。
雲雀が床に降り立つと、トンファーをぐいっと強く引いた。

すると、

ガシャンッ！！

「！」

何も当たっていないのにヘリコプターは大きな音をたてた。

見れば、ヘリコプターから小さなかけらがぱらぱらと落ちていく。

少しだけ煙もあがっている。

何が起きたのか、そうリボンが雲雀に聞こうとするが、それは叶わなかった。

雲雀が再び攻撃を仕掛けたからだ。

彼は次に反対側のトンファーをぐいっと強く引く。

すると先程と同じようにヘリコプターが音をたて、破片を散らして煙をたてた。

「これで最後だよ。」

そう言うと、雲雀は低空飛行になったヘリコプターにトンファーで殴りつけた。

ガシャン！と大きな音と煙をたてて、ヘリコプターは床に墜落した。

雲雀はそれに近づき、右足で強く踏み潰した。

もうヘリコプターは原型をとどめておらず、もはやただの破片と化していた。

それを一瞥し、雲雀はリボーンに声をかける。

「おわつたよ、赤ん坊。」

「そつみてえだな。」

リボーンは雲雀の隣に立ち、そして問うた。

「雲雀、これはどついつ技だ？」

すると雲雀は眉間にしわをよせて、気にくわないというような表情で口を開いた。

「…このヘリコプターにはカメラがついていて、敵の動作を判別できる機能があった。攻撃をしようとするればその機能はたらき、ヘリコプターの表面を一時的に頑丈にすることができたんだ。だからこれを壊すためには、カメラにうつらないような攻撃を仕掛ける必要があった。」

雲雀はトンファアをリボーンに見せるように差し出す。

「赤ん坊、このトンファアに仕込んだ鎖があるのを覚えているかい

「？」

「ああ。リング争奪戦のときに見たぞ。」

「それでヘリコプターを攻撃したんだ。炎を使ってね。」

「だが、おめえの炎は雲属性、つまりは“増殖”だ。それでどうやってヘリコプターのカメラに気付かれずに攻撃したんだ？」

そう問うと、雲雀はトンファーから仕込んだ鎖を出す。

それに炎を燈せば、静かにゆっくりと鎖が姿を消した。

「……どっぴいっことだ。」

「……どうやら、気に入らないけど僕にはもうひとつの炎が使えるらしくてね。いらだたしいけど、使えるものは使わないとね。」

「それってまさか、」

「そう、あの六道骸と同じ霧属性の炎さ。」

雲雀がトンファーの炎をリボーンの近くに寄せると、紫色の炎をか

すかに藍色の炎が包んでいた。

さつきリボーンが気付いた異変はこれだったのだ。

「霧って幻覚が使えるじゃない。だからそれを利用して鎖を隠したのさ。…まあ、あいつみたいに幻覚を使いこなすことはできないみたいだけどね。でも応用で幻覚で隠した武器を強くしたり増やしたりすることもできるよ。」

「そうか。なかなかやるじゃねえか。」

リボーンはにやりと笑い、雲雀を褒めた。

（雲雀は雲の守護者だから、幻覚を使うことが出来るなんて誰も予測できないだろうしな。）

心の中で感心したあと、リボーンはまた質問をした。

「この技の名前は決まってるのか。」

「もちろんさ。」

トンファーを一振りして炎を消し去り、雲雀はトンファーをしまっ
た。

「nascondo una nube」(ナスコンド ウーナ
ヌー)、「隠す」云雀」

標的194 nascondo una nube (ナスコンド ウーナヌー

守護者全員の技出せました…！（ランボを除く）
っ、疲れた…。

???さん、ご協力ありがとうございました^^

たしか技を提案していただいたのが夏だったはず…。

…今は冬ですねすみませんほんとにもう…！！

なんか期間をあけすぎたのでみんなの技の名前がわからない方がほとんどなんじゃないかと…（笑）

ですので一応技の名前をあげておきますね^^

ツナ：Barbazzale di cielli、Baluard
バルアルド・デイ・チエーリ
odi cielli バルバツァーレ・デイ・チエーリ

獄寺：“五炎の矢” freccia di cinque fia
mma (フレツチャ デイ チンクエ フィアンマ)

山本：攻式 十二の型 風雨、守式 十三の型 治癒の雨

了平：“太陽の右拳” pugno corretto e sol

are (プグノ コレット エ ソラーレ)

クローム：“幻想の世界” mondo della fantasia (モンド デッラ ファンタジア)

雲雀：“雲隠し” nascondo una nube (ナスコンド ウーナ ヌーベ)

ランボ：…まだ内緒

ランボさんはまだ都合上出せないの… (笑)

ツナさんのもうひとつの技はわたしが考えたものですが！

ほんとに????さんには感謝してます。

????さんありがとうございました！

読んでいただきありがとうございました！

標的195 強制

「徳松ー！おーい徳松ー！」

大空が広がる空間にツナの声が響き渡る。

だがそれに答える者はいない。

ツナは意識の中にいるはずの自分の能力である徳松を探していた。

先程から何度名前を呼んでも徳松はあらわれないのだ。

あの地震と悪寒の後から、彼は声にくたえることはなかった。

なのでリポーンに休めと言われている今、ツナは意識の中で徳松を探しているのだが…。

「確かに気配はあるんだけどな…何処にいるんだろう。」

困ったなあ、とツナは顎に手をそえて首をかしげる。

何度も目を閉じて徳松の気配が何処にあるのか探ってみたが、はっきりとはわからなかった。

気配はあるのに姿が見えない。

それがツナの不安を煽る。

「……………徳松……………」

小さな声で徳松の名前を呼ぶ。

やはり、それにこたえる者はいなかった。

「はあ……」

ツナが落胆していると、何処からかツナの名前を呼ぶ声が聞こえてきた。

「ツナ、おいツナ」

「あれ、この声……」

それは徳松ではなく、リボーンの声だった。

「おいツナ、起きろ。」

「なんだよ、さっきはゆっくり休めって言ってたくせに……」

ツナは不平を言って空を漂う雲に座り込む。

意識の中では普通座ることのできない雲にも座ることが出来るらしい。

ツナの意識は夢同然なので、現実で出来ないことが出来るようになるのだ。

「ツナ、ツナ、おい起きろ。」

「まだ休ませてくれてもいいじゃないか……。まあ、病人だから休ませてくれるよな……。」

病人を無理矢理起こすほどあの赤ん坊は鬼ではないだろう、と思いツナは雲に横になる。

ふわふわな感触が心地よく、ツナはそれに身を預け……

……ようとしたが。

「起きろっつってんだろが。このダメツナが！」

一際声ひとこゝろが大きく聞こえたかと思えば、次の瞬間腹部に激痛が走った。

「いつ………！」

ツナが顔を歪ませると、同時に大空もぐにやりと歪んだ。

ゴウッ！

大きな風が吹き、ツナはまぶたを閉じる。

すると、身体を包んでいたふわふわな雲の感触がさらさらとしたシ
ーツの感触にかわった。

ゆっくりとまぶたをあければ、こちらを睨む二人の影がぼんやり霞かすんで見えた。

(…リボンと、……誰だ…?)

ツナは目をこすりリボンの隣にいる人物を凝視する。

だんだん輪郭がはっきりしてくると、ツナの顔が次第に青ざめる。

なぜなら、その人物は。

「君、なにのんきに寝てるの。」

「ひ、雲雀さん!?!」

ツナはすぐにベッドの上で正座になり、「ひひひひいごめんなさい
いいいい!?!」とひたすら謝った。

病人が休養をとることは当たり前なのでツナは何も悪くはないのだ
が、この暴君の前ではそんなことは関係ないのだ。

「いつ……」

土下座を繰り返していると、腹部に痛みが走る。

それは先程リボーンが蹴ったからだった。

お忘れかもしれないが、ツナは以前腹部を縫うほどの怪我をしている。

そこにリボーンの蹴りがクリティカルヒットしてしまったのだ。

縫い目が繋がってきているからか血はでることはなかったが、痛いものは痛いのだ。

2321

「な、なんでございましょうか……」

腹部をさすりながら恐る恐る雲雀に用件を問う。

すると雲雀はくるりと振り返って扉に向かっていった。

「……う、え、あ、あの……」

ツナが戸惑っていると、リボンがツナの服の裾を引っ張った。

「いいからついてこい。」

「え!？」

ぐいぐいと引っ張る力は赤ん坊のものではない。

リボンに引っ張られるままツナは部屋を出た。

「ガウッ！」

ベッドで眠っていたナッツが扉の隙間を縫うように避け、ツナの肩に飛び乗った。

どうやら先程のこともあり一人であるのが不安らしい。

ツナがナッツの頭を撫でると「ガウガウ」とご機嫌な鳴き声を出し

た。

そうこうしているうちに、ツナは実験室に導かれた。

訳もわからないのでツナがきよろきよろと辺りを見回していると、リポーンが後ろからツナの足を蹴った。

ガスッ！

「いてっ！」

その弾みで転びそうになるが、なんとか堪えてリポーンに文句を言うべく振り向いた。

「な、なにすんだよりポーン！いきなりこんなところに連れてきて……！」

「それは今から話す。まあ、落ち着けよ。」

「落ち着けられるわけないだろ！理由も聞かされずに起こさ……！」

ジャキッ

ツナがりボーンに食ってかかっていると、突然首にひんやりとしたものがあてがわれた。

振り向けば、無表情でこちらを睨みつけている雲雀がすぐ隣にいた。首にあてがわれたものはトンファーだった。

「……………っ！」

ツナが声を出せずにいると、痺れを切らしたのが雲雀がいらいらした口調で話しかけた。

「ねえ、なにキーキー騒いでいるんだい？」

「え、いや、あの……………」

「ちっちとはじめようよ。」

「…え、な、なにを……」

雲雀が何を言っているのかわからず、ツナは首にあてがわれたトンファーと雲雀を交互に見遣る。

「君、約束を忘れたわけじゃないよね？」

「や、約束ってなんの……」

「おい雲雀。」

雲雀がツナに問い詰めるのをリボーンはやめさせる。

しばらくトンファーをツナの首にあてがっていた雲雀だが、ひとつため息をつくとゆっくりとトンファーをおろした。

それと同時にツナの緊張感がとれ、大きく息を吐く。

「…でもオレ、ほんとに雲雀さんと約束なんて……」

「雲雀と約束をしたのはオレだ。んでツナにはまだ話してねえんだ。」

リボーンがそう言うと、雲雀は「ふうん」とだけ返事をし、ツナは「えー!？」と驚きの声をあげる。

「ど、どんな約束……」

恐る恐るツナが問うと、リボーンはにやりと笑ってそれに答えた。

「雲雀が新技を考えてここに来ればツナと一戦交えることができる、
っていう約束だぞ。」

標的196 約束

雲雀が新技を考えてオスカルの研究所までわざわざ赴いた理由。

おもむ

それはリボーンが雲雀と交わした約束にあった。

” “ 雲雀が新技を考えてここに来ればツナと一戦交えることができる。

「……どうしてのことだよ……」

ツナが独り言のようにつぶやめく。

いまいち状況がつかめていないのだ。

頭の中でリボーンのことを理解しようとするが混乱しているのかまったく理解できない。

そんなツナにリボーンはもう一度言った。

「雲雀が新技を考えてここに来ればツナと一戦交えることができる、
つていう約束だぞ。…雲雀はちゃんとここに来て新技を披露した。
だから今からおめえは雲雀と戦うんだぞ。」

「……………え。」

ようやく理解したのか、ツナの顔が一気に青ざめる（本日何度目だろうか）。

青ざめた顔を汗がたったってぼたりと落ちた。

ツナの絶叫が部屋に響き渡ったのは数秒経ってからだった。

「…んなあああああああ！…!?!」

「うるさいよ、君。」

「まっただな。」

雲雀が耳をふさいで顔を歪ませながらこぼした愚痴にリボーンはうんうんと頷いた。

（そもそもリボーンがツナの了承も得なかったのがいけないのだが。）

「な、なんでオレが雲雀さんの戦い相手にならなきゃなんないんだよ！意味がわからない！」

「前から雲雀が言ってたぞ、おめえと戦ってみてえってな。」

「うわああああサンドバッグにされるんだああああ!!」

あの並盛の君主であり、（本人は認めてはいないが）ボンゴレの守護者の中で最強とも謳われている雲雀に敵うはずがない。

暇さえあれば彼は並盛の群れている人間を咬み殺しているのだ。

不良たちからも恐れられているのだ。

今まで数々の経験を通して、ツナは雲雀の強さをよく知っている。

相手なんてしたらどうなることか。

一方的にやられて終わり、言わばサンドバッグの役目を果たすだけではないのだろうかとツナは思った。

だが、そのツナの考えをリボーンは否定した。

「おめえをサンドバッグにするわけじゃねえ。ハイパー化したおめえと戦いたいと雲雀は言ってるんだぞ。」

「は、ハイパー化したオレと…?」

確かにハイパー化すれば多少は強くなり、思考も冷静になって炎も自在にあやつることができるので少しは相手ができるだろう。

だが何故雲雀はツナを選んだのか。

リボーンだっているし、他にも相手になる人間がいるはずだ。

ツナを選んだ理由を聞くと、雲雀は無表情で答えた。

「だって君、強いのか弱いのかよくわからないじゃない。普段は草食動物みたいにちょこまかしてて弱いのに、炎を燈した途端に強くなるんだもの。だから戦ってみたいんだ。いいでしょ、約束だったんだから。」

「い、いや、あの！約束してたのはリボーンでオレは全然知らなくて……！そもそもオレは強くないんです！」

ツナが必死に訳を話す、雲雀は聞く耳を持たずに戦う気満々である。

トンファーをかまえ、じりじりにじり寄ってくる姿は獲物を見つけた肉食動物そのものだ。

ゆっくりと後退してなんとか雲雀との戦いから免れよつと^{まめが}するツナだが、その抵抗は見るからに無意味であった。なんせ相手はあの雲雀なのだから。

「さあ、はやく炎を出しなよ。」

「ごめんなさいほんとに無理です戦えませんー!」

ツナの目はもはや涙ぐんでいた。

こうして食物連鎖が成り立つのだなあとそばで見えていたリボーンはぼんやりと思った。

「約束を破るなら、今ここで咬み殺す!」

すると容赦なく雲雀のトンファーがツナの頭部に振り下ろされた。

「ガウッ！」

だが、今までツナの肩で雲雀に怯えて声も出せずにいたナッツが、ツナの服を引っ張りその場から離れさせた。

バキンッ！！

ツナがナッツの引っ張る力で地面に転がったすぐ隣、つまりツナが今さっきいた場所にはトンファーが食い込んでいた。

実験室の床は頑丈にできているのにこれほどトンファーを食い込ませることはできるとは、なんという破壊力だろうか。

身体が自由がきくようになったツナは啞然としていた。

「ガウガウッ」

「あ、ありがとうナッツ……」

助けてくれたナッツにツナは礼を述べて頭をなでる。

しかし、その手はかたかたと震えていた。

それに気付いたりボーンがツナに問う。

「……どうしたツナ。」

「……また、あの悪寒が……しかも今までより強い……」

ツナは己の身体を抱きしめて震えをおさえようとしますが震えはまったくおさまらない。

一気に身体が冷えてしまった。

見れば、ナッツの耳も垂れ下がって怯えている。

だが悪寒に堪えてツナを助けてくれたのだろう。

そんなツナたちの様子を見ていた雲雀は、トンファーについた床の破片をはらいながら声をかけた。

「…ねえ、一体どうし」

ドスンッ！！！！！！！

だが雲雀の声は大きな音に掻き消された。

驚いて辺りを見回すが、なにも落ちたような気配はない。

すると、次は大きな揺れがツナたちを襲った。

ガタガタガタガタッ！！

「うわぁー！！」

「ガウッ！？」

ナツツは驚きツナの膝の上に飛び乗って縮こまる。

あまりの揺れに立っていられなくなった雲雀は姿勢を低くして倒れないように足に力をいれた。

ガタガタガタ……………

それから数十秒が経ち、やっと揺れはおさまった。

突然の出来事に、しばらく誰も口を開くことはできなかった。

ツナの心の中には嫌な予感がぐるぐると渦巻いていた。

標的197 学者の自尊

同時刻、オスカルの自室にて。

ガタガタガタガタッ！！

「…地震!?!」

「わあっ!?!」

パソコンと資料とにらめっこをしていたオスカルとプロメッサは突然の揺れに驚く。

それは今までにない大きな地震でオスカルはパソコンとプロメッサを庇って頭を伏せる。

本棚からは本が大量に落ち、資料はばさばさと床に舞った。

ガタガタガタ……………

しばらくして揺れはおさまり、部屋はいろんなものが落ちたりして散らかってしまった。

「な、何だったんだ今の地震は……………」

「お、大きい揺れだったね……………」

オスカルは恐る恐る立ち上がり、散らかった部屋を見渡した。

「あーあ、こんなに散らかったやつた……………」

はあ、とため息をついてオスカルは床に散乱した資料をページ順にまとめていく。

「お、オスカル！これ見て！…！」

プロメツサが一際ひときわ大きな声でオスカルを読んだので、彼は慌ててプロメツサの元へ行く。

すると、プロメッサはパソコンの画面を凝視していた。

パソコンが壊れてしまったのかと故障を危惧したが、画面はちゃんとついており異常は見られなかった。

だが異常なのはその画面にうつっていたものだった。

「…な、なんだこれは……」

オスカルは目を見開いて驚愕する。

今までにない結果がパソコンの画面にうつされていたからだ。

今の震度は研究所周辺が4。

しかし、揺れの中心地であるあの洞窟ほくは6。

しかもサーモグラフィでうつしだされた温度はマイナスとプラスを
行き来している。

温度の上がり下がりが非常に激しい。

しかも温度の低い域が広がっている。

先程は洞窟ほらのみだったのだが、今は周辺にまで及んでいた。

いったいどうなっているのか。

「……行ってみよう。」

「え?」

「洞窟ほらに行ってみよう。」

「え!??」

オスカルの突然の言葉にプロメッサは驚きの声をあげる。

「そ、そんな！危険だよオスカル！まずは監視カメラで様子を……」
「監視カメラが壊れてしまっているんだ。誰かが見に行かないと状況も把握できないんだよ。」

出発する準備を始めたオスカルをプロメッサは必死でとめるが、オスカルは準備をやめようとはしない。

最低限のものを小さなかばんに詰め込むと、オスカルは意を決したように拳に力をいれる。

どうやら行かないつもりは毛頭ないらしい。

「…ほんとに行くの？」

「うん。行くよ。」

だって、とオスカルは続ける。

「わたしは学者だから。研究のためならどこにだって行かないきゃ。…大丈夫、死ぬようなことは避けるからね。」

オスカルは優しく笑み、プロメッサの頭を撫でる。

しばらく不安そうな表情をしていたプロメツサは、ひょいと身軽な動きでオスカルの肩に飛び乗った。

「わたしも行く！オスカルのこと心配だし、もし何かあったときに助けられるだろうし……」

黒い尻尾をゆらゆらと揺らしながらプロメツサは飛び乗った肩に座り込む。

しばらくぽかんとしていたオスカルは、「ありがとう」と礼を述べた。

かばんを肩にかけ、パソコンの画面を一瞥して二人は部屋をあとにした。

標的198 覚悟の瞳

「何だっただんだ今の揺れは。」

「地震じゃないのかい。」

揺れがおさまったのを確認し、リボーンたちは顔をあげる。

辺りを見渡すが、何も壊れていないようだ。

頑丈にできているからなのだろうか、建物にはひび一つなかった。

「……………嫌な予感がする。」

ぼつりとツナが独り言のようにつぶやく。

その言葉が引っ掛かったりリボーンは今だ震えているツナに問うた。

「嫌な予感ってなんだ。」

「……よくわからないけど、すごく嫌な予感がするんだ。今から、すごく悪いことが起きるかもしれない……………」

そうツナの超直感が告げているのだ。

先程からずっと頭の中で警報が鳴り続けている。

“これから不吉なことが起きる”と。

「…ねえ、よくわからないんだけど。」

「おめえには追いつき話すぞ。今はとにかく状況を把握しねえとな。」

首をかしげる雲雀を軽くあしらうと、リポーンは扉に向かっていく。

…が、その前に実験室の扉が開き、金髪の男と真っ黒な子犬がやって来た。

「お、オスカルじゃねえか。」

「みんな大丈夫かい？」

オスカルが声をかけるが、ツナはそれに頷けないでいた。

悪寒で身体の震えはとまらないし、嫌な予感だっでする。

まったく大丈夫ではない。

「…綱吉くん、またあの悪寒が？」

「はい…あと、すごく嫌な予感もするんです……。」

「……そうか……。」

オスカルはぼんぼんとツナの頭を撫でて、ツナたちに告げた。

「…わたしたちは今からあの洞窟くわくに向かうよ。」

「…え？」

「あの付近で何やらおかしなことが起きているみたいだから見に行くんだ。」

「そ、そんな！」

ツナはオスカルが発言に驚き、彼の袖を掴んだ。

それにオスカルとプロメッサが目丸くする。

「行っちゃだめです！危険です！すごく嫌な予感をするし悪寒も今までで1番酷かったし……とにかく行っちゃだめです！！」

「綱吉くん……でも誰かが行かなきゃいけないんだ。状況を把握しないとこれからの対策も何も考えることができないんだよ。」

「でも、ほんとに嫌な予感がするんです……今行ったらオスカルさんに何かあるかもしれないし……」

ツナは表情に不安の色を浮かべてうつむいてしまう。

そんなツナの袖を掴む手を優しく握り、オスカルは微笑みながらツナに言葉をかけた。

「……綱吉くん、大丈夫だよ。もし危険だと判断したらすぐにその場から離れるし、何かあってもプロメッサが助けてくれるから。」

「……………」

ツナは黙ったままで何も言わない。

オスカルはツナの返答を待った。

しばらくして。

「……………」
「わかりました。」

その返答を聞き、オスカルは安堵のため息をついた。

が、その安堵はすぐに掻き消されてしまうこととなった。

「…オレも行きます。」

「え!!!??」

「何言ってるんだおめえ。」

オスカルはその言葉が信じられなくて目を見開いてツナの顔を凝視する。

しかしツナは決意したようにもう一度言った。

「オレも行きます。オスカルさんが心配だし……」

「な、何言っているんだ綱吉くん！今回の1番の被害者は君なんだよ！？その君が洞窟どうくつに行ったらどうなるか！今回は悪寒と地震の原因と対策を考えるために……」

「だからオレも行くんです！」

一際ひとときツナの声が大きく響き渡る。

それに驚いてオスカルたちは言葉を失ってしまった。

「……今回のことでオレが沢山迷惑とか心配かけてるし、オレなんかのためにオスカルさんたちを危険な目にあわせたくないんです。それにオレが何もしないでここで待ってるなんて……できません。」

「綱吉くん……」

ツナの強い言葉にオスカルは何も言えなくなってしまった。

(…覚悟の強い瞳だ……)

琥珀色の瞳がまっすぐオスカルをとらえる。

その瞳に隠されている覚悟にオスカルは息をのんだ。

「……………どうせだめって言っても、来るつもりなんだろうね。」

オスカルは呆れたような、しかし優しい笑顔で言った。

「しょうがない。一緒に行こう、綱吉くん。」

「…！ありがとうございます！」

ツナは満面の笑みでオスカルに礼を述べる。

すると、今まで黙っていた雲雀が口をはさんだ。

「ねえ、よくわからないんだけど。今から戦いに行くってこと？」

「まあ、そうなるな。」

「へえ…おもしろそうだね。」

口元をゆるめ、雲雀はあやしい笑みを浮かべる。

どうやら勘違いをしまっているらしい。

今からツナたちは戦いに行く。

「僕も行くのかな。」

「群れるぞ。嫌じゃねえのか。」

「君たちとは別行動でいくさ。最近暴れ足りないからね、それに…」

雲雀はちらりとツナを見る。

雲雀の視線に気付いたツナは怯えてびくっと肩を震わせる。

「それが終わればあの草食動物と戦えるんだよね。」

「まあな。」

「だったらなおさらだ。」

雲雀は指に乗る黄色い小鳥をつつきながらそう言った。

……さあ、そろそろだ。

笑っていられるのも、今のうちだ。

これは真。

世界が終わり、新たな時代へと生まれ変わるのだ。

共に、世界の終わりを見ようじゃないか。

標的199 覚悟の瞳

もうじきだ

もうじき、彼はここにくる

だが油断してはならない

まだ万全ではない今、彼を捕らえるためには気をつけなくてはならない

「……………ボンゴレ十代目、沢田綱吉。」

早くお前の力を私に渡すがいい

……………さあ、そろそろだ。

笑っていられるのも、今のうちだ。

これは宴。

世界が終わり、新たな時代へと生まれ変わるのだ。

共に、世界の終わりを見ようじゃないか。

「ほ、ほんとに雲雀さんも行くんですか？」

「何、不満なの。」

「い、いいえ！大歓迎です雲雀さん強いし！！」

「そっ。」

ぎろりと雲雀に睨まれ、ツナは縮こまって一生懸命否定をした。

雲雀がツナから目をそらせば、安堵のため息がいつきに出される。

この人物に逆らったらどうなるか。

その結果をわかっているのに、ツナはますます雲雀が怖いのだ。

「じゃあ、行こうか。」

「あ、はい！」

オスカルに声をかけられ、ツナは慌てて外へ出るための扉へ駆け寄る。

重々しいそれは、人の手では開けることができず、ボタンでしか開けることができないのだ。

オスカルがそのボタンに手をのびしかけたところで、遠くから何やら声が聞こえてきた。

「……め、……うめ……！」

「……ナ、……ナ……！」

空耳か、とも思ったがその声は次第に大きくなって空耳ではなかった。

そして、その声が複数であることに気づく。

「……！」

「……だ……！」

「な、なんか……」

「君を呼んでいないかい、綱吉くん……」

オスカルが苦笑いをしながら声のする方向を見る。

すると、遠くから複数の人間がこちらに向かって走ってくる姿が目についた。

「お、あれは……」

「ご、獄寺くんに山本！？お兄さんにランボにクローム……結加^{ゆいか}ち
やんとプレーチエ、えっ、トンノまで!?!」

「十代目ー!」

「ツーナッ!」

「ど、どうしてみんな……!」

ツナは何故勢揃いで彼らがここに集まったかのがわからず、ただ
驚くだけだった。

そんな驚くツナの肩にトンノが降り立ち、頬に身体を擦り寄せる。

「トンノ、もう身体は……」

「大丈夫だよ。たくさん寝たし、プロメツサたちが治療してくれた
しー!」

プロメツサは翼を広げ、元気であることをアピールする。

それに安心するのもつかの間、ツナは何故彼らがここに来たのかを問うた。

「そ、そうだ！なんでみんなここに！？」

すると、トンノが翼をたたんで事態を説明し始めた。

「あ、さっきの大きな地震でツナたちのことが心配になってみんなを探してたら……」

「まだ体調を崩していると聞いていたトンノが飛び回ってるのでびつくりして、」

「トンノを捕まえようとする獄寺を見つけて、」

「極限に鬼ごっこを楽しむ三人を見かけて、」

「ランボさんも鬼ごっこに入りたかったんだもんね！」

「……牛の子……鬼ごっこじゃないよ……」

守護者の言うことがまったくちんぷんかんぷんで、ツナは何が何なのかわからなかった。

(途中から話がかわっているのでさらにちんぷんかんぷんだ。)

すると、苦笑いを浮かべた結加ゆい加が説明の補足を始めた。

「あのね、トンノを捕まえようとしてみんなが廊下を走り回って、トンノが綱吉くんのところに向かいたいって言ってたからみんなで綱吉くんを探したんだけどどこにもいなくて、リボンさんやオスカルさんやプロメツサもいなかったから……」

「そ、そうなんだ……」

「でね、ロンジさんは地震で散らかったみんなの部屋を掃除してくれてるんだよ！」

「さすがロンジだな。」

そういえばロンジの姿だけが見えない。

ボンゴレの優秀な執事には、散らかった部屋は見るにたえれないのだと言う。

ロンジが来てからというものの、ツナの部屋は定期的に掃除され、綺麗になっていた。

）実は奈々とロンジが交代で掃除をしていたのだがツナは知らない。

「…で、十代目は今からどちらへ？」

「あ、えっと…その……」

（どろしよづ…今から洞窟に行くなんて言ったらみんなついてきちゃうかも……）

洞窟へは、できれば少人数で行きたい。

もしも何かあったら助けを求められるし、何よりも…

（…みんなをあんな悪寒のするところに行かせるわけには……）

オスカルはプロメツサは研究のため、雲雀はただ咬み殺したいだけ、ツナは彼らを守りたい。

全員それぞれの目的、意思を持っている。

リボーンは言わずもがな、勝手についてくるだけだが。

だが獄寺たちにはあまり悪寒や地震のことは伝えていないので、原因などを調べに行くなどと言わなければ大丈夫だろう。

ツナはそう考えた。

「ち、ちよつと散歩…」

「あの洞窟どうくつに悪寒や地震の原因を調べに行くんだぞ。」

ツナがごまかそうとすると、横からリボーンが真実を伝えてしまった。

それにツナは驚愕してしまつた。

「なっ！リボーン！！」

「あの洞窟どうくつって…ツナには危険なところじゃなかったっけ？」

山本が珍しく険しい表情をし、ツナをじつと見つめる。

全員の視線がツナに集中し、ツナはその迫力にたじろいでしまった。

「じ、十代目！なんでそんな危険なところに自ら飛び込んで行くんですかー！」

「ツナの意味だ。ツナが決めたことだ。」

「綱吉くんやめたほうがいいよ…！」

「そうですね綱吉様！」

みんながツナのことを引き止める。

当たり前だろう。

あの洞窟じゅうくはこの中で1番ツナにとって危険な場所なのだ。

引き止めない者はいないだろう、

と思っていたが……

「しるせいよ。」

その一言でツナを引き止めていた誰もが黙り込んでしまった。

声の主はトンファーをかまえ、こちらを睨んでいる。

「ひ、雲雀！なんでてめえにうるせえなんて言われなきゃなんねえんだよ！」

「君が1番うるさいよ、忠犬。僕は早く咬み殺しに行きたいんだ。ごちゃごちゃしないでくれる。出発が遅れてるんだけど。」

「てめえに言われる筋合いはねえ！」

獄寺が雲雀に刃向かうと、雲雀はため息をひとつつき、鋭い視線を獄寺たちに向けた。

「こっちの台詞さ。洞窟ていこくに行くことはこの草食動物が決めただ。他人がとやかよく言うんじゃないよ。行くか行かないかは草食動物自身が決めるんだから。」

「ひ、雲雀さん……」

「君もはっきり言いなよ。自分で決めただから。」

雲雀にごもつともなことを言われ、全員が言葉も出なくなった。

ツナは握りこぶしにぎゅっと力を入れ、恐る恐る獄寺たちに向けて話をはじめた。

「…オレは、オレのために研究をしてくれるオスカルさんたちを守りたいから行くんだ。確かに怖いけど…オスカルさんたちが傷つくのはもつと怖いんだ。こんなオレが力になれるかわからないけど、とにかく守りたいんだ。だから、オレは行く。…誰が決めても、絶対に行く。」

しっかりとツナは獄寺たちを見つめ、そう言い放つ。

その瞳には覚悟があつて。

その言葉には決心があつて。

ツナのその意見を却下することができる者は誰もいなかった。

一人の少年の心に、強さを見た。

標的199 覚悟の瞳（後書き）

とうとう…次回で標的200です…！！

わくわくします^^

しかし、今日はセンター試験…
がんばってきます（、・・・、）

小説のストックが標的200までしかないので急いで書かないと…！！
やっと動き出したからなあ（笑）

読んでいただきありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8040r/>

その先には。

2012年1月14日00時53分発行